福井県文書館資料叢書10

福井藩士履歴 2 お~く







1 「(士族略履歴)カ」(表紙)

2 「御医師御鍼医御目医師 御外科」(表紙)

3 「御茶道御絵師御儒者御馬方 馬医御鷹方御餌刺御鵜匠蘭 学方英学方」(表紙)

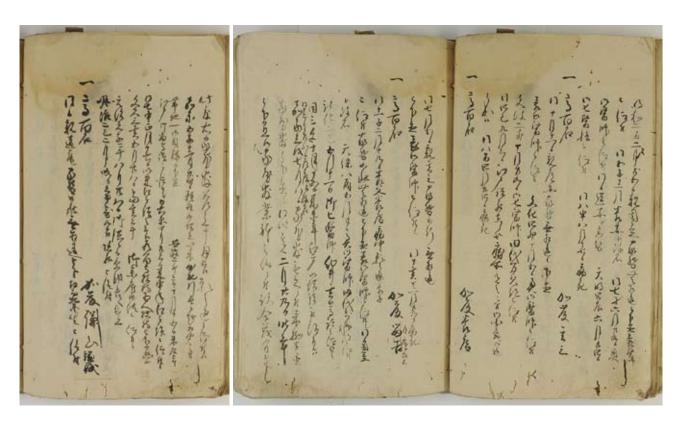
1~3 松平文庫 福井県立図書館保管





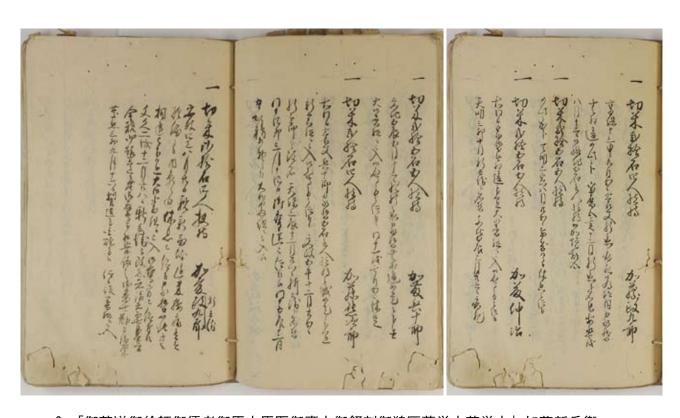
4 「(士族略履歴)」海福瀬左衛門

松平文庫 福井県立図書館保管



5 「御医師御鍼医御目医師御外科」加藤謙山

松平文庫 福井県立図書館保管



6 「御茶道御絵師御儒者御馬方馬医御鷹方御餌刺御鵜匠蘭学方英学方」加藤新兵衛

松平文庫 福井県立図書館保管

- 一、本巻は、福井県文書館資料叢書の第一〇冊目であり、『福井藩士履歴』全六巻中の第二 冊目である。
- 本書の原本は、福井県立図書館に保管されている「松平文庫」のなかの「剝札」「士 刺御鵜匠蘭学方英学方」(以下「御茶道」)にて補った。 医御目医師御外科」(以下「御医師」)、「御茶道御絵師御儒者御馬方馬医御鷹方御餌 よたれそ」が欠落しているため、「(士族略履歴)」(以下「略履歴」)、「御医師御鍼 うち本巻では、お~く までを翻刻した。ただし「か」については、「士族」三の「か 族」である。 「剝札」は上・下、「士族」は一~七で構成されている(三は欠)。この
- 資料の利用に資するため、巻末に参考資料を付した。
- 、編集にあたっては次のように取り扱った。
- ①「剝札」と「士族」または「略履歴」「御医師」「御茶道」を連結して『福井藩士履 歴』とし、翻刻、刊行することにした。その際、各家は原則として「剝札」の記載順と し、利用の便を考慮して五十音順に組み替えた。ただし「剝札」「士族」とも「を」を 「お」として取り扱った。同姓が複数ある場合には、家名にアラビア数字を付した。

(2)原本の藩士名には貼紙・訂正・朱書などがあるが、次のように取り扱った。

- 見出しの藩士名は現役最後の名前を示した。
- 改名は藩士名に付されているもののみを、原則として古い順に並べて見出しの藩士名 の下に記した。
- 続柄など名前以外の記載については名前の下に記した。
- 藩士名の次に石高・扶持米を記した。
- (3)出典が「剝札」以外のものは、藩士名の下に〔士族〕または 茶道〕と付した。 [略履歴] (御医師) 御
- (4) 「剝札」の巻末および「お」の終わりなどに貼られていた家は、該当する場所に入れて、

※で原本の場所を示した。

(5)「士族」または「略履歴」
『履歴」「御医師」のみに出て
に出てくる藩士は、
該当する五十音の最
の最後に

- (6)柱は、原則としてそのページの最初の段落における家名を示した。
- 、、翻刻にあたっては、原本の体裁にそうよう努めたが、読みやすくするために、また検索 の便宜を図るため、次のように取り扱った。
- ①使用字体は原則として常用漢字を用い、異体字は原則として正字に改めた。また変体仮 名や合字は通常の仮名に改めたが、次に掲げるような仮名・俗字・慣用字句は残した。

躰 (体)

斗(ばかり)

お (より) 而已(のみ) 而 (て)

②全文にわたって読点をつけ、あわせて文意が通じないものには(マ、)などの傍注を付 江 (え) 者 (は) 与(と) 茂 (も)

(3)欠損・虫損等によって文字が判読できない場合には、□や□□で示した。

した。また明らかな誤字・脱字には訂正したものもある。

(4)原本の平出・闕字などはすべて省略した。

(5)追記・訂正など朱書は適宜本文に反映した。一部(朱書)で示したものもある。

、本書には、現在からみると基本的人権に関わる歴史的事象も含まれているが、地域の歴 権尊重をめざし、史実にもとづく研究を進める立場から刊行するもので、この趣旨を理 史的事実を正しく理解するために原文をそのまま翻刻することを原則とした。本書は人 解し、利用していただきたい。

翻刻にあたっては田原健子氏(福井県文書館運営懇話会委員)が筆耕し、校合は吉田健 氏(元福井県文書館文書専門員)と当館職員が行った。編集は吉田健氏のアドバイスを

資料の所蔵者である松平宗紀氏、筆耕に多大なご協力をいただいた田原健子氏に深く感

謝申しあげる。

うけ、当館職員が行った。

目

次

	兀	三	$\stackrel{-}{=}$	_		
解説	福井藩士履歴	福井藩士履歴	福井藩士履歴	福井藩士履歴	凡例	台絵
	<	き	か	お		
東京農業大学教授						
熊	:	:				
澤						
恵 里 子	271	253	147	1		

参考資料

30 29	荻野四郎右衛門…	大谷儀右衛門 23	大谷市右衛門······ 13 13	岡部 3 岡部半兵衛 8
	荻野彦次右衛門…	i	:	
	荻野治部左衛門…	大谷5	大谷2	岡部高伯 6
29	荻野小大膳	大谷千熊 22	大谷丹下 12	岡部養竹 6
	荻野2	大谷第八 21	大谷助六 11	岡部宜軒 6
29	荻野貞三郎	大谷第八 21	大谷丹下 11	岡部養玄 6
28	荻野小四郎	大谷鉄太郎 21	大谷求馬 11	岡部養逸 6
28	荻野左近	大谷健次郎 21	大谷助六 11	岡部養筑 6
27	荻野左近	大谷五郎左衛門… 21	大谷助六 11	岡部元常 6
	荻野孫右衛門	大谷伝七 21	大谷助六 10	岡部2
	荻野孫右衛門	大谷4	大谷 1	岡部長4
27	荻野孫右衛門	大谷巖 19	岡部左門 9	岡部豊後 3
27	荻野孫右衛門	大谷遜 18	岡部半兵衛 9	岡部左膳 2
27	荻野孫右衛門	大谷儀左衛門 18	岡部市右衛門 8	岡部左膳 2
	荻野 1	大谷孫太夫 17	岡部五郎兵衛 8	岡部右膳 2
26	大谷麓	大谷三次郎 17	岡部市右衛門 8	岡部造酒助 2
25	大谷武兵衛	大谷与三五郎 17	岡部荒之助 8	岡部左膳 2
25	大谷武兵衛	大谷孫太夫 17	岡部五郎兵衛 8	岡部 1
	大谷武兵衛	大谷儀左衛門 17	岡部太郎右衛門… 8	お
	大谷6	大谷3		
24	大谷直兄	大館尚氏 15		
23	大谷孫右衛門	大館兵馬 14		細目次
	大谷儀右衛門	大谷一右衛門 14		

	64 岡 3	小栗矢直	小栗環 57	小川静水 52	大関新五左衛門… 45
岡健蔵70	63 岡健	小栗二右衛門	小栗助七 57	小川淡 52	大関忠兵衛 45
岡十次兵衛 70	63 岡十	小栗勝之助	小栗八兵衛 57	小川又左衛門 52	大関新五左衛門… 45
岡十郎太夫 69	63 岡十	小栗勘兵衛	小栗八郎兵衛 57	小川七右衛門 52	大関新五左衛門… 45
岡十次兵衛 69	63 岡十	小栗勝三郎	小栗八兵衛 56	小川長左衛門 52	大関新五左衛門… 44
	63 岡 2	小栗仁右衛門	小栗五郎太夫 56	小川又左衛門 52	大関1
69	63 岡規:	小栗与左衛門	小栗1	小 川 2	大宮正路 44
岡半右衛門 68	63 岡半	小栗勘兵衛	尾高二平 55	小川治平 51	大宮定雄 43
岡三郎右衛門 68	岡二	小栗 4	尾高治左衛門 55	小川治兵衛 50	大宮左金吾 43
岡半右衛門 68	62 岡半	小栗諒之助	尾高小右衛門 55	小川次兵衛 50	大宮忠八 43
岡三郎右衛門 68	61 岡三	小栗源蔵	尾高次郎左衛門… 55	小川牧吾 50	大宮忠左衛門 43
尚三郎右衛門 67	61	小栗要人	尾高次郎左衛門… 54	小川次兵衛 50	大宮左金吾 42
岡三郎右衛門 67	61	小栗源蔵	尾高治部右衛門… 54	小川治兵衛 50	大宮忠左衛門 42
	61 岡 1	小栗要人	尾高治部右衛門… 54	小川与右衛門 50	大宮2
大井田豊 67	61 大井	小栗九右衛門	尾高	小川1	大宮藤馬 40
大井田喜内 66	61 大井	小栗九右衛門	小川助右衛門 54	大関直 48	大宮藤馬 40
大井田新九郎 66	60 大井	小栗九右衛門	小 川 4	大関助左衛門 48	大宮彦右衛門 39
大井田喜内 65	大井	小栗 3	小川真一 53	大関助左衛門 47	大宮彦右衛門 39
大井田新九郎 65	60 大井	小栗秋	小川藤右衛門 53	大関彦兵衛 47	大宮彦右衛門 39
大井田新九郎 65	59 大井	小栗治右衛門	小川茂左衛門 53	大関次右衛門 47	大宮彦右衛門 39
大井田新九郎 65	59 大井	小栗次右衛門	小川庄兵衛 53	大関五郎右衛門… 47	大宮1
大井田覚右衛門… 65	59 大井	小栗伊右衛門	小川茂左衛門 53	大関2	太田寿 38
大井田新九郎 65	59 大井	小栗次右衛門	小川武左衛門 53	大関徳蔵 46	太田三郎平 37
щ	大井田	小栗 2	小川3	大関麓 45	太田三郎兵衛 37

岡嶋清兵衛			繁	
	大久保半七 97	小嶋平馬 91	織田行方 84	大河原他家六 76
	大久保仁太夫 97	小嶋2	織田半左衛門 83	大河原助之進 75
	大久保磯右衛門… 97	小嶋逸八 90	織田半左衛門 83	大河原次郎助 75
	大久保治太夫 97	小嶋逸八 90	織田半左衛門 83	大河原助右衛門… 74
	大久保3	小嶋逸八 90	織田1	大河原助右衛門… 74
	大久保肥馬 96	小嶌逸八 90	大井弥十郎 81	大河原助右衛門… 74
	大久保喜兵衛 96	小嶋四郎左衛門… 90	大井留之助 81	大河原1
	大久保喜兵衛 96	小嶋逸八 89	大井長十郎 80	大野淑人74
	大久保利助 95	小嶋頓八 89	大井弥十郎 80	大野宗太夫 73
	大久保2	小嶋1	大井	大野藤太夫 73
	大久保武雄 95	大崎巴 89	大木本弥 79	大野半平 73
	大久保助十郎 94	大崎七太夫 88	大木与右衛門 78	大野藤太夫 73
	大久保太郎太夫… 94	大崎七太夫 88	大木与五右衛門… 78	大野半平 73
	大久保助十郎 94	大崎岩之助 88	大木与右衛門 78	大野2
	大久保助十郎 93	大崎左太夫 88	大木与五右衛門… 78	大野権平 72
	大久保可内 93	大崎七太夫 88	大木与五右衛門… 77	大野三左衛門 72
	大久保1	大崎左太夫 88	大木	大野猪兵衛 72
	落合戸五郎 93	大崎	大河原作之助 77	大野左七郎 71
	落合丈右衛門 92	織田貞蔵 87	大河原作左衛門… 77	大野三左衛門 71
	落合丈右衛門 92	織田新八 86	大河原作左衛門… 76	大野三左衛門 71
	落合丈右衛門 92	織田金左衛門 86	大河原清右衛門… 76	大野1
	落合善兵衛 92	織田仙右衛門 86	大河原清助 76	岡権之助 71
	落合善兵衛 92	織田2	大河原作左衛門… 76	岡小左衛門 71

岡 田 2	岡田喜藤太 110	岡田喜八郎 109	岡田喜右衛門 109	岡田喜右衛門 109	岡田喜右衛門 108	岡田1	岡嶋勝二 108	岡嶋清太夫 107	岡嶋斧太郎 107	岡嶋勢右衛門 107	岡嶋清左衛門 107	岡嶋清八 107	岡嶋清右衛門 107	岡嶋3	岡嶋力106	岡嶋左太夫 106	岡嶋左太夫 106	岡嶋九郎右衛門… 105	岡嶋九郎右衛門… 105	岡嶋滝右衛門 105	岡嶋2	岡嶋恒一104	岡嶋鉄之助 104
大内七郎兵衛······ 116	大内	岡谷弥平 116	岡谷弥右衛門 115	岡谷弥右衛門 115	岡谷権次郎 115	岡谷弥右衛門 115	岡谷	岡田静哉 114	岡田助三郎 114	岡 田 4	岡田文二 113	岡田戸右衛門 113	岡田戸右衛門 113	岡田惣左衛門 113	岡田源四郎 113	岡田戸右衛門 113	岡田 3	岡田貞弥 112	岡田金左衛門 111	岡田惣右衛門 111	岡田藤兵衛 111	岡田治兵衛 111	岡田藤兵衛 111
大橋湊 122	大橋有甫 122	大橋左渓 122	大橋左渓 122	大橋左次兵衛 122	大橋 2	大橋小藤太 121	大橋金兵衛 120	大橋十兵衛 120	大橋久右衛門 119	大橋久右衛門 119	大橋 1	奥村桐之丞 119	奥村健左衛門 118	奥村円六 118	奥村九助 118	奥村九助 118	奥村九助 118	奥村	大内勝吉 117	大内猪左衛門······ 117	大内七郎兵衛······ 117	大内猪左衛門······ 117	大内七郎兵衛 117
大平弥次右衛門… 128	大平弥次右衛門… 128	大平弥次右衛門… 128	大平	小関犀次郎 127	小関五三郎········ 127	小関市郎太夫 127	小関市郎太夫 127	小関一郎太夫 127	小関玄安 126	小関	大越銀次郎 126	大越外三郎 126	大越鉄之助 126	大越周吉 125	大越猪左衛門 125	大越猪左衛門······ 125	大越猪左衛門······ 125	大越伊左衛門······ 124	大越	大橋小太郎 124	大橋 4	大橋半蔵 123	大橋3
大岩主一 136	大岩	小野友之助 136	小野庄助 135	小野庄助 134	小野清兵衛 134	小野2	小野武次郎 133	小野欽哉 132	小野太郎助 132	小野太郎太夫 132	小野金八 131	小野勘右衛門 131	小野勘左衛門 131	小野勘兵衛 131	小野 1	大島正人 131	大島2	大嶋真介 130	大嶋文太夫 129	大島 1	大平弥嘉良 129	大平孫作 129	大平新内 128

	小倉藻四郎	小倉寛	小倉	大坂俊三	大坂	岡本晋	岡本	尾崎久馬勝	尾崎	奥山七郎	奥山	大貫伝	大貫	小笠原幹	小笠原	乙部志津磨	乙部祐右衛門	乙部祐八	乙部	恩田登司	恩田茂左衛門	恩田	大岩円
	146	145		144		143		143		142		142		139		139	139	138		138	137		137
片山平七··········· 153	片山与三右衛門… 152	片山与三右衛門… 152	片山与三右衛門… 152	片山与三右衛門… 152	片 山 1	海福雪············· 152	海福猪兵衛 150	海福力太郎 150	海福猪兵衛 150	海福猪兵衛 150	海福勘助 150	海福伊兵衛 149	海福猪兵衛 149	海福 2	海福瀬左衛門 149	海福孫八 149	海福瀬左衛門 148	海福久右衛門 148	海福瀬左衛門 148	海福瀬左衛門 148	海福瀬左衛門 148	海福 1	か
葛巻治部右衛門… 158	葛巻	蠏 江太兵衛 157	蠏 江十太夫 157	蠏江善右衛門 157	蠏江善右衛門 157	蠏 江善右衛門 156	蠏 江善右衛門 156	蠏 江善右衛門 156	蠏江	片山弁之丞 156	片山泰造 155	片山哲也······· 155	片山3	片山力之助 155	片山麓····································	片山弥五右衛門… 154	片山瀬左衛門······ 154	片山弥五右衛門… 154	片山弥五右衛門… 154	片山弥五右衛門… 154	片 山 2	片山平七······· 153	片山直次郎 153
加賀九郎次郎 164	加賀九郎右衛門… 64	加賀次郎右衛門… 64	加賀九郎右衛門… 64	加賀藤左衛門 162	加賀九郎右衛門… 62	加賀藤左衛門 162	加賀	上月久尾 162	上月久右衛門 162	上月源右衛門	上月九郎左衛門… 61	上月久右衛門 61	上月2	上月八郎左衛門… 61	上月武左衛門 160	上月八郎左衛門… 60	上月武左衛門 60	上月1	葛巻数兄 150	葛巻庄兵衛	葛巻庄兵衛	葛巻庄兵衛	葛巻加右衛門 150
164 加藤武右衛門 170	加藤武右衛門	加藤武石衛門	加藤武右衛門	163 加藤武右衛門 169	加藤武右衛門	加藤 3	加藤所左衛門 169	加藤恒一 169	加藤源八郎	162 加藤所左衛門 167	加藤惣九郎	加藤源八郎	加藤孫七郎 167	161 加藤所左衛門 167	加藤 2	160 加藤良石衛門 166	加藤長右衛門	加藤庄兵衛 166	加藤忠兵衛	158 加藤長右衛門 165	加藤長右衛門	加藤忠兵衛	加藤 1

加藤与五右衛門… 177 176	加藤与五右門 176	加藤源助 176	加藤7	加藤常之助 176	加藤伝内 175	加藤彦三郎 175	加藤武太夫 175	加藤八郎兵衛 175	加藤伝内 174	加藤6	加藤半左衛門 174	加藤半左衛門 173	加藤半左衛門 173	加藤又右衛門 172	加藤 5	加藤虎五郎 172	加藤文太 172	加藤丹右衛門 172	加藤茂右衛門 171	加藤丹右衛門 171	加藤茂兵衛 171	加藤 4
加藤謙山	加藤養庵 182	加藤玄三 182	加藤道安 181	加藤周益 181	加藤養安 181	加藤玄三 181	加藤10	加藤清十郎 180	加藤清兵衛 180	加藤清右衛門 180	加藤猪右衛門 180	加藤清右衛門 179	加藤 9	加藤佐太郎 179	加藤佐左衛門 178	加藤清兵衛 178	加藤所左衛門 178	加藤六郎兵衛 178	加藤8	加藤与五右衛門… 177	加藤又一郎 177	加藤八郎左衛門… 177
川瀬治太夫········ 187 187	川瀬次太夫 187	川瀬	河津善太夫 187	河津佐太夫 186	河津善太夫 186	河津孫十郎 186	河津茂太夫 186	河津善太夫 186	川津善太夫 185	河津	加藤藤左衛門 184	加藤弥右衛門 184	加藤文左衛門 183	加藤藤次郎 183	加藤 12	加藤新兵衛 183	加藤新兵衛 183	加藤兵十郎 183	加藤新兵衛 183	加藤新兵衛 183	加藤新兵衛 182	加藤11
河合久左衛門 194 193	河合久左衛門 193	川合滝右衛門 193	河合滝右衛門 193	河合3	河合久次郎 193	河合太郎太夫 191	河合権右衛門 191	河合太郎太夫 191	河合権右衛門 191	河合定右衛門 191	川合源左衛門 190	河合2	河合常之進 190	河合次郎左衛門… 190	河合四郎左衛門… 189	河合善十郎 189	河合彦作189	河合1	川瀬次太夫 189	川瀬次郎右衛門… 188	川瀬勘助 187	川瀬次郎右衛門… 187
川崎甚助	河崎三郎助 199	河崎清兵衛 198	河崎三郎助 198	河崎三郎助 198	河崎三郎助 197	河崎三郎助 197	河崎	河合藤兵衛 197	河合茂太夫 197	河合6	哥合与三郎 197	哥合藤左衛門 196	河合弥三兵衛 196	河合 5	河合豊次郎 196	河合五右衛門 195	河合八郎左衛門… 195	河合佐十郎 194	河合五右衛門 194	河合五右衛門 194	河合 4	河合滝五郎 194

川 村 1	川崎安兵衛 206	川崎安次郎 204	川崎4	川崎鉄弥 204	川崎泉右衛門 203	川崎金太夫 203	川崎虎五郎 203	川崎金太夫 203	川崎仁右衛門 203	川崎3	川崎平三郎 202	川崎三郎兵衛 202	川崎平右衛門 202	河崎三郎兵衛 201	川崎平右衛門 201	河崎三郎兵衛 201	川崎2	川崎久吉 201	川崎源八 201	川崎茂太夫 200	川崎四郎右衛門… 200	川崎四郎右衛門… 200	河崎久太左衛門… 200
河村三左衛門 212	河村三太夫 212	河村七右衛門 212	河村三太夫 211	河村三五左衛門… 211	河村	川村降輔 211	川村五左衛門 211	川村五左衛門 210	川村五左衛門 210	川村五左衛門 210	川 村 ₃	川村半左衛門 210	川村文平············ 209	川村文平············ 208	河村市次 208	河村市右衛門 208	川 村 2	川村十郎右衛門… 207	川村藤十郎 207	川村仙右衛門 207	川村十郎右衛門… 206	河村郷右衛門 206	河村郷右衛門 206
粕谷3	粕谷治太夫 219	粕谷嘉内 219	粕谷2	粕谷外次郎 219	粕谷彦左衛門 218	粕谷彦太夫 218	粕谷彦太夫 217	粕谷彦左衛門 217	粕谷伝左衛門 217	粕谷1	梶川喜左衛門 217	梶川 2	梶川半兵衛 216	梶川半兵衛 216	梶川半兵衛 216	梶川 1	高坂源五郎 215	高坂武右衛門 214	高坂金右衛門 214	高坂武右衛門 214	高坂武右衛門 214	高坂	河村貫蔵 214
勝村三太左衛門… 224	勝村源左衛門 224	勝村儀兵衛 224	勝村1	金子治右衛門 224	金子清左衛門 223	金子小平太 223	金子六右衛門 223	金子忠次郎 223	金子六右衛門 223	金子2	金子十郎平 222	金子十郎平 222	金子十郎平 222	金子半右衛門 222	金子市左衛門 222	金子1	梯治部左衛門 221	梯左仲太 220	梯兵右衛門 220	梯左仲太 220	梯左仲太 220	梯	粕谷雄蔵 220
門野九右衛門 231	門野佐五左衛門… 231	門野九右衛門 231	門野1	勝木十蔵 228	勝木勘助 228	勝木興兵衛 228	勝木勘助 227	勝木 2	勝木権太夫 227	勝木伝右衛門 227	勝木徹太郎 227	勝木権太夫 227	勝木孫左衛門 227	勝木五右衛門 226	勝木権太夫 226	勝木五右衛門 226	勝木 1	勝村次郎左衛門… 226	勝村2	勝村清一郎 225	勝村三太左衛門… 225	勝村儀兵衛 225	勝村源左衛門 225

勝沢一順 236	勝沢一益 236	勝沢一順 236	勝沢一益 235	勝沢	香西敬左衛門 234	香西益太郎 234	香西万作 234	香西弥右衛門 234	香西弥右衛門 234	香西	神戸三郎右衛門… 234	神戸三郎右衛門… 233	神戸六左衛門 233	神戸	門野甚吾 233	門野栄十郎 233	門野栄十郎 232	門野栄十郎 232	門野甚五右衛門… 232	門野2	門野隼雄 232	門野太郎右衛門… 231	門野九右衛門 231
樫尾	川端小作 241	川端又吉郎 241	川端次兵衛 241	川端長兵衛 240	川端勇左衛門 240	川端源左衛門 240	川端勇左衛門 240	川端	川地平馬 240	川地半九郎 240	川地又兵衛 239	川地忠左衛門 239	川地忠左衛門 239	川 地 2	川地権内 238	川地権内 238	川地権内 238	川地平次右衛門… 237	川地五左衛門 237	川地平次右衛門… 237	川地1	勝沢儀一 237	勝沢一順 236
勝田与兵衛 246	勝田門蔵 246	勝田	笠原浜人 245	笠原2	笠原平八郎 245	笠原勝之助 245	笠原平八 245	笠原弥三郎 244	笠原平八郎 244	笠原安兵衛 244	笠原1	勝山等一 243	勝山七右衛門 243	勝山七右衛門 243	勝山藤五郎 243	勝山藤五郎 243	勝山	樫尾乙之助 242	樫尾又左衛門 242	樫尾又左衛門 242	樫尾他五郎 242	樫尾又左衛門 242	樫尾又左衛門 242
筧	加納虎八 249	加納平右衛門 249	加納孫太夫 249	加納孫太夫 249	加納	川戸省之介 248	川戸留吉 248	川戸他四郎 248	川戸又三郎 248	川戸二弥太 248	川戸安太夫 248	川戸他四郎 248	川戸安太夫 247	川戸	金井捨三郎 247	金井庄太夫 247	金井伝十郎 247	金井庄太夫 247	金井庄太夫 247	金井	勝田常之助 246	勝田与右衛門 246	勝田伝左衛門 246
岸 1	北川武雄 255	北川亘之介 254	北川主税 254	北川	*			片岡良躬 252	片岡	狩野玄照 251	狩野元照 251	狩野永玄 251	狩野永周 251	狩野永純 251	狩野興碩 251	狩野2	狩野泉碩 251	狩野1	筧 恪三郎 250	筧弥三右衛門 250	筧弥三右衛門 250	筧弥三右衛門 250	筧弥三右衛門 250

木内2	木内盛潔 259	木内甚兵衛 258	木内金之助 258	木内三太夫 258	木内栄吉 258	木内甚兵衛 258	木内甚兵衛 257	木内1	岸惣左衛門 257	岸惣左衛門 257	岸宗左衛門 257	岸 3	岸五郎左衛門 257	岸五郎左衛門 257	岸五郎左衛門 256	岸伝之丞 256	岸 2	岸友次郎 256	岸新六······· 256	岸十郎右衛門 256	岸十郎右衛門······ 256	岸茂左衛門 256	岸茂左衛門 256
岸田	木村平三 265	木村4	木村連 264	木村清助 264	木村藤右衛門····· 264	木村藤右衛門····· 264	木村藤右衛門····· 263	木村太郎兵衛······ 263	木村3	木村豊吉 262	木村清右衛門····· 262	木村源五右衛門… 262	木村与五兵衛····· 262	木村与五兵衛····· 262	木村源五右衛門… 262	木村2	木村七右衛門 261	木村1	木内廉之介 261	木内与次兵衛 261	木内市郎左衛門… 261	木内与次兵衛 260	木内市郎左衛門… 260
熊谷小兵衛 272	熊谷五郎兵衛 272	熊谷小兵衛 272	熊谷小兵衛 272	熊谷小兵衛 272	熊谷	<			北村彦輔 269	養寿····································	北村	木滑藤太夫 268	木滑七郎右衛門… 268	木滑	喜多嶋熊蔵 267	喜多嶋孫太夫 267	喜多嶋忠太夫 267	喜多嶋	岸田武266	岸田保人 266	岸田藤太夫 265	岸田善右衛門 265	岸田藤太夫 265
桑山十兵衛 279	桑山十兵衛 279	桑山権兵衛 279	桑山宗庵 279	桑山	国枝東市 278	国枝太平 278	国枝小兵衛 277	国枝佐三郎 277	国枝平兵衛 277	国枝六太夫 277	国枝安右衛門 277	国枝直右衛門 277	国枝2	国枝小助 275	国枝藤平 275	国枝又兵衛 275	国枝藤三郎 274	国枝小市郎 274	国枝小助 274	国枝小市郎 274	国枝1	熊谷十郎 273	熊谷弥門 273
栗崎	国沢政之助 285	国沢仲右衛門 285	国沢助左衛門 285	国沢幸左衛門 285	国沢助左衛門 285	国沢幸左衛門 284	国沢幸左衛門 284	国沢	久世久 284	久世石五郎······· 283	久世三五郎 283	久世八左衛門····· 283	久世三五右衛門… 283	久世三左衛門 283	久世三左衛門····· 282	久世三五右衛門… 282	久世	桑山正	桑山十蔵 280	桑山十蔵 280	桑山十蔵 279	桑山十右衛門 279	桑山十兵衛 279

久津見九門········ 290 栗田	久津見第蔵······· 290 栗田	久津見源五左衛門 289 栗田	久津見第蔵······· 289 栗田	久津見喜内 289 栗田	久津見 1 栗田	黒沢正······· 289 栗田	黒沢源左衛門 288 栗原	黒沢平十郎 288 栗原	黒沢平左衛門 288 栗原	黒沢小十郎 288 栗原	黒沢勘之丞······· 288 栗原	黒沢庄蔵 288 栗原	黒沢万五郎 288 栗原	黒沢由太夫 288 栗原	黒沢	栗崎悦也	栗崎良叔 287 入津見 3	栗崎道伯 287	栗崎道意287	栗崎道察 286 久津	栗崎道意 286 久津	栗崎道的 286	2
八十郎	市兵衛 295	八十郎 295	市兵衛 295	七郎左衛門… 294	七郎左衛門…	来		栗原作兵衛 294 来						栗原作左衛門 293 来	久	久津見庄蔵 292 久		入津見久弥 292		4	久津見三内 291 久	久津見多仲······· 291 久連松	
桑嶋又右衛門 300	桑嶋又左衛門 300 黒	桑嶋宗兵衛 299		桑嶋惣右衛門 299		来栖寛之介 298 人	来栖宅右衛門 298	来栖庄右衛門 298	来栖宅右衛門 298	来栖万四郎 297	来栖半之丞 297		来栖半之丞 297	来栖		火連松此兵衛 296	久連松次左衛門··· 296		久連松助三郎······ 296	火連松茂八 296	八連松次助 296	松	2
黒木藤平 309	黒木	栗間権平 308	栗間	久保村勝次郎 308	久保村祐七 307	久保村	久保素直 306	久保為三郎 306	久保弥右衛門······ 306	久保又兵衛 305	久保長蔵 305	久保2	久保矗············ 305	久保一郎右衛門… 304	久保 1	久能佐嘉衛········ 304	久能佐右衛門······ 303	久能	草尾一馬 301	草尾庄兵衛 301	草尾庄兵衛 300	草尾庄助300	<u> </u>
													楠量志	楠 2	楠正義	楠 1	久我次郎	久我 2	上月確	久我操	久我 1	倉橋大介	倉村

310 309

口絵

- 1 「(士族略履歴)カ」(表紙)
- 2 「御医師御鍼医御目医師御外科」(表紙)
- 3 「御茶道御絵師御儒者御馬方馬医御鷹方御餌刺御鵜匠蘭学方英学方」(表紙)
- 4 「(士族略履歴)」海福瀬左衛門
- 5 「御医師御鍼医御目医師御外科」加藤謙山
- 6 「御茶道御絵師御儒者御馬方馬医御鷹方御餌刺御鵜匠蘭学方英学方」加藤新兵衛

お



岡部左膳

二千五百石 内千石与力

元禄三午正月廿一日奥御小姓被召出

同七戌十一月江戸二而新知百石被下

同十丑六月十九日御意二而養父新九郎家督九百石被下

宝永三戌三月廿一日御奏者

正徳二辰九月廿六日於江戸御書院番頭

享保三戌三月十九日御徒支配御馬支配被仰付

同七寅正月廿八日若殿様付、百石御加増

同十巳八月十九日於江戸高知格、席荻野孫右衛門次、同日二百石御加増

御家老中御用状加判被仰付

享保十五戌八月六日百五十石御加増

同十六亥十一月二日於江戸御家老職被仰付百五十石御加增、席与三左衛

門次

寬保三亥正月十五日組頭本多縫殿与力

延享元子十二月朔日月番御免

延享五辰七月二日隠居十人扶持御内分二而被下

岡部造酒助

千五百石

延享五辰七月二日養父左膳隠居家督無相違、席笹治多門次、御城下火消、

此節養父左膳へ十人フチ被下

岡部右膳 左膳

明和六丑二月二日病身二付御懇之上隠居

寛延二巳二月五日御家老職、席狛帯刀次

二千五百石 内千石与力

明和六丑二月父造酒助隠居、家督無相違、高知席笹治多門次、御城下火

消

同年同月十四日御家老職席狛帯刀次

安永四未二月十日組頭酒井外記与力御預ケ

寛政四子四月八日指扣

同年十二月廿日御預所掛り被仰付、御懇之上御羽織拝領

岡部左膳

千五百石

竟政十二申閏四月廿五日養父右膳跡目無相違被下置、高知席酒井外記次、

御城下火消被仰付

文化三寅十月廿三日御家老職狛茂十郎次

同八未年九月廿七日病身二付御役御免

岡部左膳 長十郎

千五百石

文化九申七月廿八日親左膳内願之通隱居被仰付、家督無相違、高知席笹

治主計次、御城下火消被仰付

文政八酉三月廿三日御家老職被仰付本多筑後次

天保十一子二月廿七日江戸ゟ奉書組頭

弘化三午閏五月十一日思召有之二付御役義組頭共二御免被成、席本多筑

後次へ被入、遠慮被仰付、且又倅造助義御時節柄心得違之趣相聞候ニ付

御叱被成候

嘉永二酉二月六日隠居、同月十二日思召を以折々御機嫌伺可罷出、其節

々中ノ口致往来御用人下之部屋ニ罷在候様被仰出候

嘉永六丑二月廿八日先年思召を以折々御機嫌伺罷出、其節々中ノ口致往

来候様被仰出候処、老年ニも相成候ニ付別段之訳を以左之通御懇之御取

扱二被成下候

御機嫌伺罷出候節御用透ニ候得ハ御逢被遊候事

一御門所之内下座被仰付候事

一御鷹之鴨其外拝領物可有之事

岡部豊後 造酒事 豊後 豊佐

千五百石

一嘉永二酉二月六日父左膳病気其上老年ニ付内願之通隠居、家督千五百石

無相違被下置、高知席有賀内記次、御城下火消被仰付

一同六丑二月廿八日親晴嶽儀先年思召を以折々御機嫌伺罷出、其節々中之

口致往来候様被仰出候処、老年ニ茂相成候ニ付別段之訳を以猶又御懇之

御取扱二被成下、左之通被仰付其段晴嶽江御申聞可有之旨

一御機嫌伺罷出候節、御用透二候得者御逢被遊候事

一御門所之内下座被仰付候事

一御鷹之鴨其外拝領物可有之事

同年七月三日去月十二日京町ゟ出火之節、出精ニ付御褒詞

一同七寅六月十三日塩町ゟ出火之処及大火候節、出精之段御褒詞

一安政二卯正月廿二日御備組調練之儀掛り同様被仰付候間、御用掛り申談

候様

安政二卯三月十六日年来柔術相心懸重キ手数江も相進候ニ付、花葵御紋

附扇子被下置、精々稽古所へも罷越師匠申談引立候様被仰付候

同四巳三月三日御城代役有賀内記跡被仰付、与力御預ケ被成候

一万延元申六月廿八日御備組調練之儀掛り同様被仰付置候処、御振替相成

候二付御免被成候、乍然折々罷出、猶又致心配候様被仰付候

文久元酉八月十九日御家老職

一同年十一月五日来戌年江戸御留守詰被仰付候

一同二戌三月廿三日江戸詰出立

一同年七月廿二日嘉代姫様御縁組御用掛り被仰付候

一同年十月廿五日中将様来二月御上洛御供被為蒙仰候ニ付、御供被仰付候

一同三亥正月廿三日御船ニ而御上京被遊候ニ付御供、三月廿五日御供ニ而

御国江帰着

一同年六月十八日肥後薩摩両国江為御使者被遣候間、黒竜丸御船ニ而罷越

候様被仰付、七月五日出帆、然ル処八月廿九日帰

一同年九月四日組頭被仰付候

一同四子二月十四日思召有之二付御役儀組頭共御免被成、席山県三郎兵衛

次へ被入、御城下火消被仰付、依之遠慮伺之上差扣、十八日御免

同年八月朔日豊後事豊佐与名替

一元治元子八月十四日今度長州御征伐副将被蒙仰候ニ付、御備奉行被仰付、

御座所へ罷出取調候様、依之御取扱之儀御用中、中ノ口往来御用人下之

部屋へ罷在御用被相伺候節ハ、御用部屋江罷出候様被仰出

岡部長 ヒサシ 文久三亥六月十五日支度出来次第上京被仰付、 同年四月五日事務馴致之為思召を以御用人勤向、 同年三月廿五日御供二而帰着 同年二月廿三日於京都中将様御供無息之面々支配被仰付候 同年十二月廿八日豊後与名替 慶応元丑五月廿五日、 同二寅三月十日昨年来内願之趣も有之隠居被仰付、思召を以折々御機嫌 同年六月廿四日御趣意二付組頭御免被成、 同年十月九日上京、早速致出立候様被仰付候 勤候段御怡悦之御事ニ候、 同十一日夕早駆ニ而上京、夫ゟ長征出陣、 同十日組頭被仰付候 談取扱可有之旨被仰付候、 文久三亥正月十九日今般御上京被遊候ニ付京都表へ出立 伺罷出、 造酒助 但先年荻野小四郎御用人勤向被仰付候節之通心得候様 其節々中ノ口致往来御用人下ノ部屋ニ罷在候様被仰付候 心付之儀も有之候ハ、御用部屋へ罷出可申談事 仰付、 年始御礼月次共於鉄砲間被仰付、 出火之節下馬御門内へ相詰可申事 淡路介 指物之間ニ着座中ノ口可致往来事 昨秋征長御出陣二付御備奉行被仰付候処、 造酒助 依之御紋三所物一具被下置候 同十九日出立、 九月七日帰 尤月次之儀ハ御通懸御目見被 且又思召を以左之通被仰付候 同二丑二月朔日帰着 御用向万端牧野主殿介申 御役料三拾人ふち被下 骨折相 〔士族〕

一同年十二月廿四日京都表動揺之節禁廷為御守衛出張ニ付、朝廷ゟ為御褒一同月廿二日今度於三ノ丸御座所向御普請被仰出候ニ付、御用掛り被仰付

美金七百疋被下置候

一元治元子二月廿九日昨春中将様御上京之節御供、無息之面々支配被仰付一同四子二月十四日父豊後御役御免被成候ニ付伺之上指扣、十六日御免

候処、失却も有之ニ付白銀三拾枚被下置候

同年三月廿日支度出来次第江戸詰被仰付、永見多門与可致交代旨被仰付

候

一同月廿九日江戸表江罷越候ハ、御家老御用稲葉左司馬申談取扱候様被仰

付、四月二日出立

同年九月江戸ゟ大坂江、夫ゟ長征、丑二月七日帰

一慶応元丑閏五月十八日補兵隊頭并御用人勤向兼被仰付候、月番之儀ハ御

免

一同年七月十一日三ノ丸御座所御普請御用掛り出精ニ付御褒詞

同二寅三月十日親豊後昨年来内願之趣も有之ニ付隠居被仰付、倅造酒助

へ家督千五百石無相違被下置、高知席山県克之助次へ被入、御城下火消

被仰付候

評定日御軍帳役所へ相詰可申、御軍事御用談之節ハ御用席へ罷出可申事一同十一日造営奉行被仰付、御取扱中ノ口往来御用人下ノ部屋へ罷出可申、

一慶応二寅五月七日堂形へ兵学所御取建ニ付掛り被仰付候

一同年九月十七日公辺御停止中家来殺生差越候儀二付遠慮伺、不及其儀

同年十一月四日造酒助事淡路介与名替

同五日願之上江戸表江出立、卯二月廿九日帰

同年九月八日今般在京中不容易形勢之処被致心配候段、

太儀二思召候、

依之手助一被下置候

一同三卯二月七日御備頭被仰付、御取扱左之通被仰付候

中ノ口往来并御用席御軍事調所等へ罷出候儀ハ是迄之通

| 御座所御門下馬御門三ノ丸御座所御門下座、且又御持組御先組

下座致し候事

一同年五月十四日御備頭其儘御軍事奉行被仰付

一同年九月廿五日今般御趣意ニ付御軍事奉行之儀ハ御免被成候

一同年十月十八日二番之御備頭被仰付、御城下火消之儀ハ御免被成、御取

扱向左之通

一御趣意ニ付年始を初御礼席之儀高知嫡席ニ被成下、其余御取扱

向是迄之通被仰付候事

折々御機嫌伺罷出候様被仰付候事

一同年十二月十二日急々上京被仰付十四日出立可致処、不快ニ付居残家来

指立候処、御模様ニ付途中ゟ引返シ帰

同四辰正月七日三番四番小隊并御旗奉行之面々引纏急々出立被仰付、翌

八日出立

一同年二月廿七日先達而夫々引纏上京被仰付侯節、京都表ゟ申参リ侯趣有

之二付、急速馳登候様途中迄被仰付越候得共、彼是遅滞二及候始末不束

二付遠慮被仰付、然ル処同晦日当節非常之折柄ニ付出格之訳を以御免被

成、御用之外慎被仰付、三月六日御免

同年四月十二日京ゟ帰

同年 淡路介事造酒助卜改

一同年五月廿二日弘化之度致拝借候地所、今度御用二付指上候様被仰付

一明治ト改元、十月廿二日奥州会津表へ早速出張被仰付、出張中軍事惣奉

行被仰付、十一月朔日出立

一同二巳二月十六日今般御改革ニ付御備頭被廃候、仍御役儀御免被成候

但折々御機嫌伺罷出中ノ口可致往来之事

一同年三月十一日若松表ゟ帰

同月十二日御城下火消被仰付

同年六月十六日造酒助事豊志ト改

同年十月十六日今朝御坂江家来之者一人過二致登山、恐入遠慮伺之上指

扣、同十九日被免

同年十一月廿五日今般御改革之処、更給禄米三百九拾六俵四升弐合下賜

同日触支配被仰付 但予備 午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

同年十二月十五日戊辰之歳賊徒掃攘之砌、軍事勉励之段神妙之至被思召:

仍為其慰労金三百両下賜候事

一同三午正月廿四日今暁七半時過台所ゟ出火、恐入遠慮伺之処当分毛受洪

屋敷引移之上伺之通遠慮、二月二日被免候事

一同日是迄之屋敷地御用地二被仰付候事

一同年三月十二日監正寮家作共被下候事

一同年閏十月廿五日非役触支配被仰付候事

同四未二月十四日族長被仰付候事

但役給十弐俵被下候事

同年三月十九日依願給禄之内七拾俵ツ、弟外美枝兵弥江分禄被仰付候事

米弐百五拾六俵四升弐合

同年六月十五日族長被免候事

同年九月廿一日弟外美枝病死二付七拾俵合禄

米三百弐拾六俵四升弐合

同五申七月豊志事長ヒサシ

岡部

岡部元常

弐百石

宝永七寅八月十六日養父養竹跡目無相違

享保六丑五月五日五十石御加増

同九辰七月五日御匙

同十巳正月十六日五十石御加增、都合弐百石被下

岡部養筑 隠居

二百石

元文元辰十月廿一日父玄常跡知被下、表御医師

延享元子十月廿八日奥医

宝暦二申八月十六日御匙

岡部養逸

二百石

安永六酉五月廿五日父養竹隠居、家督無相違、表御医師

同年六月十一日奥医

同七戌正月十六日御部屋付御匙医

天明元丑五月廿九日病気ニ付御附御匙御免、表御医師

岡部養玄

弐百石

享和三亥二月病死

寛政六寅四月廿日遠慮被仰付

同八申六月十四日奧御医師御免被成、

表御医師

同六午九月廿九日奥医

天明元丑年六月廿五日養父養逸跡知無相違、

表御医師

弐百石

岡部宜軒

享和三亥四月五日養父養玄跡知無相違、表御医師

岡部養竹 元常

百五拾石

享和三亥年六月五日養父誼軒弐百石之内五十石被減百五十石被下置、

御医師

文化二丑二月廿日養祖母不埒之儀有之二付遠慮

文政十一子五月病身内願休息

岡部高伯 養逸

百五拾石

一文政十一子六月廿九日養父養竹病身二付内願之通休息被仰付、家督無相

違、表御医師

一同十三寅年江戸詰

同十二丑十月九日奥御医師御針医師兼帯被仰付

三宝金芝万言

天保二卯

於江戸表不慎之趣有之、遠慮被仰付

表

同四巳九月十日心得違之趣有之、遠慮相伺候処指扣被仰付 同七申年江戸詰四月十五日出立 同年十二月賊徒一件二付出張、

同十四卯年江戸詰

弘化三午八月十八日遠慮伺之上差扣之処御免

嘉永元申年九月十六日内願之通御針医師御免被成、 右二付表御医師被仰

付

同五子十二月八日奥御医師御鍼医師兼帯被仰付候

同七寅正月十七日江戸表へ出立

安政三辰十一月五日病身二付内願之通休息被仰付候

岡部外一郎 養竹

百五拾石

安政三辰十一月五日親高伯義病身二付内願之通休息被仰付、 家督百五十

石無相違被下置、 表御医師被仰付候

同四巳四月十二日明道館洋書句読師被仰付候

同年同月十九日蘭家兼句読師被仰付

同五午十二月十一日奧御医師被仰付候

文久三亥五月 支度出来次第上京被仰付

同年十二月廿四日京都表動揺之節為御守衛出張二付、 朝廷ゟ為御褒美弐

百五十疋被下置候

元治元子四月十七日京都表ゟ帰着

同年五月廿五日奥御鍼医師兼帯被仰付候

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、

之御酒被下置候

依之御手当銀六百匁被下置候

慶応元丑五月廿九日妹せき儀身持不埒之趣相聞候ニ付慎被仰付 其方儀

も兼而締り方不参届、 依之遠慮被仰付、 閏五月廿日御免

同年十二月十六日除痘館当番皆勤二付御褒詞

同二寅十二月十六日出精相勤候二付御匙医師格二被仰付、 奥御鍼兼帯之

儀も是迄之通被仰付、 且又来早春京都御警衛詰被仰付候、 将又同日除痘

館皆勤御褒詞

同三卯正月十八日上京

同年二月十二日当秋迄相詰候様被仰付候、 九月廿日帰

明治元辰十月十一日京都詰被仰付、十一月十三日出立、巳三月七日帰

同二巳二月晦日内務局当番可相勤事

〔士族〕

同年四月七日養竹事外一郎

同年十一月廿五日今般御改革、 更八拾弐俵壱斗弐升壱合被下

同三午六月四日医学所病院詰被仰付、役儀之儀ハ被免候事

但十五等

年給ハ無之事

同年七月廿二日病院廻診方兼書記被仰付候事 但十五等

同年十月十日廻診方兼診察方

但孝顕寺勤

同年十二月十二日職務并家業被免候事

同日非役江被入候事

岡部

依

岡部半兵衛

百石

寛文十二子四月朔日新知百五拾石

但し貞享三一統半知百石ニ成、此節御徒頭御免

元禄十丑八月十五日小馬印奉行

岡部太郎右衛門 五郎兵衛

百石

宝永七寅十一月十六日父半兵衛跡知無相違被下

延享元子十月廿八日道中大磯之駅ニ而死

岡部五郎兵衛 休息

百石

延享元子十一月廿一日於江戸父太郎右衛門跡無相違、大番入

明和五子四月五日休息

岡部荒之助 病

百石

明和五子四月五日父五郎兵衛休息、家督無相違、大番入

同年七月九日御小姓

安永二巳四月病死

岡部市右衛門

百石 外役料百五十石

安永二巳六月五日養父荒之助跡知無相違、大番入

同三午六月十四日御小姓

同七戌六月廿二日御小姓頭取堤新三郎跡

同九子十一月廿一日御近習番頭取、 御書院番入

天明元丑十二月十一日御近習番頭取其儘御膳番

天明三卯十一月二日役義御免、

御書院番入於江戸

同七未三月十四日御形合被相改、 万端御省略二付大番入

寛政五丑九月朔日与内立合岡田喜右衛門跡

同六寅六月廿五日御金奉行加藤清右衛門跡

同十一未八月廿日御勘定拝借奉行高屋半左衛門跡、 御留守番組へ被入

同十二庚申七月十七日御留守作事奉行周防長兵衛跡

文化元子十月廿四日御長柄奉行加藤源八郎跡、

御役料百五十石被下

文化五辰閏六月二日御先武頭川合三郎太夫跡

文化七午七月廿二日病死

岡部五郎兵衛 鉄蔵 病死

百石

文化七午九月十三日養父市右衛門跡知無相違、 大御番組へ被入

岡部市右衛門 他三郎 病死

百石

文政元戊寅年七月廿日養父五郎兵衛病中願之通養子被仰付、家督無相違

百石被下置、 無役御留守番組へ被入候

同三辰八月十一日大御番入

学をも相学広く致修行候様被仰付候

	一元治元子三月十一日組之者召連支度出来次第京都詰被仰付、十六日出立
岡部半兵衛 幸作 実飯嶋	之処、京都之御模様ニ付疋田駅ゟ引返シ十九日帰着
百石	一同年六月廿七日組之者召連支度出来次第早速上京被仰付、廿九日出立、
一天保五午七月十三日岡部市右衛門病中願之通養子ニ被仰付、家督百石無	八月廿五日帰
相違被下置、大御番組へ被入	一同年十月十日組之者共引纏京都詰被仰付、詰中堺町御門御固被仰付、早
一同十一子年江戸詰、四月十三日出立	速可致出立旨
一同十五辰六月四日御近習番被仰付、御書院番組へ被入	一同十六日病気ニ付詰御免被成候
一弘化二巳年江戸詰、三月廿一日御供ニ而出立	一同年十一月十六日京都堺町御固場所へ組之者召連出張、騒乱中致差配候
一同三午閏五月六日御小姓海福猪兵衛跡被仰付、席波多野頼太郎次へ被入	段御褒詞
一同四未年江戸詰、三月十九日出立	一元治元子十二月賊徒一件ニ付出張、依之御手当銀八百匁被下置候
一嘉永元申六月急御出府御供ニ而出立、同七月御供ニ而帰着、右ニ付十二	一同二丑四月十五日支度出来次第組之者共召連京都詰被仰付、同廿日出立
月七日御褒詞	一慶応二寅二月九日禁裏ゟ御拝領御狩衣守護ニ而着
一同二酉年江戸詰、三月廿三日御供ニ而出立	一同年四月廿四日堺町戦争ニ付公儀ゟ被下金千弐百疋、戦功ニ付五百疋被
一同三戌六月四日御小姓頭取被仰付	下置候
一同四亥年江戸御供詰	一同年十月廿六日席其儘御留守組支配被仰付、御役料百石被下置候
一同五子十月廿五日遠慮伺之上指扣被仰付置候処被指免候	一同年十一月三日御泉水預り被仰付
一同六丑三月十一日末之番外御時宜役被仰付候	一同三卯四月廿日御趣意ニ付夜廻り勤被仰付候
一安政三辰六月廿八日席其儘、御近習番頭取御膳番御書院番壱番之筆頭役	一明治二巳二月十六日年寄ニ付隠居
林勘十郎跡被仰付候	
一同四巳三月十二日御趣意ニ付御膳番勤之儀ハ当分御見捨被成候	岡部左門 岩次郎 実簗田八太夫養家之弟 〔士族〕
一万延二酉三月三日御徒頭大谷儀左衛門跡、御役料五拾石被下置候	百石三人
一文久二戌四月十一日御役料其儘、御留守物頭井原次郎右衛門跡被仰付候	安政四巳七月廿九日御製造方御雇被仰付候
一文久二戌十月六日御先物頭小栗仁右衛門跡、御役料都合百五拾石被下置	一同五午七月十一日御製造方手伝被仰付置候処、年若之儀ニも候得ハ、洋
	さこう目をこうことができたと目がで

詰中御扶持方五人扶持被下置候、九月四日出立一文久元酉八月廿日当節柄御人少二付、支度出来次第修行旁江戸詰被仰付、

一同二戌十月十二日此儘詰罷在来春御上洛御供相勤申度願之通被仰付

一同年十二月廿三日来春中将様御船ニ而御上京被仰出候ニ付陸通り御先出

立、三月廿五日御供二而帰着

同三亥七月八日上京被仰付候、相止

一同年八月五日御参府御供被仰付、詰中五人ふち被下置候、八月十七日出

立、同十二月江戸ゟ御上京御供、子二月十三日帰

一元治元子三月十六日養父同道上京、御都合ニゟ疋田ゟ引返し帰

一同年六月廿五日宰相様御上京中格別骨折相勤太儀ニ思召候、依之銀壱枚

被下置候

同廿六日御含御用有之早速上京被仰付五人ふち被下置、同廿八日出立、

八月廿五日帰着

一同年八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌、相

働候段達御聴格別之事二被思召候、依之為御賞御扶持方三人扶持被成下、

家督之節御加増被成下候

同年十月十六日長征出立、丑二月二日帰

一慶応元丑四月廿日親同道上京、寅二月九日帰

一同二寅四月廿四日堺町戦争ニ付公儀ゟ被下配当金千疋、且又戦功ニ付三

千五百疋被下置候

一同年十二月廿六日御先第五小隊指添被仰付

一同三卯十月廿二日第一遊擊隊御雇被仰付候

一同四辰四月廿五日遊擊隊江被召出、弐人扶持御足都合五人扶持被下置候

同日三番後拒役被仰付役中分隊長次席二被成下候

一同年閏四月廿二日上京、九月十六日帰

一慶応四辰九月朔日三番之遊擊隊分隊長渥美重六跡被仰付、勤中其隊之上

席二被成下、御足弐人扶持被下置候

明治卜改元、十月三日早駆ニ而下筋江出立、同廿二日若松表ゟ中駆ニ而

帰

一同年十二月廿八日左門ト名替

同月十三日殿様御上京御供出立、巳二月六日帰

同二巳二月十六日養父半兵衛年寄ニ付隠居被仰付、家督百石三人扶持無

相違被下置、三番遊擊隊分隊長其儘被仰付候、月給十俵

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米六拾八俵三升三合被下

一同月廿七日軍務寮権大属被仰付候事、但御改革ニ付分隊長被免候

同三午二月廿四日御用有之二付中国筋江罷越候様被仰付、同廿七日出立、

四月七日帰

同年六月八日御用有之二付東京江立帰可罷越旨、同十日飛脚二而出立、

七月十六日帰

一同四未三月十八日御用有之二付越後筋江被遣候事、翌十九日出立、五月

十五日帰

同年六月朔日御改正二付免職



大谷助六

千石

天和三亥十二月五日父助六家督千八百石被下

貞享元子御書院番頭御奏者

貞享三一統半知

正徳三巳四月廿八日御役御免、 御加増百石、 此節高知之格被仰出

享保十巳四月二日松岡為惣締り被遣候旨被仰渡、 狛市右衛門跡

大谷助六

千弐百石

享保十五戌三月五日父助六家督被下、 高知席岡部左膳次、 則松岡御用助

六之通相勤候様席一人下り

元文五申九月六日御家老職弐百石御加増、 岡部左膳次

延享三寅正月六日死去

大谷助六 俊之丞 隠居

千弐百石

延享三寅二月廿五日父助六家督無相違、高知席有賀極人次、御城下火消

明和七寅閏六月十九日御城代笹治多門跡、 与力御預

安永三午六月十四日病気二付御役御免、 病気快節ハ御本丸御座所中ノ口

往来致候様、 席其儘

大谷求馬 病死

千弐百石

安永七戌閏七月廿四日養父助六病身二付隠居、家督無相違高知席本多修

理次、 御城下火消

天明七未三月病死

大谷丹下

千四百石

天明七未五月八日養父求馬跡知無相違、 高知席本多修理次、御城下火消

尤前髪有之内ハ出馬月番等ニハ不及旨

寛政十午十一月十四日御家老職被仰付、

文化元子十一月十八日弐百石御足高被下置候

文化七午八月九日御足高弐百石御加増、 席稲葉采女次へ御上被成下

同十三子十一月十二日御趣意在之ニ付御札所掛り被仰付

文政三辰六月廿日太田三弥家屋敷江替被下、 且又地狭二付内蔵助方小路

囲迄被下置候旨被仰渡候

文政四巳十二月病死

大谷助六 綱次郎 丹下

千四百石

文政五午閏正月六日養父丹下跡知無相違被下置、 高知席有賀極人次、

城下火消、 前髪有之内ハ出馬月番等不及相勤旨

同九戌江戸立帰出府被仰付、 正月十日出立

天保四巳養父丹下江被下置候屋敷御添地之内、 用水地共幅弐間竪三十弐

間内願ニ而差上ル

同六未年八月廿六日江戸立帰出府被仰付、 出立

嘉永五子十月九日御思召有之二付隠居被仰付、 同日伺之上指扣被仰付候

同十五日御免

一嘉永五子十月九日親助六思召有之二付隠居被仰付、家督千四百石無相違

被下置、高知席芦田信濃次御城下火消被仰付、同日伺之上指扣被仰付

同十二日御免

一同六丑七月三日去月十二日京町ゟ出火之節、出精ニ付御褒詞

一同七寅六月十三日塩町ゟ出火之処及大火候節、出精之段御褒詞

安政三辰十二月廿八日丹下与名替

一安政四巳十一月廿日此度大砲科御端立相成候ニ付、右局へ被相詰御自分

之講究ハ勿論、引立之義厚可被致心配候

一同五午八月廿一日殿様御相続之御礼被仰上候節御供被召連候ニ付、立帰

出府被仰付、来月廿六日頃迄ニ致参着候様九月九日出立、同十月廿四日

炉倉

万延元申六月廿八日御備組調練掛り同様被仰付候

文久三亥正月十九日今般農兵御派立二付一組御附被成候間、其手之面,

并掛り西尾十左衛門等へ厚申談、万端引請致世話候様被仰付候

一元治元子二月廿日今度従公辺御運ひ次第長州為御征伐、紀伊中納言様御

始へ御内意被仰出候二付、依時宜右御出張之御方々乍御加勢御見舞旁御

附属之御人数引纏可被指出儀も可有之候間、御内意被仰出候

一同三月十一日右御内意被仰付置候処御免被成、御模様次第上京可被仰付

儀も可有之旨被仰付候

一元治元子四月十一日京都詰被仰付候、早速致出立候様、且又昨年農兵一

組御附被成候処、今般御軍帳御割替二付御免被成、狛山城方江農兵二組

御附被成候ニ付、其手江属シ山城方江厚申談、是迄之通致世話候様被仰

付候

同十三日在京中同所御用向都而引請取扱候様被仰付候、同十七日出立、

八月廿五日帰着

一同年十月二日京都詰中不容易御時態之処、格別致心配候ニ付鐙一足被

置候

同年同月十五日長征出立、同二丑正月晦日帰着

慶応元丑六月廿四日今度新撰農兵一隊御附属被成候、其手之面々并郡奉

行申談厚致世話候様被仰付、依之御取扱左之通被仰付

中ノ口往来御用人下ノ部屋へ罷出可申事

評定日御軍帳役所へ相詰可申事

一御軍事御用談之節ハ御用席へ罷出可申恵

一同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金弐千疋被下置候

慶応二寅五月七日兵学所掛り被仰付候

一同年九月十七日公辺御停止中家来殺生差越候儀二付、遠慮伺不及其儀

一同年十月五日願之上江戸表江出立、卯三月六日帰

同三卯二月七日御備頭被仰付、御取扱左之通被仰付候

一中ノ口往来并御用席御軍事調所等へ罷出候儀ハ是迄之通

下馬御門御座所御門三ノ丸御座所御門下座致し、御持組御先組

下座致し候事

一同年五月十四日御備頭其儘御軍事奉行被仰付

同年六月十六日内達之趣も有之ニ付御備頭之儀ハ御免被成候、且又中ノ

口往来并御用席江罷出候義ハ是迄之通相心得候様被仰付

同年九月廿五日御趣意ニ付御軍事奉行之儀ハ御免被成候

同四辰四月廿九日軍事方被仰付候

同年八月廿二日御備入子弟差配被仰付

一同日晦日今度越後表出兵之儀弁事局ゟ御達ニ付、一番二番之御備入子弟

輩引纏早々出張被仰付、九月六日出立

巳二月廿二日出張為御手当十両被下候

一明治二巳二月十九日御備入子弟輩差配御免被成候

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三百六拾九俵三斗壱升三合下賜

同日触支配被仰付

一同年十二月十三日修業隊江被入触支配之義ハ被免

席杉田説三郎次

一同三午五月廿四日第一大隊四番小隊入被仰付候事

同年十二月八日兵隊被免候事、非役江被入候事

同四未三月十九日依願給禄之内七拾俵ツ、弟欽哉二男敬次郎江分禄被仰

付候事

米弐百弐拾九俵三斗壱升三合

同年六月五日依之弟岩次郎へ給禄之内七拾俵分禄被仰付候事

米百五拾九俵三斗壱升三合

同五申三月弟欽哉七拾俵之分禄病身二付合禄願之通

大谷

大谷安右衛門

弐百石 外役料百石

三百石 夕谷米百石

於松岡江戸御留守居、御相続後

享保七寅三月四日役料百石、

江戸御聞番

同十三申五月九日勝姫様附被仰付、丹羽八郎跡

大谷市右衛門

弐百石 外役料百石

享保十六亥十一月廿二日養父安右衛門隠居、家督無相違、

寛保元酉四月十五日御留守居定助、翌十六日末ノ番外

同二戌二月十五日馬飼料被下

同三亥八月十三日御留守居本役御使番順席、御役料百石

延享三寅七月七日御先物頭順席

竟延元辰七月六日御留守居御免、御役料其儘御国引越、八月十六日御国

ニおゐて御先物頭酒井六郎右衛門跡

宝暦五亥十一月廿七日御普請奉行津田源之丞跡

安永四未二月廿四日年来出精相勤候二付長袴格

同六酉三月晦日病死

大谷市右衛門

弐百石 役料百石

安永六酉五月廿日父一右衛門跡知無相違、大番入

同年六月五日若殿様附御近習番、御書院番入

同七戌二月五日若殿様附御小姓

天明六午七月廿四日奧御納戸役渡辺忠四郎跡、御書院番入

同年十一月十四日御膳番

同七未三月十四日御形合被相改万端御省略二付役義御免、大番中

同八申五月廿八日御膳番御書院番入

同年八月四日御膳番是迄之通ニ而、御近習頭取真田主税跡

寛政二戌五月廿八日御膳番被減候ニ付、御近習番頭取之方斗相勤候様被

仰付

同五丑二月廿六日格式末ノ番外ニ被仰付、御広式御用人助、席原田彦八

郎次

同六寅正月十六日御使番樋口喜左衛門跡、御役料百石被下置

享和元酉六月廿九日御先物頭浅見忠右衛門跡

文化五辰閏六月二日隠居

大谷一右衛門 又次郎

弐百石

文化五辰閏六月二日父市右衛門隠居被仰付、家督無相違被下置、大御番

入

同年同月五日御近習番御書院番入

同十一戌七月廿日御裏役

同十三子若殿様御附奥御納戸役恒五郎様御附被仰付候処右兼帯

同年十月廿日若殿様御附御腰物数寄方奉行御裏兼帯被仰付

文政五午九月晦日御腰物数寄方奉行若殿様御用兼帯田口十内跡被仰付

文政十亥年九月廿四日高江又五郎跡郡奉行被仰付、御役料五拾石被下置

候

文政十二丑二月十六日御留守物頭高江又五郎跡

同十三寅十二月十日御持弓頭井上半太夫跡

大館兵馬 大谷半平

弐百石

一天保二卯十月廿九日親一右衛門家督弐百石無相違被下置、大御番組へ被

入

一同十亥江戸詰被仰付、四月十三日出立

同十四卯江戸詰被仰付、五月三日出立

5.2日之亡亏害安卫士、三月一九十二二

弘化四未江戸詰被仰付、三月十九日出立

同年十二月十六日於江戸表、大御番六番之筆頭田辺周吉跡被仰付

嘉永元申十二月十四日於江戸表御聞番見習被仰付、御役料五拾石被下置

格式末之番外被仰付、長詰被仰付、詰中御扶持方拾人扶持被下置、度

原三十郎次

一同二酉十二月廿五日江戸御聞番本役被仰付、御使番順席、御役料都合百

石被下置候

一同年十二月十五日御前様御引移御用多二付銀弐匁被下之

一同四亥七月五日御使番役門野太郎右衛門跡被仰付、長詰中出精相勤候ニ

付御召御上下一具銀三枚被下置候、且又江戸表ニ罷在候内ハ是迄之通被

仰付置候

一同年八月廿三日江戸表ゟ帰着

一同七寅六月廿四日杉形御鎗奉行高田孫左衛門跡

但安政元寅十二月十八日御軍制御改正二付、御役名御脇物頭与

替ル

一安政二卯正月九日家屋敷加藤郷八家屋敷へ替被下候

一同四巳九月廿三日家屋敷荻野左十郎家屋敷へ替被下候

一文久元酉九月廿三日御先物頭武田藤三郎跡被仰付候

一文久三亥八月廿二日組之者召連上京被仰付、早速出立致し候様被仰付同

廿四日出立、十月八日早駆ニ而帰、同十一日折返シ出立 扶持被下置候

同年十二月廿八日於京都表大館兵馬ト改

元治元子五月三日京都ゟ帰

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、 依之御酒

被下置候

同年八月廿三日年寄候二付隠居

大館尚氏 大谷徳太郎 大館源紀

弐百石

〔士族〕

安政三辰十一月廿六日御含有之、 来巳年江戸表江被遣、 右詰中御扶持方

三人扶持被下置候

同四巳四月十四日高畠引続出精二付御褒詞

同廿二日三ノ丸惣武芸所御集被成候ニ付、 高畠詰被仰付候

同年五月朔日江戸出立

同十三日詰中長剣術并砲術厚致修行候様被仰付候

同五午四月廿三日為修行来未ノ春迄詰越被仰付候

同年肥前長崎表江被遣

同六未七月廿二日御国表江帰着

同七申閏三月十二日他国修行被仰付太儀二付、銀壱枚被下置候

万延与改元、七月廿日兵科掛り被仰付候

文久二戌四月五日原書為修行当夏ゟ来亥春迄江戸表へ罷越、 蕃書調所ニ

而堀辰之助与申人へ相手寄度願済之事

同月十七日出立

同年七月朔日願之上修行被仰付出府罷在候二付、 右修行中御扶持方三人

同年十二月十六日中将様御上京御供被仰付候二付、 御供中御扶持方弐人

扶持被下置候

同三亥正月廿三日御船二而御上京被遊候二付御供

同年二月廿七日京都ゟ長崎表江出立、五月十二日帰着

同年六月五日蒸気方被仰付

同年七月九日蒸気方被仰付、今度長崎表へ罷越候ニ付、 五人ふち被下置

日金弐朱ツ、為失却被下置、 但船中之義も御賄之事、 八月廿九日帰

同年九月朔日黒竜丸御船乗組長崎表江罷越候様被仰付, 同二日出立、十

二月四日京都ゟ着、同八日又々同所江出立

同年十二月廿八日於京都表大館源紀卜改

同年十二月十五日被召出御扶持方五人扶持被下置、 御書院番格二被成下、

御用人支配二被仰付、黒竜丸運用方悉皆為御任被成、 船中締り方等申談

右ニ付万端司計局へ申談候様被仰付候

取扱候様被仰付、

同日黒竜丸運用方被仰付候二付、 船中壱ケ月金五両ツ、被下置候

五人扶持 元治元子八月廿三日帰着

同日親兵馬年寄候二付隠居被仰付、倅源紀へ家督弐百石無相違被下置

大御番組へ被入候

同年十月十五日長征出立、 丑二月四日帰

同二丑三月十一日此度油町地所之内ニ而新規出来之家屋敷被下置候

同廿四日兵科取調被仰付

慶応ト改元、 閏五月廿日航海術修行頭取被仰付、 六月十日江戸表へ出立

同二寅六月 先達而弟清蔵出奔二付、遠慮伺之上指扣之処、六月廿四

日御免

同年九月廿一日松平周防守殿ニ而別紙御書付を以被仰出候、 尚又厚相心

得相勤候様被仰付

御名家来大館源紀

右御軍艦組当分出役可申渡候、 出役中並之通御扶持方御手当金

被下候、 尤海軍奉行并御軍艦奉行可談候

同年十一月三日他国修行中御留守番組へ被入候

同三卯五月十七日帰、 廿三日又々敦賀表へ出立、夫ゟ出帆、 六月十四日

公辺御船乗組ニ而江戸へ着、 八月三日帰

同年八月廿九日御書院番組江被入、航海術取調方并軍事方兼被仰付

同年十二月十三日軍事局へ相詰、 軍事目付勤向相心得候様被仰付

同四辰正月七日軍事目付助被仰付、 席末之番外格二被仰付

同日御含御用有之大津辺江被遣候、 夫ゟ京江

同日今般勅使御通行之節、 御守衛御用掛り被仰付

同月廿四日勅使御用二付御国江帰

同年三月十二日軍事目付見習、御役料五拾石被下置、 末之番外順席二被

仰付、 当夏京都詰被仰付、 四月廿三日出立、 閏四月十七日帰

同年五月廿五日席御役料其儘御目付役見習被仰付

同年六月廿五日会征出立、 十一月十五日帰

明治二巳二月十五日軍監被仰付、 月給米七十俵、 御役料ハ不被下候

同月廿二日去夏越後江出兵之節及出張、 昼夜之連戦中別格之尽力太儀之

段御褒詞、 御短刀一 三骸被下、外二長々出張二付弐十金被下

同年五月四日先達而遊擊隊被召出之内、 御目見不相済面々出仕之儀及問

合候二付、 不苦旨指図仕御役前不参届遠慮伺之上指扣、 同九日被免

同年六月十五日軍政承事軍監兼被仰付事、但席長崎藤四郎次

同年十月十五日弟清蔵義先年神戸御警衛詰中令脱走候始末、 不届至極ニ

付重キ御咎被仰付恐入、依之伺之上遠慮被仰付、 然ル処同十七日今度兵

部省ゟ御呼立ニ付、明十八日ゟ伺遠慮被免候事

同月御用有之候条早々東京江出頭可致旨兵部省ゟ御達ニ付、 同廿一日出

立

但右御用次第、 同九月十九日源紀多年海軍二心掛罷在候趣二付、

見込取調致言上様迅速可申達旨被仰付、 且又東京江出頭致シ候

而も不苦旨、 然ル処此度出頭申来候事

同年十一 月七日海軍操練所出仕申付候事

同年十一 月廿七日今般御改革二付当役被免候事、 但席上月操次

同月 今般御改革二付、 更給禄米百五俵弐斗八升五合下賜

同三午三月十三日東京ヨリ帰

同月廿五日当分軍務寮江可致出仕候事

同月晦日諸願向軍務寮可為取扱候事、 但席浅井権十郎次

同年四月廿五日戊辰北越出張軍務勉励其職掌ヲ尽シ候ニ付、 御賞典之内

永世五十石令頒授候事

同年六月八日居屋敷地東ノ方当時御用ニ相成候地所ノ内、 拝地北境屛ゟ

南之方拝地二被仰付、 新拝地西ノ方ニ而上地へ仕振替拝地願之通被仰付

但過坪之分ハ相当之地子上納之事

同月十五日病気依願海軍操練所江出仕指免候事

同年七月八日十三等之年給被下候事

但軍務寮出仕ヨリ

同月廿二日武生士族卒支配被仰付、 軍務寮出仕可為是迄之通事

但年給四十俵

同年八月廿二日武生士族卒支配之儀被免候事、 席浅井権十郎次

同月廿五日武生両族支配被仰付出張罷在候処、 市中動揺之砌職務不参届

二付、軍務寮出仕被免修業列へ被入謹慎被仰付、 九月十六日被免

同年十二月八日軍務寮出仕 年給四十俵 同年閏十月十七日小隊江被入候事、但第一大隊一番

但予備隊長勤向

同四未四月七日右解隊被仰出候二付、 軍務方出仕被免候事

同月十四日兵学所出仕、 但年給十俵

同年六月朔日御改正二付免職

同年七月源紀事殳麿卜名替

大谷

大谷儀左衛門

百五十石 外役料百石

元禄七戌五月廿九日父儀左衛門家督

正徳四午九月廿八日御使番江川安右衛門跡

享保四亥五月十六日御徒頭今村伝兵衛跡

同五子七月廿一日御目付井上半太夫跡

同十五戌八月廿一日御役御免、 席末之番外渡辺元右衛門次

同十八丑正月廿八日御先物頭太田三郎兵衛跡

同十九六月六日病気ニ付御役御免、末之番外

大谷孫太夫

百五拾石 外役料百石

享保十九寅八月九日父儀左衛門隠居、家督無相違、 大番入

元文三午十一月十六日御手廻御書院番入

延享元子十一月五日御供目付

同四卯八月廿八日御部屋附

寛延二巳六月廿三日御膳番

宝暦三酉十月廿九日御使番、 役料被下、 田辺平学跡

大谷与三五郎 病死

百五拾石

宝暦六子五月廿二日父孫太夫跡無相違、大番入

明和五子七月廿三日表御小姓

明和六丑十二月病死

大谷三次郎 病死

百五拾石

明和七寅二月五日養父与三五郎跡無相違、 大番入

安永三午正月廿九日若殿様御小姓

天明元丑十月病死

大谷孫太夫 仲右衛門

百五拾石 外役料五十石

天明元丑十二月五日養父三次郎跡知無相違、 大番入

同二寅六月十四日御小性見習

同年十月十四日御小性本役

同五巳十月廿六日於江戸御小性頭取

同六午七月廿四日奥御納戸役御近習番御書院番入

同八申十月廿一日御小性頭取

寛政元酉六月十九日於江戸御部屋附御近習番頭取格御供頭; 御書院番入

同七卯五月廿四日於江戸御部屋附御近習番頭取御膳番役、 武田太郎左衛

門跡

同十一未九月十八日御書院壱番筆頭

同十二庚申八月廿四日御徒頭福田八郎右衛門跡

大谷儀左衛門 仲右衛門

百五拾石

文化二丑二月十一日父孫太夫跡知無相違、 大御番入

文政十亥閏六月五日江戸御聞番役被仰付、 家内共引越被仰付、 御役料百

石被下置、御使番順席被仰付候

天保二卯十二月十九日御先物頭辻十郎右衛門跡、 御国表へ家内共引越

天保十二丑六月廿九日御普請奉行沢木次太夫跡

同十五辰十二月三日御側物頭沢木次太夫跡

弘化二巳二月九日御座所預

五月廿二日御泉水預り被仰付

嘉永元申十二月十日御武具支配被仰付候 一酉閏四月五日御旗奉行松原権左衛門跡被仰付

同

嘉永三戌六月三日年寄ニ付隠居被仰付

大谷遜 孫太夫 儀左衛門

百五拾石

嘉永三戌六月三日親儀左衛門年寄候二付隠居被仰付、 家督無相違被下置

大御番組江被入

同年同月四日御小姓被仰付

同四亥年江戸御供詰

同五子十二月廿八日孫太夫与名替

同六丑三月廿二日御供出立

同七寅閏七月廿九日御小姓頭取定助被仰付候

安政二卯江戸御供詰

同三辰正月十五日御小姓頭取被仰付候

同四巳四月廿五日江戸御供詰出立

安政五午七月六日中将様御附御小姓頭取被仰付候

同六未二月三日御役名御附御近習与被仰付候

同年四月廿四日江戸表ゟ帰着

同年十月十一日御徒頭跡部幸八郎跡被仰付、 御役料五拾石被下置候

万延元申十二月廿八日儀左衛門与名替

同 一酉二月九日御使番役野村拾太夫跡被仰付、 御役料都合百石被下置候

文久二戌五月十八日御使番役其儘中将樣御供頭兼帯被仰付候 同日右二

付江戸詰被仰付候間、 早速致出立候様被仰付、 同月廿日出立

同年八月七日下地御人少之折柄、 中将樣臨時日之御登城被仰出候処、 格

別出精相勤候二付金百疋被下置、 失却之儀ハ追而可被下旨

同年十月廿五日中将樣御上京御供被仰付、 御道中並御逗留中御徒頭取扱

一元治元子五月十一日御軍制御改正二付、 同年四月廿五日今度琵琶山へ角場御取建ニ付、 同年十月廿六日御役料其儘御徒頭被仰付、 慶応二寅正月廿九日組之者共召連京都詰被仰付、 同年八月廿三日御先物頭猪子丈右衛門跡被仰付候 同年八月四日御先新物頭御供頭兼帯、 同年十一月十一日御都合も有之二付、勝手次第御国表江罷帰候様被仰付 同年十月十六日御軍中御用二付早速上京被仰付、 同年二月七日席御役料其儘御軍事調所目付被仰付、 同三卯正月廿二日右掛り被仰付候ニ付、 同年十二月六日御軍事掛り被仰付、 同年十一月廿六日京都ゟ帰 同年十月十四日長征出立、 同月十七日御参府御供ニ而出立、同年十二月江戸ゟ御上京御供、 同三亥正月廿三日御船二而御上京被遊候二付御供、三月廿五日御供二而 仰付、 元治二丑三月七日征長御供ゟ罷帰無間も敦賀表江出張、 武田三十郎申談候様被仰付 与以前へ被復候 京ゟ御帰国御供 兼帯被仰付候 一月朔日出張、 同廿一日出立 同廿三日帰 同二丑正月十日帰 御軍帳役所江罷出候樣被仰付候 浅井権十郎跡 席其儘御役名御使番役御供頭兼 中ノ口致往来候様被仰付 且又在京中ハ是迄之通相勤候 村田巳三郎西尾十左衛門 四月五日出立 詰中御目付本役同様被 御役人並被仰付候 太儀之段御褒詞、 子二月 大谷巖 同年八月五日御参府御供被仰付詰中五人ふち被下置候、 同年七月八日上京被仰付、 同三亥三月廿五日右御供ニ而帰着 同廿三日来春中将様御船二而御上京被仰出候二付、 置候 同十六日中将様御上京御供被仰付候二付、 同月廿四日西京並中国筋へ御用ニ付罷越候様被仰付、 同年同月十五日学校承事軍政局承事軍監兼被仰付、 同年六月十二日儀左衛門事遜ト改ユツル 免 同年三月十七日酒井孫四郎上京中幹事代御用被仰付、 同月廿二日去夏越後江出兵之節、 明治二巳二月十五日軍監被仰付、月給米七十俵、 同年六月廿五日会征出立、 同年同月十一日御目付役被仰付軍事局掛り被仰付、 四月廿九日昨冬已来格別骨折相勤候段御褒詞 同四辰閏四月四日京ゟ帰 文久二戌十二月朔日願之上江戸出立 月四日帰 段御褒詞、 同年十二月江戸ゟ京都江御供、 上ケ被仰付候事、 助作 御短刀一 遜倅 但席井上小右衛門次 明治三午廿五歳 三骸被下候、 相止 十一月十五日帰 子二月十三日帰 及出張昼夜之連戦中別格之尽力太儀之 外弐十金 御供中御扶持方五人扶持被下 御役料ハ不被下候 陸通り御先出立 且又出精相勤ニ付席 但席青山小三郎次 然ル処四月六日被 八月三日出立、 八月十七日出立、 〔士族〕

十

同年十月二日京都詰中不容易御時体之処、 同年六月廿五日宰相様御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、 慶応三卯十二月十九日昼夜格別致精勤候ニ付、 同年同月十三日在京中御軍事方手伝被仰付 同年十二月二日上京、 同年十二月廿六日御先第二小隊指添被仰付 同年四月廿四日堺町戦争一 同 慶応ト改元、 同 同年八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌 置候 被下置候 同年二月廿七日第一遊擊隊 同四辰正月六日在京中 同年十一月廿九日京都詰中堺町御警衛向心配相勤候二付、 同三卯六月六日当秋京都御警衛詰被仰付、 弐千五百疋被下置候 同年十二月助作事巌と名琴 同年十月十四日長征出立、 働候段達御聴一段之事二被思召候、 立 元治元子六月十日御含有之早速上京被仰付五人扶持被下置, 一寅三月十一日三番之補兵隊伍長被仰付候 一丑二月朔日賊徒警衛敦賀江出張、 八月廿三日帰着 閏五月十八日二番補兵隊被仰付 同十七日探索方并参与附属被仰付 番之第一遊擊隊御雇被仰付 丑正月帰 件ニ付公儀ゟ被下配当金千疋、 一番之御雇被仰付、 依之御小柄 同廿三日帰 七月九日出立、 致心配候二付御酒被下置候 御雇中銀三拾枚ツ、年々 金三百疋被下置候 被下置 十月晦日帰 御酒被下置候 且又戦功ニ付 銀壱枚被下 同十四日出 相 同日 同廿八日権曹長心得勤 米八拾弐俵壱斗弐升壱合、 同年十二月十五日親遜老年二付立替家督 同年十二月八日任権曹長、 同年八月廿七日武田盛雄儀出張先心得違之儀有之二付御咎被仰付、 同 同年八月二日一番之分隊長成瀬和十郎跡被仰付候事 同月廿五日右御用ニ而東京ゟ帰 同年六月十七日今般殿様福井藩知事被為蒙仰候二付、 同二巳正月三日御附御馬廻被仰付 明治ト改元、 同年九月二日御用有之早急立帰上京被仰付、 早駆帰 同年八月十八日戦地為物見越後表江早急致出立候様即日出立、 成 同年同月廿五日遊擊隊江被召出五人扶持被下置候、 同四未十月十三日解隊 使御国表江罷越候樣被仰付候、 同年四月九日御供二而東京江出立 引纏乍詰居示方不参届、 三午五月廿四日第一大隊三番分隊長被仰付候事 一番後拒役被仰付、 但月給米一年分十俵被下候事 村田鼎次 同月十六日上京、 依之遠慮伺之上指扣九月朔日被免 役中分隊長次席二被成下候 県兵 内四拾俵弟常吉へ分禄 但常備第三小隊 巳三月六日中納言様御供帰 早々出立可致候事 年給弐十俵 即日早駆出立、 午四月三日十六俵高 右御書付守護為御 十二俵高 同七日帰 九月二日 其節

同年四月十日京ゟ帰

同五申正月十九日県下兵解隊

寛政元酉十二月病死

天明四辰十一月十五日養父五郎左衛門休息、

家督無相違、大御番入

百石

大谷健次郎

大谷

大谷伝七

弐拾石四人

元禄五申六月十一日跡目

享保七寅順席

大谷五郎左衛門 孫三郎

百石

享保十四酉七月廿一日養父伝七跡目被下、大番入

寛延三午七月五日五石壱人フチ御加増、都合弐拾五石五人、御右筆御書

院番入

安永二巳三月朔日新知百石

天明三卯正月廿八日老年二付御番御免

同年八月五日養子孫三郎義五郎左衛門へ対し取扱不宜候ニ付、 父子並妻

縁を切実方へ相返し蟄居、 此節五郎左衛門義伺遠慮

同四辰十一月十五日休息

大谷鉄太郎

百石

寛政一 一戌二月十六日養父健次郎跡知無相違、 大番入

同年三月病死

大谷第八

百石

寛政二戌四月廿九日養父鉄太郎跡知無相違、 大御番入

同五丑八月廿五日養家之曾祖母不埒至極二付、 里方江御返被成蟄居、

此

節遠慮

同十午五月廿八日御部屋附御近習番御書院番組へ被入

同十二申八月十一日御小姓

同五、 五月廿一日奥御納戸格

文化元子七月廿八日御書院番入御近習番

同十一戌十一月十二日年来出精相勤候ニ付勤向其儘格式末ノ番外、席大

藤三郎兵衛次、且又銀五枚被下

同十三子正月十五日於江戸表御使番格御時宜役、 席跡部主計次

文政二卯八月病死

大谷第八 弁吉 実川村五左衛門次男

百石

一文政二卯九月廿九日養父第八跡知無相違、無役御留守番組江被入

同七申八月廿三日大御番組江被入

同十二丑江戸詰、 四月廿五日出立

一同月廿五日今般御改革、更給禄米六十俵四斗三升六合被下	
一同年十一月三日東京ヨリ帰	一元治と改元、四月廿三日御供ニ而京ゟ帰
席西村元吉郎次	一同四子正月九日御附御近習番被仰付候
但四等官月給米一年分十俵被下候事	一同年十月十三日中将様御供ニ而上京
被仰付	一同年四月十六日千熊与改
一同年九月廿四日従二位様内務局頭取被仰付、当役ヲ以奧詰肝煎御供頭兼	一同三亥二月廿九日中将様御附御近習被仰付候、三月廿五日御供ニ而帰着
一明治二巳四月九日中納言様御供、東京江出立	江出立
月給弐俵 在京中六俵	一同年十二月廿三日来春中将様御船ニ而御上京被仰出候ニ付、陸通り御先
一同年五月廿七日上京、八月八日帰、十月二日又々上京、巳二月九日帰	一文久二戌閏八月十日支度出来次第江戸詰被仰付出立
一同年四月十一日京ゟ帰	一万延元申六月廿九日養父第八家督百石無相違被下置、大御番組へ被入候
一同四辰三月四日御附御馬廻其儘御附御供頭指添被仰付	一安政五午三月廿日横山詰同様被仰付候
一同年十一月二日右同断出立	百石
一同年四月十二日宰相様御上京御供出立、八月九日帰着	大谷千熊 伝太郎 実横山藤八郎次男 〔士族〕
一同三卯二月十一日宮塚又五郎家屋鋪相対替願之通被仰付	
一同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月同断帰	万延元申五月九日病死
一同年十月朔日宰相様御出坂御供出立、同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰	一安政四巳二月十五日大馬印奉行嶋川源右衛門跡被仰付候
へ被入候	一同四亥二月廿五日末之番外御時宜役被仰付候
一慶応与改元、五月廿五日宰相様御馬廻り被仰付候、右ニ付席田川乙作次	御留守番組江被入
仰付上京	一同二酉十一月十六日御勘定拝借奉行御趣意金取扱中村庄左衛門跡被仰付、
二付、宰相様ゟ為御歓本多政之助御使被仰付候間、指添明十九日出立被	一嘉永元申江戸詰、四月廿九日出立
一同二丑正月十八日、殿様去ル十二日小倉ゟ兵庫湊江御着船御上陸被遊候	一弘化元辰江戸詰、四月廿一日出立
一同年十二月賊徒御追討御供出陣、御手当銀六百匁被下置候	一同十三寅十二月五日御金奉行大久保太郎太夫跡
一同年九月四日宰相様御附御裏役御書物方兼帯被仰付候	一同九戌江戸詰、四月十日出立
酒被下置候	一天保四巳江戸詰、三月十七日出立

同三午二月廿七日御簾中様青松院様来ル三月御東上ニ付御供被仰付

同年三月廿四日右御供東京江出立

同年八月十五日庶務主事被仰付候事

但内務局被止也、 庶務主事候所ト唱

同四未二月十六日奧詰頭取御供頭兼被仰付候事

同月十七日外向御用并御供之儀も相心得候様被仰付候事

席浅見岱輔上、未四月五日年給十三級弐拾八俵三斗六升四合八

勺

同日当秋迄詰延被仰付候事

同年五月七日御供御使者勤被仰付候事

但等級是迄之通

同五申八月晦日御書下ケニ而免職

大谷

大谷源治 孫九郎 乙次郎 同姓儀左衛門次男

百石

享保十四酉九月十五日奧御小姓被召出

同十六亥二月朔中奥

同廿年卯正月十五日新知百石被下

大谷儀右衛門

百石 役料五十石

享保廿卯十二月廿五日養父源治跡無相違、 大番入

宝曆十一巳八月廿九日札所奉行三岡次郎左衛門跡

明和元申八月廿五日郡奉行役料五十石、佐久士市兵衛跡

大谷清兵衛

廿五石五人

明和五子正月廿九日父儀右衛門跡知無相違、 大番入

天明三卯九月十一日御金奉行松原郷左衛門跡

同八申六月十一日不埒之趣有之二付役義御取揚、

拝知被召上御疑作廿五

石五人扶持被下、遠慮

同年八月十一日不調法之品有之、 閉門

寛政二戌六月五日又々不埒至極之義有之蟄居、養子新平へ為名跡弐拾石

三人被下、新番

大谷儀右衛門

拾五石三人

寛政二戌七月五日養父清兵衛不埒之儀有之蟄居、 為名跡御擬作廿石三人

扶持被下、新番入、遠慮

同三亥十月廿九日祖母取扱不参届二付遠慮被仰付

同 取次役

文化三寅六月十六日思召有之二付五石御取上、 新番並へ御下ケ、 閉門

同九申ノ十月十九日御趣意有之、新番入

大谷孫右衛門 鉄兵衛

拾五石三人

1	一同年五月十八日昨年来度々之出京、御用向出精相勤候ニ付銀五枚被下置え
一明台卜玫元、十月毎日泙定司賙殳兼勤玻卬寸	管
一同四辰四月十一日御足充行其儘評定局書記方被仰付	一元治と改元、二月廿八日京都江出立、同年四月廿三日宰相様御供ニ而帰
一同年五月二日出精相勤候ニ付役儀其儘役御番組江被入候	一同四子正月十六日御徒目付頭取被仰付、役中御役料弐石被下置候
日帰	一同年十二月三日御内御用ニ而京都江出立、同十六日帰
一同三卯二月 御内御用有之立帰上京被仰付、同廿六日出立、三月十六	一同年八月十七日御参府御供ニ而出立、十一月廿一日帰
日帰	一同年四月朔日右同断七月十一日早駆ニ而帰
一同年十二月十日御内御用有之敦賀表江罷越候様被仰付、同日出立、廿三	一同年三月十三日御内用有之上京、同廿五日中将様御供ニ而帰
但是迄被下置候役料弐石之義ハ已後不被下候	一文久三亥二月十日殿様御上京御供、三月六日帰
一同年十一月十六日出精相勤候ニ付役中御足充行七石被下置候	御本城橋へ罷出候儀ハ指除候様被仰付
一慶応二寅十月廿二日役新番組へ被仰付候	一万延元申十一月五日御徒目付勤被仰付、役中御足充行三石被下置候、但
一同年六月十一日大坂表へ早駆ニ而出立、同月十六日早かけニ而帰	一同六未四月十六日内達之趣も有之ニ付右御免被成候
付同道罷越候様被仰付、同二日出立、同十六日早駆ニ而帰	く致修行候様被仰付候
一同二寅五月朔日榊原幸八御用有之ニ付出坂、早速致出立候様被仰付候ニ	一同四巳六月八日兵科局詰被仰付、且又年若之義ニ候得ハ洋書をも相学広
一同年十月朔日宰相様御出坂御供ニ而出立、同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰	一安政三辰十二月廿八日藤九郎与名替
一慶応卜改元、五月廿五日長征御供別段心配ニ付銀弐枚被下	石三人扶持無相違被下置、新御番組へ被入候
被仰付	一嘉永五子六月十六日親孫右衛門病身ニ付内願之通休息被仰付、家督拾五
扶持ニ被成下御目付方調役被仰付、役料弐石其儘被下置候、但京都ニ而	拾八石三人
一同二丑二月十五日出精相勤候ニ付御足充行三石御加増、都合拾八石三人	大谷直兄 源吉 藤九郎 直衛
一同年十二月直衛卜名替	
月五日早駆ニ而御国江帰、同八日又々早駆ニ而出立、三月帰	一嘉永五子六月十六日病身ニ付内願之通休息
一同年十月十八日大坂表江出立、夫ゟ長征、丑正月御供ニ而京都へ着、	一天保八酉九月十一日御供勤被仰付
一同年六月十四日加代姫様御入輿ニ付右御用掛り被仰付候	新御番組へ被入
候	一文政九戌六月廿九日父休息被仰付、家督拾五石三人扶持無相違被下置、

月給十五俵被下候、但御足充行ハ不被下候

一同月十八日出精相勤候二付御足三石被下置候

一同年十月廿五日掌政局書記被仰付候事、但月給米是迄之通

- 12 - 2 - 11 11) 宇宙省有有有量 - 有力第三人式之

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾九俵四斗三合下賜

一同月廿八日掌政堂主記被仰付候事

一同三午正月十日権大目被仰付候事 但六等

一同年十月七日右権大属ト被改候事 未正月年給五十四俵

一同四未正月七日御用有之ニ付立帰東京江可罷越事

一同年二月十六日右ニ付御東京御供勢ト出立

同年三月廿七日為失却月々金三千疋ツ、被下候事

一同年五月三日宣教掛被仰付候事

同年七月 任土木権大佑

同年九月

本官被免帰県

同年十月廿九日任福井県少属 但録事

同年十二月十日任福井県権大属

官省進達府県往復文書

同五申五月直衛事直兄

同年八月七日任足羽県大属

長崎権典事東京中権典事勤向可相心得事

一同十九日佐々木権大属東京出立ニ付地理誌取調掛り可相心得事



拾八石三人

安永九子正月十六日小役人ゟ御取立、新番入、御預所御勝手役其儘

天明五巳九月十六日年寄候二付役義御免

同八申八月六日御借米方掛り被仰付

大谷武兵衛 八十郎

拾八石三人

寛政五丑六月廿五日父武兵衛休息被仰付、家督無相違被下置、新番組へ

被入

文政元子九月五日会所預り古物方記録方兼帯、門野栄十郎跡享和二戌十月五日御広式添役

文政十亥年九月廿五日小普請方被仰付、平瀬五左衛門跡

天保四巳正月廿九日御泉水番市村惣右衛門跡

同十亥五月十一日数年相勤候二付御留守番入被仰付、御掃除奉行広部甚

五右衛門跡、御徒目付久保村祐七罷在候家屋敷へ替被下候

大谷武兵衛 八十郎 実岩崎八右衛門四男

廿石三人

一天保十一子五月十一日養父武兵衛年寄候二付休息、家督拾八石三人扶持

無相違被下置、無役御留守番組へ被入

一同十三寅五月四日実家兄岩崎原蔵於江戸表御門所心得違、其上勤向等閑

二付御扶持被召放候二付、伺之上遠慮被仰付候

一同十四卯三月十六日中野文左衛門屋敷へ替被下

一嘉永五子七月廿六日御右筆見習被仰付候

一同年四月九日中納言様御供東京江出立、六月十四日御人減ニ付帰	一文久二戌四月廿四日帰、同三日太田御陣屋詰中横浜表江致出張候ニ付御
但席林松蔵次	立
席二被仰付	一同二酉二月廿一日御都合も有之ニ付支度出来次第出立被仰付、廿八日出
一明治二巳正月廿日四番遊擊隊後拒役松田新次郎跡被仰付、勤中分隊長次	士御雇詰被仰付、御扶持方五人扶持被下置候
一同四辰閏四月七日上京、九月十八日帰	万延元申十一月十一日御趣意通りも有之ニ付、来酉年太田御陣屋詰御番
日帰	弐拾石三人
一同月廿六日宰相様御滞京中為御備上京被仰付、同廿九日出立、辰四月十	大谷麓 高木荒次郎 敬治 実高木富蔵弟也 [士族]
一同三卯十一月二日宰相様御上京ニ付速見迄御見送り出立、同七日帰	
へ被入候	一同年十月三日病死
一同年十一月廿三日養父武兵衛家督廿石三人扶持無相違被下置、大御番組	人扶持被成下候
一同年六月廿五日宰相様御登坂御供出立、九月廿九日親対面願帰	一同二寅九月廿七日出精相勤候ニ付御足充行之内弐石御加増、都合廿石三
一同二寅三月十一日一番之補兵隊へ附属被仰付候	付御免
一慶応元丑五月廿八日大砲方御免被成候	一慶応与改元、十月十七日来寅年江戸詰被仰付、寅三月五日当分御人減ニ
一同年十二月敬治と名替	一元治元子十月十六日長征出立、丑二月帰
一同年八月廿八日御上京御供出立夫ゟ長征、丑正月廿八日帰	一同年十二月 於江戸表武兵衛与改、子五月十六日帰
銀弐枚被下置候	一同年四月六日江戸表江出立
一同年六月廿五日宰相様再度之御上京中格別骨折相勤太義ニ思召候、依之	一文久三亥二月十日殿様御上京被遊候ニ付御供、三月六日御供ニ而帰着
一元治元子四月廿三日宰相様御供ニ而帰	一同七申三月十五日御供ニ而帰着
百五十疋被下置候	一同六未年
一同年十二月廿四日京都表動揺之節為御守衛出張ニ付、朝廷ゟ為御褒美弐	一同年九月十四日殿様御一字御拝領可被遊ニ付、取調御用掛り被仰付候
一同年八月十一日毛受鹿之介同道上京被仰付、同十二日出立	一同五午八月廿二日江戸詰出立
一同三亥二月十二日荒川十右衛門引纏上京	一安政四巳十一月三日順席ニ被成下候
亥正月廿日大谷八十郎養子願済	人扶持被下置候
褒詞之上銀壱枚被下置候	一同七寅五月三日御右筆本役被仰付、御書院番組へ被入、御足充行七石弐

千石

同年十一月廿五日今般御改革、更四十弐俵六升被下

同月廿七日今般御改正二付当役被免

同三午五月廿四日第一大隊三番小隊後絶被仰付候事

同年十二月八日常備二番隊

年給六俵

同年十二月敬治事麓与名替

千石

荻野孫右衛門

荻野

荻野孫右衛門

千石

御先代五百石

貞享三一同半知

元禄元辰二月廿四日百石御加増

同十二卯六月晦日御書院番頭、百石御加増

正徳元卯十一月七日三百石御加増、 元禄十四巳三月六日於江戸若殿様へ被為附、 此節評定所相詰可申旨 此節五拾石御加増

同四午十二月廿八日御加増弐百石

享保九辰五月廿六日御城代与力御預

同十巳四月二日御役御免本多民部次

荻野孫右衛門

部左膳次

享保十二未九月十五日父孫右衛門家督無相違、格式孫右衛門通、

座席岡

寛保二戌五月廿五日隠居

同四未十月十三日解隊

同五申八月四日補亡方申付候事

荻野孫右衛門

明和六丑九月御宮火消

安永三午四月廿三日隠居

次

寬保二戌五月廿五日養父孫右衛門隠居、家督無相違、高知席水谷弥三郎

千石

安永三甲午年四月廿三日父孫右衛門隠居、 家督無相違、高知席有賀小右

衛門次

荻野孫右衛門

千石

天明五巳十一月十六日養父孫右衛門跡知無相違、 高知席波々伯部靱負次

文化十三子四月十二日御宮火消被仰付

文政二卯十一月廿日隠居

荻野左近 貞三郎

千石

文政二卯十一月廿日養父孫右衛門内願ニ付隠居、家督無相違被下置、高

知席波々伯部靱負次

文政十二己丑八月五日御宮火消被仰付

文政十三寅九月廿七日御家老職見習岡部左膳次、御取扱筋并勤向諸事御

家老同様月番相勤候ニ付、為失却毎年米五拾俵ツ、被下置候

天保八酉年三月十三日御家老本役被仰付、御足高弐百石被下置候、毎暮

被下候米五十俵以後不被下候

天保十二辛丑正月廿一日是迄御役相勤太儀思召候、昨年来病身相成ニ付、

故、此上ハ御役御免被成隠居被仰付、家督之儀養子与三郎江拝知千石無内存之趣則御聴候処其儘相勤候様被仰出候得共、格別内達之趣も有之事

相違被下置候間緩々保養可被致候、此已後御機嫌伺等被罷出候節も只今

迄之通り中ノ口各部屋へ可被罷出候、且又御門々々番人致下座筈候間左

様御心得可有之、御羽織一拝領、是迄被下候御足高弐百石ハ已後不被下

段、

御目付月番荻野鍋八郎を以被仰付

荻野左近 与三郎

千石

天保十二辛丑正月廿一日養父左近病身ニ付御家老職内願隱居、家督無相

違被下置、格式高知席本多四郎右衛門次被仰付

荻野小四郎 隠居窓入 実酒井彦六弟

千石

一弘化四未二月廿三日養父左近病中願之通養子二被仰付、家督無相違被下

置、芦田内匠次席被仰付

嘉永元申八月十日御宮火消被仰付

同五子五月十二日御帰国御礼為使者出立之処、七月三日帰着

安政四巳正月十五日出格之思召を以大御番頭勤向被仰付候

同年六月廿日思召を以御用人御奏者兼被仰付候

同七申二月廿六日病気ニ付内願之通御役御免被成候

文久元酉八月廿日御宮火消被仰付候

元治元子四月十一日御軍帳御割替二付、農兵二組酒井外記方江御附被成

候ニ付、其手江属シ外記方江厚申談致世話候様、且又農兵之儀ニ付而ハ

掛り西尾十左衛門江可申談旨

一同年四月十九日酒井外記方御用多ニ而調練出勤無之節ハ、其手之面々折

一同年六月十四日御軍制御割替二付、先達而農兵之義厚被致世話候様被仰

付置候処御免被成候

一同日大砲操練掛り被仰付

一同年十月二日御家老職見習被仰付候、但御取扱筋御家老同様、且又月番

被相勤候ニ付毎歳米五拾俵ツ、被下置候

一同年十二月賊徒一件出張、右二付御手当銀壱貫六百匁被下置候

一同二丑四月三日江戸詰出立、同年十一月廿三日帰

慶応二寅三月十五日甥酒井健次郎重キ御咎ニ付遠慮伺之上指扣、同十八

日御免

一同三卯四月廿九日屋敷地外西ノ方於土手際今度地面当分拝借、尤御用之

節ハ指上候段願之通被仰付

一同年九月廿五日定式掛り

同四辰八月十六日御家老本役被仰付、御足高弐百石被下置候

荻野

但御足高被下置候ニ付、年々被下候五拾俵之義ハ已後不被下候

明治卜改元、十月十六日実家甥酒井琢哉御咎二付、 遠慮伺之上指扣被仰

付 同十九日御免

同二巳二月十三日先般従朝廷被仰出之趣も有之御藩治職制御改革ニ付

是迄之御職務御免被成候、 席之儀芦田源十郎次

同月十四日学校御用掛被仰付候間、 幹事可申談候事

但折々御機嫌伺罷出其節々中ノ口往来可致事

御坂札壱枚被下候事

同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、 為御慰労丸御紋奉書御

綿入一ツ被下置候

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米二百八拾四俵壱斗七升壱合下賜

同月廿九日学校御用掛り被免候事

同日是迄之勤功を以優待之列ニ被仰付候事

同三午四月十五日腰痛ニ付願之通隠居

同年閏十月十五日小四郎事窓入卜改

(士族)

荻野貞三郎 午十八歳

米弐百八拾四俵壱斗七升壱合

明治三午四月十五日父小四郎腰痛二付願之通隠居被仰付、家督米弐百八

拾四俵壱斗七升壱合無相違被下、修業隊江被入候事、但席名越愿三次キ

同年閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

荻野小大膳

千石

寛文十戌三月十八日金津所司代秋田市兵衛跡

荻野治部左衛門

七百石

延宝三卯閏四月十一日父小大膳跡知七百石被下、弟彦四郎江三百石被下

同五巳十一月廿五日触頭役

貞享三寅六月一統半知三百五拾石 元禄五申七月十二日触頭御免、 御番組夜廻り被仰付

荻野彦次右衛門 治部左衛門嫡子

弐百石

元禄十五午四月廿五日父治部左衛門跡知、 病死之節弟四郎右衛門を末期

之養子ニ相願

荻野四郎右衛門 治部左衛門次男

弐百石 外役料百石

元禄十五午四月廿五日父治部左衛門拝知之内、 為分知百五拾石被下候処

宝永元申五月十一日兄彦次右衛門病中為養子跡知弐百石被下

享保一 一酉八月廿一日大番四番筆頭

同三戌三月六日御使番市村勘右衛門跡

同八卯正月廿三日御先物頭榊原六右衛門跡

同十九寅六月六日御持弓頭杉田理善跡

弐百石 役料百石

荻野四郎右衛門

初弥三左衛門

永次

寬保二戌五月廿五日養父四郎右衛門隱居、家督無相違、大番入

延享四卯十月十一日大番筆頭雨森作助跡

宝曆六子四月廿九日御使番役料百石大谷孫太夫跡

宝曆十一巳六月五日御杉形奉行江口九之允跡

明和三戌八月六日屋敷之内不締り之義有之御呵遠慮

同五子七月九日御持弓頭屋敷奉行兼、長谷部治郎兵衛跡

安永三午六月十四日御側物頭望月八郎右衛門跡

安永五申七月十五日御武具支配忍組預り

同十丑正月十五日御目付、田辺久蔵跡

天明七未三月十四日札所目付兼带

同八申五月廿二日御広式御用人

寛政二戌五月廿八日致姫様御広式御用人

荻野四郎右衛門

二百石

寛政五丑十一月十六日父四郎右衛門家督無相違、大番入

文化十酉八月廿日休息

荻野治部左衛門 鍋八郎事

弐百石

文化十酉八月廿日父四郎右衛門隠居、家督弐百石無相違被下置、大御番

組へ被入

同十二亥九月十一日若殿様御附御近習番被仰付

同十三子四月若殿様御小姓被仰付

同年江戸詰罷越、文政元寅年帰着

文政二卯江戸詰罷越、同五午年帰着

文政四巳二月五日若殿様御小姓頭取被仰付

同六未年江戸詰

同八酉年江戸詰被仰付、八月廿八日出立、同十亥年帰着

一同九戌九月七日於江戸表御近習番頭取奧御納戸被仰付、御書院番組へ被

入

同十亥十一月二日頭取其儘御膳番被仰付

一同十二丑八月十三日御目付役津田弥太六跡被仰付、御役料百石被下置

一天保三辰江戸詰被仰付、三月廿九日出立

同四巳十一月廿九日内願之通御役御免、御先物頭次席被仰付、御役料ハ

不被下

一同七申十月十六日御先物頭彦坂又兵衛跡被仰付、御役料百石被下置候

一同十一子十月廿五日御目付役横田作太夫跡被仰付、席大関新五左衛門跡

同十三寅五月十一日成瀬惣右衛門組之者御咎通候方間違、伺之上遠慮

同十六日御免

一同年六月廿日病身ニ付内願之趣も有之ニ付御役御免被成、御役料其儘御

側物頭次席被仰付候

一同十五辰四月廿日席其儘杉形御鑓奉行比企佐左衛門跡被仰付候

一嘉永二酉十一月三日御広式御用人前波忠兵衛跡被仰付候

日京都表ゟ御供ニ而帰着

同年十月十八日席其儘御役御免被成候

弐百石 荻野左十郎 安政四巳九月廿三日家屋敷訳合も有之ニ付、安部又三郎家屋敷へ替被下、 嘉永五子十二月廿七日養父治部左衛門家督弐百石無相違被下置、 文久元酉八月廿三日江戸詰出立 安政五午五月十七日江戸詰出立 同年十一月十日病死 同五子六月十七日席其儘杉形御鎗奉行川瀬次郎右衛門跡 同年閏八月二日当秋ゟ来亥春迄芝御陣屋詰被仰付候 同二戌八月七日下地御人少之折柄中将様臨時日之御登城被仰出候処、 同年十月廿八日口宣御奉書京都へ持参之御使者被仰付出立、 同三戌七月廿八日病身二付御役御免被成、 同年十二月八日御目付浅井八百里跡被仰付候 同三亥正月廿三日中将様御船ニ而御上京被遊候ニ付御供、 同年同月廿七日右御陣屋詰御免被成候 別出精相勤候ニ付金弐百疋被下置、失却之儀ハ取調之上追而可被下旨 組へ被入候 候 委細之儀ハ御奉行申談候様被仰付、 御談被成下候事 嵩必至難渋之趣相聞候二付、 荻野左十郎義今度屋敷替被仰付候ニ付而ハ、兼々諸拝借上納相 実桃井官次郎次男 同日御奉行ゟ左之通 御憐愍を以諸役所拝借上納銀之内 席御役料其儘御近習二被差置 同年三月廿五 但江戸ゟ 大御番 格 同年八月五日稲生二太夫屋敷へ替被下候 同廿七日今般殿様御立帰御上京被遊候二付御供被仰付、 同三卯二月十一日当春京都御警衛詰被仰付 同年十一月廿九日席御役料其儘御先副物頭被仰付 同年七月五日御番皆勤二付御褒詞 同年六月九日席其儘宰相様御供頭見習被仰付、 慶応二寅四月廿五日席役儀其儘役御持筒指揮役被仰付、御軍事ニ付而ハ 同年十月朔日宰相様御出坂御供出立、 同月廿九日席其儘御時宜役被仰付候、御役料之儀ハ以後不被下候 慶応ト改元、 同二丑三月廿四日大河原助之進家屋敷江替被下候 同年八月廿八日御上京御供出立、 同年八月十四日御徒頭久野猪兵衛跡被仰付、 同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、 同年十月十三日中将様御供ニ而上京 同年八月四日中将様御供頭見習末ノ番外席、 廿五日出立、十月同断帰 調練を始、 元治元子四月廿三日右御供ニ而帰 仰付候、三月十日出立、 且又今度御登坂御供被仰付、 被下置候 同廿八日出立 引受致差配候様被仰付候 四月廿三日遠慮伺之上指扣、 七月十八日帰 御道中并御滞坂中御徒頭取扱被仰付候、 夫ゟ長征、 同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰 同廿七日御免 丑 御役料五十石被下置候 且又此度御上京御供被仰付 御役料五拾石被下置候、 一月二日帰 直ニ御警衛詰被 依之御酒

但右二付是迄被下置候御役料已後不被下候

同四辰七月七日席其儘御旗奉行被仰付、 早速越後表江出張被仰付、 同九

日出立、十一月十三日帰

明治二巳二月十六日今般御改革二付御役儀御免被成、 御広間当番勤被仰

付

同年六月十九日酒井政右衛門家屋敷被下候

二月廿二日、昨七月長征出張二付十三両被下候

同年十一月廿五日今般御改革、

同三午二月十五日御法通も不弁御泓近山ニ而致殺生候儀、 更給禄米百五俵弐斗八升五合被下 心得違二付父

子共遠慮、 三月五日被免

同年四月廿五日戊辰北越出張、 軍事精励ニ付御賞典之内十石十ケ年令頒

授候事

同四未四月廿五日依願隠居

荻野か 左太郎 嘉寿保 左十郎倅 明治三午廿弐歳

〔士族〕

米百五俵弐斗八升五合

元治元子十月 長征、 丑二月三日帰

慶応三卯二月廿一日一番之補兵隊江被入候

同年八月廿九日第一級二相進候二付、花葵御紋御印被下置候

同年九月廿七日御趣意二付補兵隊御免被成候

八月 御備入、 同十四日予備隊卜唱、 十一月廿八日修業隊ト改

同四辰九月六日補兵隊ニ而会征出立、巳二月六日帰

明治与改元、十二月廿八日佐太郎事嘉寿保ト改

同三午正月廿七日剣術世話役手伝被仰付候事

同年二月十五日御法通も不弁御弘近山ニ而致殺生候義、

心得違二付父子

共遠慮、 三月五日被免

同年五月廿四日第一大隊六番小隊御雇被仰付、 給禄米十俵被下候事、 但

年給三俵

同日剣術世話役手伝被免候事

同日役配中出精之為御褒詞被成下候事

同年十二月八日常備一番隊 年給六俵十弐俵高

同四未四月朔日東京詰出立

同月廿五日父左十郎依願隠居家督被仰付、

給禄米百五俵弐斗八升五合従

前之通被下候事

同日今般家督被仰付候処、 常備第一小隊従前之通

同年十月十三日解隊、十 一日帰

同月七月十二日嘉寿保事量夫ト改名

同五申五月量夫事静 カズヲ ヤスシ

荻野

荻野理右衛門

弐拾石三人

延宝二寅三月廿七日御切米被下置、 但最前新番御扶持取御籏本武具奉行

戌十二月廿九日死去(享保三)

山形利右衛門 荻野

百石

享保四亥二月廿一日養父利右衛門跡目無相違被下

同八卯三月廿九日弓師役被仰付

延享二丑五月廿五日新知百石被下、本名荻野ニ候処於義丸様ニ指合暫く

一开门已

荻野利右衛門 政次郎

百石

宝暦三酉十月廿九日養父利右衛門跡無相違、大番入、師役

安永八亥十一月十六日山奉行雨森平八郎跡、御留守番入

天明三卯六月病死

荻野栄七郎

百石

天明三卯八月十一日父利右衛門跡知無相違、大番入、師役

寛政六寅五月病死

荻野利右衛門 金四郎

百石

寛政六寅七月五日荻野栄七郎病中願之通養子二被仰付、家督無相違、大

御番入、流義之弓後見被仰付

同十一未二月十一日師役

文化十二亥七月十八日与内立合荒川団次郎跡

文政四巳十一月廿日与内検地奉行皆川善兵衛跡、御留守番入

文政六未十一月十六日御札所奉行佐野弥三郎跡

天保二卯八月廿五日役儀其儘、格式末之番外

天保三辰八月七日御札所目付、御役料五拾石席御長柄奉行次

天保八酉正月廿九日御札所用使之者並組之者、両人心得違之儀二付御咎

有之、恐入遠慮相伺候所指扣被仰付、二月二日御免

同年五月廿四日御役御免被成御使番次席、伺之上指扣、同廿九日御免

天保十一子三月八日御留守物頭今立兵助跡被仰付

同十三壬寅十月五日御先武頭今立六右衛門跡被仰付

天保十四癸卯年十一月四日隠居被仰付

荻野利右衛門 助太郎

百石

一天保十四卯十一月四日親利右衛門家督無相違被下置、大御番組江被入、

弓師役被仰付候

一嘉永四亥江戸詰

一安政四巳四月廿二日数代師役相勤、別而近来出精太儀二思召候、依之御

目録銀五枚被下置候

一万延元申六月廿六日御番皆勤二付時服被下

文久元酉三月十一日御金奉行毛利又左衛門跡被仰付、御書院番組へ被入

候

一同二戌六月八日江戸詰出立、翌亥七月二日着

一元治元子二月廿九日御役御免被成、大御番組へ被入候

同年四月十一日御金奉行勤中役儀取斗方不埒至極之趣相聞、不調法之事

二候、依之急度も可被仰付処、御憐愍を以休息之上蟄居被仰付、倅金四

郎江家督百石被下置、大御番組江被入遠慮被仰付、父子共急度相慎可罷

一同年十二月六日今般非常之儀ニ付、思召を以於家内一家対面御免	在、金四郎上京中二付罷帰候上可申渡旨
一同年閏四月十一日京ゟ帰	一同四辰三月廿九日金四郎事秋雄卜改

荻野秋雄 文久三亥四月九日親為介抱昨年ゟ江戸表江罷出候処、 金四郎 霊岸島御屋敷仮御 (士族)

同年十月十三日中将様御供二而上京 台場当分大砲打方被仰付候

元治元子四月十一日親利右衛門御金奉行勤中役儀取斗方不埒至極之趣相 聞不調法之事ニ候、依之急度も可被仰付処御憐愍を以休息之上蟄居被仰

被仰付筈之旨 付、 家督百石被下置、 大御番組へ被入遠慮、 金四郎上京中ニ付罷帰候上

同日流儀之弓師役被仰付候 同十八日京都ゟ帰、 遠慮

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別骨折候二付、銀壱枚被下置

同年七月廿一日京都表へ出立夫ゟ長征、丑正月帰

同

一丑二月朔日賊徒警衛敦賀江出張、

同九日帰

候

慶応ト改元、閏五月晦日弓術之儀当節之形勢修行致し候向も無之稽古之 儀も不立行躰ニ付、 内願之通弓師役御免被成候、但稽古所射小屋等勝手

同年八月五日先達而弓師役御免被成候処、 従来師役致心配之段太儀思召!

銀三枚被下置候

次第取払可申事

同三卯八月廿五日御附御小姓被仰付

同年十一月二日宰相様御上京御供出立

同年同月十九日弟岩之助御咎二付伺之上指扣、同廿二日御免

同年六月四日上京、十二月十三日帰 月給六俵

明治二巳二月四日上京、巳三月六日中納言様御供ニ而帰

同年四月九日中納言樣御供東京江出立、 八月廿五日帰

同年十月四日従二位様御近習被仰付候事

但月給米是迄之通

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米六十俵四斗三升六合被下

同三午二月七日東京江出立、 未二月廿九日帰

同四未四月五日当分年給十四級 弐十弐俵壱斗八升弐合四勺

同年五月八日東京長詰被仰付、支度出来次第致出立候様被仰付候事

但家族引越之儀ハ勝手次第之事

同月廿七日御家従被免候事



荻野多次右衛門

廿石三人

享保四亥十二月五日御徒ゟ御取立三石御加増、 御普請御作事方吟味役荻

原条太夫跡

同九辰十一月廿九日二石御加増用水奉行、御留守番入

元文元酉七月五日御預所御代官高松曾右衛門跡

三人扶持無相違被下置、

無役御留守番組へ被入

山形清助 荻野 御名二指合山形ト改

弐拾石三人

寬保元酉十月廿五日養父太次右衛門跡目無相違、大番入

寛延三午七月廿三日相身躰末

荻野小左衛門

廿石三人

宝暦四戌閏二月廿二日養父清助跡目被下、大番入、相身代末

安永三午十月十七日御定之年数相満候二付順席

天明八申八月廿日番改林孫兵衛跡

寛政二戌六月十一日用水奉行坂本平左衛門跡、 御留守番入

同六寅五月廿二日御広式御用達都筑三郎左衛門跡

同十午七月廿九日御留守武具奉行田川角左衛門跡

文化五辰九月休息

荻野又三郎

弐拾石三人

文化五辰九月廿日養父小左衛門休息、 家督無相違、 大御番入

天保十亥十一月十一日休息

荻野太治右衛門 栄五郎事

廿石三人

天保十亥十一月十一日親又三郎病身二付内願之通休息被仰付、

家督廿石

安政四巳六月三日病死

荻野繁 栄五郎

[士族]

廿石三人

安政四巳七月廿三日親太次右衛門家督廿石三人ふち無相違被下置、

番無役組被入候

文久三亥五月十二日狛山城手御物頭指添扣被仰付

同年八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌、 元治元子七月朔日上京出立、 八月廿四日帰着

相

働候段達御聴、 御褒詞

同年十二月賊徒一件出張、 御手当三百匁被下置候

慶応元丑四月廿八日上京、 翌寅四月十七日帰

同年十二月廿八日繁与名恭

同二寅四月廿四日堺町戦争一件二付、 公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同三卯十月十八日御警衛増詰上京

同年十月廿五日第一級二相進候二付花葵御紋御印被下置候

同年十二月六日二条御城ゟ御下り之節暫時御供欠候ニ付伺之上遠慮、 同

十日今度非常之義二付御免

同四辰二月廿九日京都ゟ帰

同年四月五日屋敷地之内五坪四分三厘御用地二被仰付、是迄拝借致居候

十六坪之分も指上可申事

同年九月十日御警衛詰上京、巳二月六日帰

明治二巳十一月廿五日今般御改革二付、更給禄米四十弐俵六升被下

同三午五月廿四日第一大隊一番小隊入被仰付候事

一同年十二月八日常備一番隊 年給六俵

一同四未四月朔日東京詰出立

同年十月十三日解隊、十一月帰

太田

太田三右衛門

元禄六酉八月廿八日父三郎兵衛家督無相違被下

太田三右衛門 久 休

弐百五拾石 外役料百石

享保三戌三月六日養父三右衛門病身二付家督無相違

同七寅九月十三日御杉形鑓奉行熊谷小兵衛跡

同十三申九月廿九日御先物頭大関五郎右衛門跡

同十八丑正月十八日思召有之御役御取揚、大番入、遠慮

寬保三亥四月十九日御使番富田平蔵跡

延享四卯御杉形鑓奉行熊谷小兵衛跡、九月廿日被仰付

太田三郎兵衛 金三郎 丹士

弐百石

享保十五戌八月廿五日中奥御小姓被召出

同十二月廿八日奥御小姓

同十七子九月十九日新知百石

同年七月十日五十石御取上大番入、同月廿八日御暇

元文二巳四月十五日五十石御加増、

、於江戸

元文三午九月十五日重而被召出百五拾石被下、奥御小姓

同五申二月廿九日末ノ番外大宮左金吾次

同年五月廿五日御側物頭格順席五拾石御加増、馬飼料百石被下

延享三寅五月十一日御側物頭長谷部小右衛門跡御役料百石被下、飼料ハ

上ル

宝暦三酉十月廿五日養父三右衛門隠居、家督弐百五拾石被下、御役義其

儘

同四戌二月十六日御目付加藤又右衛門跡

明和元申九月廿五日百石御加増都合三百五拾石、長袴格御奉行次席

同五子四月十六日遠慮

同年七月朔日不調法之義有之、御役御取上拝知之内百五拾石被召上、大

番入、遠慮

太田三郎兵衛

弐百石 御役料百石

明和五子十二月十一日父三郎兵衛跡知無相違、大番入

同七寅八月七日御小性

安永七戌六月廿二日若殿様附御小道具方

同年七月廿四日御小性頭取

同九子八月四日御近習番頭取、御書院番入

天明二寅七月八日御書院番二番筆頭、御膳番御近習番頭取是迄之通

同五巳九月廿五日於江戸御目付助、御側物頭熊谷五郎兵衛跡、御役料百

弐百石 太田三郎兵衛 一文政五午六月十日父三郎兵衛隠居、 同年七月十八日伺之上遠慮之処、今日御免被成候 同十一子江戸詰被仰付候 同四巳十一月十一日大御番弐番之筆頭役岩上五郎八跡被仰付 天保三辰江戸詰被仰付、 同八酉年江戸詰被仰付候 来 文政五午六月十日隠居被仰付、 同十四丑十二月五日席其儘御側武頭川地忠左衛門跡、 文化十四丑正月廿一日忍之者預り、御役人席御武具支配 文化四卯正月廿四日新番頭松原四郎兵衛跡 衛門上 享和三癸亥年三月七日御目付締役松原善左衛門跡被仰付、 享和二戌十二月二日御普請奉行西村仙右衛門跡 同年七月十七日御先武頭有賀六郎右衛門跡 寛政十二庚申閏四月廿四日御役御免、 寛政八辰八月三日御奉行役山口作右衛門跡 同八申六月十五日御目付溝口郷右衛門跡、 石 へ被入 役料其儘被下置候 次郎九郎事 四月五日出立 折々御機嫌伺罷出候様被仰付、 家督弐百石無相違被下置 御先武頭次席市村勘右衛門次、 同日御預所掛り 忍預り 席土屋十郎右 大御番組 中ノ口往 御 弐百石 太田三郎平 嘉永四亥二月十三日養父三郎兵衛年寄候二付隠居被仰付、 安政四巳四月江戸詰出立 同四亥二月十三日年寄候二付隠居被仰付候 嘉永三戌正月十六日新番頭田辺五太夫跡被仰付候 同年十月十七日御旗奉行津田弥太六跡被仰付候 同三午七月八日御役御免被成御側物頭次席、 同 同年三月十四日神田橋御住居へ公方様御立寄、 弘化元辰江戸御供詰被仰付正月十四日出立、 同年江戸表へ御内用有之立帰出府被仰付、六月晦日出立、 同十一子五月十八日仮預り忍組之者へ御停止御触申通、 下之 同年十二月廿九日今般御家督御引移御用掛り出精ニ付、 同年十二月十四日今般御養子被仰出候二付御褒詞 同九戌江戸詰被仰付、 同八酉五月廿五日御目付役鈴木忠太夫跡被仰付、 同六未江戸詰被仰付候 万延元申九月十六日大御番筆頭役助秋田三五左衛門跡被仰付候 慮伺之上差扣被仰付候 相違被下置、 同二月十二日当夏御帰国御供可被召連処、来巳年迄詰被仰付候 二巳四月廿九日御預所掛り被仰付候 熊兵衛 大御番組江被入 三郎兵衛 四月九日出立 三郎右衛門 実三郎兵衛弟 御役料其儘被下置候 其節敦賀御廻り道被遊候事 御用掛り出精ニ付御褒詞 御役料百石被下置候 不念之義ニ付遠 御召御小袖 八月晦日帰着 家督弐百石無

一被

一慶応元丑十一月廿三日二ケ度大坂表へ出張ニ付願之上引上、三郎平事三 明治卜改元、十月九日御役料其儘御使番順席二被成下、 同年七月五日御番皆勤二付時服被下置候 同 同年同月廿七日大坂表江出張 慶応元丑閏五月晦日御先手御旗奉行被仰付、 同年十月十六日長征出陣、 同年九月二日御使番格二被成下、 同年六月廿七日支度出来次第早速上京被仰付、 文久二戌十一月六日来亥年江戸詰被仰付候、 文久元酉十二月八日大御番四番之筆頭役松原信太郎跡被仰付候 同二巳二月十六日御広間当番頭取被仰付、 同四辰五月廿八日席御役料其儘、 同年九月十九日帰 元治元子四月朔日於江戸表三郎平と改 同三亥十二月於江戸表三郎兵衛ト改 筆頭役被仰付 郎兵衛ト改名 候間、 儀ハ御免被成候 子閏五月晦日御先手御旗奉行被仰付 ハ不被下候 一寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、 一戌三月晦日芝御陣屋詰出立 御指図次第致出張候様被仰付 丑二月四日帰 役儀之儀ハ御免被成候 御役料之趣を以廿五石被下置、 公儀ゟ被下配当金千疋被下置候 但席其儘、 本多興之輔方へ御附属被成 詰越子五月廿三日帰 廿九日出立、 月給廿俵、 御書院番二番之 八月廿四日 御役料 役儀之 太田寿 文久二戌年親介抱願之上御陣屋詰 同年十二月十五日補兵隊被仰付今度御上京御供被仰付候、 同 同年十二月廿六日御持第一小隊指添被仰付 同年同廿四日堺町戦争一件ニ付、 同年十二月寿卜名替 同年十月十六日長征出陣、 元治元子六月廿七日京都御番士御雇被仰付、 同年十一月十九日於江戸表御上京御供被仰付、 同年九月七日御国表冶被召連候無息之面々同様被仰付、 同年四月廿二日右御雇御免被成、 同年二月十九日芝御陣屋御番士御雇詰被仰付、 同三亥正月廿四日江戸出立 同年八月廿八日母大病二付願之上帰着、 下置候 同五月廿六日芝御陣屋詰御番士御雇詰被仰付、 同年十一月十日今般御改革二付御広間当番被廃、 同年六月三郎兵衛事三郎平ト改 慶応二寅四月五日当分大関麓指添 仰付出立、八月廿四日帰着 月御供二而着 人ふち被下置候 三卯十月十八日御趣意二付指添御免被成候 寿太郎 三郎平倅 明治三午廿八歳 丑二月六日帰 公儀ゟ被下配当金千疋被下置候 是迄被下置候五人ふち已後不被下候 廿九日願之上帰切 五人ふち被下置早速上京被 同十二月御供出立、 詰中御扶持方五人扶持被 詰中五人扶持被下置候 依之役儀被免候 勤中御ふち方五 相止

子二

[士族]

九百石

内四百石与力

大宮彦右衛門

五百石 大宮彦右衛門 米百五俵弐斗八升五合、 同年五月八日御家従被免候事 同四未四月五日当分年給十四級 同年十月四日奧詰被仰付、但年給是迄之通 同年四月九日中納言様御供東京江出立、八月廿五日帰、 同四辰四月廿五日遊撃隊へ被召出五人扶持被下置候 同年十二月十五日親三郎平老年二付立替家督 同年九月朔日東京ヨリ帰 同三午三月廿日役中給禄米廿俵高二被成下候 明治二巳二月二日上京、三月六日御供帰 同年九月朔日御附御馬廻被仰付 同年閏四月七日上京、十二月九日帰 延宝四辰三月金津奉行被仰付 壱合四勺 同年十二月二日東京江出立 大宮 内四拾俵弟正人へ分禄 十弐俵高二相成候、弐拾弐俵壱斗八升

宝永五子三月十八日父彦右衛門跡知彦右衛門拝知之内四百石被下、海福

忠八へ配知百石被下、村上次

同六丑七月四日御杉成鑓奉行スキナリ

正徳四午九月廿八日御側物頭石川甚左衛門跡

享保二酉六月十九日町奉行、 与力御預

年給弐俵、

在京

同十一午三月廿一日番外席二被仰付

同廿卯正月十五日百石御加増

大宮彦右衛門

五百石

元文元辰十一月七日養父彦右衛門隠居、家督無相違、番外鈴木彦太夫次

同年十二月朔日御触頭

安永三午六月廿四日隠居

大宮彦右衛門

五百石

安永三午六月廿四日父彦右衛門隠居、 家督無相違、 席水野善左衛門次三

人下り

同年同月廿六日御触頭親彦右衛門跡

寛政二戌五月廿八日御側御用人見習磯野多宮跡、 御小性支配、格式寄合

格

同五丑八月廿九日格式寄合二被成下、御用人御奏者兼

同八辰五月廿六日御鵜支配

文化七午八月廿二日耳遠二相成候二付月番御免

五百石 大宮藤馬 渡末席へ御上ケ被成候 同七年申十月七日御鷹支配、 同五午七月廿四日御鵜支配 文政四巳四月十日於江戸御用人奏者兼 同十四丑三月十五日御用人月番打込勤 同月十二日御側役御用人見習御小性支配 牧野默也同樣御取扱被成下 被下置、 文化十三子十一月二日父彦右衛門年寄内願二付隠居被仰付、 様之御取扱被成下、 合席、 様御取扱被成下 天保十五辰五月廿三日内願之通隠居被仰付、 被仰付候 天保五午八月十九日御側御用人其儘若殿様御傅役兼帯、 天保二卯二月十九日御側御用人被仰付、 文政十亥十月十五日御書院番頭御用人兼酒井十之丞跡被仰付 天保十亥九月十三日出精相勤候ニ付、 文化十三子十一月二日年寄内願ニ付隠居被仰付、倅藤馬家督無相違、 且又彦右衛門義年来相勤候二付、 寄合席平本捨之助次席、且又彦右衛門年来相勤御召御羽織被下、 同日病死 御鵜支配御免 御足高五拾石中ノ口番被仰付 身分御取扱御中老同様席定、 御召御羽織被下置、 御召御羽織被下雨森喜雲同 席永見主殿次ニ 家督無相違 牧野默也同 引 寄 五百石 同七申正月六日当申年江戸詰被仰付、 安政五午四月八日昨年御参府御道中御供壱人二而被相勤候二付、 同五午四月廿四日当秋迄詰延被仰付候 同年九月廿一日今度神田橋御屋敷被指上、 同四巳四月廿五日江戸御供詰出立 同年八月朔日御番割御用掛り被仰付候 安政三辰四月三日江戸詰中火之御番御用相勤太儀二思召候、 同年閏七月廿四日当秋江戸詰佐野式部与致交代候様被仰付置候処、 同七寅正月十六日当秋江戸詰被仰付候 同四亥十一月十七日遠慮伺之上指扣被仰付置候処、 之 同年十二月十五日今般御前様御引移之処、 同 嘉永元申九月十五日御書院番頭格御用人御奏者兼被仰付 弘化二巳五月九日大御番頭酒井十之丞跡被仰付 天保十五辰五月廿三日親藤馬内願之通隠居被仰付、 日出立 帷子一被下置候、 御召御袴一被下置候 下置、 成候二付、 義此度病死二付早速致出立候様被仰付候、 一酉年江戸詰被仰付、 寄合引渡之席佐野内膳次被仰付 右御用掛り被仰付候 同日御人少之処出精被相勤候二付銀壱枚被下置 三月十一日出立 支度出来次第出立被仰付、 御用多相勤候二付銀弐枚被下 巣鴨ニおいて御代地御拝領被 八月二日出立 御免被成候 家督五百石無相違被 依之御目録 御召御 同十七 式部

大宮藤馬

万之丞事

(士族

同年二月廿九日詰中御書院番頭大御番頭仮御徒御馬支配仮并御留守中大

一同年十一月指扣被仰付、十二月二日御免	然儀可有之候間被取調候様、尤御右筆部屋向之義も精々御軽便ニ相成候
候	一同九月廿七日今般於公辺御便用之御変革ニ付、於此表御便用ニ相成、可
一同年七月廿六日今度於御座所御建継御普請被仰出候ニ付、御用掛被仰付	一同月十四日来亥年御省略御年限明之儀ニ付御内調掛り被仰付候
一同三卯六月廿九日殿様御縁組之儀ニ付取調御用掛り被仰付	一同八月朔日御番割御用掛り被仰付候
一同年十月十三日御中老同様被仰付	且又御軍帳定掛り被仰付候
一同二寅六月朔日大坂表ゟ早駆ニ而着、同四日折返シ出立、十月七日帰	一同廿日今度御帰国御道中御供壱人ニ而相勤候ニ付、御召御帷子一被下置、
一同年十一月十一日支度出来次第出坂被仰付、同廿日出立	一同五月十六日御供ニ而帰
一同年七月廿日御側御用人本役被仰付候	候
一同月十一日三ノ丸御座所御普請御用掛り出精御褒詞	一同七日先達而御持場替一件御用掛り出精之段、御褒詞之上三階一被下置
一同年七月二日御旗本備調練之儀申談致世話候様被仰付候	心配候段御褒詞
一慶応与改元、閏五月廿九日御軍制掛り被仰付候	一同二戌四月三日、一昨年以来横浜表江度々御人数致出張候処、右節々致
一同二丑二月廿二日御側御用人見習被仰付候	嗣
一同年十月十六日長征出立、丑二月三日帰	一同年十二月十六日今般和宮様御下向御道固ニ付、御用掛り出精之段御褒
候様被仰付翌廿一日出立、同廿七日帰着	一文久与改元、三月十九日御供ニ而出立
一同年八月廿日今度尾州様へ御調御用有之ニ付為御使被遣候、早速致出立	一同二酉二月三日為御迎江戸表ゟ帰着
満足ニ被思召候、依之御三所物被下置候	召御小袖一被下置候
一同年五月十八日宰相様御上京以来御職務中御用多之処、格別出精相勤御	一同年五月廿七日今度御判物御頂戴被遊、御礼使者被仰付相勤候ニ付、御
一元治元子四月廿三日宰相様御供ニ而京ゟ帰	御都合も有之ニ付詰其儘、来酉春御参勤御道中御迎御供詰被仰付候
一同年十月十三日中将様御供ニ而上京	一同廿八日御書院番頭御用人御奏者兼御徒支配酒井十之丞跡被仰付、且又
一同年九月廿三日賀代姫様来春御入輿御用掛り被仰付候	五枚被下置候
一同年八月十九日今度三ノ丸御普請御用掛り被仰付候	一同年四月廿一日右被仰付候処高知ニ而可相勤廉、今度藤馬相勤候ニ付銀
一同年五月廿二日御軍帳御変革ニ付掛り被仰付	一万延与改元、閏三月六日御判物御頂戴有之ニ付御礼使者被仰付候
一同三亥二月十日殿様御上京御供、三月廿五日中将様御供ニ而京都ゟ着	一同年三月朔日横浜御警衛御用掛り被仰付候
様被仰出候、依之右取調方掛り被仰付候	奥御用を初御側御用人取扱候御用取扱被仰付候

一同年十二月十五日殿様御上京御供被仰付

一同四辰正月今般勅使御下向ニ付若州筋へ出立、二月朔日帰、同二日敦賀

迄出張

一同年二月十三日御用有之二付早速上京被仰付、同十七日出立、七月十三

明治ト改元、十月五日今度幸姫様御簾中様御手許江御引取ニ付御用掛り日早駆御用ニ而罷越、同十七日早駆ニ而引返上京、九月廿八日帰

被仰付

一同月十二日上京

一同月廿二日惣御小姓并御膳番御馬廻之面々以来御側御用人支配ニ被仰付

同二巳二月十四日参政職被仰出候、以当職内務局幹事被仰出候

一月二日二人一位上学亚耳洛存占位。 女主耳区矛盾毒鸟液存占位

同年四月八日中納言様御東上後香西敬左衛門不快中并同人出立後、

丸内務局幹事御用可相勤旨被仰付

但御取扱当分少参事同様之事同年十月廿四日御家扶被仰出候事

掌政局日々参入之事

一席少参事次

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米弐百三俵五升七合被下候

一同三午十月十四日御手許之儀今一層御簡易二被遊度ニ付、御用掛被仰付

候事

一同四未二月十六日御東京御供出立、五月廿三日御供ニ而帰着

未四月五日 一九級 年給百拾三俵弐斗七升三合六勺

同年九月十八日依願免本職候事

大宮

大宮忠左衛門 初海福五郎兵衛ト云

百五拾石 外役料百石

元禄二巳九月二日表御小姓被召出、御切米被下

宝永五子三月十八日父大宫彦右衛門配知被下

正徳元卯十一月七日御小姓御免、大番入

同五未五月廿五日御膳番上月武左衛門跡

享保六丑四月二日於江戸五十石御加増、御徒頭矢野右衛門作跡

同十一午十月十八日於江戸御側物頭津田藤蔵跡

同十五戌九月五日御目付大谷儀左衛門跡

元文五申五月十六日隠居

大宮左金吾 初海福忠八

弐百石 外役料百五拾石

享保十五戌六月十五日御小姓被召出

同十八丑五月廿九日奥御小姓

同十九寅八月九日新知百石被下、中奥御小姓

元文二巳十一月廿八日御小姓御免末之番外、勤方御小姓共願取次御側役

之指図可請等

同五申五月十六日父忠左衛門隠居、家督百五拾石無相違、勤方只今迄之

通、自分知上ル

同年五月十八日番外席本多小助次、御触頭村上喜内跡、御役料百五拾石

被 下 弐百石

天明二寅正月十六日年来相勤候二付、 御役料之内五拾石本知ニ御結ひ被

大宮忠左衛門 左金吾

下

弐百石 役料百石

天明三卯十二月廿八日養父左金吾跡知無相違、 席番外白石十郎右衛門次

寛政五丑八月廿五日遠慮

文化三寅年七月十日触頭白石十郎右衛門跡、 御役料百石被下置

同十四丑正月廿一日格別之思召を以寺社町奉行被仰付、 御趣意有之是迄

寺社町奉行へ御預ケ之与力四人御城代江御預被成、 御自分役所へ出役勤

被仰付候

文政五午七月廿六日寺社町奉行御免被成、 御役料其儘被下置 御近習ニ

被指置候樣被仰付

文政七申七月三日隠居

大宮忠八

弐百石

文政七申七月三日養父忠左衛門年寄候二付隠居被仰付家督無相違、

席本多五郎右衛門次

天保五午 病死

大宮左金吾

天保五午十二月五日親忠八跡知弐百石無相違、 番外席鈴木彦太夫次

嘉永二酉十二月十一日永見与吉と令同道在辺へ罷越、不束之趣相聞候ニ

付御呵被成候、依之伺之上遠慮

安政三辰十二月廿八日家屋敷御用地二被仰付、 為代地御鷹部屋御門内西

之方二而五百五十坪被下置、 居屋敷其外建物之儀取調之上建被下候間猶

委細之義ハ御奉行御目付へ申談候様被仰付候

同六未十月十六日触頭熊谷弥門跡被仰付、 御役料百石被下置候

文久二戌十月 病死

大宮定雄 捨吉 左門 実花木壮太郎弟

弐百石

文久二戌十一月廿日大宮左金吾病中願之通養子被仰付、家督弐百石無相

違被下置、 定座番外被仰付候

同年十二月廿八日左門与改名

同三亥正月十九日今般農兵御端立二付、 一組稲葉哉五郎江御附被成候ニ

其手へ属シ掛り西尾十左衛門等へ申談致世話候様被仰付候

同年五月廿五日当亥年御参府之節農兵隊被召連候二付、 御供被仰付候

同年七月廿八日右御供御免被成候

元治元子二月廿日稲葉采女方御附属之御人数引纏、 支度出来次第上京被

番外

仰付候二付同断被仰付候、 三月二日出立、 四月十一日帰

同年四月十九日稲葉采女方御用多ニ而調練出勤無之節ハ、 松平貫之助へ

都而申談致世話候樣被仰付候

同年六月廿五日宰相様御職被為蒙候二付、早速上京諸事致心配御褒詞

同年十月十日家屋敷八軒町学問所へ替被下候

同年同月十五日長征出立、 丑正月廿九日帰

同年九月廿九日調練致世話候樣被仰付置候処御免被成候

大宮正路マサジ 同年十一月廿九日歩兵所教授方手伝被仰付、 同年七月五日依病身願隠居 同年十月五日四番遊擊隊江被入候事、但席大谷敬治次、 同年五月十六日兵学所詰被仰付 明治卜改元、九月十八日逗留中斥候御使番兼被仰付 同年十二月三日一ケ年三十両ツ、、但是迄被下候金自今不被下候 同四未四月七日右解隊被仰出候事 同年十二月 同三午五月廿四日第一大隊四番小隊入被仰付候事 同年十月二日生兵教授方手伝被仰付候事 同年七月四日左門事定雄ト改 同二巳二月十九日御備入子弟輩差配御免被成候、 同年十月廿五日出張中御使番軍事方兼被仰付 同月廿四日此度越後表江出張被仰付候子弟之面々、道中為引纏立帰出張 慶応四辰八月廿二日御備入子弟差配指添被仰付 明治二巳五月十七日生兵教授方手伝被仰付 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米百五俵弐斗八升五合被下 同日以遊擊隊生兵教授方手伝被仰付候事 事 付三両被下候 被仰付、 同廿六日出立 東郷哲吉 予備一番隊 実東郷竜雄弟 年給弐俵 明治三午十九歳 壱ケ年金十両ツ、被下候事 同月廿二日越後出張二 年給弐俵被下候 (士族)

一同三午三月四日大坂兵学寮江入学被仰付候、同十三日出立、未三月九日

帰

同年五月八日体操修業中戎服等致破損候ニ付、別段為御手当月々金十両

ツ、被下候事

同廿四日歩兵所手伝被免候処、当正月ゟ三口之割合ヲ以被下候事

但三十両之分ハ不被下候事

同日昨年解隊已来生兵教導向格別致勉励二付千疋被下候事

同四未三月廿日四等教授手伝 年給十六俵 八俵高

但歩兵掛り

十六等ノ二等

一同年七月五日養父定雄依病身願隠居、養子哲吉へ家督被仰付、給禄米百

一同日四等教授手伝

五俵二斗八升五合従前之通被下候事

但武学掛り

一同年十月十三日解隊ニ付免職

同年十二月名替哲吉事正路マサジ



大関新五左衛門

四百五拾石

貞享三寅六月十一日養父助左衛門家督四百石之半減被下

元禄十丑六月十九日御使番

宝永三戌八月九日聞番役、於江戸

大関忠兵衛

正徳四午五月廿一日長袴列

同年十二月廿六日役料百石并五十石御加增、本知三百五十石被成下

同五未七月九日御先与頭村上三太夫跡

享保二酉五月十五日五十石御加増

同七寅四月十八日五十石御加増

同十一午三月九日於江戸新番頭西尾源太左衛門跡

大関新五左衛門

四百五拾石

享保廿卯三月廿一日父新五左衛門家督無相違、大番入

元文元辰十一月七日御杉形奉行川瀬次太夫跡

寛保三亥正月十九日御先物頭波々伯部源五太夫跡

延享元甲子十月廿五日御持弓役、屋敷奉行兼東郷仁右衛門跡

大関新五左衛門 隠居

四百五拾石

宝曆四戌二月廿五日父新五左衛門跡知無相違被下、大番入

明和六丑正月十四日御使番鈴木十郎右衛門跡

安永五申三月廿日御杉形成鑓奉行松原善左衛門跡

同八亥十月廿日御先物頭松原善左衛門跡

天明四辰九月廿四日御持弓頭屋敷奉行兼加賀藤左衛門跡

寛政九巳十二月十一日御旗奉行荒川助右衛門跡

四百五拾石

享和二戌十二月二日父新五左衛門隠居被仰付、家督無相違被下、大御番

入

文化九申十二月病死

大関新五左衛門 十三郎 政太郎

四百五拾石

文化十酉二月三日父忠兵衛跡知無相違、大御番入

天保二卯十月十一日御使番役小栗助七跡

天保四巳十一月廿九日御目付役荻野鍋八郎跡被仰付候

同十三寅八月廿日御札所掛り被仰付

同年十月廿九日出精相勤候二付、長袴格御奉行次席被仰付

天保十四癸卯年八月十六日御目付御役御免、御広式御用人次席

嘉永元申年五月廿八日御広敷御用人市村勘右衛門跡

同二酉九月八日於江戸死

大関麓 石太郎

四百五拾石

一嘉永二酉十月廿九日親新五左衛門家督無相違被下置、大御番組江被入

安政五午二月廿五日大御番一番之筆頭役被仰付候

同六未五月廿五日横浜御警衛二付詰被仰付、出立

一万延元申四月十九日帰着

一同年七月十一日太田御陣屋詰中、臨時横浜へ致出張候ニ付御褒詞

一同年九月八日太田御陣屋詰中不行届之儀有之ニ付、筆頭役御免被成候

同年十二月廿八日麓与名替

同年七月廿四日当分三ノ丸御座所御門御預ケ当番被仰付、 同年十月十八日小隊頭ト被仰付候 同年六月十一日御差図次第出張被仰付置候処、 慶応二寅四月十一日本多興之輔方へ増御附属被成、 明治二巳五月廿五日御門所御警衛之儀ハ被免 同廿五日在京中不埒之趣相聞候二付御役御免被成、 同月十一日京ゟ帰 同四辰四月十四日昨冬已来格別骨折相勤候段御褒詞 同年十一月廿六日宰相様御滞京中為御備支度出来次第上京被仰付、 同 同年十月十五日長征出立、 同月廿一日御使番役被仰付候二付、 同三亥正月十九日御使番役被仰付候 同九月廿九日今度農兵御端立二付、 文久元酉九月五日砲術所世話役被仰付候 日出立 元治元子八月十四日御先物頭杉浦幸右衛門跡被仰付 御免被成候 之儀ハ御免被成候 閏四月十六日御免 尤砲術所世話役之義ハ是迄之通相心得候様 一卯三月九日長屋ゟ出火類焼等出来恐入伺之上遠慮、 支度罷在御指図次第組之者共召連可致出立旨被仰付 翌二丑正月晦日着候 西尾十左衛門申談教授手伝被仰付候、 砲術所世話役并農兵教授手伝之義 御免被成候 御使番次席被仰付候、 大坂表江出張被仰付 同十六日御免 右勤中夜廻勤 同晦 米百九拾壱俵四斗三升四合 米百拾五俵七升八合如此被下候 米百九拾壱俵四斗三升四合 大関徳蔵 同四未六月七日御布告二付不及代勤 八合 同日同姓麓重キ御咎ニ付伺之上謹慎、 候事 同年十二月十五日謹慎被免候事 同年十一月十五日兼而酒色二耽り不埒至極二付、 同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱 四斗三升四合可被下之処、幼年二付百拾五俵七升八合被下、非役江被入 年之間給禄之六割被下、 元ノ如く被下候事 午八歳 五升六合可致上納事 予備隊被入候事

置候

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米百九拾壱俵四斗三升四合被下

隠居之上重ク謹慎十ケ

家督相続之者ハ親類共可願出事

明治三午十一月十八日依同姓麓親類共願相続被仰付、家督米百九拾壱俵

(士族)

但麓江申渡候御用書面之通相心得、 給禄之内十ケ年七拾六俵三斗

同廿五日被免

同年十二月四日依願市村源蔵江代勤被仰付候、 依之給禄米百十五俵七升

同八日同姓麓不埒之儀ニ付十ケ年之間給禄之内六割被下候処、今般更ニ

同年九月廿九日多年精勤之処、

御藩制御改革二付為御慰労弐十五両被下



大関五郎右衛門

百五拾石 外役料百石

元禄二巳十月十一日父五郎右衛門跡目無相違、 父五郎右衛門御鷹方ゟ御

取立、仍之相身躰末席之処

正徳三巳八月十五日御吟味之上順席

享保二酉三月廿五日御使番井原源兵衛跡

同六丑五月十五日御先物頭葛巻治部右衛門跡、 鉄砲

大関次右衛門 初庄七

百五拾石 外役料百石

宝永六丑三月五日於江戸御部屋附御小姓被召出、御扶持切米被下

享保四亥五月十六日奧御納戸小粟九右衛門跡、 同日新知被下

同九辰八月廿六日御役御免、 大番入

同十三申八月廿五日養父五郎右衛門隠居、 家督無相違、 此節自分知上ル

同十九、七月廿一日一番筆頭

元文四未正月廿五日御役御免

延享三寅五月廿一日再大御番三番筆頭

寛延四未正月十六日御使番、役料被下、 佐々木小左衛門跡

大関彦兵衛 弥三郎

百五拾石 役料百石

延享二丑正月廿一日中奧御小姓被召出 御切米

同四卯八月廿五日御部や中奥御小姓

寛延三午十月廿五日中奥御小姓御免、 大番入

宝曆六子八月廿九日父治右衛門隠居、 家督無相違、 大番入、其身御切米

上候

同年十二月十一日御手廻御書院番入

同十一巳十月廿二日御供目付猪子六兵衛跡

明和五子七月九日御部屋付御小姓頭取

同七寅九月十四日御表御小姓頭取

同九辰六月十四日御腰物方土屋五郎太夫跡

安永四未二月十四日御徒頭渋谷五郎右衛門跡 御役料百石

同七戌十一月十九日御先物頭下山半左衛門跡

同九子十一月十一日御目付助御側物頭笹川治兵衛跡

同六午十一月十四日御武具支配忍之者預り御免

天明五巳十二月十六日御泉水預り并御武具忍之者支配

同七未三月十四日又御武具忍之者支配

大関助左衛門

百五拾石

寛政二戌十二月五日養父彦兵衛家督無相違、

同月十四日御小性見習、 山名次郎八跡

同六寅二月廿九日御小性本役被仰付

同年六月十六日御近習番御書院番入

一月廿二日御部屋附御小性

同七卯二 享和二戌十二月六日御小性頭取

百五拾石 一天保二卯十二月十六日養父助左衛門隠居、 大関助左衛門 同年同月廿九日御近習番被仰付候 同年十月廿五日今度御代替二付御役御免被成、 同年江戸詰、 同七申年江戸詰、 同十四卯八月十七日御書物方林勘十郎跡被仰付 同十一子年江戸詰、 同九戌三月廿九日御近習番被仰付、 被差置、勤方之儀ハ追而可被仰付、 同十一子五月廿日御側武頭荒川助右衛門跡 天保二卯十二月十六日隠居 文政十三寅十二月十日御武具支配忍之者預り 文政十二丑八月十三日御泉水預り被仰付 文政十二丑二月十六日御座所預り 文政十亥五月六日御普請奉行波々伯部八十八跡 文政三辰六月廿三日御先物頭東郷三郎右衛門跡 文化十三子十月二日御長柄奉行久野文四郎跡被仰付 大御番組江被入 文化十一戌二月五日御使番河津善太夫跡、 文化六巳二月七日末ノ番外、御鵜方溝口郷右衛門跡 九月三日出立 弥三郎 四月十五日出立 八月廿八日出立 彦兵衛 御用筋之儀ハ是迄之通可申談旨 御書院番組江被入 家督百五拾石無相違被下置 役料百石 御書院番組其儘御近習二 **大関直** スナヲ 百五拾石 文久元酉八月廿日太田御陣屋御番士御雇詰被仰付、 安政五午二月廿日御家流砲術所詰同様被仰付候 同二丑年二月廿二日隠居 元治元子八月十四日席御役料其儘御役御免被成候 文久二戌九月四日御脇物頭大河原助右衛門跡 万延元申十二月廿八日助左衛門与名替 同六未十月十一日御使番役飯沼源左衛門跡被仰付、 安政五午七月十一日此度桜御門頗当御普請中、 安政三辰七月朔日御留守作事奉行小嶋逸八跡被仰付 同七寅閏七月廿九日御時宜役被仰付、 同六丑七月廿六日江戸表へ出立 同五子六月九日御近習番頭取御膳番被仰付候 同年十一月三日遠慮何之上差扣被仰付置候処御免被成、今日ゟ致出勤候 同四亥年江戸御供詰 嘉永二酉三月廿三日御供二而出立 弘化三午六月廿五日奧御納戸役多喜田藤内跡被仰付候 同十五辰年五月廿三日御裏役被仰付候 詞 同年十二月賊徒一件出張二付御手当銀八百匁被下 様被仰付候 弥三郎 御徒頭次席二被成下候 格別出精相勤候二付御褒 御扶持方五人扶持被 御役料百石被下置候

同十五辰江戸詰、

正月出立歟

下置、

支度出来次第出立被仰付、

廿九日出立、戌十月二日着

(士族)

申談取扱候様被仰付候申談取扱候様被仰付候加工を開始である。由いては、国文二ケ所御台場御筒を始教授方の同年十二月廿七日大砲方頭取被仰付、且又二ケ所御台場御筒を始教授方

一同二戌四月三日太田御陣屋詰中横浜表江出張ニ付御褒詞

一文久二戌十月六日今度農兵御端立二付、西尾十左衛門申談教授手伝被仰

付候、尤砲術世話役之義ハ是迄之通可相心得旨

一同年十二月十五日中将様御上京御供御用二付江戸表江出立之処、御都合

二付途中ゟ京都へ

一同三亥三月廿五日右御供ニ而帰着

一同年十月十三日中将様御上京御供被仰付出立

一元治元子三月廿九日、一昨戌十二月江戸表江罷出中将様御供ニ而京都表

へ可罷越筈ニ而此表致出立候処、俄ニ御船行相成候ニ付途中ゟ京都江罷

出、夫ゟ大坂江為御迎罷越御供ニ而京都へ到着之処、失却も有之趣ニ付

金壱両為御手当被下置候

同年四月廿三日宰相様御供ニ而京ゟ帰

同年五月十一日在京中不行状之趣相聞、移を以御叱り

一同年六月廿五日宰相様再度之御上京中格別骨折相勤太儀ニ思召候、依之

銀弐枚被下置候

一同廿六日御含御用有之、早速上京被仰付五人ふち被下置、同廿八日出立、

九月四日帰着

一同年七月十五日在京中農兵教授方手伝被仰付

一同年十月十六日長征出立、丑二月四日帰

一同二丑二月廿二日親助左衛門年寄候二付隠居被仰付、家督百五拾石無相

違被下置、大御番組へ被入候

同廿七日家督被下候処、砲術所世話役之儀ハ是迄之通被仰付候

慶応元丑十一月四日御附御馬廻溝口兵三郎跡被仰付

同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同年六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日御供帰

慶応三卯四月十二日宰相様御上京御供出立、八月九日帰着

同年十一月二日右同断出立、辰三月廿一日帰

同四辰五月廿八日上京

明治ト改元、九月十六日中納言様ゟ御使御用ニ而下筋江京ゟ被遣候ニ付

着、翌十七日越後江出立、十月廿五日帰

同年十二月朔日御附御膳番奧之番兼定助同様被仰付

一同月十八日上京

一同二巳二月廿八日三ノ丸御近習庶務執事被仰付候事

一同年三月六日中納言様御供ニ而京ゟ帰

一同月廿六日御近習庶務執事被仰付、但信次郎様御相手振退勤被仰付

同年十一月七日御家従信次郎様御附更二被仰付候事

但五等官席桜井庄九郎上

月給米是迄之通

同月廿五日今般御改革二付、更給禄米八十弐俵壱斗弐升壱合被下

同四未四月五日当分年給十四級 弐拾弐俵壱斗八升弐合四勺

同年十月廿二日御前様御供ニ而東京へ出立

同五申五月晦日御家従被免候事

同月 弥三郎事直



小川与右衛門

三百弐拾五石

元禄元辰十二月於江戸新知百石被下候処

宝永三戌五月十六日親治兵衛家督無相違被下、 御持弓頭

正徳元卯十一月七日御目付

小川治兵衛

三百廿五石

享保六丑四月十六日父与右衛門跡知被下

同八卯正月廿三日御使番荻野四郎右衛門跡

同十三申正月十六日御預所郡奉行江口次郎兵衛跡

同十七子七月廿一日御奉行酒井六郎右衛門跡

延享元子十一月七日死

小川次兵衛 初九郎太夫 病死

三百廿五石

元文三午六月十八日表御小姓被召出

同四未七月廿日中奥御小姓

延享元子十二月廿五日養父治兵衛跡無相違、 御小姓其儘自分御擬作上ル

同二丑正月廿一日御使番岡三郎右衛門跡

宝曆二申六月廿五日御杉形奉行望月八郎右衛門跡

同六子十月五日御先物頭海福瀬左衛門跡

明和四亥九月廿五日倅代蔵不所存之趣在之候処、常々不参届儀被思召御

役御免、 末番外、 遠慮

小川牧吾

三百廿五石

明和八卯四月十一日父次兵衛跡知無相違被下、大番入

小川次兵衛

三百廿五石

天明二寅四月十六日養父牧吾跡知無相違、大番入

同八申六月十五日御使番波々伯部平六郎跡

寛政四子六月十七日杉形御鎗奉行市村市十郎跡

同九巳十二月十一日御持弓頭屋敷奉行兼、 大関新五左衛門跡

同十午十二月七日御側武頭土屋十郎右衛門跡

文化六巳二月晦日御奉行被仰付候

文化十一、十二月二日御役御免御先物頭次席

文化十二亥七月廿日先年江戸詰中御勘定所向不参届不調法ニ付、 遠慮

文化十三子四月十一日御先物頭周防長兵衛跡

文政三辰十一月十五日御持弓頭堀十兵衛跡被仰付

小川治兵衛 源五郎事 次兵衛事

三百廿五石

一文政七申七月五日父次兵衛跡知三百廿五石無相違被下置、 大御番組江被

同十二丑四月廿九日不慎之趣有之二付遠慮

弘化元辰十一月十一日御借財掛り御使番次席御役人並被仰付

小川治平 三百廿五石 文久二戌五月廿六日親治兵衛年寄候二付隠居被仰付、 同四巳八月廿一日昨廿日夜廻り当番不念ニ付、 安政三辰十月十七日病身之趣二付御役御免被成、 同年同月十七日去ル十三日塩町ゟ出火之処及大火候節、 嘉永元申五月廿八日出精相勤候二付御長柄奉行次席被仰付候 同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、 同年八月廿六日早速上京被仰付、 同年十二月廿八日治兵衛与名替 同年七月廿五日不行状之趣相聞候ニ付御番頭江移りを以御叱被成候 同七寅六月四日杉形御鑓奉行杉田小平治跡被仰付 同年七月廿日村上太仲侍御削被成、 同三亥二月十二日番頭引纏上京、 相違被下置、 同晦日御免被成候 候 同三戌六月廿九日心得違之趣相聞候二付御役御免被成、席末之番外被仰 元治元子四月九日京都表ゟ御使杉浦幸右衛門指添早駆ニ而帰着 付遠慮、 \`被入、依之伺之上遠慮被仰付候 但安政元寅十二月十八日御軍制御改正二付、 源五郎 席西川八左衛門次 大御番組へ被入候 治兵衛 同廿九日出立 三月廿五日帰着 同養母妙光院義も侍格御削 遠慮伺之上遠慮被仰付 御先添物頭次席被仰付 御役名御脇物頭与替 家督三百廿五石無 出精ニ付御褒詞 依之御酒 揚り屋 (士族) 壬申六月廿五日合禄願 同年十二月七日元家来兼吉不慎之趣二付御咎、依之遠慮伺之上指扣、同 同年十一月廿五日今般御改革、 同年八月十四日今度無役組被廃候二付中川廉蔵上江被入候 同年六月廿一日治兵衛事治平卜改 同年五月廿五日御門所御警衛之儀ハ被免 明治二巳三月廿一日御門所御警衛并夜廻勤被仰付 同四辰五月十一日今般御趣意二付無役組二被仰付 同年十月廿三日御趣意ニ付御留守番組へ被入候 同 同年十二月廿六日嚮導被仰付 下置候 慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件二付、 同 同年十月十四日長征出立、 同年八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌、 同年七月四日京都表へ出立、 被下置候 同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱 働候段達御聴、 十日被免 三卯三月十日御上京御供出立直ニ御警衛詰、 二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、 予備隊 御褒詞 丑正月帰 八月廿四日帰着 更給禄米百五拾壱俵三斗八升壱合被下 公儀ゟ被下配当金千疋同五疋被 三月朔日帰 七月十八日帰

相



小川又左衛門

三拾石五人

宝永四亥三月七日跡目被下御代官

寬保三亥二月廿九日休息

小川長左衛門 又五郎

卅石五人

寬保三亥二月廿九日養父又左衛門休息、家督無相違、大番入

寛延三午十月廿五日御代官、御留守番入

宝暦七丑三月十一日役義御免、大番入

小川七右衛門

三拾石五人

安永六酉三月十六日養父長左衛門休息、家督無相違、大番入

寛政八辰二月廿五日番改湯俣弥五右衛門跡

享和三亥九月廿日玉薬奉行栗原彦右衛門跡

文化五辰七月廿五日御祈禱奉行新海助左衛門跡

文化九申正月廿九日年寄休息

小川又左衛門 吉丘郎

三拾石五人

文化九申正月廿九日養父七右衛門休息家督無相違、 御留守番入

小川淡 長七事

文化十二乙亥年三月五日大御番入

同年十月十九日無役御留守番入

二拾石五人

文政十二丑十月廿日親又左衛門家督無相違被下置、 無役御留守番組江被

天保五午五月三日大御番組入

嘉永三戌年江戸詰

嘉永四亥五月十六日番改役吉樹源蔵跡被仰付

万延二酉三月五日御代官役藤井喜兵衛跡被仰付、 御留守番組江被入候

元治元子八月廿□日御趣意二付役儀御免被成、 御留守番組二其儘被差置

是迄出精相勤候二付銀七枚被下置候

同年十二月賊徒一件出張、御手当三百匁被下

慶応元丑十月十六日昨年御趣意二付御役御免被成候処、是迄出精相勤候

二付御書院番組へ被入、年々銀五枚ツ、被下置候

同二寅十一月三日今度御軍制御変革之御趣意二付、 御広間当番勤被仰付

明治二巳六月十七日六太夫事淡ト改

同年七月廿四日及老年候二付願之通隠居

小川静水 外吉 巳ノ十九歳

[士族]

三十石五口

明治二巳七月廿四日親淡儀及老年候二付願之通隠居被仰付、 家督三十石

小川庄兵衛 初九八郎

五口無相違被下、無役組江被入候事

但席樫尾乙之助次

同年八月十四日予備隊被仰付

同年十月二日四番遊擊隊江被入候事 席林留吉次

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米五拾五俵三升五合被下

同三午三月廿八日学校踏級生中修業隊江被入候事

同年閏十月廿五日修業列名目被廃非役卜唱

同年十二月十八日外吉事静水卜改

同五申三月十八日依願洋学教授方手伝差免事

小川

小川武左衛門

弐拾五石五人

元禄十二卯閏九月十一日父藤十郎跡目、 御扶持方被下

宝永四亥十月十八日御切米被下

小川茂左衛門

弐拾石三人

宝永七寅十一月十六日養父武左衛門跡目被下

享保六丑八月十五日御簱本武具奉行福田八郎左衛門跡

同十七子九月廿五日御代官御留守番入、落合善兵衛跡

伊惣治

廿石三人

宝暦七丑三月十一日父茂左衛門休息、家督無相違、 大番入

安永三午二月五日不宜義有之二付、遠慮

小川茂左衛門 藤右衛門

廿石三人

寛政五丑八月廿五日父庄兵衛内願二付休息被仰付、家督無相違被下置,

大番組へ被入

文政元寅八月病死

小川藤右衛門 三次郎 茂兵衛

廿石三人

文政元寅九月廿九日養父茂左衛門家督無相違、 無役御留守番組江被入候

同七申閏八月廿三日大御番組江被入候

弘化二巳十月廿九日御番改役高久官太夫跡被仰付候

安政四巳十月三日御掃除奉行土屋市兵衛跡被仰付、御留守番組へ被入候

万延元申六月廿六日御番組数度皆勤二付御紋御帷子被下置

同二酉二月十六日養子時次郎儀、兼而心得方不宜、其上不行状之趣相聞

候ニ付逼塞被仰付、且又藤右衛門儀も異見等不参届趣相聞不調法ニ付遠

猶又同日右時次郎病身二付退身願之通被仰付候

同三月五日遠慮御免

文久元酉五月廿日御広式御用達大久保喜兵衛跡被仰付候

小川真一 常太郎

[士族]

廿石三人

文久二戌三月十一日養父藤右衛門年寄候ニ付休息被仰付、家督廿石三人

扶持無相違被下置、大御番無役組へ被入候

一同年九月八日大御番無役組以来被相止候ニ付、大御番組へ被入、御番御

供御免被成候

一同三亥八月廿九日松山理左衛門家屋敷江替被下候

元治元子七月四日京都へ出立、八月 帰

一慶応元丑十二月十一日勝手向難渋ニ付御救助被成下候様ニ付、願之通被

仰付、依之是迄之番頭江預り被仰付大御番之席ハ御除、無格ニ被成候事

但右之外被仰付方ケ条、多端略之

一同三卯十一月廿五日第一級ニ相進候ニ付花葵御紋御印被下置候

同四辰四月廿九日家屋敷百軒長屋江替被下候

同年六月十七日右差支之筋歎願之趣無拠相聞候二付、元郡組裏四十軒長

屋之内ニ而被下置候

明治卜改元、十一月十六日居屋敷御用地二相成候二付銀弐拾貫匁被下置、

一同日遊撃隊江被入候

当時罷在候御長屋之義ハ御定之通銀上納ニ而被下置候

一司戶十二月十三日毀羨即上京即共出乞、己二月六日

一同年十二月十三日殿様御上京御供出立、巳二月六日中納言様御供帰

一同二巳八月十四日常太郎事真一ト改

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米四拾弐俵六升被下

一同三午五月廿四日第一大隊一番小隊入被仰付候事

一同年十二月八日常備一番隊 年給六俵

一同四未四月二日東京詰出立

一同年十月十三日解隊之処東京府御用ニ而居残り 区兵

小川 组

但御取立以前御記録ニ有之

※「剝札」末にあり

小川助右衛門

拾五石三人

安政六未正月十六日年来出精相勤候二付御取立被成、新御番格二被仰付

矣

同年十月病死、跡目小役人ニ被仰付候ニ付剝上ケ



尾高治部右衛門

三百五拾石

於松岡寺社町郡方役、御相続後

享保七寅二月廿八日仮役

同年十一月九日御加増百石被下本役、席大宮彦右衛門次

尾高治部右衛門 隠居

三百五拾石

享保十一午三月廿七日養父治部右衛門隠居、家督無相違

宝暦七丑九月廿五日御先物頭葛巻治部右衛門跡

尾高次郎左衛門 初治部右衛門

三百五拾石

宝曆十辰親治部右衛門隱居、家督無相違、大番入

明和八卯二月廿五日不慎之義有之、 御呵遠慮

安永八亥九月廿九日御使番千本長右衛門跡

天明五巳六月廿一日御水主頭香西弥右衛門跡

同九酉正月十四日御先物頭大久保助十郎跡

尾高次郎左衛門

三百五拾石

寛政二戌十月廿五日養父次郎左衛門病中養子二被仰付、 跡知無相違、

大

番入

尾高小右衛門

三百石

寛政六寅五月十一日兄次郎左衛門病中願之通養子二被仰付、 三百五拾石

之処御吟味之上跡目幼年二付、 御扶持方三拾五人扶持被下置、 御留守番

組へ被入候

同九巳六月五日新知三百石被下置、 大御番入

文化八未三月廿一日御使番中村市右衛門跡

文化十酉一月廿七日杉形御鑓奉行小林金兵衛跡

文政三辰六月廿三日御水主頭河津善太夫跡

文政五午六月十五日沢木彦左衛門跡被仰付御先物頭

文政七申六月十二日御持弓頭小川次兵衛跡被仰付

同十二丑二月病死

尾高治左衛門 勘蔵事 仁兵衛

三百石

文政十二丑四月廿日養父小右衛門家督無相違、 大御番組へ被入

嘉永三戌年江戸詰

同四亥年十月廿九日御使番役鰐淵三郎兵衛跡被仰付候

同五子十一月十八日杉形御鑓奉行荻野治部左衛門跡被仰付候

同六丑七月三日去月十二日京町ゟ出火之節、 出精ニ付御褒詞

同七寅三月廿五日御先物頭中村久蔵跡被仰付候

安政五午十一月十一日御持物頭榊原十郎太夫跡、 屋敷奉行兼被仰付候

同六未三月廿五日江戸詰出立、 同七申三月十五日御供二而帰着

文久三亥二月十日殿様御上京御供二而出立、 三月廿六日御供二而帰着

同年十月十日仁兵衛事治左衛門与名替

同十三日中将様御供ニ而上京

同四子正月十六日於京都御側物頭浅見七郎右衛門跡被仰付候

同年二月九日京都ゟ帰

元治与改元、三月十五日皆川平右衛門京都詰罷帰候ニ付、 右詰中御座所

仮預り被仰付

元治元子六月廿一日病死

尾高二平 治部之助

(士族)

三百石

嘉永六丑七月廿日此度思召を以支度出来次第江戸表江罷出、 修行御扶持方弐人扶持被下置、 猶委細之儀ハ御奉行へ可申談旨被仰付候 砲術調練致

同七寅三月廿三日品川御殿山へ出張心配罷在候ニ付、 御下緒一掛被下置

候

同四月十六日帰着

安政四巳十月十三日御家流砲術所詰被仰付候

文久二戌閏八月朔日当節柄御人少二付修行旁当秋江戸詰被仰付、

御扶持方五人扶持被下置候、 閏八月十七日出立

同年十二月廿三日来春中将様御船二而御上京被仰出候二付、

出立、三月廿五日御供二而帰着

同三亥四月二日農兵教授手伝被仰付、 砲術世話役之儀ハ是迄之通相心得

候様被仰付候

同年十月十三日中将様御上京御供被仰付出立

同年十二月廿八日来子年芝御陣屋詰被仰付、 詰中御扶持方五人扶持被下

置 御台場無息頭取被仰付候

同四子正月廿一日京都表ゟ着

同年二月十九日内海御警衛両御台場御預御免被成候二付、芝御陣屋詰御

免被成候

元治元子二月廿日支度出来次第上京被仰付、 同廿三日出立

同年三月二日在京中無息伍長被仰付

同年四月十五日京ゟ帰

同年八月十一日親治左衛門家督三百石無相違被下置、 大御番組江被入候

但家督被下候処砲術世話役之儀ハ是迄之通被仰付候

同廿日宰相様再度之御上京中格別骨折相勤太儀之段、

御褒詞之上銀弐枚

被下置候

同廿三日御使番役蜷川林左衛門跡被仰付候

同年十月十六日長征出陣、 丑正月廿七日帰

慶応二寅正月廿九日席其儘大砲物頭西尾十左衛門跡被仰付、

共召連京都詰被仰付、 四月五日出立、 十一月廿八日帰

慶応三卯十月廿七日大砲組二組御預ケ被成候

同四辰正月十日急々出張今庄二罷在帰

右詰中

同年三月廿五日組之者召連支度出来次第京都御警衛詰被仰付、 同晦日出

立

陸通り御先

同年六月十九日御役名以来大砲小隊頭ト被仰付候

明治卜改元、九月廿八日京都冶帰

同年十月九日出精相勤候二付、 大砲小隊頭席二被仰付

同二巳二月十七日部長被仰付 月給廿俵

同年六月廿日治部之助事二平卜改

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米百四拾六俵壱斗壱升四合被下候

同三午六月廿二日修業列被仰付候事

同年八月廿一日任第二大隊九番小隊半隊長

同年十二月八日職務被免非役江被入候事



小栗五郎太夫

三百五拾石

元禄六酉正月廿一日於江戸父八兵衛跡知無相違被下

宝永元申九月十七日於江戸新番頭

小栗八兵衛

弐百石 外役料百石

正徳二辰十二月五日父五郎太夫家督、三百五拾石之内弐百石被下

享保十四酉十二月五日御長柄奉行高屋猪左衛門跡、 御役料百石

元文元辰十一月七日御先物頭熊野覚右衛門跡

寛延二巳六月五日御簱奉行浅井源左衛門跡

但父五郎太夫三百五拾石之内弐百石嫡子八兵衛へ被下、 百五拾石

次男忠七へ分知被成下候処、忠七倅を五郎太夫与申此時代

享保十九寅六月御暇被下候二付、 忠七家ハ断絶

小栗八郎兵衛 助七 病死

二百石

役料百石

寛延三午十月廿五日父八兵衛隠居、家督無相違、 大番入

宝曆七丑十一月十一日大御番二番筆頭長谷部次郎兵衛跡

同十四申正月十一日於江戸御使番今村段右衛門跡、 御役料百石

明和四亥九月廿五日倅八十次郎不所存之儀在之候処、常々不参届義被思

召 依之御役御免、 末ノ番外遠慮

安永四未正月廿八日御留守物頭丹羽市左衛門跡

同五申七月十五日御先物頭吉田喜右衛門跡、 御役料百石

小栗八兵衛

弐百石

安永八亥六月廿九日養父八郎兵衛跡知無相違、 大番入

寛政八辰十月十一日大番弐番之筆頭役蠏江善右衛門跡

小栗助七

弐百石

文化三寅十月廿九日父八兵衛跡知無相違、 大御番入

同四卯正月十八日御小姓

同十酉三月五日御小姓御免、 大御番入

文化十一戌十一月十二日御裏役御書院番入

同十五寅三月五日御膳番鈴木藤吉跡

文政三辰四月朔日御膳番其儘頭取野中健蔵跡

文政九戌二月廿四日威徳院様御逝去二付御役御免、 大御番入

文政十一子年八月廿日末ノ番外御時宜被仰付候

同十三寅五月三日御使番西尾源太左衛門跡被仰付、

御役料百石被下置

天保二卯十月十一日杉形御鑓奉行市村久太郎跡

天保八丁酉七月御持弓頭屋敷奉行兼下山清左衛門跡被仰付候

天保十二丑九月七日御側物頭彦坂又兵衛跡被仰付

弘化二巳二月十九日御武具支配忍之者預り

嘉永元申十二月十日隠居

小栗環 三次郎 五郎太夫

[士族]

弐百石

嘉永元申年十二月十日親年寄候二付隠居被仰付、 家督無相違被下置、

大

御番組江被入

同年同月十一日御近習番雨森又次郎跡被仰付、 御書院番組江被入

同 一酉年閏四月五日御小姓被仰付

同年同月江戸詰被仰付、 同月十三日出立

一同五子十二月廿八日五郎太夫与名巷一同四亥年江戸御供詰

一同五二十二月十八日五良ブラギ名を

同六丑三月廿二日御供出立

同七寅閏七月廿九日奧御納戸役真田五郎兵衛跡被仰付、

御書院番組

て被

入候

但役席之儀ハ雨森藤四郎次へ被入候

一安政二卯江戸御供詰

一同五午八月廿七日江戸詰出立、同六未年(マ、)

一同六未二月三日御附御近習頭取被仰付候

一同七申三月十五日殿様御供ニ而帰着

一文久元酉三月十九日御供ニ而出立

同二戌四月十五日帰着

同年十二月七日来春中将様御上京御供御用ニ付江戸表江出立、同三亥三

月十八日親対面願之上帰切

一同三亥七月廿八日御留守作事奉行真杉所左衛門跡被仰付候

一同年八月十九日今度三ノ丸御普請御用掛り被仰付候

一同四子正月十六日席其儘御奉行役見習被仰付、御役料五拾石被下置、御

役人並、支度出来次第江戸詰被仰付候、同月廿八日出立

一元治と改元、七月八日来丑春迄詰越被仰付、丑四月廿三日帰

一慶応元丑四月廿九日御水主頭次席二被成下、御役料都合百石被下置、

向之儀ハ本役同様被仰付候

一同年七月十一日先役中三ノ丸御普請御用掛り出精ニ付御褒詞

一慶応元丑九月廿九日大坂へ出立、十月廿三日御都合も有之ニ付御国江罷

帰候樣被仰付、早速致出立候様、同廿七日帰

同年十一月廿一日大坂表へ出立、寅十月十四日帰

同二寅六月五日御奉行本役被仰付候

同年十一月廿九日種馬掛り被仰付

一同三卯七月廿六日今度於御座所御建継御普請被仰出候ニ付、御用掛り被

仰付

同年十月十六日御用有之ニ付早速上京被仰付、同十八日出立

同四辰四月朔日当秋迄詰延被仰付候

同年六月八日御趣意二付御役儀御免被成、席予備組支配上二被仰付候!

依之御役料以後不被下

一同月十一日御広敷御用人被仰付、御役料百石被下置候

一同月十六日京都ゟ帰

明治卜改元、十月五日今度幸姫様御簾中様御手許江御引取二付、御用掛

り被仰付

一同三巳二月十五日御役儀御免被成候、但席上月久右衛門上

一同月十六日守城承事被仰付、但席其儘御本丸預り之事

月給廿俵

一同年十一月廿五日今般御改革二付守城承事被廃、依之役儀被免席雨森東

四郎次

一同日今般御改革二付、更給禄米百五俵弐斗八升五合被下候

予備隊

勤

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱



小栗次右衛門

百五拾石 外役料百石

元禄十二卯七月五日養父次右衛門跡目御扶持方被下

宝永四亥十月十八日御切米被下

正徳三巳閏五月十三日御手廻

同四午十月廿五日御駕附

享保三戌三月六日新知被下

同十六亥二月十七日御腰物役

同十九寅八月九日郡奉行、役料五拾石被下、 今立権左衛門跡

寛保二戌六月廿九日御奉行、 五拾石御加增、 役料被下、熊野角右衛門跡

寛延二丑六月五日御役御免、 席物頭次

小栗伊右衛門 初十右衛門 助三郎 病死

百五拾石

延享四卯七月十九日表御小姓被召出

宝曆六子八月廿九日養父次右衛門隠居家督無相違、 御小姓其儘

同十二午四月廿九日御裏役御書院番入

明和五子七月九日若殿様奥御納戸

同七寅八月七日病身二付御役御免、 御近習二被指置

小栗次右衛門

百五十石 役料五十石

安永八亥二月十一日父伊右衛門跡知無相違、

寛政七卯二月十五日御腰物数寄方奉行、 御部屋附兼市橋万右衛門跡、

書院番入

享和三亥十一月廿日郡奉行周防長兵衛跡、 御役料五十石

文化七午年死

小栗治右衛門

百五拾石

文化七午三月十一日親次右衛門跡知百五拾石無相違被下置、 大御番組へ

被入

文政六未二月廿九日家内不締之義有之二付遠慮

同十亥江戸詰被仰付、 四月十六日出立

同十二丑八月廿五日御金奉行横井宗右衛門跡被仰付

天保二卯二月十五日、 山奉行今立六右衛門跡被仰付、 御留守番組へ被入

同年十一月十六日役向不念之儀有之、伺之上遠慮

同五午九月廿七日若殿様御腰物数寄方奉行被仰付、 表様兼御書院番へ被

入

同六未三月十六日御腰物数寄方奉行若殿様御用兼帯高田長十郎跡被仰付

候

同九戌江戸詰被仰付候

同年十二月廿八日御家督御引移御用掛り出精ニ付、 御紋御上下一被下之

同十亥六月十六日末之番外御時宜役被仰付候

同十二丑正月廿日郡奉行雨森太郎兵衛跡被仰付、 御役料五拾石被下置候

同十四卯御預所郡奉行市村勘右衛門跡被仰付候

弘化元辰十一月十一日役義其儘御先物頭次席被仰付、 御役料都合百石被

下置候、 御役人兼

御

小栗秋 百五拾石 安政三辰四月十五日養父治右衛門儀年寄候二付隠居被仰付、 文久二戌六月廿五日思召を以折々御機嫌伺罷出候様、 嘉永三戌三月十七日昨年御武具御修覆中懸り被仰付置候処、 安政三辰四月十五日年寄候二付隠居被仰付 同七申三月十五日御供二而帰着 同年十二月治右衛門与名替 同五子八月五日御武具支配其儘忍之者支配被仰付候 同年十一月廿八日御武具支配被仰付候 同年六月三日御泉水預り被仰付候 同年九月廿五日御武具御修覆中掛り被仰付、 同 嘉永元申十二月十日御側物頭小栗助七跡被仰付 同三午十月朔日、 同六未九月十六日御書物方被仰付候 同四巳六月廿日御近習番被仰付、 同年十一月廿日御武具御修覆御用出精二付、 猶又当分諸事上坂藤太夫同様相勤候様被仰付候 旨 同五子八月廿九日江戸詰出立 石無相違被下置、大御番組へ被入候 一酉閏四月五日御座所預り被仰付候 御側御用人秋田八郎兵衛申渡 秋之丞 治右衛門 御先物頭今村五兵衛跡被仰付 御書院番組へ被入候 上坂藤太夫申談念入可相勤 御紋御上下被下置 中ノ口致往来候様 家督百五十 御用多二付 〔士族〕 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米八拾弐俵壱斗弐升壱合被下 同 明治ト改元、 同年五月廿八日席其儘役儀之儀ハ御免被成候 同月十二日京都ゟ帰 同四辰四月四日昨冬已来格別骨折相勤候段御褒詞 同年十一月廿六日支度出来次第境町御警衛詰被仰付、 同年十月十八日半小隊長被仰付候 同三卯五月廿日御先副物頭高村四郎左衛門跡被仰付、 之通 慶応二寅二月五日御書院番二番之筆頭役山野十太夫跡、 同年十二月廿八日奧御納戸役被仰付候、子二月御帰国御供 同年五月七日当亥御参府御供被仰付、 同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立、三月六日御供ニ而帰着 同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱 同年六月廿一日治右衛門事秋ト改 料廿五石被下置候 元治元子八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、 御上京御供 一巳二月十六日今般御改革二付御役儀御免被成、 小栗 九月廿五日小馬印奉行伊東六郎兵衛跡被仰付 優待列 八月十七日出立、同十二月江戸ゟ 丑三月帰 御広間当番勤被仰付 十二月二日出立 席末之番外格御役 但御取扱向是迄

文久二戌六月十日御裏役国枝太兵衛跡被仰付候

百五拾石 役料百石

元禄十四巳三月五日被召出、 同月晦日於江戸御部屋御膳番

正徳元卯八月九日新知百石被下

同三巳閏五月二日五拾石御加増、 御側物頭

同四午十月七日御目付雪吹喜左衛門跡

正徳五未四月廿二日於江戸死去

小栗九右衛門 初源蔵

百五拾石 外役料百石

元禄十六未八月十三日表御小姓被召出、 其節名元井原権次御扶持切米被

正徳五未三月廿六日小栗九右衛門願之通養子ニ被仰付、 小栗源蔵ト改

同年六月十六日養父九右衛門跡目無相違被下、 奥御納戸御書院番入、此

節自分御扶持切米ハ上ル

享保亥ノ五月十六日御使番大谷儀右衛門跡

同十二未十一月十六日御水主頭中村八太夫跡

同十六亥十一月廿五日御先物頭鈴木源兵衛跡

寛保二戌五月十八日不調法有之御役御取揚、 大番入、

延享元子七月廿五日御先物頭杉浦九郎右衛門跡、 再ヒ御役料被下

小栗九右衛門 病死

百五拾石

寛延三午十月廿五日養父九右衛門跡無相違、 大番入

小栗要人 病死

百五拾石

安永三午正月廿五日親九右衛門跡知無相違、 大番入

天明二寅十月十四日御近習番御書院番入

小栗源蔵

百五拾石

天明三卯十一月五日養父要人跡知無相違、大番入

同四辰四月廿九日御部屋御小性

享和二戌九月二日格式末ノ番外、御時宜役

寛政八辰四月廿日於江戸御部屋附御小性頭取福田八郎右衛門跡

文化十酉二月十三日御使番川瀬次郎右衛門跡

御役料百石

文化十一戌十月病死

小栗要人 長四郎 左源太 九右衛門 病死

百五拾石

文化十一戌十二月十一日養父源蔵病中願之通養子二被仰付、 家督無相違

大御番入

文政十二己丑八月十三日香西太郎右衛門揚屋敷へ替被下候

小栗源蔵 万吉

百五拾石

天保八酉正月廿五日養父要人家督百五拾石無相違被下置、 大御番組江被

百五拾石 小栗諒之助 慶応二寅四月廿五日病死 同年十二月賊徒一件二付出張、 同年八月廿三日御使番格ニ被成下、御役料之趣を以廿五石被下置、 同二戌十二月十一日役儀其儘格式末ノ番外ニ被仰付候 同年十二月十一日新札引替之節出精相勤候二付、 文久元酉十一月廿九日遠慮伺之上差扣、三日御免、 同五午五月十一日御札所奉行被仰付、大御番組江被入候 安政三辰五月九日御預所御金奉行寺沢藤左衛門跡被仰付、 万延元申六月十六日御番皆勤二付時服被下 被入候 同五子年江戸詰、 嘉永二酉八月三日真杉小平次揚屋敷へ替被下候 弘化四未年江戸詰、 同十二丑年江戸詰、 元治元子八月廿八日御上京御供出立、 持被下置候、 文久三亥三月十一日当亥年芝御陣屋御番士御雇詰被仰付、 元治元子六月廿五日大馬印奉行、 候 之儀者御免被成候 友作 同廿六日引揚出立、子六月廿六日帰 凌之助 同六丑四月十八日帰着 三月廿三日出立 三月十九日出立 源蔵養子 依之御手当銀六百匁被下置候 松田三郎右衛門跡被仰付候 実尾高仁兵衛次男 夫ゟ長征、丑三月帰 御紋御上下一具被下置 但役前不参届儀有之 御留守番組 右詰中五人扶 (士族) 役儀 同四未十月十三日解隊 同年十二月八日常備二番隊押絶 同年七月廿二日第一大隊五番小隊第二後絶被仰付候事 同月廿八日従東京帰 同三午四月廿五日戊辰北越出張各所攻擊勉励二付、 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米八拾弐俵壱斗弐升壱合被下 同年十月朔日東京詰出立 同年五月廿一日支度出来次第東京詰被仰付、 明治二巳二月十六日十四番小隊分隊長被仰付、 同年六月廿五日会征出立、 同月廿五日六番後拒役被仰付、 同四辰四月三日上京御警衛詰出立、閏四月十五日帰 同年十二月廿八日凌之助事諒之助ト改 同三卯三月十日御上京御供出立直二御警衛詰、 同年六月十六日養父源蔵家督百五拾石無相違被下置、 同二寅三月十一日三番之補兵隊伍長被仰付候 慶応元丑閏五月十八日一番之補兵隊被仰付候 同年六月廿二日修業列被仰付候事 年令頒授候事 同年十月廿三日後拒役被仰付、 同年十月朔日宰相様御出坂御供ニ而出立、同三日今庄ゟ御引戻ニ而帰 両被下候、 月給十俵 外ニ千百疋 十一月十七日帰、 役中分隊長次席二被成下候 役中其隊之上席二被仰付候 一軍曹 年給十三俵 巳二月廿二日出張ニ付十三 然ル処同廿七日被免 御書院番組江被入候 七月十八日帰 御賞典之内十石廿ケ 大御番組へ被入候

同年十二月凌之助ト名替



長助兵育

小栗勘兵衛

百石

寛永十三子五月廿九日親勘兵衛跡目被下

小栗与左衛門

百石

宝永五子正月十六日父勘兵衛跡知被下

小栗仁右衛門

百石

享保十九寅十一月廿五日養父与左衛門跡知無相違、大番入

竟延元辰八月廿八日御手廻御書院番入

小栗勝三郎

百石

宝暦七丑五月廿二日養父仁右衛門跡知無相違、大御番入

明和二酉正月廿五日御手廻御書院番入

同三戌五月廿日御次詰

同七寅五月廿七日御近習番御免、大番入

寛政十一未ノ十一月十六日与内立合金子五郎右衛門跡

享和三亥八月五日小馬印奉行蜷川新十郎跡

小栗勘兵衛 仁右

百石

文化四卯二月六日養父勝三郎隠居、家督無相違、大御番入

文化十三子六月十一日病身内願ニ付休息

小栗勝之助

百石

文化十三子六月十一日父勘兵衛病身内願ニ付休息、家督無相違、無役御

留守番入

同十四丑ノ九月十四日病死

小栗二右衛門 鉄吉事 喜兵衛事 仁右衛門

百石

本文本 · 古 一 一 元 行 不 永 、 本 、 之

一文化十四丑十一月五日養父勝之助病中願之通養子二被仰付、

家督百石無

相違被下置、大御番組へ被入

文政五午十一月廿九日御小姓堀又作跡被仰付

同六未江戸詰被仰付候

同七申九月十七日表御小姓被仰付候

天保八酉江戸詰被仰付、四月十七日出立

天保十五辰十月五日表御小姓筆頭役被仰付候、高村長作跡也

弘化二巳十月十六日役儀其儘末之番外被仰付

嘉永元申九月十五日御使番格被成下、御時宜役被仰付候

一同二酉六月廿九日御留守物頭御鷹方兼帯小宮山周蔵跡被仰付、是迄周蔵

罷在候御役屋敷へ替被下候

百石 小栗矢直やナラ 一文久元酉八月廿日太田御陣屋詰御番士御雇詰被仰付、 安政五午七月廿五日当時罷在候御用屋敷地之内、弐百坪余細井春道へ被 丑七月十一日御普請奉行勤中三ノ丸御座所御普請、 文久二戌八月廿九日支度出来次第江戸詰被仰付、 万延元申六月廿一日一 同年十月十三日二右衛門与改 同年八月十九日、今度三ノ丸御普請御用掛り被仰付候 同三亥三月廿五日御供ニ而帰着 同年十二月十八日中将様御船二而御上京被遊候二付、 同年十月廿五日中将様御上京御供被仰付、 同年十月五日御普請奉行加藤所左衛門跡被仰付、 同四亥二月十三日御先物頭中村宗兵衛跡、 被下置、 枚被下置候 元治元子五月二日年寄候二付隠居 付候、 被仰付候 交替被仰付候 桜井庄九郎罷在候加賀口御役屋敷江替被下候 同廿三日御先江出立 支度出来次第出立被仰付、 猪三郎 小次郎 三寺剛右衛門家屋敷へ替被下候 廿八日出立 御役料百五拾石被下置、 御道中並御逗留中御持物頭役 詰中是迄之通相勤来春 閏八月九日出立 御用掛出精二付銀弐 陸通り仮目付被仰 御扶持方五人扶持 士族 同日 明治ト改元、 同年九月十日御警術詰上京 同四辰四月三日京都御警衛詰出立、 同三卯三月十日御上京御供出立直二警衛詰、 慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋同弐千五 同 同年十二月小次郎卜名替 同年十月十四日長征出立、 同年八月廿六日此度長州人京師乱入、 同年七月四日京都表へ出立、 同年六月廿五日宰相様再度之御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、 同年五月二日親二右衛門年寄候二付隠居被仰付、 同年八月廿一日早速上京被仰付、 文久三亥七月八日上京被仰付相止 同年十二月廿三日来春中将様御船二而御上京被遊候二付、 同年十月七日内達之訳合も有之ニ付来亥ノ春迄修行詰被仰付、 銀弐枚被下置候 元治元子四月廿三日宰相様御供ニ而帰 乊 百疋被下置候 負之世話致候段達御聴一段之事二被思召候、 扶持被下置候 大御番組へ被入候 二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、 三月廿五日御供二而帰着 十二月朔日弐番遊擊隊後拒役被仰付、 丑正月帰 八月廿三日帰着 廿二日出立 閏四月十五日帰 於御固場所戦争之砌、 三月朔日帰 七月十八日帰 依之御小柄壱被下置候 家督百石無相違被下置 役中分隊長次席二被 陸通り御先出 相働其上手 詰中五人 依之

同二戌四月三日太田御陣屋詰中横浜表江出張ニ付御褒詞

仰付候

但永見斉次

同二巳十一月御改革二付当役被免

同月廿五日今般御改革二付、更給禄米六十俵四斗三升六合被下

同三午五月廿四日第一大隊三番小隊入被仰付候事

同月十八日小次郎事矢直ト改

同年十二月八日常備三番隊江被入候事

年給六俵

同四未十月十三日解隊

同年十一月廿三日洋学修行東京へ

東京区兵

大井田

大井田新九郎

百五拾石

貞享元子十一月廿一日百石御加増、 都合三百石被成

一統半知

大井田覚右衛門

百五拾石

正徳二辰九月廿五日養父新九郎跡知無相違

享保十二未閏正月十一日大番筆頭

大井田新九郎 菊次郎

百五拾石

享保十五戌五月九日父覚右衛門跡知無相違

延享二丑七月五日大御番四番筆頭山口弥五左衛門跡

延享四卯七月七日於江戸死

大井田新九郎 勝次郎

百五拾石 役料百石

延享四卯九月十一日養父新九郎跡知無相違、大番入

明和三戌十月五日大番五番筆頭坂野八右衛門跡

安永五申三月廿日御使番大関新五左衛門跡、 御役料百石

天明四辰五月廿四日御先物頭村田十太夫跡

大井田新九郎

百五拾石

寛政三亥五月廿五日父新九郎病身二付内願之趣有之隠居被仰付、

家督無

相違、大番入

文化六巳七月十日病死

大井田喜内 多吉 新九郎 伝次郎 新九郎

百五拾石

文化六巳八月廿九日大井田新九郎病中願之通養子被仰付、家督百五十石

無相違、大御番入

同十酉三月九日御小性

文政五午六月十日御小性頭取西村仙右衛門跡

文政九戌二月十六日末ノ番外御時宜被仰付

百五拾石 大井田喜内 百五拾石 大井田新九郎 一嘉永元申正月十六日養父新九郎病身内願ニ付休息、家督無相違被下置 同七寅年三月廿三日御殿山へ出張ニ付、 同四亥年江戸詰 同六丑七月廿日此度思召を以支度出来次第江戸表へ罷出、 月帰着 同十一子十月廿五日楷五郎様御附近習番御書院番入被仰付 天保八酉七月十三日養父喜内家督百五十石無相違被下置、 表へ御使相勤 文政十二己丑七月廿三日若殿様御誕生被遊候二付、 衛門跡被仰付、 行候様被仰付、 大番組江被入 天保十四癸卯閏九月廿五日巍光院様御逝去二付御附御免、大御番入 天保七申十月十六日御籏奉行山品八十郎跡 同丑八月十三日御目付役野中健蔵跡被仰付、 同十一子七月廿日謙五郎様御側向頭取、 天保八酉ノ五月廿二日病死 幾次郎 御扶持方三人扶持被下置、 支度出来次第江戸詰 新九郎養方弟 御下緒壱懸ケ被下置候 御役料五拾石被下置、 同月廿七日出立、 御役料都合百石被下置 道中五日振ニ而御国 大御番組 砲術調練致修 同七寅年四 福山藤右 (士族) て被 同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、 同月廿二日会征出張二付為御賞金五百疋被下、 候 明治二巳二月十七日今般御改革二付御役御免被成、 同月廿五日会征出立、 同年六月十九日御役名大砲半隊長与被仰付候 同月八日京ゟ帰 同四辰四月二日昨冬已来格別骨折相勤候段御褒詞 同年十月廿七日席其儘大砲副物頭被仰付、 広間当番勤被仰付 同三卯五月廿九日格式末ノ番外ニ被仰付、 同二寅正月十六日御勘定拝借奉行御趣意銀取扱河合次郎左衛門跡被仰付 慶応元丑五月廿八日御趣意二付役御番組江被入候 同年十月十六日長征出立 文久三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立、 同年六月廿一日江戸詰出立、 同年十二月廿八日於江戸表喜内と改 安政四巳四月宿割二而江戸詰 同年同日西洋流大小砲差配役相勤候二付、 御留守番組江被入 元治元子二月廿五日上京、 同年七月九日御番皆勤二付、 万延元申五月廿五日御金奉行斎藤門太夫跡被仰付、 月十三日出立 十一月十五日帰 六月廿三日帰着 酉七月十四日帰着 時服被下置候 当冬京都御警衛詰被仰付、 金三朱被下置候 役儀ノ儀ハ御免被成候、 三月六日御供ニ而帰着 外ニ十五両、 為御慰労弐十五両被下 御書院番組江被入候 御広間当番勤被仰付

但御

十

御雇中月俸三口被下置候

置候

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米八拾弐俵壱斗弐升壱合被下

一同三午四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内十石三ケ年令

一同年閏十月廿五日予備隊名目被廃非役卜唱

一同五申二月廿五日老年ニ付養子豊へ家督

大井田豊 実河津済弟

米八拾弐俵壱斗弐升壱合

〔士族〕

無息中

文久三亥八月十三日当秋芝御陣屋詰御番士御雇被仰付、

一元治元子七月十七日帰

下置候、廿九日出立

同年十月長征出立、丑正月帰

慶応元丑五月廿八日大砲方御免被成候

同二寅十二月廿六日一番之補兵隊へ被入候、同三卯九月廿七日御趣意ニ

付御免

同四辰正月八日補兵隊被仰付、此度御上京之節御供被仰付、相止

一同年八月廿二日越後表へ早速出張被仰付、勤向之儀ハ於出張先軍事奉行

へ相伺候様被仰付、廿六日出立

一明治卜改元、十月廿九日伝吾事豊卜改、巳二月廿一日御出張御手当五両

被下置候

一同二巳二月廿四日中納言様供奉御供被仰付、詰中四番遊擊隊御雇被仰付、

一同年三月四日東京へ出立、然処御呼戻同日帰

一同年四月九日中納言様御供東京へ出立、六月十二日御人減ニ而帰

一同三午五月廿四日第一大隊六番小隊御雇被仰付、給禄米十俵被下、年給

三俵

同年十二月八日常備二番隊 年給六俵十弐俵高

一同四未六月東京へ出立

同年十月十三日解隊、十一月帰

岡

岡三郎右衛門

詰中五人扶持被

百五拾石

御先代弐百石

貞享三一等半知

但し万治元戌養父跡目被下

宝永二酉閏四月廿九日奉行職御加増、五拾石

正徳元卯十一月七日御役御免

岡三郎右衛門 半右衛門

百五拾石 役料百石

元禄六酉九月四日表御小姓被召出、御切米被下

宝永六丑八月廿五日新知百石御膳番

享保二酉四月五日父三郎右衛門跡目無相違、自分知上候

同年六月十九日御使番八田金右衛門跡

同六丑九月十五日御長柄奉行

同八卯八月六日御先物頭

同九辰九月廿九日御側物頭土屋十郎右衛門跡

岡三郎右衛門 半右衛門 隠居

百五拾石 外役料百石

享保十七子八月七日中奥御小性被召出、其節名半四郎

同九卯八月六日於江戸養父三郎右衛門跡目無相違、中奧其儘、御小姓其

1

同廿一辰五月廿一日御小道具方御書院番入

元文四未三月三日御使番役料百石、荒川助右衛門跡

延享二丑正月廿一日御先物頭久世三左衛門跡

寬延二巳六月五日御側物頭波々伯部源五右衛門跡

同四未三月廿日於江戸御目付藤田惣七跡

宝暦六子四月十三日不調法之趣在之御役御取上、末ノ番外、遠慮

同十三未二月十六日御使番御役料百石、長谷部次郎兵衛跡

同十四申二月十一日御先作事奉行山崎七郎右衛門跡

安永三午正月十六日役義出精相勤候ニ付格式御先物頭次ノ席、鈴木忠右

衛門上

同五申正月九日倅縁談取扱不参届義有之御役御免、末ノ番外被仰付、

遠

慮

岡半右衛門 隠居

百五拾石 役料百石

安永九子十二月十五日父三郎右衛門隠居、家督無相違、大番入

寛政五丑正月廿八日郡奉行榊原玄蕃跡、御役料五拾石被下、御長柄奉行

次席被仰付

同六寅正月十六日役料並席其儘、御預所郡奉行奈良太郎右衛門跡

同八辰八月三日御預所元締役奈良太郎右衛門跡、御役料百石、席大道寺

七右衛門次

岡三郎右衛門 栄吉

百五拾石

寛政十三酉二月二日養父半右衛門隠居被仰付、家督無相違、大御番入

享和二戌十二月表御小性被仰付

文政五午十月廿三日表御小姓筆頭役河合四郎左衛門跡被仰付

同十一子正月廿八日御留守作事津田源之丞跡

文政十二丑ノ八月十三日津田源之丞跡御先作事奉行被仰付、役料百石被

下置

文政十三庚寅六月三日上坂五右衛門跡御長柄奉行被仰付

天保二卯年九月廿五日御先物頭加藤武右衛門跡

同八酉年八月十六日先養子半四郎及離縁候始末、取扱方不参届趣相聞不

調法二付遠慮被仰付

岡半右衛門 八五郎

百五拾石

一天保十一子十二月五日養父三郎右衛門隠居、家督百五拾石無相違被下置

大御番組へ被入

一同十四卯年江戸詰、五月二日出立

一嘉永二酉年江戸詰、三月廿三日御供ニ而出立

一安政二卯江戸御供詰

一同五午正月十六日御金奉行三浦清右衛門跡被仰付、御書院番組へ被入候

一同年八月朔日江戸表へ出立

一同六未十一月廿四日御判物差添二而帰着

一万延元申六月廿六日御番皆勤二付時服被下

一文久元酉五月廿日御勘定拝借奉行御趣意金取扱皆川善兵衛跡被仰付、御

留守番組へ被入候

一元治元子六月廿五日格式末之番外ニ被成下、役儀之儀ハ御免被成候

慶応元丑十月四日病死

百五拾石

岡タバス

作太郎

貫一郎

文久三亥八月十三日当秋芝御陣屋御番士御雇詰被仰付、詰中御ふち方五

人扶持被下置候、廿一日出立

元治元子七月十六日御陣屋ゟ帰着

同年十二月賊徒一件出張、御手当弐百匁被下

一慶応元丑閏五月十八日一番之補兵隊被仰付候

一同年十月朔日宰相様御出坂御供ニ而出立、同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰

一同年十一月廿三日親半右衛門家督百五拾石無相違被下置、大御番組江被

入候

同二寅四月七日京都詰出立、十一月廿五日帰

一同三卯十二月十二日急々上京被仰付、十三日出立之処、御模様ニ付途中

ゟ引返帰

一同廿六日先達而今庄宿陣中他之宿所へ罷越、不作法之趣相聞遠慮、正月

七日今般非常之儀二付御免

同年十二月廿八日作太郎事貫一郎ト改

同四辰正月八日又々急々出立、九月十六日帰

明治卜改元、十二月十三日殿様御上京御供出立、巳二月六日中納言様御

供帰

同二巳八月四日後拒役被仰付 年給三俵

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米八十弐俵壱斗弐升壱合被下

一同三午五月廿四日第一大隊二番小隊入被仰付候事

一同年十二月 予備一番隊 年給六俵

一同四未四月七日右解隊被仰出候事

一同五申五月貫一郎事規

〔士族〕

岡

岡十次兵衛 仁太郎

拾八石三人

安永七戌閏七月廿五日御徒目付ゟ御取立、大番組へ被入、上水奉行松原

藤右衛門跡

天明八申八月十六日上水奉行御免

岡十郎太夫

拾八石三人

岡健蔵 実御徒岡佐五右衛門養家之弟 岡十次兵衛 拾八石三人 拾八石三人 安政二卯正月廿八日養父十次兵衛年寄候二付休息被仰付、家督拾八石三 安政二卯正月廿八日休息 文政三辰八月十五日養父十郎太夫家督無相違、無役御留守番組江被入 同年八月廿五日御右筆見習被仰付候 同七寅六月十九日御祈禱奉行丹羽十左衛門跡被仰付、 嘉永元申四月五日御籏本武具奉行大越猪左衛門跡、 同六丑三月十一日御預所御代官役久津見三内跡被仰付、 同五子八月廿八日御番割二付、年数相満候間順席二被仰付候 同三戌十一月廿日御武具御修覆御用出精二付、 同五子九月廿五日御右筆本役被仰付、 文政三辰ノ八月廿五日病身内願休息 文化十酉二月十三日御留守武具奉行坂井作兵衛跡、御留守番入 享和二戌年九月廿九日御定之年数相満候ニ付相身代末 寛政二戌三月十六日父十次兵衛休息、家督無相違、大番入 人無相違被下置、 大御番入 彦右衛門 大御番無役組へ被入候 御書院番へ被入候、 金三百疋被下之 御書院番組江被入 大御番組へ被入候 御留守番組 右ニ付七石弐 (士族) へ被 同年五月八日御家従被免候事 同四未四月五日当分年給十六俵三斗六升四合八勺、 同月廿八日御家従被仰付候事、 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾九俵四斗三合下賜 明治二巳三月廿六日月給米四俵 同四辰四月九日御書院番其儘御世譜方被仰付、 同三卯十月廿五日御趣意ニ付役御番組へ可被入処、 同年十二月十六日番改役松沢万右衛門跡被仰付候 同年十一月三日今度御軍制御変革之御趣意二付、 慶応二寅三月十一日御趣意ニ付御世譜方御右筆之儀ハ御免被成、 同年十月十五日長征出立、 同年四月三日江戸ゟ帰 同年十二月十六日江戸表江出立 同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立 文久元酉三月十九日御供二而出立 六俵也 候 同二丑四月四日御世譜方御右筆被仰付、御書院番組へ被入候 元治元子三月十三日御内用御右筆被仰付、 院番組二其儘被指置候 義ハ不被下候事 繁勤候二付御書院番組二其儘被指置候、 丑二月帰 但勤方是迄之通御世譜方也、年給六俵 御足相止 右二付是迄被下置候御足充行之 大御番組江被入候 役中御足充行弐石被下置 御広間当番勤被仰付候 年来相勤候二付御書 十四級也、 是迄者 是迄致

入扶持御足充行被下置候

「剝札」お末にあり

岡

岡小左衛門

弐拾石三人

同十五午六月廿一日御土蔵番被仰付 元禄七戌六月廿一日養父平兵衛為跡目被下

岡権之助 後菅沼平兵衛ト改

弐拾石三人

正徳二辰八月五日父小左衛門跡目被下

下卷二云菅沼平兵衛卜同体異名也

此後代す二出、但菅沼与改

大野

大野三左衛門

百五拾石 外役料百石

御先代弐百石

貞享三一統半知

宝永四亥八月十三日五拾石御加増御持筒頭

正徳元卯十二月七日御目付役

大野三左衛門

百五拾石 外役料百石

享保三戌五月三日父三左衛門跡知無相違

同十巳七月十一日大番筆頭

同十六亥正月廿六日御使番役料被下、比企佐左衛門跡

元文三午七月廿九日御先物頭大木与三右衛門跡

寬延四未九月廿九日御普請奉行本多十郎兵衛跡

大野左七郎 又六

百五拾石 役料百石

寬保三亥六月十四日中奧御小姓被召出、御擬作並之通被下

延享三寅十二月廿二日奥御小姓

寛延三午二月十一日御小姓御免、大番入

同年六月五日御庭役御書院番入

宝曆六子八月廿五日養父三左衛門隠居、家督無相違、 勤方其儘自分御擬

作上ル

同十辰六月廿二日御小道具方浅見平内跡

明和五子八月十二日御使番坂野八右衛門跡、役料百石

安永五申七月十五日御先物頭河合滝右衛門跡

同七戌八月十二日御側物頭波々伯部八太夫跡

同十丑正月十五日御武具支配、 忍組預り

天明五巳十二月十一日郡奉行沢木金右衛門跡

同八申八月廿八日御広式御用人河崎三郎助跡

寛政二戌十月十四日御役御免、御先物頭次席御役料其儘

同月十八日御先物頭原田彦八郎跡

一嘉永七寅五月十六日病身二付内願之通休息被仰付候

大野猪兵衛

寛政八辰十月四日父左七郎隠居被仰付、家督無相違、大番入

同十午十二月廿五日御部屋附御近習番寺沢藤左衛門跡、御書院番入

享和二戌ノ五月廿一日御供頭久野孫右衛門跡

同年十二月六日御趣意二付平御近習

同三亥正月廿四日御小性

文化四卯正月晦日奧御納戸、御書院番入

同七午六月廿二日御近習番頭取、御膳番小宮山伝七跡

文化十一戌七月廿日御近習番頭取、御膳番其儘御書院番壱番筆頭有賀惣

左衛門跡

文政元寅十月二日御使番跡部主計跡被仰付、役料百石被下置候

文政五午十月廿三日御先物頭波々伯部八十八跡被仰付

同十一子正月十三日御門所当番之処不念ノ由有之、閉門

大野三左衛門 本八郎

百五拾石

一文政十二丑年十一月廿九日親猪兵衛年寄候ニ付隠居被仰付、家督百五拾

石無相違被下置、大御番組江被入

一天保五午年江戸詰被仰付、二月廿六日出立

一同八酉年江戸詰被仰付、五月廿二日出立

一同十四卯年江戸詰被仰付、五月二日出立

一嘉永六丑二月十六日養子権之助義、猥りニ鉄砲致持参野先へ罷出候ニ付

遠慮被仰付候、依之三左衛門儀伺之上遠慮、同月廿六日御免

大野権平 権之助 三左衛門

〔士族〕

百五拾石

嘉永七寅五月十六日養父三左衛門義病身ニ付内願之通休息被仰付、家督

百五拾石無相違被下置、大御番組江被入候

安政五午五月十八日江戸詰出立

同六未六月十四日横浜御警衛二付詰支度出来次第致出立候様被仰付候

廿四日出立

一万延元申閏三月廿四日御判物守護被仰付帰着

一同年四月三日遠慮伺之上差扣、四日御免

一同十一日御判物無滞到着太儀之段御褒詞

文久元酉三月十八日御宿割ニ而江戸出立

一同二戌閏八月十一日大御番無役世話役栃屋政之助跡被仰付、大御番無役

組へ被入候

一同年九月八日大御番無役組被相止候ニ付御書院番組へ被入、役儀之儀者

御免被成候

一文久二戌十月六日今度農兵御端立二付、西尾十左衛門申談教授手伝被仰

付候

一文久三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立、三月六日御供ニ而帰着

一同年十月十二日中将様御上京ニ付宿割出立、同月晦日帰

同年同月廿四日於京都大御番筆頭役助被仰付、大御番役江被入

元治元子二月廿三日大御番五番之筆頭役本多門左衛門跡被仰付

同年四月廿六日江戸詰出立、九月十八日帰着

大野藤太夫

一同年十月十一日上京夫ゟ征長、丑正月帰

一同二丑二月朔日賊徒警衛敦賀へ出張、同九日帰

一慶応二寅十一月三日御趣意ニ付弐番之筆頭役被仰付

一同年十二月三左衛門与名替

一同三卯三月十日御上京御供出立直二御警衛詰

一同年四月十一日末之番外格ニ被仰付、役義之儀ハ御免被成候

一同年八月十一日帰

一慶応三卯十二月十四日席其儘御旗奉行被仰付

一明治元辰十二月廿八日権平与名替

一同二巳二月十六日今般御改革二付御役儀御免被成、御広間当番勤被仰付

一同年七月十一日瓜生三寅転宅ニ付、右地面之内表通二間奥行共拝借願之

通被仰付

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米八十弐俵壱斗弐升一合被下

優待列

同三午十月廿五日右名目被廃非役卜唱

大野

大野半平 体惣七廿五歳

十八石三人

元文三午八月廿一日御鷹匠ゟ御取立、三石御加増、新番並

延享四卯五月十三日死

拾八石三人

延享四卯七月五日養父半平跡目無相違、御鷹方父之通、新番並はめ雇

寛延三午七月廿五日新番入

安永九子十一月廿一日出精相勤候二付大番入

大野半平

拾八石三人

天明五巳五月廿九日於江戸養父藤太夫跡目無相違、大御番入、御鷹方

文化元子八月廿九日年数相満候二付相身代末

大野藤太夫 惣八

拾八石三人

文化三寅正月十六日養父半平休息、家督無相違、大御番入、御鷹方

大野宗太夫 定次郎 実竹内半蔵弟

拾八石三人

一天保十亥四月廿日病中願之通養子被仰付、家督拾八石三人扶持無相違、

大御番組へ被入、御鷹方被仰付

一嘉永七寅九月四日、御番割之節順席二被仰付

一元治元子七月四日京都表へ出立、八月廿三日帰着

一同年七月廿二日今般御趣意二付御鷹被相止候二付、御番士勤被仰付候

同年九月廿二日京都詰被仰付、詰中堺町御門御固大砲方被仰付、早速致

出立候様被仰付候、十月 出立、十二月帰

一同年十二月賊徒一件出張ニ付御手当銀三百欠

同二丑正月廿五日大砲方御免、敦賀表江出張被仰付、同廿七日出立、二 月廿三日帰 同三午五月廿四日第一大隊三番小隊入被仰付候事 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾九俵四斗三合被下

慶応元丑十月八日小荷駄造営方被仰付候

同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同三卯五月十一日御書院番組へ被入候

大野淑人 岩吉 宗太夫倅ョシト

拾八石三人

文久三亥十二月十一日近来御鷹方人少二而困窮相勤候二付、 為御手当銀

百五拾匁被下置候

元治元子

上京出立、八月廿三日帰着

同年十月十四日長征出立、丑正月帰

同二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、二月三日帰

慶応二寅三月十一日三番之補兵隊へ附属被仰付候

同年四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同三卯七月十一日御警衛詰上京

同年九月廿七日御趣意二付補兵隊御免被成候

同年十月十四日帰

同四辰正月八日補兵隊被仰付、此度御上京之節御供被仰付

同年二月五日親宗太夫年寄候二付休息被仰付、家督拾八石三人扶持無相

違被下置、 第一遊擊隊江被入候

同年四月三日京都御警衛詰出立、九月十八日帰

明治二巳三月三日東京へ出立之処、御呼戻ニ付同五日途中ゟ帰

同年四月九日中納言様御供東京江出立、六月十七日御人減二付帰

〔士族〕

同年十二月名替岩吉事淑人

同四未十月十三日解隊

同年十二月八日常備三番隊

年給弐俵

大河原

大河原助右衛門

百五拾石

享保二酉二月九日御右筆被召出

同十七子九月十九日新知百石

元文元辰九月十一日高橋伴右衛門勤方之通可相勤旨

同十九寅七月十九日御家老中御用見習、大番入

寛保二戌十二月十五日五十石御加増

宝暦五亥十一月廿九日小馬印奉行山名次郎右衛門跡

大河原助右衛門

百五拾石

宝曆十一巳十月十一日父助右衛門隠居、 家督無相違、

大河原助右衛門

百五拾石

明和九辰四月廿九日養父助右衛門跡知無相違、 大番入

安永七戌閏七月廿五日御近習番御書院番入

同九子十一月廿一日御小性

天明二寅十月十四日御近習番御供頭御小道具格、御書院番入

同七未三月十四日御形合被相改万端御省略二付役義御免、大番入

同八申五月廿二日御部屋附御近習番御書院番入

寛政二戌九月六日於江戸御附御近習番御供頭

同六寅八月廿八日於江戸奥御納戸格

同十一未九月十六日席其儘御近習番御供頭加藤又右衛門跡被仰付

同十二申二月廿九日中将様御附御不用二付御免被成、大御番入

享和元酉六月廿九日御附御近習番御用人支配

同二戌十月十六日末ノ番外御時宜役

文化七午八月廿二日大馬印奉行丹羽市左衛門跡

同十酉二月十三日隠居

大河原次郎助

百五拾石

文化十酉ノ二月十三日養父助右衛門隠居、家督無相違、大御番入

大河原助之進 第八 助右衛門

百五拾石

一文政十三寅十二月五日親病身二付休息被仰付、家督無相違被下置、

番組江被入

一天保十三寅年江戸詰被仰付、三月廿二日出立

一弘化二巳年六月十六日大御番三番之筆頭役川村藤十郎跡被仰付

一同四未年江戸詰被仰付、三月出立

嘉永七寅正月十四日江戸表へ出立

一同年七月九日御使番役大谷半平跡被仰付、御役料百石被下置、

詰罷越候迄、大御番筆頭役相勤候様被仰付候、然ル処閏七月廿四日帰着

文久元酉六月三日御脇物頭山田次郎太夫跡被仰付候

同二戌九月四日御先物頭川瀬次郎右衛門跡

同年十二月廿八日助之進与改名

元治元子二月廿日支度出来次第組之者召連上京被仰付、廿五日出立、八

月廿五日帰着

一同年三月十日当分六条通用門預り被仰付候

一同年八月廿七日席御役料其儘御役御免被成候

一同年十月三日京都詰中不容易御時体ニ有之候処、致心配候ニ付御酒被下

置候

一同年十一月十六日御先物頭勤中、京都堺町御門御固場所へ組之者召連出

張之節、騒乱中致差配候儀御褒詞

一同年十二月賊徒一件二付出張、依之御手当銀八百匁被下置候

同二丑三月十一日席御役料其儘金津定番近藤八右衛門跡被仰付、金津御

役屋敷江

一慶応二寅四月廿四日堺町争乱ニ付、公儀ゟ被下配当金千弐百疋、戦功ニ

付五百疋被下置候

同三卯六月十七日支配組之者共放発調練等之儀、野村彦太夫申談厚引立

致世話候樣被仰付

一同年八月五日年寄候ニ付隠居被仰付

大河原他家六 助之進次男 [士族]

百五拾石

元治元子十二月賊徒一件出張、御手当弐百匁被下

- 慶応元丑閏五月十八日三番之補兵隊被仰付候
- 同二寅三月十一日右御免被成候
- 同年五月廿五日兄欣吾病死二付願之通嫡子二被仰付候
- 同三卯二月廿一日一番之補兵隊江被入候
- 同年八月五日親助之進年寄候ニ付隠居被仰付、倅他家六へ家督百五拾石
- 無相違被下置、 大御番組へ被入候、右ニ付家屋敷荻野左十郎家屋敷へ替

被下候

同年十一月廿六日宰相様御滞京中為御備上京被仰付、 同廿九日出立

同四辰四月十日帰

同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、 巳二月廿二日出張ニ付十三

両被下候、外五百疋

明治二巳十一月廿五日今般御改革、更給禄米八十弐俵壱斗弐升壱合被下

同三午四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励ニ付、御賞典之内十石十ケ

年令頒授候事

同年五月廿四日第一大隊四番小隊入被仰付候事

同年十二月 予備一番隊 年給弐俵

同四未四月七日右解隊被仰出候事

大河原

大河原作左衛門

弐拾石四人

元禄十四巳六月三日御取立

享保七寅年順席

大河原清助 初金右衛門 金三郎

十八石三人

享保十一午三月廿一日父作左衛門休息、家督無相違、大番入

寬保二戌八月十三日五石一人扶持御取上逼塞、 遠慮

明和五、十月十一日御留守武具奉行中山十兵衛跡、御留守番入 宝曆二申十一月廿二日三石御加増、 番改成瀬平左衛門跡

大河原清右衛門

拾八石三人

明和九辰十一月廿日父清助跡目無相違、大番入

天明元丑十一月廿日御留守武具奉行安原利左衛門跡、 御留守番入

同五巳八月廿日表御納戸木内三太夫跡、大番入

寛政五丑九月朔日御籏本武具奉行本儀長蔵跡、 御書院番入

享和二戌七月廿日御代官吉倉茂右衛門跡、御留守番入

大河原作左衛門 太郎吉

拾八石三人

文化五辰二月五日親清右衛門家督無相違、大御番入

文政十二丑九月廿日御番改岡田金左衛門跡

翌年六月五日内願二付退役

大河原作左衛門 作吉事

拾八石三人

一天保八酉九月十一日親作左衛門家督拾八石三人扶持無相違被下置、無役

御留守番組へ被入

一同十二丑四月廿八日大御番組へ被入

一嘉永六丑三月十一日番改役藤井喜兵衛跡被仰付

一万延元申六月廿六日御番両度皆勤ニ付御紋御帷子被下

文久二戌三月十一日出精相勤候ニ付銀五枚ツ、年々被下置候

同年九月十二日病死

大河原作之助 忠蔵

拾八石三人

文久二戌十一月三日養父作左衛門家督拾八石三人扶持無相違被下置、大

御番組へ被入候

同年十二月廿八日作之助与名替

一同三亥二月十二日番頭引纏上京

同年八月廿六日早速上京被仰付、同廿九日出立

元治元子四月廿三日宰相様御供ニ而帰

一同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、依之御酒

被下置候

一同年七月四日京都表へ出立、八月廿三日帰着

一同年八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌、

働候段達御聴、御褒詞

一同年十月廿三日長征出立可致処、不快ニ付居残

一同年十一月十六日京都騒乱之節相働候儀一段之事二被思召候、且手負候

二付為御手当金三百疋被下置候

一同二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、二月廿三日帰

慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋手負ニ付

弐両弐歩被下置候

同三卯三月十日御上京御供出立、直二御警衛詰、七月十八日帰

同四辰四月三日京都御警衛詰出立、閏四月十五日帰

同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、巳二月廿二日出張二付十三

両被下候、外千五百疋

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄三十九俵四斗三合被下

一明治三午四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励ニ付、御賞典之内十石廿

〔士族〕

、被下同年六月廿九日銃創全快不致趣二付優待列二被仰付、

ケ年令頒授候事

同年閏十月廿五日優待列名目被廃非役卜唱

一同四未十一月廿五日療養中年々五十両ツ、被下候処、現米十二石五斗ツ

、二引直シ被下候事



大木与五右衛門

百五拾石 外役料百石

相

元禄十四巳十二月七日奥御小姓被召出、御切米

療養中金五十両ツ

宝永四亥十一月十三日新知百五拾石

正徳元卯十一月七日御小姓御免

享保五子七月廿一日大御番一番仮筆頭下山半左衛門跡

同六丑三月五日大御番四番仮筆頭加藤所左衛門跡

同年五月廿一日大御番二番筆頭渥美新右衛門跡

同九辰十二月廿一日御使番熊野角右衛門跡

同十七子正月十九日御先物頭山元右衛門八跡

元文三午七月廿九日御側物頭大井三右衛門跡

同五申閏七月九日御目付渥美跡

寬保二戌六月朔日御預所御目付高村四郎左衛門跡

延享二丑正月廿一日御役御免、御先物頭次席中村太郎左衛門次

寛延二巳六月五日御先武頭小栗八兵衛跡、御役料百石被下

大木与五右衛門

百五拾石

宝曆二申七月廿二日養父与五右衛門家督無相違、大御番入

大木与右衛門

百五拾石

宝曆八寅十月十一日父与五右衛門跡知無相違、大番入

明和三戌七月七日表御小性

同七寅六月廿四日若殿様御小性

天明三卯四月廿九日若殿様御膳番御近習番頭取、御書院番入

同八申十月十五日格式末ノ番外、役義ハ御免被成、御時宜役之方御供可

相勤旨

寛政二戌十一月廿一日御徒頭仮り役杉田孫一郎跡

寛政四子七月三日御使番坂井権左衛門跡、御役料百石

同八辰十月四日御水主頭稲生与一郎跡

同十午十一月五日不調法之儀有之御役御免、格式末ノ番外中村市右衛門

次

文化元子六月十九日御使番下山半左衛門跡、役料百石

同六巳二月晦日御長柄奉行西尾五右衛門跡

文化十酉二月七日隠居

大木与五右衛門 亀三郎

百五拾石

文化十酉二月七日父与右衛門隠居、家督無相違、

大御番入

文政八酉正月廿二日御金奉行内田作兵衛跡

大木与右衛門 又次郎

百五拾石

一文政十一子年十月九日父与五右衛門家督百五拾石無相違被下置、大御番

組江被入

一天保五午年江戸詰被仰付、四月十五日出立

同八酉年江戸詰被仰付、四月十六日出立

同十二丑年江戸詰被仰付、三月廿二日出立

弘化四未年二月十四日与内検地奉行吉田茂左衛門跡被仰付、御留守番組

江被入

大木本弥 百五拾石 同四巳七月廿日粟田部外塾明道館外塾之趣二被仰付、 安政二卯四月三日学問所定詰被仰付、 同四巳二月五日末ノ番外御時宜役被仰付候 安政三辰三月十五日御勘定拝借奉行御趣意金取扱、 嘉永二酉年十二月十一日山奉行加藤半右衛門跡被仰付候 同年七月十一日矢嶋徹之介江戸留守中右塾江罷越、 同六未六月廿五日年来学問相心掛候ニ付銀五枚ツ、年々被下置候、 同三辰四月廿一日明道館役掛り出精、 同年五月廿九日講究師被仰付候 同月廿五日右同断之処、 同六未八月廿一日病死 同六丑三月十一日与内検地奉行吉田伊兵衛跡被仰付 被成下候処、 罷越当分是迄之通、 奉行

方も同様相願無拠趣ニ付定

詰御免被成、 候様被仰付、 学度内存有之趣二付、 嘉永二酉五月廿五日思召を以朱学純粋之儒者御求被遊度折柄、 付候 道館江も折々可罷出候事 紙壱束御袴地 本之丞 御合力金拾五両被下置、 内願之通右勤向御免被成候 一被下置候 三寺三作 猶又致教諭候様被仰付、 自分修行旁上方筋へ罷越心当之者在之候ハ、申達 粟田部村ニおゐて教諭致来候上者、 実三寺剛右衛門弟 勤中御扶持方弐人扶持被下置候 六月十日出立 其上在々生徒引立候趣二付、 御扶持方之儀ハ不被下旨 同所詰被仰付候間彼表江も 生徒引立候様厚申談 加藤半右衛門跡被仰 御取扱外塾師同様 歎願之趣郡 兼而致遊 〔士族〕 但明 美濃 明治二巳八月十四日今度無役組被廃候二付、 同年八月十六日無役組、 付 同年五月十一日今般御趣意ニ付無役組へ可被入之処、 同四辰正月七日御留守番組江被入候 帰 同三卯十二月十二日急々上京被仰付、 同年十二月廿六日什長被仰付 慶応元丑閏五月十一日明道館学諭御免被成候 同三亥三月九日江戸詰出立、 同戌九月十七日帰着 文久元酉八月廿日当節柄御人少二付、 同年九月朔日此度御番割有之候処、御番士人少二付当分当務繰合セ御番 同年十一月十六日外塾勤中御番御供御免被成候 相違被下置、 同年十月十一日大木与右衛門病中願之通養子ニ被仰付、家督百五拾石無 慶応二寅四月八日京都詰出立、 元治元子十月十五日長征出立、 万延元申四月朔日明道館学諭被仰付候 相勤候様被仰付候 戸留守中右塾へ罷越生徒引立之儀ハ其儘被仰付候 候銀五枚之儀ハ以後不被下、当年之分ハ被下置候旨、 候様被仰付候 江被入候 御留守番組二其儘被指置候 大御番組へ被入候、 同新御番組同新御番並組世話役被仰付、 子五月廿三日帰 十一月廿五日帰 丑二月二日帰 且又年来学文相心掛候二付年々被下置 十三日出立之処御模様ニ付引返シ 支度出来次第修行旁江戸詰被仰付 役儀被免御広間当番勤被仰 御広間当番勤被仰 将又矢嶋徹之介江 無役組

付、元御書院番組席二被仰付候事、但席中村仲次

同月廿七日訓蒙被仰付候事

但自宅

月給米一年分八俵被下候事

源五郎八郎次

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米八拾弐俵壱斗弐升壱合被下

同月廿七日御改革二付役儀被免

同年十二月二日訓蒙被仰付候事 未正月年給廿八俵

同三午閏十月 第六塾掛リ、新屋敷通リ伺ニ而如此

一同四未九月二日第六塾教官

同年十二月十六日免職

同五申五月本之丞事本弥

大井

大井弥十郎

百五拾石 役料百石 外五拾石御足

延享三寅七月廿五日中奥御小姓被召出

寛延三午二月十一日中奥御免、大番、御代替ニ付御小姓御免、

被差置

同四未正月十六日表御小姓

宝暦五亥正月十六日中奥

同八寅四月十七日御免

同五月廿八日中奥

明和二酉二月廿日新知百石

同三戌八月六日御徒頭加藤半左衛門跡、役料百五拾石

同五子七月六日江戸御留守居横田作太夫跡

安永二巳五月十九日河合権右衛門次席被仰付

同五午十一月五日小林又右衛門跡、但御預ケ

同六酉四月八日五十石御加増

同八亥七月十日御足高五十石

天明五巳六月十五日於江戸御預所郡奉行河津孫十郎跡表郡次席被仰付、

御国引越

天明七未三月十四日御形合被相改万端御省略二付御役御免被成、役料其

儘、御先物頭次席

同年九月廿五日御先物頭数賀山彦右衛門跡

同八申八月十日郡奉行栃屋八左衛門跡

寛政二戌正月廿日支配下取扱不参届義有之御役御免、

席御使番次席、

遠

慮

同三亥五月廿五日御先物頭大井田新九郎跡、役料百石

大井長十郎

百五拾石

御近習ニ

天明元丑十二月五日若殿様御相手銀十枚被下

同四辰三月十三日若殿様御小性見習

同五巳六月十五日御表御小性見習

同六午十月廿四日御合力銀五枚御増被下

寛政五丑正月廿八日御趣意有之父子勤被相止候二付、父弥十郎隠居被仰

子之上弐枚御増、

都合七枚御内々年々被下置候、

□原集鹿同様之御取扱

ト改

弥十郎

役人並 同十一子正月廿八日同元締役長谷部小右衛門跡 文政九戌十一月十六日出精相勤候二付長袴席御広敷御用人次 同十酉三月四日御先物頭服部長三郎跡、 同年十月廿日家敷被下 渡、 同六巳八月廿一日隆徳院様御逝去二付御国元江家内引越被仰付 同十三酉正月廿四日御附御膳番格御近習番原之通 同十二申正月廿三日家内引越定府 同十一未九月十八日御用人支配 同十一己未二月廿八日於江戸表御小性頭取被仰付 無相違被下置、 天保三壬辰十一月廿八日年来出精相勤ニ付銀五枚ツ、年々被下、 文政十二己丑十一月十六日出精相勤候二付御奉行順席被仰付 同十二亥正月廿七日御預所郡奉行佐々木藤左衛門跡、 同年十月五日郡奉行役料五拾石、 同四卯三月十五日御使番格、金十両宛年々被下、役其儘 文化二丑五月十三日奥之番末ノ番外席柄田与次内次 同年八月四日御附近習番頭取御膳番 天保八酉二月廿五日病身内願之通隠居被仰付、 上下被下 寺沢藤左衛門跡下領被仰付、 大御番組へ被入候、長十郎隠居被仰付ニ付是迄被下置銀 役上坂与三右衛門跡ニ候得共領替被仰 尤是迄被下候金拾両ハ以後不被下 役料都合百石 倅留之助へ家督百五拾石 席御側物頭次、 御紋御 御 百五拾石 大井弥十郎 百五拾石 大井留之助 天保九戌十一月十一日養父留之助病中願之通養子二被仰付、家督百五拾 同四亥年江戸御供詰 同年江戸詰、 同 同年十二月十日御小姓頭取定助被仰付候 嘉永元申六月急御出府御供二而出立、 同四未年江戸詰 弘化二巳年江戸詰、 同十五辰正月十三日江戸詰御供ニ而出立、 同十四卯七月廿二日御小姓蜷川長助跡被仰付候 相違被下置、 同五子九月十五日公儀御出生様松平長吉郎様御名二指合候二付、 同年三月廿九日御小姓被仰付 月七日御褒詞 石無相違被下置、 天保八酉二月廿五日親長十郎病身内願之通隠居被仰付、 一酉二月十三日御小姓頭取被仰付候 曾弥次郎 三月廿三日御供二而出立 大御番組へ被入候 大御番組へ被入 三月廿一日御供二而出立 長太郎 実平本石熊養弟 同七月御供ニ而帰着、 同年五月御供二而帰着

同六寅五月廿九日御近習番御書院番入

付

家督無相違、

御小性本役被仰付

被成下候

家督百五十石無

(士族)

右ニ付十二

一同年九月十六日郡奉行萩原金兵衛跡被仰付、御役料五拾石被下置候一同六丑三月廿二日御供出立、同年十月五日帰着

一同年十月五日上領郡支配被仰付候

安政二卯九月廿三日御目付役海福猪兵衛跡被仰付、

御役料都合百石被下

置候

一同年同日転役被仰付候得共、国兼瓜生野村山論之儀多年落着ニ及兼候処、

先達而ゟ追々御調寄ニも相成候儀ニ付、万事是迄之通被相心得郡方役所

及落着一段之事二付御褒詞

并場所等へも罷越取扱候様被仰付候、

同十月廿九日右年来之出入致出精

一安政三辰二月十九日江戸御留守詰出立

一同三辰五月十七日御発駕後火之御番御用相勤太儀思召候、依之銀壱枚被

下置候

一同四巳閏五月十一日思召を以席并御役料其儘、郡奉行笹川藤内跡被仰付、

御役人之義是迄通被仰付、御城代支配ニ不及旨被仰付候

一同五午十月十八日今度北国筋湊々見分為御用公儀御役人被罷越候二付、

右御用掛り被仰付候、同十二月十八日右出精ニ付御褒詞

一同年十一月十一日御預所郡奉行兼勤之義ハ御免被成侯

一文久元酉四月廿日御軍帳役人夫改定掛り被仰付候

一同年十一月十六日御勝手向之儀も御奉行共へ申談候様被仰付候

一同二戌正月 支配下御褒美伺之儀ニ付間違有之、遠慮伺之上指扣、二

月朔日御免

一同年五月十七日御用向有之支度出来次第立帰出府被仰付候

一同月十八日中将様御附御側向頭取被仰付、同日右ニ付江戸詰被仰付候間、

早速出立致し候様被仰付、翌十五日出立

同年十月廿五日中将樣御上京御供被仰付候

一同三亥正月廿三日御船ニ而御上京被遊候ニ付御供、三月廿五日御供ニ而

帰着

一同年六月四日御手元ニ被指置候而ハ御為筋ニ不相成趣達御聴候、依之御

役御免被成御先物頭次席ニ被仰付、伺之上遠慮、同十三日御免

同四子正月十六日御奉行役被仰付、御役料百石被下置候

同年二月廿日席其儘御目付役、且又支度出来次第上京被仰付、滞京中公

用人兼带被仰付、廿五日出立

元治与改元、五月十日御両君様御官位御昇進二付、伊勢八幡御代拝相勒

帰着

一同月十八日御奉行役被仰付且又御用弁之訳も有之ニ付郡方之儀も厚申談

候様被仰付、将又当春上京以来御内用向心配被相勤候ニ付思召を以三骸

被下置候

一同年五月廿二日三ノ丸御普請御用掛り被仰付候

一同年十月八日上京、夫ゟ征長、十二月廿二日帰着、又々丑正月四日京都

へ出立、二月廿五日帰

一同年十二月賊徒一件之節御留守御用相勤候二付、御手当弐百六拾六匁被

下

一慶応元丑七月十一日三ノ丸御普請御用掛り出精御褒詞

一同年十二月九日遠慮伺之上指扣、十一日御免

同二寅十月十三日御趣意二付以来評議席江罷出御用申談候様被仰付

一同三卯七月三日殿様御縁組之儀ニ付取調御用掛り被仰付

同年七月廿六日今度於御座所御建継御普請被仰出候二付、御用掛被仰付

同年十二月十二日急速上京被仰付、十三日出立、廿日帰

同四辰正月九日上京、 廿二日帰

同廿四日今般勅使御国中御通行之節 御馳走附被仰付候

同年三月十二日御札所掛り被仰付

同年四月五日北陸道惣督御通行之節心配相勤候ニ付、 御召御袷 一被下置

候

同年五月四日席御役料其儘御役儀御免被成、 御近習二被指置候

明治二巳二月十六日御改革二付、 御役料被廃候

明治二巳二月十七日年来勤功有之二付、 為御慰労年々五十金ツ、被下置

候

同年十一月廿五日今般御改革二付、 更給禄米八十二俵壱斗弐升壱合被下

優待列

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

同日非役上席、 但軍務寮支配之事

織田

此前代つに出、 但津田与号

織田半左衛門 休

百石

享保十二未八月七日養父繁右衛門跡無相違被下、

元文三午六月十八日御手廻御書院番入

同五申五月十八日御供目付、 永田四郎兵衛跡

同年八月朔日新知百石

宝暦四戌三月廿二日御書物奉行中村庄左衛門跡

織田半左衛門

百五拾石 役料百石

宝暦十四申三月廿九日父半左衛門休息、 家督無相違、

安永五申七月十五日御近習番御書院番組江被入

同七戌十二月十六日奥御納戸

天明三卯三月朔日御近習番頭取格

同年十一月二日御近習番頭取加藤八郎左衛門跡、 奥御納戸是迄之通於江

戸

同四辰七月廿四日奥御納戸ハ御免、 本役頭取之方斗可相勤旨

同五巳九月廿五日於江戸御書院番二番筆頭御膳番太田次郎九郎跡被仰付

御近習頭取其儘

同六午十一月四日役義御免、 格式御近習頭取次席、 勤方平御近習番之通

同八申五月廿二日御奉行役被仰付、 御役料百五拾石

寛政十二庚申五月五日五拾石御加増

文化四卯七月病死

織田半左衛門 源六事 仁兵衛事

百五拾石

文化四卯九月十一日養父半左衛門跡目百五拾石無相違被下置、 大御番組

江被入

同六巳二月五日表御小姓被仰付

同十一戌五月廿日若殿様御附御近習番被仰付

同十三子四月晦日御附御小姓恒五郎様兼被仰付

同十四丑正月廿一日表御小姓河合四郎左衛門跡被仰付、元席河合久左衛

文政十二丑十一月十六日表御小姓筆頭河合弥三兵衛跡被仰付 門次 天保二卯九月廿五日役義其儘格式末之番外、席荻野利右衛門次 同年十月十五日長征出立、 同年七月廿一日京都へ出立、八月廿二日帰着 丑二月三日帰

同六未十一月十一日御留守物頭波々伯部八太夫跡被仰付

同四巳三月十五日御纏奉行吉田五左衛門跡被仰付

同九戌十一月十一日御先物頭山形三五右衛門跡被仰付、 御役料百石被下

置候

弘化二巳十一月十六日御役御免被成末之番外被仰付、 嘉永四亥二月十三日大馬印奉行沢木八左衛門跡 遠慮被仰付

同五子十一月十八日御使番役尾高仁兵衛跡、 御役料百石被下置候

安政四巳二月廿三日年寄候二付隠居被仰付候

織田行方 三太夫

百五拾石

安政四巳二月廿三日親半左衛門年寄候ニ付隠居被仰付、家督百五拾石無

相違被下置、大御番組江被入候

同五午二月十一日御精進日之処、 致繰違猟坂へ罷出途中ニ而心付罷帰申

依之遠慮伺之上指扣被仰付、 同十四日御免被成候

同六未正月廿五日砲術所世話役被仰付候

文久元酉三月十九日御供ニ而出立

同三亥三月九日江戸詰出立

同廿八日霊岸島御屋敷仮御台場大砲打方頭取被仰付、当分御上屋敷御取

次御使者等御用捨被成候

元治元子五月廿三日帰

同年九月廿五日津田源之丞上京、留守中稽古所引受致世話候様被仰付候

慶応元丑閏五月十八日一番之補兵隊筆頭被仰付、 御書院番組江被入候

同年十月朔日宰相様御出坂御供ニ而、 同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰

同 一寅七月五日御番出精二付御褒詞

同年六月廿五日宰相様御登坂御供出立

同年八月十九日大御番三番之筆頭役前波五郎左衛門跡被仰付、 大御番組

江被入、但居残り

同年十一月廿六日京都ゟ帰

同三卯四月十一日役儀其儘格式末之番外二被仰付、 御役料廿五石被下置

候

同年八月十六日弟雄吉逼塞被仰付候二付伺之上指扣、 同廿三日御免

同年十月十八日第一遊擊隊半隊長被仰付候

同年十二月十二日急々上京被仰付十三日出立之処、 御模様ニ付途中ゟ引

返シ帰

同廿六日右同断之節、 遊擊隊之内今庄宿陣中心得違之趣有之、夫々御咎

二付伺之上指扣、廿八日御免

慶応四辰正月八日又々急々出立上京

同年四月廿五日四番之遊擊隊長被仰付候

同年閏四月十二日京ゟ帰

同年五月十六日六番之遊擊隊長被仰付

同年六月廿五日会征出立、 十一月十七日帰

明治二巳二月廿二日右長之出張太儀二思召、 仍二十金被下、 外ニ五百疋

一慶応四辰六月廿六日会征出立、十一月十五日帰候、午四月三日十六俵高	同四子正月廿八日御都合	一同年八月廿一日早速上京被仰付、廿二日出立、同四子正一同三亥三月廿五日右御供ニ而帰着
一同四辰六月朔日被召出軍事方被仰付、五人扶持被下置、役御番組江被入		都合二付途中占京都江
一同年同月廿六日御先第四小隊指添被仰付	江出立之処、御	一文久二戌十二月十六日中将様御上京御供御用ニ付江戸表江出立之処、
不被下候		へ出張ニ付御褒詞
一同年十二月武芸修行中銀弐枚ツ、被下置候処、内達之趣も有之ニ付以後	一、且又臨時横浜	一万延元申七月十一日右御雇詰被仰付候ニ付銀弐枚被下置、且又臨時横浜
付五百疋被下置候		三人扶持被下置候、翌申四月十九日帰
一同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付公儀ゟ被下配当金千疋、且又戦功ニ	立被仰付、詰中	一同年六月十四日横浜御警衛ニ付御雇詰、支度出来次第出立被仰付、
一慶応元丑五月廿八日大砲方御免被成候		、被下置候
一同年 長征、同二丑正月晦日帰着	修行中銀弐枚ツ	一同六未三月廿日武芸厚出精之趣師役ゟ内達も有之ニ付、
働候段達御聴、御褒詞	仰付候	一同廿二日此度三ノ丸惣武芸所御集被成候ニ付、高畠詰被仰付候
一同年八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌、		安政四巳四月十四日高畠引続出精ニ付御褒詞
銀弐枚被下置候	〔士族〕	織田繁 繁蔵 行方養子実弟也 明治三午五十歳
一同年六月廿五日宰相様再度之御上京中格別骨折相勤太儀ニ思召候、		1 2 1
日出立、八月廿二日帰着		一同年十二月五日老年二付隠居
一同年四月十三日京都御番士御雇詰被仰付、詰中五人扶持被下置候、		一同年六月十五日右被免候事
為御手当被下置候		一同四未二月十四日族長被仰付候事 役給十弐俵
ゟ大坂江為御迎罷越御供ニ而京都江到着之処、失却も有之趣ニ付金壱両		一同年十二月八日職務被免非役江被入候事
罷越筈ニ而此表致出立候処、俄御船行相成候ニ付途中ゟ京都へ罷出、夫		一同年五月廿四日第二大隊二番小隊長被仰付候事
一同年三月廿九日、一昨戌十二月江戸表へ罷出中将様御供ニ而京都表へ可		ケ年令頒授候事
依之慎、三月十六日御免	(典之内五十石十	一同三午四月廿五日戊辰北越出張、各所攻撃勉励ニ付御賞典之内五十石十
一元治元子二月廿三日滞京中不行状之趣相聞候ニ付、移を以御叱リ被成候、		一同月廿七日今般御改革二付解隊被仰出、当役被免候事
一同四子二月五日京都ゟ帰	升壱合下賜	一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米八拾弐俵壱斗弐升壱合下賜

一同年六月十六日三太夫事行方ト改

も有之ニ付御国表へ罷帰候様被仰付

明治二巳正月廿九日軍事方其儘御厩吟味役兼勤被仰付 月給十俵

同 一巳二月十七日京都御厩向取調御用ニ付、 立帰上京被仰付

同月廿二日会征出張ニ付三千疋被下、 外ニ十三両被下候

同月廿四日軍事方御免被成候、 但月給米已後不被下候

同月廿六日上京、三月十七日帰

同年四月二日月給六俵

同年十月二日支度出来次第東京詰、柄田駒之助ト致交代候様被仰付、

同

十三日出立、 然ル処同廿日詰御不用ニ付墨俣駅ゟ引返シ帰

同三午三月廿日学校小管務被仰付候事、 但御厩勤

同年四月廿五日戊辰北越出張各所戦争抜群尽力二付、 御賞典之内永世十

但厩掛リ

同年十二月十二日権少属心得勤

年給十九俵

十弐俵高

石令頒授候事

同十五日学校出仕

同四未六月朔日御改正二付免職

但厩方雑務掛リ

同廿四日藩馬庶務方被仰付候事

但十六等ノ二等

同年十月廿四日御改革二付職務被免候事

県馬御払ニ相成候ニ付引渡済迄ハ是迄之通

同五申五月繁蔵事繁シゲシ

同年七月十九日第七区江戸町組副戸長

織田

此前代あ二出、 但天谷与号

織田仙右衛門 天谷四郎左衛門

五人

安永七戌六月廿五日養父五兵衛不埒有之蟄居、 御擬作被召上五人扶持被

下置、 遠慮

寛政六寅六月十一日養父五兵衛不埒至極有之、 侍被成御削御国之内十三

里四方追放被仰付ニ付、 遠慮被仰付

文化三寅 取次役

同十四丑三月病気内願二付取次役御免

織田金左衛門 佐刀太

五人扶持

文化十三子八月十三日御徒被召出五人ふち被下置、 御貝御預ケ被成

同十四丑六月十一日親仙右衛門跡目五人ふち無違被下置、 新番入

文政三辰九月廿九日御貝役被仰付役中弐人扶持被下

弘化元辰十二月十六日弐人扶持御加増被下

弘化三午八月廿五日御貝役出精相勤候二付、 御書院番組江被入候

織田新八 実小役人木村忠右衛門弟

七人扶持

嘉永二酉九月廿日養父金左衛門家督七人ふち無相違被下置、 無役御留守

番組江被入候

同三戌九月廿五日家内不締り二付遠慮被仰付候

置候

同七寅十一月廿九日筒井小太郎稽古納之節菅沼主水宅へ罷越候始末、

同六丑十二月十六日御貝役安陪清兵衛跡被仰付、

御書院番組江被入候

狂とハ乍申不宜致業ニ候得共、 此度之義ハ御沙汰ニ不被及御沙汰候間

以来右様之儀無之様番頭移りを以被仰付候

安政五午五月廿六日養家之弟和太郎致出奔候二付、 遠慮伺之上指扣被仰

付候、 同晦日御免

同年九月廿九日右同断之始末兼而取締方不参届趣相聞不調法二付遠慮

十月十八日御免

文久二戌九月廿五日養家之弟倭三郎義先年願之上御国為立退候処、 立入

居心得違之趣相聞候二付、 御国立退被仰付候、 右二付伺之上指扣被仰付

候処、 同廿八日御吸物御酒被下置候ニ付御用捨を以御免被成候

同三亥二月十日殿様御上京被遊候二付御供

元治元子八月廿日足痛有之難儀二付内願之通退役被仰付大御番組へ、 御

番御供御免被成候

同年十二月賊徒一件御留守御用、 御手当百匁被下

慶応二寅十一月三日御趣意二付御留守番組江被入候

同四辰五月十一日今般御趣意二付無役組へ可被入之処、 御留守番組 三其

儘被指置、 小身ニ付当番之儀ハ御用捨被成下候

明治ト改元、十月五日養弟倭三郎御咎二付遠慮伺之上指扣, 同九日御免

同 一巳二月十八日無役組江被入候

同年六月廿一日新左衛門事新八ト改

同年八月十四日御広間当番勤被仰付

同年九月廿九日多年精勤之処、御藩制御改革二付為御慰労弐拾五両被下

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米弐拾六俵弐斗七升四合被下、

優

待列

酒

同三午正月廿七日小身格別難渋之趣ニ付、 御趣法ヲ以土着被仰付候事

但身分支配従前之通

御用筋之儀ハ出張可相勤候事

鳥羽除地之内ニおゐて三百歩御渡被下候事

但十ケ年之間無年貢之事

家並農具壱通り御渡被下候事

同年五月十七日今般土着被仰付候処、 願之上居住罷在候家作被下候

同年七月四日先般願之上被下候家作之分御用二被仰付候事

但相当之代料被下候事

同月九日家作御用二被仰付候処更被下候事

同年九月十七日従来之建物御用二被仰付候事

同月十九日先般建物御用二被仰付候処御用無之候二付、 勝手次第取払候

様更ニ被仰付候事

同年閏十月廿五日優待列名目被廃非役卜唱

同四未二月五日老年二付隠居

織田貞蔵

[士族]

米弐拾六俵弐斗七升四合

明治四未二月五日父新八老年二付隱居、家督給禄米弐拾六俵弐斗七升四

合従前之通被下候事

同日非役江被入候事

大崎

大崎左太夫

百五拾石 外役料百石

寛文十一亥養父左太夫家督被下

元禄十丑六月十九日五拾石御加增、 同日御使番

正徳二辰六月十六日御先物頭

享保三戌三月六日隠居

大崎七太夫

百五拾石 外役料百石

享保三戌三月六日養父左太夫隠居、家督無相違

同十巳十月廿五日御留守作事奉行水野藤兵衛跡

同十四酉九月十六日御先作事奉行水野藤兵衛跡、 御役料百石被下

元文二巳三月十五日御普請奉行鈴木源兵衛跡

寬保二戌八月六日札所吟味役新規也、 席御役人末席、 御先組御預ケ

大崎左太夫

百五拾石

延享元子九月廿五日養父七太夫跡知無相違、 大番入

同年十一月七日御手廻り

同二丑十二月十一日於江戸死、 同廿九日聞、 忌寅正月十九日五十日

大崎岩之助

百石

延享三寅三月廿一日父左太夫跡目幼年ニ付十五人扶持被下、御留守番入

宝暦三酉七月廿五日新知百石御直シ被下、大番入

宝暦十辰四月十一日御手廻御書院番入

明和五子七月廿日若殿様御近習

安永五申十月十九日同奥御納戸

天明三卯十二月五日内願二付役義御免、大番入

大崎七太夫 亀五郎

百石

寛政三亥三月廿九日父岩之助病身ニ付休息被仰付、 家督無相違、 大番入

文化元子三月廿日与内立合榊原仲八跡

文化四卯六月五日御金奉行金子五郎右衛門跡

同七午十月五日御勘定拝借奉行大久保助十郎跡、 御留守番入

文化十二乙亥正月廿七日御留守作事奉行堀十兵衛跡

同十三子十二月朔日御目付役今村伝兵衛跡、 御役料百五拾石

文政十二己丑年八月十三日御籏奉行波々伯部八十八跡被仰付

大崎七太夫 七之助事

百石

天保十亥二月十一日親七太夫家督百石無相違被下置、 大御番組へ被入候

同十五辰十月十六日表御小姓被仰付候

弘化四未十月廿五日不慎二付遠慮被仰付候

一嘉永元申正月廿五日御堀廻り之者子細有之罷越候節、不束之趣相聞候ニ **大崎巴** 外之助

[士族]

百石

一明治元辰十二月十六日御備入被仰付

安政五午九月廿五日表御小姓筆頭役蜷川林左衛門跡被仰付候

付御叱り

文久元酉三月十一日末ノ番外御時宜役被仰付候

同 一巳三月十日親七太夫及老年候二付願之通隠居、 家督百石無相違被下

置 遊擊隊江被入候

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米六拾俵四斗三升六合被下

同三午五月廿四日第一大隊二番小隊入被仰付候事

同年十月廿二日命中為褒賞羅紗狗服段袋地被下候事

同年十二月八日常備二番隊 年給六俵

同四未十月十三日解隊

依之御酒

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、

同年五月二日宰相様御供頭見習柳下小十郎跡、

御役料五十石被下置候!

且又御徒頭次席二被成下候

元治元子四月廿三日右御供ニ而帰

同年十月十三日中将様御供二而上京

同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立、三月六日御供ニ而帰着

同五申五月外之助事巴

小嶋

小嶋頓八

弐拾五石五人

宝永二酉十二月七日小嶋五郎作名字為相続被下

小嶋逸八

百石

宝永六丑三月五日江戸二而新番

正徳三巳五月五日於江戸拾石二人扶持御加増

同五未五月廿五日奥御納戸

享保二酉六月十九日御書院番

同年六月四日宰相様御登坂御供被仰付、 御滞坂中御徒頭取扱被仰付候

同廿五日出立、十月同断帰

同二寅二月廿日御役料五拾石御増、

都合百石被下置、

御使番順席二被仰

付候

慶応元丑十月朔日宰相様御出坂御供出立、

同年十二月賊徒一件ニ付出張、

依之御手当銀六百匁被下置候

同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰

被下置候

同年八月 弟吉池角兵衛重キ御咎ニ付遠慮伺之上指扣、 九月一 一日御免

同年十一月廿九日席御役料其儘御留守組支配被仰付

同三卯四月廿日御趣意ニ付夜廻り勤被仰付候

明治二巳二月十六日今般御改革二付御役儀御免被成、 御広間当番勤被仰

同年三月十日及老年候二付願之通隠居被仰付

付

同五子二月廿八日新知

同年九月七日御取立、雇御免

同九辰八月廿六日御役御免、大番入

同十三申四月廿六日於江戸中奥御小性

同十六亥二月十六日御納戸役被仰付候

小嶋四郎左衛門 逸八 休息

百石

享保十七子七月廿一日養父逸八家督無相違、大番入

小嶋逸八

百石

安永三午七月廿四日父四郎左衛門休息、家督無相違、大御番入

寛政十一未八月廿日与内立合平尾久右衛門跡

享和元酉七月廿日与内検地奉行今立次太夫跡、御留守番入

小嶋逸八

百石

文化五辰ノ閏六月五日親逸八休息、家督無相違、大御番入

文化九壬申十月二日御近習番御書院番入、一柳新九郎跡

文政元寅十月二日奧御納戸役有賀忠兵衛跡被仰付候

文政二卯十二月病死

小嶋逸八 平太郎事

百石

一文政三辰二月十一日養父逸八跡知百石無相違被下置、大御番組江被入

同九戌江戸詰被仰付、四月十五日出立

同十三寅江戸詰被仰付、四月十六日出立

天保六未江戸詰被仰付、正月廿五日出立

同七申十一月五日御金奉行山本清右衛門跡被仰付

同九戌江戸詰被仰付、七月十二日出立

同年十二月廿七日松栄院様御住居御普請中出精二付、金弐百疋被下之

同十三寅江戸詰被仰付、七月九日出立

同十五辰五月三日御勘定拝借奉行御趣意金取扱武田藤三郎跡被仰付候

御留守番組へ被入

弘化四未二月十四日末之番外御時宜役被仰付候

一嘉永六丑年五月十六日御留守作事奉行野治小兵衛跡被仰付候

一同年七月三日去月十二日京町ゟ出火之節、出精ニ付御褒詞

安政元寅十二月五日今般大橋御修覆無御滞相済候処、数日無懈怠出精相

勤候二付、御目録銀壱枚被下置候

一安政三辰四月廿日今度黄門様御遠忌二付、於運正寺御廟御造営被仰出候

処、纔之日数二而宜出来太儀二思召候、此段申聞候様被仰出候

同年七月朔日御先添物頭宮北権六跡、御役料百五拾石被下置候

一万延二酉二月九日年寄候ニ付隠居被仰付候

小嶋逸八 平吉 実望月八郎右衛門弟

百石

〔士族〕

安政二卯三月十六日年中出淵出精就中昨寒稽古出精二付、御持御扇子二

本被下置候

同三辰五月廿二日昨年中出淵皆勤寒稽古出精免状席二而出精二付、 御持

御扇子二本銀七匁被下置候、 且又久野柔術累年出精二付、 御持御扇子二

置候

同四巳四月十四日出淵累年皆勤就中免状二而出精二付、

御下緒一掛被下

本被下置候

同六未三月廿日武芸出精之趣師役ゟ内達も有之ニ付修行中銀弐枚ツ、被

同廿二日此度三ノ丸惣武芸所御集ニ付出淵稽古所詰被仰付候

下置候

万延二酉二月九日養父逸八年寄候二付隠居被仰付、 家督百石無相違被下

大御番組へ被入候

文久二戌十月六日今度農兵御端立二付、西尾十左衛門申談教授手伝被仰

同三亥七月八日支度出来次第上京被仰付

同年八月三日御近習番被仰付、 御書院番組江被入御参府御供被仰付候、

八月十七日出立、 同十二月江戸ゟ御上京御供、 子二月御帰国御供着

元治元子八月廿八日御上京御供出立夫ゟ長征、 丑三月帰

同年十二月逸八卜名替

慶応元丑十一月廿九日是迄武芸修行中銀弐枚ツ、年々被下候処、 御役前

も有之ニ付以後不被下候

但当年之分ハ被下置候

同 一寅二月五日御馬廻被仰付

同 一卯三月十日御上京御供出立、 四月四日帰

同四辰三月十四日上京、 五月廿七日帰

> 同年八月九日本多興之輔方始御先手之面々、昼夜出張格別精励之趣太儀 二思召候、依之諸事為御慰労御手許ゟ被遣候、

旨被仰出候、 依之早速致出立候樣同十三日出立、 此段興之輔方始へ可申達 九月九日羽州庄内口ゟ

早かけニ而夜中着

明治卜改元、十二月十三日殿様御上京御供出立、 巳二月六日帰

同 一巳十一月七日御家従被仰付候事

但御近習勤

月給米一年分六俵被下候事

同月廿五日今般御改革、更給禄米六俵四斗三升六合被下

同四未二月十六日御東京御供出立、 五月廿一 三日御供ニ而帰着

同年四月五日当分年給十四級

弐拾弐俵壱斗八升弐合四勺

同五申正月廿九日御家従被免候事

小嶋

小嶋平馬 五郎左衛門 郷左衛門

(士族)

廿三石五人

嘉永六丑二月廿九日かとく

慶応二寅十月廿二日今度御趣意二付被召出、 新番並組二被仰付、御充行

之儀ハ廿三石五人扶持被下置候、 且又席之儀ハ家督順ニ被仰付候

同三卯正月廿二日砲術所世話役被仰付

同年九月十日第一級二相進候二付花葵御紋御印被下置候

同月廿七日当冬京都御警衛詰被仰付、詰引揚支度出来次第致出立候様被

仰付、 十月六日出立

同年十月十日詰中大砲方御雇被仰付候

同年十月十八日第二遊擊隊被仰付

同年十一月十七日先般堺町御警衛向心配相勤候二付御酒被下置候

同年十二月廿八日五郎左衛門事郷左衛門ト改

同四辰二月晦日帰

同年四月廿五日遊擊隊江被入候

同年九月十日御警衛詰上京、十一月十六日帰

明治二巳二月十八日階級打調役被仰付

同年六月十六日郷左衛門事平馬ト改

同年同月廿八日遊撃隊江被入、役儀之儀ハ被免候事

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米五拾俵壱斗五升被下

同三午五月廿四日第一大隊三番小隊入被仰付候事

同四未十月十三日解隊

同年十二月八日熕手

年給六俵



落合善兵衛

弐百石 外役料百合

元禄元辰三月十七日新知百石

同九子十一月十三日於江戸五拾石御加増

御水主頭

宝永三戌九月四日五拾石御加増 御持弓頭屋敷奉行兼

享保九辰九月廿九日死去

落合善兵衛

百石

享保二酉六月廿六日御手廻銀子被下

同三戌五月十一日表御小姓

同六丑五月十五日奥御小姓

同七寅二月廿八日表御小姓

同九辰十一月廿五日養父善兵衛跡知弐百石無相違、

寛保二戌八月十三日思召在之拝知之内百石御取揚、 此節逼塞、但家業不 大番入、弓師役

心懸其外不宜義有之二付

落合丈右衛門 隠居

百石

宝曆八寅十一月十一日父善兵衛跡目無相違、 大番入

同十辰八月十六日弓師役被仰付

天明元丑十一月廿日与内検地奉行吉田茂左衛門跡、 御留守番入

寛政七卯十二月十六日役儀御免被成、格式末ノ番外井原兵左衛門次

落合丈右衛門 仁十郎 万右衛門

百石

寛政十二申十月五日養父丈右衛門家督無相違、 大御番入、 師役被仰付

文政六未十一月十六日与内検地奉行荻野理右衛門跡

文政七申閏八月二日病死

落合丈右衛門 小伝次 幸次郎

百石

一文政七申九月廿五日養父丈右衛門家督無相違被下置、 大御番組江被入、

弓師役被仰付

嘉永元申四月廿日御預所御金奉行宮塚又兵衛跡被仰付、 御留守番組江被

入

同五子三月十六日格式末之番外被仰付、 役儀之儀ハ御免被成候

安政二卯正月廿五日病身、内願之上隠居

落合戸五郎 大蔵 丈右衛門

百石

一安政二卯正月廿五日親丈右衛門儀近来多病、 其上腰痛ニ而歩行等難儀ニ

付内願之通隠居被仰付、 家督百石無相違被下置、 大御番組へ被入候

但右二付流儀之弓師役被仰付候

同四巳四月廿二日数代師役相勤別而近来出精太儀二思召候、 依之御目録

銀五枚被下置候

文久二戌十一月廿五日来春殿様御上京被遊候二付為御待請出立

同三亥六月四日御番頭引纏上京、 九月五日帰

同年十二月廿四日先達而京都動揺之節為御守衛出張ニ付、 朝廷ゟ為御褒

美弐百五十疋被下置候

元治元子三月五日丈右衛門と改

同年七月廿一日京都表へ出立夫ゟ長征、 丑 二月帰

同 一丑二月朔日賊徒警衛敦賀江出張、 同九日帰

慶応与改元、 稽古之儀も不立行躰ニ付、 閏五月晦日弓術之儀当節之形勢ニ而者修行致し候向も無之、 内願之通弓師役御免被成候、 但射小屋等者勝

手次第取払可申事

同年八月五日先達而弓師役御免被成候処、 従来師役致心配太儀二思召銀

三枚被下置候

同三卯三月十日御上京御供出立直御警衛詰、 七月十九日帰

同四辰三月十六日与内立合岡田弥一郎跡被仰付、 御留守番組江被入候

明治二巳三月二日今般御改革二付御役御免、 御広間当番勤被仰付、 席畑

中儀兵衛次

同年六月廿一日丈右衛門事戸五郎ト改

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米六十俵四斗三升六合被下

予備隊

(士族

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

大久保

大久保可内

弐拾五石五人

元禄五申九月養母あこ為跡目被下、 御擬作十三石四人半扶持之処

正徳元卯十二月十一日御土蔵番

同五未五月廿五日表御小姓御切米並之通

享保六丑十月十五日中奥御小姓 一月廿一日表御小姓

同七寅二 同九辰九月十五日於江戸病死

大久保助十郎 隠居

享呆九辰十二月十百石 役料百五十石

享保九辰十二月十六日父可内跡目幼年二付七人扶持、御留守番入

延享元子十一月七日御切米並之通廿五石五人被下、御手廻

寛延元辰八月廿八日御駕附

明和元申八月六日新知百石

同三戌五月廿三日御腰物方

同五子七月廿日勤方裏へ被仰付、末番外

安永七戌八月十二日御使番渡辺喜太郎跡、御役料百五十石

天明六午十二月十四日御先物頭栃屋八左衛門跡

大久保助十郎

百石

天明九酉正月十四日父助十郎隠居、家督無相違、大御番入

享和元酉七月廿日与内立合小嶋逸八跡

同十月九日山奉行小宮山伝七跡被仰付

文化五辰三月廿日倅金之助遠慮、其身指扣

文化六巳正月廿八日御勘定拝借奉行上坂与三右衛門跡

同七午十月五日格式末之番外役義御免、席山品政十郎次

同十酉十月五日小馬印奉行斉藤利右衛門跡

文化十二亥五月三日病死

大久保太郎太夫

百石

一文化十二亥六月廿五日父助十郎跡目無相違被下置、大御番組江被入

一文政六未江戸詰被仰付候

一同十亥江戸詰被仰付、四月十五日出立

天保五午六月十六日与内立合山本清右衛門跡被仰付

同七申五月廿五日御金奉行生駒五左衛門跡被仰付

同年江戸詰被仰付、七月十日出立

同十一子江戸詰被仰付、七月十日出立

同十三寅十二月五日御勘定拝借奉行御趣意金取扱服部三郎兵衛跡被仰付

候

一同十五辰十一月十一日末之番外御時宜役被仰付候

嘉永四亥二月十三日御纏奉行樋口喜左衛門跡被仰付

一同年十二月十二日病死

大久保助十郎 惟八

百石

一嘉永五、二月五日養父太郎太夫家督百石無相違被下置、大御番組江被入

一安政元寅十二月廿八日助十郎与改

一文久元酉三月十九日御供ニ而出立、同二戌五月十日帰着

一同三亥正月廿五日当亥年芝御陣屋詰被仰付候

一同年二月廿二日右詰養子虎次郎為代番相願、助十郎他番へ被入

元治元子四月十三日上京、八月廿二日帰着

元治元子八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌、

相働候段達御聴、御褒詞

一同年九月廿二日京都詰被仰付、詰中堺町御門御固大砲方被仰付、早速致

出立候樣被仰付、十月 出立、翌丑五月六日帰

一同年十二月賊徒一件二付出張御手当銀六百匁被下置候

一慶応元丑十月八日小荷駄造営方被仰付候

一同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋戦功ニ付五

百疋被下置候

一同年七月五日御番出精二付御褒詞

一同三卯五月十一日御書院番組江被入候

同年九月廿九日御書院番組其儘与内立合被仰付

一明治二巳二月十六日年寄ニ付休息

大久保武雄 虎次郎 可内 実松原次郎左衛門次男

〔士族

百石

文久三亥二月廿五日養父助十郎為代番芝御陣屋詰出立

同四子二月二日当子年芝御陣屋詰越被仰付、右詰中御扶持方是迄之通五

人フチ被下置候

一元治元子五月十九日芝御陣屋未夕御引渡無之二付右引渡相済候迄同所詰

越被仰付、御扶持方是迄之通被下置候

同年九月十三日御陣屋ゟ帰

一同年十二月賊徒一件二付出張被仰付、右二付為御手当銀弐百匁被下置候

慶応元丑十一月廿九日大坂表江出張、夫ゟ神戸江、寅九月十五日帰

同二寅三月十一日一番之補兵隊へ附属被仰付候

同年四月廿九日三番へ割替

一同三卯正月廿二日砲術所世話役被仰付、勤中年々銀拾枚ツ、被下置候

一同年三月廿四日新撰隊教授方并指揮役兼介被仰付、勤中是迄之通年々銀

拾枚ツ、被下置候

一同年十月廿一日御趣意二付右役配御免被成候

同年十二月十五日補兵隊被仰付、今度御上京御供被仰付

同四辰四月廿五日遊撃隊へ被召出、五人扶持被下置候

同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰

明治卜改元、十二月廿八日虎次郎事可内卜改

同二巳二月十六日養父助十郎年寄ニ付休息被仰付、家督百石無相違被下

置、遊擊隊江被入候

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米六拾俵四斗三升六合被下

一同三午四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励ニ付御賞典之内十石廿ケ年

令頒授候事

同年五月廿四日第一大隊三番小隊入被仰付候事

一同年十二月八日常備三番隊 年給六俵

一同四未十月十三日解隊

同五申五月可内事武雄

大久保

大久保利助 病

廿五石五人 外三人扶持

延享三寅十月十六日御徒小頭ゟ御取立、三石増被下、御留守番入、御花

畑絵奉行内田七郎右衛門跡

同四卯十一月十六日用水奉行高橋伊太夫跡

寛延元辰十一月五日江戸御屋敷奉行御目付御用可相勤旨、五石弐人御加

外二役義二付三人扶持被下、尚又跡部又八松原次郎左衛門同時御目

増

大久保喜兵衛 清太夫

文化八未三月廿一日養父喜兵衛隠居、家督百石無相違大御番入

付共御用可相勤旨

宝曆五亥六月十一日御代官皆崎次右衛門跡

同九卯八月十一日御免、大番入

大久保喜兵衛

百石 外役料百五十石

宝曆十二午二月十六日父理助跡目無相違、大番入

明和七寅九月廿九日相身体末

安永五申十一月七日御近習番御書院番入、同日順席

天明三卯十一月二日御小道具方、於江戸

同四辰十月十二日御膳番

同六午正月九日於江戸新知百石

同年七月廿四日奥御納戸兼帯御免

同七未三月十四日御形合被相改万端御省略二付御膳番御免、席其儘御供

頭

同八申八月四日御膳番

寛政九巳十月十一日御膳番是迄ノ通ニテ御近習番頭取、松波甚左衛門跡

同十一御附御用人支配

同十二申二月廿九日末ノ番外御時宜役

同年七月十七日御側締り役見習

享和二戌二月十一日御使番本多門左衛門跡、役料百五十石被下

文化七午八月廿二日御長柄奉行長谷部次郎兵衛跡

同八未三月廿一日隠居

天保八酉五月十六日病死

文政六未四月五日不慎二付遠慮

百石

大久保肥馬

善十郎

喜兵衛

勝之丞事

[士族]

一天保八酉七月十一日親喜兵衛家督百石無相違被下置、大御番組江被入候

同十五辰九月廿六日遠慮伺之上指扣之処、御免

一弘化三午江戸詰被仰付、四月十一日出立

嘉永三戌江戸詰被仰付、四月十一日出立

一嘉永五子十二月廿八日喜兵衛与名替

一安政三辰十月十一日御預所御金奉行中山藤右衛門跡被仰付、御留守番組

へ被入候

一万延元申五月廿五日御広敷御用達上坂五郎助跡被仰付候

一同年六月廿六日御番両度皆勤二付御紋御帷子被下置候

一文久元酉五月廿日与内立合浅見甚内跡被仰付、大御番組へ被入候

一同二戌十一月廿四日来春殿様御上京被遊候ニ付為御待請出立

一文久二戌十二月廿八日肥馬与名替

一同三亥六月四日御番頭引纏上京、九月五日帰

一同年十二月廿四日先達而京都動揺之節為御守衛出張ニ付朝廷ゟ為御褒美

弐百五十疋被下置候

元治元子五月廿日与内検地奉行堀勘左衛門跡被仰付、御留守番組へ被入

候

同年十二月賊徒一件出張二付御手当銀六百匁被下

慶応元丑八月晦日格式末之番外被仰付、 御先手御旗奉行雨森宇右衛門跡

被仰付候

同二寅十月廿六日席其儘御先副物頭被仰付、御役料廿五石被下置候

同年十一月三日八木郡右衛門組之者半小隊召連、支度出来次第京都詰被

仰付、十三日出立

同三卯四月四日御上京御供振り替り帰

同年十月十八日席御役料其儘一番之予備半小隊長被仰付

明治二巳二月十六日今般御改革二付御役儀御免被成、御広間当番勤被仰

付

同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、為御慰労三十五両被下

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米六拾俵四斗三升六合被下

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

大久保

大久保治太夫

弐拾石三人

貞享三寅六月御徒ゟ御取立、御目付支配ニ被仰付

翌卯正月御番割之節大御番入

同九月十七日玉薬奉行

大久保磯右衛門

弐拾石三人

正徳元卯十一月七日父治太夫跡目無相違

同四午三月五日御持武具奉行渡辺六太夫跡

享保七寅順席

寛保元酉二月十六日役義御免、

大番入

探源院様御代初而父次太夫御徒ゟ御取立

大久保仁太夫

弐拾石三人

延享元子十一月七日父磯右衛門休息、家督無相違、大番入

宝曆五亥五月廿二日御土蔵番御留守番入、葛城金五左衛門跡

大久保半七 初富三郎

弐拾石三人

宝暦七丑七月五日養父仁太夫休息、家督無相違、 大番入

大久保元作

弐拾石三人

明和三戌七月廿日養父半七跡目無相違、

天明八申八月十日御留守武具奉行坂井勘左衛門跡、御留守番入

享和二戌五月廿九日休息

大久保三左衛門

廿石三人

享和二戌年五月廿九日養父元作家督無相違、元作内願ニ付休息

文政二卯十一月病死

大久保二太夫 熊三郎 元作 仁太夫

廿石三人

同七申閏八月廿三日大御番入被仰付候

一文政三辰正月十六日父三左衛門家督無相違被下置、

無役御留守番組江被

弘化二巳十二月五日御番改役村田十左衛門跡被仰付候

一安政六未二月五日御花畑絵奉行榎並左次右衛門跡被仰付、御留守番組江

被入候

文久三亥十月晦日仁太夫事二太夫与改

元治元子二月廿九日年来出精相勤候ニ付御書院番組江被入、銀拾枚ツ、

年々被下置、役儀之儀ハ御免被成候

一同年十二月賊徒一件ニ付出張、御手当銀三百匁被下

慶応二寅二月十一日病身二付内願之通休息

〔士族

廿石三人

大久保源五郎

一安政三辰正月廿日衆道之儀ニ付風儀不宜、御移り

一同七申正月廿五日当申年太田御陣屋御雇詰被仰付、詰中三人扶持被下置

候、閏三月廿四日出立

一文久元酉四月七日帰着

一同廿五日太田御陣屋御雇詰被仰付候ニ付銀弐枚被下置、且又横浜表江長

々致出張候二付銀三枚別段金弐百疋被下置候

一文久二戌十月六日今度農兵御端立二付、西尾十左衛門申談教授手伝被仰

付候

元治元子二月廿三日支度出来次第上京被仰付、滞京中五人ふち被下置

三月五日出京、四月十七日帰

同年六月廿五日当春宰相様御職被為蒙候ニ付、早速上京取調等致心配太

儀之段御褒詞

一同年八月廿八日御上京御供出立夫ゟ長征、

丑正月廿八日帰

一同年九月十二日農兵教授手伝御免被成侯

一慶応元丑五月廿八日大砲方御免被成候

一同年六月廿五日砲術所世話役被仰付

一同二寅二月十一日親二太夫病身ニ付内願之通休息被仰付、家督廿石三人

扶持無相違被下置、大御番組江被入候

慶応二寅四月八日京都詰出立

一同年十一月十一日為伝習当分居残被仰付候、交代之面々申談候様被仰付

候

一同三卯二月廿八日京ゟ帰

一同年三月十二日銃鎗使用法之儀砲術所頭取申談致伝習候様被仰付

一同年四月廿五日軍事方被仰付役御番組江被入

一同年五月十四日軍事方其儘砲術所頭取助被仰付

一同年八月廿九日軍事方其儘砲術所頭取介之義ハ御免被成候

一同四辰閏四月九日支度出来次第京都御警衛詰、上月熊之助ト致交代候様

同月廿五日戊辰北越二出張各所攻撃勉励二付、 同三午四月二日今朝時計間違二而一時引揚、 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米四拾弐俵六升被下 同年九月四日兵学為取調西京江罷越候樣被仰付、 同月廿二日会征出張二付為御賞五百疋被下、外十三両被下候 同 明治卜改元、十二月廿一日軍事方其儘生兵局教授方頭取被仰付 同年六月廿二日会征出立、 同年五月十一日出精相勤候ニ付軍事方勤中年々銀五枚ツ、被下置候 同月廿五日先般越後表へ被指越候処諸失却相嵩難渋之訳も有之ニ付、 慶応四辰五月廿一日御含御用有之二付越後表早速罷越候様被仰付、 同年五月廿四日昨年解隊已来生兵教導向格別致勉励二付、 十ケ年令頒授候事 伺之上指扣 同月廿八日歩兵教授被仰付候事 之儀有之二付被免候事 御手当金五両被下置候 被仰付、 日出立、六月十六日帰 一巳二月十七日兵学所司事試補被仰付、 但御用儀ハ可相勤候事、 但生兵局頭取是迄之通 同十六日出立、然処不及交代旨京都ゟ申来候ニ付二ツ屋宿ゟ引 席波々伯部一右衛門次 十一月十七日帰 同五日指扣被免候事 番外二被仰付 始業盤木為打不念二付遠慮 御賞典之内十五石ツ、二 然ル処九月七日御指支 金三千疋被下 月給廿俵 廿二 為 廿石四人 大久保清右衛門 同年五月九日陸軍大尉 同五申二月彦根出張 同年十二月源五郎事源吾卜名替 同廿九日任中尉 同日県兵掛り被仰付候事 同月十二日准二等教授兼 同年十二月八日任中尉 同年九月十五日第三大隊 大久保 但常備第九小隊 但歩兵掛り 清助

同年七月廿二日第三大隊二番小隊長被仰付、歩兵所教授可為是迄之通事

一番小隊へ繰揚ニ相成候事

年給七十三俵

同十日以本官軍務寮出仕被仰付候事

同四未五月九日生徒引纏坂地迄罷越候樣伺二而被仰付、 同十八日出立

同年七月二日徵兵引纏立帰出坂可致事

同年十月十三日今般解隊被仰出候二付職務被免候事

同廿八日大尉心得勤分営常備第二小隊

休息

寛保三亥十二月二日小役人ゟ御取立、新番入、御勝手役請込其儘

延享二丑二月朔日弐石壱人フチ御加増

同三寅十月十六日御留守番入

大久保清 金太郎 清右衛門 金右衛門 清右衛門

[士族]

同十三未十二月晦日御預所御代官御留守番入

宝曆十一巳三月四日御勝手役御取上、大番入、

明和七寅九月廿九日相身躰末

大久保清助 死

廿石四人 三石御足

天明五巳正月十六日父清右衛門休息、跡目無相違、 大番入

同八申五月十六日御広式御用達、御留守番入

寛政二戌五月廿八日致姫様附御広式御用達

同十午七月五日三石御足擬作被下置 同六寅十月五日年数相満候二付順席

享和二御持武具奉行御書院番入

大久保惣兵衛 清四郎 彦之助 清左衛門

廿石四人

文化二丑年五月十一日父清助跡目無相違、 大御番入

文政六未四月五日不慎二付遠慮

文政七申六月廿五日不埒至極之義有之ニ付、二石壱人扶持御取揚, 新番

へ御下被成、遠慮被仰付

同十二丑四月廿九日不慎之義有之、閉門

天保八酉十二月十一日先年も度々御咎被仰付候処、 亦復不慎之趣相聞候

ニ付閉門

弘化元辰十二月取次役

拾八石三人

一嘉永三戌十月五日親惣兵衛内願ニ付休息被仰付、 家督拾八石三人扶持無

相違被下置、 新番組へ被入

安政元寅十二月廿八日清右衛門改

文久三亥正月十六日農兵教授手伝被仰付候

同年三月廿七日宇都宮五郎助父子芝御陣屋詰罷越候二付、右留守中五郎

助相弟子之面々致世話候樣被仰付候

同年十月十三日中将様御供ニ而上京

元治元子三月五日御台所目付被仰付、 四月十七日帰着

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀二思召候、 依之御

酒被下置候

同年十月十五日長征出立、

丑二月帰

慶応元丑五月五日新番二番之世話役東方新吾郎跡被仰付、役中御足三石

被下置候

同二寅十月廿二日役新番組世話役被仰付、 役中御足充行三石其儘被下置

役新番組へ被入候

同三卯十月十五日清右衛門事金右衛門ト改

同年十二月廿八日金右衛門事清右衛門ト改

同四辰五月十一日御台所頭同目付兼被仰付

同年同日今般御趣意二付役中役御番組江被入候

明治二巳四月廿日今般御改革二付役儀被免、 御広間当番勤被仰付

同年六月廿一日清右衛門事清ト改

同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、 為御慰労廿五両被下置

候

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾九俵四斗三合被下

予備

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱



大町吉左衛門

弐拾五石五人

元禄三午十一月養父宇右衛門跡目被下

大町金蔵

廿五石五人

正徳二辰七月廿五日養父吉左衛門跡目無相違被下

大町次左衛門 仙助 隠屋

百石

元文二巳三月十六日養父金蔵跡目、大番

延享五辰七月十五日表御小姓

宝曆九卯六月十六日奧御納戸立岩武左衛門跡、御書院番入

明和九辰九月廿四日新知百石

安永五申正月十六日御近習番頭取奧御納戸御免

同七戌正月十五日御膳番御近習番頭取是迄之通

同七戌年六月廿二日末ノ番外役義御免

天明四辰四月廿九日小馬印奉行猪子六左衛門跡

同八亥十月廿日御部屋附御腰物方中村一郎右衛門跡

大町次左衛門 休息

廿五石五人

天明七未正月十五日父次左衛門隠居、家督無相違被下、大番7

寛政三亥十一月十六日不埒至極之趣有之ニ付、拝知被召上廿五石五人扶

持被下、閉門被仰付

同十午十二月五日遠慮

大町次左衛門 間作

弐拾五石五人

文化二丑三月五日父次左衛門内願有之休息被仰付、家督無相違被下、

御番入

文政十亥六月十一日御番改役堀孫次郎跡

天保八酉五月廿九日御持武具奉行伊藤安右衛門跡被仰付、御書院番組へ

被入

天保十一子九月五日表御納戸役長崎七左衛門跡、大御番組へ被入

天保十四卯二月十六日川除奉行榎並左次右衛門跡被仰付、御留守番組江

被入

同年十二月十六日御台所頭安原作右衛門跡被仰付

同十五辰六月廿日御代官役酒井金五左衛門跡

嘉永元申九月十六日御預所御代官役多部三左衛門跡被仰付

四二酉五月廿五日御祈禱奉行土屋八左衛門跡被仰付、大御番組へ被入

大

廿五石五人

大町勝右衛門

岩太郎

吉右衛門

嘉永二酉 養父次左衛門休息被仰、 家督廿五石五人ふち無相違被下

置 無役御留守番組へ被入候

同五子十二月廿八日吉右衛門与名替

文久二戌十一月廿五日来春殿様御上京被遊候二付為御待請出立

同三亥二月十八日家屋敷御用地二被仰付、 代地之儀ハ新屋敷御徒屋敷地

之内二而相当之坪数被下置、 居宅建物之儀者取調之上建被下候間、 尚委

細之儀ハ御奉行御目付へ可申談旨

同三月十六日右被仰付候処、今般御評議之上青木与一右衛門家屋敷被下

同年六月四日御番頭引纏上京、 九月五日帰

同年十二月廿四日京都表動揺之節為御守衛出張二付、 朝廷ゟ為御褒美弐

百五十疋被下置候

元治元子四月廿二日新屋敷元御徒地ニ新規出来之家屋敷へ替被下置候

同年七月廿一日京都表へ出立、 夫ゟ征長、十二月帰

同年十二月勝右衛門ト名替

慶応元丑七月十二日御旗本武具奉行弾薬方兼帯被仰付、 御書院番組 へ被

同年九月廿日病身二付内願休息

大町十九記 間作 吉右衛門 五左衛門

(士族

弐拾五石五人

安政七申正月廿五日当申年太田御陣屋御雇詰被仰付、 詰中三人扶持被下

置候、 閏三月廿二日出立

文久元酉四月八日帰着

同廿五日太田御陣屋御雇詰被仰付候二付銀弐枚被下置、 且又横浜表江長

々致出張候二付銀壱枚別段金弐百疋被下置候

同二戌十一月廿五日来春殿様御上京二付為御待請出立

同三亥三月廿五日中将様御供二而帰着

同年六月四日御番頭引纏上京、 九月五日帰

同年十二月廿四日京都表動揺之節為御守衛出張二付、 朝廷ゟ弐百五十疋

被下置候

同四子正月廿日当春芝御陣屋詰被仰付、右詰中五人ふち被下置候、 相止

元治元子二月廿三日支度出来次第上京被仰付、 滞京中五人ふち被下置

三月五日出立、四月七日帰着

同年五月十九日芝御陣屋未夕御引渡無之二付、 右引渡相済候迄同所詰被

仰付、 右詰中御扶持方五人フチ被下置、支度出来次第早速出立致し候様

被仰付、 廿八日出立

元治元子六月廿五日当春宰相様御職被為蒙候二付、 早速上京取調等致心

配太儀之段御褒詞

同年九月十三日御陣屋ゟ帰

同年十月十四日長征出立、 十二月帰

同年十二月吉右衛門ト名琴

同二丑二月朔日賊徒警衛敦賀江出張、 同九日帰

慶応ト改元、 四月廿九日上京、 翌寅四月十四日病気願之上帰

同年九月廿日養父勝右衛門病身二付内願之通休息被仰付、家督廿五石五

人ふち無相違被下置、 大御番組江被入候

同二丑六月五日在京中不埒之趣相聞不調法之事二候、 依之遠慮被仰付

同廿四日御免

同三卯十月六日養伯父網三郎於京都出奔二付遠慮伺之上指扣、 同十四日

御免

同年同月十九日御警衛増詰上京

同年十二月廿八日吉右衛門事五左衛門ト改

同四辰二月廿九日京都ゟ帰

同年三月十六日御留守番組江被入候

同年五月十一日今般御趣意二付無役組二被仰付

明治二巳六月廿六日五左衛門事十九記ト改

同年八月十四日御広間当番勤被仰付

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米五拾三俵壱斗四升三合被下

予備隊

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

岡嶋

岡嶋勘兵衛

百石

貞享四卯十一月廿一日養父清兵衛跡目無相違

元禄十丑十月廿一日御金奉行

大安院様御代父清兵衛御取立

岡嶋三太夫

百石

正徳三巳三月廿五日父勘兵衛跡知無相違被下

同十月廿九日病死

大安院様御代祖父清兵衛御取立

岡嶋加左衛門

百石

正徳三巳十二月廿二日養父三太夫跡知無相違、 大安院様御代御取立之子

孫二付、先御代隆芳院様御取立之者共席御上ケ被下候格を以

享保四亥八月十八日相身躰末席被仰付

大安院様御代曾祖父清兵衛御取立加左衛門迄四代

岡嶋円右衛門

百石

享保七寅十一月五日養父加左衛門跡知無相違

同十六亥四月廿一日道奉行今枝甚五兵衛跡

大安院様御代高祖父清兵衛御取立二付相身躰末座之処

享保七寅冬御番割之節順席

岡嶋清兵衛 隠居

百石

寛保二戌六月十六日養父円右衛門跡知被下、 大番入

寛延四未十一月廿二日与内立合妹尾次郎左衛門跡

宝暦七丑正月十六日御金奉行矢嶋左太夫跡

明和五子七月廿五日札所奉行溝口小一右衛門跡

天明三卯十月廿日御留守作事奉行森田安兵衛跡

同六午五月廿九日実次男高橋幾蔵曾祖母病死之節,

幾蔵義若輩者ニ候へ

心付も可有之処等閑之事ニ付遠慮

岡嶋幸左衛門 休息

百石

寛政元酉六月十一日養父清兵衛隠居、 家督無相違被下、 大御番入

同十二庚申七月十七日病身二付内願之上休息

岡嶋清兵衛 新次郎 死

百石

寛政十二庚申七月十七日養父幸左衛門内願二付休息被仰付、 家督無相違

被下置、 大御番組被入

享和元酉十月十六日御前様附御広式御用達被仰付

岡嶋鉄之助 多気

百石

文化二丑四月十一日岡嶋清兵衛病中養子被仰付、 跡目幼年二付御吟味之

上十人扶持被成下、 御留守番組へ被入、伺之通指扣被仰付

文化七午十月七日新知百石被成下、 大御番組へ

文化十三子七月廿日不埒ニ付遠慮

同十四丑十二月五日不埒之義二付閉門

文政六未ノ四月五日不埒ニ付閉門、六月十六日御免

同十二丑四月廿九日不慎之義有之閉門、同七月廿八日御免被成

天保十五辰年二月廿五日病中内願、休息被仰付

岡嶋恒 虎吉 恒之助

(士族)

百石

弘化元辰二月廿五日養父鉄之助家督無相違被下置、 大御番組江被入候

嘉永五子年江戸詰、 同六丑四月十七日帰着

安政四巳年正月廿八日御製造方見習被仰付候

同年四月廿二日御製造方吟味役被仰付候

同年十二月十一日御普請を始種々御端立御用多之処、

付銀七枚被下置候

同五午十一月十六日制産方勤向出精二付、

小者給銀百五拾匁御扶持方壱

人扶持被下置候

万延元申六月廿六日御番皆勤二付時服被下

同年八月十四日制産方頭取被仰付、 役中御扶持方三人扶持被下置候、 且

又右ニ付是迄被下候小者給并御扶持方壱人扶持ハ以後不被下候

文久二戌正月十六日役儀其儘格式末之番外二被仰付、是迄役中被下候御

扶持方三人扶持之儀も被下置候

同年四月廿四日御用有之長州下ノ関江出立、 七月三日帰

同三亥七月廿八日役儀其儘御役料五十石被下置、 郡奉行次席二被成下、

御役人兼被仰付候

但右二付是迄年々被下置候三人ふち之義ハ已後不被下候

格別出精相勤候二

元治元子二月廿日席御役料其儘御奉行役見習被仰付候

同三月晦日三ノ丸御普請御用懸り被仰付

同年四月廿二日内達之儀も有之ニ付中村市右衛門家屋敷へ替被下

元治元子十二月賊徒一件二付出張、依之御手当銀六百匁被下置候

同二丑三月十三日江戸詰出立、寅四月廿日帰

慶応卜改元、五月十二日席并役儀其儘御役料五十石御増、 都合百石被下

同年八月五日三ノ丸御座所御普請御用掛り出精相勤太儀ニ思召候、 此段

申聞候様被仰出候

同 一寅六月五日御奉行本役被仰付、 御役料都合百五拾石被下置候

同月十七日御用有之ニ付早速上京被仰付出立、 九月八日帰

同年八月 弟吉池角兵衛重キ御咎ニ付遠慮伺之上指扣被仰付、 同晦日

御用之儀ハ出勤候様、 九月二日御用外指扣之処御免

慶応三卯四月二日宰相様御上京被遊候節上京被仰付、 同十一日出立、 五.

月廿二日帰

同年八月二日今度於御座所御建継御普請被仰出候ニ付御用掛リ被仰付

同四辰二月廿九日御取締地并御預所元締役兼勤被仰付候、 別而今般被仰

出之趣も有之候間入念取扱候様被仰付候

同年三月廿日会所掛リ被仰付候

同年四月五日北陸道惣督御通行之節心配相勤候段御褒詞

同年五月九日御趣意二付御役儀御免被成席予備組支配上二被仰付

但右ニ付御役料ハ已後不被下候事

同月十一日席其儘町方支配被仰付、 御役料百石被下置候

明治二巳二月十五日民政局承事被仰付候

但月給米七十俵御役料ハ不被下候

同年十一月朔日出納方主務被仰付候事

但四等官小栗環次

月給米一年分弐拾俵被下候事

同月廿一日司計局権大属被仰付候事

同月廿五日今般御改革、更給禄米六拾俵四斗三升六合被下候

同三午七月十七日恒之助事恒一ト改

同年九月五日本官被免優待列へ被入候事、 席坂井務次

同五申正月九日大坂へ用向有之趣ニ而出立

岡嶋

岡嶋滝右衛門

弐拾石四人

岡嶋九郎右衛門 八十八 忠太左衛門

廿石四人

享保七寅五月十一日養父滝右衛門跡目無相違、 同年冬順席

明和七寅閏六月廿日御代官御留守番入

岡嶋九郎右衛門

廿石四人

安永六酉三月十六日養父九郎右衛門休息、 家督無相違、

天明八申八月廿日番改加瀬平左衛門跡

御書院番入 岡嶋力 力太郎 喬

[士族]

文化九壬申九月十六日休息、家督無相違養子安兵衛へ被下置候 寛政十二申八月十一日御旗本武具奉行永田伝内跡、

岡嶋左太夫 安兵衛事

廿石四人

一文化九申九月十六日養父九郎右衛門休息被仰付、 家督無相違被下置、 御

留守番組江被入候

同年十月十九日無役御留守番組江被入候

文政三辰八月十一日大御番組へ被入候

同六未江戸詰

同十三寅六月五日御番改大河原作左衛門跡被仰付候

天保十五辰六月廿日御代官吉田平次左衛門跡被仰付候

嘉永六丑三月十一日年寄候二付休息被仰付候

岡嶋左太夫

弐拾石四人

嘉永六丑三月十一日養父左太夫儀年寄候二付休息被仰付、 家督廿石四人

扶持無相違被下置、 無役御留守番組へ被入候

安政三辰九月十六日大御番組へ被入候

同年十二月廿八日左太夫与名替

同六未六月十七日横浜御警衛詰被仰付出立、 翌申四月十九日帰

万延元申七月十一日太田御陣屋詰中臨時横浜へ出張ニ付御褒詞

文久二戌十一月廿九日兼而眼病相煩難儀二付内願之通休息

弐拾石四人

文久二戌十一月廿九日親左太夫儀兼而眼病相煩難儀ニ付、内願之通休息

被仰付、家督廿石四人扶持無相違被下置、 大御番組へ被入候

同三亥十二月七日評定所留役加藤佐太郎跡被仰付

元治元子九月十八日評定所留役其儘御用部屋御記録方兼帯被仰付、

御足

充行弐石壱人ふち被下置候

同年十二月賊徒一件出張、 御手当銀三百匁被下

同二丑正月廿日昨年来御内用御右筆助相勤候二付、 金百疋被下置候

慶応元丑閏五月十一日御趣意二付役御番組江被入候

同三卯四月廿二日御足充行其儘御内用御右筆見習被仰付候

同年十二月十四日殿様御上京御供被仰付

同年同月廿二日御内用御右筆本役被仰付、 御足充行三石御増都合五石壱

人ふち被下置候

同四辰正月廿四日早速上京被仰付、 同廿六日出立、 九月廿一日帰

明治二巳二月十五日掌政局記録被仰付、月給十五俵、御足充行ハ不被下

候

同年九月十二日東京詰永井清也ト致交代候様被仰付、同廿七日出立

同年十月廿五日行事記録方被仰付候事、但月給米是迄之通

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米四拾五俵壱斗四升四合下賜

同月廿八日掌政堂少書記被仰付候事

同三午正月十日職名権少目ト被改候事

同年六月廿七日公用人試補兼被仰付、 来未秋迄詰延被仰付候事

但十四等岡本晋次

岡嶋清八

同十三未七月廿二日御代官中山仁左衛門跡

宝曆十一巳六月十一日在方役所目付役被仰付

守番入、為役料米五俵被下

延享四卯三月十六日御徒目付ゟ御取立、掃除奉行葛岡惣左衛門跡、

同年十二月十二日任権少属 年給廿八俵

但掌政堂勤任

明治四未六月朔日御改正二付免職、 但東京中従前之通

同年七月十三日帰藩被仰付候事

同廿一日任福井藩権少属

同月力太郎事喬ト名替

同年八月 同年十一月廿六日免本官

同五申正月廿七日第三区戸長

同年五月喬事力メルトメ

同年七月十九日第三区松崎町組副戸長

同月願上東京

同年十月三日司法省十一等出仕

十八石三人

明和二酉二月廿五日父清右衛門休息、家督無相違、 大番入

岡嶋清左衛門 病死

十八石三人

明和七寅正月十六日養父清八休息、 家督無相違、大番入

同九辰十一月廿九日相身躰末

岡嶋勢右衛門 鎌之助 清右衛門 音作

拾五石三人

寛政二戌二月十六日父清左衛門跡目無相違、

大番入

同八辰九月四日御定之年数相満候二付順席

文化元子年十一月廿五日不埒至極之義有之三石御取上、新番へ御下被成、

閉門

同十三寅七月廿日不埒二付遠慮

文政五午十二月五日病死

岡嶋斧太郎

拾八石三人

岡嶋清右衛門

岡嶋

拾五石三人

御留

文政六未正月廿五日父勢右衛門跡目無相違被下置、新番入

文政十亥年病死、此跡目御趣意ニ付小役人席へ被仰付候

岡嶋清太夫 清之助

拾五石三人

新番格御取立被成候処、今度思召を以、以前之通新番組江被入候一嘉永元申年十二月廿八日御趣意ニ付先年小役人席江御下ケ、其訳如前書一天保十二丑十二月五日御取立被成、新御番格被仰付

一安政元寅十二月廿五日御台所目付其儘、同頭兼帯被仰付候

万延元申十二月十六日出精相勤候二付、御足充行弐石被下置候

一文久二戌六月廿五日出精相勤候ニ付大御番組江被入、御足充行弐石其儘

被下置、役儀之儀ハ御免被成候

但此時順席江被入

一元治元子十二月賊徒一件出張、御手当三百匁被下置候

慶応元丑十月八日小荷駄造営方被仰付候

一同三卯二月廿五日年寄候二付休息

岡嶋勝二 勝助 清十郎 治郎太夫 清太夫倅

〔士族〕

拾五石三人

文久三亥五月廿五日当亥年御参府之節御番士役配御雇御供被仰付、逗留

中五人扶持被下候旨、八月十七日出立、十二月江戸ゟ御上京御供

同年十二月於江戸表清十郎ト改

元治元子二月十三日御供ニ而京都ゟ着

一同年二月廿日支度出来次第上京被仰付在京中五人扶持被下置候、三月二

日出立、四月十二日帰

同年十月長征、丑二月二日帰

一慶応二寅三月十一日一番之補兵隊へ附属被仰付候、京都詰被仰付、

八日出立

同年四月廿九日三番へ割替

一同三卯正月十二日京ゟ帰

一同月十六日鳴物方頭取被仰付、役中年々銀拾枚ツ、被下置候

同年二月廿五日親清太夫年寄候二付休息被仰付、家督拾五石三人扶持無

相違被下置、鳴物方頭取其儘被仰付役御番組へ被入候

但家督被下置候ニ付、是迄年々被下置銀拾枚之儀ハ以後不被下候

同年五月廿日鳴物方頭取其儘締方被仰付候

同年十月十五日清十郎事治郎太夫ト改

同廿二日御旗本鳴物方被仰付候

一同年十一月五日御趣意二付鳴物方御免被成、第一遊撃隊江被入候、且又

昨年御端立已来出精相勤候二付銀五枚被下置候

一同四辰四月三日京都御警衛詰出立、九月十五日帰

明治卜改元、十二月十三日殿様御上京御供出立、巳三月六日帰

一同年六月廿日治郎太夫事勝二ト改

一同二巳十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾五俵四斗五升被下

一同三午五月廿四日第一大隊一番小隊入被仰付候事

同年十二月 予備一番隊 年給弐俵

同四未四月七日右解隊被仰出候事



岡田喜右衛門 喜八郎

百石

四月

享保十八丑四月廿八日於江戸帰参被仰付、五人扶持并ニ金子十五両被下、

新番並

同十九寅六月六日御小道具手伝新番入、廿五石

元文元辰十二月十一日御書院番入、相身躰末

同三午五月十五日御小道具本役方川地波門跡、順席

同年七月六日新知百石

寛延三午六月五日病身二付御役御免、大番入

岡田喜右衛門

百石

寛延四未八月十六日父喜右衛門跡知、大番入

安永五申八月十四日山奉行多喜田五兵衛跡、御留守番入

天明元丑十二月十一日役義御免、大番組へ被入、遠慮

寛政四子六月十七日与内立合加藤清右衛門跡

同五丑九月朔日道奉行上水方取扱兼高間九兵衛跡

同九巳九月廿五日御代官栗原彦右衛門跡

享和二戌年七月四日大馬印奉行矢野権平跡

岡田喜右衛門 万三郎

百石

文化三寅十一月廿二日父喜右衛門隠居、家督無相違、大御番入

同九申正月廿五日御前様御附御広式御用達

同十三子四月十九日御近習番御書院番入大谷第八跡

文政元寅十月十日御書物方今村百之助跡

文政九戌二月廿四日威徳院様御逝去ニ付御役御免、大番入

文政十亥年六月廿日御預ケ所御金奉行松原七左衛門跡被仰付

天保二卯十月廿五日御勘定拝借奉行御趣意金取扱被仰付

天保五午六月十六日格式末之番外被仰付候

天保八酉八月八日病死

岡田喜八郎

百石

一天保八酉九月廿九日親喜右衛門家督百石無相違被下置、大御番組へ被入

同十亥十二月五日表御小姓林久太郎跡被仰付

一同十二丑江戸詰被仰付、三月廿日出立

同十四卯七月廿二日御小姓加賀九郎右衛門跡被仰付候

一弘化二巳江戸御供詰ニ付、三月廿一日出立

一同三午七月九日郡奉行千本藤左衛門跡被仰付、御役料五拾石被下置

嘉永三戌九月十五日御目付役長谷部甚平跡被仰付、

下置侯

同四亥十月廿九日来子年江戸御留守詰被仰付

同五子二月廿六日病身ニ付内願之趣も有之、御役御免被成、御先物頭次

同年十一月十八日席其儘郡奉行三岡助右衛門跡被仰付、

御役料五拾石被

席被仰付

下置

一同六丑九月十五日中領郡支配被仰付候

安政元寅十二月廿二日今度御軍帳御改正二付、右役人支配定懸り被仰付

依之懸り御用人申談取扱候様被仰付候

同二卯正月十五日出精相勤候二付、役義並席其儘御役料五十石御増、都

合百石被下置候

御役料都合百五拾石

岡田喜藤太 文久二戌十月六日今度農兵御端立二付、 文久二戌十二月廿五日御上京留守中御目付助被仰付候 同年四月十五日御趣意二付、 翌申四月十九日帰着 慶応二寅二月廿日年寄候二付隠居被仰付候、 被下置、 安政四巳二月十五日出精相勤候二付、 万延元申七月十一日太田御陣屋御雇詰被仰付候二付銀弐枚被下置、 元治二丑正月八日年来出精被相勤候二付、 万延二酉正月十八日御預所郡奉行武田平右衛門跡被仰付、 同年十一月十一日御預所郡奉行兼勤之義ハ御免被成候 同五午十月十八日今度北国筋湊々見分為御用公儀御役人被罷越候二付 同年閏五月十一日先達而御役人並被仰付候処、 仰付候 詰中三人扶持被下置候 節ニ中ノ口致往来候様被仰付候 元治元子賊徒一件二付出張、 右詰中臨時横浜へ出張ニ付御褒詞 安政六未六月十四日横浜御警衛ニ付御雇詰、 被仰付候 二被成下、御役人並之儀者是迄之通被仰付候 右御用掛り被仰付候、十二月十一日右出精ニ付御褒詞 御役人並被仰付候 実青山小三郎弟 依之御手当銀八百匁被下置候 以来三領並川北領共打込致支配相勤候様被 御役料五拾石御増、 西尾十左衛門申談教授手伝被仰 太刀目録席御広式御用人次席 支度出来次第出立被仰付 右ニ付折々御機嫌伺罷出其 此度御城代支配被指除候 御側物頭次席 都合百五拾石 (士族) 且又 慶応二寅二月廿日養父喜八郎年寄候ニ付隠居被仰付、 同年十二月賊徒一件二付出張被仰付、 同年十月十日今度新撰農兵百六拾八人之者共、 同日当春宰相様御職被為蒙候二付、早速上京取調等致心配太儀之段御褒 同年六月廿五日宰相様御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、 元治元子四月十七日京都表ゟ帰着 子三月二日在京中無息征長被仰付 同四子正月十六日御在京中無息致世話候樣被仰付候 同年八月五日御参府御供被仰付詰中御ふち方五人ふち被下置候! 同年七月八日上京被仰付相止 同三亥三月廿五日右御供ニ而 同年十二月十五日中将様御上京御供御用ニ付江戸表江出立之処、 付候 三人扶持被下置候 詞 被下置候 夫
ら
大
坂
江
為
御
迎
罷
越
御
供
二
而
京
都
江
到
着
之
処
、 罷越等二付此表致出立候処、 同年三月廿九日、一昨戌十二月江戸表へ罷出中将様御供ニ而京都表へ可 元治元子二月廿日支度出来次第上京被仰付、 被成候二付、 両被下置候 七日出立、十二月江戸ゟ御供ニ而上京、子二月十三日帰 ニ付途中ゟ京都 右差配役被仰付調練等之儀致世話候樣被仰付、 俄二御船行相成候ニ付途中ゟ京都江罷出、 帰着 右二付為御手当銀弐百匁被下置候 同廿三日出立 御国并他国共御用二御遣 失却も有之趣ニ付金壱 家督百石無相違被 依之銀壱枚 右差配役中 御都合

岡田藤兵衛 病

岡田

下置、 大御番組江被入候

同月廿九日農兵差配役被仰付、 役御番組江被入候

同三卯正月廿九日新撰隊教授方并指揮役兼被仰付

同年八月十一日右頭取兼被仰付候

同年十二月十三日御含御用有之大津宿へ出張被仰付、十五日出立、 辰正

月五日早駆御用二而罷越、 翌六日引返上京、 同月廿五日帰

一慶応四辰三月十二日半小隊長吉田喜左衛門跡被仰付、 役儀ニ付席末ノ番

外格二被仰付

同年四月朔日上京、 七月六日帰

明治ト改元、 九月十四日三番隊大隊之四番半小隊長西尾伝兵衛跡江組替

被仰付

同二巳五月廿一日支度出来次第東京詰被仰付出立、 十月廿九日帰

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米六十俵四斗三升六合被下

同三午六月廿二日第一大隊五番半隊長被仰付候事

同年十二月八日任小尉 年給三十六俵

但常備第一小隊

同四未四月二日東京詰出立

同年十月十三日今般解隊被仰出候二付職務被免候事、 十一月帰

同年十二月廿八日中尉心得勤 県下常備小隊

同五申正月十九日兵部省ゟ御達之旨も有之、県下常備解隊ニ付免職

廿五石五人

宝暦六子七月六日江戸ニおゐて御帳付ゟ御取立、 新番入、 御右筆部屋下

受込

同十一巳十二月廿八日御書院番入順席

同十二午五月十一日御足擬作十石弐人扶持被下

明和元申十一月九日御足擬作御加増被成下

岡田治兵衛 病死

廿五石五人

明和四亥二月十七日養父藤兵衛跡目無相違被下、

岡田藤兵衛 病死

廿五石五人

明和七寅正月廿七日養父次兵衛跡目無相違、 大番入

岡田惣右衛門

廿五石五人

天明五巳十二月廿日父藤兵衛跡目無相違被下、大番入

岡田金左衛門 金之助

百石

文化四卯三月廿日養父惣右衛門病中養子願之通被仰付、家督無相違、 大

御番入

文政十一子六月廿九日御番改萩原又市跡

百石 岡田貞弥 嘉永三戌七月廿八日養父金左衛門年寄候二付隠居被仰付、家督無相違被 下置 下置、 嘉永四亥正月十八日思召を以折々御機嫌伺罷出候、 同未ノ十一月十一日新知百石被下置候、 同三午十一月十六日御役前不参届儀有之ニ付遠慮 同十五辰七月十七日御札所目付兼帯之義者御免被成 同十三寅十月五日御奉行見習御使番次席被仰付、 候様被仰付候 嘉永三戌七月廿八日隠居 嘉永元申十二月三日御水主頭東郷平太夫跡被仰付、 弘化二巳三月五日御役前不参届儀有之、 同十四卯年御札所目付兼御役人並御長柄奉行次席被仰付 天保十一子十二月五日御勘定吟味役被仰付、 其儘被下置候 天保九戌五月十一日御預所御代官笠原平八跡、 中格別出精二付御紋御小袖被下置候 天保二辰十二月十一日出精相勤候二付銀三枚年々被下置、 同十二丑九月廿日勘定吟味役渡辺藤太夫跡被仰付 行拾七人扶持ニ御直シ被下置、 大御番組へ被入 弥 郎 是迄被下置候銀三枚ハ以後不被 出精相勤候ニ付 格式末ノ番外被成下、 是迄通二被下置候銀三枚 御役料五拾石被下置 役料都合百五十石被 其節々中ノ口致往来 御住居御普請 士族 御充 同五申七月弥一郎事貞弥 同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱 同年十一 同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、 同年五月四日元御書院番組席二被仰付 明治二巳四月廿日今般御改革二付役義被免、 同四辰三月十六日与内検地奉行水野荒次郎跡被仰付候 同 同年七月五日御番両度皆勤ニ付御紋御帷子被下 同年十月十五日長征出立、 同年十二月江戸ゟ御上京御供、 同年八月十七日御参府御供二而出立 同三亥正月廿三日中将様御船ニ而御上京被遊候ニ付御供、 文久二戌閏八月廿日江戸詰出立 同廿九日昨年江戸表御本丸炎上之節御人数指出候処、 万延元申六月廿六日御番精出御供皆勤二付時服被下 候 慶応二寅四月七日京都詰出立、 被下置候 元治元子三月二日上京、 三卯三月十四日与内立会須崎鷺助跡被仰付、 月廿五日今般御改革、 優待列 四月十二日帰 丑二月二日帰 同年十一月廿四日帰 更給禄米六十俵四斗三升六合被下 子二月御帰国御供着 御広間当番勤被仰付 御留守番組江被入 為御慰労廿五両被下置 出精ニ付金弐百疋 同三月廿五日

安政六未三月廿三日江戸詰出立、

同七申三月十四日帰着

岡田

岡田戸右衛門

拾八石三人

享保五子七月廿一日御徒ゟ御取立、三石御加増、 御作事吟味役竹内与五

太夫跡

同十一午三月十六日用水奉行御留守番入、雪吹牛兵衛跡

同十五戌十月廿五日御役御免、大番入

岡田源四郎 二代

拾八石三人

享保十六亥十一月五日父戸右衛門跡目無相違、大番入

岡田惣左衛門

拾八石三人

享保廿一辰四月廿一日養父源四郎跡目被下、

寛延元辰八月廿九日相身躰末

宝曆九卯三月五日御土蔵番御留守番入、 小堀伝右衛門跡

明和九辰十一月廿九日順席

安永五申八月十一日養子久五郎御追放之節役義御免、大番入、遠慮

岡田戸右衛門

拾八石三人

寛政二戌十月十六日養父惣左衛門休息家督無相違、 大番入

文政元寅十二月十一日休足被仰付

岡田戸右衛門 幾次郎 惣左衛門

拾八石三人

文政元寅十二月十一日親戸右衛門年寄候ニ付内願之通休息、家督拾八石

三人扶持無相違、無役御留守番組へ被入

同七申閏八月廿三日養子入

天保九戌十二月十一日心得違之趣相聞急度可被仰付処、 度々赦も被仰下

候折柄ニ候ヘハ格別之御憐愍を以遠慮

岡田文二 外太郎 文太夫

拾八石三人

天保十五辰十二月十一日親戸右衛門家督拾八石三人ふち無相違被下置、

無役御留守番組江被入候

安政三辰十二月廿八日文太夫与名巷

万延元申六月廿六日御番御供皆勤二付御紋御帷子被下

文久二戌十月六日今度農兵御端立二付、西尾十左衛門申談教授手伝被仰

付候

文久三亥八月十七日江戸表江御供出立

同年九月九日番改役高久官太夫跡被仰付、 九月廿四日帰

元治元子四月十五日上京、 八月廿二日帰

同年八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌、 相

働候段達御聴、 御褒詞

同年十一月十六日京都騒乱之節手負候二付、 為御手当金三百疋被下置候

一士族

同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、 明治二巳六月廿六日文太夫事文二ト改 明治二巳二月十一日二番大隊三番小隊之器械并彈薬差配方武内喜内跡被 同年八月五日御武具預り製造局附属被仰付、 同四辰二月廿七日当春京都御警衛詰被仰付、三月五日出立、六月廿七日 同年十月十七日御持武具奉行弾薬方兼帯入替被仰付候 同廿日御留守武具奉行弾薬方兼帯、 同年七月五日御番両度皆勤二付御紋御帷子被下置候 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三十九俵四斗三合被下 同月廿八日御広間当番勤被仰付役義之儀ハ被免候事、 仰付、 同三卯二月十六日御趣意二付役御番組江被入候 同年十一月十一日御武具御修復御改正中出精相勤候二付、 同二寅四月廿四日堺町戦争一件二付公儀ゟ被下配当金千疋、 慶応元丑十一月廿九日大坂表江出張 同年十二月賊徒一件二付出張御手当三百匁被下置候 置候 帰 付弐両弐歩被下置候 八月廿日帰着 製造局附属被仰付候 予備隊 内田唯作跡被仰付御留守番組へ被入 弾薬方之義ハ御免被成候 為御慰労弐十五金被下 但元御書院番席二 金弐百疋被下 且又手負ニ 岡田静哉 廿三石五人 廿三石五人 岡田助三郎 同二丑正月廿五日上京、 安政二九月九日病死 五枚被下置候 番組へ被入候 立方、格別之御評儀を以被召出、 岡田 和太郎 左衛門始巧者成弟子共申談、厚致修行候様被仰付候 有賀内記与力ゟ 長兵衛

「剝札」お末にあり

*

一嘉永五子十一月十四日内願之趣も有之、代々師役相勤来此後猶更家業引 新番組へ被入候、 乍併御充行之儀ハ御

時節柄之儀二付、廿三石五人扶持被下置候

[士族]

安政二卯十一月廿九日親助三郎家督廿三石五人扶持無相違被下置、 新御

但家督被下置候二付流儀之弓指南被仰付候処、家業未熟二付畑又

同四巳四月廿二日数代指南相勤別而近来出精太儀思召候、依之御目録銀

万延元申十二月廿八日長兵衛与改

元治元子十月十七日京詰出立、十二月帰

同年十二月賊徒一件二付出張御手当銀三百匁被下置候

五月七日帰

慶応元与改元、弓術之儀当節之形勢修行致し候向も無之、稽古之儀も不

立行躰ニ付、 内願之通弓師役御免被成候

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

同年八月五日先達而弓師役御免被成候処、 従来師役致心配太儀思召銀三

枚被下置候

同二寅十一月十一日京都詰出立

同三卯四月四日御上京御供振替り帰

同年十月十八日第二遊擊隊被仰付

同年十二月十二日急々上京被仰付十三日出立之处、 御模様二付途中ゟ引

返帰

同年十二月廿八日長兵衛事静哉ト改

同四辰正月九日急々上京、四月廿日帰

同年四月廿五日遊擊隊江被入候

明治卜改元、九月廿二日不快二付御警衛詰出立延引之処快二付上京、十

月十六日帰

同二巳四月九日中納言様御供東京江出立、十月十二日帰

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米五十俵壱斗五升被下

同三午六月廿二日第一大隊五番小隊入被仰付候事

同年十二月 予備二番隊 年給弐俵

同四未四月七日右解隊被仰出候事

岡谷

岡谷弥右衛門 休息

拾七石四人

享保四亥九月廿三日養父権次跡目無相違、

延享元子十一月十一日番改

宝曆十三未四月十六日眼病二付役義御免

岡谷権次郎 病死

拾七石四人

明和三戌八月五日父弥右衛門休息家督無相違、大番入

岡谷弥右衛門

百石

安永六酉八月廿日養父権次郎跡目無相違、大番入

同八亥十一月十六日御右筆井戸平左衛門跡、 御書院番入、御擬作八石壱

人扶持御足

寛政七卯十二月十九日八石壱人扶持御加增、

都合弐拾五石五人扶持

同十午十月廿八日御右筆受込見習

享和二戌十一月廿九日表納戸天谷拾右衛門跡

文化元子十一月廿九日御内御右筆青木与一右衛門跡

文化七午十月十七日新知百石表御祐筆、 御書院番入

文政三辰十二月十六日末ノ番被仰付、 役義其儘

同五午二月十六日死

岡谷弥右衛門 五郎作事 三郎右衛門事

百石

一文政五午四月十一日養父弥右衛門家督百石無相違被下置、 大御番組へ被

入

同十二丑江戸詰被仰付、 四月十六日出立

一同八酉江戸詰被仰付、四月十五日出立一天保四巳江戸詰被仰付

一同十二丑七月廿日御金奉行丹羽与右衛門跡被仰付候

一同十四卯江戸詰被仰付、七月十二日出立

同十五辰七月十九日御札所奉行高畠市郎右衛門跡被仰付

一弘化三午十一月十八日新札引替之節出精ニ付御紋御上下一被下之

嘉永元申四月廿日格式末之番外被仰付候

一同四亥二月五日内願之通隠居

岡谷弥平 鉄吉 弥右衛門

百石

一嘉永四亥二月五日親弥右衛門内願之通隠居、家督百石無相違被下置、大

御番組江被入

一同五子十二月廿八日弥右衛門与名替

同六丑七月廿日今度思召を以支度出来次第江戸表へ罷出、砲術調練致修

御扶持方三人フチ被下置同廿七日出立、

同七寅年四月十

五日帰着

行候様被仰付、

同七寅年三月廿三日御殿山へ出張ニ付御下緒壱掛ケ被下置候

一同年十一月廿九日筒井小太郎稽古納之節菅沼主水宅へ罷越候始末、酒狂

与ハ乍申不宜致業ニ候得共、此度之儀ハ御沙汰ニ不被及候間、以来右様

之儀無之様番頭へ移りを以被仰付候

安政三辰五月三日表御小姓林藤兵衛跡被仰付候

一文久二戌九月五日江戸詰出立

同三亥正月廿三日中将様御船二而御上京被遊候二付御供、三月廿三日京

都ら御供ニ而帰着

同年十月十三日中将様御供二而上京

元治元子四月廿三日右御供ニ而帰

元治元子六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀二思召候、依

之御酒被下置候

同年十二月賊徒一件二付出張、御手当銀六百匁被下置候

慶応元丑十月朔日宰相様御出坂御供出立、同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰

同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月九日帰

同年十月廿六日御書院番組へ被入、役儀之儀ハ御免被成候

一同年十一月三日今度御軍制御改革之御趣意二付、御広間当番勤被仰付候

(士族)

道中泊宿二而出奔、恐入伺之上遠慮被仰付、同廿七日御免、御広間同四辰九月八日明治卜改元、同廿日倅勝太郎先達而越後表へ致出張候処

明治二巳六月廿一日弥右衛門事弥平卜改

一同年九月十七日倅勝太郎昨年出張之途中令脱走不届至極之始末、兼而教

諭方不行届二付遠慮被仰付、十月七日被免

但勝太郎義ハ士籍取放長禁錮

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米六拾俵四斗三升六合被下

予備隊

一同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱



大内七郎兵衛

弐拾石三人

寛文四辰三月親伊右衛門為跡目被下置

大内七郎兵衛 宮原伊左衛門

廿石三人

宝永七寅二月廿二日父七郎兵衛家督無相違被下

正徳五未四月廿一日御土蔵番上坂才右衛門跡

大内猪左衛門 猪之助 休息

廿石三人

延享二丑七月廿五日父七郎兵衛休息、家督無相違、大番入

宝曆六子正月十六日番改川崎金太夫跡

明和五子十月五日病身二付役義御免

安永六酉三月廿日御先武具奉行平井三左衛門跡

天明三卯八月十六日御籏本武具奉行内田安右衛門跡、御書院番入

大内七郎兵衛

廿石三人

天明八申八月十日父猪左衛門休息、家督無相違、大番入

寛政四子七月廿九日家内締り方不宜ニ付遠慮

文化十五寅三月廿九日休息

大内猪左衛門 鉄吉事 彦十郎

廿三石三人

一文化十五寅三月廿九日親七郎兵衛内願之通休息被仰付、家督無相違被下

置、無役御留守番組江被入候

一文政七申閏八月廿三日大御番組江被入候

天保十四卯二月十六日御番改役市村三右衛門跡被仰付候

一安政二卯八月廿五日御代官役中山太郎左衛門跡被仰付、御留守番組江被

入候

万延元申六月廿六日御番数度皆勤ニ付羽織被下

元治元子十二月賊徒一件、御留守御用御手当百匁被下

慶応元丑九月十一日出精相勤候ニ付、年々銀五枚ツ、被下置候

同二寅十二月猪左衛門与名替

一同三卯二月十六日年来出精相勤候ニ付御充行三石御加増、都合廿三石三

人扶持被成下、御書院番組江被入候

但御加増被成下候ニ付、是迄年々被下置候銀五枚之儀ハ以後不被

一同四辰二月五日年寄候ニ付休息

大内勝吉 半十郎 猪左衛門倅 カツヨシ

〔士族〕

弐拾三石三人

文久三亥八月十三日当秋芝御陣屋御番士御雇詰被仰付、詰中御ふち方五

人ふち被下置候、廿八日出立

一元治元子七月十六日御陣屋ゟ帰着

同年十二月賊徒一件出張、御手当弐百匁被下

同二丑正月十六日京都堺町御門為御警衛上京被仰付、十九日出立

慶応与改元、京都詰其儘一番之補兵隊被仰付、寅正月廿九日帰

一同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月同断帰

同三卯九月廿七日御趣意二付補兵隊御免被成候

同四辰正月八日補兵隊被仰付、 此度御上京之節御供被仰付

同年二月五日親猪左衛門年寄候二付休息被仰付、家督廿三石三人扶持無

相違被下置、第一遊擊隊江被入候

同年四月三日京都御警衛詰出立、閏四月十五日帰

同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、巳二月廿七日出張ニ付十三

両被下候、外ニ五百疋

明治ト改元、十月十八日先達而於村上表隊長并役向江も不相達、渡り人

甚吉と申者打捨ニ致業不束之儀ニ付可被及御沙汰之処、今度之儀ハ戦功

も有之ニ付不被及御沙汰候間、已来心得違無之様被申渡候

同二巳十一月廿五日今般御改革、 更給禄米四拾六俵三斗七合被下

同三午四月廿五日戊辰北越出張軍事精励二付、 御賞典之内十石三ケ年令

頒授候事

同年六月廿二日第一大隊三番小隊江被入候事

同年十二月 予備一番隊 年給弐俵

同四未四月四日右解隊被仰出候事

同五申二月晦日補亡方申付候事

同年五月半十郎事勝吉カツヨシ

奥村

奥村九助

廿石三人

享保七寅十一月廿五日御鷹匠ゟ御取立、三石御加増、 新番入

> 同十七子九月廿五日弐石御加増、都合廿石、 御鷹方

奥村九助

廿石三人

享保廿卯閏三月五日父九助休息家督無相違、 新番、 御鷹方

寛延元辰八月廿九日大番入

明和六丑十月病死

奥村九助 休息

廿石三人

明和六丑十二月十一日養父九助跡目無相違、 大番入、御鷹方

同九辰十一月廿九日相身躰末

寛政八辰九月四日御定之年数相満候ニ付順席

奥村円六 桐之丞

廿石三人

文化元子五月十一日親九助病内願二付休息被仰付、 家督無相違、 大御番

入、御鷹方

同十五寅ノ四月二日病死

奥村健左衛門 小十吉 九助

廿石三人

文化十五寅五月八日先円六家督無相違被下置候

嘉永五子年十二月十一日近来多病其上耳遠二相成候二付、 内願之通休息 候

被仰付候

〔士族〕

弐拾石三人

奥村桐之丞

扶持無相違被下置、大御番組へ被入、御鷹方被仰付候嘉永五子十二月十一日親健左衛門儀内願之通休息被仰付、家督廿石三人

一天女里引手三月十八日即是五儿習女叩け、コ儿習ュ即奪方即已安立扶持無相違被下置、大御番組へ被入、御鷹方被仰付候

一安政四巳年正月廿八日御製造方見習被仰付、右見習中御鷹方御免被成侯

一同年十二月十一日種々御端立御用多之処、格別出精相勤候ニ付銀五枚被

下置候

一同年同日御製造方吟味役被仰付候

一安政五午十一月十六日出精相勤候二付銀五百匁被下置候

一文久元酉十月五日出精相勤候ニ付銀三枚ツ、年々被下置候

一同二戌九月十一日御勘定吟味役打込勤被仰付候

一同三亥十月三日此度制産方御附属ニ付郡方吟味役被仰付

元治元子十二月賊徒一件出精二付御手当銀三百匁被下

一慶応元丑五月廿六日右一件別段骨折候ニ付銀弐枚被下

一同年九月廿二日出精相勤候ニ付銀七枚御増、都合十枚ツ、年々被下置候

丞方ニ而養育可致之処、小身ニ而大勢相暮兼而勝手向難渋之趣ニも相聞、同二寅十二月廿日同姓坦蔵先達而令病死候ニ付、幼稚之倅慎一郎儀桐之

以慎一郎七歳迄養育為御扶助米四俵ツ、年々被下置候

旦坦蔵勤中他国御用を始御用弁相成候訳合も有之ニ付、

同三卯二月十六日御代官役鈴木丹蔵跡被仰付

但転役被仰付候ニ付、是迄年々被下置候銀拾枚之儀ハ已後不被下

一同四辰四月廿日御預所御代官役郡方吟味役兼被仰付

一明治二巳正月四日御代官郡方吟味役兼其儘川方兼被仰付候

一同年二月十七日民政局庶務方ト被仰付、月給十五俵、役米ハ不被下候

同年七月十九日民政局庶務方引立方被仰付候事、但月給米是迄之通

一同年十一月廿一日今般御改革二付、役儀被免候事

但附送り之義ハ追而御指図相待可申事

同日民政局少属被仰付候事

- []]]] / []] / []] / []] / []] / []] / [] / []] / []

同月廿五日今般御改革、更給禄米四拾弐俵六升被下

同三午正月十三日治水堤防等格別致出精二付金五百疋被下事

一同年四月十八日今般御改正二付、少属被免予備隊江被入候事

一同月十九日民政寮少属被仰付候事

但収納方

一同年十二月十二日任権少属 年給弐十八俵

但民政寮勤仕

同四未六月朔日御改正二付免職

同五申八月三日第一区神楽町組副戸長申付候事

大橋

大橋久右衛門

出格之御憐愍を

拾八石三人

享保十九寅十一月十六日小役人ゟ御取立、新番入被仰付、御台所頭其儘

大橋久右衛門 代五郎

十八石三人

元文二巳二月廿五日養父久右衛門跡目被下、新番入、勘定所へ罷出見習

可申旨

寬保元酉六月廿五日川除吟味役南部茂右衛門跡

延享二丑六月十六日役義御免

明和九辰十一月廿九日年来取次役相勤候二付大番入

安永五申八月十四日御土蔵番御留守番入

天明八申七月廿五日役義御免、大番入

大橋十兵衛 久右衛門

拾五石三人

寛政二戌十月十六日父久右衛門休息、家督無相違、大御

同三亥十一月十六日不埒之趣有之二付、遠慮被仰付

同八辰九月四日御定之年数相満候二付相身躰末

文化五辰二月十六日用水奉行坂井勘左衛門跡、御留守番入

同十二亥九月十一日御広式御用達鈴木弥左衛門跡被仰付候

同十四丑十二月五日御役御取揚三石御取揚、

新御番へ御下、

遠慮被仰付

文政七申閏八月十一日休足

大橋金兵衛 久右衛門

廿石三人 御足五石弐人

一文政七申八月十一日親十兵衛休息、家督無相違被下置、新御番組江被入

一天保九戌五月十一日御広敷添役被仰付

一同十一子二月廿九日御台所目付被仰付

同十四卯十二月十六日川除奉行大町次左衛門跡被仰付

一弘化二巳十一月十六日荒子頭古市八兵衛跡被仰付

一嘉永二酉正月十六日出精相勤其上武術心掛宜ニ付大御番組へ被入、御掃

除奉行伊藤武兵衛跡被仰付、御留守番組へ被入

同四亥五月十六日玉薬奉行田辺奥右衛門跡被仰付、大御番組へ被入

同五子六月十六日御花畑絵奉行鈴木藤吉跡被仰付、御留守番組へ被入候

可ごうくり一口目さんだいかき、十曳ことと、ことなって、

一同七寅八月十四日年来武芸心掛候ニ付銀三枚ツ、年々被下置、役儀之儀

ハ御免被成、大御番組へ被入候

其上先年異国船渡来之節御用ニ罷出候儀も有之ニ付嫡子ニ被成下、小藤一安政三辰五月廿二日妾腹之実子小藤太儀、於江戸表長剣格別致出精候趣、

太江御目録銀五枚被下置候

弟子之義も引立為出精候様被仰付候、右ニ付御番之義ハ御免被成候南之義ハ追而可被及御沙汰旨被仰付候、依之後見被仰付候間、亮助始相一安政四巳十二月三日慶増亮助義家督被下置候処、家業未熟之儀ニ付、指

被仰付候ニ付勤中御足三人扶持外ニ年々被下置候、銀三枚其儘被下置候一同年同月十一日先年も後見同様被仰付候処骨折致世話、今度又々後見も

同五午六月廿八日暁、屋敷出火ニ付伺之上遠慮、七月六日御免

後見被仰付置候義ニ付別段之御評議を以、三ノ丸内御用屋敷安倍又三郎安政五午七月八日居宅再応之焼失ニ付、内達之趣も有之、且又慶増亮助

居住致居候長屋当分御貸被成候

一同六未三月廿日慶増亮助儀流儀之鎗指南被仰付候得者、是迄之通相心得、

尚又厚致心配候様被仰付候

御充行弐石御加増、都合拾七石三人扶持ニ被成下、内達之通後見御免被一万延元申六月廿日是迄慶増亮助後見心配相勤、其上従来武術心掛候ニ付

廿石三人 大橋小藤太 明治二巳二月十六日年寄二付休息 慶応元丑五月六日数年来武芸厚心懸候二付、 同年十二月賊徒一件二付出張、 元治元子四月五日屋敷地昨年御用地二被仰付候二付、為代地先達而御用 文久三亥四月廿日次男巳三郎儀不埒至極之所業致し令出奔候ニ付、 同年十二月十一日年来武術厚心掛候ニ付三石御加増、 文久元酉三月十一日御書院番組へ被入候 同年三月十七日次男巳三郎出奔二付遠慮伺差扣 同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立 同二戌五月十三日居宅再応之焼失ニ付、先年内達之趣も有之、 嘉永六丑二月 候 地二相成候御船町元御水主組地之内二而、 調法之事ニ候、 成候、 候得ハ侍御削、 下候二付、三岡石五郎揚屋敷当分御貸被成候 評議を以三ノ丸御用屋敷長屋御貸被成候処、内田閑平右御用屋敷へ替被 扶持之儀ハ以後不被下候 二被成下候、 且又是迄年々被下候銀三枚其儘被下置、後見勤中被下候御足三人 右二付是迄年々被下置候銀三枚之義ハ不被下候 依之遠慮被仰付候、 御国追放被仰付筈二候、 江戸表江罷出、 御手当銀三百匁被下置候 斎藤弥九郎へ相手寄長剣修行致度願之 急度相慎罷在候樣被仰付、 金兵衛儀も兼而締り方不参届不 百坪余拝地二被仰付候 定充行五石弐人扶持被下置 都合廿石三人扶持 別段之御 五月十一 一士族 立帰 明治二巳二月十六日親金兵衛年寄二付休息被仰付、家督廿石三人扶持無 同年四月廿五日遊撃隊へ被召出、 同年九月廿七日御趣意二付補兵隊御免被成候 同三卯四月十二日宰相様御上京御供出立、八月九日帰 慶応二寅三月十一日二番之補兵隊へ附属被仰付候 同年八月廿八日御上京御供出立夫ゟ征長、 同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別骨折候二付、 同四子二月五日京都ゟ帰 同年八月廿一日早速上京被仰付廿二日出立、 文久三亥二月十日殿様御上京被遊候二付御供、 安政三辰五月廿二日妾腹之処於江戸表長剣術格別致出精候趣、 同年九月廿一日昨春冶長剣修行願出府之処勝手向不如意、 同七寅三月廿三日品川御殿山御固場へ出張心配罷在候ニ付、 同年九月八日御警衛詰上京、 同四辰正月八日補兵隊被仰付、 候 元治元子二月廿三日滞京中不行状之趣相聞候二付、 被下置候 異国船渡来之節御用ニ罷出候儀も有之ニ付嫡子ニ被成下、御目録銀五枚 難儀之処、 被下置候 有之ニ付御国表へ罷帰候様被仰付 通被仰付、 上三月廿二日御供外ニ而出立 御内移之訳も有之ニ付、猶又来卯夏迄指置厚修行為致度願之 御扶持方弐人扶持并為失却月々金壱歩ツ、被下置候 十一月十六日帰 此度御上京之節御供被仰付 五人扶持被下置候 丑 同四子正月廿八日御都合も 二月帰 三月六日御供二而帰着 移りを以御叱被成候 銀壱枚被下置 運送金等指支 御下緒 其上先年 掛

相違被下置、遊擊隊江被入候

一同年四月九日中納言様御供東京へ出立、十月十二日帰

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米四拾弐俵六升被下

一同三午五月廿四日第一大隊一番小隊入被仰付候事

同年十二月 予備一番隊 年給弐俵

同四未四月七日右解隊被仰出候事

大橋

「剝札」お末にあり

大橋左次兵衛

拾八石三人

文化十三子十二月十六日小役人格ゟ御取立、新番格、勤方是迄之通

文政二卯三月十一日御蔵奉行坂井安太夫跡

同三辰七月廿五日御趣意銀御貸方江上茂太夫跡

大橋左渓

十五石三人

文政七申十二月廿三日御茶道被召出

天保八酉四月六日病死

大橋左渓 甫三

拾五石三人

天保八酉五月廿九日親左渓家督拾五石三人扶持被下置、御茶道被仰付

天保十一子九月十六日兼而行状不宜、其上心得違之趣ニ付遠慮

大橋有甫

拾五石三人

一天保十四卯十二月十一日養父左渓家督拾五石三人扶持被下置、御茶道被

仰付候

弘化二巳九月十六日心得違之趣有之二付遠慮

嘉永六丑十月十八日拝領地面此度願之上差上、家作之義ハ被下置候処、

右家作御買上被成候

一同七寅十一月廿五日病死

大橋湊 玄樹 実細井玄春養家之弟

拾五石三人扶持

一安政二卯正月十六日病中願之通養子ニ被仰付、家督拾五石三人扶持無相

違被下置、御茶道可被仰付処、医業心掛候趣ニ付其身限表御外科本道兼

带被仰付候

一同六未十二月十六日除痘館当番皆勤御褒詞

一文久元酉十二月十六日右同断

一文久二戌三月十一日奥御鍼医師御雇被仰付候

一同三亥三月廿四日奥御外科本道兼当分奥御鍼定助被仰付候

一同年四月十七日奥御外科本道兼帯被仰付候ニ付其身限り并表御外科定末

席之儀ハ被相除候

一同年十二月十一日除痘館当番致皆勤候二付御褒詞

一元治元子二月廿三日支度出来次第上京被仰付、三月三日出立、四月十二

日帰

[士族]

同 同年六月三日養弟左一郎御咎二付伺遠慮、 明治二巳二月二日御趣意ニ付無役新番組江被入、家業之儀ハ御免被成候 同年三月七日征長御供ゟ罷帰無間も右出張太儀之段御褒詞 同年十月十四日長征出立、 同年六月廿五日当春宰相様御職被為蒙候二付早速上京太儀二思召候、 同三午二月四日病院庶務方薬品出納掛り手伝被仰付候事 同月十九日修業隊江被入、勤向可為是迄之通候事 同年十二月九日病院方被仰付候事、 同七日玄樹事湊ト改 同三卯二月廿七日今般殿様御立帰御上京御供被仰付候、 慶応ト改元、十二月十六日除痘館当番皆勤二付御褒詞 同十一月廿八日於小倉御宿陣中心得違之趣相聞候不調法之事ニ候、 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三十五俵四斗五升被下 同年八月十四日医術製薬方被仰付候事、但是迄之通学校可為管轄候事 四月四日帰 同二寅十二月十六日奥御針医師定助勤中奥御針医師末席二被成下候 遠慮被仰付候、急度相慎候様被仰付、十二月十八日御免 段申渡候様被仰出候 一丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、 但修業隊其儘 但学校支配之事 但放発調練等致精励候樣 月給五俵被下候事 年給是迄之通 丑正月帰 但薬局方 三月朔日帰 同九日被免 三月十日出立、 依之 此 拾八石三人 大橋半蔵 安政四巳四月廿日出精相勤候二付御取立被成、 同二戌四月七日先達而御持場頭一件御用掛り出精之段、 文久元酉三月十四日江戸詰出立 同五午二月十一日役前不念之儀有之二付伺之上指扣, 同年十月十六日御勝手役并川除吟味役兼帯被仰付役中壱石御足、是迄之 同十八日更二会社薬品出納方手伝 同年十二月四日病院被廃免職 同年七月十二日薬品方被仰付候事 同四未六月朔日今般御改正二付職務被指免 同年十月九日酒井温返上屋敷内二而百七十四坪拝地被下候事 同年七月八日少管務被仰付候事、 同月十五日病院庶務方薬品出納掛り被仰付、 同月二日十五等二被仰付候事、 百疋、 同年十二月十二日学校勤 御足充行共都合三石被下置候 大橋 別段五十疋被下置候 但製薬買薬調剤兼、 但分科之儀ハ従前之通 十六等ノ三等 但御取立以前ハ御記録ニ有之 年給十三俵 十六等三等官禄被下候事 但年給是迄之通 但医学所病院勤 年給八俵被下候事 新番格二被仰付候 同十四 御褒詞之上金弐 [日御免

[士族]

置候、且又昨年来格別御用多之処出精ニ付銀五枚被下置候同十九日昨年来臨時ニ御用多之処格別出精相勤候ニ付、桐御紋御給被下

同五月七日帰着

同三亥正月十六日出精相勤候ニ付御取立被成、新御番組へ被入候

一元治元子十二月賊徒一件之節御留守御用相勤候ニ付、御手当銀百疋被下

一慶応元丑七月十一日三ノ丸御座所御普請御用掛り出精ニ付、御目録銀壱

枚被下置候

一同二寅三月廿三日上京

同年十月廿二日役新番組二被仰付候

一同三卯四月五日帰

一同年八月二日今度於御座所御建継御普請被仰出候ニ付、御用掛リ被仰付

同年十二月廿二日出精相勤候二付御足充行三石御加増被仰付、都合拾八

石三人扶持被成下候

同四辰五月十八日今般御趣意二付、役中役御番組江被入候

明治二巳十一月朔日今般御改革二付役儀被免、但当番勤当分御用捨之事

同日元司計決算掛り被仰付候事

但掛り中等級月給米是迄之通

同月廿五日今般御改革、更給禄米三拾九俵四斗三合被下

一同三午三月廿九日決算掛り之処御用済ニ付被免

一同日年来精勤二付御紋御上下一具被下候 優待列

一同年十月三日是迄居住罷在候持地拝地ニ被成下候

一同年閏十月廿五日優待列名目被廃非役卜唱

同五壬申九月二日元福井藩負債取調掛雇申付候事、廿四日被免

大橋

大橋小太郎 元武生家来 午十五

[士族]

慶応二寅七月 (マ、)

明治二巳十一月廿五日今般御改革之処、物頭已上二付士族二被仰付、給

禄之義ハ適宜御改正之上更被下候事

同三午正月廿三日米三拾六俵弐斗五升六合被下候

同年八月廿二日福井江引越被仰付候

同年九月十日堀江鹿門屋敷前ニ而百七十四坪拝地被下候事

一福井引越被仰付候ニ付是迄之建物被下候間取払可申事

一家作之儀ハ建被下候

一家作中寓居御貸渡被成候事、但百日限り

同年十月十二日修行列江被入候事

同日元御鷹部や内ニ而百七十四坪更ニ被下候事

同年閏十月廿五日右修業列名目被廃非役卜唱

同四未三月十九日御都合二付、山口平三郎横二而更二百七十四坪拝地被

下候事



大越伊左衛門 休自

寛保二戌二月十六日小役人ゟ御取立、新番入、廿二石四人

御預所下受込其儘

延享四卯三月十八日四石一人扶持御加増

大越

大越猪左衛門 吉之丞事

同年十月廿五日用水奉行柳下喜左衛門跡, 寛延三午六月廿五日役義御免

宝暦三酉五月十六日御代官同人跡 御留守番入

同十一巳四月十六日御代官二支配被仰付

同十三未十二月晦日御預所御代官

明和三戌正月廿五日病身二付役義御免、

大越猪左衛門 鉄之丞 休息

廿二石四人

明和三戌九月十六日養父猪左衛門休息、 家督無相違、 大番入

安永三午十月十七日相身躰末

大越猪左衛門

廿二石四人

天明六午九月廿九日養父猪左衛門休息家督無相違、 大番入

寛政十午八月晦日御定之年数相満候二付順席

文化十酉十月廿九日御先武具奉行高木藤左衛門跡

同十三子閏八月廿九日坂井作兵衛跡、 御籏本御武具奉行

文政六未三月、二男猪作儀蓮川弥太夫養子二罷越候処及離縁候義、

トハ乍申気隨之趣ニ付急度相慎指置候様、 仍之取扱不参届遠慮被仰付

文政八酉年病死

廿弐石四人

文政九戌二月十六日父猪左衛門家督廿二石四人無相違被下置、無役御留

守番入

天保四巳七月廿日御右筆見習

同九戌年江戸詰、三月廿八日出立

同十亥八月廿日御右筆本役、御書院番入

同十二丑十二月五日御旗本武具奉行高嶋仁右衛門跡被仰付、 是迄被下置

候御足充行以後不被下

嘉永元申四月五日御右筆御家譜振退勤

同二酉九月十六日御家譜方御右筆被仰付

同四亥三月十七日御世譜書継御用出精相勤太儀二思召候、 依之御目録銀

壱枚被下置候

安政四巳十二月十一日御足充行其儘御広敷御用達被仰付、 御留守番組へ

被入候旨

万延二酉三月五日年寄候二付休息

大越周吉

廿弐石四人

安政四巳九月十六日外塾師手伝被仰付候

同五午十月五日外塾勤御免被成候

病身

万延二酉三月五日親猪左衛門儀年寄候二付休息被仰付、家督廿弐石四人

扶持無相違被下置、 大御番組へ被入候

文久三亥五月十二日狛山城手御物頭指添扣被仰付

同年七月十日病死

大越鉄之助

順席也

廿弐石四人

文久三亥八月廿九日兄周吉病中願之通家督相続被仰付、 御充行廿弐石四

人ふち無相違被下置、 大御番組江被入候

同年九月三日病死

大越外三郎 実三岡友蔵弟

廿弐石四人

安政二卯三月十六日昨寒稽古中剣術数多之支合玉附二而御覧被遊、 御褒

詞

文久三亥五月十七日制産方御用ニ而信州飯田へ出立、 七月廿五日帰

同年十月廿三日大越鉄之助病中願之通養子被仰付、家督廿弐石四人ふち

無相違被下置、 大御番組江被入候

元治元子七月廿一日京都表へ出立、夫ゟ長征、 十二月帰

同 一丑正月廿五日三岡友蔵御咎之処、実兄ニ付伺之上遠慮、 同晦日御免

同年二月朔日賊徒警衛敦賀江出張、 同九日帰

同三卯四月五日病身二付銃隊勤致兼候旨、 内達も有之ニ付、 快気迄御留

守番組江被入置 御広間当番勤被仰付

同十八日病死

大越銀次郎 実伊藤鍋太郎弟也

(士族)

廿弐石四人

文久三亥八月十三日当秋芝御陣屋御番士御雇詰被仰付、 詰中御ふち方五

八扶持被下置候、 廿九日出立

同年十一月六日詰中弾薬并附属御道具等取調方被仰付

元治元子七月十七日御陣屋ゟ帰着

同年八月十九日先達而六御台場引渡之節大砲并御道具磨等致し候ニ付、

五十疋被下置候

同年十一月十日芝御陣屋并御台場御引渡之節格別致心配出精相勤候二付、

金五拾疋被下置候

同年十二月賊徒一件出張御手当弐百匁被下

慶応元丑四月廿八日上京、 翌寅四月十七日帰

同二寅三月十一日二番之補兵隊へ附属被仰付候

同年六月五日在京中不埒之趣相聞、 御番頭へ移りを以御叱り

同三卯四月十二日宰相様御上京御供出立、 五月二日願之上帰

同年六月十八日大越外三郎病中願之通養子二被仰付、家督廿弐石四人扶

持無相違被下置、 大御番組江被入候

同年十月十九日御警衛増詰上京、辰二月廿九日帰

同四辰閏四月七日上京、 九月十八日帰

明治二巳四月九日中納言様御供東京江出立、 六月十四日御人減ニ付帰

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米四拾七俵壱斗七升六合被下

同三午五月廿四日第一大隊二番小隊被仰付候事

同年十二月八日常備二番隊 年給六俵

同四未十月十三日解隊



小関玄安

弐拾五石五人

享保七寅三月九日於江戸弐拾五石五人被成下

同年十一月十三日御意ニ而奥医之内へ被仰付、席前田道通次へ入

小関一郎太夫 病死

廿石四人

延享四卯八月廿八日御徒目付ゟ御取立、霊岸島御屋敷奉行鈴木幸助跡

御留守番入

同年十二月五日弐石一人御加増

小関市郎太夫

廿三石四人

明和五子九月十一日父一郎太夫跡目無相違、大番入

同九辰十一月廿九日相身躰末

天明七未十二月四日霊岸島御屋敷奉行御武具奉行兼帯出浦長太夫跡、御

留守番入

寛政元酉五月廿二日定姫様附御広式御用達

同五丑十二月廿三日年来出精二付御紋御上下被下置

同八辰九月四日御定之年数相満候二付順席

同九丁巳十月十四日御勘定吟味役

享和二戌四月廿三日出精相勤候ニ付三石御加増

文化四卯十二月十六日出精相勤二付弐石壱人御足擬作

同六巳四月廿二日御屋敷奉行御作事兼帯、草尾庄兵衛跡

文化十酉五月朔日休息

小関市郎太夫 犀次郎

廿三石四人

文化十酉五月朔日父市郎太夫年寄休息、家督無相違、大御

文政十一子三月八日表御納戸近藤助左衛門跡

天保三壬辰十一月十四日於役所下代共不正之儀取扱方、不念之趣相聞、

遠慮

天保八酉四月七日勤向等閑之趣有之役儀御免遠慮、五月八日御免

天保十三寅六月廿日休息

小関五三郎

廿三石四人

天保十三寅六月廿日養父一郎太夫病身内願ニ付休息、家督無相違、

番入

小関犀次郎 幸吉

〔士族〕

廿三石四人

一弘化三午四月朔日養父五三郎内願之通休息被仰付、家督幼年ニ付御ふち

方七人ふち被下置、無役御留守番組江被入候

一同四未二月五日十五歳ニ罷成候ニ付、廿石四人ふち御直シ被下

同年四月五日大御番組江被入候

同七寅年三月廿三日御殿山へ出張ニ付、御下緒壱掛ケ被下置候

一安政四巳十二月犀次郎と改

安政五午八月七日御近習番被仰付、御書院番組へ被入候、右二付御足充

行弐石壱人扶持被下置候

一同六未二月三日御附御近習与被仰付候

一同年十二月五日御近習番被仰付、御書院番組へ被入候

一文久二戌六月廿八日御書物方順席被仰付候

同三亥三月廿五日御前様御供ニ而御国へ着、廿六日折返シ出立

一同年十二月廿八日奥御納戸役被仰付候、同月九日江戸ゟ殿様御上京御供

子二月京ゟ江戸へ帰

一元治元子四月廿四日江戸表ゟ家内共引越着

一同年八月九日於河南小路新規出来之家屋敷被下置候

一同廿八日御上京御供、夫ゟ長征、丑三月帰

慶応二寅二月五日御膳番奥御納戸役兼帯被仰付

一同年十月廿六日御膳番奥御納戸役其儘御番改、御書物方之儀も相心得候

様被仰付候

一同三卯三月十日御上京御供出立、四月四日帰

明治元辰十二月十三日殿様御上京御供出立、巳二月六日帰

一同二巳十一月七日今般御改革二付役儀被免、御広間当番勤被仰付候事

但元御書院番席江被入候事

一同年同月廿五日今般御改革二付、更給禄米四十八俵弐斗七升四合被下

同年十二月五日修業隊被仰付候事

一同三午十月十二日第一大隊五番小隊江被入候事

一同年十二月 予備二番隊 年給弐俵

同四未四月七日右解隊被仰出候事

大平

大平弥次右衛門

拾八石三人

宝暦四戌三月廿六日役人ゟ御取立、新番入

大平弥次右衛門 栄十郎

十八石三人

宝暦九卯三月十一日父弥次右衛門跡無相違、新番入

安永五申八月十四日御広式添役

同八亥九月廿日御傘役并御小道具方手伝

天明八申八月十日御留守番入

寛政二戌五月廿八日御傘役御免、御小道具手伝斗

同六寅六月廿五日御前様御広式御用達藤井三右衛門跡

大平弥次右衛門 栄十郎 六郎右衛門

拾八石三人

寛政七卯十二月十一日父弥次右衛門休息、家督無相違、大番入

文化九申八月廿九日御定年数相満相身躰末

同十酉正月廿五日御花畑絵奉行岩佐弥五太夫跡、御留守番入

文政十二丑三月廿日休息

大平新内 病死

拾八石三人

へ被入 文政十二己丑三月廿日親弥次右衛門休息、 家督無相違被下置、 大御番組 同年十月十四日長征出立、

天保三辰六月十六日御右筆見習

天保四巳七月廿日御右筆本役、順席被仰付、 七石弐人扶持御足充行被下

置 御書院番入

大平孫作

拾八石三人

天保五午年五月廿五日親新内家督無相違被下置、 無役御留守番組入

同十三寅正月十六日御祐筆見習被仰付

天保十四卯二月病死

大平弥嘉良 弥次右衛門 鍋八事 実孫作弟

(士族)

拾八石三人

一天保十四卯四月十一日養父孫作家督拾八石三人ふち無相違被下置、 無役

御留守番組江被入候

万延元申六月廿六日御供皆勤二付御褒詞

文久二戌三月十一日番改役松山理左衛門跡被仰付候

同三亥二月十二日番頭引纏上京、 同三月廿五日帰着

同年八月廿六日早速上京被仰付同廿八日出立、子四月廿三日宰相様御供

ニ而帰

一元治元子六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、 依之

御酒被下置候

同年七月四日京都表へ出立、 八月廿三日帰

丑正月帰

同二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、 二月廿三日帰

慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件二付、

同年十一月三日御趣意二付役義其儘御書院番組江被入、 但勤方是迄之通

同年十二月弥次右衛門与名替

同 三卯十月廿五日役儀其儘御留守番組へ被入候

明治元辰十月廿二日已来服忌金掛り同様相心得相勤候様被仰付

同年十二月廿日為失却当年限銀壱枚之当りを以被下置候

同二巳六月廿一日弥次右衛門事弥嘉良ト改

同年十一月九日今般御改革二付御広間当番被廃候、 依之役義被免候事

但席本多平五郎次

同月廿五日今般御改革、更給禄米三拾九俵四斗三合被下

同年十二月九日御本丸預り被仰付候事 年給六俵

同四未六月朔日御改正二付右被免候事

大島

御取立以前御記録ニ有之

大嶋文太夫 逢洲

拾五石三人

嘉永五子四月三日御取立、新番格二被仰付候、 但勤向并支配是迄之通

安政元寅十二月廿二日今度御改正二付、 御軍帳定掛り被仰付候

同二卯三月十四日御軍制御改正御用掛り相勤候ニ付、 銀拾匁被下置候

安政三辰三月十六日養子新五郎先達而及離縁候処、 病身与ハ乍申兼而取

扱方参不届旨相聞候ニ付遠慮、 同廿三日御免

之通被仰付	大嶋真介 佐太郎 実青山与兵衛弟 文太夫養子 〔士族〕	<u>.</u>
一同月四日永井清也建物相対ヲ以譲受候ニ付、此度被下候拝地ト御振替願		
一同年十月三日元御鷹部やニ而百七十四坪拝地被下候	同年九月廿四日書師被免候事	
一同三午六月廿二日第一大隊五番小隊入被仰付候事	但年給八俵被下候事	
令頒授候事	同年七月廿三日役中給禄米十六俵高ニ被成下候事	
一同年四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励ニ付、御賞典之内十石廿ケ年	同三午四月三日役中給禄従前之通被下候事、但年給ハ不被下候事	
一明治二巳十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾五俵四斗五升被下	同月十七日役中米弐十俵ツ、被下候事	
両被下候、外二千五百疋	同年十二月二日書師被仰付候、但習書師ハ十一月廿七日御改革ニ付被廃	
一同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、巳二月廿二日出張ニ付十三	同年九月十一日右勤中月棒弐口ツ、別段被下候事	
一同年四月廿五日遊撃隊江被入候	同月廿一日習書師被仰付候事、月給米四俵被下候事、後習書司ト改ル	
一同四辰正月九日急々上京、四月廿日帰	明治二巳六月文太夫事蓬洲卜改	
返帰	同年三月七日数年来出精相勤候ニ付、銀三枚被下置候	
一同年十二月十二日急々上京被仰付十三日出立之処、御模様ニ付途中ゟ引	同三卯正月廿二日年寄ニ付休息被仰付	
一同年十月十八日第二遊擊隊被仰付	同年十月廿二日役新番組ニ被仰付	
一同年四月四日御上京御供振り替り帰	同二寅正月十六日年来出精相勤候ニ付、御足充行三石被下置候	
持無相違被下置、新番組江被入候	慶応元丑七月十一日三ノ丸御普譜掛り出精、御褒詞	
一同三卯正月廿二日養父文太夫年寄候ニ付休息被仰付、家督拾五石三人扶	元治元子十二月賊徒一件之節御留守御用相勤候ニ付、御手当百匁被下	
一同年十一月五日京都御警衛詰被仰付、同十一日出立	文久三亥二月十日殿様御上京被遊候ニ付御供、三月六日帰着	
一慶応二寅三月十六日御趣意ニ付御帳付定御雇御免被成候	御上下被下置候	
一同年八月廿八日御上京御供出立夫ゟ長征、丑二月二日帰	万延元申十一月十二日当年御入部格別御用多之処出精相勤候ニ付、御紋	
一元治元子四月廿九日真介与名替	付候	
置候	安政五午二月五日御祐筆部屋下受込被仰付、書方是迄之通相勤候様被仰	
文久元酉九月廿五日御帳付定御雇被仰付、為失却月々銀五拾匁ツ、被下	新番組へ被入候	
拾五石三人	同四巳十二月十一日格別出精相勤候ニ付、別段之訳合を以前後之不拘例、	

同年十二月 予備二番隊 年給弐俵

同四未四月七日右解隊被仰出候事

御取立已前御記録ニ有之

大島

大島正人 淳平マサト

拾五石三口 内三石御足

明治二巳三月十二日訓導勤中新番格二御取立被成候

同年四月十日東京江出立、月給八俵

同年十一月九日月給十俵被下候事、但在京中ハ是迄之通八俵被下候事

同月廿五日東京ゟ帰

同月廿五日今般御改革、更給禄米三拾五俵四斗五升下賜

同月廿八日文学所大訓導被仰付候事

同三午三月晦日内務局書記方之儀ハ被免候事

同年九月廿四日以本官当分小学校勤被仰付候事

但習学所掛り

同年閏十月廿五日任文学佐教 但十三等

同年十一月廿八日居住罷在候持地之内ニ而九十六坪拝地被下候

但午四月十三日石場畑方地之内杪屋七平作配地譲受、家作願之通

右地所也

同年十二月二等教授 文学掛り 五十四俵 未六月廿日御取消

同四未七月十七日文章兼歴史

同年九月二日文学教官

同年十二月十日福井県十二等出仕 官省府県ノ文書

小野

同年十月十四日依願免本官

同年五月淳平事正人

同五申四月廿五日任足羽県少属

〔士族〕

小野勘兵衛

休息

十五石三人

明和元申九月十一日御小姓目付ゟ御取立、御留守番入、御土蔵番山口弥

三右衛門跡

小野勘左衛門 病死

拾五石三人

明和九辰六月廿九日父勘兵衛休息家督無相違、

天明元丑十一月廿日御土蔵番野田喜右衛門跡, 御留守番入

同八申七月廿五日御土蔵番相止ミ、大番入

同八申十一月十一日年数相満相身躰末

小野勘右衛門

拾五石三人

寛政十二庚申十月五日養父勘左衛門跡目家督無相違、 大番組へ被入、相

身代末

小野金八 鉄三郎 八太夫

拾五石三人

文化三寅正月十六日養父勘右衛門休足、家督無相違、大御番入

同五辰三月廿日家内不和順二付遠慮

文化九申八月廿九日御定之年数相満候ニ付順席

文政九戌年 病死

小野太郎太夫 他三郎事

一文政九戌七月廿日小野金四郎病中養子願之通被仰付、家督無相違被下置、

無役御留守番組へ被入

天保二卯六月廿五日大御番組入

弘化五申三月五日番改役宇貝八郎右衛門跡

嘉永三戌十月廿日上水奉行伊藤武兵衛跡被仰付

同四亥六月廿九日表御納戸役堀十左衛門跡被仰付條

同七寅八月十四日御代官役川村五左衛門跡被仰付、御留守番組へ被入候

安政三辰九月十六日用水奉行安原理左衛門跡被仰付候

同四巳八月廿日御留守武具奉行伴五郎左衛門跡被仰付

一同六未六月八日津田久米五郎留守中炮術所肝煎格頭取共申談、相弟子引

立方厚致心配候様被仰付候

一文久元酉五月廿日御掃除奉行小川藤右衛門跡被仰付候

一同二戌六月廿五日御代官役嶋津右太夫跡被仰付候

一元治元子八月廿九日御趣意二付役儀御免被成、御留守番組二其儘被差置

是迄出精相勤候二付銀七枚被下置候

同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当百匁被下

慶応卜改元、十月十六日昨年御趣意二付御役御免被成候処、是迄出精相

勤候ニ付御書院番組へ被入、年々銀五枚ツ、被下置候

一同二寅四月廿九日病身ニ付内願之通休息被仰付候

小野太郎助 太郎太夫養子

拾五石三人

文久三亥八月十三日当秋芝御陣屋御番士御雇詰被仰付、詰中御扶持方五

人ふち被下置候、廿八日出立

一元治元子七月十六日御陣屋ゟ帰着

一同年十月十一日御用有之、早速大坂表江罷出候様被仰付

一同廿三日於大坂補兵隊へ被入長征、丑二月五日帰

一慶応元丑閏五月十八日二番之補兵隊被仰付候

一同二寅四月廿九日養父太郎太夫病身二付内願之通休息被仰付、家督拾五一月月前二十二十八日養父太郎太夫病身二付内願之通休息被仰付、家督拾五

石三人扶持無相違被下置、大御番組へ被入候、九月廿六日病死、順席也

小野欽哉 銀次郎 実山口藤太郎叔父也

拾五石三人

安政三辰十一月三日明道館典籍方被仰付候

一同四巳二月朔日同助句読師被仰付候

一同六未十一月十六日御趣意二付助句読師御免被成、尚又是迄之通厚致修

行候様被仰付候

一万延元申十一月十一日御趣意有之、来酉年太田御陣屋御番士御雇詰被仰

2、御扶持方五人扶持被下置候、且又御都合も有之ニ付詰引揚、十二日

十一日出立

文久元酉九月二日太田御陣屋詰御免被成、 上 置候得共、道中并支度之儀も有之ニ付当分慎御免被成、 且又是迄御移りを以慎被仰付 御国表江罷帰候

是迄之通相心得候様被仰付候、 同廿三日帰着、 廿七日慎御免

同年十二月廿三日来戌年芝御陣屋詰御番士御雇詰被仰付、 御扶持方五人

同 一戌三月晦日出立

扶持被下置候

同四月三日太田御陣屋詰中横浜表江出張、 失却も有之ニ付金弐百疋被下

子八月廿七日相止

同年十二月廿二日今般思召を以三人扶持御扶助被成下候、

但当戌廿五歳

同三亥三月廿三日御前様御供二而帰着

同年八月廿九日上京被仰付出立、 子四月廿三日宰将様御供二而帰

元治元子六月五日中川宮被任御頼当分御附人被仰付、御扶持方五人扶持

被下置、 支度出来次第上京被仰付、 為失却月々金三両ツ、被下置、

為衣装金拾両被下置、 十二日出立、 翌丑五月四日帰

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、 依

之銀壱枚被下置候

同年十二月賊徒一件出張、 御手当弐百匁被下

慶応二寅三月五日助句読師被仰付、 勤中壱人ふち被下置、 . 当分外塾之趣

を以於自宅生徒致世話候様被仰付

同十一日一番之補兵隊へ附属被仰付候

同 一寅四月十五日補兵隊御免被成候

同年七月五日内達も有之ニ付、 外塾之趣を以生徒致世話候儀御免被成

助句読師其儘典籍方被仰付候

同年十一月十六日小野太郎助病中願之通養子二被仰付、家督拾五石三人

扶持無相違被下置、 大御番組江被入候

慶応二寅十二月欽哉与名替

同 三卯十一月二日宰相様御上京ニ付速見迄御見送り出立、同七日帰

同月廿六日宰相様御滞京中為御備上京被仰付、 同廿九日出立

同四辰三月廿二日御都合も有之二付御国表江御返被成 同廿六日帰

同年四月廿五日在京中不埒之趣相聞候二付、 順席末席二被仰付遠慮、 閏

四月十六日御免

同年五月廿八日上京、 九月十五日帰

明治ト改元、 十二月十三日殿様御上京御供出立、 然ル処病気ニ付今庄ゟ

帰

同年十二月 病死

小野武次郎 実岡嶋力太郎弟

元治元子四月十三日京都御番士御雇詰被仰付詰中五人扶持被下置候、 出

立 八月廿二日帰着

同年十一月十六日京都騒乱之節相働候儀 一段之事二被御思召候、 且手負

候二付為御手当金三百疋被下置候

同年十二月賊徒一件二付出張被仰付候、 依之為御手当銀弐百匁被下置候

慶応二寅三月十一日三番之補兵隊へ附属被仰付候

同年四月十一日本多興之輔方へ増御附属被成、 大坂表江出張被仰付候、

出張中ハ中根牛介江御附属被成候間、 支度罷在御指図次第出立被仰付候

同廿四日堺町戦争一件ニ付公儀ゟ被下配当金千疋、 且又手負ニ付弐両弐

歩被下置候

〔士族〕

一同年四月廿九日致出張候上ハ中根牛介へ御附属被成候処、御都合ニ寄天

方数馬へ御附属被成候

一同年八月廿五日堺町御門為御警衛上京被仰付北川亘之介へ御附属、早速

致出立候様同晦日出立、十一月廿七日帰

一同三卯七月十一日御警衛詰上京、十月十三日帰

一同年九月廿七日御趣意ニ付補兵隊御免被成侯

一同四辰正月八日補兵隊被仰付、今度御上京之節御供被仰付候相止

同年四月廿五日遊撃隊へ被召出五人扶持被下置候

同年閏四月十九日心得違之儀有之二付遠慮、五月十日御免

同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、巳二月廿二日出張ニ付十三

両被下候、外二千五百疋

一明治ト改元、十月十八日先達而於村上表隊長并役向江も不相達渡り人甚

吉ト申者打捨候致業不束之義ニ付可被及御沙汰之処、今度之義ハ戦功も

有之二付不被及御沙汰候間、已来心得違無之様被申渡候

明治二巳二月十一日小野欽哉病中願之通養子ニ被仰付、家督拾五石三人

扶持無相違被下置、

遊擊隊江被入候

一明治二巳四月九日中納言様御供東京江出立、六月十三日御人減ニ付帰

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾五俵四斗五升

一同三午正月廿七日剣術世話役手伝被仰付候事

一同年四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、御賞典之内十石三ケ年令頒

授候事

一同年五月廿四日剣術世話役手伝被免候事

一同日役配中出精之段御褒詞被成下候事

一同日第一大隊一番小隊入被仰付候事

一同年十二月八日常備一番隊 年給六

同四未四月朔日東京詰出立

五月十九日帰藩被仰付候事

同年六月八日先般東行之節於途中不作法之所業心得違二付、兵隊指除五

十日謹慎申付候事

同年十二月廿八日県下常備伍長

同五申正月十九日解隊

小野

小野清兵衛

弐拾石三人

寛政五丑七月廿日御勝手役小役人ゟ御取立被成、御勝手役其儘、新番入

被仰付

同十二申十二月十六日弐石御加増

文化元甲子十月廿日御留守番入

小野庄助

廿石三人

文化三寅十月十一日父清兵衛跡目無相違、大番入

文政四巳九月十六日御広式竹内東十郎跡被仰付

文政七申年二月廿五日勘定吟味役被仰付

文政十三庚寅六月五日御代官横山吉太夫跡

小野庄助 辰吉

廿五石五人

一文政十三寅十一月廿五日親庄助家督廿石三人扶持無相違被下置、無役御

留守番組へ被入

一天保六未三月十六日大御番組江被入

一同十三寅十月十六日御広敷御用達榎並左次右衛門跡被仰付、御留守番組

へ被入

一同十四卯江戸詰、四月廿九日出立

一弘化四未五月十六日元分銅印御講銀取扱被仰付、但此役名初而也

一嘉永四亥二月十一日御勘定吟味役木内甚兵衛跡被仰付

一同年七月五日当秋江戸詰被仰付、八月十四日出立

一同年九月十四日詰中表御納戸掛り被仰付

一同年九月廿日御金奉行中村仲致病死候ニ付、代り詰罷越候迄右仮兼帯被

仰付

一同五子四月廿五日御住居御普請宜出来、御用掛り出精之段達御聴太儀ニ

心召候、依之金三百疋別段弐百疋被下置候

一同年六月五日右同趣二付御紋御上下被下置候

一同年九月二日詰中表御納戸掛り相勤候ニ付、金弐百疋被下置候

一同六丑七月三日、去月十二日京町ゟ出火之節、出精ニ付御褒詞

一同年十一月五日今度大砲御製造ニ付右掛り被仰付候

一同七寅年江戸詰、七月十九日御判物指添ニ而出立

一同年閏七月三日詰中表御納戸役兼帯被仰付

一同公 国十 人三十言 中 多征 糸 万谷 美 春 在 个

一同二卯八月廿五日役中為失却年々銀三枚ツ、被下置、詰中表御納戸役兼一安政元寅年十二月廿二日大橋御修覆御用掛り出精ニ付、金百疋被下置候

帯被仰付候ニ付金弐百疋被下置、且又昨年来諸役所向御用多之処御締り

等出精相勤候二付、金百疋被下置候

一同年十月廿五日御製造方掛り被仰付

一同年十一月十一日御趣意有之、役中御足充行五石弐人扶持被下置、都合

廿五石五人扶持同様被仰付候

安政三辰四月廿日今度黄門様御遠忌二付、於運正寺御廟御造営被仰出候

2、纔之日数ニ而宜出来太儀ニ思召候、依之御目録金二百疋被下置候

同四巳年正月十八日御武備御除金掛り被仰付、御製造掛り之儀ハ御免被

成候

一同五午七月十一日此度桜御門頰当御普請中格別出精二付御宣

一文久元酉十一月十一日今度大橋御門御普請中出精相勤候ニ付御褒詞

一同二戌二月廿日年来出精相勤候ニ付順席ニ被仰付候

一同三亥五月廿二日役儀并御足充行其儘御奉行役助被仰付、右勤中御足五

人扶持被下置候

一同年八月十九日今度三ノ丸御普請御用掛り被仰付候

元治元子二月廿日御足充行并御足五人扶持其儘、御勘定吟味役頭取被仰

御奉行助之儀ハ御免被成候

一同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当銀百匁被下

同二丑三月廿日年来出精相勤候二付、御足充行之内五石弐人扶持御加増

都合廿五石五人扶持二被成下候

慶応与改元、五月廿八日御趣意二付役御番組二被仰付候

同年七月十一日三ノ丸御座所御普請御用掛り出精ニ付、御目録銀三枚被

下置候

一同三卯四月廿二日出精相勤候ニ付、役儀其儘格式末之番外ニ被仰付候

同年八月二日今度於御座所御建継御普請被仰出候二付、 右御用掛り被仰

付

同四辰五月九日年寄候二付内願之通隠居

同廿二日勤中年来出精相勤候二付銀三枚被下置候

小野友之助 廿五石五人

元治元子二月廿三日支度出来次第上京被仰付、 滞京中五人ふち被下置

三月四日出立、四月十七日帰着

同年六月廿五日当春宰相様御職被為蒙候二付、 早速上京取調等致心配太

儀之段御褒詞

同年十二月賊徒一件二付出張、 為御手当銀弐百匁被下置

同 一丑正月十六日京都堺町御門為御警衛上京被仰付、十九日出立

慶応与改元、十月九日京詰其儘一番之補兵隊被仰付候、 寅正月廿九日帰

同 一寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、 十月同断帰

同三卯九月廿七日御趣意二付補兵隊御免被成候

同年十二月十五日補兵隊被仰付、 今度御上京御供被仰付、 相止

同四辰四月廿五日遊撃隊へ被召出、 五人扶持被下置候

同年五月九日親庄助年寄候二付内願之通隠居被仰付、 家督廿五石五人扶

持無相違被下置、 遊擊隊江被入候

同年九月八日京都御警衛詰出立、十一月十六日帰

明治二巳四月九日中納言様御供東京出立、十月十二日帰

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米五拾三俵壱斗四升三合被下

同三午六月廿二日第一大隊一番小隊江被入候事

同年十二月八日常備一番隊

同四未四月朔日東京詰出立

同年十月十三日解隊 十一月帰

大岩

(士族)

大岩主一 御目見医師

拾人扶持 安政五午十二月廿日是迄御手脈拝診被仰付置候処、

五拾枚被下置候

江戸詰被仰付、

霊岸島振退勤詰中御扶持方五人扶持、外二為御合力白銀

今度思召を以来未年

但是迄被下置候三人扶持之儀も被下置候事

同六未二月二日江戸詰出立

同七申三月十五日殿様御入部御供二而帰着

同年閏三月十四日御用之節ニ御匙医師同様被召仕候儀も可有之旨被仰付

置候処、 昨年江戸御用出精相勤候二付、其身一代御扶持方七人扶持御増

都合拾人扶持被下置、 妻木敬斉同様之御取扱被成下候、且又当番之外総

而勤向之儀ハ御用捨被成候

万延与改元、 五月廿六日御用有之立帰出府被仰付, 出立

同年九月廿日当春御供二而罷帰、 間も無之立帰出府被仰付候ニ付、

手当金拾五両被下置候、 十月十日帰着

同二酉正月廿日江戸詰中御足五人扶持被下置候

文久元酉三月十九日御供ニ而出立

同年五月朔日御匙医師被仰付、 御取扱勤向是迄之通被成下候

同二戌八月 於江戸表病死

大岩円 本立マドカ

士族

五人扶持

一文久二戌九月十六日養父主一格別之勤功も有之ニ付表御医師ニ被召出

御扶持方五人扶持被下置、席之義ハ別段之御評儀を以惣御医師末席ニ被

仰付、且又主一実子貫一儀厚致養育医業為致精励候様被仰付

同三亥七月九日兼而外科相心掛居候二付奥御外科格二被成下、

本道兼被

仰付御足弐人ふち被下置

同年十二月十一日除痘館当番致皆勤候二付御褒詞

元治元子六月二日御陣屋詰出立、九月十三日帰

同年十月十六日長征出陣、 丑二月二日帰

慶応二寅八月廿九日奧御医師奧御外科兼帯被仰付

同年十二月十六日除痘館皆勤御褒詞

同四辰三月廿日上京

明治二巳三月十七日本立事円

同年五月朔日養子貫一郎出奔二付、 同四日伺之上指扣、 同七日御免

同年十一月廿五日今般御改革二付、更給禄米十九俵三斗六升五合被下

同三午二月朔日御執匙試補被仰付候事

同月廿四日役中十二俵御家禄之内ゟ被下候事

同年六月四日医学所病院詰被仰付、役義之義ハ被免候事

但十五等

年給ハ無之事

同年十月三日是迄居住罷在候屋敷地拝地二被成下候

席高村新造次

同年十一月十日御家従御執匙試補被仰付候事

但十三級

同四未二月九日御執匙被仰付候事

但十弐級

席田代明三次

同四未二月十六日御東京御供出立、五月廿三日御供二而帰着

同年四月五日当分年給四十三俵九升壱合弐勺 十弐級

同年七月廿九日准二等医被仰付候事

但診察方

同年八月廿九日二等医被仰付候事

但旭病院主務

同年十月九日御用有之立帰上京被仰付候事

但御華族方隨従之事

同廿二日出立、十二月帰

同年十二月四日病院被廃免職

同十八日更二会社准 一等医 旭病院主務

恩田

恩田茂左衛門 儀兵衛

百石

宝永四亥八月廿八日養父喜右衛門拝知無相違被下

正徳二辰三月十九日弓師役被仰付

享保十五戌八月五日御預所御金奉行渥美助左衛門跡、御留守番入

延享元子七月廿五日札所奉行浅見仲右衛門跡

此後代よ二出、但吉田与改

恩田登司 吉田儀兵衛事

百三拾石

〔士族〕

安政五午正月廿五日養父茂左衛門儀年寄候ニ付隠居被仰付、家督百三拾

石無相違被下置、大御番へ被入候

同日右二付流儀之弓師役被仰付候

元治元子九月廿二日京都詰被仰付、詰中堺町御門御固大砲方被仰付、早

速致出立候様被仰付十月 出立

慶応元丑五月六日帰

一同年閏五月晦日弓術之儀当節之形勢修行致候向も無之、稽古之儀も不立

行躰ニ付、内願之通弓師役御免被成侯、但稽古所射小屋等勝手次第取払

可申事

一同年八月五日先達而弓師役御免被成侯処、従来師役致心配侯段太儀ニ思

召銀三枚被下置候

一同年九月廿二日新撰農兵隊御籏奉行被仰付、役御番組江被入候

一同二寅二月十六日御役御免被成、御留守番組ニ被入候

一同年十月廿六日御趣意ニ付御書院番組へ被入候

一同年十一月三日今度御変革之御趣意ニ付御広間当番勤被仰付候

一同四辰二月五日御書院番組其儘大砲奉行被仰付

一明治二巳二月十八日大砲隊弾薬預被仰付

一同年六月廿一日吉田儀兵衛事恩田登司ト改

同月廿八日御広間当番勤被仰付、役儀之儀ハ被免候事、但元御書院番席

へ被入候

同年十一月廿五日今般御改革二付、更給禄米七十三俵四斗弐升七合被下

優待列

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱



乙部祐八

拾八石三人 役中二石 御足其儘

一弘化四未正月十五日御徒目付ニ而御取立、大御番組へ被入、勤方之儀者

是迄之通役筋可相勤旨被仰付

一同年九月十二日公方様神田橋へ御立寄、御用懸り出精ニ付御

嘉永二酉十月十九日御上屋敷大奥向御普請御用掛り出精二付、金三百疋

嘉永元申十二月五日急御出府之節御用掛り出精ニ付御褒詞

被下置

一同年同月廿八日大奥向御普請中出精二付御紋御上下被下之

一同年十二月十五日今般御前様御引移御用掛り出精ニ付銀壱枚被下之

一同四亥三月十三日霊岸島御屋敷奉行表御納戸役兼帯被仰付、御留守番組

江被入、是迄被下置候御役料弐石以後不被下候

一同年四月九日神田橋御住居江両御丸様御立寄ニ付御褒詞

一同六丑十月十二日御趣意二付表御納戸役之義御免被成候

一同年十二月廿五日謐姫様御婚姻被為済、右御用掛り出精ニ付銀三拾匁被

下置候

一安政三辰五月十七日年寄候二付休息被仰付候

乙部祐右衛門 豊蔵

拾八石三人

安政三辰五月十七日養父祐八年寄候二付休息被仰付、家督拾八石三人扶

持無相違被下置、 大御番組江被入候

同四巳十二月廿八日祐右衛門と改

万延元申七月四日御武具奉行被仰付候

同八日太田御陣屋詰被仰付、右詰中御同所御屋敷奉行御金奉行御勘定吟

味役仮兼帯、 矢崎鉉十郎与交代二而相勤候様被仰付候

文久元酉三月朔日太田御陣屋交代勤中銀三枚ツ、被下置候

同二戌四月三日横浜表江長々出張中出精之段、御褒詞之上銀壱枚被下置

候

同年四月十三日太田御陣屋御引払出精ニ付金弐百疋被下置候

同三亥五月十一日公儀御役方御台場見廻等有之節、 万端御不都合之儀無

之様相心得応答致し候様被仰付

同年同月廿八日取調御用も有之二付、 右応答之儀ハ御免被成候

元治元子七月廿九日御武具金長々致世話出精相勤候二付、金三百疋被下

同二丑四月五日病死

乙部志津磨 銀 三郎

拾八石三人

慶応元丑五月廿五日親祐右衛門跡目拾八石三人扶持無相違被下置、 大御

番組江被入候

同二寅十一月三日御趣意ニ付御留守番組へ被入候

同四辰正月廿五日御趣意二付家内共御国表江引越被仰付、二月廿三日着

同年四月廿五日遊撃隊へ被入候

同月廿九日家屋鋪於桜ノ馬場辺新規之家屋敷被下置候

同年五月十六日御趣意二付他番江被入候

同年六月二日無役組江被入候

同年九月十一日大砲隊被仰付役御番組江被入候

明治卜改元、十月廿二日奥州会津表江早速出張被仰付、 十一月朔日出立

巳三月四日帰

同二巳二月十七日今般御改革二付御役御免被成候二付、

同年八月十四日今度無役組之名目被廃候二付修業生卜可唱候事

但学校管轄并御礼席是迄之诵

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米三拾九俵四斗三合被下

同三午閏十月廿五日修業別名目被廃非役卜唱

同四未十二月銀三郎事志津磨卜名替

同五申二月兵学修行東京

小笠原

小笠原幹ショワシ 牧野主殿介 田内源介隠居後改 幹吾事小笠原丹後 〔士族〕

千五拾石

一士族

弘化二巳正月廿五日父主殿跡知無相違、寄合席磯野右仲上

同三午七月九日大御番頭中根靱負跡引渡之席松平源太郎次

無役組江被入候

遠慮一嘉永三戌六月廿八日暑中御尋之御奉書御到来之節、当番不参ニ付伺之上

一嘉永五子八月朔日御番割被仰出候二付、右御番割中可罷出旨被仰付候

一同七寅九月廿二日今般御軍制御改正ニ付、御備組調練被仰出候処、大御

番士ハ勿論御備組扱方之義ハ当然之事ニ候得ハ、御内調ニ相加リ御趣意

通厚相心得、御軍帳掛リ申談候様被仰付候

一万延元申五月十八日御役儀其儘御取扱御留守居同様被仰付候

一文久二戌九月八日思召被為在候二付御懇意之御取扱ニ被仰付、日々朝之

内御座所江相詰支配向々厚心を尽し可申談旨、依之都而御用人同様之振

合毎朝御機嫌何御用人一列ニ罷出可申上旨、且時々御尋之儀も可有之御

一同年十一月四日来春殿様御上京被遊候ニ付、為御待請御番組之面々支度直ニも可申上、尤評定所御用部屋へも案内無之罷出可申達旨被仰出候

出来次第引纏致出立候様被仰付候、廿六日出立

一同三亥正月廿六日於京都役儀其儘御用人御奏者兼勤被仰付候、且又殿様

御上京ニ付御待請之儀諸事申談引請可取扱旨、将又大御番頭泊り番并御

国表御用人月番之儀ハ御免被成候旨

一同年三月廿五日中将様御供ニ而京都ゟ帰着

一同年四月十五日御用有之加州金沢表江出立、同廿七日帰

一同年五月廿二日御軍帳御変革ニ付右掛り被仰付

一同年同月廿六日御番組之面々支度出来次第上京被仰付、右引纏致出立候

樣被仰付、六月四日出立、同廿三日早駆ニ而着、七月朔日亦々京都江出

一、九月七日帰

一同年九月八日御用人兼勤被仰付置候処、御免

一同月今度在京中不容易形勢之処致心配候段、御褒詞之上手助一被下置候

同年九月十一日思召有之二付御役御免被成、席稲垣治部上伺之上指扣,

同十七日御免

同年十二月廿四日京都表動揺之節禁廷為御守衛出張ニ付、朝廷ゟ為御褒

美六百疋被下置候

同四子二月十四日大御番頭勤中臣子之名分を致忘却候儀共有之心得違至

極不調法之事ニ候、依之急度も可被仰付処格別之御憐愍を以隠居之上逼

四月五日御免、隠居後田内源介ト改

一元治ト改元、十二月廿八日御人数出張先御用弁之訳も有之ニ付、思召な

以折々御機嫌伺罷出、其節々中ノ口致往来候様被仰付

且又其向江も申談候様被仰付、依之折々御座所江罷出候様被仰付候一慶応元丑十二月十四日産業御派立之折柄御趣意厚相心掛心付候儀も申達、

一同二寅十月十三日郡方掛り中年々銀百枚ツ、被下置、且又御趣意ニ付已

来評議席江罷出御用申談候様被仰付候

一同三卯正月廿二日思召ヲ以御用部屋定詰被仰付、御扶持方弐十五人扶持

被下置、且又御取扱向左之通被仰付

年始御礼ヲ始御礼之儀ハ御中老同様於御座之間被仰付、

座席之

儀ハ都而御中老見習次ニ被仰付候事

一御座所御門致下座候事

郡方掛り是迄ノ通

一御坂札小鳥札被下置候事

X

御扶持方被下置候ニ付、是迄年々被下置候銀百枚ノ儀ハ已後不

被下候

产

一同年十二月十七日任官中給禄百六十俵高二被成下候事	御免御用之外指扣罷在候様被仰付、同十九日御免
一同月廿五日今般御改革、更米百弐十六俵弐斗五升被下候	一明治卜改元、十月十六日甥酒井琢哉御咎ニ付遠慮伺之上指扣、同十八日
一同年十一月廿日以本官民政局総括被仰出候事	七日出立、同晦日帰
一同年十月十四日任福井藩大参事宣下之事	一同年八月十五日御内用有之二付、立帰上京被仰付早速致出立候様、同十
一同月廿四日度々他国御用ニ付、為御手当金七十両被下候事	但席毛受鹿之介次
日帰	被下置候
一同年同月十五日御用ニ付東京江出立被仰出、同廿七日出立、十一月十六	一同年六月廿日督務並其儘御中老役被仰付、御扶持方御増都合五拾人扶持
*	一同四日田内源介事小笠原丹後卜改姓名被仰付候
一御徒目付送迎可為是迄之通之事	十五日帰
一御留川定拝領之事	一同年六月三日御含御用有之ニ付、立帰上京早速出立被仰付、同五日出立、
一小鳥札被下候事	一同年五月四日督務並其儘牧民会計懸り被仰付候
一御坂札五枚被下候事	之、早速上京被仰付
一諸願行事取次之事	一同年閏五月二日徴士濃州笠松知県事被仰付候事、弁事局ニ而如此御達有
一行事監察案内之儀可為是迄之通之事	一同廿五日牧野貢御咎被仰付候ニ付、御用之外慎被仰付候
一御門々々惣下座之事	一同年四月十一日督務並被仰付
一詰所掌政内局之事	一同四辰正月 御用外指扣被仰付置候、廿一日御免
一出席之廉々已来上之御跡ゟ引続罷出出席之事	一同年十二月十三日殿様御上京御供被仰付
但各員一同罷出候事	仰付候
一五節句朔望登城之節御移相成候卜直ニ於御座之間御逢之事	一同年十一月廿五日産業之儀ニ付、町奉行会所奉行へも御用向申談候様被
一同年九月七日右ニ付御取扱左之通被仰出	一同年九月廿五日議事掛り被仰付
一同年八月廿五日任福井藩権大参事宣下候事	一同年二月廿五日御預所掛り被仰付
一同年六月十日丹後事幹ト改	*
一同年二月十四日副執政被仰出候 月給百三十俵	二相心得候様
一同二巳正月廿日御用有之早速上京被仰付、翌廿一日出立、二月六日帰	一御坂札弐枚并小鳥札被下置、小鳥札之儀ハ罷越候度毎拝領之趣

但右二付五十口之分自今不被下候事

百六十俵

同三午正月十三日民政之儀先年来専ら致担当旧弊一洗、 且又宿駅治水ヲ

始功効も有之ニ付、終身米五拾俵被下候事

同年四月廿五日丁卯之冬以来内外多端之処格別用心尽力慰其功労、 御賞

典之内永世百石終身五十石都合百五拾石令頒授候事

同月廿四日御用有之立帰東京江罷越候様被仰付、五月朔日出立、六月十

同年十二月七日同姓貢給禄之内百四拾五俵分禄之上一家立被下事

百四拾五俵

三日帰

同日在職中更二給禄百六拾俵高二被成下候事 未正月ゟ任官給被廃

同四未二月十日御用有之上京被仰出候事

同年四月十四日抱地之内二而給禄高相当之坪数拝地二被成下候事

同年五月廿六日昼夜兼行二而従東京帰

同年六月朔日 (マ、)

同廿五日御用有之東行被仰出候事

同廿八日近来数度之旅行且詰中外御用も有之ニ付、 別段為手当月々百金

ツ、被下候事

同年八月廿日大蔵省七等出仕

大貫

大貫伝 元武生家来 午五十一

一弘化三午五月 (マこ)

〔士族〕

明治二巳十一月廿五日今般御改革之処、 物頭以上二付士族二被仰付、

給

禄之儀ハ適宜御改正之上更被下候事

同三午正月廿三日米七拾三俵四斗弐升七合被下候

同年八月廿二日福井江引越被仰付候

同年九月十日御花畑二而弐百五十弐坪拝地被下候事

是迄之建物被下候間取払可申事

家作之儀ハ建被下候

家作中寓居御貸渡被成候、 但百日限

同年十月十二日優待列江被入候事、但家従中ニ付此ケ条不用

同月廿四日御花畑二而拝地被下置、 并土蔵共相対ヲ以譲受申度示談仕候、 然ル処勝手向都合ニ付粕谷沙庵家作 同人地所二而拝地坪数同様御振替

被下候樣願之通被仰付候

同年閏十月五日先達而ゟ本多興之輔家事用向之方江拝借之処返上

同日優待列江被入候事

同月廿五日右名目被廃非役卜唱

奥山

奥山七郎 七郎太夫

(士族)

廿三石五人

嘉永三戌十一月六日かとく

慶応二寅十月廿二日今度御趣意ニ付被召出、新番並組ニ被仰付、御充行

之儀ハ廿三石五人扶持被下置候、且又席之儀ハ家督順ニ被仰付候

同三卯五月十二日此度遠場階級打第一級二相進候処、初而之儀二付別段

文久二戌十一月十三日かとく

廿三石五人 尾崎久馬勝

同四未四月七日右解隊被仰出候事 同年五月廿四日第一大隊一番小隊入被仰付候事 同年六月十六日七郎太夫事七郎ト改 明治二巳二月廿二日右出張二付為御賞五百疋被下、外二十三両 同年七月十七日殿様御供被仰付置候処、 同年五月十一日御趣意二付役中役御番組江被入候 同年十二月八日予備一番隊押絶 同三午四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付、 同年十二月五日修業隊被仰付候事 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米五拾俵壱斗五升被下 同四辰五月十一日砲術教授方被仰付、 同月廿五日新番並組二被仰付 同年十月十八日第二遊擊隊被仰付 同年九月廿七日階級打調役被仰付 同年七月十二日第一級二相進候二付花葵御紋御印一被下置候 頒授候事 付、 之訳を以為御賞花葵御紋付胴乱一被下置候 早速致出張候様被仰付、同十九日越後江出立、十一月十三日帰 尾崎 第四

> 之儀ハ廿三石五人扶持被下置候、 慶応二寅十月廿二日今度御趣意ニ付被召出、 且又席之儀ハ家督順ニ被仰付候 新番並組二被仰付、御充行

同三卯九月廿七日当冬京都御警衛詰被仰付、 詰引揚支度出来次第致出立

候様被仰付、十月六日出立

同年十月十八日第二遊擊隊被仰付

同年十一月十七日先般堺町御警衛向心配相勤候二付御酒被下置候

役中年々銀拾五枚ツ、被下置候

御都合ニ付御先へ罷越候様被仰

同四辰四月廿五日遊擊隊江被入候

同年六月廿五日会征出立可致筈之処痛二付延引之処不罷越

明治二巳十一月廿五日今般御改革、更給禄米五拾俵壱斗五升被下

同三午五月廿四日第一大隊二番小隊入被仰付候事

同年十二月八日常備二番隊 年給六俵

同四未十月十三日解隊

岡本

御賞典之内十石三ケ年令

岡本晋 晋太郎 小役人格 晋助倅

(士族)

安政四巳閏五月臨時御用多二付御右筆部や手伝被仰付候

年給四俵

同五午八月御帳付定御雇被仰付、 月々弐拾五匁ツ、被下置候

文久元酉十二月銀五匁御増、 都合三拾匁ツ、被下置候

同二戌四月勤方御帳付同様被仰付

同年七月賀代姫様御縁組御用掛り被仰付

三人扶持

一士族

同年九月十四日被召出御帳付見習被仰付、 御扶持方如此被下置候

但是迄月々弐歩ツ、被下置候分其儘被下置候

明治卜改元、九月廿二日月々銀拾枚ツ、被下候処、今般免与内割替御手 同年三月十六日長詰被仰付候 同年六月七日御勤向御用請込被仰付候、 慶応四辰五月十六日御趣意二付役中役御番組江被入候 五人扶持 同四辰正月十四日今般従坂地重キ御用向担当之上不顧身命戦地へ入込及 同 同年九月六日御帳付見習其儘御聞番下役勤書役兼被仰付 慶応二寅八月廿三日京都詰出立 当相增候二付已後不被下候 如此被下置、 番並組二御取立被成 応接候始末柄、 同年十二月賊徒一件出張、 同年十月十二日出精相勤候二付金五百疋被下置候 同三亥御趣意ニ付定府御国表へ引越被仰付候処、直ニ詰被仰付候 記役之儀ハ御免被成候 元治元子正月当秋迄詰延被仰付候、 行拾八石三人扶持ニ御直シ被下候 |卯三月十六日詰延被仰付候 但御聞番添役書記方兼被仰付候二付、 但為失却月々弐両ツ、被下置、 置候 是迄被下置候三人ふち并月々被下候失却金之儀ハ已後不被下候 御聞番添役助書記方兼被仰付候、 格別行届候段達御聴候処奇特二被思召候、依之為御賞新 御手当銀百匁被下置候 十月廿六日御国着 外為衣裳料拾両被下置候 但御留守居方之儀ハ是迄之通書 為失却月々銀拾枚ツ、被下 且又親晋助立替之節御充

一同年五月十六日今般民部官知事被仰出候ニ付、同官ゟ御用為伺罷出拝謁

願応接始御用取扱可申事

同年六月六日親晋助病身且老年二付立替被仰付、家督十八石三口被下、

新番並組江被入候、但公用人試補其儘被仰付候事

同月十五日晋太郎事晋ト改ス、ム

同年十月八日東京江家内引越被仰付、十一月六日出

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三十九俵四斗三合被下

同年十二月十五日東京詰家族引越ニ付詰中月俸十口被下

同三午四月廿七日権少目勤向兼被仰付候事

一同四未四月四日藩邸掛り兼被仰付候事

一同月十九日任権大属

一同月廿四日御用有之御国表江立帰罷越候様被仰付候事、五月廿日着

一同年五月十九日家族藩地居住被仰付候事

一同年六月朔日今般御改正二付免職

一同五日藩庁出仕被仰付候事

一同廿四日任福井藩権大属

一同月 上京

一同年七月五日小林太仲家屋敷被下候事

一同年十二月十四日任入間県大属

同月 任大属庶務専務



大坂俊三 元武生家来 午四十九

同

一巳四月十一日公用人試補被仰付候、

但四等官東左膳次、

月給十五俵

〔士族〕

安政六未六月 (マ、)

一明治二巳十一月廿五日今般御改革之処、物頭已上二付士族被仰付、給禄

之儀ハ適宜御改正之上更被下候事

一同三午正月廿三日米三拾六俵弐斗五升六合被下

一同年五月廿五日本多興之輔願之儀ニ付押而強願申立心得違ニ付謹慎、六

月十日被免

一同年八日十二日福井江引越被仰付

一同年九月十日織田新八屋敷内ニ而百七十四坪拝地被下候事

一福井引越被仰付候二付是迄之建物被下候間取払可申事

一家作中寓居御貸渡被成候事、但百日限り御貸渡事

同月廿七日謹慎被仰付候事、十月三日被免

一同年十月十二日予備隊江被入候事

同年閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

同年十二月九日養子才四郎重キ御咎ニ付伺之上謹慎、同十六日被免

小倉

小倉寛 野田戸十郎 豁哉 戸十郎 小倉戸十郎

〔士族

廿石五人

文久二戌七月十一日当秋芝御陣屋詰御番士御雇詰被仰付、詰中御扶持方

五人扶持被下置候、閏八月廿二日出立、同三亥九月廿四日帰着

元治元子二月廿三日支度出来次第上京被仰付、滞京中五人ふち被下置

三月四日出立、四月十七日帰着

一同年五月十一日芝御陣屋未夕御引渡無之ニ付、右引渡相済侯迄同所詰被

仰付、詰中御扶持方五人扶持被下置、支度出来次第早速致出立候様被仰

付、廿七日出立

同年六月廿五日当春宰相様御職被為蒙候ニ付、早速上京取調等致心配太

儀之段御褒詞

一同年九月十三日帰

同年十月十一日御用有之、早速大坂表江罷出候様被仰付

同廿三日補兵隊へ被入候、長征、丑二月六日帰

同年十二月 豁哉卜名替

一慶応元丑閏五月十八日一番之補兵隊被仰付候

一同年十月朔日宰相様御供ニ而大坂へ出立、同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰

一同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日御供帰

同年十月十三日親喜平次年寄候二付休息被仰付、家督廿石五人扶持無相

違被下置、大御番組江被入候

一同三卯十一月廿六日宰相様御滞京中為御備上京被仰付、同廿九日出立、

辰四月十日帰

一同年十二月廿八日豁哉事戸十郎ト改

一同四辰九月十日御警衛詰上京

一明治卜改元、九月十七日小隊之分隊長津田左蔵跡被仰付、御書院番組江

被入候

一同月廿二日京ゟ帰

同二巳四月五日東京江出立、十月廿九日帰

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米四拾七俵壱斗弐升九合被下

三午二月十八日安島宿浦辺江土着開墾仕度、附而ハ同所御用地之内五

千坪御渡被成下候樣願之通被仰付候

同

願之通被仰付候ハ、、家作之儀ハ相対ヲ以久保直次江譲渡申度願之通被一同年四月十九日今度土着被仰付是迄之拝地返上、建物之分ハ被下置候様

仰付候

一同年六月廿二日修業列被仰付候事

同年九月十五日第一大隊一番小隊江被入候事

同年十二月 予備一番隊 年給弐俵 未三月廿九日兵隊被免

同四未四月七日右解隊被仰出候事

同五申正月廿五日小倉篤三郎ト給禄振替 公布ニ付小倉ト改姓

一同年七月戸十郎事寛 ヒロシー米弐拾弐俵壱斗八升 元八石二口ノ適宜

同六年七月廿七日病身願之上養子藻四郎へ家督同年七月戸十郎事寛

[士族]

小倉藻四郎

海福

四百石 海福瀬左衛門

天和三亥十二月五日父瀬左衛門家督八百石無相違被下

貞享三一等半知被下

元禄七戌九月九日御籏奉行被仰付

海福瀬左衛門

四百石

正徳元卯十一月七日父瀬左衛門隠居、 家督無相違被下、 御杉形奉行被仰

同七寅八月廿二日御役御免、大番入被仰付

享保六丑五月十五日御先物頭被仰付、

本多十郎兵衛跡

付

享保八卯八月六日御先物頭被仰付、 東郷三郎右衛門跡

同十四酉六月十一日御目付真杉所左衛門跡

同十七子六月十一日御目付役御免

海福瀬左衛門

四百石

享保十七子九月十九日父瀬左衛門隠居、 家督無相違、

元文六酉二月十八日御杉形奉行堤七太夫跡

延享元子十一月三日御先物頭白石十郎右衛門跡

宝曆六子十月五日御普請奉行大野三左衛門跡

海福久右衛門

四百石

明和五子七月廿八日養父瀬左衛門隠居、家督無相違、

安永五申五月廿日大御番弐番之筆頭柘植伊右衛門跡

同七戌六月廿二日御使番土屋五郎太夫跡

同八亥十月廿日御杉形鑓奉行大関新五左衛門跡

天明三卯九月十六日御目付助御側武頭横田勝之助跡

同六午閏十月十五日御目付立岩平右衛門跡

同七未三月廿五日御旗奉行加賀藤左衛門跡

寛政九巳九月廿日新番頭西尾源太左衛門跡

文化六巳八月廿日金津奉行荒川十右衛門跡 御役席町奉行上ミ

文化十二亥二月十二日席定座之番外

文化十三子六月廿四日触頭鈴木彦太夫跡

海福瀬左衛門 三作

四百石

文政三辰七月廿一日養父久右衛門年寄内願隠居被仰付、家督無相違、 番

外席被仰付候

同五午七月廿六日思召を以寺社町奉行大宮忠左衛門跡被仰付、 与力七人

共御城代ゟ出役

文政十亥年七月三日格別思召を以御勝手掛り御近習被仰付、 桑山十蔵家

屋敷へ替被下

文政十二己丑七月十三日江戸ニ而御勝手掛り其儘、 向後御奉行勤御免被

成候

同丑八月十三日水野善左衛門家屋敷へ替被下

文政十二丑十二月十三日内願二付御勝手掛御免被成、御近習二被指置候

天保二卯二月廿七日御趣意有之ニ付、思召を以御厳法掛り被仰付候

天保三辰四月六日産物掛り兼帯

天保八酉二月廿五日年寄内願之通隠居、家督倅孫八へ無相違被下置、

左衛門儀□原集鹿同様御取扱被成下候

海福孫八

四百石

天保八酉二月廿五日親瀬左衛門年寄内願之通隠居被仰付、家督四百石無

相違被下置、定座番外被仰付、菅沼十左衛門次

天保十二丑年八月十六日触頭花木源蔵次被仰付

天保十四卯十二月病死

海福瀬左衛門 久次郎

[略履歴]

高四百石

天保十五辰二月十一日海福孫八病中願之通養子ニ被仰付、家督如此無相

違被下置、定座番外席熊谷熊之助次被仰付候

同二月廿九日大道寺芳三郎家屋敷へ替被下候

嘉永三戌十二月廿八日孫八与名替

同五子八月十六日秋田八郎兵衛家屋敷江替被下候

安政六未三月廿日格別之思召を以、二番之新番頭勤向被仰付候ーニューノーシーを上ります。

文久二戌九月八日思召被為在候ニ付、御懇意之御取扱ニ被仰付候

同三亥十月九日中将様御上京被遊候二付御供被仰付候

元治元子二月廿五日宰相様御上京中格別繁勤太儀二思召、依之御酒被下

置候

同子七月八日渡辺早太上京留守中一番之新番頭仮兼帯被仰付候

同子八月十九日大砲御用為取調立帰上京被仰付候

同年十二月瀬左衛門与改名

瀬

同年八月十四日大砲方頭取被仰付、新番頭之儀者御免被成候

慶応二寅十二月廿二日御家流砲術御端立以来、相弟子引立方厚致心配候

ニ付、輿一手助一之御目録被下置候

同四辰六月十九日御役名大砲隊頭与被仰付

明治二巳二月十七日砲隊長被仰付

同廿二日越後江長々出張中太儀ニ思召、仍弐拾金被下

海福

海福猪兵衛

六百石 外役料百石 内四百石与力四人

御先代弐百石之上

延宝三卯五月廿九日百石御加増、都合三百石之処

貞享三一統半知、百五拾石被下

宝永二酉七月十九日百石二被仰付

正徳元卯十一月七日百石御加増与力御預ケ、同日町奉行寺社共被仰付

海福伊兵衛

弐百石

享保二酉六月十九日養父伊兵衛町奉行役相勤候、 年寄候ニ付隠居、

無相違被下

海福勘助

弐百石

宝曆五亥十月十一日父猪兵衛休息、家督無相違、大番入

海福猪兵衛 初沖之丞

弐百石 外役料百石

明和七寅十二月廿日養父勘助跡知無相違、大番入

安永二巳正月廿五日御小姓

同九子十月八日御小姓頭取

天明三卯十一月二日於江戸御膳番御書院番入

同六午十一月四日御近習番頭取御膳番御書院番二番筆頭

寛政三亥十一月廿九日御膳番御免、其余是迄之通

同五丑七月廿二日御使番生田八郎右衛門跡、

御役料百石

同九巳十二月十一日杉形御鑓奉行小川次兵衛跡

同十二申八月廿四日御持弓頭中川伝兵衛跡屋敷奉行兼

海福猪兵衛 勘助

弐百石

文化二丑十一月十六日父猪兵衛跡知無相違、 大御番入

同五辰三月廿日御呵

海福力太郎

家督

文政六未二月廿九日妹不埒ニ付蟄居、右取扱方不宜ニ付遠慮

弐百石

文政十二己丑九月五日親猪兵衛跡知無相違被下置、 大御番入

天保一 一卯二月十五日若殿様御附御小姓被仰付、 当秋江戸詰被仰付

海福猪兵衛 岩之丞事 意閑又南岡ト改 実上月 隠居

弐百石

天保五午五月廿五日養父力太郎家督弐百石無相違被下置、 大御番組

入

同年六月五日表御小姓武田源次郎跡被仰付候

同六未江戸詰被仰付、 三月十日出立

同十二丑六月十一日御近習番梯左仲太跡被仰付、 御書院番組へ被入

同十三寅江戸詰被仰付、 八月十三日出立

弘化元辰五月廿三日御小姓多喜田藤内跡被仰付候

同 二巳江戸御供詰ニ而三月廿一日出立

同三午閏五月六日御小姓頭取栃屋縫殿之助跡被仰付

同四未江戸御供ニ而三月十九日出立

嘉永元申六月 急御出府御供ニ而江戸表へ出立、 同七月御供二而帰着

右ニ付十二月七日御褒詞

同年十二月十日郡奉行高間文四郎跡被仰付、 御役料五拾石被下置候

同三戌七月廿八日御目付役荻野治部左衛門跡被仰付、 御役料都合百石被

下置候

敷奉行兼帯被仰付候

被仰付候

安政四巳二月廿三日御先物頭門野太郎右衛門跡被仰付、 安政二卯正月九日学問所御取建二付、 同年九月廿二日今般御軍制御改正二付、 同年八月朔日御番割御軍帳御用掛り被仰付候 同年五月十六日今度御帰国御道中御供壱人二而相勤候二付! 同五午十一月五日役儀其儘御役料五拾石御增、 同年八月廿五日病身、 同七寅六月十七日、 同年七月廿九日公料血ケ平村御領分上海下海浦与山論之義ニ付、 同年六月九日除痘館掛り被仰付候 同四亥江戸御供詰被仰付、 万延元申六月廿一日御持物頭上月八郎左衛門跡被仰付候、且又右二付屋 下置候、 得違ニ付蟄居、 同三辰年四月廿九日倅鍋三郎義、 同六丑七月三日、 願 候 同五子四月廿五日御住居御普請御用懸り出精ニ付、 之中ニ候ニ付掛り同様相心得、 枚被下置候 五月十七日御免 右掛り被仰付 持馬勝手次第 且又其方儀も異見等不参届趣ニ付遠慮被仰付候、 去月十二日京町ゟ出火之節、 去ル十二日塩町ゟ出火之処及大火候節、 内願之通御先物頭次席被仰付候 三月 御内調之通御軍帳掛り申談候様被仰付候 昨年可致出奔与三国辺迄罷越候始末心 出立 御自分儀取調掛り被仰付候 御備組調練被仰出候処、 都合百石被下置候 出精ニ付御褒詞 御目録銀壱枚被下置 御役料五拾石被 出精ニ 御目録銀壱 然ル処 御役義 公訴相 一付御 同年十月三日思召を以折々御機嫌伺罷出候様、 慶応 同年十一月廿九日御武具方役所不締之趣相聞候二付、 録手綱一 慶応元丑閏五月十二日昨年来御武具方非常之御用繁致心配候二付 同年十二月賊徒一件二付出張、 同年八月朔日御泉水預り被仰付候 同三亥五月廿六日御座所預り被仰付 同年十月六日高間文四郎芝御陣屋詰中本宮十郎兵衛江御武具支配仮忍之 同廿九日帰着 同七日先達而御持場替一件御用掛り出精之段、 同二戌四月三日太田御陣屋詰中横浜表江長々御人数出張之節致心配候段! 同年十一月廿三日太田御陣屋御引渡後、 同年五月廿日御側物頭被仰付太田御陣屋詰、 文久元酉三月十九日御供二而出立 様厚可致心配旨、移りを以被仰付 同四子正月十六日御武具支配忍之者預り被仰付候 御武具支配仮忍之者仮預り被仰付候 者仮預り被仰付置候処、 候 御褒詞之上手綱一被下置候 候様、 一寅六月廿一日年寄候二付隠居 且又御奉行御聞番御供頭取扱候御用向兼勤被仰付候 但右ニ付伺之上指扣、 被下置候 十郎兵衛隱居被仰付候二付、 十二月四 依之御手当銀八百匁被下置候 芝新網町御陣屋詰被仰付候 御免 右詰中御目付本役同様相勤 其節ニ中ノ口致往来候様 御褒詞之上銀弐枚被下置 已来不締之儀無之 右留守中御自分儀

御目

同二寅十一月廿五日勤中御武具御修覆御改正出精相勤候二付、 御褒詞被

成下候

海福雪

略履歴

高弐百石

同日親猪兵衛家督如此無相違被下置、(慶応二年六月二十一日) 大御番組江被入

但無息ニ而相勤候分別帳有之

同十二月廿二日砲術所世話役格別致出精候二付、 銀拾枚被下置

同三卯正月九日軍事方被仰付、役御番組江被入

同三月朔日今般殿様御立帰御上京被遊候二付御供被仰付

同月廿四日軍事方其儘砲術所頭取介被仰付

同五月十四日内達之趣も有之ニ付砲術所頭取助之儀ハ御免被成

同十月十八日小隊之分隊長被仰付、 御書院番組へ被入

同十一月廿六日宰相様御滞京中為御備、支度出来次第上京被仰付

同四辰正月十七日於京都第一大隊二番小隊之半小隊長被仰付、 役儀ニ付

席末之番外格二被成下、但席波多野五郎左衛門次

二月四日於京都参与附属被仰付、 役御番組江被入

片山

片山与三右衛門

弐百石

於松岡最前御奉行其後御役御免、 番外罷在候処、

享保七寅十二月席御吟味之上浅井次右衛門次へ被入

片山与三右衛門 平七

弐百石 役料百石

享保九辰七月廿九日父与三右衛門隠居、家督無相違、

同十巳八月廿八日表御小姓

同十五戌七月十三日奥御小姓

同年十一月六日御裏役御書院番入

同十七子六月廿五日郡奉行彦坂又兵衛跡、御役料五十石

元文元辰六月十五日御預所郡奉行御役料百石

片山与三右衛門 病死

二百石

延享元子十一月三日父与三右衛門病気ニ付隠居、 家督無相違、 大番入

片山与三右衛門 愛之助

弐百五拾石 役料百石

安永五申十一月五日父与三右衛門跡知無相違、

同七戌正月十六日御小性見習

天明二寅五月十一日御小性本役

同三卯六月廿八日於江戸御部屋附御小性

同五巳二月廿八日於江戸御附御小性頭取格

同七未六月十八日於江戸御部屋附御小性頭取勤方平之诵

寛政五丑九月廿九日於江戸勤向其儘、

格式末ノ番外葛巻次部右衛門次

同七卯四月廿七日於江戸若殿様御側締り役見習席、 御徒頭次席

同八辰八月三日御部屋附御近習頭取、 御役料百石、 御水主頭次席福山藤

右衛門次

享和二戌二月十六日御側向頭取席新番上被仰付、 此時ゟ御側締り役名相

改ル

文化三寅九月廿七日出精相勤候ニ付、 五拾石御足

文化七午九月廿四日右御足高御結被下置候

同十四丑九月江戸表へ罷越候処、 江戸着之節病死

片山平七

弐百五拾石

文化十四丑ノ十一月親与三右衛門於江戸表病死、家督無相違弐百五拾石

直御近習番被仰付、 御書院番入、江戸其儘詰二被仰付候

文政六未十二月三日奥御納戸高松彦左衛門跡

文政七申八月十日奧御納戸其儘御近習番頭取山口弥太夫跡

文政九戌二月廿四日威徳院様御逝去二付御役御免、 大御番入

文政十二丑六月廿三日御書院番二番ノ筆頭役、 御近習番頭取奧御納戸役

川村文平跡被仰付

天保六未九月五日今度御代替二付御役御免被成、 御書院番其儘御近習二

被差置、 御用筋之義ハ是迄之通り可申談旨

同年九月十六日御書院番弐番之筆頭役、 御近習番頭取奧御納戸役

天保七申二月廿日御使番役前波忠兵衛跡、 御役料百石被下置候

天保十一子五月廿九日杉形御鑓奉行土屋十郎右衛門跡

同十四卯年八月十七日御先物頭岩上五郎八跡

弘化五申年正月十六日御役御免、 物頭次席、 御役料其儘被下

同年四月五日席其儘杉形御鎗奉行被仰付

同年九月十五日隠居

片山直次郎 伝三郎

弐百五拾石

嘉永元申年九月十五日養父平七家督無相違被下置、 大御番組江被入

同七寅正月十二日江戸表へ出立

同年三月十三日於江戸表病死

片山平七 祐次郎

高弐百五拾石

栄之進

、略履歴

同年五月十六日養父直次郎病中願之通養子二被仰付、 家督無相違如此被

下置、 大御番組江被入候

安政三辰十二月廿八日栄之進与改名

同六未十月十五日来申年江戸詰被仰付候

文久二戌年十月廿七日来亥年江戸詰被仰付候

同十二月十九日来亥年江戸詰被仰付早々詰引揚、 来正月七日頃迄ニ致出

府候様被仰付候

同三亥五月十七日中将様御逼塞御免被仰出、 殿様御目通り御差扣御免被

仰出候ニ付、御国表へ為申上御物頭代ニ而被指遣候間 道中七日振二而

罷越候樣被仰付候

同年十月廿八日当春仮筆頭被仰付、 御人少之処格別出精相勤候二付、 銀

弐枚被下置候

元治元子六月廿九日京都江出立

慶応元丑四月十五日支度出来次第京都詰被仰付

同三卯五月廿五日役御番一番之筆頭役加藤文太跡被仰付、役御番組江被

入

同十二月廿四日平七与改名

明治二巳二月十六日今般御改革ニ付、御役御免被成御広間当番勤被仰付、

但番列其儘

明治二巳三月廿二日遊撃隊へ被入候事

片山

片山弥五右衛門

百五拾石 外役料百石

於松岡御横目物頭、御相続後御目付仮役

享保七寅十一月廿二日於江戸五十石御加増、御目付本役被仰付、御役料

百石

片山弥五右衛門 岩次郎 蟄星

百五拾石

元文四未二月十五日養父弥五右衛門隠居、家督無相違、大番っ

延享元子十一月十五日表小姓

同四卯七月十九日御免、大番入

安永三午十二月十一日不埒之義有之拝知被召上蟄居、倅へ七人扶持被下、

新番入

片山弥五右衛門

拾七石三人 八石弐人御足

安永三午十二月十一日父弥五右衛門儀不埒之儀ニ付蟄居被仰付、拝知百

五拾石被召上、新番入、遠慮、七人扶持被下置

寛政五丑正月十六日御右筆見習被仰付、御足扶持三人扶持被下

同年十月十六日御書院番入被仰付

同八辰正月十六日御擬作拾七石三人扶持被成下、八石弐人扶持御足擬作

御右筆本役

文化八未年九月十一日表納戸波々伯部六兵衛跡、

御足高其儘被下

文化十三子閏八月病死

片山瀬左衛門 力之助 又太郎

拾五石三人扶持

文化十三子十月十一日親弥五右衛門跡目、幼年二付御吟味之上五人扶持

被下置、無役御留主番入

文政四巳年九月歳頃ニ相成候ニ付拾五石三人扶持ニ被成下候、但家督之

節幼年之処拾五歳与相願不都合之義も有之ニ付、弐石被減十五石被下置

文政六未六月十六日継母里方へ御返被成、但若年ニ付屋敷指揚大久保清

左衛門方へ同居被仰付

文政七申閏八月廿三日大御番入

天保八酉十月廿日身持不埒至極之趣在之ニ付閉門被仰付

片山弥五右衛門 達五郎

拾五石三人

天保九戌八月五日養父瀬左衛門病身内願之通り休息被仰付、家督拾五石

三人扶持被下置、無役御留守番組江被入

天保十三寅六月廿九日大御番組へ被入

片山麓 梅干吉事 伝八

拾五石三人

一弘化五申二月十六日養父弥五右衛門家督、拾五石三人ふち無相違被下置

無役御留守番組江被入候

一嘉永五子二月十一日御忌日之処、日限繰違川狩罷出於途中心付、依之遠

慮伺之上差扣、同十五日御免

一同六未八月十四日病死一安政三辰十二月廿八日麓与名替

[略履]

切米拾五石三人扶持

片山力之助

同六未十月五日養父麓家督如此無相違被下置、大御番組へ被入候

慶応三卯八月十六日衆道之儀ニ付風儀不宜趣相聞、年若之者文武修行之

妨ニ相成候間、以来相慎候様、此上心得違之儀有之候得ハ、急度可被及

御沙汰候条、此段相含可申諭旨御番頭江移りを以被仰付

同十一月廿六日殿様御上京被遊候節御供被仰付

同十二月十二日急々上京被仰付

同月廿六日先達而今庄宿陣中心得違之趣相聞候ニ付、遠慮被仰付

同四辰正月七日今般非常之儀二付遠慮御免

同九月二日京都交代詰被仰付

明治二巳二月十七日中納言様東京供奉御供被仰付

|片山||3 此前代ひニ出、但平

但平山与号

※「剝札」か末にあり

片山哲也 平山悌助

廿三石四人

文政十三寅三月廿九日養父恕平家督無相違廿三石四人扶持被下置、表

外科

天保三辰苗字共改

天保六未十月十六日病身ニ付内願之上休息

片山泰造 実矢野孫太夫弟

廿三石四人

一天保六未十月十六日養父哲也病身二付内願之通休息、家督無相違、

外科被仰付候

一安政四巳十二月十六日除痘館皆勤二付御褒詞

同五午十一月十六日北国筋湊々為見分御用江戸御役人中被罷越二付、附

廻り御用被仰付候、十二月十一日御褒詞

同年十二月八日除痘館当番皆勤二付御褒詞

一万延元申十二月十六日右同断

一文久二戌十二月十六日除痘館当番致皆勤候ニ付御褒詞被成下候

同三亥十二月十一日除痘館当番皆勤、其余番外数度致出勤候二付御褒詞

元治元子七月上京出立、八月廿六日帰着

同年十月十五日長征出立、丑二月二日帰

慶応元丑十二月十六日奥御外科被仰付

同 一寅四月廿四日堺町戦争一件二付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同年十二月十六日本道之儀も相心得候様、 且又昼御番相勤候様被仰付候

明治元辰十月五日病気ニ付内願之通休息

片山弁之丞 貞斎

弐拾三石四人

明治元辰十月五日親泰造病気ニ付内願之通休息被仰付、 家督廿三石四人

扶持無相違被下置、 表御外科被仰付

一巳二月晦日無役組江被入、家業被免候

同

同年三月十五日貞斎事弁之丞ト改

同年八月十四日予備隊被仰付

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米四拾八俵弐斗七升四合被下

同三午五月廿四日第一大隊四番小隊入被仰付候事

同年十一月廿四日是迄居住罷在候地所八十坪拝地二被下候事

同年十二月 予備二番隊 年給弐俵 未六月廿日御取消二被成

同四未四月七日右解隊被仰出候事

同年七月廿九日依病気願隱居



蠏江善右衛門

弐百石 外役料百石

延宝六午七月十六日御小姓被召出

元禄十二卯十一月二日新知百石被下

同十三辰九月五日父刑部右衛門跡知無相違被下、 自分知上ル

宝永三戌四月十六日御金奉行

正徳元卯十一月七日御勘定奉行

同五未五月廿五日郡奉行、 役料五拾石被下、真杉所左衛門跡

同六申正月十八日御奉行役、 御役料百石被下、 下山清左衛門跡

享保八卯八月六日五拾石御加増

同十三申正月十六日御役御免、 初姫様御用被仰付

蠏江善右衛門

弐百石 外役料百石

享保二酉六月廿六日御手廻被召出、 銀弐枚五人扶持被下

同七寅十二月十八日御供目付

同十六亥十一月五日御使番、 同十三申八月廿五日父善右衛門隠居、 役料百石坂田七右衛門跡 家督無相違、

御供目付其儘

同廿一辰五月十三日御水主頭中村太郎左衛門跡

寛保 一戌六月朔日御先物頭加賀九郎右衛門跡

延享四卯八月廿二日御目付加藤又右衛門跡

宝暦七丑六月廿八日金津奉行岩上梶太夫御免ニ付仮役

同九卯十二月五日於江戸長袴格被仰付、 席御奉行次

蠏江善右衛門 虎三郎 太兵衛 病死

弐百石

宝暦十三未七月廿二日父善右衛門隠居、 家督無相違、 大番入

安永二巳三月五日六番筆頭原平左衛門跡

蠏江善右衛門

弐百石 役料百石

安永八亥二月廿五日父善右衛門跡知無相違、 大番入

寛政六寅正月十六日大御番弐番筆頭役中川伝兵衛跡

同八辰八月三日御部屋附御側締り役見習、 席御徒頭次

同十二庚申七月十七日江戸御聞番横田作太夫跡被仰付、 御役料百石、 御

使番順席本多門左衛門次

享和三亥五月十四日御先武頭順席桑山十右衛門次

文化五辰年三月廿一日御籏奉行堤安右衛門跡被仰付

文化八未年二月二日病死

蠏江善右衛門 太兵衛

弐百石

文化八未閏二月廿五日養父善右衛門跡知弐百石無相違、 大番入

同九申七月廿四日御小性

文政五午六月十日御小性頭取加藤武右衛門跡

同九戌二月十六日末番外御時宜役被仰付

文政十二己丑十一月廿九日御使番御供頭兼被仰付

天保四巳九月廿九日御長柄奉行飯嶋四郎右衛門跡

天保八酉十月廿九日御先物頭石川平八跡被仰付候

天保十二丑九月五日御持弓頭屋敷奉行兼小栗助跡被仰付、

敷へ替被下候

蠏江十太夫

同年十月朔日御座所預り

弘化三丙午年五月廿二日御側武頭石川平八跡

嘉永元申十二月三日隠居被仰付

弐百石

嘉永元申年十二月三日親善右衛門隠居被仰付、 家督弐百石無相違被下置

大御番組江被入

同五子年江戸御留守詰四月八日出立、

同六丑四月十九日帰着

安政 一卯江戸御供詰

安政三辰七月廿九日大御番一番之筆頭役真杉所左衛門跡被仰付候

万延元申六月廿六日御番皆勤二付時服被下

同六未三月廿五日江戸詰出立、

同七申三月御供二而帰着

同廿九日、昨年江戸表御本丸炎上之節御人数被指出候処、 出精ニ付金弐

百疋被下置候

同年九月晦日病死

蠏江太兵衛 喜太郎

、略履歴

高弐百石

万延元申十一月廿日親十太夫家督如此無相違被下置、 大御番組江被入

但無息二而相勤候分別帳二記有

文久元酉十月十五日来戌年江戸御留守詰被仰付

同 一戌五月十三日中将様御附御近習被仰付

石川平八家屋

同十月廿八日中将様来二月御上京二付御供被仰付

同三亥十月十日中将様御上京二付御供被仰付

同四子正月九日御附御小姓被仰付

元治元子六月廿五日宰相様御上京中格別繁勤太儀ニ思召候、依之御酒被

下置

元治二丑正月十七日頭取定介被仰付

慶応二寅六月四日宰相様御登坂被遊候ニ付御供被仰付

同三卯九月十一日御附御小姓頭取被仰付

同四辰三月廿日太兵衛与改名

葛巻

葛巻治部右衛門

弐百石 外役料百石

元禄十丑六月十六日養父治部右衛門家督無相違被下

元禄十六未六月四日御使番被仰付

正徳五未五月廿五日御先物頭川瀬次太夫跡

葛巻加右衛門

弐百石

享保六丑五月十五日父治部右衛門隠居、家督無相違被下

葛巻庄兵衛 庄五郎 治部右衛門 隠居

二百石 役料百石

享保九辰五月廿一日父加右衛門跡知無相違、大番入

同十二未六月六日表小性

元文五申五月廿日御小道具方、御書院入、岡三郎右衛門跡

寛保二戌六月五日御腰物方

延享二丑正月十五日御使番役料百石、津田九右衛門跡

宝曆二申六月廿五日御徒頭高田金太夫跡

同六子正月十六日御先物頭長谷川次郎左衛門跡

同七丑九月廿五日御側物頭小川与右衛門跡

同九卯八月廿二日御武具忍組支配高田金太夫跡

明和七寅五月廿八日御旗奉行奈良助右衛門跡

安永三午六月十四日新番頭林又左衛門跡

葛巻庄兵衛 病死

弐百石

安永五申十一月七日父庄兵衛隠居家督無相違、大番入

同年同月廿九日表御小性見習

同七戌八月十二日本役

寛政五丑八月廿五日勤方其儘ニ而格式末ノ番外、大谷市右衛門次

同六寅閏十一月十一日表御小性筆頭役

享和元酉十一月死去

葛巻庄兵衛 安之助 武左衛門

弐百石

享和二戌年正月十六日養父庄兵衛病中願之通跡知無相違被下、大御番入

文化三寅六月十六日閉門

文化十三子七月廿日不埒之義在之、遠慮

葛巻数兄 藤三郎事 源三郎 庄兵衛 実吉田カソエ

弐百石

一文政十亥七月五日養父庄兵衛病身ニ付内願之通休息被仰付、家督弐百石

無相違被下置、大御番組へ被入

一同十三寅三月十六日表御小姓波々伯部八太夫跡被仰付

一同年六月六日御近習番被仰付、御書院番組へ被入

一天保二卯江戸詰被仰付候

一同三辰五月廿三日御小姓高村藤兵衛跡被仰付

一同四巳三月御供詰出立、翌午年御供帰

同六未三月御供詰出立、七月御尊骸御供ニ而御国江着、直二八月引返江

戸表江出立

一同年九月五日今度御代替ニ付御小姓御免、御側支配御近習ニ被差置、勤

方之義ハ追而可被仰付候、御用筋之義ハ先是迄之通可申談旨

同年同月十四日御小姓被仰付候

一同七申江戸詰越

一同八酉江戸詰越

一同九戌五月御初入御供二而罷帰、同年八月引返江戸表江出立

一同年十月廿五日今度御代替二付御小姓御免、御側支配御近習二被差置候、

勤方之義ハ追而可被仰付候、御用筋之義ハ是迄之通可申談旨

同年同月廿九日御小姓被仰付候

一同十亥江戸詰越

一同十一子当秋長詰ニ付交代罷帰候

同十二丑江戸詰被仰付、八月廿五日出立

一同十三寅五月廿日於江戸表御腰物数寄方奉行浅見七十郎跡被仰付

弘化四未二月十四日末ノ番外御時宜役被仰付

一嘉永五子六月九日東郷平太夫屋敷へ替被下

一同年十二月廿八日庄兵衛与名替

同七寅四月五日松永治郎左衛門病死ニ付、跡役被仰付候迄御徒頭仮役被

仰付候

同年五月十五日御徒頭右治郎左衛門跡、御役料五十石被下置候

一同年六月十九日御使番役御供頭兼日比彦之丞跡、御役料都合百石被下置

候

同年十月十三日御使番役其儘御供頭兼帯之儀ハ御免被成候

安政四巳二月廿三日御先物頭山田次郎太夫跡被仰付候

一同六未九月三日太田御陣屋詰出立

同十八日詰中太田御陣屋通用御門預り被仰付、且又出火之節御用火消出

馬被仰付候

一万延元申閏三月廿八日詰中太田御陣屋表御門預り、且又右同断出馬并調

練掛り被仰付候

一同年四月廿四日詰中遠見番所掛り被仰付候

同年七月廿八日先達而臨時横浜表江出張二付御褒詞

同年八月十七日当分太田御陣屋御目付仮并同所御徒頭取扱仮被仰付、遠

見番所掛り之儀ハ御免被成候

文久三亥二月十日殿様御上京御供二而組之者召連出立、三月十六日御供

ニ而帰着

一同四子正月十六日御持物頭屋敷奉行兼尾高治左衛門跡被仰付候

一元治与改元、三月十三日当分御側物頭仮兼帯被仰付候

一同年八月十五日堀権之助病気ニ付組之者召連御上京御供被仰付、同廿八

日出立、夫ゟ長征、丑三月帰

一同二丑三月廿日御側物頭仮兼帯御免被成候

一慶応二寅十月廿六日席其儘予備組支配被仰付、御役料五拾石被下置候

同三卯四月廿日御趣意ニ付夜廻り勤被仰付候

一同年六月廿五日屋敷奉行勤中已来取調居侯屋敷帳新規出来指出、慶長以

来当時迄之転宅遂一致訂正格別骨折候儀ニ付、御盃一御扇子二被下置候

一同四辰七月廿四日当分三ノ丸御座所御門御預ケ当番被仰付、右勤中夜廻

勤之儀ハ御免被成候

一明治二巳二月十六日今般御改革ニ付、御役儀御免被成御広間当番勤被仰

付候、無程当番御用捨

同年六月廿日庄兵衛事数兄卜改

同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、為御慰労金五十両被下

置候

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米百五俵弐斗八升五合被下候

同三午四月十五日老年二付願之通隠居

上月

上月武左衛門

三百石

元禄十丑七月四日表御小姓被召出

宝永二酉七月十三日養父八郎左衛門家督被下

同四亥五月十五日御膳番

正徳五未五月廿五日御徒頭御役料被下

享保五子十一月九日於江戸御先物頭今村伝兵衛跡

同六丑九月十五日御側物頭梅田段右衛門跡

同八卯七月十三日御目付矢野右衛門作跡

同十五戌十二月廿八日百石御加増

同十七子七月廿二日御役御免弐拾五石御加増、御役料上ル、本知三百石

被成下、席宮北十郎左衛門次

上月八郎左衛門 武左衛門

弐百石 役料百石

享保廿卯六月五日父武左衛門跡知三百石無相違、大番入

寬保二戌八月十三日百石御取上、此節逼塞

明和元申六月五日御使番役料百石被下、岡三郎右衛門跡

上月武左衛門

弐百石 役料百石

安永二巳閏三月十六日父八郎左衛門跡知無相違、大番入

天明八申六月廿五日大番六番筆頭山田弥五左衛門跡

寛政九巳十二月十一日御使番役海福猪兵衛跡、御役料百石

同十二庚申八月廿四日杉形御鎗奉行海福猪兵衛跡

文化元子六月十九日御先物頭原田彦八郎跡

同年十月廿四日御先乗御持弓頭宮北長左衛門跡

同九申八月十九日御役御免、御先物頭次席武田平太夫跡

同六丑三月廿二日御供出立

候

弐百石 上月八郎左衛門 一文政三辰十一月廿五日親武左衛門家督弐百石無相違被下置、 同十四卯三月廿九日末之番外御時宜役被仰付 天保四巳江戸詰被仰付、三月廿八日出立 同七申十月二日御小姓八木次郎八跡被仰付候 同四亥二月十三日御先物頭武曾権太夫跡被仰付、御役料百石被下置候 嘉永三戌正月十六日御留守物頭松尾源左衛門跡被仰付 同十二丑正月廿日御書院番組へ被入 同年江戸詰被仰付、七月十七日出立 同十三寅六月廿二日若殿様御附御近習番被仰付候 同十亥六月十一日表御小姓山田藤兵衛跡被仰付候 同九戌二月十四日威徳院様御逝去二付御小姓御免、 同八酉江戸詰被仰付候 同五子十月四日御持弓頭宮北権六跡被仰付、 同六未六月五日超倫院様御逝去二付御役御免被成、 同年九月二日若殿様御附奥御納戸役被仰付候 文政三辰十月十一日病死 但安政元寅十二月十八日御軍制御改正二付、御役名御持物頭与替 久三郎事

> 同七寅六月十三日塩町ゟ出火之処及大火候節 出精ニ付御褒詞

同十一戌五月十六日御先物頭岩村門右衛門跡、

安政四巳四月廿五日江戸御供詰出立

万延元申六月廿一日御側物頭鈴木平馬跡被仰付候

同日中村八太夫太田御陣屋詰留守中御泉水預り被仰付候

同年十月九日御座所預り被仰付候

文久三亥五月廿二日隠居

大御番組

上月

上月久右衛門

大御番組へ被入

百五拾石

宝永二酉八月四日奧御小姓被召出、 御扶持切米被下

正徳元卯十一月七日中奥被仰付

享保三戌五月十一日新知被下、 奥御小姓被仰付土屋助七跡

同七寅二月廿一日、 奥御小姓御免、 大番被入

同九辰七月廿九日御膳番役被仰付、御書院番入

大御番組へ被入

同七子六月廿五日御使番林田清右衛門跡被仰付、 五拾石御加増被下、 御

役料被下

同十九寅六月廿九日御役御取揚、

上月九郎左衛門

屋敷奉行兼帯被仰付

百五拾石

宝暦七うし三月十一日父久右衛門休息、家督無相違、

上月源右衛門

百五拾石

安永六酉四月五日養父九郎左衛門跡知無相違、大番入

同七戌二月五日御供方御近習番格、 御書院番入

天明二寅六月十四日御近習御供頭

同四辰十月十二日奥御納戸

寛政三亥十一月廿九日御膳番被仰付、 御金懸り是迄之通

同五丑十二月五日御膳番其儘御近習番頭取

上月久右衛門

百五拾石

寛政六寅五月廿日養父源右衛門家督無相違、

同年閏十一月十一日表御小性

同八辰十二月十九日御小性

同十一未九月十八日御附御用人支配

同十二申正月十五日御附御膳番

文化元十一月十八日御腰物奉行香西万作跡

同十三子二月三日末之番外御時宜役、席沢木次太夫次

同年十二月朔日御時宜役其儘御徒頭仮三沢勘左衛門跡

文政元寅六月廿四日御趣意ニ付御徒頭仮御免

文政五午六月十五日尾高小右衛門跡御水主[

文政十亥六月廿三日御先物頭笹川藤内跡

文政十三寅二月廿九日若殿様御側向頭取被仰付、

天保六未六月五日超倫院様御逝去二付御役御免, 当秋江戸詰被仰付 御役料其儘被下置

先物頭次席被仰付、御近習二被指置

天保七申四月十六日御広敷御用人

同年五月十六日貞照院様御附兼帯被仰付候

天保八丁酉七月十一日病身二付御役御免被成、 御側物頭次席被仰付、

御

近習二被指置候

同十二丑六月十一日御旗奉行西村仙右衛門跡被仰付、 御役料百石被下置

候

同十三寅二月廿九日隠居被仰付

上月久尾 熊之助 久右衛門 隠居後湖舟

百五拾石

天保十三寅二月廿九日親久右衛門年寄候二付隠居被仰付、 家督百五拾石

無相違被下置、 大御番組へ被入

同年五月廿九日奥御小姓被仰付、 当秋江戸詰被仰付、

同十五辰正月十三日江戸表へ御供ニ而出立、 同年五月十一日御供二而帰

着

弘化 一已年江戸詰、三月廿 日御供二而出立

同四未年江戸詰、三月十九日御供ニ而出立

嘉永元申六月急御出府御供二而出立、 同七月御供二而帰着、 右ニ付十二

月七日御褒詞

同年九月十五日奧御納戸役野中重左衛門跡被仰付、 御書院番組江被入

同六丑七月廿六日江戸表へ出立

同七寅六月十九日御腰物数寄方奉行柘植平太夫跡被仰付、 御膳番格二被

御

八月廿五日出立

一同廿五日久尾事湖舟

安政六未十一月十一日末ノ番外御時宜役被仰付候

一文久二戌四月十六日江戸詰出立

一同年七月十七日御使為御用江戸表ゟ着、同廿一日折返シ出立

一同年八月七日下地御人少之処、中将様臨時日之御登城被仰出候処、格別

出精相勤候二付金百疋被下置、失却之儀ハ取調之上追而可被下旨

一同年八月十三日御使番役中将様御供頭兼帯被仰付、御役料百石被下置候

一同年十月廿五日中将様御上京御供被仰付、御道中并御逗留中御徒頭取扱

兼带被仰付候

一同年十二月廿三日来春御船ニ而御上京被仰出候ニ付、陸通り御先へ出立

一同三亥三月廿五日御供二而帰着

一同四子正月十六日御使番役其儘、中将様御供頭兼勤之儀ハ御免被成候

元治与改元、十二月賊徒御追討御供出陣、依之御手当銀八百匁被下置候

同二丑正月十九日御含御用有之、早速敦賀表江罷越候様被仰付候

同年三月十一日松平加賀守様江為御使者被遣候、然ル処同月廿三日帰

慶応二寅十月廿六日役儀其儘御先物頭次席二被仰付

一同四辰正月廿三日勅書守衛ニ而大聖寺へ罷越

一同年八月廿九日席其儘御留守組支配被仰付、御役料之内五拾石被下置候

明治二巳二月十六日今般御改革二付、御役儀御免被成御広間当番勤被仰

付、無程当番御用捨

一同年六月廿一日久右衛門事久尾ト改

一同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、為御慰労廿五両被下置

候

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米八十弐俵壱斗二升壱合被下候

同三午正月十五日老年二付願之通隠居

加賀

加賀藤左衛門

三百五拾石

延宝三卯五月十一日父藤左衛門跡目三百石被下

但貞享三一統半知被下

任 夏里兰 一 新主 <u>分</u>褚三

元禄五申九月四日於江戸弐百石御加増

加賀九郎右衛門

弐百石 外役料百石

元禄十四巳三月廿八日於江戸御部屋御小姓被召出、

享保五子七月廿一日御使番矢野右衛門作跡

宝永六丑六月九日養父藤左衛門為跡目此通被下

同十五戌七月十三日御先物頭磯野無二跡

寛保二戌六月朔日御持弓頭荻野四郎右衛門跡

寛延四未正月十六日御籏奉行小栗八兵衛跡

加賀藤左衛門 藤次郎 隠居

二百石 役料百石

宝暦三酉十月廿五日父九郎右衛門隠居、家督無相違、大番入

同十辰四月廿二日四番ノ筆頭彦坂又兵衛跡

明和四亥三月廿六日御使番津田新兵衛跡、役料百石

御扶持切米被下

同五子七月九日御杉形奉行荻野小右衛門跡

安永三午六月十四日御持弓頭同人跡、 屋敷奉行兼

天明四辰九月廿四日御籏奉行川村十郎右衛門跡

加賀九郎右衛門

弐百石

天明七未三月廿四日父藤左衛門隠居、家督無相違被下、大御番入

加賀次郎右衛門 乙五郎

弐百石

寛政九巳閏七月廿日養父九郎右衛門跡知無相違、 大番入

同十二申十月十四日中将様御附御近習番、 御用人支配

同十三酉正月十四日中将様御附御小姓被仰付

享和三亥ノ七月朔日御附御近習番

同年十一月十六日御趣意二付御免

文化三寅六月十六日閉門

同十四丑正月廿一日表御小姓皆川平右衛門跡

文政十亥十二月十日病身内願も有之表小性御免、 御書院番

文政十二丑七月四日御奉行役被仰付、 御役料百石被下置候

文政十三寅八月廿七日御役御免、末之番外

天保二卯八月廿五日隠居

加賀九郎右衛門 藤七郎 藤左衛門

弐百石

天保四巳九月八日若殿様御側御近習番御書院番組、 天保二辛卯八月廿五日親次郎右衛門隠居、家督二百石無相違、大御番入 支度出来次第江戸詰

天保六未六月五日超倫院様御逝去二付御役御免、 大御番組入

天保八酉正月十六日御近習番

天保九戌十月廿五日今度御代替二付御役御免被成、 御書院番組其儘御近

習二被差置候、 勤方之義者追而被仰付候、 御用筋之義、先是迄之通可申

談候

同月廿九日御近習番被仰付候

同十亥十一月五日御小姓近藤勇蔵跡被仰付、 役席多喜田鉄五郎次被仰付

同十四卯七月廿二日御小姓頭取川瀬次郎右衛門跡被仰付

同三午七月六日御目付役山本源左衛門跡、 弘化二巳正月廿八日病身内願二付御小姓頭取御免、 御役料百石被下置 御書院入御近習

同年十二月八日病死

誠吉

、略履歴

加賀九郎次郎

高弐百石

弘化四未正月廿九日養父九郎右衛門病中願之通養子被仰付、 家督如是無

相違被下置、 大御番組へ被入候

嘉永三戌十二月廿八日九郎次郎与名巷

同五子十月十三日来丑年江戸御供詰

同七寅三月廿二日品川御殿山御固場所へ出張、 心配罷在候二付御下緒壱

懸被下置候

同年六月廿四日御小姓雨森藤四郎跡被仰付候

同年十月十三日来卯年江戸御供詰

安政三辰十月十五日来巳年江戸御供詰被仰付候

同四巳三月十二日思召を以当年江戸御供詰御免被成、 御留守中明道館江

罷出厚致修行候樣被仰付候

同年六月廿日思召を以兵科局詰被仰付、 御書院番組江被入、御小姓之儀

者御免被成候

同五午十一月廿九日洋学修行被仰付置候処、 尚又江戸表へ罷出致修行候

但修行中御扶持方三人扶持被下置候事

ハ、可然との御沙汰ニ候、

万延元申八月廿一日航海術致修行候様被仰付候

文久二戌年四月廿九日大御番一番之筆頭役被仰付、 大御番組へ被入候

同三亥十月七日兼而志願之趣も有之ニ付、 兵庫表へ罷越勝麟太郎殿相手

寄航海術致修行候様被仰付候、 依之大御番筆頭役之儀ハ御免被成、 御書

院番組へ被入候

慶応元丑閏五月廿日航海術修行頭取被仰付

同二 二卯八月廿九日航海術取調方被仰付

同十二月廿二日御書院番二番之筆頭役梶川半兵衛跡被仰付

明治元辰九月十一日大砲半隊長役儀二付、 席末之番外格二被仰付

同十月廿三日奥州会津表へ早速出張被仰付

同 一巳二月十七日砲長被仰付

享保七寅二月廿八日席松波甚左衛門次被仰付

加藤長右衛門 権十郎 隠居

二百石 役料百石

享保十一午三月廿一日父忠兵衛隠居家督無相違、

寬保二戌七月十九日御腰物方千本弥五左衛門跡,

大番入

御書院番入

延享三寅八月十八日御聞番五十石御加増、

役料百石、御使番順席

寛延四未八月三日御目付田辺五太夫跡

宝曆八寅二月十一日御奉行浅井源左衛門跡

明和 一酉二月廿日五十石御加増

同五子七月朔日役義取扱不参届、其上不宜趣も有之二付役義御取上、

拝

知之内五十石被召上、大番入、遠慮

同六丑九月九日御奉行帰役、役料百石、 席河崎三郎助上

安永二巳五月八日先年御取上被成候五十石被下

同三午七月廿四日御預所元締役熊谷小兵衛跡

加藤長右衛門

弐百石

安永七戌六月廿二日父長右衛門隠居、 家督無相違、

加藤忠兵衛 三十郎

弐百石

寛政七卯五月二日養父長右衛門跡知無相違、

文政五午年二月病死

加藤

百石

加藤忠兵衛

於松岡御近習目付、 御相続後

加藤庄兵衛

権十郎

弐百石

文政五午年四月五日養父忠兵衛家督無相違、 大御番入

同年五月廿五日御近習番御書院番入

同九戌二月廿四日威徳院様御逝去二付御役御免、 大御番入

同十亥十一月二日御近習番御裏役

文政十三庚寅六月六日奥御納戸役岩城庄三郎跡

天保六未九月五日今度御代替二付御役御免被成、 御書院番組其儘御近習

二被差置候、 勤方之儀ハ追々可被仰付候、 御用筋之義ハ先是迄之通可申

談

同年同月廿四日奧御納戸役被仰付

天保七申十一月廿二日病死

加藤長右衛門

弐拾人扶持

天保八酉二月五日加藤庄兵衛病死間もなく養子権十郎令病死、 家及断絶

候処、庄兵衛儀御三代も御近習相勤候者ニ候得者、 格別之御憐愍を以家

名御立被下、 勇吉へ御扶持方弐拾人扶持被下置、 無役御留守番組へ被入、

相続被仰付候

加藤良右衛門 他之助

略履歴

弐拾人扶持

天保十一子十一月五日加藤長右衛門病中願之通養子ニ被仰付、 家督無相

> 違如是被下置、 無役御留守番組江被入候

同十四卯九月六日大御番組へ被入候

嘉永元申十二月廿六日長右衛門与名替

嘉永五子九月廿四日良右衛門与名替

安政六未四月十一日御広敷御用達被仰付、 御留主番組へ被入、当秋江戸

詰高田敏吉与致交代候様被仰付候

同六月十二日今般公儀御代替二付、 御判物御朱印御改有之二付 御代々

之御判物御朱印江戸表へ被差出候、 依之詰引揚指添被仰付候

同九月三日右指添罷越候二付、 金百疋被下置候

同七申正月十八日来酉秋迄詰延被仰付候

万延元申七月四日御番御供皆勤ニ付、御紋御帷子被下置候

文久二戌年十二月十一日御金奉行久野文四郎跡被仰付候

同三亥二月廿九日御広敷御用達被仰付、

御書院番組へ被入候、

但シ役席

之義ハ上席へ被入候事

同年八月廿日今度於三ノ丸御座所向御普請被仰出候ニ付、 御用懸被仰付

同年十二 一月晦日御座所泊り番御広敷御用人助相勤候ニ付、 金三百疋被下

置候

候

元治元子八月廿七日御先物頭溝口郷右衛門跡被仰付、

御徒頭次席二被成

御役料五拾石被下置候、 但シ席富田弥兵衛次

慶応元丑十月九日殿様御供組之者召連支度罷在御指図次第

同 一寅十月廿六日席御役料其儘、 御使番役被仰付

明治 一巳二月十六日今般御改革ニ付、 御役儀御免被成御広間当番勤被仰

付



加藤所左衛門

百五拾石 外役料百石

元禄十四巳七月廿八日奥御小姓被仰付、 御扶持切米被下

宝永二酉九月廿三日新知被下

正徳元卯十一月七日大番入

享保六丑二月五日大番一番筆頭

同十一午十二月廿九日御膳番御役料被下、 御書院番入

同十二未六月五日御書院二番筆頭

同十三申五月十一日御使番下山半左衛門跡

同十七子三月十六日御先物頭大井三右衛門跡

加藤孫七郎 乙五郎 所左衛門

百五拾石 外役料百石

元文元辰十二月廿五日養父所左衛門家督跡知無相違, 大番

寬延元辰八月廿五日大番六番筆頭井原源兵衛跡

宝曆七丑五月十六日御使番相沢九郎右衛門跡

明和三戌五月十七日御先物頭望月八郎右衛門跡

同七寅八月七日御側物頭津田藤左衛門跡

加藤源八郎

百五拾石 役料百石

明和九辰十一月十六日父孫七郎跡知無相違、

安永三午八月十四日御近習番御書院番入

天明四辰十月十二日御膳番

同六午閏十月七日御膳番御免、 格式是迄之通二而御近習番御供頭

同八申五月廿八日御近習番頭取御膳番

寛政 一戌五月廿八日御膳番被減候ニ付、 御近習番頭取之方斗相勤候様被

仰付

同五丑八月十一日頭取是迄之通二而御書院番二番筆頭役海福猪兵衛跡

同六寅六月八日役義是迄之通二而御膳番被仰付

同九巳六月十六日勤方是迄之通、 格式末ノ番外堀勘左衛門次

同十午三月廿四日於江戸御使番役水野藤兵衛跡、 御役料百石

享和三亥二月廿四日御長柄奉行服部長三郎跡

文化元子十月廿四日御先武頭上月武左衛門跡

同五辰十月病死

加藤惣九郎 虎太郎

百五拾石

文化五辰十二月五日父源八郎家督無相違、 大御番入

文政六未十月五日病死

加藤所左衛門 惣九郎 喜三次

百五拾石

文政六未年十一月廿五日養父惣九郎病死、跡家督無相違被下置、 大御番

組江被入

安政三辰三月十二日火之御番御用相勤太儀二思召、 安政二卯江戸御供詰 同年十二月十一日来亥年芝御陣屋詰被仰付、 文久二戌十月六日御側物頭本多十郎兵衛跡被仰付 同六未十二月三日御普請奉行村田竜之進跡被仰付候 同年十一月十八日御先物頭尾高仁兵衛跡被仰付候 同五午九月十七日御相続御礼被為済候上伊勢八幡御代拝被仰付候、 同四巳江戸御供詰出立 同六丑三月廿二日御供出立 嘉永五子六月十七日御使番御供頭兼鈴木平馬跡被仰付、 弘化二巳年江戸詰被仰付、 天保七申年江戸詰被仰付、 同十三寅年江戸詰被仰付、 同年八月廿三日御座所預り被仰付 同三亥二月廿二日詰引揚早速出立被仰付、 代拝相済候ハ、直ニ御国江罷帰候様被仰付候、十一月十五日帰着 同十四卯年九月廿九日大御番一番筆頭役雨森作助跡 様被仰付候 長詰ニも相成河合六郎太夫御供頭被仰付候間、 枚被下置候 但安政元寅十二月十八日御軍制御改正二付、 替候 三月 四月十六日出立 四月十六日出立 出立 廿六日出立 詰中御目付本役同様相勤候 休交代被仰付候二付、 御召御上下一具銀壱 御役名御先新物頭と 御役料百石被下 且又 御 百五拾石 加藤源八郎 同年九月三日御内用有之江戸表ゟ着、同月七日折返シ出立 同年五月廿七日当時病人等も多く御番頭ゟ内達之趣も有之ニ付、 同年四月廿三日江戸表江出立 同三亥三月廿五日右御供ニ而京都ゟ帰着 同年十二月十五日中将様御上京御供御用ニ付江戸表へ出立之処、 付候 文久二戌十月六日今度農兵御端立二付、 同五月十三日詰中長剣術并砲術厚修行致候様被仰付候 同四巳四月廿五日江戸 同 可罷越筈二付此節致出立候処、 元治元子三月廿九日、 陣屋詰御雇被仰付、 同年八月十四日席御役料其儘御役御免被成候 元治与改元、六月廿七日帰着 夫
ら
大
坂
江
為
御
迎
罷
越
御
供

二
而
上
京
之
処
、 二付途中ゟ京都へ 安政三辰十一月廿六日御含有之来巳年江戸表江被遣、 同年十二月賊徒一件出張二付、 人扶持被下置候 二丑二月廿二日隠居 御ふち方五人扶持被下置候 一昨戌十二月江戸表江罷出中将様御供ニ而京都江 出 俄二御船行相成候ニ付途中ゟ京都江罷出 御手当銀八百匁被下 西尾十左衛門申談教授手伝被仰 失却も有之趣ニ付金壱両為御

同四子二月七日御泉水預り被仰付候

手当被下置候

御都合

当分御

右詰中御扶持方三

一元治元子六月廿五日宰相様御上京中、 格別骨折相勤太儀二思召候、 依之 同二寅八月四日摂州神戸ニ而病死

銀壱枚被下置候

同年十月十六日長征出陣、 丑二月三日帰

一丑二月廿二日親所左衛門年寄候二付隠居被仰付、 家督百五拾石無相

違被下置、 大御番組へ被入候

慶応元丑六月十六日病死

加藤恒一 野坂恒一 野坂源右衛門次男也

百五拾石

安政三辰五月廿二日鰐淵昨寒稽古中数多支合二付御褒詞

同四巳四月十四日右同断

文久三亥二月十日殿様御上京被遊候二付御供、 三月六日御供二而帰着

同年十月十三日中将様御供二而上京

同四子正月十八日山階宮被任御頼当分御附人被仰付

元治と改元、四月十日失却も有之ニ付、 月々金三両ツ、御手当被下置候

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、 依

之銀壱枚被下置候

同年十月九日内達之趣も有之二付、 御附人御免被成勝手次第罷帰候様被

仰付

同年十月十七日京都ゟ帰着

同十一月朔日大坂表江出立、 夫ゟ長征、 丑春帰

慶応元丑八月八日加藤源八郎病中願之通養子二被仰付、 家督百五拾石無

相違被下置、 大御番組江被入候

同年十一月晦日大坂表江出張

加藤所左衛門 辰五郎

高百五拾石三人扶持

、略履歴]

慶応二寅十月三日恒 一親類共願之通相続被仰付、 家督如此無相違被下置

大御番組江被入

但長州人京師乱入戦争之砌相働候付、 為御賞三人扶持被下置、 猶

同十一月廿六日役筒頭被仰付、 役御番組江被入

無息二而相勤候分別帳ニ有之

同十二月廿五日軍事方被仰付、 役筒頭之儀ハ御免被成

同月廿八日所左衛門与改名

同 二卯四月十一日英学句読師被仰付、 軍事方之儀ハ御免被成

同四辰六月十二日御用有之上京被仰付

加藤

加藤武右衛門

百五拾石 宝永三戌六月廿五日養父牛兵衛跡目無相違被下

加藤武右衛門

百五拾石

宝永六丑三月五日養父武右衛門跡目御切米被下

正徳五未五月廿五日表御小姓

享保二酉六月十九日中奥御小姓

同五子十一月九日於江戸新知、小道具取扱富田平蔵跡

同九辰閏四月十三日於江戸表御小姓

同年七月廿九日御膳番

同十八丑三月十五日御徒頭五十石御加増、併二御役料百石長谷部小右衛

門跡

元文元辰五月十三日御側武頭渡辺元右衛門跡

同四未三月三日御目付片山弥五右衛門跡

寬保二戌六月朔日御奉行千本藤左衛門跡

延享五辰七月廿五日御役御免、席御先物頭次

加藤武右衛門 初九郎二

三郎

百五拾石

宝曆七丑八月十六日無息二而蟄居、同八寅四月十八日御免

同九卯正月嫡子ニ御立被下

明和元申八月廿五日養父武右衛門隠居、家督無相違、大番了

寛政二戌六月十一日三番筆頭八木平六跡

加藤武右衛門 郷八

百五拾石

寛政八辰四月廿日養父武右衛門跡知無相違、大御番入

同九巳九月廿五日御小性

同十一未三月七日御近習番被仰付、御書院番入

同十一未九月十八日御附御用人支配

同十二申二月廿九日御附御不用二付、大御番入

文化元子五月廿四日表御小性

文化二丑ノ正月廿四日奥御小性

同十酉二月七日御小性頭取

文政五午六月十日末之番外御時宜役被仰付

同八酉十月五日御留主物頭渋谷五郎右衛門跡

同十一子五月廿日御先物頭山崎七郎右衛門跡

天保二辛卯八月十七日病死

加藤武右衛門 孫八

百五拾石

一天保二卯年十月十一日親武右衛門家督百五拾石無相違被下置、大御番組

江被入

一同六未正月廿七日楷五郎様御附御近習番多喜田鉄五郎跡被仰付、御書院

番組へ被入候

一同十四卯閏九月廿五日巍光院様御逝去二付御役御免被成、

大御番組江被

入

一嘉永四亥三月十一日休息

加藤武右衛門 多吉 郷八

、略履歴

高百五拾石

嘉永四亥三月十一日養父武右衛門休息被仰付、家督如斯無相違被下置、

大御番組被入候

同五子十二月廿八日郷八与改名

加藤茂兵衛

同六丑六月十五日立此度相州浦賀表江異国船渡来二付、急出府被仰付罷

越候処、及退帆候ニ付御人数不及指出旨江戸表ゟ申来候ニ付、直様途中

ゟ 引返罷帰候

同年七月廿日此度思召を以支度出来次第江戸表へ罷出、炮術調練致修行

候様被仰付、御扶持方三人扶持被下置候

同年十月十五日来寅年江戸御留守詰被仰付、直ニ詰罷在侯様被仰付侯

同七寅三月廿九日詰御免被成、勝手次第罷帰候様被仰付候、尤詰ニ御立

被成下候

同十月十三日来卯年江戸御供詰

安政二卯正月廿日家屋敷服部吉左衛門家屋敷へ替被下候

同二卯二月七日詰引上出立、当月下旬迄ニ江戸着候様被仰付候

同四巳九月廿三日丹羽辰五郎家屋敷江替被下候

同五午年十月十五日来未年江戸詰被仰付候

万延元申五月廿五日御金奉行皆川善兵衛跡被仰付、御留守番組へ被入候

同二酉二月七日当酉年江戸詰被仰付候

文久元酉年十二月廿八日武右衛門と改名

慶応四辰三月十六日格式末之番外格ニ被仰付、役儀之儀ハ御免被成

同六月十九日席其儘御旗奉行被仰付

明治二巳二月十六日今般御改革ニ付、御役儀御免被成御広間当番勤ニ被

仰付

三百石

享保七寅二月十三日於江戸新知被下、同日御膳番、御書院入

同十一午十二月十九日五十石御加増

同十二未四月六日御膳番御免、番外

同十五戌八月六日五十石御加増

同十七子九月十九日百石御加増、御持筒頭並

同廿卯二月十三日御側物頭井原丞助跡

同廿一辰五月十三日御役御免、表へ御出、席御持武頭次

元文五申五月十九日蟄居被仰付、拝知之内百五拾石倅茂吉へ被下

加藤丹右衛門 武次郎

百五拾石

元文五申五月十九日父茂兵衛蟄居、拝知三百石之内半分被下、大番入

明和八卯六月十一日肥満ニも在之候処、武芸等心掛候趣ニ付末ノ番外被

仰付、門野九右衛門次

加藤茂右衛門

百五拾石

安永四未九月十六日養父丹右衛門跡知無相違、大番入

寛政十一未十一月廿日大御番一番筆頭本多門左衛門跡

文化六巳ノ二月晦日御使番中村仲跡、御役料百石被下置候りず・・ジー・リートライオ・予警員スジーフ谷手品

文化十三子六月廿九日御先物頭丹羽市左衛門跡

文政元寅十月二日隠居被仰付候

- 171 -

加藤

加藤丹右衛門 茂右衛門

百五拾石

一文政元寅十月二日養父茂右衛門隠居被仰付、家督百五拾石無相違被下置、

大御番組へ被入

同九戌江戸詰被仰付、 四月十五日出立

同十一子二月廿九日下山甚兵衛跡、 大御番五番之筆頭役被仰付候

同十二丑江戸詰被仰付、 四月十五日出立

天保十一子江戸詰被仰付、 四月十五日出立

同十二丑六月廿九日御使番役比企佐左衛門跡被仰付、 御役料百石被下置

候

同十五辰十二月三日御先作事奉行川村文平跡被仰付

弘化三午十月朔日御預所郡奉行小栗治右衛門跡被仰付、 御先物頭次席

御役人並被仰付候

嘉永二酉閏四月五日御先物頭周防長兵衛跡被仰付候

安政三辰年七月十七日御側物頭武曾権太夫跡被仰付

同四巳二月十五日御座所預り被仰付候

安政五午十一月六日丹右衛門与名替

同五午十一月十一日年寄候二付隠居被仰付候

文久二戌年六月廿五日思召を以折々御機嫌伺罷出、 其節ニ中ノ口致往来

加藤文太

百五拾石

安政五午十一月十一日養父丹右衛門年寄候二付隠居被仰付、 家督百五拾

石無相違被下置、大御番組へ被入候

文久元酉三月十九日御供ニ而出立

同二戌十一月十六日上京被仰付候処、腰痛爾々不致御用捨相願候二付、

他番へ割入候

同三亥二月八日年始御規式中表御小姓御雇精勤ニ付、 金百疋被下

同年五月六日当亥御参府御供被仰付、 八月十七日出立、 同十二月江戸ゟ

御上京御供、子二月御帰国御供

元治元子六月廿五日御預所御金奉行久野文四郎跡被仰付、 御留守番組へ

被入候

同年十二月賊徒一件二付出張、 依之御手当銀六百匁被下置候

慶応元丑五月廿八日役御番筆頭役被仰付、 役御番組江被入候

同三卯五月廿日御腰物数寄方奉行田辺五太夫跡被仰付、御書院番組へ被

入候

明治二巳二月十六日年寄二付休息

加藤虎五郎

、略履歴

高百五拾石

同日養父文太家督如此無相違被下置、三番遊擊隊後拒役被仰付、 但無息

ニ
和勤候分別帳ニ有之



加藤又右衛門

百五拾石 外役料百石

元禄十二卯八月十八日奥御小姓被召出、御扶持切米

宝永七寅六月九日於江戸新知被下百石、御膳番被仰付

正徳元卯十一月七日御膳番御免、大番入

同三巳閏五月十三日重而御膳番被仰付

享保六丑十月四日御膳番役御取揚、大番入、此節閉門被仰付

元文二巳閏十一月廿一日与内吟味役被仰付、土屋甚五左衛門跡

同三午六月十八日御膳番被仰付川地波門跡、御書院番入

同五申六月九日御書院番二番筆頭五拾石御役料被下置、土屋甚五左衛門

跡

延享元子三月十六日御徒頭今村次郎太夫跡

寬保二戌六月朔日御使番御加増五拾石被下、

御役料百石、

奈良権左衛門

跡

同三寅五月十八日御目付役下山彦三跡

同四卯八月廿二日御預所御目付鈴木十右衛門跡

寛延三午三月廿日御目付波多野文右衛門跡

同六月廿五日兼役御免

宝曆三酉十一月廿五日御籏奉行加賀九郎右衛門跡被仰付

加藤半左衛門 舎人

百五拾石 百石役料 外五拾石御足

元文五申八月三日中奥御小姓被召出、御切米

寛保三亥七月廿五日奥御小姓

延享三寅八月廿三日新知被下

寛延三午二月十一日御小姓御免、大番入

同月十六日中奥御小姓

宝曆七丑正月廿九日父又右衛門隠居、家督無相違、勤方只今迄之通、其

身知行上ル

同年九月廿八日勤方其儘ニ而末ノ番外

同八寅四月十七日御側御免、御近習二被差置

同年五月廿八日御側勤被仰付、勤方最前之通り

同十辰八月十六日御徒頭坂田七右衛門跡、役料百石

明和三戌八月六日御先物頭松田善右衛門跡

同四亥閏九月六日御側物頭下山七郎左衛門跡

同五子七月二日御目付高村四郎左衛門跡

安永八亥正月十六日御足高五十石

同十丑正月十五日長袴格、席御奉行次

同年十二月五日於江戸御奉行川村十郎右衛門跡

寛政二戌十一月廿一日御札所目付

加藤半左衛門 又右衛門

百五拾石 役料百石

安永七戌七月七日御小性見習被召出、御合力銀十五枚被下置

天明二寅十一月廿四日御小性本役

同八申六月廿一日奥御納戸格御近習番、御書院番入

寛政三亥十月十六日父半左衛門年寄候二付隠居被仰付、家督無相違、御

書院組奧御納戸格御近習番其儘被仰付

同六寅二月廿九日奥御納戸格其儘、御裏役高村藤兵衛跡

同七月十日奥御納戸格其儘ニ而御近習番御供頭松田善右衛門跡

同十一未九月十六日御部屋附御近習番御供頭席其儘、 大河原助右衛門跡

被仰付

享和二戌九月二日勤向其儘御近習番頭取格

享和二戌十二月六日御供頭被仰付、席末ノ番外、 御時宜役兼

文化二正月廿一日御役料五十石

文化五辰七月廿二日御使番沢木彦左衛門跡、 御役料都合百石被下

同十一戌七月廿日御先物頭鈴木百助跡

同十三子十二月朔日御側物頭佐々木藤左衛門跡

同十五寅三月五日御泉水預り松田幸右衛門跡

文政五午六月十日太田三郎兵衛跡、 忍之者預り御武具支配被仰付

同年十月廿三日忍之者預り御武具支配御免被成 御泉水預り林又左衛門

跡被仰付

同六未三月四日再御武具預り忍之者支配

同月廿九日新番頭三寺与右衛門跡

文政十亥五月六日隠居

加藤半左衛門 八郎助 又右衛門 実浅野恭斎弟

百五拾石

文政十亥年六月六日養父半左衛門家督無相違被下置、 大御番組江被入

同十三寅年江戸詰被仰付、 四月十六日出立

天保六未年江戸詰被仰付、 閏七月廿三日出立

同九戌年江戸詰被仰付、 八月十日出立

嘉永元申年十一月五日山奉行国枝小兵衛跡被仰付、 御留守番組江被入

同 一酉年十二月十一日与内検地奉行被仰付

同五子十一月十六日御勘定拝借奉行御趣意金取扱榊原仁右衛門跡被仰付

候

安政元寅十二月五日於御趣意方大橋御備金、 兼而以心配今般御修覆相済

候二付御褒詞

同三辰三月十五日末ノ番外御時宜役被仰付候

同七申正月十六日御使番格二被成下、 御役料之趣を以廿五石被下置、 役

儀之儀ハ御免被成候

万延与改元、六月廿一日御水主頭宮塚又兵衛跡被仰付、 御役料百石被下

置候、且又家屋敷是迄宮塚又兵衛罷在候御役屋敷へ替被下候、 但是迄被

下候御役料廿五石之儀ハ以後不被下候

文久二戌四月十一日席其儘御先添物頭波々伯部源右衛門跡被仰付、 敷井原次郎右衛門家屋敷へ替被下候、且又是迄次郎右衛門罷在候屋敷之 取払不苦間所之分相当之直段ニ而御買揚ニ相成、 右間所其儘半左衛

門江被下置候

元治元子二月廿日隠居

加藤

加藤伝内

百五拾石

宝永元申三月十六日父武太夫跡目百石無相違、

正徳四午二月五日御手廻御書院番入

同五未五月廿五日御供目付

享保十四酉二月十六日鵜方支配鈴木甚五太夫加役之跡被仰付

家屋

文政三辰七月廿日病気内願休息

元文元辰九月十一日御番組被仰付、末ノ番外

同三午十月朔日五十石御加増

寛保三亥正月四日死

加藤八郎兵衛 八九郎 伝内

百五拾石

元文五申閏七月九日御手廻被召出

寛保三亥二月廿五日養父伝内家督無相違、 御手廻其儘可相勤旨

延享元子十一月三日御手廻御免、御次詰

二寅五月十八日御腰物数寄方奉行

寛延二巳九月廿日死

加藤武太夫 休息

百五拾石

寛延二巳十二月十六日養父八郎兵衛隠居、家督無相違、大番入

安永七戌四月廿九日御近習番岩上五郎八跡、 御書院番入

天明二寅七月八日病身二付御近習番御免被成、 大番入

享和二戌五月廿日休息

加藤彦三郎 伝内

文化三寅八月十五日御近習番御書院番入

百五拾石

享和二戌五月十一日父武太夫休息被仰出、 家督無相違、 大御番入

文化五辰 御近習番御免、大御番入

> 加藤伝内 土三郎事

百五拾石

文政三辰七月廿日親病気内願ニ付休息被仰付、 家督百五拾石無相違被下

大御番組へ被入

同八酉十月五日御附御近習番被仰付、 御書院番組へ被入

同九戌江戸詰被仰付、三月廿八日出立

同十二丑江戸詰被仰付、三月廿八日出立

同年十一月廿五日御書物方三浦清蔵跡被仰付

同十三寅八月廿八日御裏役三浦清蔵跡被仰付

天保三辰十月十九日奧御納戸役被仰付候

同六未江戸詰被仰付候

同年九月五日今度御代替二付御役御免被成、 御書院番組其儘御近習二被

差置、 御用筋之義ハ是迄之通可申談旨

同年同月十六日奧御納戸役被仰付

同九戌十月廿五日今度御代替二付御役御免、 御書院番組其儘御近習二被

差置、 勤方之義ハ追而可被仰付候、御用筋之義ハ是迄之通可申談旨

同年同月廿九日奥御納戸役被仰付候

同十亥江戸詰被仰付、八月廿八日出立

同十一子十月廿五日御膳番役被仰付

天保十二丑江戸詰被仰付、 八月十一日出立

同十五辰五月廿三日御近習番頭取被仰付

同年十月廿四日末之番外御時宜役被仰付

嘉永元申九月十五日御使番役榊原十郎太夫跡被仰付、 候 御役料百石被下置 拾八石四人 加藤源助

同五子十月四日御先物頭上月八郎左衛門跡被仰付

一安政四巳二月廿三日席其儘御使番役織田半左衛門跡被仰付候

同五午八月朔日病死

一万延元申六月廿六日勤中御番皆勤ニ付金三百疋被下置候段、倅常之助へ

加藤与五右衛門 与五左衛門

享保七寅年相身躰末席被仰付

宝永二酉五月七日御取立

百石

享保八卯八月十八日父源助跡目無相違、相身躰末

同九辰三月十九日七石一人フチ御加増、御手廻順席、御書院番入

同十五戌三月十日御免、大番入

同十六亥二月廿日於江戸仕立払御納戸

延享二丑十月廿一日新知

寛延元辰閏十月廿四日於江戸病気ニ付御納戸御免

[略履歴]

加藤常之助

高百五拾石

加藤八郎左衛門

百石 役料五拾石

寛延二巳四月廿九日父与五右衛門跡知被下、大番入

安永三午二月廿八日御近習番御裏役御書院番入、桜井庄九郎跡

同七戌七月五日御近習番頭取

同九子十一月廿六日御膳番

天明三卯十一月二日御時宜役御腰物奉行仮、末之番外於江戸

同五巳六月十五日御徒頭格御徒仮支配

同七未四月三日御形合被相改万端御省略被成候、依之御徒仮役御免被成

2、末之番外被仰付

加藤7

明治与改元、

九月廿二日戦地為斥候若松口并庄内口江被遣

同十月十四日殿様御上京被遊候節御供被仰付

同三卯三月朔日今般殿様御立帰御上京被遊候ニ付御供被仰付

同四辰閏四月十四日御小姓頭取鈴木拾五郎跡被仰付

御上京被仰出候、

依之御供被仰付

慶応元丑五月七日今度御進発為御待受、

殿様御出坂可被遊候ニ付、

旦

同三亥五月七日当亥年御参府御供被仰付候

文久二戌年十一月十五日殿様来春御上京御供被仰付候

万延元申十月十五日来酉年江戸御供詰被仰付候

同七申正月十八日御小姓被仰付候

安政五午九月廿日親伝内家督如斯被下置、

大御番組へ被入候

寛政三亥九月廿六日御前様附御広式御用人并御徒頭格、御役料五拾石、

席杉田孫一郎次

同五午八月十七日御趣意ニ付御徒頭席御下ケニ付、御留守物頭次席

加藤与五右衛門 八郎左衛門

百石 役料五拾石

寛政六寅八月廿八日親八郎左衛門隠居被仰付、家督無相違、大番入

享和二、十二月十五日御徒頭末之番外、御時宜兼

文化二丑二月七日御役料五拾石

同三寅十二月廿三日御聞番見習、役料其儘失却金四拾両被下

文化五辰三月廿八日御聞番本役御役料百五拾石被下置、蠏江善右衛門跡

同七午二月三日大道寺七右衛門隱居被仰付候二付、是迄七右衛門江御預

被置候組御預ケ被成、御預所懸り被仰付候

文化十酉五月朔日御先物頭次席

同十二乙亥八月 御役御免、御先武頭次席被仰付

同十三子閏八月六日先役中御預所掛り相勤候内心得違、御役御免、遠慮

同十四丑八月廿七日病死

加藤八郎左衛門 辰ノ八月病死

百石

文化十一戌四月十四日被召出、若殿様御附御近習番御書院番入、五人扶

持被下

同十四丑正月廿八日御附奧御納戸役恒五郎様御附兼帯

同年九月十二日養父与五右衛門跡知百石無相違、若殿様奥御納戸役恒五

郎様御附兼帯其儘、御書院番勤向是迄之通

文政元寅八月十日久々痛所在之内願二付御役御免、大御番入

加藤又一郎 十蔵

百石

文政三辰十月朔日養父八郎左衛門家督無相違百石被下置、大御番入

同五午閏正月十五日謙五郎様御附奧御納戸役被仰付

天保六未二月廿日御附奧御納戸其儘御膳番格被仰付

天保八酉十月廿七日末ノ番外御時宜役被仰付候

同十五辰十二月三日御纏奉行村上作右衛門跡

加藤与五右衛門 芳太郎

〔略履歴〕

高百石

弘化三午閏五月廿九日親又一郎家督如此無相違被下置、大御番組へ被入

候

同十二月廿八日又一郎与改名

嘉永七寅十月十三日来卯年江戸御供詰

安政二卯年五月十四日伺之上遠慮被仰付置候処、御免被成候

同三辰十二月廿八日与五右衛門与改名

同五午十月十五日来未年江戸詰被仰付候

万延元申六月廿九日昨年江戸表御本丸炎上之節、御人数被差出候節出精

二付、金弐百疋之御目録被下置候

文久二戌六月廿九日当秋江戸詰被仰付候

同十月廿八日中将様来二月御上京被遊二付御供被仰付候

同三亥五月廿六日支度出来次第上京被仰付候

同四子二月廿九日御金奉行萩野利右衛門跡被仰、 御書院番組へ被入候

元治二丑二月十四日於江戸当秋迄詰延被仰付

慶応四辰閏四月廿八日御広敷御用達竹内笹之丞跡被仰付、 御留守番組

被入

加藤

加藤六郎兵衛

弐拾五石五人 「天和二戌年御徒被召出(朱書)

元禄元辰年御小姓目付

宝永五子年御守殿附新番並、三石一人御加増 同八亥年御徒小頭弐石御加増

正徳二辰八月廿一日於江戸御取立、新番入被仰付、 五石御加増

「元禄十四巳三月五日倅九郎左衛門御徒被召出(朱書)

正徳四午年御徒目付

享保九辰年不調法有之役御取上ケ御徒

同十三申御暇

右之訳故六郎兵衛跡式不被仰付、 断絶

「然ル処九郎左衛門養子伝八郎実松原次郎左衛門子(朱書)

享保十四酉四月御徒ニ被召出

元文三午病死、 此跡目九郎左衛門実子清兵衛御徒二御立被下

宝曆六子正月十八日御徒目付、 三石御加増

明和三戌九月十六日川除奉行

安永四未二月廿九日御徒目付帰役

天明四辰六月廿七日川除吟味役

同八申八月五日土居奉行

寛政四子正月十六日新番並御取立、是ゟ末次ニ出ス

此朱書前後共家之所記を以爰ニ記ス」

加藤所左衛門

拾八石三人

寛政四子正月十六日小役人御堀土居奉行ゟ新番並ニ御取立、 役儀其儘

加藤清兵衛 六郎兵衛

拾八石三人

寛政五丑七月廿五日父所左衛門休息被仰付、 家督無相違被下置、 新番並

被指置

享和二戌九月廿九日御定年数相満候ニ付、 新番組江被入

文化十二亥八月養子万吉取扱方不参届儀ニ付遠慮

加藤佐左衛門 佐七郎

拾八石三人

文政七申八月廿五日養父清兵衛休息被仰付、 家督拾八石三人扶持無相違

被下置、新御番組江被入

天保十四卯十二月十六日御台所目付大橋金兵衛跡被仰付

弘化二巳年江戸詰、 三月 出立

同四未正月十三日御勝手役坂井安太夫跡被仰付

一同年十二月晦日御本城橋御繕之節御用懸り出精ニ付御褒詞

一嘉永二酉年江戸詰、三月十四日出立

一同年十月十九日御上屋敷大奥向御普請御用懸り出精ニ付、金弐百疋被下

置

一同年十二月十五日今般御前様御引移御用掛り出精ニ付、金弐百疋被下置

一同三戌四月三日昨年来出精相勤候二付、銀弐枚被下置

一同年十二月廿五日海岸台場御築立并大炮御鋳造ニ付御用掛り被仰付候

一同四亥二月廿日御時節柄心得違之趣相聞候二付遠慮、三月五日御免

一同六丑年十一月五日今度大砲御製造ニ付右掛り被仰付候

一同七寅十月十三日大砲御製造掛り被仰付置候処、別段掛り被仰付候ニ付、

右掛り御免被成候

一安政二卯十一月廿九日出精相勤候ニ付、大御番組江被入候、役儀之義ハ

御免被成候

一同七申二月廿日病身二付内願之通休息

[略履歴]

一切米拾八石三人扶持

加藤佐太郎

右同日倅佐太郎家督如此無相違被下置、大御番組へ被入候

同月廿五日当申年太田御陣屋詰被仰付候

文久元酉四月廿五日太田御陣屋詰中横浜表江長々致出張候二付、銀壱枚

被下置候

同二戌九月廿日評定所留役羽中田鉄五郎跡被仰付候

同三亥正月十六日評定所留役其儘、御用部屋御記録方兼帯被仰付、御足

充行弐石壱人扶持被下置候

同年十二月七日御足充行其儘、御内御右筆見習羽中田鉄五郎跡被仰付候

元治元子四月十三日御足充行其儘、御右筆見習被仰付候

慶応元丑閏五月三日当秋江戸詰被仰付

同七月晦日当秋江戸詰被仰付置候処、御免被成

慶応元丑十月十七日来寅年江戸詰被仰付

:二寅三月五日当年江戸詰ニ付詰中本役同様相勤候様、且又失却被下候

割合を以、廿五石五人扶持同様ニ被成下

八月廿日御右筆本役被仰付、御書院番組へ被入、御足充行五石壱人扶持

御增、都合七石弐人扶持被下置候

同三卯二月十一日御趣意二付御役御免被成、大御番組江被入、江戸詰中

ハ是迄之通相勤候様被仰付、但江戸表ゟ罷帰候迄ハ御足充行是迄之通被

下置候事

同十月廿九日宰相様御上京二付、速見村御小休迄御見送御供被仰付

同十一月廿六日宰相様御滞京中、為御備支度出来次第上京被仰付

同四辰三月二日於京都参与附属被仰付、役御番組江被入

同七月廿六日大砲隊被仰付

明治元与改、九月十一日大砲并御道具掛り被仰付

十月十一日郡方吟味役見習山方御坂掛り兼荒川平吉跡被仰付、御留守番

組江被入

加藤

加藤清右衛門

加藤清兵衛 猪右衛門事

百石

弐拾弐石四人

宝永元申六月六日御取立

享保七寅年相身躰末被仰付、 御勝手請込

加藤猪右衛門 長蔵

百石

享保十五戌十月廿五日父清右衛門休息、家督被下無相違、大番入

元文三午八月廿三日御右筆見習

同四未三月三日三石壱人扶持御加増、 本役順席、 御書院番入

宝曆七丑十月廿五日御家老中御用御右筆高橋純助跡、 大番入

同八寅七月廿五日表御右筆受込高江友右衛門跡、 御書院番入、 御帳付支

配

明和二酉二月廿日新知百石

同六丑正月十六日末ノ番外

加藤清右衛門 初長蔵 休息

百石

安永二巳四月十六日養父猪右衛門跡知無相違、

大番入

同年七月廿日養母不埒二付生田八郎右衛門方江引取、 実方江相返候様被

仰付蟄居、此節遠慮

天明三卯十月廿日与内立会妹尾与左衛門跡

寛政四子六月十七日御金奉行周防長兵衛跡

同六寅六月廿五日役義御免

一文化二丑八月五日父清右衛門内願之通休息被仰付、家督百石無相違被下

大御番組へ被入

文政五午七月十一日御金奉行多喜田藤内跡被仰付候

同八酉江戸詰被仰付、 六月廿六日出立

同十二丑五月十一日役義心得違之趣有之二付御役御免、 遠慮

天保二卯十月十六日与内立合高屋源兵衛跡被仰付

同九戌十一月十一日与内検地奉行宇都宮茂左衛門跡被仰付

同十二丑七月廿日格式末之番外被仰付

弘化四未二月十二日大馬印奉行渡辺左右衛門跡被仰付

嘉永元申九月十五日御徒頭松尾源左衛門跡被仰付、

同三戌七月廿八日御長柄奉行浅見七十郎跡被仰付、 御役料都合百五拾石

被下置候

同五子六月十七日隱居被仰付

加藤清十郎 長吉

略履歴

高百石

右同日親清兵衛年寄候二付隠居被仰付、 家督如此無相違被下置、 大御番

組へ被入候

同年九月廿日清十郎与改名

同年十一月十八日御近習番菅沼平兵衛跡被仰付、 御書院番組へ被入候

同六丑七月廿日御手元御用向二付、支度出来次第出府被仰付候

同七寅三月廿三日右御用相済勝手次第罷帰候様被仰付候

御役料五拾石被下置

同十月十三日来卯年江戸御供詰

安政四巳六月廿日御書物方被仰付

同五午五月五日当秋江戸詰被仰付

同九月十七日御裏役生駒五左衛門跡被仰付

同六未正月廿日来申春迄詰越被仰付

同九月十六日奥御納戸役被仰付候、当詰中ハ是迄之通相勤候様被仰付

万延元申十月十五日来酉年江戸御供詰被仰付

文久二戌十一月十五日殿様来春御上京御供被仰付

同三亥五月七日当亥年御参府御供被仰付

慶応元丑五月六日御近習番頭取御書院番一番之筆頭役菅沼平兵衛跡被仰

儀ハ御免被成、御取扱是迄之通被仰付

同付

一寅二月五日御書院番一番之筆頭役其儘、

御趣意二付御近習番頭取之

同三卯五月廿日御先副物頭市橋環蔵跡被仰付、席末之番外格ニ被成下、

御役料廿五石被下置、但席米岡源太郎次

同十月十八日半小隊長被仰付

同六月六日当秋京都御警衛詰被仰付

同十一月九日猪右衛門与改名

明治元辰九月廿四日奥州白崎村并勝方村持場ニおゐて、不東至極之儀有同月廿九日京都詰中堺町御警衛向心配相勤候ニ付、御酒被下置

之、彼地二而御役御免被成候二付、御書院番組江被入、遠慮被仰付

同十月十五日遠慮被仰付置候処、御免被成候

同十二月廿五日清十郎ト改名

加藤

加藤玄三

弐拾人扶持

元禄十一寅三月十八日被召出

正徳五未十一月四日死去

僊岡仙隆次之座ニ有之

加藤養安

百石

正徳五未十二月廿五日養父玄三跡目、五人扶持

享保八卯十月廿三日御切米被下

同十二未十月二日朋姫様附

同十六亥十月廿五日新知、奥医陽寿院様附、定詰

同十八丑十二月九日御前様附

元文四未四月廿九日奧御免、九月廿日表医

加藤周益

百石

宝暦七丑三月十一日養父養安休息、家督無相違、表御医師

加藤道安 病死

百石

明和二酉二月廿五日父周益休息、家督無相違、表御医師

同七寅六月廿九日奥医 天明四辰六月廿四日御匙医格

加藤玄三

百石

天明八申十月十一日父道安跡知無相違被下置、 表御医師

文化四卯十月五日奥御医師

文政二卯年十月廿九日御匙医師田代万貞跡被仰付

同八酉年於江戸表病死

加藤養庵

百石

文政八酉七月五日父玄三家督無相違被下置、 表御医師

加藤道庵 周益事 隠居北叟

百石

被下置、表御医師被仰付候

一文政十一子二月十九日加藤養庵病中願之通養子被仰付、

天保八酉五月廿日奥御医師田代万悌跡被仰付候

弘化二巳五月十一日御匙医師細井玄篤跡被仰付候

同四未御供詰被仰付、 三月十九日出立

嘉永四亥年江戸御供詰

同五子十二月廿四日種痘御端立、 以来心配行届候趣相聞候二付、 帯地

被下置候

加藤謙山

同日親道庵家督如此無相違被下、医業生被仰付(明治二年二月晦日)高百石

加藤

加藤新兵衛

家督百石無相違

弐拾石四人

元禄十一寅二月十六日養父新兵衛跡目七人扶持被下

正徳二辰三月十九日御切米被下

同三巳八月十六日大番入

享保七寅冬御番割之節順席被仰付、御鷹方

探源院様御代父新兵衛御取立

安政三辰江戸御留守詰

同七申正月十六日以来江戸詰之節、 為留守扶持五人扶持被下置候旨

同年江戸詰、二月十六日出立

文久元酉四月十六日帰着

同三亥八月十七日御参府御供二而出立、 同年十二月江戸ゟ御上京御供

子二月御帰国御供

元治元子八月廿八日御上京御供出立、 夫ゟ長征、 丑二月五日帰

明治二巳二月晦日年寄二付、 隠居

同年三月朔日折々御機嫌可相伺候

同年同月十五日道庵事北叟卜改

御医師

加藤新兵衛

弐拾五石五人

享保十三申十月廿五日養父新兵衛為跡目廿石四人扶持無相違被下、 御鷹

方可相勤旨、 大番へ被入

安永七戌八月十八日五石壱人扶持御加増

加藤新兵衛 死

廿五石五人

天明二寅八月廿五日父新兵衛休足、家督無相違、 大番入、御鷹方父之通

加藤兵十郎

弐拾五石五人

文化五辰五月十三日父新兵衛跡目無相違、 大御番入、 御鷹方

文化十一戌七月五日休息

加藤新兵衛 新 三郎事 熊次郎事

廿石四人

文化十一戌七月五日養父兵十郎病身内願二付休息、 石五人ふち之処廿石四人ふち被下置、 新番組江被入、御鷹方被仰付候 跡目御擬作之内廿五

天保十四卯江戸詰、 三月廿日出立、 同年六月廿七日帰着

同十五辰十二月五日出精相勤候二付、 大御番組江被入候

安政四巳八月廿日腰痛難儀二付内願之通休息

加藤新兵衛 政九郎

〔御茶道〕

切米弐拾石四人扶持

安政四巳八月廿日親新兵衛儀近来腰痛有之難儀ニ付、 内願之通休息被仰

家督如此無相違被下置、

大御番組江被入、御鷹方被仰付候

文久二戌十二月廿八日新兵衛与改名

元治元子七月廿二日今般御趣意二付御鷹被相止候、 依之御番士勤被仰付

候

慶応三卯九月十六日製造方白焔方被仰付、 役御番組江被入



加藤藤次郎 病死

廿五石五人

明和三戌三月十九日於江戸中奧御小姓被召出 御擬作並之通被下

同八卯十一月五日於江戸御近習番御書院番入

安永三午八月廿日御供頭

同五申正月廿六日江戸御裏役

同七戌七月五日於江戸御小道具方、 但当分御裏役兼榎並猪十郎跡

加藤文左衛門 弥右衛門

廿五石五人

天明二寅二月廿八日養父藤次郎跡目無相違、 大番入

同 二卯十一月二日御小性於江戸

同七未四月十三日於江戸御部屋附御小性

寛政元酉六月廿六日於江戸御表様御小性被仰付、頭取格

同二戌五月廿八日御小性頭取助

同三亥二月四日御近習番頭取格御裏役

同五丑十月廿日御近習番頭取格是迄之通二而、於義丸様御附御近習番

当分御表様之方兼帯

同六寅二月五日御近習番頭取格其儘、御裏役帰役被仰付

同六寅三月九日格式末ノ番外並ニ被成下、御小性頭取ニ被仰付

同七卯二月廿二日格式其儘二御裏役

同九巳十月朔日御小性頭取

同十午正月十九日不調法至極之趣有之、御小性頭取御免被成、大番組へ

を プージ属

同十二申二月六日御附御近習番御用人支配

文化六巳八月廿一日此度隆徳院様御逝去二付御附御近習番御免被成、大

番組へ被入

同七午四月晦日家内共御国引越被仰付

文化七午九月廿五日湯俣栄次郎揚屋敷被下

文化十二亥五月二日病死

加藤弥右衛門 吉次郎

弐拾五石五人

文化十二亥六月廿五日養父文左衛門跡目無相違、無役御留守番入

文政三辰八月十一日大御番入

天保八酉十二月十六日御書役川端次兵衛跡

嘉永元申六月病死

加藤藤左衛門 勝太郎

[略履歴]

切米弐拾五石五人扶持

嘉永元申七月廿五日親弥右衛門家督無相違如此被下置、無役御留守番組

へ被入候

同五子十二月廿八日藤左衛門与改名

安政元寅十二月十八日御軍制御改正ニ付、大御番無役組与被仰付候

同二卯年八月三日合薬方被仰付、御製造方申談相勤候様被仰付候

同四巳正月十八日御製造方吟味役被仰付候

同五午十一月十六日制産方勤向出精二付、小者給銀百五拾匁御扶持方壱

人扶持被下置候

同十二月十一日今度外国奉行始湊為見分被罷越候二付、御通行之節臨時

御用向格別出精相勤候ニ付、金百疋之御目録被下置候

同六未十二月三日制産方御用有之ニ付、長崎表へ被遣候

万延元申八月十四日制産方頭取被仰付、役中御扶持方三人扶持被下置候、

但是迄被下候小者給銀并壱人扶持之儀ハ已後不被下候事

同日長崎表へ為御用支度出来次第致出立候様被仰付候

文久元酉年十月五日御勘定吟味役鈴木市右衛門跡被仰付、御留主番組へ

被入、制産方頭取是迄之通、御扶持方三人扶持之儀も其儘被下置候

同日御勘定吟味役被仰付候ニ付、役席之儀平瀬儀作次へ被入候

文久二戌正月三日制産方御用在之、長崎表へ立帰出張被仰付候

同年十月二日御内御用有之ニ付、京都表へ罷越候様被仰付候

同三亥年五月廿二日格別出精相勤候ニ付、御足五人扶持御増、都

扶持被下置候

同年八月十九日今度於三ノ丸御座所向御普請被仰出候ニ付、 右御用懸り

被仰付候

元治元子四月七日製造局頭取被仰付置候処、 以来製造方調役二被仰付

御勘定吟味役之儀者御免被成候

同四月廿五日製造取調御用有之ニ付、 支度出来次第立帰出府被仰付候

同子八月廿一日御含御用有之ニ付立帰り出府、 早速致出立候様被仰付候

拾七人扶持

同年十月廿三日御充行如此御直シ製造奉行助被仰付、 是迄被下候御足扶

持八人扶持之儀、 是迄之通被下置候、 但御用有之節御用部屋江罷出候様

被仰付候事

十一月七日御用有之ニ付、 大坂表江罷越候様被仰付

元治二丑三月七日敦賀表へ出張被仰付候ニ付御褒詞被成下、 但乍少分失

却銀被下置

慶応元与改、 五月廿五日賊徒一件二付別段骨折候二付、 為御賞銀三枚被

下置

同九月廿八日制造局取調御用有之二付、 長崎表へ罷越候様被仰付

一寅正月廿五日長崎表へ罷越候様被仰付置候処、 此表御用弁之訳も有

之二付御免被成候

慶応二寅二月九日製造奉行助其儘、 産物会所奉行助兼帯被仰付

同年四月六日会所奉行見習被仰付、格式末之番外二被成下、御役料五拾

石被下置、 製造奉行助之儀も其儘被仰付、 但席伊東六郎兵衛次

是迄年々被下置候御足八人扶持之儀者以後不被下候事

同年七月廿日御内用有之ニ付、 長崎表江罷越候様被仰付

同三卯正月十六日他国会所奉行被仰付、 大砲物頭次席二被成下、 御役料

> 五拾石御増、 都合百石被下置、 御役人並二被仰付、 且又産物会所被仰付

之儀も是迄之通申談候様被仰付、 製造奉行助之儀者御免被成

同五月二日席其儘会所奉行被仰付

同五月十七日遠慮伺之上指扣被仰付置候処、 今日ゟ御用之外差扣罷在候

様被仰付

同月廿一日御用之外指扣被仰付置候処、 今日ゟ御免被成

同七月十四日御内用有之二付立帰上京被仰付、 但京着之上神戸表江も罷

越候様被仰付

同四辰正月廿四日今般勅使御国内御通行之節 御目付役兼被仰付

同 一月廿九日席御役料其儘郡奉行被仰付

同閏四月二日御含御用有之ニ付、横浜表へ罷越候様被仰付

同五月九日御役名産業元締役被仰付

改元、 同 一巳二月十日御役御免被成御使番格二被仰付、 明治元辰九月廿日御内用有之二付、 長崎表へ罷越候様被仰付 但席伊東六郎兵衛次

河津

川津善太夫

百七拾五石

鳥越様二相勤、 御卒去以後

元禄十二 一卯三月十九日於江戸被召出、 百廿五石被下

宝永三戌五月十六日御目付、 此節五拾石御加增

正徳元卯十一月七日御役御免

河津善太夫

百七拾五石

宝永六丑八月廿五日御手廻、 御合力銀被下

正徳四午三月十六日父善太夫跡知無相違、大番入

元文五申五月十八日小馬印奉行服部庄左衛門跡

河津茂太夫

百七拾五石

延享元子十一月三日父善太夫隠居、 家督無相違、 大番入

河津孫十郎 応助

百七拾五石

寛保三亥六月十四日中奥御小姓被召出, 御擬作並之通被下

延享三寅三月廿五日養父茂太夫跡知無相違被下、自分御擬作ハ上ル、 勤

方其儘

同年十二月廿二日奥御小性

寛延三午二月朔日御小姓御免、 大番入

同年三月十六日中奥御小姓

宝暦五亥二月朔日御腰物方御書院番入、筒井十太夫跡

明和五子七月九日御使番渥美新右衛門跡、 御役料百石

安永三午六月廿六日御徒頭秋田八左衛門跡

同六酉五月廿五日御先物頭酒井市十郎跡

天明二寅正月廿日御預所郡奉行井上孫左衛門跡, 席御表郡奉行次

同五巳二月廿日不宜趣有之御役御取上、大番入

河津善太夫

付

寛政四子二月十六日年来相勤候ニ付、格式末之番外前波十兵衛次ニ被仰

百七拾五石

寛政四壬子八月廿日父孫十郎跡知無相違、

文化四卯正月十八日御供頭加藤与五右衛門跡、 御役料五十石、 埴原八五

大番入

郎次席

文化十酉二月廿七日御使番尾高小右衛門跡

御役料都合百石

同十一戌二月五日御水主頭松田善右衛門跡

文政三辰六月廿三日隠居

河津佐太夫 孫十郎事

百七拾五石

文政三辰六月廿三日父善太夫隱居被仰付、家督百七拾五石無相違被下置

大御番組へ被入

同七申六月十四日御近習番片山平七跡被仰付

文政九戌二月廿四日威徳院様御逝去二付御役御免被成、 大御番組へ被入

同十三寅六月廿二日表御小姓上月久三郎跡被仰付

天保四巳楷五郎様御附御近習番薗田幾次郎跡被仰付、 御書院番組へ被入

同十一子十一月廿九日御腰物数寄方奉行畑中藤八郎跡被仰付

同十五辰十一月十一日末之番外御時宜役被仰付候、 加藤伝内跡

嘉永五子六月九日御留守物頭梶川半兵衛跡被仰付候

同七寅六月四日御水主頭中村庄左衛門跡、 御役料百石被下置候

一安政三辰六月廿八日年寄候二付隠居被仰付候

河津善太夫 孫十郎

[略履歴]

高百七拾五石

右同日親佐太夫家督如此無相違被下置、 大御番組江被入候、 伊藤友四郎

家屋敷江替被下候

安政六未四月廿日横浜御警衛二付詰被仰付候

同年十二月廿八日善太夫与改名

万延元申四月廿九日御世譜方見習被仰付候

文久元酉年九月廿三日御世譜方本役被仰付、 御書院番組へ被入候

同二戌年十一月十五日殿様来亥春御上京二付御供被仰付候

元治元子四月十三日御世譜方御用引受被仰付候

明治二巳正月廿五日御趣意二付御世譜方御免被成候、 且又是迄出精相勤

候ニ付、 御書院番組江其儘被指置、 御広間当番勤之儀者御用捨被成候

同五月六日皇学科被仰付、 明道館江可罷出候

正徳五未五月廿五日父次太夫隠居、家督無相違被下

享保九辰十二月廿九日大番二番筆頭被仰付

同十五戌七月十三日御使番加賀九郎右衛門跡、 役料百石被下

同廿一辰五月十三日御杉形鑓奉行東郷仁右衛門跡

川瀬治太夫

百六拾五石

元文元辰十一月十六日養父治太夫跡目、幼年ニ付拾七人半ふち、 御留守

番入

元文三午十月十六日十五歳罷成ニ付新知ニ御直シ、 大番入、 但十石減也

川瀬治太夫 熊次郎 病死

- 187 -

百六拾五石

宝曆八寅十月廿五日養父治太夫跡知無相違、

天明三卯十一月二日於江戸五番筆頭相沢八郎右衛門跡

川瀬次郎右衛門

百六拾五石

天明八申四月十一日養父次太夫跡知無相違、

川瀬次太夫

川瀬

百七拾五石

外役料百石

寛政十午正月廿五日大番六番之筆頭役上月武左衛門跡

文化六巳ノ二月晦日御使番大木与右衛門跡、 御役料百石被下置

同十酉ノ二月病死

川瀬勘助

次太夫

御先物頭宝永二酉七月十三日被仰付

但同三一統半知被成

御扶持切米被下

貞享元子三月廿九日父次太夫跡知三百五拾石被下、是ゟ前自分御小姓並

百六拾五石

文化十酉三月廿五日養父次郎右衛門家督無相違、大御番入

文化十一戌十一月十二日御小姓

文政三辰六月病死

川瀬次郎右衛門 安五郎事

百六拾五石

一文政三辰八月五日養父勘助病中願之通養子ニ被仰付、家督百六拾五石無

相違被下置、大御番組へ被入

同十二丑十一月十三日御小姓被仰付候

一同年江戸詰被仰付、十一月廿四日出立

一天保二卯江戸詰被仰付候

一天保六未八月廿三日江戸表江出立

同年天梁院様御尊骸御供二而帰着、直二出府被仰付候

同年九月五日御代替二付、御小姓御免被成、御側支配御近習二被差置、

勤方之儀ハ追而可被仰付候、御用筋之義ハ先是迄之通可申談旨

同年同月十四日御小姓被仰付候

一同九戌七月十日御小姓頭取井上平太郎跡被仰付候

一同年江戸詰被仰付、九月十八日出立

一同年十月廿五日今度御代替二付、御小姓頭取御免被成御近習二被差置

勤方之義ハ追而可被仰付候、御用筋之義ハ先是迄之通可申談旨

一同年同月廿九日御小姓頭取被仰付候

一同十一子江戸詰被仰付、八月廿五日出立

一同十四卯七月廿二日御近習番頭取御膳番中村久蔵跡被仰付候

同年十二月十一日御小姓勤中心得違之義有之ニ付、遠慮

一同十五辰正月十四日御供ニ而江戸表へ出立、同五月十一日御供ニ而帰着

一同年五月廿三日御書院番壱番之筆頭猪子六左衛門跡被仰付候

弘化二巳江戸詰被仰付、三月廿一日出立

同四未江戸詰被仰付、三月出立

一嘉永元申九月十五日御使番役御供頭兼帯浅見七十郎跡被仰付、御役料百

石被下置候

一同二酉江戸詰被仰付、三月廿四日出立

同三戌六月三日杉形御鑓奉行榊原十郎太夫跡被仰付候

一同五子六月十七日御先物頭高間文四郎跡

一万延二酉三月二日当酉年組之者召連、太田御陣屋詰被仰付候

一同月廿六日出立

一文久与改元、四月太田御陣屋詰中御殿御預ケ被成、

用向并御徒頭取扱仮被仰付候

一同年五月廿四日右御聞番取扱候御用向取扱并御徒頭取扱仮御免被成、遠

見番所掛り被仰付候

一同年十一月廿三日此度御持場替被仰付候二付、太田御陣屋詰御免被成、

依之同所御陣屋御引渡後勝手次第致出立候様被仰付候

一同廿八日横浜表江長々致出張太儀之段、御褒詞之上御手綱二被下置候

一同二戌二月十四日帰着

一同年九月四日御持物頭山田次郎太夫跡被仰付、屋敷奉行兼帯

同三亥五月六日当亥御参府御供被仰付、八月十七日出立

同年十二月江戸ゟ御上京御供、子二月京ゟ御帰国御供

一元治元子三月十三日当分御側物頭仮兼帯被仰付候

且又御聞番取扱候御

河合彦作

同年六月廿五日御側物頭尾高治左衛門跡被仰付候

同年八月十四日御泉水并御座所仮預り被仰付

同年九月十八日御座所預り被仰付

同年十月十六日長征出立、 丑二月四日帰

慶応元丑閏五月廿一日御泉水預り被仰付

同 一寅十月廿六日今度御趣意ニ付席其儘役儀之儀ハ御免被成、

之勤功を以御近習ニ被指置、御役料之内五拾石被下置候

同三卯四月廿日御趣意ニ付夜廻り勤被仰付候

同四辰二月廿九日年寄候二付隠居

同年七月廿六日思召を以折々御機嫌伺罷出、 中之口致往来候様被仰付候

、略履歴

川瀬次太夫

勘之丞

同日親次郎右衛門家督如此無相違被下置、(慶応四年二月二十九日)高百六拾五石 第一遊擊隊江被入

但無息ニ而相勤候分別帳ニ記之

同四月廿七日支度出来次第京都御警衛詰被仰付

同七月廿六日親次郎右衛門思召を以折々御機嫌伺罷出、 其節々中ノ口致

往来候様被仰付

明治与改元、十二月廿五日次太夫ト改名

同 一巳二月十七日中納言様東京供奉御供被仰付

河合

百五拾石

於松岡御徒頭、 御相続後

享保七寅二月廿八日御加増五拾石御役料百石被下、 御徒頭被仰付

同十四酉六月十一日御先物頭被仰付、 海福瀬左衛門跡

同廿一辰五月十三日御側物頭加藤茂兵衛跡被仰付

元文三午七月廿八日御側物頭御免、 御役料上ル

且又年来

河合善十郎 病死

百五拾石 役料百石

宝暦五亥十月十一日父彦作隠居、 家督無相違、

宝暦七丑七月廿二日御手廻御書院番入

同十一巳十月廿二日御駕附中村大蔵跡

明和五子七月廿日若殿様御小姓頭取

安永三午八月九日同御附御側締り役差添、 末之番外

同四未三月十二日御目付渥美新右衛門跡、 御役料百石

同八亥三月廿九日若殿様御側向締役浅見七十郎跡、長袴格席高村四郎左

衛門次

安永九子六月十一日御広式御用人兼帯

河合四郎左衛門 彦作

百五拾石

寛政二戌三月廿九日父善十郎跡知無相違、大番入

三亥二月四日御部屋附御小性

同六寅四月廿九日御近習番松田要人跡、 御書院番入

同八辰正月廿五日御小性

同九巳十一月六日御近習番

同十一未九月十八日中将様御附御用人支配

同十二申二月廿九日御附御不用二付、大御番入

同年十二月朔日表御小姓被仰付

文化十四丑正月廿一日表御小姓筆頭渋谷五郎右衛門跡

文政五午十月廿三日末ノ番外御時宜役

文政八酉二月十三日御使番相沢九郎右衛門跡被仰付、御役料百石被下置

文政十二己丑十一月十六日波多野五郎左衛門跡御先物頭被仰付

天保十亥正月廿九日御旗奉行大崎七太夫跡

天保十一子五月廿九日新番頭笹川藤内跡

天保十二丑三月十六日年寄候二付隠居被仰付

河合次郎左衛門 彦十郎

百五拾石

一天保十二丑三月十六日親四郎左衛門年寄候二付隠居被仰付、家督百五拾

石無相違被下置、大御番組江被入

弘化三午年江戸詰、四月十一日出立

嘉永三戌年江戸詰、四月十日出立

一安政五午五月十八日出立

一同六未四月廿五日御預所御金奉行浅見忠右衛門跡被仰付、御留守番組

被入候

一万延元申六月廿六日御番両度皆勤二付、御紋御帷子被下

一文久二戌十二月十一日御勘定拝借奉行御趣意金取扱、剣持久右衛門跡被

仰付候

同三亥十一月廿九日倅常之進不埒至極之趣相聞候二付蟄居被仰付、次

左衛門義も兼而締り方不参届趣相聞不調法之事候、依之遠慮被仰付、父

子共急度相慎罷在候樣被仰付候、十二月廿日遠慮御免

元治元子十二月賊徒一件二付出張、依之御手当銀六百匁被下置候

慶応二寅正月十六日末ノ番外ニ被仰付、役儀之義ハ御免被成候

同年十一月三日今度御軍制御変革之御趣意二付、御広間当番勤被仰付候

同三卯二月廿五日年寄候ニ付隠居被仰付

河合常之進

、略履歴

一高百五拾石

同日親次郎左衛門家督如此無相違被下置、大御番組江被入

但無息二而相勤候分別帳記有

同十一月廿六日殿様御上京被遊候節御供被仰付

同十二月十二日急々上京被仰付

同四辰五月十六日御趣意二付他番江被入

同九月二日京都交代詰被仰付

明治二巳二月十七日中納言様東京供奉御供被仰付



川合源左衛門

百石

貞享元子十一月十一日父源五兵衛跡知無相違被下

但此節迄自分御奉公申上御徒ゟ御台所目付

河合定右衛門

百石

宝永七寅養父源左衛門跡知無相違

河合権右衛門 初門三郎 定右衛門

隠居

百五拾石 役料百石

享保五子三月五日父定右衛門跡無相違

同十二未七月十一日表御小姓

同十五戌七月十三日中奥

同年十一月二日御手廻御書院番入

元文二巳正月十六日御供目付久世三五右衛門跡

延享元子十二月十五日五十石御加増

寛延三午六月五日御腰物方

宝暦五亥十一月廿五日御使番役料百石、雨森作助跡

同十一巳十一月廿九日御先物頭八木郡右衛門跡

明和五子七月六日御預所郡奉行矢野伝左衛門跡

同年十二月二日長袴格之御目付次席

河合太郎太夫

百五拾石

安永四未二月十四日父権右衛門隠居、家督無相違、大番入

同年八月十一日若殿様御小性

天明四辰四月廿九日御部屋附御近習番御供頭今立十右衛門跡、御書院番

入

同七未三月十四日御形合被相改万端御省略二付役義御免、大番入

寛政元酉閏六月十六日御部屋附奥御納戸格御近習番、御書院番入

同二戌九月廿九日席是迄之通ニ而御部屋附御供頭

同四子三月廿五日於江戸御部屋附奥御納戸

寛政十二庚申五月五日御奉行役太田三郎兵衛跡被仰付

文化四卯二月二日御役御免、御先物頭次席御役料其儘

同月六日御先物頭生駒五左衛門跡

文化五閏六月二日御普請奉行武田太郎左衛門跡

同七午十一月十七日御側物頭浅見忠右衛門跡

文化十二乙亥正月病死

河合権右衛門 作助

百五拾石

文化十二乙亥三月十一日養父太郎太夫家督無相違、大御番入

同年八月廿五日若殿様御附御近習番

同十三子四月若殿様御小姓

文政九戌十一月十四日御膳番被仰付候、於江戸表被仰付

文政十二丑六月六日於江戸表御膳番其儘、御近習番頭取小林又兵衛跡被

仰付

文政十三庚寅六月六日末之番外御時宜役

河合太郎太夫 太郎助

百五拾石

をアフ

一同五午七月十九日若殿様御附御近習番被仰付、御書院番組江被入、当

江戸詰被仰付候

同六未六月五日超倫院様御逝去二付御役御免被成、大御番組江被入

一同年江戸詰、九月三日出立

同九戌三月廿九日御近習番被仰付、

御書院番組江被入

同年十月廿五日今度御代替二付御役御免被成、御書院番組其儘御近習二

被指置、勤方之儀ハ追而可被仰付、御用筋之儀ハ是迄之通可申談旨

一同年同月廿九日御近習番被仰付候

一同十三寅年江戸詰、八月十三日出立

一同十四卯八月十七日御書物方被仰付候

同年十一月十一日御裏役梯左仲太跡被仰付候

一同十五辰十月廿三日奥御納戸役野村拾太夫跡被仰付候

弘化四未年江戸詰、三月十九日出立

一嘉永元申六月急御出府御供ニ而出立、同年七月御供ニ而帰着、右ニ付十

一月七日御褒詞

同三戌六月三日御膳番被仰付候

一同年八月十二日御膳番其儘御近習番頭取被仰付候

一同六丑江戸詰、三月御供ニ而出立

一同年九月十八日御近習番頭取御膳番其儘、御書院番二番之筆頭役被仰付

候

一安政四巳三月十二日御趣意ニ付、当分筆頭役勤向之儀ハ御用捨被成候段

被仰付

一同年四月廿五日江戸御供詰出立

一同年閏五月四日先達而御趣意ニ付、当分筆頭役勤向之儀ハ御用捨被成候

得共、詰中是迄之通筆頭役取扱相心得候様被仰付候

同五午七月六日殿様御近習番頭取御膳番、中将様御用兼被仰付候

同年九月十七日御先新物頭御供頭兼被仰付、御役料百石被下置候

同七申三月十五日御供二而帰着

文久元酉三月十九日御供二而出立

同二戌十月六日役儀其儘御水主頭次席二被仰付候

一同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立、三月六日御供ニ而帰着

一同年五月七日当亥御参府御供被仰付

一同年同月廿二日御先物頭皆川平右衛門跡被仰付候

元治元子三月十一日組之者召連京都詰被仰付、廿四日出立可致之処、四

月十四日御免

同年六月廿七日組之者召連支度出来次第早速上京被仰付、廿九日出立、

八月廿六日帰着

一同年八月廿七日席御役料其儘御役御免被成候

一同年九月廿二日京都詰被仰付、詰中堺町御門御固大砲方被仰付、早速致

出立候様、十月出立

一同年十一月十六日御先物頭勤中、京都堺町御門御固場所江組之者召連出

張致差配候儀御褒詞

一慶応元丑五月四日京都表ゟ着

一同年閏五月廿一日席其儘御広敷御用人本役同様被仰付候

一同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付公儀ゟ被下配当金千弐百疋、且又戦

功二付五百疋被下置候

同年十月廿六日席其儘御留守組支配、 御役料五拾石被下置候

同年十一月三日御座所預り被仰付

同三卯四月廿日御趣意ニ付夜廻り勤被仰付、 御座所詰之儀ハ御免被成候

明治二巳二月十六日年寄二付隠居

河合久次郎

略履歴

高百五拾石

同日家督如此無相違被下置、五番遊擊隊後拒役其儘被仰付

但無息二而相勤候分別帳ニ有之

一巳二月廿二日其方馬出張先ゟ御国表江相送り候始末心得違ニ付、 後

拒役御免被成遠慮被仰付、 謹慎可有之候事

河合

河合滝右衛門

百弐拾五石

元禄四未六月十三日父久右衛門跡目無相違被下

享保三戌三月六日勘定奉行役被仰付、 雨森儀右衛門跡

同五子七月廿一日郡奉行被仰付、江口次郎兵衛跡

享保八卯八月六日御留主物頭被仰付、 御書院番入

川合滝右衛門 藤三郎 隠居

百廿五石 役料百石

> 河合久左衛門 休息

明和五子七月九日御先物頭三寺与右衛門跡

同十二午三月廿二日御長柄奉行浅見忠右衛門跡、

役料百石

宝曆六子十月廿二日御留守居物頭平尾新五兵衛跡

延享三寅七月五日御勘定奉行西尾五右衛門跡

寬保二戌六月六日与内立合藤田惣七跡

享保十二未九月十六日父滝右衛門跡知被下、大番入

百廿五石

安永五申七月十五日養父滝右衛門隠居被仰付、 家督無相違、 大御番入

同年十一月廿九日表御小性見習

同九子十一月廿一日表御小性本役

天明八申六月十四日御近習番御書院番入

寛政二戌九月十五日奥御納戸役川地仁十郎跡

同十午七月十三日病気ニ付御役御免被成、 御近習二被指置

河合弥三兵衛 藤之丞 久左衛門

百廿五石

寛政十二庚申七月十七日父久左衛門内願ニ付休息被仰付、 家督無相違

大御番組へ被入

享和二戌年八月廿日中将樣御附御近習番御用人支配

同年十一月廿八日同御小性

文化二丑七月廿八日同御近習番本席

同三寅十二月十一日表御小性

文政十一子正月廿八日表御小性筆頭岡三郎右衛門跡

文政十二己丑十一月十六日田辺平学跡、 御纏奉行被仰付

文政十三寅三月廿日田口惣兵衛跡、御使番被仰付

天保八酉ノ四月五日御先物頭林惣兵衛跡

天保九戌六月十六日太鼓御門当番之節不念之儀有之、伺之上右同様(マヽ)

天保十四卯七月廿二日 (マ、) 天保九戌十二月十一日先達而太鼓御門当番之節取扱方不参届御聞、 遠慮

河合

河合五右衛門

拾七石三人

享保二酉九月五日御徒小頭ゟ御取立、 御土蔵番、 御留守番入、村田平太

河合五右衛門 多三郎 豊^ブ士 久一

百石

享保廿卯十二月廿五日養父五右衛門跡目無相違、

同廿一辰五月廿一日中奥被仰付、 八石弐人扶持御加増

同年十一月四日順席

元文二巳七月十日御小姓御取立、大番被入

元文二巳七月廿八日御暇、

[略履歴]

追而被召返

元文三午九月十五日被召返御宛行如是、

大番江被入

同年十一月十六日表御小姓

元文五申五月十八日中奥本役

延享二丑五月廿五日新知

寛延二巳三月朔日死

同四卯十二月五日奧御納戸御書院番入

早速致出

河合佐十郎 病死

百石

河合久左衛門

百弐拾五石

天保十四卯七月廿二日父弥三兵衛隠居、家督無相違、 大御番組江被入

弘化四未江戸詰、三月十六日出立

嘉永五子年江戸詰、 同六丑四月十八日帰着

河合滝五郎

滝右衛門

右同日養父久左衛門家督如斯無相違被下置、(文久二年四月二十日)高百弐拾五石 大御番組へ被入候

同三亥五月七日当亥年御参府御供被仰付候

同十二月廿八日滝右衛門与改名

元治元子三月十一日支度出来次第上京被仰付候

同九月廿二日京都詰被仰付、 詰中堺町御門御固大砲方被仰付、

立候様被仰付候

慶応元丑十月八日小荷駄造営方被仰付

同三卯五月十一日御趣意ニ付御留守番組へ被入

寛延二巳四月廿五日養父五右衛門跡無相違、大番入

明和六丑八月九日御金奉行妹尾次郎左衛門跡

同七寅八月七日若殿様御近習御書院番入

同九辰七月三日同奥御納戸中村一郎右衛門跡

安永五申八月十四日同御膳番

河合八郎左衛門

百石

安永五申十一月廿九日父佐十郎跡知、幼年二付御定之通十人扶持被下、

御留守番入

同八亥九月廿五日十五歳罷成候ニ付新知百石御直被下、大番組江被入

同九子八月四日御小性見習

天明五巳六月廿九日御部屋附御小性

同七未四月十三日於江戸御表御小性

寛政元酉六月廿六日於江戸御小性頭取津田次郎太郎跡

同六寅四月十六日於江戸御供頭御膳番次席二被成下、御書院番入

同七月十日御膳番次席其儘御裏役加藤舎人跡

同七卯ノ二月六日拝知差上御擬作弐拾五石五人扶持被下置、大番入、閉

FI

文化五辰七月廿九日霊岸島御附御近習番

同六巳八月廿五日霊岸島御附御免、大御番入、是迄出精相勤太儀思召候

段御家老中被申渡

文化十酉七月廿五日番改役田辺奥左衛門跡

同十三子二月三日御腰物数寄方奉行被仰付、御書院番入

文政五午十二月廿四日末之番外御時宜役被仰付、拾七人扶持ニ御直シ被

下置候

文政十亥六月六日新知百石被下置

文政十二己丑十一月十六日河合四郎左衛門跡御使番被仰付、役料百五拾

石被下置

文政十三寅二月廿九日御預所郡奉行西尾五右衛門跡、御先物頭次席

天保三辰八月七日御先物頭野中健蔵跡

天保八酉五月廿日隠居

河合五右衛門

百石

一天保八酉五月廿日親八郎左衛門年寄候ニ付隠居被仰付、倅五右衛門家督

百石無相違被下置、大御番組江被入、且又久世八左衛門家屋敷与替被下

候

一同十亥五月十一日楷五郎様御附御近習番被仰付候

一同十四卯閏九月廿五日巍光院様御逝去二付御役御免、大御番組江被入候

同年十一月十一日御近習番野中衛作跡被仰付候

一弘化二巳江戸詰被仰付、三月廿一日出立

嘉永元申九月十五日御書物方井戸庄左衛門跡被仰付候

同二酉二月十三日御裏役井戸治兵衛跡被仰付候

一同年江戸詰被仰付、三月廿三日出立

同三戌八月十二日奥御納戸役武田平右衛門跡被仰付候

同六丑年江戸詰、三月御供ニ而出立

一安政二卯江戸御供詰

同年九月廿三日御近習番頭取御膳番真田五郎兵衛跡被仰付

一同四巳二月朔日末之番外御時宜役被仰付候

一万延元申六月廿一日大馬印奉行大谷第八跡被仰付候

一文久元酉三月十五日御使番格ニ被成下、御役料之趣を以廿五石被下置

役儀者御免被成候

一同三亥二月十日殿様御上京被遊候ニ付御供、三月廿五日御供ニ而帰着

一元治元子二月廿九日御水主頭鱸長左衛門跡被仰付候、且又家屋敷是迄長

左衛門罷在候御役屋敷江替被下候

一同年八月廿三日御役料其儘御留守物頭御鷹方兼帯榊原幸八跡被仰付、家

屋敷是迄幸八罷在候御役屋敷へ替被下候

一同年十二月賊徒一件二付出張、依之御手当銀八百匁被下置候

一慶応元丑八月十五日当分御水主頭仮兼帯相勤候様被仰付、同晦日御免

同年九月廿二日家屋鋪稲葉悦之助家屋敷江替被下候

同二寅十月十三日年寄候二付隠居

〔略履歴〕

一高百石

河合豊次郎

同日養父五右衛門家督如此無相違被下置、大御番組江被入、但無息ニ而

相勤候分別帳ニ有之

同三卯十一月廿六日殿様御上京被遊候節御供被仰付

同十二月十二日急々上京被仰付

同四辰八月廿九日弾薬預り小銃取扱方兼被仰付、役御番組江被入、三番

大隊之一番小隊江附属被仰付

明治卜改元、十月廿二日当冬京都御警衛詰被仰付

明治二巳正月廿八日於京都殿様御発駕之上、勝手次第罷帰候様被仰付候



河合弥三兵衛

拾八石三人

寛政十午正月十六日小役人格川除吟味役ゟ御取立被成、新番組江被入、

御勘定吟味役指添被仰付候

文化二丑八月廿日御荒子頭

文化三寅六月十六日思召有之ニ付新番並へ御下ケ、

閉門

同七午五月十一日病死

哥合藤左衛門 河合藤左衛門

拾五石三人

一文化七午七月五日父弥三兵衛跡目拾八石三人ふち無相違被下置、新御番

並被仰付候、但御取立以前之儀ハ御記録ニ有之

一同九申十月十九日御趣意有之、新御番入

一文政十亥十二月廿五日不埒之趣有之ニ付、三石御取揚、新番格へ御下ケ

被成、遠慮被仰付候

一弘化二巳十一月十六日閉門被仰付候

安政七申正月十六日年来相勤候ニ付、新御番組へ被入候

万延与改元、十二月廿八日哥合与改姓

同二酉二月十六日病身内願之上休息

哥合与三郎 [略履歴]

切米拾五石三人扶持

同日養父藤左衛門家督如此無相違被下置、 新番組へ被入

元治元子六月廿五日宰相様御上京中格別繁勤太儀ニ思召候、 依之御酒被

下置

慶応三卯十月廿五日当冬京都御警衛詰、 早速致出立候様被仰付

同月廿九日御警衛詰罷越候処、宰相様御上京御道中御供被仰付

同十二月十二日急々上京被仰付

同四辰九月二日京都交代詰被仰付

明治二巳二月十七日中納言様東京供奉御供被仰付

河合

河合茂太夫 徳山茂太夫

拾八石三人

享保十九寅八月五日御鷹匠ゟ御取立、新番入、三石御加増、 御鷹方

河合藤兵衛

拾八石三人

宝曆十辰六月廿五日父茂太夫休息、家督無相違、新番入、其身三人扶持

ハ上ル

明和二酉九月廿五日実弟川崎虎五郎不埒至極之義有之ニ付、 引取押籠被

仰付、 弟春案と申盲人不宜品共有之、御城下立退被仰付候、 此節藤兵衛

義御呵遠慮

安永三午十月十六日御定之年数相満候ニ付、大番入

此後代と二出、 但徳山与改

河崎

河崎三郎助

百五拾石

御先代百石之上

元禄七戌十月五日御使番、 此節五拾石御加增

同十四巳九月九日御持筒頭

宝永三戌五月十六日御目付

正徳元卯十一月七日御免

享保二酉六月十九日隠居

河崎三郎助 小十郎

百五拾石

宝永六丑八月廿五日表御小性被召出

正徳四午十一月七日中奥御小性被仰付

同五未五月廿五日奥御小性被仰付

同年未十一月廿六日新知百石被下

享保二酉六月十九日父三郎助隠居、 家督無相違被下、

自分知ハ上ル、

即

日御膳番役被仰付、御書院番入

二戌五月十一日御膳番役御取揚、 大番被仰付

同十巳四月廿九日大番筆頭被仰付、 有賀一郎右衛門跡

未十月八日死去

河崎三郎助 小十郎

百五拾石 役料百石

享保十二未十一月廿九日父三郎助跡目十五人扶持被下、御留守番入

寛保三亥六月十四日表御小姓、新知百石ニ御直シ被下

寛延三午八月十一日御小道具方御書院番入

明和三戌三月廿日御膳番

同四、二月廿六日御奉行立岩武左衛門跡、御役料百五拾石

同七寅八月五日御役御免、御先物頭次席

同年九月十四日御先物頭高田金太夫跡、役料百五拾石

安永六酉九月二日御広式御用役被仰付、席中根九右衛門次

安永九子五月廿七日名目御広敷御用人ト改

天明二寅十二月十五日五十石御加増

河崎三郎助 死

百五拾石

天明八申十月十六日養父三郎助跡知無相違、大番入

文化元子二月病死

河崎清兵衛 三郎助事 増吉事

百石

一文化元子四月五日養父三郎助病中願之通養子被仰付、家督無相違被下置、

大御番組江被入候

一同年七月廿八日奧御小姓被仰付候

同年十月廿四日表御小姓被仰付候

文化十酉十月五日御附御近習番被仰付候

同十三子四月晦日若殿様御附御小姓恒五郎様兼帯

一同年八月廿日江戸詰中不慎ニ付御附御小姓御免被成、大御番組へ被入、

閉門被仰付候

文政三辰六月廿三日表御小姓林十蔵跡被仰付

同五午十二月廿四日御腰物数寄方奉行河合八郎左衛門跡被仰付、御書院

番組江被入候

同七申正月廿九日御奉行仮今村伝兵衛跡被仰付、役料百石被下置候

一同九戌江戸詰被仰付、四月五日出立

一同十亥七月五日大坂懸り被仰付候

一同十一丑七月三日不埒至極之儀在之二付、拝知并役儀御取揚、御充行廿

五石五人フチ被下置、大御番組へ被入、遠慮被仰付候

一天保三辰十一月廿一日格式末之番外、御充行拾七人ふち被下置候

同八酉二月廿五日産物懸り被仰付、御役料五拾石被下置、御長柄奉行次

席被仰付候

一同年五月廿五日御札所目付荻野利右衛門跡被仰付候

一同十亥四月十六日席其儘御徒頭周防長兵衛跡被仰付、新知百石被下置候

一同十二丑十二月五日御奉行役萩原長兵衛跡被仰付、御役料都合百五拾石

被下置、御札所掛り被仰付候

一同年十二月十一日御内用在之来春出坂被仰付候

一同十四卯八月十六日御役取揚、大御番組江被入、遠慮被仰付候

嘉永五子六月九日宮塚又兵衛屋敷へ替被下

河崎三郎助

百石

安政二卯十一月十一日親清兵衛儀老年二相成、 其上痛所有之二付内願之

通休息被仰付、 家督百石無相違被下置、 大御番組へ被入候

同四巳十一月廿日洋書相学候様被仰付候

同六未二月十一日御近習番被仰付、 御書院番組へ被入、当春江戸詰被仰

付候

同年三月十八日御附御近習被仰付候

同月廿日江戸詰出立

万延元申六月廿一日家屋敷久世外士家屋敷へ替被下候

同年九月十五日帰着

文久元酉八月廿日江戸詰出立

同二戌六月十四日中将様御附御近習頭取定助被仰付候

同年九月十日帰着

同三亥正月三日今般中将様御上京被遊候ニ付京都江出立、三月廿三日帰

着

同年十月十三日中将様御供二而上京

同四子正月九日御附御近習番被仰付、 御膳番奥ノ番定介

元治与改元、 四月廿三日右御供ニ而帰

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀二思召候、

酒被下置候

同年九月五日宰相様御附御膳番奥御納戸役兼帯被仰付候

同年十二月賊徒一件二付出張、 御手当銀六百匁被下置候

慶応元丑十月朔日宰相様御出坂御供出立、 同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰

同二寅六月廿五日宰相様御登坂御供出立、 十月六日帰

同年十月十日弟山十郎於京都出奔二付遠慮伺之上指扣、

同十四日御免

同廿六日御附御膳番奥御納戸役其儘、 御裏役御書物方之儀も相心得候様

被仰付候

同三卯二月廿五日屋敷地表通南之方角二而十四坪余御用地二被仰付、 代

地之儀ハ北之方ニ而被下置候

同年四月十二日宰相様御上京御供ニ而出立、 八月九日帰着

慶応三卯十月十五日弟山十郎昨年於京都出奔之処召連来候処: 侍御削被

成囲入被仰付、恐入伺之上遠慮被仰付、 廿二日御免

同年十一月二日宰相様御上京御供出立、辰八月十一日帰

明治元辰十月廿七日上京、 巳二月帰

同二巳七月廿八日東京江出立 月給米十俵

同年九月廿四日従二位様内務局頭取被仰付候事

同日当役を以大奥御用取扱被仰付候事

等級並月給米是迄之通

同年十月十一日格式末ノ番外ニ被仰付、 役儀之義ハ被免候事

同月廿八日東京ヨリ帰 同日病死



依之御

川崎甚助

百石

元禄十六未十月廿九日養父茂太夫跡目無相違被下、 同御代祖父茂兵衛御

徒ゟ御取立、

相身躰末

河崎久太左衛門

百五拾石 外役料百石

隆芳院様御代曾祖父茂兵衛御徒ゟ御取立、 相身躰末

宝永七寅十二月五日養父甚助跡目被下

正徳三巳八月十五日順席被仰付

享保二酉六月廿六日表御小姓被仰付、 並御擬作被下

同十二未六月五日中奥御小姓

同十五戌十二月十八日新知百石被下

同十七子六月廿五日御裏役片山平七跡、 御書院番入

寛保二戌六月五日御膳番被仰付

延享元子十月廿五日御留守作事奉行厳田惣七跡

同五辰四月十一日五拾石御加増御先作事役料被下、 厳田惣七跡

宝曆二申十二月廿二日御先物頭岩村門右衛門跡

川崎四郎右衛門 初常左衛門 病死

百石

宝暦十一巳二月廿二日養父久太左衛門隠居、 家督百五十石無相違、

入

同十二午六月廿二日不慎不行跡二付御呵閉門

明和三戌八月十六日家内不締り之趣在之、 拝知之内五十石被召上、

天明三卯九月十一日玉薬奉行市橋新之丞跡

川崎四郎右衛門

百石

天明五巳六月廿九日父四郎右衛門跡知無相違被下、

同六午五月廿七日御近習番御書院番入

同年七月廿四日御小姓

同八申正月九日於江戸御部屋付御小姓

寛政五丑十月廿日江戸二而於義丸様御附御小姓被仰付、 当分御表様之方

兼帯

同六寅三月十五日御表様御近習番久津見源五左衛門跡、 御書院番組 へ被

入

同十午三月十一日格式末之番外毛利六郎右衛門次席被仰付、 御時宜役

川崎茂太夫 久米五郎 四郎右衛門

百石

寛政十午五月十一日川崎四郎右衛門病中願之通養子ニ被仰付、 家督百石

無相違被下置、 大御番組江被入

文化三寅六月十六日拝知御取上廿五石五人扶持被下、

文政三辰正月廿五日御広式御用達中村多左衛門跡、 御留守番入

文政十三寅七月廿九日出精相勤候ニ付、 役儀其儘御書院番組江被入、

分御広敷御用人助役

天保六未二月廿七日新知百石被下置

同十亥三月五日松栄院様御附御広敷御用人見習御徒頭次席被仰付、

閉門

料五拾石被下置 当秋江戸詰被仰付、 今立五郎太夫与交代可致旨被仰付

天保十三寅五月三日御長柄奉行柳下勘七跡被仰付、 御役料都合百五拾石

被下置

同十四卯七月廿二日御先物頭河合弥三兵衛跡被仰付

川崎源八 栄太郎

百石

一弘化二巳十月廿九日親茂太夫隠居、家督無相違被下置、 大御番組へ被入

嘉永五子十二月廿八日源八与名替

同七寅正月十三日江戸表へ出立

安政二卯三月廿三日御判物指添、 帰着

安政二卯四月十一日御判物道中無滯致到着候二付御褒詞

同年七月廿六日病死

川崎久吉 久太左衛門ト改名

一高百石

同年九月十六日家督如此無相違被下置、

大御番無役組へ被入候

同月廿六日先達而今宿々陣中他之宿所へ罷越、 不作法心得違之趣相聞候

二付遠慮被仰付

同四辰正月七日今般非常之儀二付遠慮御免

川崎

河崎三郎兵衛

弐拾五石三人

元禄四未於江戸御徒ゟ新番へ被仰付

正徳元卯七月十三日大番入

同十一月七日道奉行

正徳五未六月十六日道奉行役御取上

享保七寅冬御番割之節順席被仰付

同九辰七月死去

川崎平右衛門 三郎兵衛

廿五石三人

享保九辰九月五日父三郎兵衛跡目無相違、 大番入

河崎三郎兵衛

廿五石三人

元文二巳八月廿九日養父平右衛門跡目被下、 大番入

明和五子十月五日番改大内伊左衛門跡

天明二寅八月廿五日御代官樋原団右衛門跡、 御留守番入

- 201 -

川崎1

同十一月廿二日来子年江戸詰被仰付候

同

一月廿二日当詰引揚早速致出立候様被仰付候

同三亥正月廿五日当春芝陣屋詰被仰付

同二戌十二月廿八日久太左衛門与改名 文久元酉三月廿五日大御番組へ被入候

元治元子十月四日於江戸来丑春迄詰越被仰付

慶応三卯十一月廿六日殿様御上京被遊候節御供被仰付

同十二月十二日急々上京被仰付

同三卯八月五日養子金八於在辺不覚悟之義有之ニ付遠慮、三郎兵衛義も

指扣

同八申七月廿九日役義御免被成、大番入

寛政二戌十二月五日養子瀬兵衛不埒至極之趣ニ付、 致離縁実方江相返

蟄居為致置候様兼而取扱不宜候ニ付、 閉門被仰付候

川崎平右衛門

廿五石三人

寛政八辰四月十六日養父三郎兵衛休息、 家督無相違、 大御番入、三郎兵

衛儀年来相勤候ニ付御目録銀二枚被下置

文政元寅十一月十一日病身内願二付休息被仰付候

川崎三郎兵衛

廿五石三人

文政元寅十一月十一日養父平右衛門病身内願休息被仰付、 家督無相違

無役御留守番入

文政七申閏八月廿三日大御番入

亀次郎

川崎平三郎

[略履歴]

切米弐拾五石三人扶持

文政十三寅年十月十六日養父三郎兵衛儀病身二付、 内願之通休息被仰付

家督如此無相違被下置、 無役御留守番組へ被入

天保六未三月十六日大御番組へ被入

同九戌七月廿八日平三郎与名替

嘉永三戌八月廿八日御番皆勤二付、御紋御帷子被下置候

同六丑十月十五日来寅年江戸御留守詰被仰付候

翌十六日来正月中致出府候様被仰付

安政 一卯八月廿五日番改役大内彦十郎跡被仰付

同三辰六月廿四日御旗本武具奉行雨森彦左衛門跡被仰付、 御書院番組江

被入

文久元酉三月五日払御納戸役笹倉右内被仰付

同二戌十一月十五日殿様来春御上京御供被仰付

同十二月十一日御台所頭松山理左衛門跡被仰付 御留守番組江被入

同月十二日御上京御供御免被成

同三亥八月廿九日御勘定吟味役被仰付、 役中御足弐人扶持被下置、

於三ノ丸御座所向御普請御用懸り被仰付

元治元子三月五日先達而大谷丹下一手被遣候御内意被仰出候一件:

右同様御内意被仰付

同月十一日先達而大谷丹下一手被遣候御内意被仰出候一件二付, 右同様

御内意被仰付候処御免被成

同七月三日支度出来次第上京被仰付

慶応元丑七月十一日三ノ丸御座所御普請中格別出精相勤候ニ付、 銀弐枚

之御目録被下置

同八月五日御繰合も有之ニ付当秋京都詰被仰付、 詰中御金奉行表御納戸

役仮兼被仰付、 平瀬儀作与致交代候様被仰付

二卯八月二日今度於御座所御建継御普請被仰出候二付、 右御用掛被仰

付

同月十二日殿様御縁談被仰出候二付、 御用掛り同様被仰付

且又

二付、

同四辰五月廿九日京都詰被仰付

明治卜改元、十一月十二日当分岡崎御屋敷奉行仮并二条御抱地支配仮被

仰付

同十二月九日於京都出精相勤候二付、 役中御足三人扶持被下置

川崎

川崎仁右衛門

弐拾三石三人

元禄七戌八月廿五日御徒目付ゟ御取立、 御留守武具奉行御留守番入

同十二卯七月廿五日御代官

正徳三巳七月廿八日御切米五石御加増

享保五子七月廿一日御預所御代官被仰付

同七寅冬御番割之席順席

川崎金太夫

廿三石三人

享保十三申十月廿一日養父仁右衛門休息、 家督無相違、 大番入

宝暦四戌三月廿二日番改井戸久兵衛跡

同五亥十一月十一日御供御免

同十二午二月五日番改永田忠四郎跡

川崎虎五郎

廿三石三人

川崎金太夫 仁右衛門

持被下、

御留守番入

明和日

一酉九月廿五日不届至極之義有之、

実兄河合藤兵衛へ御返シ被成、

宝暦十四申四月廿二日養父金太夫跡目無相違、大番入

蟄居、

家断絶之処御憐愍を以加藤新兵衛次男権五郎名字為相続、

五人扶

七人

明和二酉九月廿五日川崎虎五郎不届之儀有之二付、 実兄河合藤兵衛方江

引取押込置候様被仰付、 家断絶之処御憐愍を以五人扶持被下、名字御立

被下、 御留守番入

文化五辰閏六月十一日小身二而武器厚相心懸候二付、

弐人扶持御加増

都合七人扶持

同九申十月十九日御趣意二付無役御留守番

同十一戌十二月十一日休息

川崎泉右衛門 善兵衛 金兵衛 仁右衛門

拾七石三人

一文化十一戌十二月十一日父金太夫休息被仰付、 家督無相違被下置、 無役

御留守番組江被入候

文政十一子三月十一日評定留役田部三左衛門跡被仰付候

同十三寅十二月十一日三人扶持御増、 都合拾人ふち二被成下候

拾人ふちニ被成下候

天保三辰九月十六日御内御右筆見習被仰付、

御足三人ふち御加増、

都合

同七申三月五日御持武具奉行川崎三郎太夫跡被仰付候

同十五辰六月廿日御台所頭大町次左衛門跡被仰付、 御留守番組江被入候

弘化四未五月八日役前不念之儀有之二付、 伺之上遠慮被仰付候

嘉永二酉正月廿日御代官役井上弥太夫跡被仰付候

嘉永五子六月十六日玉薬奉行被仰付候

同七寅閏七月廿九日表御納戸役被仰付、 波々伯部 一右衛門跡

安政二卯六月五日学問所幼儀師助被仰付候

御袴地一被下置候

同三辰四月廿一日昨年明道館御端立二付幼儀師助被仰付候処、

出精ニ付

儀ハ御免被成候

同六未二月五日幼儀師本役同様被仰付、

銀三枚ツ、年々被下置、

役儀之

大御番組江被入候

同四巳二月五日御祈禱奉行戸枝市郎兵衛跡被仰付、

万延元申九月朔日此度御番割有之候処、 御番士人少ニ付当分当務繰合セ

御番相勤候様被仰付候

同十六日御書院番組へ被入候

文久三亥十月十日仁右衛門事泉右衛門与名替

同年十二月十四日年来出精相勤候二付、 御充行拾七石三人扶持ニ御直シ

元治元子十二月賊徒一件、 御留守御用御手当百匁被下

慶応二寅十二月十一日年寄候二付休息、 但年来相勤候二付銀三枚被下置

候

川崎鉄弥

略履歴

切米拾七石三人扶持

同日親泉右衛門家督如此無相違被下置、 大御番組江被入

但無息ニ而相勤候分別帳ニ記有

同 三卯 一月廿七日殿様御上京御供被仰付、 直 二御警衛詰被仰付

同十二月十三日殿様御上京御供被仰付

同四辰三月廿五日支度出来次第京都御警衛詰被仰付

同六月四日御小姓被仰付

明治ト改元、 十一月廿日御小姓勤中御足充行八石弐人扶持被下置



川崎安次郎

、略履歴

同年十二月廿八日彦助卜名替(文化六)

切米拾五石三人扶持

文化九申七月四日御徒近藤市十郎跡被仰付、

御充行三石被相增、

都合拾

五石三人扶持被成下候

弟栄吉、文政二卯九月十三日霊岸島御屋形表御徒御雇、 壱ケ月銀弐拾五

匁ツ、被下置

文政二卯十二月廿八日安兵衛与改名

同四巳二月五日小役人格被成下、浅姫君様御附御台所目付坂井安太夫跡

被仰付

同四月廿日御能御相手被仰付

同七月廿三日浅姫君様御附御台所頭仮兼帯被仰付

同九月八日弟栄吉御住居御徒定御雇被仰付

同九戌四月三日御袖留并御着帯御誕生御用掛り

同年五月廿六日来月下旬公方様浜御庭へ御成之節、霊岸島御住居御通抜

之御沙汰二付、御用懸被仰付候

同八月廿三日御安産御用掛り二付、金百疋被下之

文政十亥閏六月二日御祝御用掛被仰付

同十一月十一日彦右衛門与名替

同十二丑四月十六日御台所目付同頭兼帯被仰付

同年五月三日御住居兼勤御着帯御誕生御用掛り被仰付

同年六月廿一日御勝手向御難渋御指支二付、格別之御省略被仰出候、仍

之御用懸り被仰付候

同年八月三日今般若殿様御誕生御祝儀被為済、御満足思召金百疋被下之

同十二丑年十二月廿八日安兵衛与名替

天保二卯三月十日此度格別之御厳法御倹約御取調ニ付、掛り被仰付候

天保四巳年九月二日来ル十一月若殿様御袴着御祝儀御用掛同様被仰付候

同六未閏七月三日殿様御容躰ニ付、御用掛り被仰付候

同八月五日今般御家督并御引移御用掛り被仰付

同十一月七日今般御家督御引移前後、無御滞被為済御満足思召候、右御

用掛り出精相勤候ニ付、金弐百疋被下置候

同日右御用掛出精相勤候二付、別段金百五拾疋被下置候

同十二月廿日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格被仰付候

同日御元服御用掛出精相勤候二付、銀拾匁被下置

天保八酉十月六日謹姫様御入輿御用掛り被仰付

同十月十九日去月十六日御台所ゟ出火々元之儀、兼而厳重被仰付も有之

処、締り方参り不届儀不調法之事ニ候、依之遠慮被仰付

同十月廿九日遠慮御免被成、今日ゟ致出勤候様被仰付候

天保九戌三月十三日謹姫様御婚姻無御滞被為済御満足思召候、右御用掛

り出精相勤候ニ付、為御目録金弐百疋被下置候

同六月九日御家督を始御祝事ニ付、御家中へ御料理被下候御用懸り被仰

付

同年十月五日今般御家督并御引移御用掛り被仰付

同十二月廿八日今般御家督御引移前後無御滞被為済御満足思召候、右御

用掛り出精相勤候ニ付、金弐百疋被下置

天保十亥四月四日役前不正之取斗方有之趣相聞不調法之事ニ候、依之役

儀御免被成、遠慮被仰付

同月廿三日遠慮御免

同十一子正月廿三日松栄院様御附御広式添役被仰付候

同十四卯二月朔日当分御広敷勘定掛り仮兼帯被仰付、貞照院様之方相勤

候様被仰付候

同三月廿九日御上屋敷御焼失之夜、当番等閑之趣相聞不調法之事ニ候!

依之役義御取揚、小役人格ニ御下ケ押込被仰付候

同四月十二日押込御免被成候

同十五辰二月十二日御台所目付同頭兼帯被仰付候

弘化三年四月廿三日出精相勤候ニ付御取立被成、新番格被仰付候

同四未七月九日当八月中公方様御成之節、神田橋御住居へ御立寄可被遊

との御沙汰ニ付、御用掛り被仰付候

同九月十二日御立寄無御滞被為済、右御用掛り出精之段達御聴太儀二思

召候、此段申聞候様被仰出候

嘉永二酉四月三日病死

川崎安兵衛 安次郎 彦右衛門

、略履歴

切米拾五石三人扶持

嘉永二酉閏四月九日親安兵衛儀令病死候二付、 小役人二被仰付、 御充行

如此被下置候

同五月三日小役人席其儘御徒勤被仰付候

同十二月廿六日安兵衛与改名

二戌九月十三日御広式添役柳本一平跡被仰付候

同四亥三月十三日御徒目付乙部祐八跡被仰付、 役中御足充行三石被下置

候

安政六未六月晦日太田御陣屋詰被仰付候

同十月廿六日右御同所御普請場見廻り出精ニ付、 別段御勘定所御取扱ニ

付金三歩被下置候

置候

同七申三月朔日御広敷添役被仰付、 是迄被下置候御足充行三石其儘被下

金百疋被下置候

万延与改元、申七月四日御本丸炎上之節火消御人数罷出候、

先役中ニ付

万延元申八月廿五日彦助与改名

文久元酉年十二月廿八日彦右衛門与改名

同三亥二月廿八日御前様御国元へ被為入候ニ付、 御供被仰付候

慶応元丑十二月廿八日安兵衛ト改名

慶応二寅正月十六日出精相勤候二付御取立被成、 新番格へ被仰付

但シ席水嶋十太夫次

明治元辰十一月七日今般幸姫様御引越二付上京被仰付

川村

河村郷右衛門

百五拾石 外役料百石 祐二役料五十石

元禄三年午十月十一日養父郷右衛門跡知無相違被下

宝永三戌五月十八日御貸御金奉行被仰付

正徳四午十月十一日豊姫様被為附永田治太夫跡

享保四亥五月廿六日御国へ被為召御加増五拾石被下、 御役料ニ其儘被下

置候

河村郷右衛門

百五拾石 外役料百五拾石

享保九辰三月十一日父郷右衛門跡知無相違、

同十五戌七月廿五日大番弐番筆頭川瀬次太夫跡

延享二丑三月廿一日御先物頭格順席

同十六亥十一月廿九日京都御留主居役御使番並寺沢勘左衛門跡

同 三寅九月十八日御役料五拾石増被下

川村十郎右衛門 父郷右衛門

百五拾石 役料百石

寛延二巳四月廿一日父跡知無相違、

宝暦七丑九月十六日御手廻御書院番入、下川勇右衛門跡

明和九辰八月十日御奉行役料百石 同十三未九月五日御留守作事奉行山崎七郎右衛門跡

大番入

天明元丑十二月十一日御役御免御先物頭次席御役料其儘

同二寅二月十一日御旗奉行山田次郎太夫跡

同四辰九月廿四日新番頭波々伯部八太夫跡

同六午五月廿七日御札所目付服部吉左衛門跡、席新番頭

同七未三月十四日御形合被相改万端御省略被成、御役御免御役料其儘御

先物頭次席

同年同月廿五日御先物頭渋谷五郎右衛門跡

同八申五月廿二日郡奉行村田十太夫跡

寛政四子五月廿四日御奉行千本長右衛門跡、席織田仁兵衛上

川村仙右衛門

百五拾石

寬政四子十一月五日養父十郎右衛門跡知無相違、大番1

同十三酉二月十四日御近習番御書院番入

文化元子十一月十一日奥御納戸

文化十三子六月廿四日末之番外御時宜役浅見平内次

文政五午十月廿三日御使番大野猪兵衛跡、御役料百石被下置

文政六未十一月五日於江戸表病死

川村藤十郎 鉄吉

百五拾石

文政六未十二月廿七日家督無相違被下、無役御留守番組へ被入

文政七申閏八月廿三日大御番入

天保十一子七月廿日大御番三番筆頭役浅見徳右衛門跡

弘化二、五月病死

川村十郎右衛門 乙三郎 藤市郎

[略履歴]

高百五拾石

弘化二巳六月廿五日養父藤十郎家督如此無相違被下置、大御番組へ被入

戻

同三午六月五日御近習番井戸治兵衛跡被仰付、御書院番組へ被入候

同十月十五日来未年江戸御供詰被仰付候

嘉永元申六月五日田安一位様御容躰ニ付、御願之上殿様急御出府被遊候

二付、御供被仰付候

同二酉二月十三日御書物方河合五右衛門跡被仰付候

同三戌八月十二日御書役河合五右衛門跡被仰付候

同十月十三日来亥春御供詰被仰付候

同三戌十二月廿八日藤市郎与名替

同五子六月九日奥御納戸役大関彦兵衛跡被仰付候

同年十月十四日来丑年江戸詰被仰付候

安政三辰十月十五日来巳年江戸御供詰被仰付候

同五午四月廿四日当秋迄詰延被仰付候

同年七月六日殿樣奧御納戸役中将樣御用兼被仰付

同八月七日来春迄詰延被仰付

同九月十七日御近習番頭取御膳番河合太郎太夫跡被仰付

同六未正月廿日当秋迄詰延被仰付

万延元申五月廿四日当秋江戸詰被仰付

同八月廿日御近習番頭取御膳番奧御納戸役兼帯被仰付、御書院番組江被

但席三寺剛右衛門次

同十月十五日来酉年江戸御供詰被仰付

文久二戌十一月十五日殿様来春御上京御供被仰付

同三亥五月十六日役儀其儘格式末之番外被仰付、 但席剣持久右衛門次

同七月廿八日当亥年御参府御供被仰付

同四子正月九日御供頭見習被仰付、 御役料五拾石被下置、 御徒頭次席ニ

被成下、但席高村新五兵衛次

元治与改元、八月廿三日御使番役御供頭兼帯大谷儀左衛門跡被仰付、

役料百石被下置

同十二月十郎右衛門与改名

慶応元丑五月七日今度御進発為御待請殿様御出坂可被遊二付、 一旦御上

京被仰出候、 依之御供被仰付

同 一寅十一月廿九日席御役料其儘御馬廻り頭取被仰付、 御供頭兼勤被仰

付

同 一卯二月廿七日今般殿様御立帰御上京被遊候二付、 御供被仰付

同十月十二日席其儘御留守組支配被仰付、 御役料之内五拾石被下置

明治二巳二月十六日今般御改革二付、 御役儀御免被成御広間当番勤被仰

付

川村

河村市右衛門

廿五石五人

元禄十一寅十二月十二日被召出

享保七寅二月七日於江戸奥御納戸被仰付、 御書院番入

同年三月九日御切米五石壱人扶持御加増 都合廿五石五人

同九辰八月廿六日御役御免、 大番入

同十一午五月廿一日番改

同十六亥三月十六日山奉行上坂与七跡

河村市次

廿五石五人

御

宝暦二申十一月廿二日父市右衛門休息、 家督無相違、

御留守番入

同六子九月十六日御籏本武具奉行阿倍清兵衛跡、

御書院番入

同九卯八月十一日御代官山口作右衛門跡、

川村文平

百石 役料百五拾石

明和九辰六月五日父市治跡目無相違、

安永五申十一月廿九日表御小性見習

同九子八月四日御小性

天明五巳九月廿五日於江戸御小性頭取

同六午正月九日於江戸新知百石被下置

寛政二戌二月廿日於江戸格式末ノ番外、 勤方是迄之通

同五月廿八日御時宜役

同三亥十一月廿九日御鵜方日比野彦之丞跡

同六寅八月廿八日御留守物頭御鷹方兼高屋源兵衛跡

同十午十二月七日御水主頭大木与右衛門跡、 御役料百五拾石

享和二戌年七月四日御先武頭渡辺佐五右衛門跡

文化六巳二月十七日病死

川村文平

百石

一文化六巳四月十一日親文平跡知百石無相違被下置、大御番組江被入

一同九申七月廿四日御小姓被仰付

一同十酉年江戸詰被仰付

一同十二亥年江戸詰被仰付

一同十三子十月十二日御裏役毛利半助跡被仰付、御書院番組へ被入

一同十四丑江戸詰被仰付

一文政元寅十月十日奧御納戸役被仰付

一同二卯江戸詰被仰付

同四巳六月廿九日勤柄ニも候処、参宮之節表方と致同道候ニ付遠慮

同六未年江戸詰被仰付候

同八酉年江戸詰被仰付、同十亥年帰着

同九戌二月廿一日御書院番二番筆頭奧御納戸役被仰付

同年八月廿日早駆御用ニ而江戸表ゟ帰着

一同十一子年江戸詰被仰付

一同十二丑六月廿三日御側向頭取福山藤右衛門跡被仰付、御役料百五拾石

被下、支度出来次第江戸詰被仰付、六月二日出立

一同年八月廿九日御奉行加賀次郎右衛門跡被仰付

一天保三辰江戸詰被仰付、二月十六日出立

一天保四巳十月心得違之儀有之、遠慮伺之上差扣

一同六未江戸詰被仰付、四月十四日出立

一同年十一月七日御家督御引移被為済、右御用掛り出精ニ付紗綾二巻被下

之

同年十二月七日来々酉年迄詰越被仰付

同年十二月廿日御元服御用掛り出精二付、御召御上下一被下之

同八酉五月廿四日御奉行今立五郎太夫御役御免被成候二付、遠慮相伺候

御用外差扣被仰付、同廿七日御免

同十亥江戸詰被仰付、三月廿日出立

同年十二月十一日御屋形御普請之処、御用掛り出精ニ付銀壱枚被下之

一同十一子十一月六日御役御免、席御先物頭次市村久太郎跡被仰付候、

依

之遠慮伺之上差扣

一同十四卯二月五日席其儘御先作事奉行矢野権平跡被仰付、御役料百五拾

石被下置候

一弘化元辰十二月三日御普請奉行大谷儀左衛門跡被仰付

一同三午十月朔日御側物頭波々伯部八太夫跡被仰付候

嘉永元申五月廿八日御奉行西尾源太左衛門跡被仰付候

同二酉江戸詰被仰付、四月五日出立

一同年十月十九日御上屋敷大奧向御普請之処、御用掛り出精ニ付銀三枚被

下之

一同年十二月十五日御婚姻御用掛り出精ニ付御召御小袖一被下之、且又御

用掛り出精ニ付銀壱枚被下之

同三戌六月三日御預所元締役秋田三五左衛門跡被仰付候

同四亥十一月三日御預所并御領分村々、丸岡領樋爪為安両村与十郷用水

路論出訴一件二付御褒詞

嘉永五子年六月九日隠居被仰付候二付、 秋田静山同様之御取扱被成下候

川村半左衛門 忠次郎

、略履歴

一高百石

同日養父文平年寄候二付隠居被仰付、 家督如此無相違被下置、 大御番組

江被入候

同六丑七月廿日此度思召を以支度出来次第江戸表へ罷出、 砲術調練致修

行候様被仰付、 詰中御扶持方三人扶持被下置

嘉永六丑十二月廿五日半左衛門与改名

同七寅三月廿二日品川御殿山御固場所江出張心配罷在候二付、 御下緒壱

仰付候

同年四月廿三日昨年出府被仰付候处、

此度御用相済勝手次第罷帰候様被

懸被下置

安政四巳三月十二日表小姓被仰付候

文久二戌年十一月十五日殿様来春御上京御供被仰付候

同十二月二日倅鉄弥中将様御上京増御供被仰付候

同三亥五月七日当亥年御参府御供被仰付候

慶応二寅十月廿六日御書院番組江被入、役儀之儀ハ御免被成

同四辰六月十九日御書院番其儘御旗奉行被仰付

明治二巳二月十六日今般御改革二付、 御役御免被成御広間当番勤被仰付、

但番列其儘

一月十七日部長被仰付

同廿二日越後口長々出張中太儀二思召候、 仍為御賞五百疋被下

同五月十六日軍事方被仰付候

川村

川村五左衛門

拾八石三人

享保七寅十月十六日御取立、三石御加増、

同十一午九月五日三石御加増、

都合拾八石京都朋姫様附

寛保二戌五月十一日病身相成耳も遠ク候ニ付御供役御免

川村五左衛門

拾八石三人

延享二丑正月廿九日父五左衛門休息、家督無相違、 新番入、父之座

宝曆二申十二月廿二日御土蔵番御留守番入

同九卯十二月廿二日御籏本武具奉行河村市次跡、 御書院番入

明和四亥正月十六日用水奉行山田藤次右衛門跡 御留守番入

安永五申十二月十一日相身代末

同六酉三月十六日御代官岡嶋九郎右衛門跡

川村五左衛門

拾八石三人

天明二寅八月五日父五左衛門跡目無相違被下、大番入

寛政十二申九月五日御定之年数相満候ニ付順席

文化二丑ノ七月十一日番改樋口小左衛門跡

同十四丑二月五日御代官佐野内半右衛門跡

文政七申七月十一日御預御代官吉倉茂左衛門跡

川村五左衛門 長太郎事

拾八石三人

一文政十三寅六月五日親五左衛門年寄休息、 家督拾八石三人扶持無相違被

下置、無役御留守番組へ被入

天保三辰十月廿日御右筆見習大御番組へ被入

同七申年江戸詰、 四月十四日出立

同九戌五月廿九日御旗本武具奉行寺木十太夫跡被仰付、 御書院番組へ被

入

嘉永三戌十一月廿日御武具御修覆御用出精二付、 金三百疋被下

同年同月廿九日御代官役市村三右衛門跡

同七寅八月十四日御花畑絵奉行大橋金兵衛跡被仰付候

安政三辰九月十六日御広敷御用達芦田十右衛門跡被仰付候

万延二酉三月五日年寄候二付休息

川村降輔 長太郎

切米拾八石三人扶持

、略履歴

同日養父五左衛門家督如此無相違被下置、 大御番組江被入

但無息ニ而相勤候分別帳ニ記有

同八月廿日当節柄御人少二付、支度出来次第修行旁江戸詰被仰付

同 一戌九月五日御人少二付当分御指留被成

同十月八日当分御指留候処、 勝手次第致出立候様被仰付

同十月廿八日中将様来二月御上京御供被仰付

同三亥正月八日御内用有之立帰上京被仰付

同五月廿六日支度出来次第上京被仰付

慶応元丑十二月廿八日降輔与改名

同二寅十二月廿二日砲術所世話役格別致出精候付、 銀拾枚被下置

同三卯三月廿四日砲術所頭取介并軍事方兼被仰付、 役御番組江被入

同十月廿五日砲術教授方被仰付、 出精相勤候付、 役中銀拾五枚宛年々被

下置

同四辰五月十一日砲術教授方出精相勤候処、 小御充行ニ付役中御足充行

三石外銀拾五枚之儀も其儘被下置

明治 一巳二月廿二日越後口長々出張中太儀二思召、 仍為御賞千五百疋被

下

河村

※川村文平の後にあり

河村三五左衛門

廿石三人

享保十八丑六月廿一日御徒目付ゟ御取立、 御留守番入用水奉行、二石御

加増、 伊黒弥五太夫跡

元文二巳二月廿五日御役御免、

河村三太夫 友五郎

廿石三人

延享元子十一月七日養父三五左衛門休息、 跡目無相違、大番入

宝暦七丑七月廿九日相身躰末

巳閏三月十六日休息 (安永二) 同十四申五月廿二日御土蔵番被仰付、 御留守番入

河村七右衛門

廿石三人

安永二巳閏三月十六日父三太夫休息、 家督無相違、 大番入、 相身躰末

天明二寅三月十一日御定之年数相満候ニ付順席

河村三太夫 弥太郎

廿石三人 五石二人御足

天明三卯二月廿日父七右衛門跡目幼年ニ付五人扶持被下、御留守番入

同九酉二月五日十五歳罷成候ニ付、御擬作廿石三人扶持御直被下、大御

文化二丑年六月五日評定留役被仰付

同三寅七月廿五日御内御右筆兼帯、御足擬作五石弐人扶持

文化九申九月十六日御番改高田藤太夫跡、 御足擬作以後不被□

文政二卯二月廿日表納戸坂井作兵衛跡

文政九戌十二月十六日御代官役田辺奧左衛門跡被仰付

天保二卯十一月十六日御預所御代官川地権内跡

河村三左衛門 三四郎事

拾七人扶持 外二役扶持七人

天保八酉七月五日親三太夫家督廿石三人扶持無相違被下置、

番組へ被入

同十二丑四月廿八日大御番組へ被入

弘化四未正月廿九日御作事改役被仰付、 御留守番組へ被入

同年十二月晦日先達而御本城橋御繕之節出精二付御褒詞

嘉永二酉正月六日御勘定吟味役青木一右衛門跡被仰付

同年江戸詰、 八月六日出立、同四亥秋迄詰越

同年十月十九日御上屋敷大奥向御普請御用掛り出精ニ付、 金百疋被下置

候

同年十二月十五日御前様御引移御用掛り出精ニ付、 銀壱枚被下置

同四亥四月九日今般両御丸様神田橋御住居江御立寄之節、 御用掛り出

二付御褒詞

同年九月十三日詰越出精相勤候二付御紋御上下被下置候、 且又詰中表御

納戸掛り相勤候ニ付金弐百疋被下置候

同年十二月廿二日今度神田橋御住居御焼失御用二付御趣意有之、 来次第出府被仰付、翌子正月四日出立、 同年五月十五日帰着 支度出

同五子四月廿五日御住居御普請御用掛り出精之段、 達御聴太儀二思召候

依之金三百疋別段弐百疋被下置候

同年六月五日右同断格別出精相勤候二付、 銀三枚ツ、年々被下置御紋御

袷壱被下之

同六丑七月三日、 去月十二日京町ゟ出火之節、 出精ニ付御褒詞

同年十一月五日今度大砲御製造ニ付右掛り被仰付候

同七寅年七月十三日御趣意二付、 御所務并御金廻り江も指加相勤候様被

仰付候

同年閏七月廿九日元分銅印御講銀取扱兼帯被仰付候

無役御留守

同年十月十三日大小銃并弾薬御製造掛り被仰付候間、 原法之通精製相成

候様可申談候

安政元寅十二月五日今般大橋御修覆御出来之処、御用掛り出精ニ付金弐

百疋被下置候

一同二卯十月八日御用向有之立帰出府被仰付、支度出来次第致出府候様被

仰付、同十二日出立

一同年十一月十一日御趣意有之役中御足充行被下置、是迄年々被下置候銀

三枚之義ハ以後不被下候

一安政三辰四月廿一日御趣意有之、都而御勝手共取扱候御用向ニも指加り

御奉行へ申談相勤候様被仰付候

一同年五月廿二日年来埒合厚相心掛候二付、花葵御紋付御扇子壱本被下置

成候

候

一同四巳年正月十八日御武備御繰金掛り被仰付、御製造掛り之儀ハ御免被

一同年二月十五日役儀其儘御奉行助被仰付、御充行并御足充行共役中拾七

人フチニ御直シ、外ニ御役扶持五人フチ被下置御徒頭次席ニ被成下、当

秋江戸詰被仰付、石原甚十郎罷帰候跡御奉行助御勤候様被仰付候

同年五月廿二日江戸詰出立

一同年閏五月五日詰中表御納戸役兼帯被仰付候、同九日詰中御製造方之儀

も相心得候様被仰付候

一安政五午七月七日今般御家督御相続御用掛り被仰付候

一同年八月八日来未ノ春迄詰越被仰付

一同年十一月廿一日御家督御相続御引移御用掛り出精ニ付、御帯一筋被下

置促

一同年十二月廿四日霊岸島御屋敷御建継御普請ニ付出精之段、御褒詞之上

銀弐枚被下置候

一同六未三月十日横浜御普請中詰延被仰付候

同年八月十九日出精相勤候二付御充行拾五人扶持二被成下、外二御役扶

持弐人扶持御増、都合七人扶持被下置候

同年十月廿七日詰越出精相勤候二付、御目録御紋御上下一具被下置、且

又詰中表御納戸役兼帯相勤候ニ付金弐百疋、并諸役所向御締り方等出精

相勤候二付金百疋被下置候

同十一月十一日帰着

同七申三月十一日太田御陣屋御普請御用掛り江戸詰中出精ニ付、御召御

上下一具銀三枚別段金五百疋被下置候

一万延二酉二月九日役扶持其儘、御留守作事奉行堀武左衛門跡被仰付候

文久与改元、十一月十一日今度大橋御門御普請中出精相勤候二付、

枚被下置候

同二戌十二月七日足痛二而難儀二付内願之通御役御免被成、御徒頭次席

二被仰付候

一同四子正月十六日支度出来次第上京被仰付、右上京中御作事奉行仮并御

普請御用掛り被仰付、同廿一日出立、六月十五日帰

一同年二月十日当分岡崎御屋敷御門預り仮御目付兼被仰付候

一元治元子六月廿四日御使番格ニ被成下、御役料之趣を以廿五石被下置候、

且又京都岡崎御屋敷御普請宜出来、右御用掛り出精相勤太儀思召候、依

之御目録御召御上下一具被下置候

慶応元丑四月廿五日勤功も有之ニ付弐人扶持御加増被成下、病気内願之

通隠居被仰付候

銀壱

河村貫蔵 岩太郎

拾七人扶持

同日親三左衛門家督如此無相違被下置、 大御番組江被入

但無息ニ而相勤候分別帳ニ記有

同十二月廿八日貫蔵与改名

同 一寅三月十一日御附御馬廻り被仰付

同六月四日宰相様御登坂被遊候付御供被仰付

同七月五日御附御小姓被仰付

同十月廿六日御附御馬廻り被仰付

同四辰閏四月十一日六番之遊擊隊分隊長被仰付、 勤中其隊之上席二被成

下

[略履歴]

高坂武右衛門

金右衛門

百五拾石

元文二巳十二月廿九日養父武右衛門跡知無相違

同五申五月廿一日御手廻り

延享元子十一月五日病気ニ付御免、大番入

戊閏七月廿五日休息 (安永七) 明和九辰六月十一日父子御答、

高坂金右衛門

百石

安永七戌閏七月廿五日養父武右衛門休息、家督無相違、大番入

天明八申六月廿日於御本丸江御渡有之候処不参届義有之、 閉門

寛政四子十月廿五日養子孫七郎不埒至極二付侍御削被成、御国追放被仰

此節拝知五拾石被召上、遠慮被仰付

文化五辰閏六月五日与内立合皆川善兵衛跡

文化十酉二月十三日大馬印奉行大河原助右衛門跡

同十四丑三月四日隠居被仰付候

高坂武右衛門 弦之助事

百石

一文化十四丑三月四日親金右衛門隠居被仰付、 家督百石無相違被下置、 大

御番組へ被入

文政四巳二月廿二日御近習番畑中平蔵跡被仰付

高坂

百五拾石 外役料百石

高坂武右衛門

元禄十六未六月十六日表御小姓被召出、 御切米

宝永四亥六月廿九日父武右衛門家督

正徳元卯十一月七日御小姓御免、大番入

享保二酉七月四日御膳番茂呂多右衛門跡

同七寅二月廿八日番外

同九辰六月十五日御役御免、大番入

同十五戌六月廿五日大番一番筆頭大井田角右衛門跡

同十九寅七月七日御使番役料被下

文久元酉十月五日出精相勤候ニ付銀三枚ツ、年々被下置候

同四未三月廿五日老年ニ付願之通隠居、

未四月四日源五郎事帰童

百石 高坂源五郎 一嘉永五子十一月十八日養父武右衛門儀年寄候二付隠居被仰付、 安政四巳年正月廿八日御製造方見習被仰付候 同年九月五日御製造方吟味役被仰付候 安政六未三月廿日年来鎗術相心掛候趣師役ゟ内達も有之ニ付、 嘉永二酉十一月五日御使番役杉田五太夫跡被仰付、 弘化二巳十月十六日末之番外御時宜役被仰付 天保十一子六月五日山奉行梶川半兵衛跡被仰付、御書院番組へ被入 同年江戸詰被仰付候 同五午十一月十六日出精相勤候二付銀五百匁被下置候 下置候 同年十一月十八日年寄候二付隠居被仰付候 同五子六月九日御長柄奉行山野十兵衛跡被仰付候 同十五辰十一月十六日御勘定拝借奉行大久保太郎太夫跡被仰付 同十三寅三月二十日無役御留守番世話役磯野仲右衛門跡被仰付候 同九戌二月廿四日威徳院様御逝去二付御役御免、 同八酉年江戸御供詰 同年十二月十一 無相違被下置、 置候 百疋被下置候、 隠居後帰童 日種々御端立御用多之処、 大御番組へ被入候 但号帰裁 格別出精相勤候二付銀五枚被 大御番組へ被入 御役料百五拾石被下 為帯地金 家督百石 同年閏十月廿五日優待列名目被廃非役卜唱 同三午四月廿五日戊辰北越出張、 列 同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米六十俵四斗三升六合被下、優待 明治二巳二月十六日番外順席二被仰付、 両被下 同年六月廿五日会征出立、 同年三月三日昨年来格別骨折相勤太儀之段御褒詞 同四辰二月廿一日勝手次第御国表江罷帰候様被仰付、 同三卯十一月廿六日宰相様御滞京中為御帰支度出来次第上京被仰付、 同年十月廿六日席其儘御先手御旗奉行被仰付 同年四月廿五日席其儘役御持筒指揮役被仰付、 同二寅正月十六日末之番外格二被仰付、 慶応元丑五月廿八日御趣意二付役御番組江被入候 同三亥八月廿五日制産御用ニ而京都へ出立、 同二戌十二月十一日右同断二付銀七枚御増、 晦日出立 引受致差配候樣被仰付候 置候銀拾枚之義ハ以後不被下候事 元治元子十二月賊徒 頒授候事 八十郎次 但同日御広間当番勤被仰付 一件ニ付出張、 十一月十三日帰、 軍事精励ニ付御賞典之内十石三ケ年令 御手当銀六百匁被下置候 役儀之儀ハ御免被成候、 役儀之義ハ御免被成、 巳二月廿二日出張ニ付十三 都合拾枚ツ、年々被下置候 十月五日帰 御軍事ニ付而ハ調錬を始 二月八日帰 是迄被下 席簗田

同

梶川 此

此前代み二出、但溝口与号、小呉トモ云

梶川半兵衛

百三拾石

宝曆十三未四月十一日養父市左衛門跡目無相違、

明和三戌九月十五日表御小性

同五子七月九日若殿様附御小性

安永八亥七月廿五日新知百石

同九子正月廿三日御附御小性頭取水野荒次郎跡於江戸被仰付

天明七未七月廿日御部屋附御腰物奉行御表兼帯大野一郎左衛門跡

寛政二戌五月廿八日御纏奉行皆川善兵衛跡

同八辰八月三日郡奉行井原丞助跡、御役料五拾石、席東郷三郎右衛門次

寛政十二庚申七月十七日御預所郡奉行井原丞助跡

同十三酉二月二日役義其儘御役料百五拾石被下、席御先武頭次席御役人

並

文化元子年十二月廿日役義出精相勤候二付、御側武頭次席被仰付

文化四卯二月六日御奉行河合太郎太夫跡

文化十三子六月廿四日御預所元締役且又出精ニ付三拾石御加増

文政二卯十月三日隠居、養子沢之丞家督無相違百三拾石、大御番組被入、

半兵衛義折々御機嫌伺中ノ口往来御坂札拝領

梶川半兵衛 沢之丞事

百三拾石

番組へ被入

文政二卯十月三日養父半兵衛隱居被仰付、家督百石無相違被下置、

一同十一子江戸詰被仰付

一定長にニレートに一旦奏子へ見て可引下を用すい

天保五午九月廿七日山奉行小栗次右衛門跡被仰付、御留守番組へ被入

同十一子六月五日御腰物数寄方奉行渡辺左右衛門跡被仰付、御書院番組

へ被入

同十四卯八月十七日末之番外御時宜役被仰付候

嘉永三戌六月三日御留守物頭下河三右衛門跡被仰付

同五子六月九日御先物頭小宮山周蔵跡被仰付、御役料百石被下置候

安政三辰五月九日年寄候二付隠居被仰付

梶川半兵衛 沢之丞

高百三拾石

右同日親半兵衛家督如此無相違被下置、大御番組江被入

同六未八月十一日御近習番被仰付、御書院番組へ被入、当秋江戸詰被仰

付候

文久二戌十月朔日御書物方土屋小六跡被仰付候

同十一月十五日殿様来春御上京御供被仰付候

同三亥五月七日当亥年御参府御供被仰付候

同十二月廿八日御裏役被仰付候、但役席根来紀之允次

同四子正月九日奧御納戸役定介被仰付候

同年十二月半兵衛与改名

慶応元丑五月六日奧御納戸役被仰付

閏五月四日御上京御供被仰付置候処、御用弁ニ付被指残

略履歴

粕谷伝左衛門

五月七日今度御進発為御待受殿様御出坂可被遊候ニ付、 一旦御上京被仰

百石

外役料五十石

出候、 依之御供被仰付

同二寅二月五日御裏役御書物方兼帯被仰付

同三月十一日御書院番組江被入、役儀之儀ハ御免被成

同三卯五月廿日御書院番二番之筆頭役小栗治右衛門跡被仰付

同十二月十五日支度出来次第上京被仰付

明治二巳二月十六日今般御改革二付、御役御免被成御広間当番勤被仰付、

但番列其儘

梶川

梶川喜左衛門 清助 山県克之助与力

切米弐拾三石五人扶持

慶応二寅十月廿二日今度御趣意二付被召出、 新番並組二被仰付、 御充行

之儀ハ如此被下置

同三卯九月廿七日当冬京都御警衛詰被仰付、 詰引揚支度出来次第致出立

候様被仰付

同十一月九日喜左衛門与改名

同四辰四月七日支度出来次第京都御警衛詰被仰付

明治ト改元、十二月七日今般殿様御上京被遊候ニ付、 御供被仰付

[略履歴]

百石 役料百五十石

粕谷彦左衛門

伝次

同廿卯正月十六日御役料五十石被下

元文二巳四月十六日札所奉行御免、役料上ル

同十五戌八月五日札所奉行大番入、彦坂又兵衛跡

享保九辰十二月廿一日勘定奉行彦坂又兵衛跡

正徳二辰二月廿一日御金奉行

元禄元辰十一月廿九日父彦左衛門跡目被下

延享元子十月廿四日御預所御金奉行恩田儀兵衛跡、 寬保二戌三月廿五日父伝左衛門跡知無相違、 大番入 御留守番入

同四卯六月十六日札所奉行沢木所左衛門跡、 大番入

竟延四未十月廿五日郡奉行松原仲右衛門跡、 役料五十石

宝曆十一巳十一月廿九日御目付榊原助左衛門跡、 御役料百五十石

明和四亥三月廿五日病気二付御役御免、 御先物頭次席、御役料其儘

亥四月十四日病死

粕谷彦太夫 病死

百石

明和四亥六月五日父彦左衛門跡知無相違、大番入

同五子七月九日御小姓

同九辰六月十四日御次詰菅沼三十郎跡、

安永二巳六月五日若殿様御附御近習番

粕谷

天保十二丑六月廿九日隠居

天明四辰六月廿日同御近習番頭取御膳番、大野一郎左衛門跡同七戌七月廿四日同御小道具方太田次郎九郎跡

粕谷彦太夫 三之助 茂十郎

百石

寛政元酉十一月十六日父彦太夫跡知無相違、大番入

同三亥二月四日御小性見習

同六寅二月廿九日御小性本役

同年十月十日御近習番被仰付、御書院番入

同閏十一月十四日御小性

同七卯九月廿日御近習番御書院番入

同九月十八日御用人支配

同十二申二月廿九日御附御不用二付大御番入

同十二申九月廿日御附御近習番御用人支配

享和元酉九月廿日病身二付御免被成、御書院番無役二被差置

文化元子十二月廿五日表御小性

文化六巳正月廿八日山奉行山田清右衛門跡

同十四丑六月廿日末ノ番外御鵜方青木七郎右衛門跡、席横井三郎左衛門

次

文政六未五月十六日御水主頭三岡助右衛門跡

同十一子正月十五日御近習番溝口郷右衛門跡

天保三辰年三月十一日御普請奉行山崎七郎右衛門跡被仰付

天保八酉十月廿九日御側物頭下山清左衛門跡被仰付候

天保十一子五月廿九日御籏奉行河合四郎左衛門跡

粕谷彦左衛門 次郎三郎事

百石

一天保十二丑六月廿九日養父彦太夫年寄候ニ付隠居被仰付、家督百石無相

違被下置、大御番組へ被入候

嘉永二酉江戸詰被仰付、三月廿一日出立

同五子四月廿九日御広式御用達山田六兵衛跡被仰付、御留守番組へ被入

候

一同六丑七月廿二日公方様薨御被遊候ニ付、殿様為御機嫌伺同廿八日江戸

表へ出立

一同年九月廿八日謐姫様御入輿御用掛り同様被仰付候

一同年十一月廿五日謐姫様御婚姻被為済、右御用掛り同様出精ニ付銀七匁

被下置候

同七寅四月廿日此度思召を以大奥向御人滅御趣法替被仰出候ニ付、右御

用掛り被仰付候

一安政五午十一月廿五日次男永田喜四郎不埒至極乱心同様之趣相聞候二付、

拝知被召上其方へ御返シ之上侍御削被成、御国拾三里四方追放被仰付候、

且又彦左衛門義も取扱方不参届趣相聞不調法之事ニ候、依之遠慮、十二

月廿四日御免

一万延元丑八月廿五日江戸詰出立

一文久二戌三月十一日御金奉行上坂五郎助跡被仰付候

一同三亥七月九日眼病其上耳遠二付休息内願有之候得共、休息之儀御指留

役儀之儀ハ御免被成、大御番組へ被入候

元治元子三月五日眼病ニ付内願之通休息

慶応二寅十一月十六日先年永田家へ養子二罷越候次男喜四郎事、 改心不致御国内所々致徘徊医道修行之趣二而勝手儘二致療治、 蔵義先年重キ御咎被仰付、 其後御憐愍を以御国住居御免被成候処、 剰不正之 当時圭

吹出し銀取扱候始末不届至極ニ付、 御国十三里四方追放被仰付、 右不届

之所業相働候節心得方も可有之処、 無其儀取扱方不参届趣不調法二付遠

慮被仰付、十二月六日御免

粕谷外次郎

高百石

同日親彦左衛門家督如此無相違被下置、(元治元年三月五日) 大御番組江被入

同六月廿五日宰相様御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、 依之銀壱枚被

下置

慶応元丑十二月十四日御附御小姓被仰付

同二寅六月四日宰相様御登坂被遊候付御供被仰付

同十月廿六日御附御馬廻り被仰付

同十一月十六日兄圭造儀先年重キ御咎被仰付、 其後御憐愍を以御国住居

御免被成候処、今以改心不致御国内所々致徘徊、 医道修行之趣ニ而勝手

儘二致療治、 方追放被仰付候、且又親彦左衛門儀右不届之所業相働候節、 剰不正之吹出し銀取扱候始末不届至極ニ付、 御国十三里四 心得方も可

有之処、 無其儀取扱方不参届趣相聞候二付遠慮被仰付、 但外次郎恐入伺

之上遠慮

同十一月廿三日伺遠慮御免

同三卯十月廿一日御趣意ニ付御附御馬廻り御免被成、 第一 遊擊隊江被入

同十一月廿六日殿様御上京被遊候節御供被仰付

同十二月十二日急々上京被仰付

同月廿六日先達而今宿出陣中他之宿所へ罷越、 不作法心得違之趣相聞候

二付遠慮被仰付

同四辰正月七日今般非常之儀二付遠慮御免

同八月廿九日小隊之分隊長浅井外卷跡被仰付、 御書院番組江被入

明治元与改、九月十四日支度出来次第京都御警衛詰被仰付、 出立日限之

儀ハ追而御指図可有之旨被仰付

粕谷

「略履歴

※金井庄太夫の後にあり

粕谷嘉内 清次郎事 御目付支配

廿石五人

文化十五寅三月十一日家督無相違被仰付候

安政五午四月四日病死

粕谷治太夫 留之助

、略履歴

切米弐拾石五人扶持

同年五月廿五日粕谷嘉内病中願之通養子二被仰付、 家督如此無相違被下

置 親之通相勤候様被仰付候

文久二戌年十二月廿八日治太夫与改名

慶応四辰閏四月十一日家職之儀二付上京被仰付

粕谷

粕谷雄蔵 佐野金吉

高百石

同日親雄蔵家督如此無相違被下置、大御番組江被入(安政三年四月十五日)

同六未二月十六日鱸長左衛門家屋敷へ替被下

同 万延元申十二月廿八日粕谷雄蔵与改性名 一酉二月九日嶋川源右衛門家屋鋪へ

文久元与改、十二月廿三日来戌年芝御陣屋詰被仰付

同三亥八月四日榊原幸八家屋敷へ替被下

同四子正月廿日弟小三郎先年桑嶋又右衛門養子ニ指遣候処、 右小三郎儀

兼而行状不宜、其上不届至極之致業有之二付、 侍御削被成雄蔵方へ御返

右取扱一家之内粕谷彦左衛門江被仰付筈候

同月廿九日伺之上遠慮被仰付置候処、今日ゟ御免被成

シ之上長ク蟄居被仰付、

元治与改元四月廿二日中野鉄太郎家屋敷江替被下

同六月廿九日京都江出立

慶応三卯十月十六日京都御警衛増詰、 早速致出立候様被仰付

同四辰五月十六日御趣意ニ付他番へ被入

同九月二日京都交代詰被仰付

、略履歴

於松岡御水主頭、 御相続後

享保七寅十一月九日御役御免御役料上ル、席金子六右衛門次

同廿一辰正月十六日大馬印奉行中村政右衛門跡

梯左仲太 治部左衛門 隠居

百石 役料百五十石

延享元子十一月三日父左仲太跡知家督無相違、大番入

同四卯八月廿八日御手廻

寛延四未三月十一日御駕付

宝曆十二午四月廿九日御勘定拝借奉行八田金右衛門跡、 御留守番入

明和九辰八月十日御留守作事奉行河村藤太夫跡

安永四未十月十一日御長柄奉行小笠原孫次郎跡、

同五申正月廿五日御先作事奉行岡三郎右衛門跡 席是迄之通

梯兵右衛門 休息

百石

安永八亥九月廿日父左仲太隠居、 家督無相違、 大番入、左仲太年来相勤

候二付銀弐枚被下置

梯左仲太 留之助

百石

享和元酉九月廿日養父兵右衛門内願二付休息家督無相違、 大番入

文政四巳十一月廿日与内立合荻野利右衛門跡

同八酉八月病死

百石 梯左仲太

梯

役料百五拾石

梯治部左衛門 敬次 [略履歴]

一高百石

同十月五日養父左仲太家督如此無相違被下置、 大御番組へ被入候

同十三寅年十二月廿八日左仲太与改名

天保五午八月廿五日御小性藤田新三郎跡被仰付

同日石原甚十郎家屋敷被下置候

同月廿八日御番御供皆勤二付、 御紋御帷子一被下置候

同年十一月十二日来未年江戸御供詰被仰付候

同六未閏七月十三日御遺骸御国へ被為入候ニ付御供被仰付、 右御用相済

又々此表へ早速詰可罷越候

同九月五日今度御代替二付、 御小性御免被成御側支配御近習二被差置

勤方之義ハ追而可被仰付候、 御用筋之儀ハ先是迄之通可申談候

同九月十四日御小性被仰付

同七申年正月十九日御滯府二付詰越被仰付候

同九戌八月廿五日支度出来次第江戸詰被仰付

同十一月十二日御近習番被仰付、 御書院番組へ被入

同十亥二月朔日当秋江戸詰被仰付

同十二丑正月十九日当秋江戸詰被仰付

同年六月十一日御書物方本多門左衛門跡被仰付、当秋江戸詰被仰付候

同十四卯八月十七日御裏役有賀六郎右衛門跡被仰付候

付

同閏九月廿八日来辰年江戸御供詰被仰付

同十一 月四日御腰物数寄方奉行樋口喜左衛門跡被仰付候

嘉永元申九月十五日末之番外御時宜役被仰付候、 但席有賀清右衛門次

同七寅六月四日小馬印奉行吉田茂左衛門跡被仰付

安政三辰六月廿八日御留守物頭松原四郎兵衛跡被仰付

同四巳二月廿三日御先物頭加藤伝内跡被仰付、 御役料百石被下置

同五午十一月五日役儀其儘御役料五拾石御増 都合百五拾石被下置

文久二戌十二月十一日来亥江戸詰被仰付

同日支度出来次第早速出立候様被仰付

同十二月廿八日治部左衛門与改名

同三亥正月六日詰中西御門預り被仰付

同月廿一日中将様御上京御留守中御徒頭取扱被仰付、 且又御添屋敷御目

同四月十七日詰中西御門預り被仰付

同所御門預り并御屋形御預被成、

依之西御門預り之義ハ御免被成

付仮、

同月十八日御徒頭取扱被仰付候処御免被成

同五月廿三日詰中御徒頭取扱被仰付

同九月四日御徒頭取扱御免被成

同十一月廿四日御上京御供被仰付

元治元子七月朔日今般御達ニ付御上京被仰出候間、 組之者共召連上京被

仰付

同二丑二月廿六日敦賀表江出張被仰付

慶応三卯八月五日席其儘御留守組支配被仰付、 御役料之内百石被下置

明治 一巳二月十六日今般御改革二付御役儀御免被成、 御広間当番勤被仰

金子

金子市左衛門

百石

宝永元申七月五日養父半三郎跡目無相違被下

享保四亥五月十六日御右筆被仰付

同六丑六月五日御預所御用被仰付

同七寅年ゟ御家老中御用打込相勤

同十一午四月十六日新知百石被下表御右筆被仰付、 御書院番入

金子半右衛門 彦八郎 休息

百石

宝暦四戌閏二月十六日父一左衛門休息、 家督無相違、 大番入

明和五子八月十一日与内立合石川弥五右衛門跡

金子十郎平

百石 役料百五拾石

安永七戌閏七月廿五日父半右衛門休息、 家督無相違、 大番入

同年十一月十九日表御小性見習

天明六午二月十六日御部屋付御小性

寛政二戌四月廿日妻離縁取扱不参届役義御免、 大番入、遠慮

同五丑十月十一日御部屋附御小性被仰付

同六未三月四日御広敷御用人、 席其儘

同十二申八月十一日奧御納戸国枝藤三郎

文化元子七月廿八日御近習番頭取御膳番猪子六左衛門跡

同三寅六月十日御書院番筆頭

金子十郎平 藤三郎 十郎助

百石

文政十亥六月廿三日養父十郎平家督無相違、 大御番組へ被入

同十三寅十一月十一日表御小姓被仰付

天保四巳江戸詰、三月十日出立

弘化三午江戸詰、 閏五月六日出立

嘉永元申九月十五日表御小姓筆頭被仰付

同四亥二月十一日役儀其儘、 格式末之番外被仰付

同五子十月四日御使番格被成下、御時宜役被仰付

同七寅六月十九日御徒頭葛巻庄兵衛跡、 御役料五拾石被下置候

安政三辰四月十五日御使番役溝口郷右衛門跡! 御役料都合百五拾石被下

置候

金子十郎平 平次郎

略履歴

同日養父十郎平家督如此無相違被下置、(文久二年五月二十六日)高百石

大御番組江被入

但無息ニ而相勤候分別帳記有

文化八未閏二月廿一日御使番筒井三右衛門跡、 御役料百五拾石

同十四丑三月四日御先武頭斎藤利右衛門跡被仰付

文政元寅九月十三日御側物頭取有賀惣左衛門跡役被仰付

文政五午十月廿三日御役人席忍之者預り御武具支配御広敷御用人仮り是

迄之通

文政十亥六月廿三日隠居、 中ノ 往来折々御機嫌伺

同三亥正月廿五日当春芝御陣屋詰被仰付

同二月廿二日当詰引揚早速致出立候様被仰付

慶応三卯十月廿一日新撰隊教授方被仰付、役御番組江被入

同十二月廿四日十郎平与改名

明治二巳二月十七日大砲隊弾薬預り被仰付

同廿二日越後口長々出張太儀二思召、仍為御賞三千疋被下

金子

金子六右衛門

五拾石五人

於松岡其外、御相続後

享保七寅二月廿八日席久津見多仲次被仰付

金子忠次郎 市蔵 父六右衛門 休息

五拾石五人

享保十一午三月廿一日父六右衛門隠居、家督無相違、大番入

金子六右衛門

金二・アイ作用

百石

明和四亥三月廿九日御右筆見習

月和四三三十二十十名不登り至

明和五子四月五日父忠次郎休息、

家督無相違、

大番入、御右筆見習其儘

同七寅十二月十六日御右筆本役、御書院番入

同八卯二月五日二人扶持御加増、都合五十石七人扶持

金子小平太

文化五辰閏六月十五日末番外無役

同十二月病死

享和元酉十一月廿日御勘定奉行土屋市兵衛跡、

同十一未八月廿日御金奉行岡部平右衛門跡、

大御番入

御留守番入

同九巳十月五日与内検地奉行近藤吉左衛門跡被仰付、御留守番組へ被入

寛政四子十月十一日役義御免被成、

無役二而御書院番組二被指置

都合百石、是迄之七人扶持ハ上ル

寛政二戌十月十五日五十石御加増、

天明六午六月十一日御右筆請込御帳付支配林惣兵衛跡

百石

文化六巳ノ二月十六日親六右衛門跡知無相違、大御番入

同八未閏二月十日御小姓石川平八跡

文政三辰九月晦日奧御納戸役、御書院番入

同八酉三月病死

金子清左衛門 弥三郎 六右衛門

百石

一文政八酉四月廿五日養父小平太家督無相違、大御番組へ被入

一天保二卯江戸詰、三月十七日出立

同五午三月五日若殿様御附御近習番御書院番組へ被入、当秋江戸詰被仰

付

一同年江戸詰、八月廿八日出立

一同六未六月五日超倫院様御逝去ニ付御役御免、大御番組江被入

勝村

同十亥五月十一日楷五郎様御附御近習番被仰付

同十四卯閏九月廿五日巍光院様御逝去二付御役御免、 大御番組被仰付

弘化元辰七月十九日御金奉行岡谷弥右衛門跡被仰付

同三午江戸詰、 五月 出 立

嘉永三戌江戸詰、 四月廿一日出立、同四亥五月廿五日帰着

同四亥九月廿五日江戸詰中役前不念之趣相聞不調法之事ニ侯、 依之役儀

御免被成、遠慮被仰付候

安政元寅十二月九日御腰物数寄方奉行坂井又三郎跡被仰付、 御書院番組

へ被入候

同二卯十一月廿九日山奉行被仰付、 御留守番組へ被入候

安政三辰六月廿八日格式末之番外二被仰付候

同年十二月廿八日清左衛門与名替

同六未八月廿九日病死

金子治右衛門 小太郎

一高百石

[略履歴]

同十月廿日養父清左衛門家督如斯無相違被下置、

大御番組へ被入候

文久三亥十二月十一日製造方被仰付候

慶応元丑六月五日出精相勤候ニ付、年々銀三枚ツ、被下置

同十二月廿八日治右衛門ト改名

同三卯二月十一日出精相勤候二付銀四枚御増、 都合七枚ツ、年々被下置

同八月廿六日製造局勘定方被仰付

明治二巳二月十七日民政局庶務方被仰付候事

勝村儀兵衛

弐拾五石三人

元禄二巳九月二日新番被入、 御馬屋別当

同八亥八月廿二日 (マ、)

勝村源左衛門

百石

正徳二辰正月廿五日父儀兵衛家督被下、 新番入

享保三戌二月廿九日二人扶持御加増

同五子十月廿八日新知被下、 席塚田助左衛門次へ入

同十一午三月廿九日大番入、御馬方相身躰末

元文三午八月廿一日御書院番入

延享元子十一月廿五日御馬屋別当関甚五右衛門跡

同二丑三月十一日順席

勝村三太左衛門 休息

百石

元文三午八月廿一日御馬方被召出、御切米十五石三人扶持被下、新番入

寛延二巳三月十一日父源左衛門休息、

家督無相違、大番入、御馬方其儘

自分へ被下御切米上ル

安永二巳正月十六日御書院番入

同三午七月廿四日御厩別当町田藤右衛門跡

候

同五子九月廿九日年寄候二付休息被仰付

勝村源左衛門 病死

百石

天明七未正月十六日父三太左衛門休息、家督無相違、 大御番入、 御馬方

勝村儀兵衛 幾 三郎

廿五石五人

寛政十二庚申十月五日養父源左衛門家督無相違被下、大御番入、 御馬方

被仰付

文化十三子七月廿日不埒ニ付養子信吉同様父子遠慮

同十四丑十二月五日拝知御取揚弐拾五石被下置、

文政三辰十一月五日休息

勝村三太左衛門

廿五石五人

文政三辰養父儀兵衛休息被仰付、 家督無相違被下置、 大御番組へ被入、

御馬方被仰付候

同九戌江戸詰被仰付、 四月十七日出立

天保十亥江戸詰被仰付、 四月十七日出立

弘化四未八月十一日妾腹之実子不慎二付遠慮被仰付候二付、 遠慮伺之上

指扣被仰付候

嘉永元申江戸詰被仰付、 四月十三日出立

同三戌十月十一日御厩別当役国分次郎太夫跡被仰付、 御書院番組へ被入

> 勝村清 郎 金五郎 源左衛門

廿五石五人

嘉永五子九月廿九日親三太左衛門年寄候二付休息被仰付、 家督廿五石五

人扶持無相違被下置、 大御番組へ被入、御馬方被仰付候

就中右之節乗行候馬取扱方御馬役不相当之趣相聞不調法之事ニ候、依之

安政三辰五月廿五日趣法中心得違有之、且他領江致止宿御法通も不弁、

閉門被仰付候、七月十七日御免被成候

同年七月十七日達落有之二付伺之上遠慮被仰付、 同廿六日御免

同五午九月廿九日先年小浜領小坂村十右衛門と申者へ為執候妹、 其方か

たニ逗留中不埒之儀有之候処、取締り方不参届趣相聞不調法ニ付遠慮!

十月十八日御免

文久元酉三月十九日御供ニ而出立

同二戌十二月廿八日源左衛門与名替

同三亥二月十二日番頭引纏上京、三月帰

同年九月七日支度出来次第上京被仰付、 十五日出立

元治元子四月廿三日宰相様御供ニ而帰

同年六月廿五日昨冬已来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、 依之御酒

被下置候

同年七月四日京都へ出立、 九月廿五日帰着

同年十月十五日上京、 丑三月十九日帰

同 一丑二月八日養子作五郎御咎被仰付候二付、 伺之上差扣被仰付候処御

免被成候

慶応与改元、閏五月十四日御趣意ニ付役御番組へ被入候

同 一寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、 公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同四辰三月九日上京、 六月十四日帰

明治二巳正月廿九日御趣意ニ付家業之儀ハ御免被成、 御広間当番勤被仰

付、 御留守番組江被入候

同年六月廿日源左衛門事清 一郎卜改

同年六月廿五日今般御改革、 更給禄米五拾三俵壱斗四升三合被下

予備隊

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

同四未五月廿日病死

勝村

此前代ま二出、 但松永与号

勝村次郎左衛門 初松永郷左衛門

百石

延享四卯九月六日中奥御小姓被召出 御切米並之通被下

同五辰七月十三日御部屋附御小姓

宝曆六子八月廿九日父郷左衛門隠居、 家督無相違勤方其儘、 但其身御擬

作ハ上ル

同八寅四月十七日御小姓御免、 御近習二被差置

同九卯七月五日御近習御免、 大番入

安永五申八月十四日与内立合磯野将吉跡

同七戌十月十六日御金奉行平岡仁左衛門跡

天明三卯九月十一日御勘定拝借奉行平岡仁左衛門跡、 御留守番入

寛政四子六月十七日年来相勤候ニ付役義御免末之番外千本長右衛門次

此後代ま二出、 但再ヒ松永与改

勝木

勝木五右衛門

弐拾五石三人

清浄院様御代

貞享二丑正月十六日父五右衛門御徒目付ゟ御取立 元禄七戌十一月十一日養父五右衛門為跡目被下、

御籏本武具役

元禄十四巳四月十六日

勝木権太夫 三代 病死

廿五石五人

宝永六丑十月廿九日父五右衛門為跡目五人扶持被下

享保二戌五月廿八日二人扶持御加増

同七寅順席

同九辰正月廿九日御手廻並之御切米弐拾五石五人被成下、御書院番入

元文三午八月廿三日御手廻御免、 大番入

清浄院様御代祖父五右衛門御徒目付ゟ御取立

勝木五右衛門

廿五石五人

明和元申六月廿六日養父権太夫跡目無相違、 大番入

勝木孫左衛門 休息

廿五石五人

明和三戌九月十一日養父五右衛門家督無相違、大番入

寛政八辰五月十一日玉薬奉行高橋次兵衛跡

勝木権太夫 大三郎

廿五石五人

文化元子十二月十一日父孫左衛門休息、家督無相違、大御番入

文化三寅六月十六日遠慮

文化九壬申八月五日御祐筆見習被仰付

同十三子六月五日御右筆本役、成瀬平左衛門跡

文政九戌五月十五日於江戸表御右筆請込御帳附支配被仰付、来亥年秋迄

詰越被仰付

勝木徹太郎

廿五石五人

文政十一子正月廿五日父権太夫家督無相違廿五石五人扶持、無役御留守

番入

勝木伝右衛門 権太夫 孫千賀事

廿五石五人

一文政十三寅五月十六日養父徹太郎病身ニ付内願之通休息被仰付、家督無

相違廿五石五人扶持被下置、無役御留守番入被仰付

一天保五午九月三日大御番組入

一嘉永五子年江戸詰、同六丑四月十六日帰着

同六丑十一月廿九日御持武具奉行被仰付、御書院番組へ被入候

安政五午四月廿五日御役御免被成、大御番組江被入候

同七申三月廿九日番改役上坂八郎左衛門跡被仰付候

万延与改元、六月廿六日御番両度皆勤二付御紋御帷子被下

同二酉三月五日御広敷御用達被仰付、御留守番組へ被入候

一文久二戌十二月廿八日伝右衛門与名替

一同三亥八月廿九日御祈禱奉行松山理左衛門跡被仰付、大御番組江被入候

一元治元子五月廿日御掃除奉行吉田悌蔵跡被仰付、御留守番組へ被入候旨

同年十二月賊徒一件、御留守御用御手当百疋被下

一慶応二寅正月十六日御書院番組へ被入、役義之儀ハ御免被成候

同年十一月三日今度御軍制御変革之御趣意ニ付、御広間当番勤被仰付候

同四辰三月十一日年寄内願之通休息

勝木権太夫

〔略履歴〕

切米弐拾五石五人扶持

同日親伝右衛門家督如此無相違被下置、第一遊擊隊江被入

但無息ニ而相勤候分別帳ニ記之

勝木

弐拾石四人

勝木勘助

元文五申七月五日御徒ゟ御取立、三石御加増、御貝役、新番入

寛延三午二月廿九日二石壱人扶持御加増、御書院番入

勝木興兵衛

百石

宝暦三酉十一月廿五日養父勘助跡目被下、大番五

安永三午十月十七日相身躰末

天明四辰九月廿四日御近習番御書院番入、五石一人扶持御足擬作被下、

順席

同八申六月十五日奥御納戸榊原玄蕃跡

寛政二戌十月十五日五石一人扶持御加増、都合廿五石五人扶持

同六寅六月八日御膳番役被仰付、奥御納戸ハ御免被成

同九巳四月廿八日於江戸新知百石被下置

同十午六月廿四日御膳番御免被成御近習二被指置

文化三寅十月十一日末ノ番外御時宜役

文化七午八月廿二日隠居

勝木勘助

百石

文化七午八月廿二日養父与兵衛年寄隠居、家督百石無相違、大番入

天保三辰三月廿五日休息

勝木十蔵

一高百石

[略履歴]

天保三辰三月廿五日親勘助儀病身ニ付内願之通休息被仰付、家督如此無

相違被下置、大御番組へ被入候

天保五午九月廿九日御近習番高畠市郎右衛門跡被仰付、御書院番組へ被

入候

同六未閏七月廿二日支度出来次第江戸詰被仰付候

同九月五日今度御代替二付御役御免被成、御書院番組其儘御近習二被指

置候、勤方之儀ハ追而可被仰付候、御用筋之義ハ先是迄之通可申談候

同十四日御近習番被仰付候

天保七申年二月七日御小性原平八跡被仰付候、来酉年迄詰越被仰付候

同九戌八月廿五日支度出来次第江戸詰被仰付

同十亥三月廿六日御滞府ニ付詰越被仰付

同十一子二月十五日当子秋交代被仰付候

同十二丑正月廿日当秋江戸詰被仰付

同十四卯八月十七日奥御納戸役原平左衛門跡被仰付、御書院番組へ被入

候

同閏九月廿八日来辰年江戸御供詰被仰付

弘化三午十月十五日来未年江戸御供詰被仰付候

嘉永元申六月五日田安一位様御容躰ニ付、御願之上急御出府被遊候ニ付、

御供被仰付候

同九月十五日御近習番頭取御膳番被仰付候

同二酉二月十三日当年江戸御供詰被仰付候

同閏四月十二日勇姫様当冬御入輿ニ付、御式正御用掛り被仰付候

同十二月十五日今般御前様御引移御婚姻前後無御滞被為済御満足思召侯、

右御用掛出精相勤候ニ付、御目録之通御召御上下一具被下置候

但御式正掛相勤候ニ付

同三戌六月三日御近習番頭取御膳番其儘、御書院番二番之筆頭役近藤雄

蔵跡被仰付候

同七月廿八日郡奉行海福猪兵衛跡被仰付、御役料五拾石被下置候

同十一月九日支配下取扱筋之儀間違有之、恐入伺之上遠慮被仰付候、同

十一日御免被成候

嘉永五子六月九日江戸御聞番役中村八太夫跡被仰付、御役料都合百五拾

石被下置、御先物頭次席、家内引越被仰付候

同六丑正月六日慎姫様御縁談御熟談ニ付、御用懸り被仰付

同年二月廿四日御奉行役中根新右衛門跡被仰付、来々卯春迄詰越被仰付!

代り罷越候迄者是迄之通御聞番役相勤候様被仰付

同年五月廿八日詰中御預所掛り被仰付候

同六月朔日慎姫様御入輿ニ付、御用懸り被仰付候

同年十二月廿五日謐姫様御婚姻無御滞被為済御満足思召、右御用懸り出

精相勤候ニ付、御召御上下一具被下置候

同七寅四月十三日今般公儀御代替二付、御判物御朱印郷村高辻帳之儀被

仰出候ニ付御用懸り被仰付候

同月廿八日今度御札所一条ニ付公辺御願達之儀有之候間、右御用掛り被

仰付候

同年六月十日松波甚左衛門病死ニ付、右代り詰罷越候迄御目付仮兼帯被

仰付候

安政と改元、寅十二月廿三日御札所御内用向出精ニ相勤太儀ニ思召候、

仍之御目六之通被下置候、

銀壱枚

同二卯四月十四日先達而御判物御朱印郷村高辻帳御改二付、御用掛出精

相勤、太儀之段御褒詞被成下候

同四月廿二日火之御番ニ付、御出馬御供高田孫左衛門差支候節、代り可

被相勤候

同五月七日右高田孫左衛門代り勤御免被成候

安政三辰四月三日江戸詰中火之御番ニ付御用多之処出精相勤候ニ付、銀

二枚之御目録被下置候

同月廿日今度黄門様御遠忌ニ付、於運正寺御廟御造営被仰出候処、纔之

日数二而宜出来太儀二思召候、此段申聞候様被仰出候

同四巳四月十五日思召を以、御奉行役其儘郡奉行被仰付候御趣意ニ付、

川北領以来郡奉行支配ニ被仰付候間、役所取扱候御用向并下代共、郡奉

行江附渡候様被仰付候条、左様可被相心得候御趣意二付、以来三領并川

北領共打込致支配相勤候様被仰付候

同年十一月廿日御趣意ニ付御預所元締役兼勤被仰付候

同日御趣意二付御預所郡奉行兼勤被仰付候

同年七月十一日此度桜御門頰当御普請中各見廻り出精被相勤太儀思召候、

此段申聞候様被仰出候、且又御役先并末々之者共出精之段褒メ可遣候

同五午十月十八日今度北国筋湊々見分為御用堀織部正殿駒井左京殿被罷

越候ニ付、右御用掛り被仰付候

同十一月十一日御預所元締役兼勤之儀ハ御免被成候、同所郡奉行兼勤之

儀も御免被成候

同十二月十二日今度外国奉行始湊為見分被罷越候ニ付、右御用懸り出精

相勤候二付御褒詞被成下候

同六未八月五日制産方掛り被仰付候間、頭取同様相心得候様被仰付候

同年十月十六日公儀御代替二付、

御判物御朱印郷村高辻帳之儀被仰出

二付、 右御用懸り被仰付候

同十二月三日兼勤被仰付置候処御用多二付、 為失却銀三拾枚被下置候

万延元申四月十一日御判物御朱印郷村高辻帳御改ニ付、 右御用掛り被仰

付候処、 出精相勤候二付御褒詞被成下候

同八月廿六日真田五郎兵衛江戸表へ致出立候ニ付、 石原甚十郎湯治罷帰

候迄御広敷御用人仮兼帯被仰付候

万延元申十月廿日近来格別出精相勤候ニ付、 御足高三拾石被下置候

同 一酉正月廿日御国馬御端立ニ付掛り被仰付候

文久二戌十月二日御内御用有之ニ付、 京都へ罷越候様被仰付候

同十月廿八日近来格別出精相勤候二付、 御足高七拾石御増、 都合百石被

下置候

同三亥年三月十六日御自分義上京中御内用向有之ニ付、 此表へ立帰罷越

候処、 此表御用多二付不及上京旨被仰付候

同年七月三日内達之趣も有之ニ付、 郡奉行勤之儀ハ御免被成候

同月廿二日当分御目付御用向取扱兼被仰付候

同月廿三日当分寺社町奉行御用向取扱兼被仰付候

同日当分御目付御用向取扱兼被仰付置候処御免被成候

同月廿六日当分寺社町奉行御用向取扱兼被仰付置候処、 御免被成

同八月十九日今度於三ノ丸御座所向御普請被仰出候ニ付、 御用懸り被仰

付

同四子正月廿 一日御内御用有之、 立帰上京被仰付早々可被致出立候

元治与改元、三月五日御軍製調御用懸り被仰付

同八月廿七日御足高返上之儀毎々内達も有之、今度不容易御時態ニ付

強而内達之趣奇特二被思召候、 依之御借米増懸り中被任内達候様被仰付

但已前御足高三拾石之儀者是迄之通被下候事

同十月十八日御内御用有之二付、 立帰出坂被仰付

慶応元丑四月廿五日御奉行役其儘会所奉行兼被仰付

同日産物之儀専御派立之折柄ニ候得者、 当分振退相勤候様被仰付、

相勤候樣被仰付

行役其儘会所奉行兼被仰付候二付、

御札所組御預被成、

会所御用之儀も

同七月十一日三ノ丸御座所御普請御用掛出精相勤候付、 御褒詞被成下

同 一寅二月廿日年来役儀格別出精相勤候付、 御足高之内五拾石御加增

高百五拾石如此被成下、 但御足高之内五拾石御加増被成下候二付、 御役

料五拾石之儀ハ以後不被下候事

同六月五日町方産業懸り被仰付

同十月十三日御趣意ニ付以来評儀席へ罷出御用申談候様被仰付

同十一月廿九日席并会所奉行其儘町奉行兼被仰付

三卯五月二日町奉行其儘御勝手掛り被仰付、 会所奉行之儀者御免被成

同

且又産業之儀ハ兼而被仰出も有之候通、 尚厚致心配候様被仰付

同六月二日御内用有之ニ付立帰上京、早速致出立候様被仰付

同四辰 一月廿一日当分御取締り地元締役御用向取扱被仰付

同月廿九日当分御取締地元締役御用向取扱被仰付置候処、 御免被成

同 三月十二日御札所懸り被仰付

同四月五日北陸道総督御通行之節心配相勤候段、 太儀ニ思召候

同閏四月七日加州様江為御使者被遣

同五月四日評定役被仰付、 開拓掛り被仰付

明治卜改元、 十二月十六日病気ニ付度々内達之趣も候へ共、 多年格別精

二付御指留置被成候処、 彼是長病ニも相成無拠儀ニ付、 御役儀御免被

励



門野九右衛門

百石

延宝二寅三月七日養父九右衛門為跡目

宝永四亥七月廿七日勘定奉行被仰付

門野佐五左衛門 九右衛門

宝永五子五月廿五日養父九右衛門跡知無相違、

享保八卯四月廿三日山奉行御留守番入

同十三申三月廿一日御免

元文四未十二月十一日死

門野九右衛門 岩五郎 隠居

百石 役料百五十石

元文四未十二月廿九日父佐五左衛門跡知無相違被下、

寬延四未閏六月廿一日御金奉行皆川与三右衛門跡

宝曆十一巳十一月廿九日札所奉行吉田喜右衛門跡

明和七寅十二月十六日役義出精ニ付末ノ番外

安永八亥七月廿五日御長柄奉行柘植伊太夫跡、 御役料百五十石

天明三卯三月朔日御先物頭丹羽市左衛門跡

門野九右衛門

百石

天明八申八月十日養父九右衛門隠居、 家督無相違、 大御番入

寛政三亥四月廿九日御部屋附御近習番御書院番入

同十二申十月七日御供頭

享和二戌十二月御供頭御免、 御近習

文化二丑十二月五日与内検地奉行山本清右衛門跡

同七午十月五日御金奉行大崎七太夫跡、大御番入

同十二亥二月五日御勘定拝借奉行大崎七太夫跡、

御留守番入

同十四丑七月五日病死

門野太郎右衛門 彦助事

百石

一文化十四丑八月廿九日親九右衛門病死、 跡家督無相違百石被下置、

番組へ被入

文政元寅六月廿九日御 小姓被仰付

同二卯年江戸御供詰

同六未年江戸御供詰

同四巳年江戸御供詰

同八酉江戸詰被仰付候

同九戌二月廿日威徳院様御逝去二付御小姓御免、 大御番組へ被入

同十三寅三月廿九日表殿様御附御近習番被仰付、 御書院番組へ被入

四月十三日出立、天保三辰年迄詰越ニ而帰着

同年江戸詰被仰付、

一同年七月廿八日御附奥御納戸役被仰付候

一天保四巳江戸詰被仰付、三月廿八日出立

一同六未江戸詰被仰付、三月廿八日出立、五月廿五日罷帰ル

一同年六月五日超倫院様御逝去ニ付御役御免被成、大御番組へ被入

一同七申五月廿日御鵜方高間文四郎跡被仰付、御書院番組へ被入

同十一子五月廿九日末之番外御時宜役被仰付

一弘化四未二月十二日御使番役林忠兵衛跡、御役料百五拾石被下置候

嘉永四亥七月五日御先物頭山口与右衛門跡被仰付候

一安政四巳二月廿三日席其儘夜廻り勤被仰付、御役料百石被下置役儀之義

御免被成候、但持馬勝手次第

万延二酉二月九日年寄候二付隠居被仰付候

門野隼雄 孝吉

一高百石

同日親太郎右衛門家督如此無相違被下置、大御番無役組江被入

文久三亥八月四日中将様御附御近習被仰付

同十月十日中将様御上京二付御供被仰付

同四子正月九日御附御小姓被仰付

元治与改元、六月廿五日宰相様御上京中格別繁勤太儀二思召候、依之御

酒被下置

同二丑正月廿五日隼雄与改名

慶応二寅六月四日宰相様御登坂被遊候二付御供被仰付

明治元辰九月廿三日公務方被仰付、公用人之儀も相心得候様被仰付、

書院番組へ被入、月々金弐千五百疋ツ、被下置

門野

門野甚五右衛門

拾八石三人

安永七戌十二月十六日小役人格ゟ御取立、新番入、役儀其儘御台所頭

天明七未三月廿九日父甚五右衛門家督十八石三人無相違、新番入

天明八申七月廿九日親甚五右衛門御扶持方年番相勤候節、勘定筋相違有

之不調法ニ付、栄十郎義御切米三石被召上侍格御取上、小役人格へ御下

ケ被成

門野栄十郎

拾五石三人

、略履歴

寛政十二申十二月十六日御広式添役ゟ御取立被成、新番入、役義其儘

文化七午九月十六日御借米方青山次郎左衛門跡

同十二亥九月十一日御台所目付頭兼帯菅沼五郎太夫跡

同十四丑正月十六日絵所預り古物方記録方兼

文政元寅九月四日休息

門野栄十郎 亀吉

拾五石三人

文政元寅九月五日父栄十郎休息、家督無相違、新番·

天保八酉七月病死

御

門野栄十郎 弁蔵

拾五石三人

天保八酉八月廿九日兄栄十郎病中願之通養子二被仰付、家督拾五石三人

扶持無相違被下置、新御番組へ被入

門野甚吾 八十之丞 甚五右衛門 実小林三郎兵衛次男

拾五石三人

一弘化三午九月廿五日養父栄十郎家督拾五石三人扶持無相違被下置、新御

番組へ被入

一嘉永六丑七月廿日此度思召を以支度出来次第江戸表へ罷出、炮術調練致

修行候様被仰付、御扶持方三人ふち被下置、同廿七日出立、同七寅四月

着

同七寅年三月廿三日御殿山出張ニ付御下緒壱掛ケ被下置姪

安政元寅十二月廿八日甚五右衛門改

同六未十二月十九日御堀殺生、心得違二付伺之上遠慮、同廿九日御免、

過料銀拾匁被仰付

一文久三亥十月十三日中将様御供ニ而上京、子四月廿三日同断帰

一元治元子六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀二思召候、依

之御酒被下置候

一同年八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、丑二月四日帰

一慶応二寅十一月十二日京都詰出立

一同三卯四月四日御上京御供、振替り帰

- 『三耳』)『一名 一刀行行 ・ 寸字 ・ 火

一同廿五日新番組二被仰付候一同年十月十八日第二遊擊隊江被仰付

一同四辰五月十一日今般御趣意二付無役組二被仰付

一同月廿日無役新番組江被入候

明治二巳六月廿一日甚五右衛門事甚吾卜改

同年七月十日御定之年数相満候二付無役組江被入候事

同年八月十四日御広間当番勤被仰付

同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革ニ付、為御慰労廿五両被下置

候

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾五俵四斗五升被下、優待引

同三午十月三日是迄居住罷在候借地、拝地二被成下候

同年閏十月廿五日優待列名目被廃非役卜唱

同四未十月三日倅藤十郎へ家督

神戸

神戸六左衛門

百石

於松岡御長柄頭、御相続後

享保七寅十一月十九日御役御免御役料上ル、席梯佐仲太次

神戸三郎右衛門

百石

享保七寅十二月五日御手廻被召出

同十三申八月廿三日父六右衛門隠居、家督無相違被下、此節自分御合力

銀上ル、御手廻り其儘

神戸三郎右衛門

百石

享保十四酉十一月廿九日養父三郎右衛門跡無相違、 大番入

寬保二戌五月十一日道奉行岡嶋円右衛門跡

寛延四未十月廿二日役義御免

此後代よ二出、但横井与改



香西弥右衛門

百石

宝永三戌十二月十一日養父弥右衛門跡目被下

享保十一午十月十六日与内吟味役仙石庄右衛門跡

同十三申三月廿一日山奉行被仰付

寬保二戌七月廿五日御勘定拝借奉行平尾新五兵衛跡

寛延四未五月廿五日御纏奉行平岡金左衛門跡

香西弥右衛門 万作

百石 五拾石御足 役料百石

宝暦三酉三月廿五日父弥右衛門隠居、 家督被下、

同十一巳三月四日御内御右筆堀孫次郎跡

明和三戌九月十六日出精相勤候二付末之番外、

席津田伝七次

安永四未二月十四日御足高五拾石

香西万作

同十丑正月十五日御水主頭長谷部半右衛門跡、

御役料百石

天明五巳六月十一日御先物頭小笠原孫次郎跡

百石

天明六午六月廿日父弥右衛門隠居、 家督無相違、 大御番入

寛政七卯八月五日御書物奉行有沢権四郎跡、御書院番入

享和二戌十二月十六日御腰物奉行高畑季八郎跡

文化元子十一月十八日病身二付御役御免、 御書院番二被指置

同五辰六月死

香西益太郎

百石

文化五辰七月五日父万作跡知百石無相違被下置、 大御番組へ被入

文化六未江戸詰被仰付候

天保八酉七月五日与内立合武部伝右衛門跡被仰付

同十二丑七月廿日与内検地奉行加藤清兵衛跡被仰付、 御留守番組へ被入

同十五辰十一月十一日格式末之番外被仰付、 河津佐太夫跡

嘉永四亥正月廿日年寄候二付隠居

香西敬左衛門 山三郎

高百石

、略履歴

養子山三郎江家督

嘉永四亥正月廿日養父益太郎年寄候二付隠居被仰付、

如斯無相違被下置、 大御番組へ被入

同廿一日御小性ニ被仰付候

同日江戸詰被仰付候

同五子十月十三日来丑年江戸御供詰被仰付候

同年十二月廿八日敬左衛門与改名

同七寅十月十三日来卯年江戸御供詰

安政三辰十月十五日来巳年江戸御供詰被仰付候

同五午七月六日殿樣御附御小姓頭取被仰付候

同六未二月三日御小姓頭取被仰付候

同四月廿七日御国表へ被遣、九月中出府候様被仰付候

同十一月十七日郡奉行被仰付、 御役料五拾石被下置候

同七申閏三月十四日中将様御附御側向頭取見習、御役料五拾石御増都合

百石被下置、 御水主頭次席被成下、支度出来次第江戸詰被仰付候、 但席

林作右衛門次

文久元酉四月七日御役料五拾石御增、 都合百五拾石被下置候

同十一月十二日来戌年江戸詰被仰付、 萩原金兵衛与致交代候様

同二戌年十月廿五日中将様来二月御上京ニ付御供被仰付、御道中并御逗

留中御持物頭仮兼帯被仰付候

同三亥年八月廿一日御用有之二付立帰上京、 早速致出立候様被仰付候

同十月十日中将様御上京ニ付御供被仰付候

同四子二月十五日於京都中将様御役被為蒙仰候二付、 公用人兼被仰付候

同五月二日宰相様御附御側向頭取本役被仰付候

同子五月十八日宰相様御職務中御内御用向格別骨折相勤候二付、

上下一具御目録被下置候

九月廿五日三ノ丸御座所大奥御用向之儀も、 御広式御用人申談相勤候様

被仰付候

元治二丑二月十九日今般出羽守様御使者被遣候二付、 右為御挨拶御使者

可被遣旨被仰付

慶応元丑九月廿六日宰相様御出坂被遊候付御供被仰付

十月九日宰相様御供支度罷在御指図次第

一寅六月四日宰相様御登坂被遊候二付御供被仰付

七月三日京坂御滞在中御内用向取扱被仰付

同三卯十月廿一日今般宰相様御上京被遊候ニ付御供被仰付

同十一月晦日於京都御附御側向頭取其儘、 御勤役之儀も兼帯被仰付

同四辰三月九日於京都長詰被仰付候二付、 勝手次第家内引越被仰付

同四辰八月廿五日於京都御附御側御用人勤評定役兼被仰付、 御附御側向

取頭之儀も相心得候様被仰付、 同日在京中諸被下之儀ハ大宮藤馬同様被

下候事

明治ト改元、 十二月十四日近来御用多之処格別出精相勤候二付、 思召を

以御足高三拾石被下置

同 二巳二月十四日参政職被仰出、 以当職三ノ丸内務局幹事被仰出

同四月四日全快次第御跡立被仰付候事

勝沢

勝沢一益

弐拾石三人

御召御

元禄九子五月十六日被召出、 但此節信濃守様御前様へ御附ニ被成

正徳五未正月廿三日死去、

百石 勝沢 順

正徳五未三月十六日父一益跡目被下

享保元申九月七日五石弐人扶持御加増 江戸定詰

同七寅八月六日於江戸新知

寛保三亥二月朔日死

享保廿卯正月十五日奥針医

勝沢 益 順

百石

享保三戌三月廿一日養父一順跡目無相違、 表御針医

延享四卯十一月廿五日奥御針

明和五子七月六日若殿様附

安永十丑正月十五日奥医格

天明二寅十月十六日江戸詰中ハ五人フチ被下

同六午七月廿四日御匙医格

勝沢 順

百石

寛政二戌九月廿九日父一益跡知無相違被下置、 奥御針医

寛政十一己未二月廿四日出精相励候二付、 奥御医師格被仰付

同十二申十月五日江戸詰々中御国渡五人扶持被下置、 外ニ御内証ゟ白銀

七枚被下置

文化十一四月五日養子一益上ハ妻出奔、遠慮

文化十二亥九月廿八日御足扶持五人扶持被下置、 是迄江戸詰中被下置候

五人扶持ハ不被下

文政二卯八月御匙医師格被仰付

勝沢 順 応事

百石

文政十亥四月廿日養父一順儀内願之通隠居被仰付、 家督無相違被下置

表御針医師被仰付、 是迄一順江被下置候五人ふち以後不被下置候

同年五月十一日奥御針医師被仰付候

同十二丑二月十六日江戸詰中 兼勤被仰付候

同年江戸詰被仰付、四月六日出立

天保五午江戸詰被仰付、 四月十四日出立

同九戌江戸詰被仰付、三月廿九日出立

同十亥四月十六日本道兼帯被仰付候

同十一子江戸詰被仰付、 四月十一日出立

同十三寅立帰出府被仰付、 七月十九日出立、 同年十月七日帰着

同十四卯江戸詰被仰付、 四月廿三日出立

弘化三午閏五月廿八日御匙医師奧御針医師兼帯被仰付候

嘉永元申急御出府御供被仰付、 六月五日出立、 同年七月御供二而帰着、

右ニ付十二月七日御褒詞

同年十二月廿五日江戸詰中留守ふち五人扶持被下置候

同 一酉江戸御供詰被仰付、 三月廿三日出立

同五子年江戸御留守詰 同六丑四月廿日帰着

安政二卯三月十六日種痘御端立以来心配行届候趣相聞候二付、 帯地 一被

安政三辰十一月廿九日度々江戸詰罷越候二付、 以来相詰候節留守扶持御

借米中ハ別段五俵ツ、被下置候

同四巳三月廿二日度々江戸詰罷越候ニ付、 以来相詰候節留守扶持御借米

中ハ別段米五俵ツ、被下置候処、御匙医師共内願之訳も有之ニ付、

数被下之義ハ被相止、 銀五枚御借米中江戸詰之節被下置候

同年同月廿五日医学館教授役被仰付候

同年四月十九日漢家教授被仰付候

同年四月廿五日江戸御供詰出立、 同五午年詰越、 同六未四月十四日帰着

文久二戌四月十八日江戸詰出立、 同三亥二月八日帰着

同三亥四月五日出精相勤候ニ付、 江戸詰中被下候留守扶持五人ふち以後

年々被下置候

元治元子十二月賊徒一件之節御留守御用相勤候二付、 御手当弐百匁被下

慶応三卯八月廿五日年寄其上耳遠ニ付内願之通隠居被仰付、 且又年来相

勤候二付御紋御羽織一被下置候

但隠居被仰付候へ共折々伺御機嫌罷出候様被仰付

勝沢儀一 一字

一高百石

同日養父一順家督如此無相違被下置、 奥御鍼医師被仰付

但無息二而相勤候分別帳記有

明治二巳年三月廿二日儀一ト改名

同五月朔日内務局当番被免候

川地

川地平次右衛門

廿石三人

正徳五未八月二日御徒目付ゟ御取立、 御留守番入、御代官御切米弐石御

加増

川地五左衛門 病死

廿石三人

寛保元酉三月十一日御徒目付ゟ御取立、大番入、上水奉行、御足米五俵

同二戌十一月五日御預所御代官弐石御加増、 家督無相違被下、 此節五俵上ル、 御留守番入

其身御擬作廿石三人扶持弟源五右衛門へ被下、

延享二丑正月廿九日養父平次右衛門休息、

寛延三午六月廿五日御代官御免、大番入

同年七月廿三日相身躰末

同四未四月廿九日御代官、 御留守番入

川地平次右衛門

(御医師

廿石五人 外五石御足

宝曆十三未七月廿五日父五左衛門跡目無相違、 大番入、相身躰末

明和九辰十月十六日用水奉行安原利左衛門跡 御留守番入

安永三午十月十七日御定年数相満 順席

役義其儘

同六酉三月十六日御代官木村藤右衛門跡

同七戌八月十二日御勘定吟味役

天明元丑十一月廿日二人フチ御加増

寛政二戌十月廿九日山奉行岩村門右衛門跡、 五石御足擬作

川地権内

廿石五人

寛政七卯六月廿五日養父平次右衛門休息、 家督無相違、 大番組へ被入

文化五辰ノ九月廿日用水奉行野村四郎左衛門跡、 御留守番人

文政二卯二月廿日御代官久津見三内跡

文政十三庚寅六月五日御預ケ所御代官役

川地権内 平五郎事 暮江

廿石五人

天保二卯十一月十六日養父権内家督無相違、 無役御留守番組江被入

同六未三月十六日大御番組入

同十亥七月廿日御台所頭被仰付、 御留守組へ被入、 支度出来次第江 戸詰

被仰付、八月二日出立

天保十三寅三月廿九日川除奉行被仰付候

同年十月十六日用水奉行青木一右衛門跡被仰付

弘化二乙巳五月十六日御勘定吟味役被仰付

同三午年江戸詰、 八月十五日出立

同四未三月十六日来申秋迄詰越被仰付

同年九月十二日公方様神田橋御立寄御用掛り二付御褒詞

嘉永元申八月廿三日役中為失却銀三枚ツ、被下置

同三戌三月五日昨酉年柳御門頰当御普請二付御褒詞

同年十月廿日御役御免、 大御番組江被入

安政三辰九月十六日御預所御代官役安川幸助跡被仰付、 御留守番組へ被

入

同五子十一月十六日御作事改役高木藤左衛門跡被仰付、 御留守番組

へ被

同六丑七月八日去月十二日京町ゟ出火之節、 出精ニ付御褒詞

安政元寅十二月五日今般大橋御修覆御出来之処、

御用掛り出精ニ付金弐

百疋被下置候

安政三辰四月廿日今度黄門様御遠忌二付、於運正寺御廟御造営被仰出候

纔之日数二而宜出来太儀二思召候、 依之御目録金弐百疋被下置候

文久二戌三月十一日年寄候二付休息

元治元子十月廿二日宰相様御用も有之ニ付、 折節三ノ丸御座所へ御機嫌

何等可罷出、 其節々中ノ口致往来候様被仰付候、 但折々加茂并八幡両御

坂江罷越候而も不苦旨被仰付候

川地権内 平蔵

、略履歴

同日親権内家督如此無相違被下置、(文久二年三月十一日) 切米弐拾石五人扶持 大御番組江被入

但無息二而相勤候分別帳二記有

同日制産方見習被仰付

同十二月廿八日権内与改名

同三亥八月廿九日上水奉行久保村祐七跡被仰付、 大御番組へ被入

元治元子十一月廿九日御役名御都合も有之ニ付、 御留守番組へ被入

慶応元丑三月五日道奉行兼勤被仰付、 但渡り人之儀ハ御渡不被成

同二寅正月十六日道奉行兼勤之儀者御免被成、 右兼勤中出精相勤候二付、

銀三枚被下置

同四辰五月廿五日用水奉行被仰付、上水奉行兼勤被仰付

同日用水奉行役米之儀ハ不被下候事

明治与改元、農民政局庶務方被仰付候事

但上水方川方

月給米壱ケ年分更拾五俵被下候事

川地

川地忠左衛門 初源五郎 久米之助 波門

弐拾五石五人

享保十四酉九月十五日中奥御小姓被召出

同十八丑五月廿九日於江戸二奥御小姓

同廿卯正月十五日新知百石

同年十二月十一日於江戸二御小道具役、 御書院番入

元文三午五月十五日御膳番浅見源右衛門跡

同年六月十二日親へ御返シ被成、蟄居

延享二丑正月廿九日被召返、兄五左衛門へ被下候御切米廿石三人被下、

同四卯九月六日五石二人扶持御加增、 御手廻、 御書院番入

宝暦六子十二月十八日御駕附

明和三戌五月廿日御次詰

川地忠左衛門 仁十郎

百石 役料百五拾石

明和四亥四月十一日父忠左衛門跡目無相違、

同七寅九月十四日御近習番、 御書院番入

安永七戌年六月廿二日御近習二而御供頭松原 一郎兵衛跡

天明六午五月廿七日奧御納戸宮塚甚左衛門跡

寛政元酉三月朔日新知百石

同六寅正月十六日御広式御用人助大谷市右衛門跡、 同二戌九月十五日御留主作事奉行、 鈴木百助跡 御役料五拾石、

守物頭次席

享和二戌十二月二日御先武頭太田三郎兵衛跡

同十午六月廿四日御使番服部長三郎跡、

文化十一戌年十一月十二日御側物頭東郷吉蔵跡

同十四丑年十二月五日隠居被仰付

川地又兵衛

百石

文化十四丑年十二月五日親忠左衛門隠居被仰付、 家督無相違百石被下置

大御番入

天保七申五月廿日道奉行原田十兵衛跡

天保十三寅二月廿九日御札所奉行東郷平太夫跡

天保十五辰年五月三日小馬印奉行梁田太郎太夫跡被仰付

御留

御役料百五拾石二被成下候

弘化二巳十一月十六日御留守物頭大藤治兵衛跡被仰付

嘉永元申九月十五日隠居

元治元子十月廿二日宰相様御用も有之ニ付、 折節三ノ丸御座所へ御機嫌

何等可罷出、 其節々中之口致往来候様被仰付候、 但折々加茂并八幡両御

坂江罷越候而も不苦旨被仰付候

川地半九郎 平九郎

百石

嘉永元申九月十五日養父又兵衛家督無相違被下置、 大御番組江被入

万延元申閏三月廿三日太田御陣屋詰出立

同年七月九日御番御供皆勤二付、 御紋御帷子被下置候

文久元酉四月十一日帰着

同廿五日太田御陣屋詰中横浜表江長々致出張候ニ付、 銀壱枚被下置候

文久二戌十一月七日此度上京御用捨相願候二付他番江被入候

元治元子 上京、 八月廿二日帰

同年十月二日病身二付内願之通休息

慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、 公辺ゟ被下配当金千疋被下置候

[略履歴]

高百石

川地平馬

同日親半九郎家督如此無相違被下置、(元治元年十月二日) 大御番組江被入

但無息二而相勤候分別帳二記有

慶応三卯三月廿七日御附御馬廻り被仰付

同四辰五月廿六日京都詰被仰付置候処、 早速致出立候様被仰付

川端

川端勇左衛門

弐拾五石五人

宝永三戌三月十二日被召出

享保七寅十二月十九日御右筆役御免

川端源左衛門

弐拾五石五人

享保十一午三月廿一日父勇左衛門休息、家督無相違被下、

川端勇左衛門

廿五石五人

享保十六亥八月廿五日養父源左衛門跡目無相違被下、

川端長兵衛 初勇四 郎

廿五石五人

明和九辰五月十一日養父勇左衛門病身二付休息、 家督無相違、 大番入

同年十一月廿日不慎之趣相聞候二付、

御擬作之内五石壱人扶持被召上

廿石四人扶持被下置、 新番入、 遠慮

安永二巳養父勇左衛門不慎之義有之、押込被仰付、 此節遠慮

天明七未正月十五日御広式添役

寛政四子正月廿日御趣意二付添役御免

大番入

川端又吉郎

同九巳十一月廿九日年来仲ケ間取次出精相勤候ニ付、御留守番入被仰付、

御台所頭浦井文左衛門跡

享和二戌十一月十六日御趣意有之、来亥年ゟ長詰被仰付、五石壱人扶持

御足擬作被下置

文化二閏八月廿日吟味役川合弥三兵衛跡

文化七午六月十日出精相勤候二付御足充行五石一人扶持御加增、都合弐

拾五石五人扶持被成下

文化八辛未九月十一日御代官宇貝八郎右衛門跡

文化十酉七月廿五日休息

川端次兵衛 清之助 次兵衛 勇左衛門

廿五石五人

文化十酉七月廿五日父長兵衛病身二付休息、家督弐十五石五人扶持無相

違被下、無役御留守番入

文化十三子七月廿日不埒ニ付遠慮

文政六未四月五日不埒二付閉門

同十二丑四月廿九日不忠之義有之閉門、七月廿八日御免被成候

天保八酉五月廿九日御番改役大町次左衛門跡

天保八酉十二月十一日先年も度々御咎被仰付候処、又々不慎之趣相聞候

二付役儀御取揚被成、閉門

天保十一子九月十六日先年ゟ度々重キ御咎被仰付候処、今以不慎又々当

春不慎二付、御充行之内五石壱人扶持御取揚、閉門

廿石四人

天保十二丑四月五日親次兵衛病身内願休息、家督廿石四人扶持無相違,

無役御留守番組へ入

川端小作

[略履歴]

切米弐拾石四人扶持

弘化二巳十一月十六日養父又吉郎家督如此無相違被下置、無役御留守番

組へ被入候

糸く有り作

安政元寅十二月十八日御軍制御改正ニ付、大御番無役組与被仰付候

被入候

文久三亥十一月廿日御旗本武具奉行吉池角兵衛跡被仰付、

御留守番組

Í

同四子二月廿九日御先武具奉行兼弾薬方兼帯本多武太夫跡被仰付、

番組へ被入候

同二寅十一月十一日御武具御修復御改正中出精相勤候付、金五百疋之御

慶応元丑閏五月十二日昨年来非常之御用繁相勤候二付、

銀弐枚被下置

目録被下置

同四辰三月十六日出精相勤候ニ付、役中年々銀三枚ツ、被下置

同八月五日弾薬預り小銃取扱方兼被仰付、是迄出精相勤候ニ付、銀三枚

其儘役中被下置、且又一番大隊之四番小隊へ附属被仰付、支度出来次第

越後表江出張被仰付

明治二巳二月廿二日越後口出張中太儀ニ思召、仍六両弐歩被下

樫尾

樫尾又左衛門

廿五石三人

正徳二辰八月廿一日於江戸御取立、 同日御切米五石御加増、 新番へ入

享保元申九月二日御留守番入

同十八丑十二月表御番被仰付

樫尾又左衛門

廿五石三人

享保十九寅三月廿二日於江戸養父又左衛門跡目無相違、 大番入

寛延元辰八月廿九日相身代末

同年閏十月廿五日番改高階勘左衛門跡 順席

寛延二巳四月廿六日死、

樫尾他五郎

七人扶持

寛延二巳六月廿一日父又左衛門跡目幼年二付如是被下

樫尾又左衛門

五人

明和五子十月五日樫尾他五郎名跡御立被下、 御留守番へ被召出、 五人扶

持被下

寛政十二申八月廿九日不調法之義有之、新番組へ御下ケ被成、 遠慮

文化八未十一月十一日内願休息

樫尾又左衛門 又左衛門 仲右衛門

五人

文化八未十一月十一日養父又左衛門年寄病身二付内願之通休息、 家督五

人扶持被下、新番入

文政三辰九月廿九日御貝役被仰付、役中弐人扶持被下

天保二卯四月十一日養子俊蔵及離縁心得方不宜二付役義御免、 遠慮、

妻

義も取扱方不宜趣ニ付慎

天保十三壬寅八月病死

樫尾乙之助

、略履歴

五人扶持 同十三寅十月十一日養父又左衛門病中願之通養子二被仰付、

如斯被下置、新番組へ被入候

嘉永二酉三月五日御貝役被仰付候

但役中為御手当御足弐人扶持被下置候

元治元子十月五日御貝役中御書院番組江被入候

慶応元丑九月廿二日内達之趣も有之二付、家屋敷御用ニ被仰付、 銀八貫

奴被下置、 但重而家屋敷被下候節ハ、元銀八貫匁上納被仰付候事

同三卯十月廿五日御趣意二付役御番組二可被入之処、年来相勤候二付御

書院番組二其儘被指置

同四辰閏四月十六日御書院番并御手当扶持其儘、 喇叭役被仰付、 御貝役

之儀ハ御免被成

明治二巳二月廿七日喇叭被免無役組へ被入、 但御足月棒其儘

家督無相違

勝山藤五郎

百石

宝永五子閏正月廿九日父七右衛門跡目無相違被下

勝山藤五郎

廿石四人

享保九辰四月十六日父藤五郎跡目十人扶持被下、 御留守番入

同十九寅九月大番入

明和五子八月十一日御擬作廿石四人扶持ニ御直シ被下、番改坂井勘左衛

勝山七右衛門

廿石四人

安永三午十二月五日父藤五郎跡目無相違被下、 大番入

享和三亥九月廿日御前様御附御広式御用達、 御留主番入

文化二丑十月十八日御番改字貝八郎右衛門跡、 大御番入

同十四丑十二月五日内願二付御役御免

同十五寅ノ二月十三日 (マ、)

勝山七右衛門 新左衛門 七左衛門

廿石四人

文化十五寅四月五日養父七左衛門跡目無相違被下置、 無役御留守番組江

被入候

文政五午十月二日大御番組江被入候

天保十一子九月五日御勘定吟味役被仰付

但是迄被下置候銀三枚其儘被下置、 御留守番組江被入候

同十三寅江戸詰、六月十四日出立

同十四卯閏九月廿三日於御国表御座所御普請宜出来、 右御用掛り出精ニ

付御褒詞

同年十二月廿八日当秋神田橋御住居御立寄、 右御用掛り出精ニ付御褒詞

弘化二巳江戸詰、八月廿五日出立

同四未正月廿九日産物方懸り兼御勝手懸り申談可取扱旨被仰付候

同年十二月晦日御本城橋御繕之節、

出精相勤候二付御褒詞

嘉永元申三月十四日神田橋江御立寄、 御用懸り出精ニ付御褒詞

同二酉正月廿日御台所頭川崎仁右衛門跡被仰付候

同五子閏二月廿九日御代官役坂本平兵衛跡被仰付候

安政四巳二月五日御広式御用達久野又四郎跡被仰付候

勝山等一 藤五郎 等 郎

、略履歴

同日親七右衛門家督如此無相違被下置、(文久元年十一月十一日)切米弐拾石四人扶持 大御番無役組江被入

但無息二而相勤候分別帳記有

同十一月廿九日大御番組江被入

同二戌正月十六日制産方被仰付

同十二月廿八日等一郎与改名

同三亥四月二日制産方御用有之、 長崎表へ出張被仰付

同六月五日勘定雑用方被仰付

同十月三日御勘定吟味役被仰付

同日産物運送掛被仰付

同四子二月十一日御用有之候ニ付長崎表へ被遣候間、 支度出来次第罷越

候様被仰付

人扶持被下置

元治元ト改、十月十三日御勘定吟味役本役被仰付、 役中御足充行五石壱

慶応元丑五月廿五日昨秋征長二付御用向別段致心配相勤候ニ付、

銀壱枚

被下置

同十二月廿八日等一与改名

一寅四月六日御内用有之長崎表へ被遣候処、 格別致心配御用弁相成候

二付、 御足充行之内三石御加增、 都合

切米弐拾三石四人扶持如此被成下

同九月六日産物会所掛り被仰付

同 二卯七月五日当秋京都詰被仰付

同八月七日御足充行其儘会所吟味役被仰付、 御留守番組江被入

同四辰五月廿七日産業方并牧民会計方勘定掛り被仰付

明治与改元、十月十一日御役御免被成御広間御番士勤被仰付、 御留守番

組二其儘被差置、 但等一御足充行之儀ハ以後不被下候事

笠原

笠原安兵衛 安兵衛 平八

拾八石三人

享保二十卯四月十一日於江戸小役人ゟ御取立、新番入、御勝手受込役其

儘

笠原平八郎 平八 弥三郎 休息

廿五石五人

元文元辰十一月五日父安兵衛跡目被下、 新番御勝手見習

延享三寅正月十六日本役

宝暦八寅十一月廿五日大坂御用出精二付、 御留守番入

同十一巳十一月廿九日役義御取上、 御切米三石被召上、 新番組へ被入、

遠慮

明和五子十月廿日江戸御屋敷奉行御留守番入

同六丑十月晦日於江戸御勝手役

同年十一月十一日三石御加増

同十丑正月十五日五石御加增

安永五申十二月十六日二石一人フチ御加増

同年閏五月五日倅弥三郎、 去ル二月加州山中へ入湯之節不調法有之、

父

子共遠慮

十二月十一日御勘定吟味指添、 御勝手役ハ御免

天明四辰正月十六日御勘定吟味役横山十郎兵衛跡

同八申二月廿五日年来出精相勤候二付壱人扶持御加増

笠原弥三郎

廿五石五人

寛政元酉七月廿日養父平八郎休足、家督無相違被下、 大御番入

同二戌二月廿日御広式御用達御留守番入

同年五月廿八日致姫様附御広式御用達

同四子八月廿五日御定之年数相満候二付相身躰末

同六寅三月五日病身ニ付役義御免被成、大御番組へ被入

笠原平八

廿五石五人

寛政六甲寅八月廿日養父弥三郎家督無相違被下置、大御番組へ被入

文化六巳十月廿日御先武具奉行滝沢長兵衛跡

同十二亥七月廿五日用水奉行内藤彦右衛門跡

文政五午十月廿九日御代官坂本平左衛門跡被仰付

同九戌六月十六日用水奉行被仰付、元席へ被成下候

文政十三寅六月五日御武具奉行松尾伝蔵跡

天保三辰七月五日御台所頭被仰付候

同七申三月廿九日表御納戸多部三左衛門跡

天保八酉七月五日御預所御代官役河村三太夫跡被仰付、御留守番組へ被

入候

笠原勝之助

弐拾五石五人

天保九戌閏四月廿五日養父平八家督弐拾五石五人扶持無相違、無役御留

守番組へ被入候

天保十亥九月病死

笠原平八郎 与三次郎

〔略履歴〕

切米弐拾五石五人扶持

天保十亥十一月十一日養父勝之助家督無相違如此被下置、無役御留守番

組へ被入、御趣意ニ付御取立席ニ被仰付候

同十四卯九月六日大御番組へ被入候

嘉永元申十二月廿六日平八郎与名替

嘉永元申十二月廿八日御趣意ニ付、先年御取立席へ御下ケ被成候処、此

度思召を以已前之通相身躰末席へ被仰付候

安政六未十一月十六日来申年太田御陣屋詰被仰付

万延元申七月九日御番御供皆勤ニ付、御紋御帷子被下置候

文久元酉四月廿五日太田御陣屋詰中横浜表へ長々致出張候ニ付、銀壱枚

被下置候

同五月廿日御広敷御用達被仰付、

御留守番組へ被入候

问二戌十二月三日来亥年江戸詰被仰付候

[三亥年三月廿日当亥年江戸詰被仰付置候処、御免被成候

慶応四辰八月四日京都詰被仰付

笠原

笠原浜人 竜哉

[御医師]

明治二巳年三月十六日被召出、医業生被仰付如此被下、内務局当番可相一月俸五口

勤候事

同四月廿九日浜人与改名、内務局当番勤中月俸二口被下置候

勝田

勝田門蔵

拾八石三人

元文六酉正月廿九日御徒目付ゟ御取立、御留守番へ被入、御土蔵番被仰

付

勝田与兵衛 初次五太夫

拾八石三人

同年七月七日大番入

寛保二戌二月五日養父門蔵跡目被下、新番入

宝曆六子十一月廿二日御土蔵番山野市郎兵衛跡、 御留守番入

同十辰五月十一日御留守武具奉行吉倉茂右衛門跡

明和二酉二月廿五日役義御免、大番入、指扣

同三戌九月十六日御定之年数相満候二付相身躰末

安永三午二月五日不埒之義有之二付蟄居、倅鉄五郎へ拾八石三人無相違

被下、大御番入

勝田伝左衛門

拾八石三人

安永三午十二月五日父与兵衛蟄居、家督無相違、大番入、

寛政二戌九月廿日御定年数相満候二付順席二被仰付

同七午十月十六日不宜義有之、 文化三寅六月十六日閉門

新番へ御下被成、

遠慮

勝田与右衛門 貞次郎

拾八石三人

一文化十四丑七月十三日父伝左衛門跡目拾八石三人扶持無相違被下置、 新

番組へ被入

天保十一子十二月十六日往還道奉行来栖庄右衛門跡被仰付

同十五辰十月五日御台所目付被仰付

嘉永二酉正月十六日会所預り古物方記録方兼中野文左衛門跡被仰付、 弘化三午四月廿九日小普請方末松覚兵衛跡被仰付

勘定所御用長屋へ被差越候事

同五子三月十六日荒子頭嶋田七左衛門跡被仰付、 中野文左衛門家屋敷へ

替被下

安政四巳九月廿五日御台所目付被仰付候

万延元申九月十日年寄候二付休息

勝田常之助

、略履歴

切米拾八石三人扶持

同日親与右衛門家督如此無相違被下置、 新番組江被入候旨於江戸表被仰

付筈、 但無息ニ而相勤候分別帳ニ記有

文久元酉四月廿五日太田御陣屋御雇詰被仰付候二付、 銀壱枚被下置、 且.

又右同断二付銀壱枚被下置

元治元子六月廿五日宰相様御上京中格別繁勤太儀ニ思召候、 依之御酒被

御

下置

慶応二寅十一月八日新番組世話役差添被仰付

同日京都詰中別段御扶持方半人扶持被下置

同三卯十月廿五日世話役指添御免被成、新番組二被仰付

同十一月十一日御城代方調役被仰付、役新番組江被入



拾五石三人 金井庄太夫

寛保二戌九月五日御取立、新番並被仰付、 御鷹方

宝暦三酉六月十一日新番入被仰付

金井庄太夫 休

拾八石三人

宝曆四戌六月廿九日父庄太夫跡目被下、御鷹方父之通、新番入

安永五申十二月十六日三石御加増

天明九酉正月十四日家業出精二付大番入

金井伝十郎

拾八石三人

文化二巳九月廿九日父庄太夫内願休息、家督無相違、大御番入、御鷹方

父之通

文政五午七月十四日病死

金井庄太夫 平八郎

拾八石三人

一文政五午九月五日親伝十郎家督拾八石三人扶持無相違被下置、 大御番組

江被入、御鷹方被仰付

天保十二亥十二月四日御定之年数相満候二付相身体末席

嘉永三戌三月十五日御鷹迎出立、同年五月十五日帰着

元治元子二月廿九日、出精相勤候ニ付銀三枚ツ、年々被下置候

同年七月四日京都表へ出立、八月十二日帰着

元治元子七月廿二日今般御趣意二付御鷹被相止候二付、 御番士勤被仰付

候

同年九月 病死

慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件二付、公辺ゟ被下配当金千疋被下置候

金井捨三郎

[御茶道]

切米拾八石三人扶持

元治元子十一月十六日金井庄太夫病中願之通養子二被仰付、 家督如此無

止候二付御番士勤被仰付

相違被下置、大御番組江被入、御鷹方被仰付、

然処御趣意二付御鷹被相

慶応三卯十一月廿六日宰相様御滞京中、為御備支度出来次第上京被仰付



川戸安太夫 他四郎 休息

拾八石三人

明和四亥三月廿九日御鷹匠ゟ御取立、新番並

安永五申十二月十一日年数相満候二付新番入

天明四辰十二月十四日三石御加増、都合十八石三人

川戸他四郎 安太夫

拾八石三人

天明六午十二月十六日父安太夫休息、家督無相違被下、新番入、御鷹方

川戸安太夫

拾八石三人

享和三亥四月廿九日養父他四郎休息、家督無相違、新番入、御鷹方

文政三辰十月十一日内願二付休息

川戸二弥太

拾八石三人

文政三辰十月十一日養父安太夫休息、家督無相違、新番入、御鷹方

川戸又三郎

拾八石三人

天保二卯十一月十六日養父二弥太家督無相違、新番組へ被入、御鷹方被

仰付候

天保十二丑二月廿五日病身二付休息

川戸他四郎

拾八石三人

一天保十二丑二月廿五日家督拾八石三人扶持無相違被下置、御鷹方被仰付

弘化三午八月廿九日御定之年数相満候二付、大御番組へ被入

同四未八月十六日心得違之趣相聞候二付、遠慮被仰付

同年十月廿日不埒之致業心得違之趣二付遠慮被仰付

嘉永六丑十一月廿日先年も御咎被仰付候処、亦復不慎之趣相聞不調法之

事二候、依之遠慮被仰付候、十二月廿五日御免

安政七申閏三月五日病身与ハ乍申心得違相聞、休息之上遠慮

川戸留吉 他四郎養方之弟

拾八石三人

安政七申閏三月五日養父他四郎儀病身与ハ乍申心得違之趣相聞、依之休

息之上遠慮被仰付、家督之儀ハ養子留吉江拾八石三人扶持被下置、大御

一文久二戌十一月七日此度上京御用捨相願候ニ付他番へ被入候番組へ被入、御鷹方被仰付候、右ニ付遠慮伺之上差扣、同十一日御免

一元治元子七月四日京都へ出立

一同年同月廿二日今般御趣意二付御鷹被相止候二付、御番士勤被仰付候

慶応二寅八月廿日病死、御取立三代也

川戸省之介 省之介 敬輔

切米拾八石三人扶持

〔御茶道〕

慶応二寅十月十三日川戸留吉病中養子願、御作法通りも不弁心得違之趣

有之ニ付、初願御取揚無之ニ付而ハ急度御沙汰之次第も可有之処、省之

介義留吉親類とも再願之通も病中養子ニ被仰付、家督如此被下置、

番組へ被入、御鷹方被仰付、 席限身ニ御下ケ之上遠慮被仰付候、 且又御

趣意二付御番士勤被仰付

同三卯十月十日敬輔与改名

同十一月廿六日宰相様御滞京中、 為御備支度出来次第上京被仰付

同十二月十三日省之介与改名



拾八石三人

加納孫太夫

天明二寅正月廿日御徒目付ゟ御取立、御勘定吟味役、御留守番入

同年十月十四日御広式御用達高橋文九郎跡

同六午八月五日御貝役野村要助跡、 御書院番入

文化三寅八月廿五日御定年数相満候ニ付相身躰末

同年十一月廿一日御供方御免被成

同五辰閏六月十六日年来出精二付御紋御上下

文化八未閏二月廿五日年寄休息

加納孫太夫 彦左衛門

拾八石三人

文化八未閏二月廿五日父孫太夫年寄休息、家督十八石三人無相違、 御留

同年三月五日御貝役御書院番入

文政三辰九月廿九日御貝役御免、無役御留主居番入

文政七申正月病死

加納平右衛門

拾八石三人

文政七申三月十一日親孫太夫家督拾八石三人扶持無相違被下置、 無役御

留守番組江被入

大御番入

嘉永元申八月十一日御留守武具奉行山田金五兵衛跡被仰付、 御留守番組

江被入

同年十二月三日河崎次兵衛家屋敷被下置

同三戌十一月廿日御武具御修覆御用出精二付、 金三百疋被下之

同四亥五月十六日御持武具奉行土屋市兵衛跡被仰付、御書院番組へ被入

安政三辰九月五日御番割之節順席被仰付候

同年九月十六日御代官役小野太郎太夫跡被仰付、御留守番組へ被入候

同四巳四月十四日年来炮術出精二付、花葵御紋付御扇子一本被下置候

同五午四月廿五日御役御免被成、 大御番組江被入候

同六未八月十八日病死

万延元申六月廿六日勤中御番三度皆勤ニ付金壱両被下置候段、倅虎八へ

被仰付候

加納虎八

略履歴

切米拾八石三人扶持

同年十月八日親平右衛門家督如斯無相違被下置、(安政六) 大御番無役組へ被入候

文久二戌九月八日大御番無役組被相止候ニ付、大御番組へ被入、御番御

供御免被成

元治元子三月十一日支度出来次第上京被仰付

慶応三卯十月廿九日宰相様御上京ニ付、速見村御小休迄御見送御供被仰

付

同十一月廿六日宰相様御滞京中、為御備支度出来次第上京被仰付

同四辰九月二日京都交代詰被仰付

筧

筧弥三右衛門

拾七石三人 外二三石御足

寛政十午十二月十六日小役人格ゟ御取立被成、役儀其儘新番並ニ被仰付

文化元子十月廿日新番入

同三寅七月廿日出精二付弐石御加増

同六巳二月七日御足擬作三石被下置候

文化七午十一月十一日休息

筧弥三右衛門 由兵衛 直右衛門

拾七石三人扶持

文化七午十一月十一日親弥三右衛門休息、新番入

筧弥三右衛門 平之助

拾七石三人

文政十二丑十二月十六日親弥三右衛門休息、家督無相違被下置、新番組

へ被入

天保十四卯十二月廿二日御供勤

筧弥三右衛門 捨作 直八

拾七石三人

嘉永二酉五月十一日弥三右衛門病中願之通養子被仰付、家督拾七石三人

扶持無相違被下置、新御番組へ被入

安政三辰九月廿七日御供被仰付候

同年十二月廿八日直八与名替

一同五午七月廿七日弥三右衛門と改

同六未九月九日病死

筧恪三郎

一切米拾七石三人扶持

同十月廿九日弥三右衛門病中願之通養子ニ被仰付、家督如此無相違被下

置、新番組末席へ被入候

文久元酉年三月廿五日元席へ被入候

元治元子二月廿五日宰相様御上京中格別繁勤太儀二思召候、依之御酒被

下置候

慶応三卯四月廿五日製造方白焔方被仰付、役新番組江被入

同四辰正月廿九日分析方被仰付

明治二巳二月廿二日奥羽越御人数出張中格別勤労ニ付、廿両被下

[略履歴]

弐拾石三人

宝暦元未十二月十六日父永純跡目、嫡子良栄病身ニ付二男松之助嫡子ニ

狩野永周

寛延四未十月廿四日死

元文四未四月廿九日親興碩跡目無相違被下、席泉碩次、

御絵師

狩野

狩野泉碩

廿石五人

元禄十四巳七月十一日父泉碩為跡目被下、 御絵師

> 廿石三人 狩野永玄

同九卯四月廿二日十五歳罷成二付弐拾石三人被成下

被仰付、

但幼年ニ付五人扶持被下

明和八卯九月十一日養父永周跡目無相違、

御絵師

寬保三亥十二月十四日死

此後代な二出、但奈須与改

狩野

廿石三人

元禄八亥二月廿九日七人扶持被下

正徳三巳十一月廿一日御切米御扶持被下

元文四未三月六日死

廿石三人

狩野永純

狩野興碩

同十亥十一月十六日遠慮伺之上指扣 御絵師被仰付

文政十二己丑十一月廿九日親永玄休息、家督無相違廿石三人扶持被下置

廿石三人 狩野元照

永昌

天保八酉十二月十一日不慎之趣相聞候二付遠慮

狩野玄照 俊吉

切米弐拾石三人扶持

弘化四未正月十六日親元照家督如此無相違被下置、

御絵師被仰付候

御茶道

同日興純と改名

安政五午五月十一日不慎之趣相聞候二付、

遠慮被仰付候

亦復不慎之趣相聞候二付、

閉

同六未七月廿五日昨年も御咎被仰付候処、 同月晦日遠慮御免

門被仰付候

同九月十六日閉門御免

元治元子十二月玄照与名替

慶応元丑六月晦日在京中御扶持方三人扶持被下置

明治二巳二月二日御趣意ニ付無役新番組へ被入、家業之儀も御免被成

同七日桂九郎次郎ト改姓名

一月晦日無役組へ被入候事

片岡

片**岡良躬** 良太夫ョシミ 隠居乳山

拾五石三人 外三石役中御足

一嘉永五子七月十一日出精相勤候二付御取立被成、 新御番格被仰付候、

御取立已前御記録不用綴ニ有之

同六丑年十一月五日今度大炮御製造ニ付右掛り被仰付候

同七寅十月十三日大小炮御製造掛り被仰付置候処、 別段掛り被仰付候ニ

付右掛り御免被成候

安政元寅十二月五日今般大橋御修覆御出来之処、 御用掛り出精ニ付御目

録金弐百疋被下置候

安政三辰十一月十一日別段之訳合を以新御番組江被入、役儀之義ハ御免

被成候、依之役中被下置候御足充行三石之義ハ以後不被下候

文久二戌六月廿五日荒子頭喜多嶋熊蔵跡被仰付

元治元子十二月賊徒一件之節御留守御用二付御手当銀百匁被下

元治二丑四月十一日御借米方岩佐七九郎跡被仰付、 御足充行弐石被下置

候

慶応与改元、 七月廿九日御年限中御延米取扱被相止候二付、 他国御用御

手当米取扱兼被仰付候

同二寅十月廿二日役新番組二被仰付候

同四辰五月十一日今般御趣意二付役中御留守番組江被入候

同年六月五日御足充行其儘御趣意銀御貸方被仰付

同年七月廿二日惣与内割方御趣意銀御貸方兼勤被仰付候

明治卜改元、十月十一日明里御蔵奉行能勢角太夫跡被仰付、 月給六俵

御足充行弐石被廃

同二巳六月廿一日良太夫事良躬ト改

同年八月七日役場締方不念之儀有之二付遠慮被仰付候、 同廿二日御免

同年十一月朔日今般御改革二付、 役儀被免御広間当番勤被仰付

同月四日御蔵方被仰付候事

但

但席土屋旦蔵次

月給米一年分六俵被下候事

同月廿五日今般御改革、 更給禄米三十五俵四斗五升下賜

同月廿七日会計寮少属被仰付候事、 御蔵方也

同三午十月三日是迄居住罷在候持地拝地二被成候事

同年閏十月八日隠居被仰付

同四未二 月 良躬事乳山ト改

同五申二月廿九日和歌山県へ出頭可致事

同年三月十七日同十一等出仕

北川

此前代ま二出、松原ト号

北川主税 松原幾之助 雅之助 北川雅之助

四百五拾石

文化七午十月十一日養父多膳病中願之通養子ニ被仰付、跡目幼少ニ付五

十人扶持被下、寄合席平本藤七郎次

文化九申ノ八月十一日拾五歳罷成候ニ付、新知四百五拾石ニ被成下候

文政二卯二月十一日明里御蔵火消

天保五午年五月廿四日御側役并御用人見習、御小姓御附御小姓表御小姓

支配被仰付候

同九戌四月十二日御用人御奏者兼被仰付候

天保十二丑六月病死

北川亘之介 市郎

四百五拾石

天保十二丑八月廿五日親主税家督四百五拾石無相違被下置、寄合席被仰

付、荒川十右衛門次

嘉永四亥十月十一日明里御蔵火消被仰付候

一同五子十二月廿八日亘之介与名替

一同七寅五月十二日先達而禁裹炎上二付、御使者為御用出立

一安政二卯七月三日御側役并御用人見習被仰付、御小姓表御小姓支配被仰

付候

一安政二卯八月三日御備向調練之儀掛り同様相心得、御用懸り申談候様被

仰付候

同四巳六月廿日三番之大御番頭被仰付、引渡之席被仰付候

万延元申十一月十一日来酉年太田御陣屋詰被仰付

一同二酉二月朔日御都合も有之ニ付支度出来次第ニ而出立被仰付、三月朔

日出立

同年十一月廿三日太田御陣屋御引渡後、芝新網町御陣屋詰被仰付候

同年十二月廿七日今度御持場替二付、御台場頭兼被仰付候

文久二戌四月三日太田御陣屋詰中横浜表江長々御人数出張之節、致心配

侯段、御褒詞之上手助一手綱一被下置侯

一同廿五日帰着

一同年九月八日思召被為在候ニ付、御懇意之御取扱被仰付、日々朝之内御

座所江相詰支配向々厚心を尽し可申談旨、依之都而御用人同様之振合、

毎朝御機嫌伺も御用人一列ニ罷出申上候様、且御尋之儀も可有之御直ニ

も可申上、尤評定所御用部屋江も無案内罷出可申達旨被仰出候

一同年十二月廿五日来年始御式中御用人仮兼帯被仰付候

一同三亥正月十九日役儀其儘御用人御奏者兼被仰付候、且又今般農兵御派

立ニ付、一組稲葉哉五郎へ御附被成候ニ付、其手江属シ御番組役配等之

儀を初、哉五郎并掛り西尾十左衛門へ申談、万端致世話候様被仰付候

同年四月五日今般農兵御派立ニ付、一組狛帯刀へ御附被成候ニ付、私儀

其手江属シ御番組役配等之儀を万端致世話候様被仰付候

一同年五月廿二日御軍帳御変革ニ付掛り被仰付

一同廿五日当亥年御参府之節農兵隊被召連候二付、御番組役配之面々引纏

出立被仰付候、八月十七日出立

一同年七月廿八日右農兵隊召連之義ハ御免被成、御含も有之ニ付自分并御

番組之面々ハ其儘御供被仰付候、八月十七日出立

返シ帰

同年十月十八日半大隊頭被仰付 同年同月廿七日京都ゟ帰 同 同年九月五日御用人兼勤被仰付置候処御免被成、昨年被仰出候已前之通 同年十二月十二日急々上京被仰付、 同三卯正月廿二日御書院番組支配被仰付、 同年十一月三日御書院番頭格御用人御奏者兼被仰付、 慶応元丑七月十日御軍制掛り被仰付、厚申合早々取調候様被仰付候 同年十月十五日長征出立、 同年六月廿五日当春宰相様御職被為蒙候二付御番組引纏早速上京、 元治元子四月十九日稲葉采女方御用多ニ而調練出勤無之候節ハ、 同年十一月十八日御上京御道中御用人兼勤於江戸表被仰付 下 之通相勤候様被仰付 元治元与改ル、二月廿日稲葉采女方御附属之御人数引纏、支度出来次第 同年十二月江戸ゟ御上京御供、子二月京ゟ御帰国御供着 方を初致心配候ニ付御褒詞 上京被仰付候二付、 可相心得旨 之助へ都而申談致世話候様被仰付候 一寅正月廿九日御番組之面々引纏京都詰被仰付、 御取扱向大御番頭同様被仰付候 但中ノ口致往来候様被仰付 御坂札一枚被下置候 御番組并無息之面々引纏同断出立被仰付、 丑二月二日帰 十三日出立之処御模様ニ付途中ゟ引 役席之儀ハ大御番頭上ニ被成 四月八日出立 且又在京中ハ是迄 四月十二 松平貫 北川武雄 米百九拾壱俵四斗三升四合 明治四未十二月五日養父亘之助家督 同年十二月五日病身願隠居 同三午閏十月廿五日非役触支配被仰付 候 同年同月廿五日今般御改革二付、 同年十一月十日今般御改革二付、 同二巳二月十四日行事被仰出候、 明治卜改元、十月廿二日御留守居役其儘御奏者兼勤被仰付、 同年五月廿二日居屋鋪御用二付、 同年閏四月十六日御留守居役被仰付候 同四辰正月七日第一遊擊隊之面々引纏急々出立被仰付、八日出立、 同四未二月十四日触支配被免候事 午閏十月廿五日右名目被廃候、 同年十月廿四日当役被免、 閏四月十四日帰着 是迄之通被仰付 但折々御機嫌伺可罷出候事 実狛敦士弟 御坂札被下候事 御門所御警衛被仰出候事 非役卜唱 寺社町役所江替被下候 更給禄米百九拾壱俵四斗三升四合被下 御門所御警衛被免 月給三十俵 御取扱向ハ (士族)

岸

岸茂左衛門

百石

天和元酉正月廿五日父利兵衛配知五拾石被下、其後依願(マ、)

元禄十五午三月廿 一日御切米十五石三人扶持被下処

宝永六丑九月廿三日新知百石、 同日御鷹匠頭被仰付

岸茂左衛門

百石

享保四亥十二月十五日五人扶持御鷹匠被召出、 御鷹番

同九辰三月十一日父茂左衛門跡知無相違被下、 御鷹方其儘大番入

寬保三亥十二月廿九日御鷹匠頭勝田門左衛門跡

岸十郎右衛門

百石

宝曆四戌九月十六日父茂左衛門跡目、 幼年故御定之通十人御扶持方被下、

御留守番

同六子六月廿二日新知御直し被下、大番入、 御鷹番

天明四辰八月十日御鷹匠頭岸五郎左衛門跡御鷹匠頭、

岸十郎右衛門

百石

天明五巳八月廿五日養父十郎右衛門跡知無相違被下、 大御番入、 御鷹方

岸新六 幔吉 茂左衛門

百石

文化三寅四月十六日養父十郎右衛門跡知無相違、 大御番入、御鷹方

岸友次郎

百石

天保十一子三月十六日養父新六儀病身二付内願之通休息被仰付、

石無相違被下置、 大御番組へ被入、御鷹方被仰付

岸伝之丞

四拾二石六斗九升

元禄十五午六月十一日父惣右衛門跡知無相違被下

享保七寅冬御番割之節席御上ケ被下、是ハ知行ニ候へ共少知故此並之頭

岸五郎左衛門

座

百石

以後表役二被仰付

享保十二未十二月廿一日父伝之丞跡知無相違被下、 大番、 御鷹方

享保十七子御番割之節順席

宝曆十三未五月十一日御鷹匠頭脇田奧右衛門跡、 役料五拾石

安永四未二月十四日知行被相増都合百石

鷹方

岸五郎左衛門 休息

百石

天明四辰八月十日養父五郎左衛門隠居、家督無相違、大番入、御鷹方

岸五郎左衛門 恒五郎

百石

文化四卯五月廿九日父五郎左衛門病身二付内願休息、家督無相違、

番入、御鷹方

文政四巳三月十二日御鷹頭脇田奥右衛門跡被仰付

天保十五辰三月廿九日内願之通隠居被仰付、 年来相勤候二付銀三枚被下

置 脇田奥右衛門家屋敷へ替被下

岸

拾五石三人 岸宗左衛門

明和四亥三月廿九日御鷹匠ゟ御取立、新番並

安永五申十二月十一日年数相満候二付、新番入

岸惣左衛門 大五郎

拾五石三人

天明六午十二月十六日養父宗左衛門休息、 家督無相違被下、新番入、御

岸惣左衛門 善太郎

拾八石三人

文政十亥四月廿日父惣左衛門内願之上休息被仰付、 家督拾五石三人扶持

無相違被下置、新番入被仰付、 川戸六弥太次

天保五午年三月十五日御鷹匠ニ而江戸表へ出立、 同年五月八日御鷹附ニ

而帰着

同十三寅十二月五日出精相勤候二付、

大御番組へ被入

嘉永五子十一月廿五日出精相勤候二付、 御足充行三石被下置候

安政五午二月五日御鷹匠頭御用向御取扱被仰付、 右勤中御書院番組江被

屋敷へ替被下候

入候、依之勤中順席ニ被成下、

家屋敷之義ハ是迄中村金兵衛罷在候御役

万延元申十一月廿日年来出精相勤候二付御足充行三石御加增、 都合拾八

石三人扶持二被成下候



木内甚兵衛

百五拾石 外役料百石

御先代弐百石

貞享三一統半知

元禄六酉八月廿八日御使番被仰付、此節五十石御加増

木内甚兵衛

百五拾石 役料百石

宝永七寅九月廿五日父甚兵衛家督無相違

享保七寅十二月十八日大番筆頭

同十三申六月廿一日御使番役料被下、飯沼官兵衛跡

同十九寅六月六日御先物頭中村八太夫跡

木内栄吉 左源治

廿五石五人

元文六酉二月十八日被召出、 木内甚兵衛跡目断絶被仰付二付、 乍去結城

以来御代々相勤候家柄之事故、 左源次被召出弐拾石三人扶持被下、 苗字

相続、 大番入

寛保二戌六月五日五石二人フチ増被下都合廿五石五人被成下、 表御小姓

同三亥七月廿日中奥

木内三太夫

廿石五人

延享元子七月廿五日養父栄吉跡目、幼年二付七人御扶持方被下、 御留守

番入

同三寅二月十一日御切米弐拾石五人被下、

明和七寅十一月廿五日表御納戸

天明五巳八月廿日御代官荒川三郎太夫跡、 御留守番入

寛政五丑九月朔日御預所御代官横山藤八郎跡

木内金之助 病死

廿石五人

寛政九巳正月十六日父三太夫休息、家督無相違、大番入

木内甚兵衛 外三郎 三太夫

弐拾五石五人

寛政十二申九月十一日兄金之助病中願之通養子被仰付、跡目無相違被下

大御番組へ被入

置

文化十三子閏八月廿九日御番改土多一右衛門跡

文政 一卯二月廿日用水奉行川地権内跡、 御留守番組江被入

同十三寅四月十一日御代官鈴木弥左衛門跡被仰付

天保十一子三月十六日用水奉行平井佐右衛門跡被仰付、 役中為失却銀三

枚ツ、年々被下置

同十三寅十月廿九日出精相勤候二付五石御加增、 都合廿五石五人扶持被

成下候

弘化二巳十月廿九日御勘定吟味役中山仙右衛門跡被仰付、 是迄被下置失

却銀三枚其儘被下置、 役席勝山七右衛門上へ被入

同四未十二月晦日先達而御本城橋御繕之節出精二付御褒詞

御所務方へも指加り相勤候様被仰付候

同三午閏五月廿二日御趣意二付、

嘉永元申江戸詰、 八月十五日出立

同 一酉七月廿二日当秋交代可罷帰処、 勇姫君様御入輿前御用多御手合兼

候二付、 当冬御引移後迄詰延被仰付候

同年十月十九日御上屋敷大奥向御普請御用掛り出精ニ付、 金百疋被下置

外二別段弐百疋被下置候

廿五石五人 木内盛潔 嘉永四亥二月十一日親甚兵衛年寄候二付休息、家督廿五石五人扶持無相 万延与改元、霊岸島御屋敷御建継御普請ニ付御用掛り出精、 同四巳正月十八日御武備御除金掛り被仰付候、 安政三辰九月十六日御勘定吟味役見習被仰付、 同年九月廿五日詰延出精相勤候二付御紋御上下被下置、 同廿二日御勘定吟味役本役被仰付候 同年十二月十一日来申秋迄詰延被仰付候 同五午七月十一日此度桜御門頰当御普請中格別出精二付御褒詞 同五子十二月廿八日甚兵衛与名替 嘉永四亥二月十一日年寄候二付、 同年同日詰中表御納戸掛り被仰付候ニ付、 役兼帯相勤候ニ付金弐百疋被下置、猶又昨年来諸役所向御締り等出精相 段百五十疋被下置候 同七申二月廿六日太田御陣屋御普請御用掛り出精ニ付、 同六未三月四日江戸詰出立 同年十二月十一日今度外国奉行始湊為見分御通行之節、 違被下置、 五百疋被下置候 甚太郎 無役御留守番組江被入 甚兵衛 休息被仰付候 金弐百疋被下置候 御製造掛り之儀ハ御免被 御留守番組へ被入候 且又詰中表納戸 出精ニ付御褒詞 金五百疋別段同 金弐百疋別 〔士族〕 同年五月廿八日御趣意二付役御番組二被仰付候 慶応与改元、 同年十月十二日上京、夫ゟ長征、 同年八月廿七日御作事方改役御普請方改兼帯被仰付 元治元子六月廿四日京都岡崎御屋敷御普請宜出来、 同年十二月廿四日京都表動揺之節為御守衛出張ニ付、朝廷ゟ為御褒美弐 同三亥六月十六日支度出来次第上京被仰付、 同年十二月廿四日京都へ出立、翌亥四月十日帰 同二戌九月十一日制産方吟味役打込勤被仰付候 同年九月廿八日大坂表江出立、 元治二丑四月十一日御勘定吟味役被仰付、御留守番組へ被入候 元治二丑正月二日御用有之ニ付豊後表へ被遣候 同年十一月廿六日滞京中御作事方御用取扱仮兼帯被仰付 日帰 百五十疋被下置候 太儀思召候、 疋被下置候 五月廿五日征長御供、 依之御目録御紋御上下一具銀五枚被下置候 十月廿七日帰着 丑二月十九日帰

同年十一月廿八日大奥向御普請中出精二付、

御紋御小袖被下之

銀壱枚被下置候

同年十二月六日御前様御引移御用掛り出精ニ付、

同年十一月十六日巣鴨御屋敷御普請二付出精、 依之金弐百疋別段同五拾

文久元酉十一月十一日今度大橋御門御普請中出精相勤候二付御褒詞

同十九日出立、子六月十五

同年十月一日先達而京都表不容易形勢之処致心配候二付御

右御用掛り出精相勤

同年同月廿五日在京中役儀二不似合不行状之趣相聞不調法之事二候、 依

之役御免被成大御番組へ被入、遠慮被仰付、七月十六日御免

別段心配二付銀弐枚被下候

同年十月十六日役席之義、 元席へ被入候

同年十一月廿一日出坂、 十二月十四日御含御用有之ニ付大坂ゟ早速長崎

表へ罷越候様被仰付

同二寅四月五日長崎ゟ帰、 同月廿日長崎江出立

同年七月廿五日今度佐々木権六御内用有之、長崎表へ被遣候間申談御用

向取斗候様被仰付

同三卯正月廿四日出精相勤候ニ付勤中御足三人扶持被下置候

同年二月十七日来辰春迄詰越被仰付、 辰五月三日長崎ゟ帰

同四辰五月九日下領支配被仰付、席末ノ番外格ニ被成下、御役料五拾石

但御役料被下置候ニ付是迄被下置候三人ふち之義ハ已後不被下候

被下置候

候

明治二巳二月十五日民政局承事被仰付、 同月十一日滞崎中出精相勤候二付御紋御上下一具被下置候 月給米七十俵、御役料ハ不被下

同年六月廿一日甚兵衛事甚平卜改

同年十一月六日御用有之二付長崎県江早速罷越候様被仰付、 同十日出立

同年十一月廿一日民政局少属被仰付候事

同月廿五日今般御改革、更給禄米五十三俵壱斗四斗三合被下

同三午二月九日長崎ゟ帰

同年四月十九日民政寮権大属被仰付候事、 但収納方

同年六月十五日東京江為御用可罷越旨、 同十九日出立

同月十八日度々他国御用相勤二付、 為失却金五千疋被下候事

同年九月九日武生山崎長衛高木太郎八引纏東京ヨリ帰

同年十二月十二日職務被免候事

同日非役江被入候事

同四辛未八月二日御用有之上京被仰付候事、十月帰

同月十五日京坂出張為失脚金五千疋被下候事

同年十一月十四日任福井県少属、支度出来次第東京詰申付、 廿六日出立、

庶務課

同十二月三日任権大属

同年五月甚平事盛潔

同五申七月十一日帰

同七月十七日租税課 但堤防営繕

木内

木内市郎左衛門

廿石三人

享保三戌六月廿五日御徒目付ゟ御取立、弐石御加増、 用水奉行、 御留守

番入

同十四酉七月十一日御代官芦田八郎左衛門跡

木内与次兵衛

弐拾石三人

延享二丑正月廿九日父一郎左衛門休息、 家督無相違、

宝暦三酉六月十一日相身躰末

安永五申十二月十一日御定之年数相満順席

寛政四子十月廿五日養子与一郎御咎二付閉門

木内市郎左衛門

廿石三人

寛政五丑五月十一日父与次兵衛休息被仰付、家督無相違、大番入

文政元寅年九月四日御番改安本佐次兵衛跡被仰付

同九戌六月十六日御先御武具奉行、秋田又之助跡

文政十三寅三月十六日表御納戸役中村十兵衛跡

天保四巳三月十六日休息

木内与次兵衛 与三郎 四郎右衛門事

廿石三人

一天保四巳三月十六日親市郎左衛門休息被仰付、家督無相違、廿石三人扶

持被下置、無役御留守番組へ被入

同十亥九月廿九日大御番組入

一嘉永七寅五月十六日病身二付内願之通休息被仰付候

木内廉之介 覚次郎 練之助 実狛帯刀家来屋部助左衛門次男 〔士族〕

弐拾石三人

一嘉永七寅五月十六日養父与次兵衛儀病身ニ付内願之通休息被仰付、家督

廿石三人扶持被下置、無役御留守番組へ被入候

一安政六未正月十六日大御番組へ被入候

一万延元申十二月廿八日練之助与改

一文久三亥二月十二日番頭引纏上京、三月廿五日着

一同年八月廿六日早速上京被仰付、同廿八日出立

一元治元子四月宰相様御供ニ而帰

一同年五月十一日在京中不行状之趣相聞急度御叱り、依之伺遠慮、同廿一

日御免

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、依之御酒

被下置候

同年七月四日京都表へ出立、八月廿三日帰

同年十月十四日長征出立、丑正月帰

一同年十二月廉之介卜名替

同二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、二月廿三日帰

慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同三卯三月十日御上京御供出立、直二御警衛詰、七月十九日帰

一同四辰四月三日京都御警衛詰出立、閏四月十五日帰

一同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、巳二月廿二日出張ニ付十三

両被下候、外千五百疋

明治二巳十一月廿五日今般御改革、更給禄米四拾弐俵六升被下

同三午四月廿五日戊辰北越ニ出張各所攻撃勉励ニ付、御賞典之内十石ツ

、二十ケ年令頒授候事

同年六月廿二日第一大隊三番小隊江被入候事

同年十二月八日常備三番隊 年給六俵

同四未十月十三日解隊



木村七右衛門

百石

寛文元丑七月御小姓被召出、三拾石七人扶持被下置

同三卯正月十一日新知二百石被下置

貞享三一統半知百石被下

此後代か二出、但勝山与改



木村源五右衛門

廿五石五人

享保九辰四月五日於江戸御鷹匠ゟ御取立、新番入、御鷹方其儘

同十二未正月十六日思召有之御切米御扶持増被下、廿五石五人フチへ被

成下、前方ハ拾五石三人也

木村与五兵衛

廿五石五人

元文五申八月十六日父源五右衛門休息、家督無相違、新番入、御鷹方

明和元申九月十五日御番割之節御定之年数相満候ニ付、大番五

木村与五兵衛

廿五石五人

安永二閏三月廿日養父与五兵衛跡目無相違被下置、大番入、御鷹方

天明八申十一月十一日御定之年数相満、相身躰末

文化九申御定之年数相満候二付順席

文化十酉三月十一日休息

木村源五右衛門

廿五石五人

文化十酉三月十一日養父与五兵衛内願ニ付休息、家督無相違、大番入、

御鷹方

天保三辰十二月十六日出精相勤候二付、御紋御上下被下置

木村清右衛門 大助事

廿五石五人

一天保十一子三月九日親源五右衛門病死、家督廿五石五人扶持無相違被下

置、大御番組へ被入、御鷹方被仰付

一同十五辰年御鷹匠為御用三月十五日出立、同五月九日帰着

一文久元酉十一月五日出精相勤候ニ付、御紋御上下一具被下置候

一元治元子七月廿二日今般御趣意二付御鷹被相止候二付、御番士勤被仰付

候

同二丑三月廿日内願休息

木村豊吉

[士族]

廿五石五人

安政四巳十一月廿五日御製造方御雇被仰付候

一文久二戌閏八月四日制産方御雇御免被成候

一同年十一月三日当時雷管御仕込御用有之ニ付、当分制産方御雇被仰付候

一同三亥六月廿一日被召出御扶持方三人ふち被下置、制産方見習被仰付

御留守番組江被入候

元治元子十二月賊徒一件出張御手当百匁被下

同二丑三月廿日親清右衛門年寄候二付内願之通休息被仰付、家督弐拾五

石五人扶持無相違被下置、 大御番組へ被入、 御鷹方被仰付候、 然処御趣

意二付御鷹被相止候二付御番士勤被仰付候、 且又家督被下置候二付是迄

被下置候三人扶持之儀者以後不被下候

同廿一日製造方被仰付、 御留守番組へ被入候

慶応与改元、五月廿八日御趣意二付役御番組二被仰付候

同年九月廿八日製造局取調御用有之二付長崎表江罷越候様被仰付、

八日出立

一寅四月十七日舎密術取調之義可申談取斗候様被仰付候

同年十二月二日長崎表ゟ帰

同 一卯二月十一日出精相勤候ニ付年々銀七枚ツ、被下置

同日製作方被仰付

同月十七日吟味役兼帯被仰付

同四辰五月廿五日出精相勤候二付銀御增、 都合年々拾五枚ツ、被下置候

同年七月十七日殿様御供被仰付置候処、 都合二付御先江罷越候様被仰付

早速致出張候様被仰付、 同十九日越後江出立、 十一月十七日帰

明治卜改元、十月廿五日今度御武具局製造局江御附属相成、 現物仕訳方

心配相勤候二付御褒詞

同年十二月十一日製造局吟味役其儘鉱山方兼勤被仰付

同 一巳二月十八日月給十五俵 銀ハ已後不被下候

同月廿二日会征出張為御賞五百疋被下、外二十三両被下候

同年三月廿六日鉱山方被免候

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米五拾三俵壱斗四升三合下賜

> 同廿七日軍務寮少属被仰付候事、 但御改革二付製造局被廃役儀被免候

同三午四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励二付、 御賞典之内十石十ケ

年令頒授候事

同年十月九日今度鋳造二相成大砲之内、一門製式不参届二付伺之上指扣

同十六日被免

同年十二月十二日任准権大属権兼弾薬長 年給四拾壱俵

但軍務寮勤任 製作場事務

同四未六月朔日御改正二付免職

二月

同年八月九日大砲器械方被仰付候事 年給三十六俵

同年十月十三日今般解隊被仰出候二付職務被免事

同年十二月廿八日武庫方、 県下常備小隊へ付属、 権曹長相当之事

同五申三月廿三日武庫方其儘権曹長取扱被廃更二月給七両ツ、被下候事

席十五等次

同年四月十四日今般銃砲取調被仰出候二付、 右取調掛り申付候事

同年九月八日足羽県十五等出仕 租税課土木掛り

但当分兵器還納精勤専務之事



木村太郎兵衛

廿石四人

元禄九子四月養父金八跡目被下

木村藤右衛門

廿石四人 明和七寅閏六月廿日御代官御留守番入 元文二巳二月廿八日父太郎兵衛休息、 家督無相違、

木村藤右衛門

廿石四人

安永六酉三月十六日父藤右衛門休息、家督無相違、大番入

文化元、番改役、子ノ十二月十一日高階勘左衛門跡

同十四丑二月五日御旗本御武具奉行三上孫右衛門跡

木村藤右衛門 弥五作

廿石四人

文政七申十月五日父藤右衛門休息、 家督無相違、 無役御留守番入

同十二、大御番入

天保九戌十二月十六日御番改役平井佐右衛門跡

木村清助 二十郎

廿石四人

一天保十四卯四月廿九日養父藤右衛門家督廿石四人ふち無相違被下置、 無

役御留守番組江被入候

嘉永五子十二月廿八日清助与名替

安政四巳正月六日病死

木村連 亀五郎 邨治

弐拾石四人

安政四巳二月廿八日兄清助病中養子二被仰付、 家督廿石四人フチ被下置

大御番無役組へ被入候

同年四月十四日横山藤八郎稽古所出精之段御沙汰二候

文久二戌閏八月八日御番割二付大御番入

同年十二月廿八日邨治与名替

同三亥八月十七日御参府御供二而出立、 同十二月江戸ゟ御上京御供、 子

二月十三日帰

元治元子三月二日上京、 四月十二日帰

同年十月十五日長征出立、 丑二月二日帰

同年十二月連卜名替

慶応二寅四月八日京都詰出立、十一月廿五日帰

同三卯九月廿日第一級二相進候二付、 花葵御紋御印被下置候

同年十二月十二日急々上京被仰付、十三日出立之処御模様ニ付途中ゟ引

返シ帰

同四辰正月八日又々急々出立上京、閏四月十二日帰

同年六月廿五日会征出立、 十一月十七日帰、 巳二月廿二日出張ニ付十三

両被下候、外二千五百疋

明治二巳三月九日六番遊擊隊後拒被仰付

同年十一月廿五日今般御改革二付、更給禄米四拾五俵壱斗四升四合被下

同三午四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励二付、 御賞典之内十石廿ケ

年令頒授候事

同年五月廿四日第一大隊三番小隊入被仰付候事

同年十二月 常備歩兵隊三番伍長三 年給七俵

(士族

岸田

同四未三月十四日東京詰中第五軍曹被仰付候事

拾五石三人

明和三戌九月五日奥御納戸手伝滝沢喜平太跡

宝暦四戌四月朔日小役人ゟ御取立、新番入、

御小道具方手伝其儘

安永二巳閏三月廿二日御広式添役

同五子七月廿日御納戸手伝御免

同年四月朔日右詰出立

同年十月十三日解隊



木村平三 桑嶋平吉 木村源之助

廿石三人

慶応三卯二月廿五日親又右衛門年寄候二付休息被仰付、

持無相違被下置、 大御番組へ被入候

同年十月廿三日御趣意ニ付御留守番組へ被入候

同年十二月廿八日桑嶋平吉事木村源之助ト改

同四辰五月十一日今般御趣意二付無役組二被仰付

明治二巳六月廿一日源之助事平三ト改

同年八月十四日予備隊被仰付

同年十月廿一日一番遊擊隊江被入候事 但席竹内滝門次

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米四拾弐俵六升被下

同年十二月八日常備二番隊 年給六俵 同三午五月廿四日第一大隊四番小隊入被仰付候事

同四未十月十三日解隊

(士族)

安永四未正月廿日養父藤太夫跡目無相違、

新番入

家督廿石三人扶

天明八申八月五日御駕頭

同九酉正月十四日荒子頭中村利兵衛跡

寛政六寅十月五日年数相満大番組へ被入、右ニ付役義御免

文化七午七月廿日御掃除奉行松山次郎右衛門跡、 御留守番入 岸田善右衛門

拾五石三人

岸田藤太夫 金五郎 善右衛門

拾五石三人

文化九申四月廿日養父善右衛門家督無相違被下置、 御留守番入

同年十月十九日無役御留守番へ被入

同十三子八月大御番入

天保十二丑四月廿九日養子八三郎不埒至極ニ付、 御国追放御侍御削被成

藤太夫儀も兼而締り方不参届遠慮被仰付

天保十四卯五月七日相身躰被仰付候

天保十四卯年十一月八日御先武具奉行田川清助跡被仰付

岸田保人 藤次 藤次右衛門 藤右衛門 ヤスト

弐拾石三人

一弘化二巳十月廿九日親藤太夫年寄候ニ付休息被仰付、家督無相違被下置、

御留守番組へ被入

一嘉永四亥八月十六日御右筆見習被仰付候

一同六丑六月廿日御右筆本役被仰付、御書院番組へ被入、御足充行拾石弐

人扶持被下置候

一安政元寅十二月十六日藤右衛門与改

一安政二卯年江戸御供詰

安政二卯三月十四日御軍制御改正御用掛り、格別骨折相勤ニ付御褒詞

金五百疋被下置候

同三辰正月十五日順席二被成下候

一同五午八月廿二日江戸詰出立

同年九月十四日殿様御一字御拝領可被遊ニ付、取調御用掛り被仰付候

同七申二月廿六日太田御陣屋御普請御用掛り出精ニ付、金弐百疋被下置

候

同年三月十五日御供二而帰着

一文久三亥五月六日当亥御参府御供被仰付、八月十七日出立、同十二月江

戸ゟ御上京御供、子二月御帰国御供帰

一元治元子十月十六日長征出立、同二丑二月朔日帰

一慶応元丑十月八日大坂表へ出立、寅十月八日帰

一同二寅正月廿五日出精相勤候ニ付御足充行之内五石御加増、都合廿石三

人扶持ニ被成下

同三卯十月廿五日御趣意ニ付役御番組へ可被入処、年来相勤候ニ付御書

院番組二其儘被指置候

一同年十一月二日宰相様御上京御供出立、辰三月十七日帰

一明治元辰十月廿二日今般御趣意ニ付御右筆部屋被相止、依之御役御免被

成、且又年来相勤候ニ付御書院番組ニ其儘被指置候、但御足充行之儀ハ

已後不被下候

同月廿三日公務局書記役被仰付、役中御足充行五石弐人ふち被下置候

同二巳二月十五日今度公務局御廃止二付御役御免被成、且又出精相勤候

二付御書院番組二其儘被指置、御広間当番勤被仰付候事、但御足充行已

後不被下候

一同年六月廿一日藤右衛門事保人ト改

一同年九月十七日農民政局庶務方被仰付候事

但引立方

月給米一年分十五俵被下候事

一席荒川平吉次キ

同年十月九日市民政局庶務方被仰付候事、但月給米更ニ十弐俵被下候事

同年十一月廿一日今般御改革二付役義被免候事

但附送り之義ハ追而御指図相待可申事

一同月廿五日今般御改革、更給禄米四拾弐俵六升被下

同三午二月十五日病気ニ付願之通隠居

岸田武 午十七歳

元治元子六月七日太鼓役御雇被仰付七百疋ツ、年々被下候

[士族]

同年十一月十四日御趣意二付太鼓役御免

米四拾弐俵六升

成候

明治三午二月十五日父保人病気ニ付願之通隠居被仰付、家督米四拾弐俵

六升無相違被下、修業隊江被入候事

但席青木博介次

同年六月廿二日第一大隊五番小隊入被仰付候事

同年十二月八日常備一番隊 年給六俵

同四未四月朔日東京詰出立

同年十月十三日解隊之処東京府御用ニ而居残り

喜多嶋

喜多嶋忠太夫

支配之義

拾八石三人

文化九申十二月十一日小役人ゟ御取立、新番格御勝手役其儘、

者是迄之通り御奉行支配、 御礼式等都而以前新番並之通り

文化十酉八月五日御蔵奉行

喜多嶋孫太夫

拾八石四人

天保二卯正月十九日於江戸表御取立被成、 新番格二被成下候

同五午江戸詰被仰付、三月十六日出立

同六未九月十一日出精相勤候ニ付新御番組へ被入候

同八酉五月廿四日御勝手役福田二右衛門御咎被仰付候二付、 入恐伺之上

遠慮被仰付、 同廿八日御用御差支二付御用之外慎之処、六月朔日御免被

> 同九戌十二月六日出精相勤候二付御足充行三石御加増、都合十八石三人 ふちニ被成下候

同十亥九月十六日諦観院様御霊屋御普請御用懸り出精相勤候ニ付御褒詞

同十三寅正月十六日出精相勤候ニ付、 葵御紋御上下被下置候

同年八月三日御趣意有之、大坂御内用向并御札所掛り被仰付候

同十四卯十二月五日御役御免被成、 依之伺之上遠慮被仰付候

弘化四未二月十四日御勝手役

嘉永二酉八月三日出精相勤候二付、 御扶持方壱人ふち御加増、 都合十八

石四人ふちニ被成下候

同三戌三月五日昨年柳御門頗当御普請二付御褒詞

同年六月九日昨年来過分御物入之処、厚致心配御満足二被思召、 此段申

聞候様被仰出候

同四亥二月廿日御時節柄心得違之趣相聞候二付遠慮、 三月五日御免

同年五月十六日年寄候二付休息

喜多嶋熊蔵

〔士族〕

拾八石四人

嘉永四亥五月十六日養父孫太夫儀年寄候二付休息、 家督拾八石四人扶持

無相違被下置、新番組へ被入

同六丑正月廿九日御借米方手伝被仰付候

安政元寅十二月十八日鏞太鼓被仰付候

同三辰正月十六日御借米方松村市兵衛跡被仰付候

同四巳四月十四日年来砲術出精二付、 花葵御紋付御扇子一本被下置候

安政五午四月廿五日御徒目付勤被仰付候

一同六未三月廿二日江戸詰出立、同七申三月十五日御供ニ而帰着

一万延申九月十日荒子頭長文五右衛門跡被仰付候

一文久二戌六月廿五日明里御蔵奉行被仰付

元治元子二月廿五日川除奉行被仰付

同年十二月賊徒一件二付出張、御手当銀三百匁被下置候

慶長元丑四月廿五日倅鉄三郎御咎被仰付候ニ付伺之上遠慮、五月五日御

免

一同二寅十月廿二日役新番組ニ被仰付候

同四辰五月十一日今般御趣意ニ付、役中御留守番組へ被入候

明治卜改元、十二月五日御趣意二付役義御免被成、御留守番組二其儘被

置、御広間当番勤被仰付

一同二巳九月十二日数学寮教授方手伝被仰付候事 席村上悦三次キ

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米四拾弐俵六升六合被下

同年十二月廿七日数学教授方手伝相勤二付金五百疋被下候

一同三午二月四日病院庶務方被仰付候事 但八等

同年七月八日少管務被仰付候事 但医学所病院勤

一同年十月三日是迄居住罷在候屋敷地拝地ニ被成下候

同年十二月十二日学校勤

但分科之儀ハ従前之通

十六等之三等 年給十三俵

同四未六月朔日御改正二付免職

木滑

木滑七郎右衛門

百五拾石

貞享二丑年部屋住ゟ御右筆被召出、五人扶持銀弐拾枚被下

同三寅一統半知之節御扶持被召上、元之通嫡子ニ御返し被成

元禄三午三月十五日御右筆被召出、御切米御扶持被下

享保五子十月廿八日於江戸新知

同十三申五月十一日御右筆部屋請込

同十七子九月十九日五拾石御加増

元文元辰九月十一日御番組御除、番外ニ被仰付

木滑藤太夫 当時青木事

百五拾石

享保十六亥十一月廿三日御右筆被召出廿五石五人扶持被下、御書院番入

元文五申五月十六日養父七郎右衛門隱居、家督百五拾石無相違被下、御

右筆其儘

同年閏七月九日奥御納戸本儀喜左衛門跡

此後代あ二出、但青木与改



養寿

(士族)

七口

明治二巳十月廿五日多年精勤深ク太儀ニ被思召一家御立被成、月俸七口

被下士族ニ被仰付候間、相続之上見込願出候様被仰付候事

同年十一月六日大砲教授方本役被仰付、

但兼被仰付置候義ハ是迄之通

も是迄之通被下置候

別而近来御用便相成候ニ付弐人ふち御増、

都合五人被下置、

失却金之儀

海軍少尉試補大砲方

北村彦輔 同三亥五月十一日公儀御役方御台場見廻等有之節、 同年九月廿三日砲術教授方助、 同年五月十一日砲術調練修行被仰付候 文久元酉四月六日修行中是迄三人扶持被下置候得共、 万延元申七月廿八日先達而臨時横浜出張 同年三月十四日願之通長尾彦輔江相続被仰付 同三午正月廿三日追々老年ニも及ひ難渋之訳柄可有之ニ付、 同二戌四月三日横浜表江臨時致出張候ニ付、 同年十二月廿七日御台場付御陣屋御雇詰被仰付、 儀ハ御免被成候 之様相心得応答致候様被仰付、 候 御附属小道具弾薬等之儀教授方申談取扱候様被仰付候 後不被下候事、将又同日大砲教授方助被仰付、 安政四巳十月十五日修行筋可被仰付儀も有之二付、 為失却月々金百五十疋ツ、被下置候、 ヲ以終身五人口被下候事 長尾彦輔 同月廿八日取調御用も有之ニ付右応答之 彈薬并附属御道具等取調方其儘被仰付、 但是迄修行中被下置候弐人扶持以 二付御褒詞 御褒詞之上金三百疋被下置 且又二ケ所御台場御筒并 御扶持方三人扶持外二 修行中弐人扶持被下 万端御不都合之儀無 以後弐人扶持被下 出格之思召 [士族] 米廿六俵弐斗七升四合 同年 同年五月七日富士山艦士官見習 同月十四日願之通養寿相続被仰付、 同三午三月今度養寿一家相続仕度ニ付当勤御免被成候 同 明治卜改元、九月十八日当分詰延被仰付、 同年五月十一日今般御趣意二付役中役御番組江被入候 同年閏四月三日上京 付 同年四月廿五日遊撃隊へ被召出五人扶持被下置候、 着 同四辰三月十一日今般御趣意ニ付御国表へ罷帰候様被仰付、 慶応元丑六月廿五日定府之向々小銃修行被仰付候間、 元治元子八月十九日先達而六御台場御引渡之節、 業隊江被入候事 同年十月十五日兄庵、 候様被仰付 還日数六十日御暇願之通被仰付、翌十六日出立 々ニ墳墓有之此度取調 候二付五十疋被下置候 一巳二月十七日砲長被仰付、 役新御番組へ被入候 長尾事北村ト改 先祖年回相当ニ付東京下谷延命院へ墓参、 但渡辺藤太次 一集ニ致度、然ル処庵病後爾々不致ニ付為代参往 月給十俵 家督米廿六俵弐斗七升四合被下、 十月廿四日帰 大砲并御道具等磨致し 且又同日大砲方被仰 引立方精々致世話 四月十八日 且又所

修

<

熊谷

熊谷小兵衛

弐百五拾石 外役料百石

貞享三年御減之節御暇被下候処

翌年四卯六月十八日被召出

元禄六酉八月廿八日御先物頭被仰付

熊谷小兵衛

二百五拾石 役料百石

元禄八亥六月晦日御手廻り被召出、御擬作被下

正徳五未五月廿五日養父小兵衛隠居、家督無相違被下、大番入

享保二酉正月廿九日御杉形鑓奉行江川安右衛門跡

同七寅九月十三日御持弓物頭高田孫左衛門跡、屋敷奉行兼

同十四酉六月十一日新番頭松原善左衛門跡

熊谷小兵衛

一百五拾石 役料百石

元文三午七月廿九日父小兵衛隠居、家督無相違、大番入

寬保二戌六月五日大番五番筆頭津田九右衛門跡

3611月7月11日7春日春堂夏泽日才本街里路

延享元子十月廿五日御杉形奉行榊原助右衛門跡

役料百石

同四卯九月六日御側物頭笹川藤内跡

同年九月廿三日御泉水預り

寛延元辰七月廿八日御目付富田平蔵跡

景子工队之前

明和二酉二月廿日御預所元締役席、寺社奉行次席

宝曆十一巳三月四日御奉行西尾十左衛門跡

熊谷五郎兵衛

一百五拾石 役料百石

安永三午七月廿四日父小兵衛隠居、家督無相違、大番

同五申八月廿日御近習番御書院番入

同七戌十一月十九日御小道具方菅沼三十郎跡

天明四辰九月廿四日御目付助、御側物頭江口左十郎跡、御役料百石

熊谷小兵衛

三百石 五拾石

天明五巳二月三日御部屋附御小性被召出、銀十五枚被下置、

ハ廿六枚五人扶持被下

同年十一月十二日於江戸父五郎兵衛跡知無相違被下、

御小性其儘

同八申正月九日御表様御小性

同年二月六日御部屋附御小性

寛政八辰ノ五月廿四日御部屋附御小性頭取

同十二申五月廿五日御小性頭取其儘、格式末ノ番外、小林金兵衛次

文化三寅十一月十二日御小性頭取其儘、御留守武頭次席、前田彦次郎次

五拾石為御役料替り御金年々被下

同五辰閏六月二日御側物頭次席、忍之者預り、奥勤是迄之通り御役料百

石、席吉田茂左衛門次、尤御役料替り之御金ハ以後不被下

同十酉二月七日新番頭次席、御部屋付、御側向頭取、御表様御側廻り御

江戸詰之節

用是迄之通り、 席高田孫左衛門次

同十三子正月十五日於江戸五拾石御加増、 尤以後御役料ハ不被下

同十四丑十一月十四日於江戸御奉行次席、 長谷部小右衛門次

文政九戌六月十六日養子小膳不埒ニ付実方へ御返シ蟄居

文政十亥六月廿三日年来出精相勤候二付、 勤向其儘席定座番外

天保三辰十一月廿八日年来出精相勤二付、 御足高五十石被下置

天保九戌五月十五日御足高五拾石御加増被成下候

同十四卯四月十六日内願之通隠居被仰付、 年来出精相勤候二付、 思召を

以御召御羽織被下、 銀七枚ツ、年々被下置、 折々御機嫌伺可罷出候、 其

節々中、 ノ口致往来候様被仰付候

熊谷弥門 熊之助事

三百五拾石

天保十四卯四月十六日親小兵衛年寄候二付、 内願之通隠居被仰付、

家督

無相違、定座番外被仰付候

弘化三午五月廿二日触頭渥美新右衛門跡被仰付候

安政六未五月十五日病死

熊谷十郎 熊之助 兵衛 実相沢八郎右衛門次男

(士族)

三百五拾石

安政六未七月五日熊谷弥門病中願之通養子二被仰付、

家督三百五拾石無

相違被下置、 定座番外二被仰付候

文久二戌十二月廿八日熊之助与改名

同三亥六月朔日今般農兵御派立二付、 組酒井与三左衛門江御附被成候

間其手江属シ、与三左衛門并掛り西尾十左衛門等江厚申談致世話候様被

仰付

同年十二月廿四日来子年芝御陣屋詰被仰付、 詰中御台場頭并無息致世話

候様被仰付

同四子二月十九日内海御警衛為御台場御預御免被成候二付、 芝御陣屋詰

御免被成候

元治と改元、四月十一日昨年酒井与三左衛門方江農兵一組御附被成候処

今般御軍帳御割替二付御免被成、 稲葉采女方江増御附被成候間、 采女方

江申談是迄之通致世話候様被仰付、采女方在京留守中ハ与三左衛門方江

可申談旨

同年四月十九日稲葉采女方御用多二付、 調練出勤無之節ハ本多源四郎へ

都而申談致世話候樣被仰付候

同年五月十九日芝御陣屋未御引渡無之二付、 右御引渡相済候迄同所詰被

仰付、 詰中御台場頭并無息致世話候様被仰付、 支度出来次第早速致出立

候様被仰付、廿八日出立

同年六月十四日御軍帳御割替二付、農兵二組稲葉采女方江御附被成、 先

達而農兵之義厚申談致世話候様被仰付置候処、 今度酒井与三左衛門方江

農兵一組御附被成候間、 其手江属シ是迄之通相心得候様被仰付候

同年九月十三日御陣屋ゟ帰

同年十二月賊徒一件二付出張、 依之御手当銀壱貫匁被下置候

慶応二寅十月廿六日下馬并三ノ丸南御門所御預ケ被成御警衛向 厚相心

得相勤候様被仰付、依之夜廻且出火之節詰所之儀ハ御免被成候 尚又勤

方之儀ハ御用人申談候様被仰付

同四辰六月会征、 補兵隊差配被仰付

同年八月廿二日右差配御免、且又兼而御供被仰付置候事故、 御出馬之節

ハ被召連筈之旨被仰付

明治卜改元、十二月廿八日兵衛与名替

一巳五月十七日遊撃隊江被入、御門所御警衛、夜廻之儀ハ被免候

同年六月廿日兵衛事十郎ト改

同年十月二日生兵教授方手伝被仰付候事

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米百六十三俵二斗三升五合被下候

同三午五月廿四日第一大隊二番小隊入被仰付候事

同年閏十月七日相続之養弟熊介御咎二付伺之上指扣、 同十四日被免

同年十二月八日常備八番隊押絶、 軍曹ト改 第一 年給十三俵

同四未十月十三日解隊

国枝

国枝小市郎

弐百石 外役料百石

元禄七戌八月十一日父小一郎跡目無相違被下、 但此節迄自分御手廻相勤

同十六未六月四日御先物頭被仰付

正徳五未三月五日御籏奉行被仰付、 山本源左衛門跡

国枝小助

二百石 役料百石

宝永四亥六月廿五日表御小姓被召出

正徳二辰十二月六日中奥御小姓

享保二酉八月廿六日新知百石

同六丑十月十五日御書院番入

同七寅二月廿一日御免、大番入

同十一午三月廿一日養父小一郎隠居、家督無相違被下、自分知上ル

元文元辰五月廿五日筆頭被仰付四番

同三午七月廿九日御使番、 役料百石被下、 今村伝九郎跡

元文四四月廿三日死

国枝小市郎 由尚

二百石

元文四未六月十六日父小助跡無相違、 大番入

延享二丑閏十二月朔日御手廻り

宝曆六子十月五日御使番役料百石、大関次右衛門跡 同三寅七月十一日御徒目付横田藤九郎跡

同十一巳七月廿五日御水主頭土屋十郎右衛門跡

同十三未六月廿二日役義取扱不参届儀有之、御役御取揚大番入、 遠慮

国枝藤三郎

弐百石

明和六丑二月十六日養父小一郎休息、 家督無相違、 大番入

安永三午六月十四日御小性

同五申四月十六日御近習番御書院番入

天明四辰四月廿一日於江戸御裏役

同六午七月廿四日御部屋附奧御納戸役杉田孫 一郎跡 月三日出立

安政五午二月廿日御家流砲術所詰同様被仰付候

弐百石 弐百石 国枝藤平 国枝又兵衛 文政十一子年十二月十六日親又兵衛病身二付内願之通休息被仰付、 天保三辰年江戸詰被仰付、 安政五午正月十六日御書院番組へ被入候 嘉永六丑江戸詰御供二而三月出立、同七寅五月十一日宿割二付帰着 万延元申九月十六日格式末ノ番外被仰付候 同七寅年三月廿三日御殿山へ出張ニ付、 同十一子年九月十六日当春不慎之上不宜儀相聞候二付、 同六未年江戸詰被仰付、 元治元子二月廿日支度出来次第上京被仰付、 同六未三月廿日御腰物数寄方奉行山口新右衛門跡被仰付候 文政十一子十二月病身ニ付内願之通り休足 文化元子十月廿九日父藤三郎跡知無相違、 同十二申八月十一日格式末ノ番外御時宜役 寛政元酉十二月五日御部屋附奥御納戸役 同八申五月廿二日御部屋附御近習番、 同七未三月十四日御形合被相改、万端御省略被成二付役義御免、 無相違被下置、 小市郎 小一 大御番組江被入 郎 熊太郎 五月十三日出立 藤兵衛 九月晦日出立 御書院番入 御下緒壱懸ケ被下置候 滞京中御取次被仰付候、 閉門被仰付 家督 三 国枝小助 同三卯五月廿九日席其儘御使番役、御役料廿五石御増、 同年十一月廿五日依願隱居 同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱 同年十一月廿五日今般御改革、 置候 同年九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、 同年六月廿一日藤兵衛事藤平卜改 明治二巳二月十六日今般御改革二付御役儀御免被成、 置候 同二寅十一月三日今度御軍制御変革之御趣意二付、 下置候 慶応与改元、閏五月廿一日御使番格二被成下、 同二丑三月七日征長御供ゟ罷帰、 同年十月十四日長征出立、 同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、 同年四月十四日中将様御官位御昇進二付、 付 候 被下置候 但二月朔日出張 無役当番御用捨 槌太郎 優待列 同九日帰 丑二月帰 更給禄米百五俵弐斗八升五合被下 無間も敦賀表江出張太儀之段御褒詞 為御供今立五郎太夫指添帰着 御役料之趣を以廿五石被 為御慰労金五十両被下 御広間当番勤被仰付 御広間当番勤被仰 都合五拾石被下 依之御酒 [士族]

同年 元治元子八月廿一日芝御陣屋御番士頭取被仰付、 同三亥十月十三日中将様御上京御供被仰付出立 文久二戌十月六日今度農兵御端立二付、 同年十二月廿七日大砲方頭取被仰付、 文久元酉八月廿日太田御陣屋詰御番士御雇詰被仰付、 同 慶応元丑五月廿八日一番之大砲方被仰付 同年九月十三日御陣屋ゟ帰着 下置候 元治元子六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中骨折相勤候二付、 出立 仰付、 同年五月十九日芝御陣屋未夕御引渡無之二付、 元治元子四月廿三日御供二而帰着 同年十月二日江戸表ゟ帰着 同年十一月廿八日大坂表江出張 第早速致出立候様、 付 申談取扱候様被仰付候 被下置、 趣ニ付金百疋被下置候 一戌四月三日太田御陣屋詰中横浜表江出張ニ付御褒詞 一寅九月十九日帰 尤砲術所世話役之義者是迄之通可相心得旨 詰中御台場無息頭取被仰付御扶持方五人フチ被下置、 支度出来次第出立被仰付、 長征、 同二丑正月晦日帰着 且又恒岡右仲太熊谷熊之助申談候様被仰付、 廿八日出立 且又二ケ所御台場御筒を始教授方 西尾十左衛門申談教授手伝被仰 右引渡相済候迄同所詰被 格別致心配失却も有之 御扶持方五人扶持 支度出来次 銀壱枚被 廿七日 米百五俵弐斗八升五合 同年十一月廿五日父藤平依願隠居被仰付、 同日昨年解隊已来生兵教導向格別致勉励二付金千五百疋被下候事 同年五月廿四日歩兵佐教被仰付候事 同三午四月廿五日戊辰北越出張、 同年十二月十七日役中給禄弐拾俵高二被成下候 同月廿八日歩兵訓導被仰付候事 同年十一月廿七日御改革二付役儀被免 同月廿二日砲術教授方兼被仰付 同年五月十六日生兵教授方被仰付 明治二巳二月廿二日右出張二付三千疋被下、 同年六月廿五日会征出立、 同年五月十一日出精相勤候ニ付役中年々銀拾五枚ツ、被下置候 同年四月廿五日被召出、 同年二月廿一日御国表御都合も有之二付早々罷帰候様被仰付、 慶応四辰正月九日上京 同年十二月廿八日槌太郎事小助ト改 相違被下、 組へ被入候 同年十月廿五日砲術教授方被仰付、 ツ、被下置、大砲方之儀ハ御免被成候 十石令頒授候事 但月給米是迄之通 三等教授更被仰付候事 砲術教授方其儘被仰付五人扶持被下置, 十一月十三日帰 各所戦争抜群尽力二付御賞典之内永世 勤中年々銀三拾五枚ツ、被下置候 家督米百五俵弐斗八升五合無 外ニ十三両 月給十俵

同

二卯三月廿四日砲術所頭取助并軍事方兼被仰付、

是迄之通年々銀拾枚

但歩兵掛り

同廿七帰

役御番

百石

同年十二月八日軍務寮出仕

但予備半隊長勤向

一三等教授歩兵掛り可為従前之通事

同月十二日更二准三等教授兼 年給三拾三俵

但歩兵掛り

同四未十月十三日今般解隊被仰出候二付職務被免候事

同年十二月廿八日軍曹心得勤 分営常備小隊

同五申四月免職

国 枝

国枝直右衛門

二百石

同十九寅六月廿九日休息 (享保) 宝永二酉八月十三日父六太夫家督被下

国枝安右衛門

百石

国枝六太夫

享保十九寅六月廿九日父直右衛門休息、弐百石之内如此被下、大番入、

弥三八江

寛保三亥十二月十日於江戸死

国枝佐三郎

百石

文化元子十二月廿五日父平兵衛跡知無相違、大御番入

文化七午十二月二日御小性坂野亀吉跡被仰付

同九申七月廿二日御小性御免、 大御番入

文政元寅六月廿五日継母不埒之義ニ付遠慮

文政三辰正月病死

国枝小兵衛 三平事

六太夫事

百石

一文政三辰三月十一日養父佐三郎跡知百石無相違被下置、 大御番組へ被入

寬保四子二月十六日養父安右衛門跡知被下、大番入

同二酉十二月十一日御預所御金奉行、御留守番入

明和元申九月十六日与内立合渋谷三五左衛門跡

安永九子九月五日御勘定奉行高田三五左衛門跡

寛政元酉六月十一日御留守作事奉行岡嶋清兵衛跡

国枝平兵衛 死

百石

寛政二戌六月十一日養父六太夫跡知無相違、大御番入

同八辰三月五日御部屋附御近習番、 御書院番入

同十二申十月七日御供頭

享和元酉十一月廿八日奥ノ番鈴木忠左衛門跡

百石 国枝太平 同 嘉永六丑九月五日養父小兵衛家督百石無相違被下置、 天保五午江戸詰被仰付、二月廿六日出立 安政三辰二月廿三日御近習番林忠太夫跡被仰付、 安政元寅十一月廿八日太兵衛与改 嘉永元申十一月五日御勘定拝借奉行御趣意金取扱吉田茂左衛門跡被仰付 弘化四未二月十四日山奉行上坂五右衛門跡被仰付、 同九戌三月十六日無役御留守番世話役筒井仁右衛門跡被仰付候、 天保七申八月五日先達而妻致離縁候処、右妻罷在候内取斗方不参届趣相 同六未十月五日御書物方田辺五太夫跡被仰付候 同九月廿七日帰着 同四巳四月廿五日江戸御供詰出立 同六丑七月十四日病死 同五子十一月十八日大馬印奉行織田半左衛門跡被仰付候 同三戌九月十一日末之番外御時宜役被仰付候 同十三寅二月廿九日道奉行川地又兵衛跡被仰付、 同十亥四月十六日江戸詰出立 同五午七月六日殿様御近習番中将様御用兼被仰付候 留守番組へ被入 聞候二付遠慮 同十三寅江戸詰被仰付、 一卯二月十三日秋田左太夫家屋敷へ替被下候 東吉 太兵衛 四月十六日出立 実伊藤武兵衛養家 御書院番組へ被入候 大御番組へ被入 御留守番組へ被入 大御番組江被入候 無役御 〔士族〕 無息中 国枝東市 同年十一月直二征長御供、 同四子正月五日上京 米六拾俵四斗三升六合 同五申四月廿五日老年二付隠居願、 同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱 同年十二月廿四日今般御改革二付御腰物数寄方被廃候、依之役儀被免候 明治二巳六月廿日太兵衛事太平ト改 同三卯六月十六日家屋敷野村彦太夫家屋敷江替被下候、 同年十月廿六日御腰物数寄方奉行被仰付、 元治元子八月廿八日御上京御供出立、 同三亥五月七日当亥御参府御供被仰付、 同二戌六月十日奧御納戸役田辺五太夫跡被仰付候 文久元酉三月十九日御供ニ而出 同七申閏三月十一日御裏役田辺五太夫跡被仰付候 元治卜改元、六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別骨折相勤候二付、 同年十一月廿五日今般御改革、 慶応二寅二月五日御膳番奥御納戸役兼帯被仰付 銀壱枚被下置候 文久三亥十月十三日中将様御供二而上京、 **ゟ御上京御供、子二月御帰国御供着** 優待列 丑二月三日帰 更給禄米六十俵四斗三升六合被下 体東市へ 家督 夫ゟ長征 八月十七日出立、 御書院番組江被入候 十二月廿二日帰 丑三月帰 但元屋敷也 同十二月江戸 (士族)

一慶応二寅三月十一日二番之補兵隊へ附属被仰付候

同三卯四月五日御趣意二付御免被成候



桑山宗庵

三拾人扶持

先御代六拾人扶持被下処

貞享三年一統之節於江戸半減被仰出

桑山権兵衛

百五拾石 外役料百石

鳥越様へ相勤、御卒去之以後

元禄十二卯三月被仰付、御扶持切米被下

宝永三戌五月十六日御腰物数寄方役被仰付

正徳元卯十一月七日父宗庵隠居、御扶持知行ニ御直被下

同四午十一月五日御側物頭被仰付、下山彦三跡

同五未六月十六日死去

桑山十兵衛

二百石

正徳元卯十一月七日被召出、同氏権兵衛ニ被下来候御扶持切米被下

同五未八月十一日養父権兵衛家督無相違被下

享保七寅三月九日若殿様御腰物方本役被仰付、御書院番入

桑山十兵衛

同廿一辰五月十三日御役御免席御持次

同年十一月廿三日於江戸側物頭平本作野右衛門跡

同十六亥正月廿六日御持弓頭酒井六郎右衛門跡

同十五戌十二月十八日五十石御加増

同十三申五月廿一日御先物頭小林又右衛門跡

同九辰七月十八日於江戸御徒頭、役料被下

同九辰三月十九日御部屋御近習目付并村上宇太夫指合之節代り被仰付

二百石

寛保元酉十二月十六日養父十兵衛跡知無相違被下、大番入

桑山十兵衛

二百石

延享三午三月十六日養父十兵衛跡無相違被下、大番入

桑山十右衛門

弐百石 外役料百石

宝曆九卯二月十六日養父十兵衛跡知無相違、大番入

寛政八辰十月四日御留主物頭浅井弁左衛門跡

享和三亥三月七日御先武頭武田太郎左衛門跡、役料百石被下

桑山十蔵

弐百石

弐百石 弐百石 桑山十蔵 桑山十蔵 天保五午年五月廿五日養父十蔵家督無相違被下置、 同年十月廿五日今度御代替二付御小姓御免被成、 同九戌年江戸詰被仰付、 同八酉年八月五日御小姓本多弥六跡被仰付 同年九月三日出立 文政十三寅八月廿八日御近習番真田源左衛門跡 海福瀬左衛門家屋敷へ替被下候 文政十二己丑年八月十三日養父十蔵隠居、 御取扱二被成下候 文政十二己丑八月十三日年寄候二付隠居被仰付、 文政十亥年七月三日町奉行海福瀬左衛門跡被仰付、 同年十月三日是迄宮北長左衛門組御預ケ 文政二卯年六月十六日御奉行役千本長右衛門跡, 文化十二亥二月四日郡奉行長谷川武右衛門跡、 文化三寅七月廿四日養父十右衛門隠居、 へ替被下 彦助 又吉 十兵衛 二月九日出立、 実皆川 家督無相違、大御番入 同年閏四月廿四日御供二而帰着 家督無相違、 御役料五拾石 御側支配御近習二被指 長谷部小右衛門同様之 御役料都合百石被下置 家屋敷町奉行御役宅 大御番組江被入 大御番入、 (士族) 同日

一弘化元辰年江戸詰、正月 御供ニ而出立、同年五月十一日御供ニ而帰

着

弘化元辰年八月十二日御小姓頭取本多弥六跡被仰付

同二巳年江戸詰被仰付、三月廿一日出立

同四未年江戸詰、三月十九日出立

嘉永元申年六月急御出府、御供二而出立、同年七月御供二而帰着、右二

付十二月七日御褒詞

同二酉年江戸詰被仰付、三月廿三日出立

一嘉永四亥年江戸御供詰

一同四亥八月三日御近習御側勤御役料五拾石被下置、御使番格被仰付候

一同日御側御締役退出後之御用向取扱候様被仰付候、且又御小姓頭取御用

向も申談候様被仰付候

同五子七月十九日御預所郡奉行高畠市郎右衛門跡被仰付、御役人並席郡但部屋之儀ハ是迄之通、右之趣御側御用人へ袖裏ニ而被申渡候

石被仰付候一同六丑九月十六日御広敷御用人見習御水主頭次席被仰付、御役料都合百

奉行上

一嘉永七寅正月八日当年江戸詰被仰付置候処、詰引揚支度出来次第致出府

候様被仰付、同十八日出立

一同年四月十四日此度思召を以大奥向御人減御趣法替被仰出候ニ付、右御

用掛り被仰付候

一同年十一月廿二日御広敷御用人本役被仰付、来卯秋迄詰延被仰付候

一安政二卯五月廿五日御側向頭取被仰付、来辰年迄詰越被仰付、大奥御用

向之儀者是迄之通申談相勤候様被仰付候

九日御小姓被仰付

置

勤方之儀ハ追而可被仰付、

御用筋之儀先是迄之通可申談候、

同月廿

一同年九月七日御国表ゟ被召連候無息之面々同様被仰付、勤中五人ふち被	一同年二月廿二日席其儘御預所元締役高間文四郎跡、且年来出精相勤候ニ
一文久三亥八月十七日御参府之節親同道出立	一同二丑正月十八日大坂表ゟ早駆ニ而帰着、但亥年ゟ京坂之内詰越也
桑山正 松太郎 十蔵倅 明治三午廿四歳 マサシ	
	一元治元子十月十四日当分御目付仮兼帯被仰付、且又於此不容易御事態ニ
一同五申十一月廿五日老年二付願上隠居	召候、依之御目録御召御上下一具被下置候
一同日非役上席被仰付、但軍務寮支配之事	一元治元子五月廿五日宰相様御在京中格別御用多之処、出精相勤御満足思
一同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱	一同四子正月九日京都ニおゐて御奉行役被仰付候
一優待列被仰付	ゟ御上京御供
一同年十一月廿五日今般御改革二付、更給禄米百五俵弐斗八升五合被下候	一同年五月七日当亥御参府御供被仰付、八月十七日出立、同年十二月江戸
一明治二巳六月十六日十兵衛事十蔵ト改	一同三亥二月十日殿様御上京御供ニ而出立、三月六日帰着
一明治二巳二月十六日御改革ニ付御役料被廃候	一同二戌九月廿三日役儀其儘御奉行順席ニ被仰付候
二被指置候	一同年十二月廿日出精相勤候ニ付銀五枚ツ、年々被下置候
一同年五月十一日御趣意ニ付、席御足高御役料其儘御役義御免被成御近習	一文久元酉三月十九日御供ニ而出立
一同年三月十二日席御足高其儘役新番頭、御役料七拾石被下置候	一同七申三月十五日御供ニ而帰着
習二被指置候	一同六未年詰越
一同年二月廿九日御趣意ニ付、席御役料御足高其儘役儀者御免被成、御近	一同年十月十日於江戸表御側向頭取被仰付候
一同四辰正月廿四日今般勅使御国内御通行之節御目付役兼被仰付候	御内用向有之立帰出府被仰付、同月廿日出立
奉行兼勤同様被仰付	一同年七月十七日今度為御使稲垣半之丞八田喜内被指越候ニ付、右御請旁
一同三卯四月六日御預所村々農政之義一際御世話も被成度ニ付、御預所郡	一安政五午六月廿一日江戸表ゟ帰着
置候	元御用之儀も兼帯被仰付候
一慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千弐百疋被下	一同五午正月廿五日席其儘御目付役土屋十郎右衛門跡被仰付候、同日御手
候事	一同四巳四月廿五日江戸御供詰出立
但御足高被下置候二付、是迄年々被下候銀五枚之儀者以後不被下	迄御広敷御用人仮兼帯相勤候様被仰付
付御足高三拾石被下置候	一同三辰七月十七日石原甚十郎近々江戸表へ出立ニ付、近藤左太夫罷帰候

下置候

同年十一月十九日御上京御供於江戸表被仰付、 同十二月御供上京

元治元子四月廿三日宰相様御供ニ而帰着

同年六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中骨折相勤候二付銀壱枚被下置候

同廿六日御含御用有之早速上京被仰付五人ふち被下置、 七月四日出立

九月廿一日帰着

同年十月十五日長征出立、 丑正月廿九日帰

慶応元丑閏五月十八日補兵隊被仰付候

同年十月朔日宰相様御出坂御供ニ而出立、 同三日今庄ゟ御引戻ニ付帰

同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、 公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同年六月廿五日宰相様御登坂御供出立、十月六日御供帰

同三卯九月廿七日御趣意二付補兵隊御免被成候

同年十二月十五日補兵隊被仰付、 今度御上京御供被仰付

同四辰四月廿五日遊擊隊江被召出、五人扶持被下置候

同年九月十日御警衛詰上京、 巳二月六日帰

明治二巳正月四日弐番遊擊隊後拒役被仰付、 役中分隊長次席被仰付、 但

席小栗小次郎次

同三午五月廿四日第一大隊一番小隊入被仰付候事

同年七月十七日松太郎事正卜改

同年十二月八日常備大砲隊伍長照準兼 年給十俵 十弐俵高

同四未十月十三日解隊

同五申十一月廿五日父十蔵老年二付願之上隠居、 家督

給禄米四拾八石壱斗六升五合

久世

久世三五右衛門

百五拾石 外役料百石

於松岡御徒頭、御相続後

享保七寅三月九日於江戸御加増五拾石、 御役料百石被下、

同日御徒頭被

仰付

同九辰八月十六日御役御免、

同十五戌八月五日御手廻被仰付、御書院番入

同十七子九月十九日御供目付被仰付

元文元辰十二月十一日御先物頭被仰付、

加藤所左衛門跡

延享二丑正月廿一日御側物頭波多野文左衛門跡

久世三左衛門 幾三郎

百五拾石 役料百石

宝暦三酉十月廿五日養父三五右衛門隠居、 家督無相違、

大番入

同六子十二月十八日御手廻り御書院番入

同十辰二月十六日御供目付

明 ?和元申十月廿九日役義御免、

同五子七月廿日御次詰、

御書院番入

安永三午八月六日御裏役

同八亥九月廿日御留守物頭、 御鷹方兼帯、数賀山彦右衛門跡

天明四辰八月十日以後表役二被仰付、 勤方是迄之通

九月廿四日御先物頭原平左衛門跡、 御役料百石

久世三左衛門 左京 病死

百五拾石

寛政六寅八月廿八日父三左衛門隠居被仰付、家督無相違、大番入

同年閏十一月廿八日表御小性波々伯部八太夫跡

同九巳十月五日御小性

同十一未御附御用人支配

同十二申二月廿九日御附御不用二付大御番入

同十二申九月廿日中将樣御附御近習番御用人支配

久世三五右衛門 政次郎 死

百五拾石

寛政十二申十二月十八日於江戸久世三左衛門病中願之通養子二被仰付、

跡知無相違被下、大御番入

同十二月廿日中将様御附御近習番被仰付

同十三酉正月十一日中将樣御附御小姓被仰付

同年四月廿八日御近習番

同年九月廿日御近習番御免、大御番入

久世八左衛門 久次郎 八右衛門

百五拾石

享和三亥九月廿日養父三五右衛門病中願之通養子ニ被仰付、跡知無相違

被下置、大番入

文政六未二月廿五日大御番三番筆頭役、奈良助右衛門跡

文政十亥六月廿三日郡奉行奈良助右衛門跡、御役料五十石被下

文政十一子三月十六日郡奉行下領支配被仰付

文政十二丑四月廿日、去ル十四日京町失火之節中仕切御門通行之義ニ付

伺遠慮

同年十月十一日御役御免被成、御使番次席二被仰付

天保二卯二月十五日御留守物頭高江又五郎跡被仰付、御鷹方兼帯、是迄

高江又五郎罷在候御役屋敷替被下

天保六未六月五日御先物頭一柳新九郎跡被仰付、御役料百石被下置、松

原左介家屋敷江替被下

天保八酉五月廿日河合五右衛門家屋敷へ替被下

天保十五辰四月廿日御役御免、大御番組へ被入、但伺之上遠慮

弘化二乙巳ノ十月十六日格式末之番外

嘉永元申ノ九月十六日隠居

久世三五郎 熊吉

百五拾石

一嘉永元申九月十六日親八左衛門家督無相違被下置、大御番組江被入

一同五子十二月廿八日三五郎与名替

一同六丑三月廿日江戸詰出立、同七寅四月廿四日帰着

同七寅三月廿三日御殿山へ出張ニ付御下緒一掛ケ被下置候

一同七寅五月廿五日病死

久世石五郎 万助 実長谷部作内二男

百五拾石

石無相違被下置、大御番組へ被入候一嘉永七寅年七月十六日久世三五郎病中願之通養子ニ被仰付、家督百五拾

安政三辰十二月廿八日石五郎与名替

一同六未四月十一日兼而行状不宜、其上心得違之趣相聞閉門、

免

同五日病身二付内願之通休息

久世久 外土 実長谷部作内三男

百五拾石

〔士族〕

安政六未六月五日養父石五郎病身ニ付内願之通休息被仰付、家督百五拾

石無相違被下置、大御番無役組江被入候

万延元申六月廿一日家屋敷御用ニ付、実家長谷部作内方へ当分同居罷在

候様被仰付候

文久元酉三月廿五日大御番組へ被入候

同年十二月廿三日来戌年芝御陣屋詰被仰付候

同二戌三月廿八日出立

同年十一月十日来亥年江戸詰被仰付候

一同四子正月廿八日御近習番被仰付、御書院番組江被入上京被仰付、二月

九日京都江出立

一元治与改元、四月廿二日是迄大町吉右衛門罷在候家屋敷被下置候

同年八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、丑三月帰

一慶応元丑五月六日御小姓被仰付候

一同三卯三月十日御上京御供出立、四月四日帰

一同年十二月廿八日外土事久ト改

明治元辰十二月十三日殿様御上京御供出立、巳二月六日帰

同二巳十一月七日御家従被仰付候事

但御近習勤

月給米一年分六俵被下候事

六月三日御

同月廿五日今般御改革、更給禄米八十弐俵壱斗弐升壱合被下

同四未四月五日当分年給 十四級 弐拾弐俵壱斗八升弐合四勺

同五申五月晦日御家従被免候事

国沢

国沢幸左衛門

百石

享保六うし九月七日御馬方ゟ御取立、五石御加増、新番入御馬方其まゝ

同十五戌十一月十五日五石弐人扶持御加増被下

同廿卯正月十五日新知被下、相身躰末

元文五申八月十三日大番入

国沢幸左衛門

百石

元文三午八月廿一日御馬方被召出、拾五石三人フチ被下、新番入

延享四卯五月十六日父幸左衛門跡無相違、大番入、相身躰末、自分御切

米上ル

明和元申九月七日御定之年数相満候二付順席

安永元辰六月十一日倅万蔵不埒ニ付蟄居、此節逼塞

万延元申十二月廿八日仲右衛門与改

文久二戌正月病死

安永七戌十二月十一日養父幸左衛門跡知無相違、 大番入、御馬方 百石

国沢助左衛門

病死

国沢幸左衛門 岩太郎 仲右衛門

百石

享和元辛酉四月廿日父助左衛門跡知無相違、 大御番入、御馬方被仰付

文政六未十月廿六日病死

国沢助左衛門 政次

百石

一文政六未十二月十六日家督無相違被下置、 大御番組江被入

同十三寅江戸詰、 四月十二日出立

天保十一子九月十六日其方并養子岩太郎当春不慎二付、 父子共遠慮

同十三寅江戸詰、 三月廿一日出立

嘉永三戌九月廿日御厩別当役伊藤利藤太跡被仰付、 御書院番組江被入

同四亥年江戸御供詰

安政二卯江戸御供詰

国沢仲右衛門 岩太郎

百石

安政三辰九月十六日養父助左衛門儀年寄候二付休息被仰付、 家督百石無

> 国沢政之助 常吉 苗善 実助左衛門実子

[士族]

廿五石五人

文久元酉五月廿四日為馬術修行出府罷在候処、 火元見等相勤候儀ニ付修

行中三人扶持被下置候

同二戌二月十六日養父仲右衛門跡知百石無相違被下置、 大御番組へ被入、

御馬方被仰付候

同年四月三日横浜表江臨時致出張候二付、 御褒詞之上金百疋被下置候

同年十二月廿三日江戸出立

同年十二月廿八日政之助与名替

同三亥三月廿三日御前様御供二而帰着

同年五月十五日江戸表江出立

元治元子二月廿三日御馬御用之儀有之、安西関六南部表江被遣候間同道

罷越、 駒乗立之儀厚致修行候様被仰付候、 同廿九日当年之儀ハ御見合ニ

相成候

同年五月廿六日帰

同年六月廿七日支度出来次第早速上京被仰付、 廿九日出立、 八月廿四日

同年十月十七日早速上京被仰付、

然ル処十一月十六日御都合も有之ニ付

帰着

元治元子十二月賦徒一件二付出張、 御免 御手当銀六百匁被下置候

栗崎

一同二丑三月五日上京

一慶応元丑閏五月十四日御趣意ニ付役御番組へ被入候

一同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同年十一月十九日来春迄詰延被仰付

同三卯正月十二日不念之儀有之二付御叱被成候

同月廿七日今度御趣意二付御馬御繋置被相止候二付、御厩向総而致始末

候上、御口之者共引纏御国表へ罷帰候様被仰付、二月晦日帰

江罷越酒狂之上躍場江出、軽輩之者ト及口論疵ヲ受、加之兼々遊蕩之趣同年十一月十一日在京中御厩之儀ニ付不正之取斗方有之、且又盆中魚店

新番組江御下ケ遠慮被仰付、十二月朔日御免、同日御趣意ニ付役新番組相聞、重々不埒至極ニ付拝知御取揚被成、御充行廿五石五人扶持被下置、

江被入候新番組江御下ケ遠慮被仰付、十二月朔日御免、同日御趣意ニ付役新番組新番組江御下ケ遠慮被仰付、十二月朔日御免、同日御趣意ニ付役新番組

慶応四辰五月十一日今般御趣意二付役中役御番組江被入候

明治二巳正月廿九日御馬役并御厩吟味役兼勤被仰付、且又御趣意ニ付家

業之儀ハ御免被成候

同年三月廿七日御厩吟味役被免候

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米五十三俵壱斗四升三合被下

同月十三日当春御改正後出精相勤二付金拾両被下候事

同三午三月廿日馬術世話役被仰付候事

但八等

学校附属

同四未十月廿四日御改革二付職務被免候事

一同年十二月八日馬術修行、東京へ

同五申五月十三日任少馭者

栗崎道察

弐拾五石五人

貞享三御減少之節養父道喜ハ御暇被下

同年六月十八日於江戸被召出、御

栗崎道的

弐拾五石五人

享保九辰三月十一日父道察跡目無相違被下置

栗崎道意

百石

享保十六亥三月十六日父道的跡目被下

宝暦三酉六月九日奥外科橋本春貞上

明和二酉二月廿日新知百石

栗崎道察

百石

明和七寅十月廿五日父道意跡知無相違被下、表外科

同十一月十一日奥御外科

安永四未十一月五日病身二付奥御免、表外科

栗崎道意

百石

安永五申三月廿日養父道察病身二付休息被仰付、 家督無相違、 表御外科

同九子五月廿七日奥御外科

栗崎道伯

百石

文政七申十月廿九日親道意休息、家督無相違、 表御外科

文政八酉正月廿一日奧御外科被仰付候

天保二卯十二月病死

栗崎良叔

百石

天保三辰二月廿日養父道伯願之通病中養子被仰付、 医業心掛無之ニ付家

督拾人扶持被下、

同七申正月廿日先年家業未熟二付家督拾人扶待被下置候所、 其後医業等

心懸候趣二付被復、 旧知高百石御直シ被下

天保八酉十二月十一日不慎之趣相聞候二付遠慮

〔士族〕

栗崎悦也 道竹事 道伯 甚左衛門

拾五人扶持

一天保十亥正月廿九日養父良叔儀病身二付内願之通休息被仰付、家督十五

人扶持被下置、表御外科被仰付候、遠慮相伺候処指扣被仰付候

嘉永四亥十二月廿日先達而七歳未満之小児令病死候処、其節相達不申不

念二付伺之上遠慮被仰付、 同廿三日御免

同五子十二月十六日種痘致出精候段、 達御聴太儀二思召候段被仰付候

同七寅九月四日奥御外科被仰付候

安政元寅十二月十六日種痘之義格別出精二付御褒詞

安政二卯江戸御見送り

同四巳十二月十六日除痘館当番之外数十度致出精候二付御褒詞

同五午十二月八日種痘日診察日共定出勤二付御褒詞

同六未十二月十六日右当番之外数十度致出勤候二付御褒詞

万延元申十二月十六日右同断

文久元酉十二月十六日右同断

文久二戌十二月十六日鑑定方相勤種痘日診察日共定出勤、 格別致精勤候

二付御帯地一被下置候

同三亥二月十日殿様御上京被遊候二付御供、三月六日帰

同年十二月十一日除痘館当番皆勤其余番外数度出勤、 格別出精相勤候二

付御褒詞

元治元子十二月賊徒一件二付出張、御手当銀三百匁被下置候

元治二丑正月廿九日右同断二付御褒詞

慶応元丑十二月十六日種痘御端立已来引続格別出精二付、 銀五枚被下置

候

同二寅十二月十六日種痘御端立以来引続格別出精相勤候二付、 年々銀五

枚ツ、被下置候

明治二巳二月晦日無役組江被入、家業被免候

同年三月十五日道伯事甚左衛門ト改

同年六月廿日甚左衛門事悦也卜改

同年八月十四日御広間当番勤被仰付

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米四拾九俵九升壱合被下

優待列

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

黒沢

黒沢由太夫

百石

元文六酉二月九日本多縫殿与力ゟ被召出、 拝知百石被下、 大御番入、 相

身躰末

寬保二戌九月死

黒沢万五郎

百石

寬保二戌十一月五日父由太夫跡目無相違被下、大番入、相身躰末

宝暦二申致出奔立帰候二付、 御勘定所長屋へ被入置、追而養子庄蔵方ニ

蟄居

黒沢庄蔵

廿石四人

寬延三午十二月十一日養父万五郎病気ニ付休息、家督無相違被下、 大番

相身躰末

宝暦二申七月五日拝知御取上御切米廿石四人フチ被下、大番其儘

天明五巳十月廿五日又々不埒至極之義ニ付御国立退被仰付

黒沢勘之丞

廿石四人

宝曆十一巳十二月廿八日養父庄蔵休息、家督無相違被下、 大番入

黒沢小十郎

廿石四人

宝曆十三未十一月廿二日養父勘之丞跡目無相違、 大番入、 相身躰末

明和三戌九月十六日御定之年数相満候二付順席

黒沢平左衛門

廿石四人

安永六酉四月十六日養父小十郎跡目無相違、

大番入

享和二戌正月死

黒沢平十郎 藤太郎

廿石四人 外五石一人御足

享和二戌年二月廿五日父平左衛門家督無相違、 大御番入被仰付

文政三辰正月十六日御右筆見習

文政九戌年五月三日御右筆本役被仰付、 御書院番組へ被入、五石壱人扶

持御足充行被下置、 支度次第江戸被仰付

黒沢源左衛門 延次郎事 同三午五月廿四日第一大隊二番小隊入被仰付候事

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米四拾五俵壱斗四升四合被下

黒 沢 正 シ 廿石四人 廿石四人 一天保三辰八月廿日養父平十郎跡目廿石四人扶持無相違被下置、 同四辰四月三日京都御警衛詰出立、閏四月十五日帰 慶応二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候 同年十月十日仁太郎事平十郎与名替 同三亥三月十二日病死 文久元酉五月廿日番改役高階勘左衛門跡被仰付候 万延元申六月廿六日御番御供両度皆勤二付御紋御帷子被下 同九戌四月廿日大御番組入 明治二巳四月九日中納言様御東京二付御供出立、十月十三日帰 同二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張 同年十月十四日長征出立、丑正月帰 元治元子七月四日京都表へ出立、八月廿三日帰着 同二戌十二月十一日御先武具奉行吉池角兵衛跡被仰付候 同年九月八日右同断上京、 同三卯三月十日御上京御供出立、直二御警衛詰、七月十九日帰 文久三亥五月三日親源左衛門家督廿石四人扶持無相違被下置、 守番組へ被入 江被入候 仁太郎 平十郎 十一月十六日帰 大御番組 無役御留 (士族) 弐百石 廿人 **久津見源五左衛門** 弐拾人扶持 久津見第蔵 久津見喜内 同五申五月平十郎事正 同四未十月十三日解隊 同年十二月八日常備二番隊 正徳六申七月五日父記内為跡目被下之 於松岡御水主頭 元禄十三辰父三内家督弐百石無相違、 [久津見]

於松岡被下

宝暦七丑七月廿九日父第蔵跡目無相違、大番入 同九酉正月十四日御近習番毛利又左衛門跡、 同十一未九月十八日御附御用人支配 同十午十月廿八日役席其儘二而役義御免、 寛政六寅二月廿九日奧御納戸役高屋源兵衛跡被仰付 天明七未三月十四日御形合被相改候二付、役義御免、大番入 安永八亥九月廿日御近習番稲生与一郎跡、御書院番入 御近習番勤方 御書院番入

文化四卯正月廿四日隠居 享和二戌年七月四日末ノ番外御時宜役 同十二申二月廿九日御附御不用ニ付大御番入 同三辰十二月廿八日九左衛門与名替 同四巳十月十三日御家流砲術所詰被仰付候

久津見第蔵 鉄之助 喜右衛門

弐拾人扶持

文化四卯正月廿四日父源五左衛門隠居、家督無相違、大御番入

文政七申六月廿一日御近習番鈴木百助跡、 御書院番入

同九戌二月廿四日威徳院様御逝去ニ付御役御免、 大御番入

同十三寅正月廿九日若殿様御附御近習番被仰付、 支度出来次第江戸詰

同四月十一日若殿様御附奧納戸役被仰付候

天保四巳十一月廿九日若殿様御附御膳番奥御納戸兼帯鈴木百助跡被仰付

候

天保六未六月五日超倫院様御逝去二付御役御免、 大御番入

同七申五月廿日御腰物数寄方奉行鈴木甚十郎跡被仰付、御書院番組へ被

同十亥五月廿九日末之番外御時宜役

久津見九門 記十郎 九左衛門

(士族)

百石

一天保十三寅十二月五日親第蔵家督廿人ふち無相違被下置、 大御番組江被

安政二卯三月十六日年来砲術厚相心掛重キ手数ニも相進候ニ付、

精々稽古所江も罷越師匠申談引立候様被仰付候

紋附御扇子被下置

同六未五月十一日制産方見習被仰付、 砲術所世話役之儀ハ御免被成候

万延元申六月廿六日御番御供両度皆勤二付御紋御帷子被下

同年十月廿日制産方被仰付候

文久三亥正月九日制産方御用ニ而大坂表江出立、二月廿九日帰着

同年六月廿日制産方御用二付長崎表江出立、 八月廿九日帰

同年十月三日此度制産方御附属二付郡方吟味役被仰付

元治元子十二月賊徒 一件ニ付出張、 御手当銀三百匁被下置候

同二丑正月廿五日旧冬加州御人数致同道板取宿へ令出張候処、 御番所へ

対シかさつ之及挙動候段心得違之事ニ候、 乍併匆卒中切迫之思込ゟ右始

末二及ひ、且前後致苦心候儀も有之ニ付、 御厚評を以御叱り被成候、 依

之伺之上差扣、 正月晦日御免

慶応与改元、五月廿五日賊徒一 件、 別段骨折候二付銀弐枚被下候

同年九月廿日産物会所吟味役被仰付、 御書院番組江被入、年々銀五枚ツ

被下置候

同 二卯二月廿五日出精相勤候二付、 役儀其儘格式末ノ番外ニ被仰付候

同年五月十日産業掛り被仰付

同年八月廿六日新撰隊教授方并指揮役兼被仰付、 是迄出精相勤且別段之

訳も有之ニ付、 新知百石ニ御直シ被下銀五枚之儀も其儘被下置候

同年十月廿一日席其儘御旗奉行被仰付候

同四辰四月十六日席其儘郡奉行武田三十郎跡御役料五拾石被下置、 御役

人並被仰付、 但御役料被下置候ニ付是迄被下候銀五枚之儀ハ不被下候

慶応四辰閏四月十四日中領郡奉行被仰付

百石

同年五月九日御役名中領支配と被仰付候、 御役人並之儀被相止

明治二巳二月十五日民政局承事被仰付、 月給米七十俵 御役料ハ不被下

候

同年六月廿日九左衛門事九門ト改

同年九月二日屋敷南之方明地願之上御茶園地二被成下拝借被仰付

同年十一月廿一日今般御改革二付当役被免候事、 席鈴木甚十郎次

同日司計局少属被仰付候事

同日造営方被仰付候事、但水利堤防往還道路主務

同月廿五日今般御改革、更給禄米六拾俵四斗三升六合

同月晦日会計寮権大属被仰付候事

同三午正月十三日治水堤防等格別致精勤ニ付金弐千疋被下候事

同年十一月十二日南之方一昨年新規通路ニ相成椽先ヲ見越候ニ付、 拝地

之内西方二而道敷振替願之通被仰付

同年十二月十二日任准権大属 年給四十一俵

但会計寮 治水

同四未六月朔日御改正二付免職

同二日任福井藩准権大属

同廿四日任福井藩権大属 治水方

同年八月九日役儀不似合之筋有之二付免本官、 六十日閉門被仰付候事

久津見

久津見多仲 初小四郎

於松岡

貞享二丑年仙鉄様豊仙院様御小姓ニ被召出、 銀□五枚三人扶持

同四卯廿石五人被成下

元禄六酉御膳番

同八亥十石御加增

宝永五子新知百石御徒頭、 但右各於松岡被仰付、 但三内次男也、三内ハ

本家喜内父

久津見三内

廿三石四人

享保九辰七月廿九日父多仲為跡目幼年二付七人扶持被下、御留守番入

同十三申五月大番入

宝曆四戌三月廿二日御先武具奉行西脇甚五太夫跡

延享三寅七月五日御切米如此被下、御土蔵番土田源五兵衛跡

明和五子十月十一日御持武具奉行養輪多喜右衛門跡、 御書院番入

久津見三内

廿三石四人

天明三卯十一月廿五日父三内跡目無相違、大番入

寛政十二申八月十一日番改役岡嶋九郎右衛門跡被仰付

文化八未三月廿日御代官山田清兵衛跡、 御留守番入

文政二卯二月廿日休息

久津見三内 政次郎

廿三石四人

文政二卯二月廿日父三内休息被仰付、 家督無相違被下置、 無役御留守番

組へ被入候

同七申閏八月廿三日大御番組江被入候

弘化二巳五月十一日御持武具奉行内藤周助跡被仰付、 御書院番組へ被入

候

嘉永二己酉十一月十六日御祈禱奉行大町次左衛門跡被仰付候

同三戌十一月廿日先役中御武具御修覆御用出精相勤候二付、 金百疋被下

同六丑三月十一日年寄候二付休息被仰付候

同五子六月十六日御預所御代官役小堀伝右衛門跡被仰付、

御留守番組

〔士族〕

弐拾三石四人

久津見久弥

与三吉

文内

実飯尾惣太夫次男

嘉永六丑三月十一日年寄候二付休息被仰付、 家督廿三石四人扶持無相違

被下置、 無役御留守組へ被入候

安政三辰九月十六日大御番組へ被入候

元治元子六月廿七日支度出来次第早速上京被仰付、 廿九日出立、 八月廿

四日帰着

同年十二月賊徒一件ニ付出張、 御手当銀 二百匁被下置候

慶応元丑四月廿九日京都詰出立、 翌寅四月十七日帰

同二寅四月廿四日堺町戦争一件二付、 公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

同年十二月文内与名替

同三卯十一月八日京都江出立、辰二月廿九日帰

同四辰三月十六日御留守番組江被入候

同年五月十一日今般御趣意二付無役組二被仰付

明治与改元、十二月廿八日文内事久弥卜改

同二巳八月十四日御広間当番勤被仰付

同年九月二日予備隊江被入候事 但席東新十郎次

同年十月廿一日一番遊擊隊江被入候事 但席杉沢万平次

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米四拾八俵弐斗七升四合被下

同三午五月廿四日第一大隊四番小隊入被仰付候事

同年十二月 予備隊二 二番隊 年給弐俵

同四未四月七日右解隊被仰出候事

久津見

久津見庄蔵

弐拾石四人

元禄四未二月御取立

享保七寅年順席仰付

右此後代ゟひニ出、 但平田与改

右庄蔵於松岡被召出候節、 姓氏も無之ニ付、 久津見三内義ハ家柄ニ候間

上候由、 伝承ル 苗字遣候様被仰付、

三内義苗字之事ハ御請仕、

紋所之義ハ御免被下候様

- 292 **-**

元文二巳二月廿八日養父伝次休息、家督無相違被下、大番入

廿五石五人

栗原文蔵

栗原

栗原作左衛門

拾五石三人

天和元酉十二月五日父作太夫跡知五拾石被下

貞享三寅六月十七日番改役被仰付

元禄九子三月五日願ニ付御切米此通被下

正徳元卯十一月七日玉薬役被仰付

同三巳八月十五日順之座被仰付

同五未六月廿一日玉薬奉行御免、 隆芳院様御代祖父御取立子孫ニ付、

御代席上被下候

栗原作太夫

廿石五人

延享元子五月十六日養父文蔵跡目、幼年ニ付七人扶持被下、御留守番入

宝暦二申正月十六日十五歳罷成ニ付、御擬作如是御直し被下、大番入

栗原彦右衛門 死

廿五石五人

宝曆十四申正月廿九日養父作太夫跡目無相違、

大番入

安永三午八月六日御番改三浦清蔵跡

先

同八亥九月廿日玉薬奉行吉樹多内跡

懸宜ニ付、御切米五石御加増

天明六午十月廿五日代々格別之存を以、

過分之武器相貯彦右衛門義も心

寛政五丑九月朔日御代官御留守番入

同九巳九月廿九日役義御免、 大番入

御書

同十一未三月廿九日玉薬奉行上坂利左衛門跡

栗原伝次

廿五石五人

享保三戌六月廿八日諸芸精出シ寄特二被思召、依之御手廻被召出、

院番入

同九辰十月十一日御駕附松山半左衛門跡被仰付

同十三申九月廿九日父作左衛門休息被仰付、 御擬作只今迄自分被下候通

前々之通、父御擬作上ル、御駕附其儘

同廿卯正月十六日病身ニ付御手廻り御免、 大番入

栗原作太夫 幸吉 作太夫 五郎太夫

廿五石五人

享和三亥九月廿九日親彦右衛門跡目無相違、 大御番入

文化五辰閏六月十一日代々武具格別厚相心懸候二付、 御紋御上下被下置

同十二亥二月五日評定所御用留堀庄八跡

文政 一卯三月十一日御内御右筆堀庄八跡

同十一子二月廿五日御代官松沢平太左衛門跡

天保九戌十二月十六日御預所御代官役高橋一太夫跡

天保十四卯十二月十六日休息

栗原作兵衛 伊三郎事 実小林八郎助弟

廿五石五人

一天保十四卯十二月十六日養父作太夫休息被仰付、 家督廿五石五人ふち無

相違被下置、無役御留守番組江被入候

万延元申四月十九日帰着

安政六未六月十七日横浜御警衛詰被仰付、

出立

同年六月廿六日御番御供皆勤二付御紋御帷子被下

万延元申七月十一日太田御陣屋詰中臨時横浜出張二付御褒詞

同年九月十六日病死

栗原創 パジメ 成六寿 実荒川平吉弟

〔士族〕

廿五石五人

万延元申十一月八日養父作兵衛家督廿五石五人扶持無相違被下置、

大御

番無役組へ被入候

文久二戌九月八日大御番無役組以来被相止候二付大御番組へ被入、 御番

御供御免被成候

同四子二月七日拾七歳二相成候二付、 御番御供相勤候様被仰付候

元治与改元、四月十三日上京、 八月廿二日帰着

元治元子八月廿六日今般長州人京師乱入、堺町御門於御固場所戦争之砌

相働候段達御聴、 御褒詞

同年十二月賊徒一件出張、 御手当三百匁被下置候

慶応元丑十一月廿九日大坂表江出張、夫ゟ神戸江、寅九月十五日帰

同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付公儀ゟ被下配当金千疋、戦功ニ付五

百疋被下置候

同年十二月寿与名替

同三卯十一月廿六日宰相様御滞京中為御備上京被仰付、 同廿九日出立、

辰四月十日帰

同四辰六月廿五日会征出立、 十一月十七日帰、 巳二月廿二日出張ニ付十

三両被下候、外二五百疋

明治二巳七月四日寿事創ト改

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米五十三俵壱斗四升三合被下

同三午四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励ニ付、 御賞典之内十石十ケ

年令頒授候事

同年五月廿四日第一大隊二番小隊入被仰付候事

同年十二月 予備一番隊 年給弐俵

同四未四月七日右解隊被仰出候事

栗田

栗田七郎左衛門

弐拾石五人

元禄三午十二月十八日被召出

栗田七郎左衛門

廿石五人

享保十一午三月廿一日父七郎左衛門休息、 家督無相違 文久二戌十一月廿五日来春殿様御上京被遊候二付、 為御待請出立

同三亥五月廿二日御先武具奉行并弾薬方兼带被仰付

元治元子三月三日上京、 四月十三日帰

同年十月十五日長征出立、 同二月二日帰

栗田市兵衛

初五次右衛門

休息

同十五戌十月廿五日松岡道奉行、

其後御免

廿石五人

慶応元丑閏五月十二日昨年来非常之御用繁相勤候二付、 銀弐枚被下置候

同年十一月十六日御趣意二付役御番組江被入

同二寅七月五日御番両度皆勤二付、 御紋御帷子被下置候

同廿日番改役岡田文太夫跡被仰付、 大御番組へ被入候

同年八月廿五日神戸表江出立、同年九月十五日帰

同年十一月三日御趣意二付役儀御免被成候

同年同月廿五日勤役中御武具御修覆御改正中出精相勤候二付、 金弐百疋

被下置候

跡無相違、大御番入

同三卯十月廿三日御書院番組へ被入候、 御広間番

明治二巳九月廿九日多年精勤之処御藩制御改革二付、 為御慰労弐十五両

被下置候

廿石五人

栗田市兵衛

官吾

栗田八十郎

享和二戌三月廿九日休息

明和五子正月廿五日不宜趣相聞候二付、

御呵遠慮

宝暦十辰七月廿二日父七郎左衛門跡無相違、

廿石五人

享和二戌年三月廿九日養父市兵衛内願ニ付休息、

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米四拾七俵壱斗二升九合被下

優待列

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

同四未二月十四日老年ニ付願之通隠居

栗田八十郎

天保六未三月十六日大御番組入

役御留守番入

文政十三寅十一月十一日養父八十郎跡目廿石五人扶持無相違被下置、

無

廿石五人

一天保十四卯六月廿九日父一兵衛跡目廿石五人ふち無相違被下置、 無役御

留守番組江被入候

万延元申六月廿六日御番御供皆勤二付御紋御帷子被下

米四十七俵壱斗弐升九合

栗田八十八

明治四未二月十四日父八十郎老年二付願之通隠居家督被仰付、 給禄米四

十七俵壱斗弐升九合従前之通被下、非役江被入候事

[士族]

久連松

五人

天明二寅六月十六日多田汲古不埒之儀二付拝知取上蟄居被仰付候処、

先

久連松次左衛門

金十郎

実勝村三太左衛門次男

久連松次助

弐拾石三人

宝永四亥八月廿一日父次左衛門為跡目無相違被下

御留守番入

相続被仰付候、仍之久連松之家名相続被仰付、

汲古年来相勤候ニ付、

格別之思召を以、

久連松伊吉実子二付先汲古家名

是迄之通五人扶持被下、

同年七月廿二日伊吉相続被仰付候席へ被入

同六丑九月晦日御籏本武具奉行被仰付、 父次左衛門吉江二而御取立

久連松茂八

拾七石三人

正徳四午六月廿九日養父次助跡目此通

享保五子十二月十九日御土蔵番被仰付、 中沢門右衛門跡

同七寅冬順席

久連松助三郎

五人扶持

延享二うし九月廿一日親茂八跡目幼年ニ付御扶持方被下、御留守番入

寛延二巳四月十七日九歳ニテ死

久連松伊吉 実多田汲古倅

五人扶持

明和三戌十一月廿八日久連松助三郎名跡御立被下二付、 御留守番組へ被

仰付、五人扶持被下置

久連松此兵衛 将吉 次左衛門

七人

一文化四卯十月廿日養父次左衛門病中願之通養子ニ被仰付、 家督無相違、

御留守番組へ被入

同九申十月十九日御趣意有之、 無役御留守番組へ被入

天保二卯十一月廿五日御貝役被仰付、御書院番組へ被入、役中為御手当

弐人扶持被下置候

弘化四未十月廿九日伺之上遠慮被仰付置候処、 御免

嘉永七寅八月十一日年来出精相勤候二付、 役中為御手当被下候、 御足弐

人扶持御加增、都合七人扶持被成下候

安政三辰九月十一日病死

久連松元作 実一統格金田五郎左衛門嫡男

(士族)

七人扶持

安政三辰十一月三日養父此兵衛家督七人扶持無相違被下置、 大御番無役

組へ被入候

一文久二戌九月八日大御番無役組以来被相止候ニ付大御番組へ被入、御番

御供御免被成候

一元治元子六月廿九日上京、八月廿四日帰着

一同年十二月賊徒一件二付出張、御手当銀三百匁被下置候

一慶応元丑四月廿八日上京、翌寅四月十七日帰

一同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

一同年六月五日在京中不行状之趣相聞不調法之事ニ候、依之遠慮被仰付!

同廿四日御免

一同三卯三月九日御趣意ニ付御留守番組江被入、御番之儀ハ御免被成候

同四辰五月十一日今般御趣意二付無役組二被仰付

一明治二巳八月十四日御広間当番勤被仰付

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米弐拾六俵弐斗七升四合被下、予

有限

同三午正月廿七日小身格別難渋之趣ニ付、御趣法ヲ以土着被仰付候事

但身分支配従前之通

御用筋之儀ハ出張可相勤候事

鳥羽除地之内ニおゐて三百歩御渡被下候事

但十ケ年之間無年貢之事

家并農具壱通り御渡被下候事

メ四月廿九日官料代御下ケ自分家作仕度願之通

同年五月廿三日土着被仰付候ニ付而ハ、三百歩被下候地之内家造作仕候

表通行東側彦左衛門北ノ方明地三百歩之外ニ為家作

三百歩拝借願之通、尤御年貢ハ可仕旨

而ハ雪中難渋ニ付、

同年閏十月廿五日予備隊名目被廃非役卜唱

来栖

来栖半之丞

弐拾石五人

元禄十戌八月御徒ゟ御取立、新番ニ入

宝永四亥五月十五日大番入

来栖半之丞

廿石五人

正徳二辰正月十六日父半之丞跡目無相違

享保三戌六月廿五日番改被仰付

同七寅順席

延享元子十一月病身二付番改御免

探源院様御代父半之丞御取立

来栖半之丞

廿石五人

寛延二巳三月十六日養父半之丞休息、家督無相違、大番入

宝暦十四申五月廿二日番改小林六郎右衛門跡

来栖万四郎

廿石五人

安永七戌十月十六日父半之丞跡目無相違、大番入

来栖宅右衛門 半之丞

廿石五人 外二五石御足

天明六午五月十四日養父万四郎跡目無相違、大番7

寛政六寅九月十六日御右筆高松宗右衛門跡、御足擬作五石被下置、

院番入

文化六巳正月死

来栖庄右衛門 直吉 半之丞

弐拾石五人

文化六巳三月十一日親宅右衛門跡目無相違、大御番入

文政五午六月廿五日弟不埒之儀有之、遠慮

同十二丑四月廿九日不慎之義有之、遠慮

天保八酉ノ五月廿九日上水奉行松尾伝蔵跡

同十亥五月十一日御先武具奉行水野六郎右衛門跡

天保十一子五月十八日往還道奉行被仰付、御留守番組入

同十一子十二月十二日心得違之趣相聞、御役御免、遠慮被仰付、同晦日

御免

同十三寅十月廿九日銀子指引之儀ニ付心得違之趣有之、其上遠方致他行

等之趣不埒至極ニ付、蟄居被仰付、養子弥三郎へ十八石三人扶持被下置、

遠慮被仰付

来栖宅右衛門 弥三郎事 半之丞

拾八石三人

一天保十三寅十月廿九日養父庄右衛門蟄居被仰付、御充行拾八石三人ふち

被下置、無役御留守番組江被入、遠慮被仰付候

嘉永二酉七月十一日養父庄右衛門御不審之儀有之、一家共之内江御預ケ

被成候、依之半之丞遠慮伺指出候処不及其儀、当番出勤之儀者相慎候様

被仰付候

御書

同三戌六月廿九日養父庄右衛門儀侍格被成御削、長々揚り屋江被入候

依之半之丞遠慮伺之通被仰付候

万延元申六月廿六日御供皆勤二付御褒詞

文久二戌三月十一日御広敷御用達被仰付、御留守番組へ被入候

元治元子五月廿日御台所頭水野勘四郎跡被仰付候

一同年十月十六日長征出陣、丑二月八日帰

慶応元丑五月廿八日御趣意二付役御番組江被入候

同二寅十二月宅右衛門与名替

一同四辰五月十一日年寄候二付休息

来栖寬之介 八百吉 半之丞倅

(士族)

拾八石三人

一文久元酉八月廿日太田御陣屋詰御番士御雇詰被仰付、御扶持方五人扶持

被下置、支度出来次第出立被仰付、廿九日出立

一同二戌四月三日太田御陣屋詰中横浜表江出張ニ付御褒詞

一同年十二月十七日中将様御上京御供御用ニ付江戸表江出立之処、御都合

ニ付途中ゟ京都江

一同三亥三月廿五日右御供二而帰着

同年八月五日御参府御供被仰付、詰中御扶持方五人ふち被下置候、八月

十七日出立、同年十二月江戸ゟ御上京御供、子二月十三日帰

一元治元子三月廿九日、一昨戌十二月江戸表江罷出中将様御供ニ而京都表

江可罷越御供ニ而京都江到着之処、失却も有之趣ニ付金壱両為御手当被

下置候

一同年六月廿五日宰相様御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、依之銀壱枚

被下置候

一同年十月十日今度新撰農兵百六拾八人之者共、御国并他国共御用二御遣

被成候ニ付、右差配役被仰付候、調練等之儀も致世話候様被仰付候、

右

差配役中三人扶持被下置候

一同年十二月賊徒一件出張、御手当弐百匁被下

慶応二寅七月廿日郡方吟味役御雇被仰付、右御雇中是迄之通三人扶持被

下置候

同年十二月寛之介与名替

同四辰四月廿五日被召出郡方吟味役被仰付、五人扶持被下置、御留守番

組へ被入候

同年閏四月十一日郡方吟味役其儘往還宿駅方兼被仰付

同年五月十一日親宅右衛門年寄休息被仰付、家督拾八石三人扶持無相違

被下置、郡方吟味役往還宿駅方兼其儘被仰付候

明治二巳二月十七日民政局庶務方卜被仰付 月給米十俵

同年六月十七日民政局庶務方御代官方被仰付 月給米十五俵

同年七月十九日民政局庶務方引立方被仰付候事、但月給米是迄之通

同年十一月廿一日今般御改革二付、役義被免候事

但附送り之義ハ追而御指図相待可申事

同日民政局少属被仰付候事

同年十一月廿五日今般御改革二付、更給禄米三拾九俵四斗三合被下

同三午正月十日往還堤防等格別致精勤候二付金七百疋被下候事

同年十二月十二日権少属心得勤 年給十九俵

但民政寮出仕

同四未六月朔日御改正二付免職

同五申七月十九日第二区戸長申付候事

一同年八月廿八日依病気願第二区戸長差免候事

桑嶋

桑嶋惣右衛門

廿石三人

享保七寅十月十一日養父惣右衛門跡目被下、

新番並、

御馬方

元文二巳閏十一月廿五日五石御加増

同三午八月廿一日新番入

寛延元辰八月廿九日大番入

桑嶋宗右衛門

廿石三人

明和八卯五月八日養父惣右衛門休息、家督無相違、大番入、馬医

同九辰十一月廿九日相身躰末

桑嶋宗兵衛

廿石三人

天明九酉正月十四日養父宗右衛門休息、家督無相違被下、大番入、馬医、

相身躰末

桑嶋又左衛門

廿石三人

寛政七卯五月十一日養父宗兵衛跡目無相違、 大御番入、

同八辰九月三日御定之年数相満候ニ付順 席

同十三酉二月十一日不慎之趣相聞不調法二付遠慮

文化十四丑年十二月五日遠慮被仰付

桑嶋又右衛門 金松 又左衛門 与兵衛

廿石三人

一文政二卯二月十一日養父又左衛門跡目無相違被下置、 大御番組江被入、

馬医被仰付候

弘化元辰江戸詰

嘉永七寅八月十一日家業厚心掛候二付、 御紋御上下一具被下置候

安政五午十一月十六日御書院番組へ被入候

同七申三月廿五日右拝地之儀ハ先年中郷村ニおゐて過分之地面指上、 為

替拝領被仰付候儀も有之、家業之儀ニ付指支之訳も有之ニ付、 松本高地

之内先年御家中馬療治所ニ拝借被仰付候地続高地与、与兵衛拝領地与坪

数同様ニ而御替被下候様相願候処、 右例格二不拘願之通御振替被下候

文久二戌十二月廿八日又右衛門与名替

同三亥二月十日殿様御上京御供、三月六日帰着

同四子正月廿日養子小三郎儀兼而行状不宜、其上不届至極之致業有之二

も兼而取締り方不参届趣相聞遠慮、 二月十一日御免

付侍御削被成、実家粕谷雄蔵方へ御帰シ之上長々蟄居被仰付候、

其方儀

同年十二月賊徒一件、 御留守御用御手当百匁被下

慶応三卯正月十六日御趣意二付馬医御免被成、御広間御番士勤被仰付候

同年二月廿五日年寄候二付休息

草尾

草尾庄助 戸三郎

廿石三人

延享三寅三月廿二日御取立、 新番入、 知高院様御取次、御台所方も只今

迄之通可相勤旨

宝曆六子六月九日三石御加增、 寛延二巳九月六日御台所目付 御台所頭

同十三未十月十五日年来出精二相勤候二付、 御留守番入

安永六酉五月廿八日二石御加增、 都合廿石三人扶持被成下

草尾庄兵衛

廿五石五人

天明元丑六月晦日養父庄助跡目無相違、大番入

同 一寅十月廿五日御広式御用達、 御留守番入

二卯八月廿五日御武具奉行小林与五太夫跡

同五巳九月廿三日御屋敷奉行高橋吉兵衛跡

同 八申十月四日御作事兼帯 暮御手当二両ツ、被下

同年十一月十二日御定之年数相満候ニ付相身躰末

寛政十午五月十二日弐石御加増、 都合廿二石三人扶持ニ被成下

同十二申三月十九日役義出精二付順席

文化四卯八月年来出精相勤候二付、三石弐人扶持御加増被成下、 都合廿

五石五人扶持

同六巳四月廿二日御裏役御書院番入

同八未二月廿日年寄休息

草尾庄兵衛 荒次郎

拾七人扶持

寛政十二申正月十五日御附御小性見習へ被召出、 銀十五枚被下置

同年閏四月朔日中将様御附御小姓本役被仰付

同八月廿二日御合力銀之上三人扶持被下置

文化六巳八月廿一日此度隆徳院様御逝去二付、 御附御小姓御免被成 親

へ御返し被成候

同八未二月廿日父庄兵衛年寄休息、家督無相違、 大御番入

同十酉五月朔日霊岸島御屋敷奉行御武具奉行兼、 御留守番入

文政九戌九月廿七日年来出精二付役儀其儘、 御書院番入

天保二卯五月廿八日御屋敷奉行御作事奉行兼帯西川八左衛門跡被仰付

□□之通御役扶持三人扶持被下置候

天保三辰十二月十一日出精相勤候二付、 役義其儘格式末之番外、 御充行

拾七人扶持ニ御直被下

天保九戌十一月十八日倅徳太郎当分相手被仰付、 一ケ月失却金百疋、 盆

> 同十亥十月十一日御供頭見習、 御使番次席被仰付、 御役料五拾石被下置

候

天保十二丑六月廿日松栄院様御附御広敷御用人助、 御水主頭次席被仰付

御役料都合百五拾石被下置候

草尾一馬 カヅマ 精 郎

[士族]

百石

天保十三寅七月晦日父庄兵衛跡目拾七人扶持無相違被下置、 大御番組へ

被入

同年八月五日御相手被仰付

同十四卯八月十一日御相手御免

同十五辰二月三日御近習番被仰付、 御書院番組へ被入

嘉永元申十二月十五日当夏田安一位様御逝去被遊候段申上、 為御使嶋田

駅迄罷越直ニ折返し御用相勤候ニ付御褒詞

同二酉二月廿五日御裏役順席被仰付

同三戌九月三日奥御納戸役順席被仰付、役席河合五右衛門次

同五子年九月廿三日御屋敷奉行御作事奉行兼帯被仰付、 御役扶持三人扶

持被下置候

同六丑七月朔日此度御人数被指出候節御陣小屋を始急速之取斗、 且数日

之逗留出精相勤候二付、 御目録金弐百疋被下置候

同七寅三月廿三日御殿山へ出張ニ付御下緒壱掛被下置候

安政二卯十二月精 一郎与名替

同四巳閏五月四日近来御用多之処出精相勤候二付、 銀三枚ツ、年々被下

置候

致心配候二付、左之通被下置候	一元治元子六月十一日是迄大道寺七右衛門江御預ケ被置候組御預被成、御
一同月廿五日江戸御聞番役中出精相勤、且又今般江戸御屋敷引払一件格別	同年十一月十二日右御用掛り御免
但在京中拾七人半扶持失却金七拾両ツ、年々被下置候	一同年七月十九日嘉代姫様御縁組御熟談ニ付御用掛り被仰付候
出立	候
一同年閏四月十一日京都御聞番役被仰付、家内共引越被仰付候、五月三日	一同七日先達而御持場替一件御用掛り出精之段、御褒詞之上銀弐枚被下置
一同月廿九日家屋敷中之馬場元於御花畑北ゟ一番新規之家屋敷被下置候	も罷越侯段御褒詞之上銀三枚、別段金五百疋被下置候
一同年四月廿四日帰着	一同年四月三日横浜表江度々御人数致出張候処、右節々致心配且御陣屋江
付	被下置候、是迄被下置候失却金三拾両以後不被下候
一同四辰正月廿五日御趣意ニ付御国表江引越被仰付、然ル処当辰年詰被仰	一同二戌正月十八日御聞番本役被仰付、御使番順席、御役料都合百五拾石
一同年十月廿一日精一郎事一馬卜改	褒詞
徒頭取扱被仰付置候処御免被成候	一文久元酉十二月十六日今般和宮様御下向之節、御道固御用掛出精之段御
一同三卯四月廿九日当分御奉行勤向之儀も致兼帯候様被仰付、且又当分御	相心得其余臨時之儀御指支無之様可取斗旨被仰付候
一同日当分御武具支配仮并御腰物数寄方奉行仮御徒頭取扱被仰付	将様御住居被為在候ニ付御目付見廻り等被仰付置候得共、尚又御締り方
但物書役組用人之儀者附属被仰付	一同年八月廿五日御用弁之儀ニ付当分霊岸島御屋敷へ引越被仰付、且又中
一同日今般詰合御人減相成候ニ付、当分御目付役取扱御用向兼勤被仰付	被下置、御扶持方都合十人扶持并失却金三十両ツ、被下置候
一同日出精相勤候ニ付御先物頭次席ニ被仰付	一同年七月四日御聞番見習被仰付、格式末ノ番外ニ被成下、御役料五拾石
一同年十二月七日御近火之節骨折太儀之段御褒詞	別段三百疋被下置候
ハ相心得候様被仰付	一万延与改元、六月廿四日霊岸島御屋敷御建継御普請出精ニ付、金三百疋
一同二寅七月八日青山小三郎出立後、御奉行御用向臨時指支之義も有之節	銀三枚、別段金五百疋被下置候
付候	一同七申二月廿六日太田御陣屋御普請御用掛り出精ニ付、御召御上下一具
一慶応ト改元、五月十五日清心院様臨時御用等之節ハ相心得取扱候様被仰	下候
者兼相勤候様被仰付	一同六未三月廿五日新知百石被下置候、是迄年々被下置候銀三枚以後不被
一同二丑二月廿五日来ル四月日光御神忌ニ付副使被仰付、且又宰相様御使	三百疋被下置候
預所掛り被仰付候	一同五丑十二月廿四日霊岸島御屋敷御建継御普請出精ニ付、金五百疋別段

御聞番役二付、御紋御上下一具銀十五枚

引払一件ニ付、御三所物御手許ゟ御召御給一

一同年六月二日御聞番役其儘御勤役被仰付、御用人勤向之儀も相心得、且

御右筆部屋向御用之儀取扱候様被仰付候

一明治卜改元、九月廿二日年々七拾両ツ、被下候処、今般惣与内割替御手

同八日御国江着

当相增候二付已後不被下候

巳二月朔日御用有之二付御国表へ被遣、三月中旬迄致東上候様被仰付

一同二巳二月十八日月給米七拾俵被下候、但御役料ハ已後不被下候

同月晦日東都江出立、十月二日帰

一同年十月廿四日行事試補兼公用人被仰付候事

但等級月給当分是迄之通

一同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米六拾俵四斗三升六合下賜

一同月廿八日役儀被免候事

同月勤功有之ニ付為慰労金弐拾五両ツ、被下候事

同月廿九日是迄之勤功ヲ以優待之列ニ被仰付候事

同三午二月廿八日御家従被仰付候事

但公用人勤

同年四月七日東京江出立

一同年八月十五日公務局被止候二付帰藩被仰付候事、九月七日帰

一同月十七日毎々東北往来失費不少、仍而金廿五円被下候事

一同年九月十日御家従公用人被免、優待列へ被入候事

一同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

一同日非役上席、但軍務寮支配之事



御取立已前之儀ハ御記録不用認ニ有之

久能佐右衛門

拾五石三人

嘉永二酉十二月廿六日出精相勤候二付、新番格二被成下候

同四亥四月九日今般神田橋御住居江両御丸様御立寄二付御褒詞

一同五子正月十日御台所定夫小遣多四郎与申者火之元不念之儀有之、遠慮

伺之上差扣、同十二日右同趣之処、昨十一日御具足之餅頂戴罷出候ニ付、

伺之上遠慮、同廿一日御免

一同七寅年三月廿三日御殿山へ出張ニ付、御下緒壱掛ケ被下置候、且又兵

糧方格別相働候ニ付金弐朱被下置候

一安政五午正月十五日出精相勤候ニ付、新番組へ被入候

一万延元申十一月廿六日当分霊岸島御屋敷御用向之儀も取扱候様被仰付候

文久三亥三月廿三日御前様御供ニ而御国へ着、廿六日折返シ出立

一元治元子五月七日家内諸共江戸ゟ引越着

一同年六月十三日先年御趣意ニ付御料理方其儘御台所目付同頭兼帯被仰付

置候処、此表江引越被仰付候ニ付、御台所目付同頭兼帯之義ハ御免被成

候

一同年八月九日於御舟町新規出来之家屋敷被下置候

同年十二月賊徒一件之節、御留守御用二付御手当百匁被下

同二丑正月十六日出精相勤候二付、御足充行弐石被下置候

慶応と改元、四月廿日御年男村井喜左衛門跡被仰付

但当分塩辛役仮兼相勤可申事

· 是注 同年十月晦日御年男被仰付候二付、先例之通御紋御上下御紋木綿御綿入 同年十月晦日御年男被仰付候二付、先例之通御紋御上下御紋木綿御綿入

被下置候

一同二寅十月十三日年寄候二付休息

一同年十一月廿日勤中年来出精相勤候二付金弐百疋被下置候

久能佐嘉衛 佐太郎

文久二戌十二月廿三日出精相勤候ニ付御扶持方弐人扶持被下置候

但是迄被下置候失却金之儀ハ其儘被下置、月々被下置候御雇金之

儀ハ以後不被下候

一同廿四日来春中将様御船ニ而御上京被仰出候ニ付、陸通り御先江出立

同三亥三月廿五日右御供二付御国江罷越

元治元子五月七日引越着

一同年十二月賊徒一件出張、御手当銀弐百匁被下

同二丑三月朔日御料理方定御雇被仰付置候処、御用薄二付右御雇御免被

成、勤中被下置候分以後不被下候

一慶応二寅十月十三日親佐右衛門年寄候ニ付休息被仰付、家督十五石三人

扶持無相違被下置、新番組江被入、御料理方被仰付

一同年十月廿一日役新番組二被仰付候

一同三卯二月廿五日御趣意ニ付御料理方御免被成、新番組江被入候

一同年十月十八日第二遊擊隊被仰付

一同年十二月十二日急々上京被仰付、十三日出

一同四辰三月十八日当分御料理方御雇被仰付、右御雇中役新番組へ被入候

同年五月十一日今般御趣意二付役中役御番組江被入候

一同年七月六日京ゟ帰

一明治ト改元、十二月四日上京、巳三月十一日京ゟ東京江出立之処御呼返

ニ付帰着

同月十八日御料理方被仰付、御膳所取締也

同二巳十一月五日東京江出立

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾五俵四斗五升被下

[士族]

同三午四月廿八日従東京帰

同四未四月五日年給十四俵 但在五俵也 十四級:

一同年五月八日御家従被免候事

同五申五月名替佐太郎事佐嘉衛

久保

久保一郎右衛門

拾八石三人 外御足七石弐人

一天保二卯二月廿五日出精相勤候ニ付御取立、新御番格被仰付

一同九戌十二月十六日出精相勤候ニ付、新御番組へ被入

同十二丑十月廿日御右筆共御用多之節ハ右認方相勤候様被仰付、御帳付

勤方之儀者御免被成候段被仰付

一同十五辰六月十六日御右筆見習被仰付

一弘化四未正月十六日大御番組へ被入

嘉永二酉九月十六日年来出精相勤候二付、御充行三石御加増、都合拾八

石三人扶持被成下、御家譜方御右筆見習被仰付、但勤方本役同様相勤可

申事

同四亥三月十七日御世譜書継御用出精相勤候二付太儀二思召候、 依之御

同五子七月廿日御世譜方御右筆本役被仰付、 目録銀弐枚被下置候 御書院番組へ被入、

行七石弐人扶持被下置候

安政二卯七月三日年寄候二付休息被仰付候

郎右衛門

久保矗 三吉

拾八石三人

一安政二卯七月三日親一郎右衛門儀年寄候ニ付休息被仰付、家督拾八石三

[士族]

同五午三月廿五日大御番組へ被入候

人フチ無相違被下置、

大御番無役組被入候

万延元申十二月廿八日一郎右衛門与改

文久元酉三月十一日御右筆見習被仰付候

同 一戌十一月廿六日来春殿様御上京被遊候二付為御待請出立

同三亥五月廿八日御右筆本役被仰付、 御書院番組江被入候、 依之御足充

行七石弐人ふち被下置候

同年十二月十六日江戸表江出立

元治元子九月二日於御国表御人数御繰合之趣有之二付、 支度出来次第致

出立候様被仰付、 同十八日帰

同年十二月賊徒一件二付出張、 御手当銀三百匁被下置候

慶応三卯二月廿日江戸詰出立

同年八月五日江戸表御人減二付勝手次第御国表へ罷帰候様被仰付、

二日帰

同年十月廿五日御趣意ニ付役儀其儘役御番組へ被入候

同四辰六月六日上京

明治卜改元、十月廿二日御広敷御用達被仰付、 御留守番組江被入候

但是迄被下置候御足充行之儀ハ已後不被下候

御足充

同 一巳二月十五日御役名御裏庶務方執事ト被仰付

同年六月廿日一郎右衛門事矗卜改

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾九俵四斗三合被下

同三午正月十三日今般御改革二付、役義被免候

同日御家従被仰付候事 但御裏庶務執事勤

同年四月十九日今度野田戸十郎土着ニ付、家作相対ヲ以譲受同人屋敷御

茶園地二被成下、相当之地子上納二而拝借願之通被仰付候

同年十月三日是迄居住罷在候屋敷地之内二而百八十弐坪拝地被下候

同四未二月廿八日今般御改正二付御家従被免候事

久保

久保長蔵 休息

拾五石三人

寛政六寅十月十六日小役人御蔵奉行ゟ御取立被成、 新番並、御荒子頭岸

田善右衛門跡

久保又兵衛 為三郎

拾五石三人

九月

寛政十二申十月五日親長蔵家督無相違、 新番並二被指置

文化元子八月廿九日年数相満候二付、

拾五石三人 久保為三郎 拾五石三人 久保弥右衛門 一安政五午八月廿九日親弥右衛門病身二付内願之通休息、家督拾五石三人 一天保八酉六月十六日親又兵衛家督拾五石三人扶持無相違被下置、 文久元酉三月廿五日元席へ被入候 弘化三午九月十六日御供勤被仰付 同年六月十六日拝領家屋敷御用二付、 同五午八月廿九日病身二付内願之通休息 安政三辰十二月廿八日弥右衛門と名替 嘉永七寅十一月廿九日筒井小太郎稽古納之節菅沼主水宅へ罷越候始末、 同二戌五月十三日家屋敷御用二付、 扶持無相違被下置、 様之義無之様番頭へ移りを以被仰付候 組へ被入 天保八酉十一月十六日病死 文政十二丑四月廿九日倅源七不埒至極之義、 酒狂とハ乍申不宜致業ニ候得共、此度之義ハ御沙汰不被及候間、以来右 但新御番組末席 又兵衛義伺之上遠慮 新御番組へ被入 仲太夫 当分親類共之内へ同居罷在候様被仰 当分親類共同居罷在候様被仰付置 親又兵衛内達二付御国立退 新御番 **久保素直** スナヲ 二日帰 同三午四月廿五日戊辰北越出張各所攻撃勉励二付、 明治二巳七月 同年六月廿五日会征出立、十一月十七日帰、巳二月廿二日出張ニ付十三 同年四月廿五日遊撃隊へ被入候 同四辰三月六日右御附人御免被成、 出立 同年十二月廿六日支度出来次第出立、 同廿五日新番組二被仰付 同年十月十八日第二遊擊隊ト被仰付候 同三卯四月四日御上京御供、 慶応二寅十一月十二日京都詰出立 同二丑正月廿五日上京、 同年十二月賊徒一件二付出張、御手当銀三百匁被下置候 同年十月十六日京詰出立、 御酒被下置候 元治元子六月廿五日昨冬以来宰相様御上京中格別繁勤太儀思召候、 同年十月十三日中将様御供ニ而上京、子四月廿三日同断帰 同三亥八月六日遠慮伺差扣、 年令頒授候事 両被下候、 候処、御不用之趣ニ付願之上亦復拝領被仰付候 竹内虎太郎 外ニ五百疋 病死 久保虎太郎 五月七日帰 十二月帰 振替り帰 九日御免 勝手次第罷帰候様被仰付、 実竹内滝門弟 山階宮様御附人被仰付、 御賞典之内十石十ケ 辰三月十 正月二日 (士族) 依之

拾五石三口

一文久三亥三月二日太鼓役御雇被仰付、金七百疋ツ、年々被下置候

一同月十一日大谷丹下手二被仰付

一元治元子 上京、八月廿三日帰

一同年十一月十四日御趣意ニ付太鼓役御免

一慶応元丑十一月廿九日大坂表江出張、夫ゟ神戸江、寅九月十五日帰

一同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ被下配当金千疋被下置候

一同三卯二月廿一日三番之補兵隊江被入

同年七月十一日御警衛詰上京、十月十三日帰

一同年八月十六日衆道之儀ニ付風儀不宜趣相聞、年若之者文武修行之妨ニ

相成候間、已来相慎候様、此上心得違之義有之候得ハ、急度可被及御沙

汰之條、此段相含可申諭旨御番頭江移りを以被仰付

一同年九月廿七日御趣意二付補兵隊御免被成候

一同年十二月廿八日常吉事重治ト改

同四辰七月七日今度越後表へ御出陣被仰出候ニ付、補兵隊被仰付出張被

仰付之処、難渋之訳も有之ニ付為御手当銀七百匁被下置候

一同年九月六日補兵隊ニ而会征出立、巳二月六日帰、同廿二日出張ニ付御

手当五両被下候

一明治卜改元、十月廿九日重治事虎太郎卜改

一同二巳八月廿七日竹内滝門弟虎太郎儀、久保為三郎病中養子願之通被仰

付

一同日養父為三郎家督拾五石三口無相違被下、予備隊へ被入候事

但末松濤治次 ヒノニ十一歳

同年十月廿一日一番遊擊隊江被入候事、但席哥合奧三郎次

同年十一月廿五日今般御改革、更給禄米三拾五俵四斗五升被下

同三午五月廿四日第一大隊一番小隊入被仰付候事

同年十二月 予備一番隊 年給弐俵

同月十八日虎太郎事素直卜改

同四未十二月九日兵学修行東京へ

久保村

久保村祐七

拾八石三人 初二役中弐石

一安政二卯十二月十一日御取立被成下、大御番入被仰付、勤方之儀ハ是迄

之役筋可相勤旨被仰付候

但御徒目付ゟ御取立ニ付、御取立以前之義ハ御記録ニ有之

同三辰二月廿二日江戸表へ御迎為御用出立

同四巳二月五日仕立御納戸役西村勘五兵衛跡被仰付、御留守番組へ被入

候、右二付御役料弐石以後不被下置候

同年四月十三日御徒目付頭取被仰付、大御番組へ被入、役中御役料弐石

被下置、諸事一昨年大御番入被仰付候節之通相心得候様被仰付候

同五午十二月十一日今度外国奉行始湊為見分御通行之節、出精二付御褒

詞

同六未九月廿五日上水奉行高須幸八跡被仰付、是迄被下候御役料弐石其

儘被下置候

文久二戌十二月廿六日上坂五郎助上京、留守中道奉行仮兼帯被仰付候

同三亥八月廿九日年寄候二付休息

久保村勝次郎 〔士族〕	右願之通被仰付
拾八石三人	一同年九月八日数学所御道具預り被仰付候事
文久二戌閏八月朔日当秋芝御陣屋詰御番士御雇詰被仰付、右詰中御扶持	
方五人扶持被下置候、同廿二日出立	
一同三亥八月廿九日親祐七儀年寄候ニ付休息被仰付、家督十八石三人ふち	東米間
無相違被下置、大御番組江被入候	栗間権平 松山精一 権平
一元治元子七月朔日上京出立、八月廿四日帰着	廿三石五人
一同年十二月賊徒一件二付出張、御手当銀三百匁被下置候	一嘉永六丑十月十七日かとく
一慶応元丑四月廿八日上京、翌寅四月十七日帰	一慶応二寅十月廿二日今度御趣意ニ付被召出、
一同二寅四月廿四日堺町戦争一件ニ付、公儀ゟ配当金千疋被下置候	之儀ハ廿三石五人扶持被下置候、且又席之儀
一同三卯二月十五日弟純助英吉利へ罷越候節達捨出奔ニ付恐入、遠慮伺之	一同三卯九月廿七日当冬京都御警衛詰被仰付、
上指扣、同廿日御免	候様被仰付、十月七日出立
一同年十月十九日御警衛増詰上京、辰二月晦日帰	一同年十月十七日精一事権平与名替
一同年閏四月七日上京、九月十八日帰	一同十八日第二遊擊隊被仰付
一明治二巳三月三日東京江出立之処、御呼戻ニ付同五日途中ゟ帰	一同廿五日新番並組ニ被仰付詰御免、十一月廿
一同年四月九日中納言様御供東京江出立、六月十一日御人減ニ付帰	一同年十一月十七日先般堺町御警衛向心配相勤
一同年十一月廿五日今般御改革ニ付、更給禄米三拾九俵四斗三合被下	一同年十二月廿八日松山事栗間卜改
一同年十二月廿三日数学訓導試補被仰付、修業隊江被入候事	一慶応四辰閏四月十六日兵学所書記役被仰付候
但学校支配之事	一同年五月十一日御趣意二付役中御留守番組江
一同三午三月廿九日数学訓導被仰付候事、但九月四日ゟ中学校振退勤	一明治ト改元、十二月五日兵学所書籍預り手伝
但年給八俵被下候	一同二巳十一月廿五日今般御改革、更給禄米五
一同年十月三日下馬御門内ニ而百八十弐坪拝地被下候	予備隊

内拝地ト覚之介地所御振替被成下、過坪之分ハ御定之上納米ヲ以拝借、

[士族]

日今度御趣意二付被召出、 日かとく 新番並組ニ被仰付、

御充行

扶持被下置候、且又席之儀ハ家督順ニ被仰付

二被仰付詰御免、十一月廿二日帰着

先般堺町御警衛向心配相勤候二付御酒被下置候

趣意二付役中御留守番組江被入候

月五日兵学所書籍預り手伝被仰付

日今般御改革、更給禄米五拾俵壱斗五升被下

同三午閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

同四未正月十八日坂上覚之介土着二付右建物譲受、先般被下候下馬御門

詰引揚支度出来次第致出立

之儀ハ適宜御改正之上更ニ被下候事

同四未正月十八日拝地与力町二罷在候処、 兼而田原下町高地之内抱地有

之二付、拝地御振替願之通被仰付

但右二付是迄之家作相対ヲ以卒渡辺尚介へ相譲り度旨願之通

黒木

御取立以前御記録ニ有之

拾五石三人 外二御足弐石 黒木藤平 藤兵衛

材木炭薪方

明治二巳四月廿日今般御改革二付、役儀被免候

慶応四辰二月五日出精相勤候二付御取立被成、新御番格二被仰付候

同年五月十九日掌政局当番可相勤候

同月廿七日御裏添役被仰付

同年六月廿一日藤兵衛事藤平ト改

同年十一月廿五日今般御改革、 更給禄米三拾五俵四斗五升被下

同三午正月十三日今般御改革二付、役儀指免候事

優待列

同年閏十月廿五日右名目被廃非役卜唱

倉橋

倉橋大介 元武生家来

慶応三卯二月 (マン)

明治二巳十一月廿五日今般御改革之処物頭已上二付士族二被仰付、 給禄

同三午正月廿三日米三拾六俵弐斗五升六合

同年五月廿五日本多興之輔願之儀二付押而強願申立、 心得違二付謹慎、

六月十日被免

同年 御調筋有之ニ付福井江御呼出

同年閏十月十日武生江御返シ、親類山崎長海江御預ケ

同四未二月十三日旧主家格之儀二付、 市郡之越訴ニ令加談候始末不東ニ

付、 新律依り謹慎三十日

〔士族〕

同年三月十四日御花畑ニ而百七十四坪拝地被下候事

久我

久我操 上月久三郎 ミサホ 上月操 実川崎茂太夫次男

〔士族〕

弐百石

一文久元酉八月廿日当節柄御人少二付、支度出来次第修行旁江戸詰被仰付

御扶持方五人扶持被下置、 九月四日出立

同年十二月廿八日久三郎事操与名替

同二戌五月九日養父病気ニ付対面願之上帰着

同年十二月十四日中将様御上京御供御用ニ付江戸へ出立之処、御都合ニ

付途中ゟ京都へ

同三亥三月廿五日右御供ニ而帰着

文久三亥五月廿二日養父八郎左衛門年寄候ニ付隠居被仰付、家督弐百石

〔士族〕

無相違被下置、大御番組へ被入候

同年六月三日御番頭引纏上京、九月六日帰

同年十二月廿四日先達而京都表動揺之節為御守衛出張二付、 為御褒美金

壱両被下置候

元治元子三月廿九日、 江可罷越筈二而此表致出立候処、 一昨戌十二月江戸表江罷出中将様御供ニ而京都表 俄二御船行相成候二付途中ゟ京都江罷

出 夫
方大坂江為御迎罷越御供ニ而京都江到着之処、失却も有之趣ニ付

金壱両被下置候

元治元子六月廿五日宰相様御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、 依之銀

壱枚被下置候

同年七月廿一日京都表へ出立、 夫ゟ長征、 丑正月帰

同二丑正月廿七日賊徒警衛敦賀江出張、 二月九日帰

慶応卜改元、九月廿二日御先手大馬印奉行被仰付、 役御番組江被入候

同三卯五月廿日御旗奉行被仰付、御書院番組へ被入候

同四辰四月二日上京、 閏四月十八日帰

明治二巳二月十六日今般御改革二付、 御役御免被成御広間当番勤被仰付

候

但番列其儘

同年十一月九日元御書院番席之面々願取次可致事

同月廿五日今般御改革二付、 願取次被免候事 予備隊

同日御改革ニ付、 更給禄米百五俵弐斗八升五合被下

同三午五月十四日吉江郷之内土着開墾仕度二付、三万坪御渡願之通被仰

付

但坪数之儀ハ於民政寮可承合事

同年閏十月廿五日予備隊名目被廃非役卜唱

明治五申正月上月事久我ト改姓

同六年六月廿四日脚気二付隠居、 倅確へ家督

> 上月確 景太郎事

[士族]

明治元辰十二月十六日御備入、巳八月十四日予備隊

十一月廿八日修業隊ト唱

同三午六月二日子弟修業隊解隊被仰付

同四未七月景太郎事確卜名替

久我

久我次郎

上月熊之助 実中村仲弟 明治三午三十五歳

士族

安政五午二月十六日兵科局詰被仰付、 且又年若之儀ニも候得者洋書をも

相学広修行致候様被仰付候

同年七月廿九日内達も有之ニ付洋学修行之儀ハ御免被成候

但兵科局詰是迄之通

文久元酉八月廿日太田御陣屋詰御番士御雇詰被仰付、 御扶持方五人扶持

被下置、支度出来次第出立被仰付、廿九日出立

同二戌四月三日太田御陣屋詰中横浜表江出張ニ付御褒詞

同七日修行旁当秋迄江戸詰被仰付、御扶持方是迄之通被下置、 芝御陣屋

詰之義ハ御免被成候

同閏八月二日内達之訳合も有之ニ付、来亥ノ春迄是迄之通修行詰被仰付

候

同三亥正月廿三日中将様御船二而御上京被遊候二付御供、 三月廿五日御

供ニ而帰着

同年十月十三日中将様御上京御供被仰付出立

同四子正月五日測量修行被仰付候、同廿七日京都ゟ帰着

同年二月三日加州金沢表江出立、十二月帰

元治元子二月廿三日支度出来次第上京被仰付、 滞京中五人ふち被下置候

同年六月廿五日宰相様再度之御上京中格別骨折相勤太儀二思召候、

銀弐枚被下置候

同廿六日御含御用有之早速上京被仰付、 五人ふち被下置

同年六月廿七日兵科之儀ニ付内達之趣も有之ニ付、上京御免被成候

同年八月廿八日御上京御供出立、夫ゟ長征、 丑三月御供二而帰

同年十月十九日御含御用有之ニ付、本多修理方手ニ属シ出張候様被仰付

候

慶応元丑閏五月十七日御含御用有之二付早速上京被仰付、 右中御扶持方

五人フチ被下置候、 同廿日出立、十一月十日早駆二而帰

同二寅三月十一日兵科局詰其儘農兵差配役被仰付、 勤中御扶持方三人扶

持被下置候

同年四月四日御軍制取調掛り被仰付

同年五月七日右掛り其儘兵学所詰被仰付候

同三卯正月九日軍事方被仰付、是迄被下候三人扶持之儀も其儘被下置候

同年七月廿一日軍事方頭取助被仰付

同年十月四日取調御用有之ニ付、瓜生三寅同道江戸表へ罷越候様被仰付

同八日出立

但一日金壱歩ツ、被下、外ニーケ月千疋ツ、被下置候

慶応三卯十二月十一日先達而江戸へ出立之処、夫ゟ京都江罷越候処帰

同四辰正月九日上京、 閏四月十七日帰

同年四月廿五日被召出、 軍事方其儘被仰付五人扶持被下置、 役御番組江

被入候

同年六月廿四日会征出立

明治ト改元、 十月十五日出張中八番遊擊隊長被仰付候二付、 御足五人扶

持被下置、 御取扱末ノ番外格、 御役料弐拾五石被下置居残被仰付

同月十九日若狭伯母御守衛中右御用掛兼被仰付

同 一巳二月廿二日会征出張為御賞金五百疋被下、外ニ十三両

同月廿七日歩隊長被仰付、 月給七十俵、後整衛隊ト改

同年七月二日整衛隊心得違之儀有之、夫々御咎被仰付恐入伺之上指扣,

同七日御免

同年十一月廿七日今般御改革二付、 解隊被仰出当役被免候事

米八拾弐俵壱斗弐升壱合

同三午正月十五日養父久尾老年二付願之通隠居被仰付、 家督米八十弐俵

壱斗弐升壱合被下、是迄之通整衛隊支配被仰付候事

同三午正月廿九日武学大訓導兼被仰付候事

同年四月廿五日戊辰北越出張各所攻擊勉励二付、 御賞典之内二十石弐十

ケ年令頒授候事

同年五月廿四日第一大隊六番小隊長被仰付候事

同年六月二日武学大訓導是迄之通可相勤事

同年九月十日任大属兼武学大訓導、 但軍務寮勤 未正月七十三俵

同年十二月十二日准二等教授兼

但武学掛り

同四未正月廿八日副官勤向之儀ハ相心得可申事

同年二月十七日御用有之大坂江立帰可罷越事、 同十九日出立、三月九日

帰

楠正義 百五拾石 一明治二巳六月廿五日親靭負助家督其方江百五拾石無相違被下、 同年八月十四日予備隊被仰付 同年十一月四日学区取締 同年九月十五日第一大隊五番小隊江被入候事 同三午正月朔日登城之節於御本丸多葉粉吞恐入、遠慮伺之上指扣、 同年十一月廿五日今般御改革、 同年三月免職 同五壬申二月彦根分営へ出立 同廿八日大尉心得勤、 同年十二月上月熊之介事久我次郎与改姓名、 同廿九日任大尉 同年十月十三日今般解隊被仰出候二付職務被免候事 同年六月朔日御改正二付免職 月被免 被入候事 同日縣兵掛り被仰付候事 同五日任中尉 楠 津田八郎 但席渡辺弥之太次 登ト 正セイ 分営常備第一小隊 ヒノ十八歳 更給禄米八十弐俵壱斗弐升壱合被下 申正月也 無役組江 〔士族〕 同四 楠量志 米五拾三俵壱斗四升三合 明治卜改元、十月廿九日喜一 同年五月津田事楠ト改姓 同五申正月源市事量志卜名替 同年十二月県兵 同年十月十三日解隊、 同四未四月朔日東京詰出立 同年十二月八日常備 同三午六月廿二日兄藤三郎病身二付隠居被仰付、 同年九月六日補兵隊二而会征出立、巳二月六日帰、 慶応四辰七月七日今度越後表御出陣被仰出候二付、 同五申五月改姓名 同年七月八郎事登正意卜名替 同四未四月七日右解隊被仰出候事 仰付候処、難渋之訳も有之ニ付為御手当銀七百匁被下置候 升三合無相違被下、第一大隊五番小隊江被入候事 楠 津田喜一郎 東京府区兵 御備入被仰付 楠正義 源市 一番隊 十一月帰 量志 津田登正意事 郎事源市ト改 年給六俵 家督米五十三俵壱斗四 同廿二日御手当五両 補兵隊被仰付出張被

同年十二月予備二番隊

年給弐俵

[士族]

幕末明治の福井藩人材育成と海外渡航

熊 澤 恵里子

はじめに

る。 る者も少なくなかった。幕末には日下部の他にも、佐々木権六、狛林之助らが海外渡航を行った 十四日申来候事、但弐拾六歳也」と、米国留学中に二十六歳の若さで病死した記述が残されてい で学び、病のため早世した日下部太郎(八木八十八)が最初である回。藩士子弟の履歴を収めた ·子弟輩」(松平文庫)には一八七〇年三月に「洋行中之処於米利堅国養生不相叶病死之段、五月 福井藩における海外渡航は、一八六七年(慶応三)に二十三歳で渡米した後ラトガース大学 福井藩の人材が本格的に海外渡航を開始したのは、廃藩置県後といえよう。 当時の海外留学は日本からの長旅に加え、慣れない土地での衣食住と学問研究で、病に倒れ

層高まった。修行内容は藩校明新館中学生に規定された国漢洋(兵学含む)三学鼎立の「普通ノ学」 そが、廃藩置県後に多くの人材を全国へ輩出する原動力となったのである。 析によると、士分の者の約一五%が遊学を経験している⑵。この福井藩時代の他国修行の経験こ の修得が奨励され、留学資金不足の場合は藩金館方の貸付を利用できた。「士族」「子弟輩」の分 が促進され、学問・技術の修得が藩の就職に生かされる体制が実現したことで、他国修行熱が、 義の徹底や依命・許可遊学の別など、厳格な選考による規則を構想している。維新後は藩政改革 育に必須となる理系の人材育成に力を入れた。安政年間に橋本左内が他国修行について、能力主 福井藩は幕末維新期に藩政改革と連動した藩校改革を行い、近代的な文武学校を目指し軍事教

理系に強い福井の学問研究の系譜を辿るとともに、これまであまり取り上げられていない福井藩 の人材にスポットを当てその活躍を紹介したい。 軍事系・理学系 本稿では、近代日本を支えた福井県人の幕末明治における海外渡航歴(留学・視察)に注目し、 (数学物理系・化学系・生物系)・工学系・農学系・医学系の海外渡航者の履歴から、

表 1 幕末明治海外渡航者出身地別人数

20	113-	>/<.\1\1\1\2	- 7 113	C/3/6 F	3 H / 7 / 0.	,,,,	~~				
県名		備考	県名		備考	県	名	備考	県名		備考
北海	道	18	東	京	624	滋	賀	47	香	Ш	26
青	森	37	神系	条川	53	京	都	207	愛	媛	86
岩	手	41	山	梨	28	大	阪	76	高	知	109
宮	城	52	長	野	109	兵	庫	120	福	岡	120
秋	田	26	新	潟	99	奈	良	22	佐	賀	179
山	形	92	富	Щ	19	和哥	次山	67	長	崎	90
福	島	72	石	Ш	128	鳥	取	25	熊	本	92
茨	城	44	福	井	105	島	根	63	大	分	61
栃	木	44	岐	阜	64	岡	Щ	139	宮	崎	28
群	馬	64	静	岡	85	広	島	78	鹿児	見島	257
埼	玉	60	愛	知	110	Щ	П	298	Ī	†	4,351
千	葉	71	三	重	73	徳	島	43			

『幕末明治海外渡航者総覧』第3巻「出身地別索引」より作成

幕末明治の海外渡航

は年間一人一〇〇〇円で、派遣年齢は凡そ十七歳以上二十二歳以下とされた。 を対象とした「文部省所轄海外留学生」派遣が開始されたのは、 費生二百五十人ナリ」、「其資金各差異アリト雖モ概スルニ一年ノ学資金二十五万円ニ及フ」とあ め、政府は一八七三年(明治六)に全ての官費留学生へ帰朝を命じた。 数派であった。維新後まもなくの留学は、 技術を習得するといった類のものも多く、修行年限からも卒業や学位取得を目的とした渡航は少 者が大部分を占めており、 る。この人数は、 井巌・岩佐巌、 幕末明治の全国海外渡航者総数四三四一名(延べ数)のうち、福井県の海外渡航者は一〇五名(今 『文部省第一年報』(明治六年)に「方今各国在留ノ生徒ヲ調査スルニ全員三百七十三人ニシテ官 |学力優等品行正シク身体健ニシテ海外ニ留学セン事ヲ望ムト雖モ学資等自弁スル事能ハサル輩| 官費・私費を含む。明治維新後の官費留学については、 綿密な計画なしに膨大な資金がつぎ込まれたことが判明している。「貸費留学生規則」を整え、 ·幕末明治海外渡航者総覧』©にある「幕末明治海外渡航者出身地別人数」(**表1**) によると、 北陸の中では石川県と並び群を抜いている。 佐々木長淳・権六、 鹿児島・山口・高知・佐賀 留学先並びに目的も多岐にわたった。留学といっても、 沼田 一雄・勇次郎が同一人物のため、 政府の財政難に加えて留学生の資質が問題視されたた (薩長土肥) 海外渡航者とは短期・長期、 政権を握った鹿児島・山 及び東京・京都の大都市には及ばない 七五年のことであった。給貸額 初期官費留学生については 実際は一〇二名) 留学・視察、 見聞を広める、 口両県の出身 であ

り帰国している。 れた。『文部省第五年報』 第二回 ロンビア大学鉱山学校へ、 学四、化学三、工学二)、仏国一名 再開後の第一回 海外留学生」は、 南部は七八年六月に 「海外留学生」には東京開成学校生徒一一名が選抜された。 (明治十年)によると「海外留学生」は総計一九名で、二名が病気によ 武生出身斎藤修一郎はボストン大学法学校へ入学した。一八七六年の 英国八名 (諸芸学)、独国一名(鉱山学)で、 (法学三、化学二、工学三)、仏国二名 「諸鉱工士」を取得後、 ペンシルバニア州製銅会社の技師 福井藩出身南部球吾はコ 内訳は米国 (物理学) が派遣さ 九名 法

表 2 幕末明治海外渡航者渡航目的

目的	延べ	人数	目的	延べ人数		
日的	全国	福井	日印	全国	福井	
全般・外交交渉	225	3	理学系 (生物系)	52	1	
軍事	586	6	工学系	680	21	
法律	386	6	農学系	190	3	
財政・金融	197	0	医学系	787	26	
経済	370	6	宗教関係	167	5	
人文系	604	13	その他	ı	2	
芸術	108	2	不明	-	2	
理学系 (数物系)	58	2	計	4,574	106	
理学系 (化学系)	164	8				

『幕末明治海外渡航者総覧』第3巻「渡航目的別索引」より作成

学中人数として、 科学、病理論・病体組織学、 ている。一八七九年には新たに東京大学法理文学部及び医学部卒業生から抜擢を行い、 となり鉄鎔鉱炉の新築設計に従事し、 (英国法律・経済学、化学、水道建築・衛生工学)、仏国一名 英国三名、 眼科) 独国一一 が派遣された。『文部省第十年報』(明治十五年)には現在留 名、 斎藤は 仏国・墺国各二名とあり、 「法律得業士」を取得後裁判所で実地研修を開始し (高等数学・天文学)、 東京大学におけるドイツ学 独国三名 英国三名

福井藩の人材育成と海外渡航

への傾倒が見て取れる。

ある。医学系に関しては、 く学んでおり、その延長線上に海外での高度な医療技術の習得があったと考えられる。 幕末明治海外渡航者」の「渡航目的」 幕末から長崎・江戸・大坂の他、 (表 2 は、医学系・工学系・理学系の修得が圧 佐倉藩佐藤泰然の私塾順天堂で数多 理学系は 一倒的で

幕末の軍事教育、

軍事技術の基礎であり、

他分野に応用できる化学が中心であった。

のである。 背景があろう。 事力に注目し、それを支える国家の産業と教育と国民皆兵を可能にした国家体制に関心を寄せた ツ型国家の形成を目指し急激にドイツ法制度及び学問研究の導入へ傾倒していったという政治的 大学長官 渡航先」(表3)は医学・工学・化学の渡航先であるドイツが一番多い。これは、 (別当)を務めた松平慶永がドイツの教育制度に関心を示している。 福井藩では政府がドイツに注目する以前に、一八六九年(明治二) 慶永はドイツの軍 から七〇年に 政府がドイ

医学については、 慶永長官時代に大学東校(医学所)へのドイツ人教師招聘を決定し、 その体

制が廃藩置県後も維持された。

かし帰国後すべてが官職に就けた訳ではない。 代後半から二十年代に入ると、近代学校教育の洗礼を受けた世代が渡航の中心となる。 幕末明治海外渡航者」のうち、 いずれも留学・視察後の就職先や社会的地位が留学以前に比べ上昇している点である。 藩校世代は概ね明治十年代までの渡航者である。 前述の第一回文部省所轄海外留学生南部球吾は 明治十年 共通点

渡航先	延べ人数
ドイツ	47
アメリカ	39
イギリス	22
フランス	13
オーストリア	13
イタリア	4
ベルギー	3
スイス	3
インド	3
清	3
オランダ	1
ロシア	1
ヨーロッパ	4

『幕末明治海外渡航者総覧』第3巻 「渡航目的別索引」より作成

度航目的別索引」より作成

日下部太郎の米国留学に次いで福井藩から派遣されたのは、

「工学系」修行を目的とした佐

蒸気船航

福井藩時代の海外渡航

渡航期間中のリスク

四

学から法律学へ転じており、

に独国へ渡航しフライブルク鉱山大学で学んだ。後述する山脇玄も駐独公使青木周蔵の勧めで医

政府が富国強兵・殖産興業を目指して、早急な人材育成を企図して

いたことがわかる。

となった。一年間一五○ポンドは、当時一ポンド一○円換算で約一五○○円となる。ちなみに、

両年ノ間勤学」のために年一五〇ポンドの学資支給が許可されている。

八九〇年に国費留学した夏目漱石は年一八〇〇円支給されたが、

(岩佐巌)

は

「子弟輩」によると藩医岩佐家の出身で、

長崎で医術修行後、

一八七〇年

生活は苦しかったという。

狛は帰国後工部省出仕

地専出精勤学ノ旨相聞候ニ付往々相応ノ御用ニモ可相立モノニ可有之」と弁官に掛け合い、「今

一八六八年秋に英国ロンドンへ留学した。七〇年七月には外務省が

に蒸気船運用に携わり、

その後勧業局に勤務し養蚕・紡績研究のため再度海外渡航を行った⑷。一方、

狛も佐々木と同様

一彼

などに成果を上げ、七一年に化学所の責任者となったが、同年十月七日には工部省へ出仕した。

海術に秀で一八六七年(慶応三)に米国へ留学した。「士族」には「四月八日江戸ゟ横浜江罷越

辰正月十日江戸表ゟ帰」とある。

帰国後蒸気船運用、

大砲製造

(長淳)と狛林之助である。二○○石取の佐々木は砲兵術修行から弾薬製造、

夫ゟ廿二三日頃アメリカへ出帆、

久二) 航海術修行に始まり、維新後数学寮教授方を務め、六九年に海軍操練所修行生となった。 賀之助の留学先が米国へ変更された。 K 八七一年 同 (明治) (明治四)、 四未二月廿二日今般為海軍修行英国江被指遣候事、 英国海軍修行生の八田裕次郎とともに海軍修行を予定していた上坂多 「士族」によれば、上坂は二〇石五人扶持。一八六二年 廿六日拝命、 但出帆日 文

八八〇年に期待を胸に帰国したが官職がなく、 翌年意を決して三菱会社の招聘に応じて

で死亡した。後日上坂の場合は、海外での膨大な治療費に加え、ニューヨークからサンフラン が行われている。 かった。英米国海軍省留学生のうち、上坂を含む四名が病気で帰国後死亡し、 れたが、留学中病気で倒れた場合、治療費に加え学資金の返納などが発生し、親族の負担は大き 副長から「留学生病死之者諸費決算之義ニ付伺」が出されている。幸い本件は後者扱いで処理さ シスコ迄の看病付添人山岡次郎⑤の往復旅費、出発時の「拝借金」五〇円等、 限且委細之儀ハ追而可相達事」「一明治六子一月病死 テ該費ハ都テ現費ト同視シ此際本払ニ相立可申哉」と、一八七七年六月に海軍大輔代理へ会計局 一六〇ドル四セントの返納について、「同人父兄共ヨリ弁償為致可申哉又ハ特殊之御詮議ヲ以 病気ニ付帰」とあり、病により二十三歳 上記の諸経費決算 総計五〇円と米金

五、医者からの転身―今井巖と山脇玄

で法学を学んだ山脇玄である。 異色な経歴を持つ留学生もいる。フライブルク鉱山大学へ入学した今井巖とハイデルベルク大学 海外渡航者のなかには、家業でもある医術修行が目的であったにもかかわらず、修行替えした

増進するものにあらざるが故に、予は幾多の留学生をして、各其の長所若くは嗜好に従ひ、或は に非ざれば則ち兵学研究者なり。然れども、一国の文明は単に医学若くは兵学の研究のみに依て 助言があったことは容易に想像できる。青木は独国留学生について、「其の大部分は医学修業者 あることがうかがえる。今井が鉱山大学へ入学した経緯は定かではないが、駐独公使青木周蔵の 十四日長崎県修行之処、追々進業ニ付一ケ年五十両被下候事」とあり、医師として優秀な人材で 月十六日医術為修行長崎表江罷越候様被仰付、但修行中一日金壱歩ツ、被下置候」「同二巳九月 今井巖は、一八六六年(慶応二)から長崎で医術修行を命じられ、一旦帰国後「(明治元)十二 佐倉の順天堂や長崎のポンペイに学び、維新後は太政官雇いとなった人物である。玄珪の弟の 「子弟輩」によると、今井厳は「岩佐玄珪弟 経済の学を修め、 或は各種の工業を実際的研究せしむるは、寧ろ国家が広く知識を世界に 明治三午十九歳」。岩佐玄珪は高一〇〇石の藩医で、

山脇玄の経歴は「子弟輩」に記載された以下の通りである。親は一五〇石取の藩医山脇立樹である。 文学の才に富めるを以て、政治学を研究せんことを勧告」したと記している(『青木周蔵自伝』)。 た、医学修行の山脇玄について、「大学東校より派遣せられし留学生中、山脇〔玄〕氏は其の長 求め国運の隆興を計らんとして多数の留学生を海外に派遣するの主旨に副ふ」と述べている。ま 〔前長崎精得館〕に在りし時より予の知る所にして、蘭学を能くし、 且、気骨あり…

山脇玄(玄寿・元寿)立樹倅 明治三午廿三歳

慶応元丑十二月十六日除痘館当番皆勤、其上番外数度出勤二付御褒詞

一同二寅七月廿二日医術為修行長崎表江罷越候様被仰付、同廿五日出立

明治元辰十二月朔日当夏越後表出兵二付、修行詰之面々一旦致帰国候様被仰出候得共、

御都合も出来ニ付其儘滞埼致修行候様被仰付

同二巳七月廿七日玄寿事玄卜改、後又元寿、又玄

一同年九月十四日長崎県修行之処追々進業ニ付一ケ年百両、別段被下候事

一同三午三月八日今般於長崎表左之通被仰付、被任大学少助教

一同年四月十日長崎県ゟ着、五月三日引返シ同所へ出立

一同年十一月 為留学普国へ指遣候事

ている。山脇について「元来法律学篤志之者ニ有之追々勉励学業モ抜群進歩往々一廉ノ御用ニ 年文部省改革ノ際自他留学生徒一般往往学資不被差立候段布令有之候ニ付爾来無拠費私財今以当 年一千円宛ヲ賜リ候様致度」と願い出、文部省の海外留学生と同額の学資金を獲得するに至った。 可相立見込ニ有之候」と高く評価し、「当省御用為取調向三ケ年之間同国在留被仰付為費用一ケ 木喬任から太政大臣三条実美に宛て「独国在留山脇玄儀ニ付伺」(国立公文書館所蔵)が出され 年に渡独し、前出の青木周蔵の勧告により修行目的を変更したのである。七五年八月、司法卿大 この学資金獲得には、やはり青木周蔵の尽力があった。すなわち大木喬任宛青木公使書簡に、「昨 「ハイデルベルヒ」府大学校ニ而執心之法律学科修業罷在候」と、まず文部省による留学生へ 山脇は長崎での医術修行を経て大学少助教に任ぜられ、一八六九年に独国留学が決定した。翌

や「家政の改良」の著述もあり、理系・文系を兼ね備えた近代の教養人といえよう。 事関連書籍の翻訳に留まらず、自らも司法から家政迄数多くの著書を残している。「女子の労働 御用掛リ申付奏任官ニ準シ取扱候様致度」と、 致シ候者モ有之候得共学業総而半途ニ而致帰国右山脇程ニ致進歩候者ハー名モ無之様被存候」と 青木は山脇の有能さをアピールしている。山脇は帰国後の一八七七年には「月俸百円ヲ以テ当省 ためにも山脇の学問研究への学資金支給を依頼した。また、「実ハ先前留学生徒中法律科江従事 の帰朝命令に対し、私財を売り払ってでも学問研究の継続を強く望んでいることを述べ、司法の 司法省で雇用された。山脇はドイツの法制度や軍

福井県文書館の翻刻資料・画像を活用して、海外渡航者と同時代体験を試みてはどうだろうか。 系であったことは、その後の福井の殖産興業と強く結びついている。また、医学修行から転じた 山脇玄のように法律・経済・女子教育等にも長けた教養人が生まれたのも福井藩の特色である。 海外渡航による近代的な学問・技術の修得であった。明治初期の渡航目的が工学系・化学系等理 幕末明治の福井藩は理系の人材を数多く全国へ輩出した。その原動力となったのは藩校教育と 結びにかえて

討

- ⑴高木不二「黎明期の日本人米国留学生―日下部太郎をめぐって」大妻女子大学編『大妻女子大学紀要 文系』 二〇〇五年
- (3)海外渡航者のデータとして、手塚晃・国立教育会館編 ②熊澤恵里子『幕末維新期における教育の近代化に関する研究―近代学校の生成過程―』(風間書房、二〇〇七年)。 井藩士だが、出身地は東京と分類されているため、本稿では取り扱っていない。今後の追加検討が必要である。 績及び各種データ資料を網羅している。ただし、廃藩置県後に他地域へ移住した者、例えば白井光太郎は親は福 した。幕末明治の海外留学に関しては渡辺実、石附実らによる研究、各種事典があるが、『総覧』はこれら研究業 『幕末明治海外渡航者総覧』(柏書房、一九九二年)を使用
- ⑸柳沢芙美子「山岡次郎研究ノート(1)―織物産地を繋いだ染色技術者―」(『福井県文書館研究紀要』第二号、 ⑷長野栄俊「佐々木権六(長淳)に関する履歴・伝記史料の紹介」(『若越郷土研究』五二巻二号、二○○七年)。

二〇〇五年)

		氏	名	渡航先	渡航時期	渡航形態/留学教育機関/専攻分野	出身校	渡航時所属機関	帰国後
15	Щ	形	仲 芸	独	1897 ~ 1899	公費留学/外科学	東京大学医学部	文部省	仙台医学専門学校長
16	佐	藤	達次郎	墺独	$1897 \sim 1900$ $1903 \sim 1904$	私費留学/ウィーン大学、ベルリン 大学/外科学	帝国大学医科大学	その他の機関	順天堂副院長
17	舟	岡	英之助	独	$1901 \sim 1904$	公費留学/ウユルツブルク大学/生理学	帝国大学医科大学	文部省	第三高等学校教授
18	奈	良	愛三郎	独	$1904 \sim 1905$	私費留学/ロストック大学/眼科学	第一高等学校医学部	自主渡航	福井に開業
19	高	田	寿	独	1906 ~ 1908	私費留学/ベルリン大学、ボン大学/外科学	帝国大学医科大学	自主渡航	開業医
20	牧	田	太	独	1907 ~ 1909	公費留学	東京帝国大学医科大学	陸軍省	陸軍二等軍医正
21	加	藤	寛	独	$1907 \sim 1910$	私費留学/グライフスワルド大学/内科学	金沢医学専門学校	自主渡航	京都帝国大学医科大学で研究
22	河	合	鷹	独スイス	1909 ~ 1911	私費留学/ミュンヘン大学、ベルン 大学/産婦人科学	第四高等学校医学部	自主渡航	土屋病院長(福井県鯖江市)
23	難	波	要	独墺	$1909 \sim 1911$	私費留学/マールベルク大学、プラーグ大学/外科学	東京帝国大学医科大学	自主渡航	私立野毛山病院長
24	石	森	国 臣	独	1910 ~ 1912	公費留学/ストラスブルグ大学/生理学・医化学	第四高等学校医学部	地方公共機関	愛知県立医学専門学校教授
25	軽	部	修白	米	1910 ~ 1913	私費留学/ジョンス・ポプキンス大学	金沢医学専門学校	自主渡航	福井県立病院医師
26	秦		勉 造	独墺	1912 ~ 1914	私費留学/ベルリン大学、プラーグ大学	東京帝国大学医科大学	自主渡航	札幌病院長

軍事

1	八田	裕次郎	英仏	1871 ~ 1881 1884 ~ 1890	公費留学·公費個人視察/英仏公使 館付	海軍兵学寮	海軍省	
2	上 坂	多賀之介	米	1871 ~ 1872	公費留学/軍事	海軍兵学寮	海軍省	
3	花 島	, 半一郎	仏	1883 ~ 1888	公費留学/軍事(馬術)	陸軍士官学校	陸軍省	陸軍騎兵中尉兼乗馬学校教官
4	加藤	寛 治	露	1899 ~ 1902	公費留学/海軍軍備	攻玉社・海軍兵学校・海軍大学校	海軍省	海軍大尉
5	名 和	1 又八郎	英	1900 ~ 1901	公費団体視察/軍事(軍艦回航)	海軍兵学校	海軍省	
6	松井	: 命	仏	1910 ~ 1914	公費個人視察/軍事	陸軍士官学校	陸軍省	陸軍砲工学校教官

理学系 (生物)

1	服 部 他之助 🗦	米 1884~1889	私費留学/アバシュ大学/植物学	同志社	自主渡航	水産講習所講師、技師	
---	-----------	-------------	-----------------	-----	------	------------	--

農学系

1	佐々	々木	長 淳 (権六)	米墺伊		公費留学・公費団体視察/ウィーン 万博/伊養蚕公会所/養蚕・紡績		福井藩、工部省、 内務省	内務省勧業寮出仕
2	青	Щ	元	欧州	1900	公費個人視察	駒場農学校	農商務省	農事試験場技師
3	奥	村	順四郎	仏英独	1901 ~ 1904	公費留学/醸造学	帝国大学農科大学	文部省	東京高等工業学校教授

理学系 (数学物理系)

1	大	森	房	吉	独伊	1894 ~ 1897	公費留学/地震学	帝国大学理科大学	文部省	東京帝国大学理科大学教授
2	中	村	清	1.1	独	1903 ~ 1906	公費留学/ゲッチンゲン大学/ 結晶学及び光学	帝国大学理科大学物理学科	文部省	東京帝国大学理科大学教授

『幕末明治海外渡航者総覧』第1巻・第2巻より作成

※松平康荘は私費留学 (1889 ~ 1892) で英国サイレンセスター王立農学校に学んでいるが、『総覧』の「渡航目的」では「人文系」に分類されているため、本「農学系」リストにも掲載しなかった。

表 4 幕末明治海外渡航者(福井) リスト

工学系

	氏	名	渡航先	渡航時期	渡航形態/留学教育機関/専攻分野	出身校	渡航時所属機関	帰国後
1	佐々木	長 淳 (権六)	米墺伊	$1867 \sim 1868$ $\cdot 1873 \cdot 1876$	公費留学・公費団体視察/ウィーン 万博/伊養蚕公会所/養蚕・紡績		福井藩、工部省、 内務省	内務省勧業寮出仕
2	狛	林之助	英	$1868 \sim 1873$	公費留学		福井藩、文部省	工部省鉱山寮六等出仕
3	瓜生	震	米英	$1871 \sim 1874$	公費団体視察/ユニバーシティ・カレッジ		工部省	工部省鉄道寮出仕
4	長谷部	仲 彦	仏	$1872 \sim 1874$	公費留学/鉱山学		開拓使	
5	竹 内	毅	墺	1873 ~ 1874	公費団体視察/ウィーン万博/巻烟草製法		大蔵省	大蔵出納少属
6	和 田	維四郎	独	1884 ~ 1885	公費留学/鉱物学	東京開成学校	農商務省	東京大学教授
7	畠 中	友 治	米	1885	私費留学/車輪鋳造法		自主渡航	
8	阿部	正義	独	1885 ~ 1889 1893 ~ 1898	私費留学・公費留学/ハイデルベルク 大学/地質岩石学	工部大学校鉱山科	自主渡航 農商務省	農商務省技師
9	横井	左 久	仏	1886 ~ 1889	公費留学/造船学	東京大学理学部機械工学科	海軍省	
10	吉川	喜 作	米英	1886 ~ 1895	私費留学/機械捺染伝習	千住製絨所染色部伝習生	自主渡航	堀川新三郎の工場に勤務
11	南 部	常次郎	米	1887 ~ 1889	私費留学/コーネル大学大学院/土木工学	帝国大学工科大学土木学科	自主渡航	宮城県雇
12	山田	文太郎	独	1889 ~ 1891	私費留学/フライブルク鉱山大学/ 採鉱冶金学研究	帝国大学工科大学採鉱冶金学科	自主渡航	宮内省御料局技師
13	近藤	茂	英米独スイス	$1901 \sim 1903$ $1908 \sim 1909$	公費留学·公費個人視察/電気事業 研究	東京帝国大学工科大学電気工学科	逓信省	逓信技師
14	大 村	卓一	米欧	1902 ~ 1903	私費個人視察/鉄道事情	札幌農学校工学科	企業	北炭保線掛長
15	日 比	忠 彦	独仏	$1902 \sim 1904$	公費留学/土木工学	東京帝国大学工科大学土木工学科	文部省	京都帝国大学理工科大学助教授
16	斎 藤	真	英	1902 ~ 1905	公費留学/機械工学	東京帝国大学工科大学機械工学科	海軍省	
17	持 田	軍十郎	スイス墺	$1903 \sim 1905$	公費留学/森林土木学・砂防工事研究	帝国大学工科大学土木学科	農商務省	農商務省山林局技師
18	五十嵐	次之助	米	$1906 \sim 1914$	私費留学/コロンビア大学/建築学	東京高等工業学校付属教員養成所	自主渡航	清水組入社
19	大 沢	次三郎	英	1909	私費留学	東京帝国大学工科大学機械工学科	企業	南満州鉄道会社沙河口工場倉庫課長
20	伴	宜	欧	1911	公費個人視察	東京帝国大学工科大学土木工学科	陸軍省	陸軍技師
21	河 合	定 二	英	1911 ~ 1914	公費留学/グリニッジ海軍大学校/造船学	東京帝国大学工科大学造船学科	海軍省	海軍造船少監艦政本部出仕

理学系 (化学)

1	今 (岩	井 佐	巌	独	1870 ~ 1877	公費留学/フライブルク鉱山大学	大学東校	文部省	
2	Щ	岡	次 郎	米	1871 ~ 1876	公費留学(福井県より派遣)/理化学		地方公共機関	東京大学理学部教授補
3	今	立	吐 酔	米	1874 ~ 1879	私費留学/ペンシルバニア大学	明新館	自主渡航	京都府中学理化学教授
4	南	部	球 吾	米	$1875 \sim 1880$	公費留学/コロンビア大学鉱山学科/鉱山学	東京開成学校	文部省	三菱会社入社
5	松	平	忠太郎	英独	1884	私費留学/造幣	工部大学校化学科	大蔵省	
6	疋	田	桂太郎	米	1906 ~ 1908	公費留学/塗料製造、応用化学	工業教員養成所応用化学科	文部省	東京高等工業学校教授
7	松	本	均	独英米	1910 ~ 1913	公費留学/製造化学	東京帝国大学理科大学化学科	文部省	京都帝国大学理工科大学教授
8	清	水	与三郎	独米	1911 ~ 1913	公費留学/化学及び理科学教授法	東京帝国大学理科大学化学科	文部省	奈良女子高等師範学校教授

医学系

	_						1	Y	
1	Щ	脇	玄	独	$1870 \sim 1877$ $1880 \sim 1881$	公費留学、公費団体視察/ハイデルベル ク大学、ベルリン大学/解剖学、法律学		文部省、司法省、 太政官	太政官権少書記官
2	橋	本	綱常	独墺伊	1872 ~ 1877 1884 ~ 1885	公費留学、公費団体視察/ベルリン大 学、ウィーン大学/内科学、外科学	長崎精得館	陸軍省	陸軍軍医
3	岩	佐	純	独墺	1884 ~ 1885	私費留学	長崎精得館	自主渡航	宮内省一等侍医
4	橋	本	長 勝	墺独	1884 ~ 1890	私費留学/ベルリン大学		自主渡航	
5	岩	佐	新	独	1884 ~ 1895	私費留学/ミュンヘン大学		自主渡航	
6	岩	佐	登彌太	独墺	1884 ~ 1888	私費留学/ハイデルベルク大学、ベ ルリン大学、ウィーン大学/外科学	東京大学医学部	自主渡航	宮内省侍医
7	高	島	多米治	米	1885 ~ 1901	私費留学/メリーランド大学/歯科学		自主渡航	東京で開業
8	戸	祭	文 造	英	1890 ~ 1891	公費留学/海軍軍陣衛生	帝国大学医科大学	海軍省	海軍少軍医
9	土	肥	慶蔵	独墺	1893 ~ 1898	私費留学・公費留学/ハイデルベルク大 学、ウィーン大学/皮膚病学、黴毒学	帝国大学医科大学	自主渡航 文部省	東京帝国大学医科大学教授
10	今	井	真 吉	独	1897 ~ 1899	公費留学/眼科学	帝国大学医科大学	地方公共機関	大阪医学校教諭
11	木	下	正 中	独	1897 ~ 1899	私費留学/産婦人科学	帝国大学医科大学	自主渡航	大阪府立医学専門学校医科婦人科長
12	木	村	孝 蔵	独	1897 ~ 1899	公費留学/フライブルク大学/外科学	東京大学医学部	文部省	第四高等学校教授
13	平	井	政 遒	独	1897 ~ 1899	公費留学/軍事衛生業務研究	帝国大学医科大学	陸軍省	東京第一病院長
14	田	代	正	独	1897 ~ 1899	公費留学/外科学	東京大学医学部	文部省	長崎医学専門学校長兼長崎病院長

参考資料

各資料と家格などとの関係

福井藩家臣団の家格別人数

(嘉永5年)	_				_					
家格	人 数					i				i	
本多家	1		-		_	1			=4.	:	
高知席	16		剝	±	並	i	<u>‡</u>		諸役	潘	
高 家	2				事	1	族 略		1 1	刑	
寄合席	38		札	族	子弟輩など	-	士 族 略 履 歴		`	藩 制 役 成	
定座番外席	14			"	ど	-	歴		前	! /~	
番士 / 役番外	106					-			八并町在御扶持	:	
∖大番など	495			[[] [] [] [] [] [] [] [] [] [1	「よたれそ」欠		御	:	
新番・新番格	81			「かよたれそ」 欠			12/2/10() X			:	
医師・絵師など	49					i				<u> </u>	
士分合計	802					ŀ			姓名	!	_
与力	39					į		増補雑輩など	1 1	į	
小役人	84					i	新番格以下	補		į	
一統目見席	87					i	MIHIUW I	輩な		į	
小算・坊主・下代	347					ļ		اغ ا		-	
諸組(足軽)	1,341					÷				:	
卒合計	1,898					i				i i	
家臣団総計	2,700	•				-				! !	
att = 1 mm (44 - 1 at	1 3 70 3										

- ・荒子・中間等の小者973人を除く ・舟沢茂樹氏「福井藩家臣団と藩士の昇進」 『福井県地域史研究』創刊号 1970年による

剝札と士族・士族略履歴との連繋(い・かを例に)

資料別家数・人数

ふ

ほ

ま

H

む

め

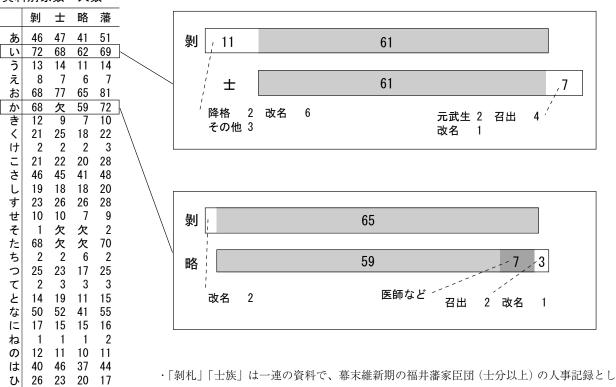
ŧ

ゃ

ゅ

ょ

ゎ



- てはもっとも充実している。
- ・「士族」の第3冊(かよたれそ)が欠本、「(士族略履歴)」「藩制役成」で補完が必要。
- ・「剝札」と「士族」「(士族略履歴)」は、ほぼ連繋する。「剝札」では改名や卒への降格、 「士族」「(士族略履歴)」では子弟の新規召出(戊辰戦争など)、武生家臣などの新規繰入 (明治3年2月)などが不連繋の原因。
- ・資料別家数・人数の「あ」~「く」は確定値。「け」以下は筆耕原稿などによる概数。

福井藩士履歴 2 お~く 福井県文書館資料叢書10

編集発行 平成二十六年二月二十六日 発行

電話〇七七六 — 三三 — 八八九〇福井県福井市下馬町五一—一一九一八 — 八一一三

刷 電話〇七七六-二二-二三三 (代)相并県福井市問屋町一-七九一八 -八二三一

印